

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第14集

仁右衛門畑遺跡Ⅱ

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

上巻

— 弥生時代編 —

2001

福岡県教育委員会

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第14集

仁右衛門畑遺跡Ⅱ

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

上巻

— 弥生時代編 —



仁右衛門畑遺跡周辺航空写真

序

福岡県教育委員会では建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和55年度から一般国道210号浮羽バイパスの建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査は現在も継続中ですが、浮羽町・吉井町におきましては、部分的な一般供用もおこなわれています。

本書は、平成7年度から9年度にかけて発掘調査を実施した、浮羽郡吉井町所在の仁右衛門畑遺跡の調査記録です。今回の調査では、弥生時代の集落をはじめ、古墳時代の集落、奈良時代の掘立柱建物群を中心とする集落、さらに中世の居館といった数多くの発見があり、先人の足跡を知る貴重な成果を得ることができました。

本書が地域の歴史研究や教育、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

発掘調査および整理作業、報告書の作成にあたりまして、ご協力いただいた多くの方々に対し、深甚の謝意を表します。

平成13年3月30日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. この報告書は、平成7(1995)年度から平成9(1997)年度にかけて福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局(現国土交通省九州地方整備局)の委託を受けて実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第14集である。
2. 本書に掲載した仁右衛門畑遺跡は、一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財発掘調査第5地点にあたり、浮羽郡吉井町大字新治字仁右衛門畑、今屋敷、灰高に所在する。
3. 仁右衛門畑遺跡の報告は、平成11・12(1999・2000)年度の2ヶ年に分けて実施する。平成11年度は古墳時代以降編、平成12年度は弥生時代編からなる。
4. 本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、遺物写真は北岡伸一が撮影し、空中写真はフォト大塚ならびに空中写真企画に委託した。
5. 本書に掲載した遺構図は調査担当者の他、飯田澄枝・石橋丸子・丸山喜代子・本石セツ子・星野恵美・山口由美子らの協力を得た。
6. 出土遺物の整理・復元作業は岩瀬正信の指導のもと九州歴史資料館で行った。
7. 出土土器の実測は吉田の他、宮地聡一郎、野口未幾、平尾和久、平田春美、棚町陽子、久富美智子、田中典子、坂田順子、堀江圭子、藤原さとみ、江口幸子、堀之内久美子、若松三枝子、栗林明美、寺岡和子、荒川妙、小西藍の協力を得た。また石器、鉄器等の実測は吉田が行った。
8. 鉄斧の分析については東北芸術工科大学芸術学科助手 松井敏也氏に、土器の胎土分析については(株)九州環境管理協会に依頼した。短期間の中で快く受諾していただいた各位に感謝申し上げたい。
9. 遺構・遺物の製図は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行った。
10. 本書の執筆はIV-2を平尾和久、V-1を松井敏也氏、V-2を(株)九州環境管理協会が行い、他を吉田が行った。編集は吉田が行った。

本文目次

<上巻>

I	はじめに	1
1.	調査の経過	1
2.	調査の組織	3
II	位置と環境	5
1.	地理的環境	5
2.	歴史的環境	6
III	発掘調査の記録	9
1.	遺跡の概要	9
2.	基本層序	9
3.	検出遺構と遺物（弥生時代）	11
	竪穴住居跡	11
	土坑	46
	甕棺墓	212
	溝	213
	ピット出土土器	224
	包含層その他出土土器・磁器	236
	縄文土器	240
	その他の遺物	242

<下巻>

IV	おわりに	263
1.	仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代中期土器について	263
2.	浮羽郡内における弥生時代後期の土器について	272
3.	弥生時代の遺構について	278
V	自然科学系の分析	281
1.	仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代鉄器	281
2.	仁右衛門畑遺跡出土土器の胎土分析	286

図 版 目 次

- 巻頭図版 仁右衛門畑遺跡周辺航空写真
- 図版 1 1. 調査区中央全景（空中写真 南東から）
2. 調査区中央北側全景（空中写真 南東から）
- 図版 2 1. 調査区南東全景（空中写真 上空から）
2. 調査区南東端 第二遺構面全景（東から）
- 図版 3 1. 5 号竪穴住居跡（東から）
2. 5・6・10号竪穴住居跡（東から）
3. 6号竪穴住居跡（南から）
- 図版 4 1. 11号竪穴住居跡（南から）
2. 11号竪穴住居跡 遺物出土状態（北から）
3. 18号竪穴住居跡（東から）
- 図版 5 1. 20号竪穴住居跡（西から）
2. 26号竪穴住居跡（北から）
3. 27号竪穴住居跡（北から）
- 図版 6 1. 53・54号竪穴住居跡（北から）
2. 55・56号竪穴住居跡（東から）
3. 56号竪穴住居跡（東から）
- 図版 7 1. 60号竪穴住居跡（南から）
2. 調査区中央北側 遺構確認状態（東から）
3. 同 完掘状態（東から）
- 図版 8 1. 61号竪穴住居跡（南から）
2. 62・63号竪穴住居跡（西から）
3. 64号竪穴住居跡（西から）
- 図版 9 1. 66号竪穴住居跡（南から）
2. 67号竪穴住居跡（南から）
3. 68号竪穴住居跡（南から）
- 図版10 1. 1号土坑（北から）
2. 2号土坑（東から）
3. 11号土坑（北から）
- 図版11 1. 12号土坑（西から）
2. 13号土坑（北から）
3. 17号土坑（東から）
- 図版12 1. 18・19号土坑（東から）
2. 20号土坑遺物出土状態（西から）
3. 20号土坑（西から）
- 図版13 1. 21号土坑（東から）

2. 22号土坑（南から）
 3. 23号土坑（西から）
- 図版14
1. 24号土坑（南から）
 2. 26号土坑（南から）
 3. 27号土坑（東から）
- 図版15
1. 28号土坑（北から）
 2. 29号土坑（西から）
 3. 30号土坑（南から）
- 図版16
1. 31・34・46号土坑（西から）
 2. 31・46号土坑（北から）
 3. 34号土坑（北から）
- 図版17
1. 35号土坑（東から）
 2. 37号土坑（北から）
 3. 38号土坑（東から）
- 図版18
1. 41号土坑（南から）
 2. 43号土坑遺物出土状態（南から）
 3. 43号土坑（南から）
- 図版19
1. 44号土坑（南から）
 2. 45号土坑（北から）
 3. 51号土坑（西から）
- 図版20
1. 52号土坑（東から）
 2. 53号土坑（南から）
 3. 55号土坑（南から）
- 図版21
1. 56号土坑遺物出土状態（南から）
 2. 56号土坑（南から）
 3. 58号土坑（南から）
- 図版22
1. 60号土坑（北から）
 2. 61号土坑（北から）
 3. 62号土坑（北から）
- 図版23
1. 64号土坑（北から）
 2. 65号土坑（北から）
 3. 66号土坑（北から）
- 図版24
1. 68号土坑（南から）
 2. 69・70号土坑（西から）
 3. 72号土坑（西から）
- 図版25
1. 74号土坑（北から）
 2. 76・77号土坑（西から）
 3. 78号土坑（東から）

- 図版26 1. 79号土坑（東から）
2. 80号土坑（東から）
3. 80号土坑（西から）
- 図版27 1. 81号土坑（北から）
2. 82号土坑（東から）
3. 85号土坑（南から）
- 図版28 1. 86号土坑（東から）
2. 87号土坑（南から）
3. 88号土坑（東から）
- 図版29 1. 92号土坑（南から）
2. 93号土坑（南から）
3. 96号土坑（北から）
- 図版30 1. 97号土坑（東から）
2. 99号土坑（北から）
3. 100号土坑（南から）
- 図版31 1. 102号土坑（東から）
2. 103号土坑土層（西から）
3. 103号土坑（北から）
- 図版32 1. 104号土坑（北から）
2. 105号土坑（西から）
3. 106号土坑（南から）
- 図版33 1. 107号土坑（東から）
2. 108号土坑（南から）
3. 109号土坑（東から）
- 図版34 1. 110号土坑（西から）
2. 67・68号竪穴住居跡、111・112号土坑（南西から）
3. 112号土坑（北から）
- 図版35 1. 113号土坑（西から）
2. 116号土坑（東から）
3. 117・118・124号土坑（北から）
- 図版36 1. 119号土坑（東から）
2. 121号土坑（東から）
3. 73号竪穴住居跡、122号土坑（南から）
- 図版37 1. 123号土坑（西から）
2. 125号土坑（西から）
3. 126号土坑（南から）
- 図版38 1. 128号土坑（北から）
2. 129号土坑（西から）

- 3. 130号土坑（北から）
- 図版39 1. 132号土坑（南から）
2. 133号土坑（南から）
3. 134号土坑（西から）
- 図版40 1. 1号甕棺墓（東から）
2. 25号溝断面土層（北から）
3. P-169（西から）
- 図版41 11号竪穴住居跡出土土器
- 図版42 18・20・26号竪穴住居跡出土土器
- 図版43 26・27号竪穴住居跡出土土器
- 図版44 27・56・60号竪穴住居跡出土土器
- 図版45 1・2・8・11・19・20号土坑出土土器
- 図版46 20・30号土坑出土土器
- 図版47 30・31号土坑出土土器
- 図版48 34号土坑出土土器①
- 図版49 34号土坑出土土器②
- 図版50 34・35・42・43号土坑出土土器
- 図版51 43号土坑出土土器
- 図版52 43～45号土坑出土土器
- 図版53 45・52・53・55・56号土坑出土土器
- 図版54 56～58号土坑出土土器
- 図版55 58・59・61・68号土坑出土土器
- 図版56 68～70・72号土坑出土土器
- 図版57 74・76・78～80号土坑出土土器
- 図版58 80～82・85～87号土坑出土土器
- 図版59 87・88・92号土坑出土土器
- 図版60 92・93・96・97・100号土坑出土土器
- 図版61 100号土坑出土土器
- 図版62 100・102・103号土坑出土土器
- 図版63 103・105・107・109・110・121号土坑出土土器
- 図版64 125～127号土坑出土土器
- 図版65 128～130・133号土坑出土土器
- 図版66 12号溝出土土器
- 図版67 12・25・42号溝出土土器
- 図版68 42号溝、1号甕棺墓出土土器
- 図版69 ピット出土土器①
- 図版70 ピット出土土器②
- 図版71 ピット、その他出土土器

- 図版72 1. 縄文土器①
2. 縄文土器②
- 図版73 1. 土錘①
2. 土錘②
3. 投弾、土製紡錘車
- 図版74 1. 石製紡錘車、浮子、円盤状石製品
2. 砥石①
- 図版75 1. 砥石②
2. 砥石③
3. 砥石④
- 図版76 1. 砥石⑤
2. 砥石⑥
- 図版77 1. 凹石、敲石
2. 石皿
- 図版78 1. 石錘、不明石製品
2. 滑石製品
3. 初期須恵器
- 図版79 1. 打製石鏃①
2. 打製石鏃②
3. 打製石鏃③
- 図版80 1. スクレイパー①
2. スクレイパー②
- 図版81 1. メノウ製スクレイパー、石核
2. 使用痕ある剥片
3. 打製石斧①
- 図版82 1. 打製石斧②
2. 磨製石鏃、磨製石剣
3. 磨製石剣
- 図版83 1. 片刃石斧①
2. 片刃石斧②
3. 磨製石斧①
- 図版84 1. 磨製石斧②
2. 石包丁①
3. 石包丁②
- 図版85 1. 石包丁③
2. 石包丁未製品
- 図版86 1. 鉄斧①
2. 鉄斧②

- 3. 鉄斧③
- 図版87 1. 鉄器①
- 2. 鉄器②
- 3. 鉄滓
- 図版88 1. 銅製品、ガラス製小玉
- 2. 古銭

挿 図 目 次

第1図	吉井町位置図	5
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	7
第3図	調査区位置図 (1/2,000)	10
第4図	基本土層図 (1/40)	11
第5図	5・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)	12
第6図	5・6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	13
第7図	6・7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	14
第8図	11号竪穴住居跡実測図 (1/60)	16
第9図	11号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	17
第10図	18・20号竪穴住居跡実測図 (1/60)	19
第11図	18・20号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	20
第12図	26・27号竪穴住居跡実測図 (1/60)	22
第13図	26号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)	23
第14図	26号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)	24
第15図	27号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)	26
第16図	27号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)	28
第17図	27号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/4)	29
第18図	53・54号竪穴住居跡実測図 (1/60)	31
第19図	53～56号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	32
第20図	55号竪穴住居跡実測図 (1/60)	34
第21図	56号竪穴住居跡実測図 (1/60)	35
第22図	60・61号竪穴住居跡実測図 (1/60)	37
第23図	60～62号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	38
第24図	62～64号竪穴住居跡実測図 (1/60)	39
第25図	66号竪穴住居跡実測図 (1/60)	41
第26図	64・66～68・79号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	42
第27図	67号竪穴住居跡実測図 (1/60)	43
第28図	68号竪穴住居跡実測図 (1/60)	44
第29図	73号竪穴住居跡実測図 (1/60)	45
第30図	79号竪穴住居跡実測図 (1/60)	46

第31图	1·2·8·11号土坑实测图(1/30、1/40)	47
第32图	1·2·8号土坑出土土器实测图(1/4)	48
第33图	11号土坑出土土器实测图(1/4)	51
第34图	12·13·17~19·21号土坑实测图(1/30)	53
第35图	12·13·17号土坑出土土器实测图(1/4)	54
第36图	18·19号土坑出土土器实测图(1/4)	57
第37图	20·22·23号土坑实测图(1/40)	59
第38图	20号土坑出土土器实测图①(1/4)	60
第39图	20号土坑出土土器实测图②(1/4)	61
第40图	21~23·24·26·27号土坑出土土器实测图(1/4)	63
第41图	24·26~29号土坑实测图(1/40)	64
第42图	28·29号土坑出土土器实测图(1/4)	66
第43图	30·31·46号土坑实测图(1/40)	68
第44图	30号土坑出土土器实测图①(1/4)	69
第45图	30号土坑出土土器实测图②(1/4)	70
第46图	31号土坑出土土器实测图①(1/4)	72
第47图	31号土坑出土土器实测图②(1/4)	73
第48图	32号土坑出土土器实测图(1/4)	75
第49图	32·34号土坑实测图(1/30、1/40)	76
第50图	34号土坑出土土器实测图①(1/4)	78
第51图	34号土坑出土土器实测图②(1/4)	79
第52图	34号土坑出土土器实测图③(1/4)	81
第53图	34号土坑出土土器实测图④(1/4)	82
第54图	34号土坑出土土器实测图⑤(1/6、1/4)	84
第55图	34号土坑出土土器实测图⑥(1/4)	86
第56图	35·40·41号土坑实测图(1/40)	87
第57图	35·40·41号土坑出土土器实测图(1/4)	88
第58图	42~44号土坑实测图(1/40)	91
第59图	42号土坑出土土器实测图(1/4)	92
第60图	43号土坑出土土器实测图①(1/4)	94
第61图	43号土坑出土土器实测图②(1/4)	96
第62图	43号土坑出土土器实测图③(1/4)	98
第63图	43号土坑出土土器实测图④(1/4)	99
第64图	43号土坑出土土器实测图⑤(1/6、1/4)	100
第65图	44号土坑出土土器实测图(1/4)	102
第66图	45·47号土坑实测图(1/40)	105
第67图	45~48号土坑出土土器实测图(1/4)	106
第68图	48·51~53·55号土坑实测图(1/40)	108

第69图	51号土坑出土土器实测图 (1/4)	109
第70图	52·53号土坑出土土器实测图 (1/4)	111
第71图	55号土坑出土土器实测图① (1/4)	113
第72图	55号土坑出土土器实测图② (1/4)	114
第73图	56~58号土坑实测图 (1/40)	115
第74图	56号土坑出土土器实测图① (1/4)	117
第75图	56号土坑出土土器实测图② (1/4)	118
第76图	57号土坑出土土器实测图 (1/4)	119
第77图	58号土坑出土土器实测图 (1/4)	120
第78图	59~62号土坑实测图 (1/40)	122
第79图	59·60号土坑出土土器实测图 (1/4)	123
第80图	61号土坑出土土器实测图① (1/4)	125
第81图	61号土坑出土土器实测图② (1/4)	126
第82图	64~66号土坑实测图 (1/40)	128
第83图	64·65号土坑出土土器实测图 (1/4)	129
第84图	68·69号土坑实测图 (1/40)	130
第85图	68号土坑出土土器实测图① (1/4)	132
第86图	68号土坑出土土器实测图② (1/4)	133
第87图	68号土坑出土土器实测图③ (1/4)	135
第88图	69·70号土坑出土土器实测图 (1/4)	136
第89图	70·72·74·76号土坑实测图 (1/40)	138
第90图	72号土坑出土土器实测图① (1/4)	140
第91图	72号土坑出土土器实测图② (1/4)	141
第92图	74·76·77号土坑出土土器实测图 (1/4)	142
第93图	77·78号土坑实测图 (1/40)	144
第94图	78号土坑出土土器实测图 (1/4)	145
第95图	79~81号土坑实测图 (1/40)	147
第96图	79·80号土坑出土土器实测图 (1/4)	148
第97图	81号土坑出土土器实测图 (1/4)	151
第98图	82·85号土坑实测图 (1/40)	152
第99图	82号土坑出土土器实测图 (1/4)	153
第100图	85号土坑出土土器实测图 (1/4)	154
第101图	86~88号土坑实测图 (1/40)	156
第102图	86号土坑出土土器实测图 (1/4)	157
第103图	87号土坑出土土器实测图① (1/4)	158
第104图	87号土坑出土土器实测图② (1/4)	159
第105图	88号土坑出土土器实测图 (1/4)	161
第106图	92·93号土坑实测图 (1/40)	163

第107图	92号土坑出土土器实测图① (1/4)	164
第108图	92号土坑出土土器实测图② (1/4)	165
第109图	93·94号土坑出土土器实测图 (1/4)	167
第110图	94~96号土坑实测图 (1/40)	168
第111图	95·96号土坑出土土器实测图 (1/4)	169
第112图	97·99·100号土坑实测图 (1/40)	171
第113图	97号土坑出土土器实测图① (1/4)	172
第114图	97号土坑出土土器实测图② (1/4)	173
第115图	100号土坑出土土器实测图① (1/4)	176
第116图	100号土坑出土土器实测图② (1/4)	177
第117图	101·102号土坑实测图 (1/40)	180
第118图	102号土坑出土土器实测图 (1/4)	181
第119图	103·104号土坑实测图 (1/40)	183
第120图	103号土坑出土土器实测图 (1/4)	184
第121图	104~106号土坑出土土器实测图 (1/4)	186
第122图	105~107号土坑实测图 (1/40)	187
第123图	107·109·110号土坑出土土器实测图 (1/4)	189
第124图	108~110号土坑实测图 (1/40)	190
第125图	112·113号土坑实测图 (1/40)	192
第126图	112·113·116·118~122号土坑出土土器实测图 (1/4)	194
第127图	114~118号土坑实测图 (1/40)	195
第128图	119~121号土坑实测图 (1/40)	197
第129图	122~124号土坑实测图 (1/40)	199
第130图	123·125号土坑出土土器实测图 (1/4)	200
第131图	125~127号土坑实测图 (1/40)	202
第132图	126·127号土坑出土土器实测图 (1/4)	203
第133图	128·129号土坑实测图 (1/40)	206
第134图	128号土坑出土土器实测图① (1/4)	207
第135图	128号土坑出土土器实测图② (1/4)	208
第136图	129·130·132~134号土坑出土土器实测图 (1/4)	209
第137图	132~134号土坑实测图 (1/40)	210
第138图	1号甕棺墓实测图 (1/10)	212
第139图	1号甕棺实测图 (1/4)	213
第140图	溝断面实测图 (1/20、1/30)	214
第141图	9·12号溝出土土器实测图 (1/4)	215
第142图	12号溝出土土器实测图 (1/4)	216
第143图	20·21号溝出土土器实测图 (1/4)	218
第144图	25·26号溝出土土器实测图 (1/4)	221

第145図	42号溝出土土器実測図(1/4)	223
第146図	ピット出土土器実測図①(1/4)	225
第147図	ピット出土土器実測図②(1/4)	226
第148図	ピット出土土器実測図③(1/4)	227
第149図	ピット出土土器実測図④(1/3)	228
第150図	ピット出土土器実測図⑤(1/3)	230
第151図	ピット出土土器実測図⑥(1/3)	233
第152図	ピット出土陶磁器実測図(1/3)	235
第153図	包含層その他出土土器実測図(1/4、1/3)	237
第154図	包含層その他出土土器・磁器実測図(1/3)	238
第155図	縄文土器実測図(1/3)	241
第156図	土製品・石製品実測図(1/2)	243
第157図	石製品実測図①(1/3)	244
第158図	石製品実測図②(1/3、1/4)	245
第159図	石製品実測図③(1/3、1/4)	246
第160図	石製品実測図④(1/3)	247
第161図	石器実測図①(2/3)	249
第162図	石器実測図②(1/2)	250
第163図	石器実測図③(1/3)	251
第164図	石器実測図④(1/2)	253
第165図	石器実測図⑤(1/2)	254
第166図	石器実測図⑥(1/3)	255
第167図	石器実測図⑦(1/2)	256
第168図	石器実測図⑧(1/2)	257
第169図	金属器等実測図(1/2、1/1)	258
第170図	仁右衛門畑遺跡出土弥生時代中期土器編年図(1/10)	265
第171図	浮羽郡の弥生時代後期土器編年図①(1/8)	274
第172図	浮羽郡の弥生時代後期土器編年図②(1/8・1/16)	275
第173図	仁右衛門畑遺跡弥生時代主要遺構変遷図(1/600)	279
付図	仁右衛門畑遺跡遺構配置図(1/200)	

表 目 次

第1表	浮羽バイパス各調査地点一覧	2
第2表	土製品・石製品・金属製品一覧表①	260
第3表	土製品・石製品・金属製品一覧表②	261
第4表	土製品・石製品・金属製品一覧表③	262
第5表	仁右衛門畑遺跡出土甕分類表①	268
第6表	仁右衛門畑遺跡出土甕分類表②	269

I はじめに

1. 調査の経過

浮羽バイパスは、大分県日田市と福岡県久留米市を結ぶ一般国道210号の交通混雑の緩和と、浮羽郡内を中心とした地域産業経済の発展を目的として、昭和48（1973）年度に事業化された、総延長14.0km、幅員16～25mの第1級道路である。現在、浮羽町と吉井町の一部で暫定的に対面2車線で供用を開始されており、地域住民の生活に密着した道路となっている。

この浮羽バイパスの建設に先立ち、昭和47（1972）年2月3日付で建設省九州地方建設局（現在、国土交通省九州地方整備局）福岡国道工事事務所から福岡県教育庁管理部文化課（現在、総務部文化財保護課）に、「一般国道210号浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」

との調査依頼があり、これにもとづいて、浮羽町所在の塚堂遺跡群の発掘調査が昭和54（1979）年度から57年度までの4ヶ年にわたって実施された。その後、昭和61（1986）年4月2日付で福岡工事事務所から再度「埋蔵文化財の分布調査について」との調査依頼が文化課にたいして出され、文化課は塚堂遺跡を除く計16地点の発掘調査必要箇所を回答した。現在までこの回答による16地点についての調査を随時協議しながら実施している。本書に掲載した浮羽バイパス5地点「仁右衛門畑遺跡」については、平成7



調査風景

年2月6日、同3月1日・8日に試掘調査を実施した結果、遺構の存在が判明し、本調査が必要となった地点である。周辺では福岡県甘木農林事務所が県営ほ場整備事業を実施しており、その関連から福岡工事事務所、甘木農林事務所、吉井第5土地改良区と随時協議を重ねながら、平成7年4月10日より発掘調査を開始した。

調査を始めるに当たって、周囲の水田に水を供給し始める6月中旬までに、調査区を縦断する幅2mの函渠設置工事の完了を予定する福岡工事事務所の工程に添い、まず現農業用水路から函渠設置予定箇所までの約900㎡の発掘調査を平成7年5月31日までに終了するとの調査予定を工事事務所側に提示し、4月10日より発掘調査を開始することとなった。

表土掘削作業は、用水路に接した西側から函渠設置予定の東側へと順次行っていった。4月17日には器材を搬入し、4月19日午後より遺構検出を開始した。ところが、土壌の性質上遺構覆土と地山との区別が非常に困難であり、また予想以上に遺構の重複が著しく、調査の遅延が懸念されたために急遽予定を変更し、函渠設置



調査風景

個所を中心に幅7m、約200㎡のみを5月31日までに終了することとした。ここでもやはり遺構検出作業は困難を極め、また4・5月は例年になく豪雨が続き、予想外の排水作業に不安と苛立ちがつつの日々が続いたが、予定期日までに何とか終了することができた。

函渠設置工事中は付近に近寄れなかったため、6月1日からは調査区北東端へと移動し、順次南側へと調査を進めていった。この調査区東端から函渠までの約3,000㎡は、工専用道路設置のため10月31日までに調査を終了する工程で協議を行っていたが、10月にはいつから調査区南端で第2遺構面の存在を確認するという不測の事態が生じたため、終了期日を10日間延期し11月9日にこの区間を終了した。

続いて調査区西寄りに位置する町道に至るまでの約110mの間、片側2車線の本線設置工事を平成8年2月から着工する旨を工事事務所側から受けていたため、翌日からは路線幅の南側半分にあたる、幅15m、約3,000㎡の調査を先行することとした。調査は西の町道側から開始し、東側へと進行していった。上記同様遺構の重複が著しく調査が遅れがちだったので、12月からは作業員の大幅増員を行い、1月31日には予定区間を無事終了することができた。12月17日には地元住民の方々へのご理解とこれまでの成果を公表するため、現地説明会ならびに吉井町教育委員会の協力のもと吉井町公民館でスライド映写会を開催し、約100人の参加者を得た。

2月1日からは前調査区の北側、約3,000㎡の調査を行った。これまで以上に遺構の重複が激しく、ひっきりなしに通る10tダンプに身の危険を感じながらの調査であったが、平成7年度は3月19日に調査を終了した。

翌8年度は4月11日に調査を開始した。5月には浮羽郡内で大粒の雹が降り、発掘調査区に隣接する畑地の収穫直前の麦が倒れるなど付近の農作物が大打撃を受けた。6月3日に町道までの間を終了した後、急遽浮羽バイパス4地点(堂畑遺跡)の調査を先行する必要があるため、仁右衛門畑遺跡の調査を一時中断し、4地点の方にとりかかった。平成9年2月10日からは再び仁右衛門畑遺

第1表 浮羽バイパス各調査地点一覧

地点	町名	工区・地点名	遺跡名	調査対象面積	発掘面積	調査年度	報告書年度	備考
1	浮羽	9工区.日永	日永遺跡	19,000	16,800	S61	H4	
2	吉井	7工区.塚堂	塚堂遺跡	18,479	12,768	S54～S61	S57・58・59・62	
3	吉井	7工区.能楽	—	—	—	H6・9	—	
4	吉井	6・7工区.三牟田	堂畑遺跡	8,400		H8～		
5	吉井	6工区.新治	仁右衛門畑遺跡	8,400	8,400	H7～9	H11・12	
6	吉井	6工区.稲崎A	稲崎遺跡	6,300	1,600	S62	H9	
7	吉井	6工区.稲崎B	稲崎遺跡	4,900	520	S62	H9	
8	吉井	6工区.清宗	—	—	—	H1	—	
9	吉井	5・6工区.上菅A	堺町・大碓遺跡	21,000	18,800	H1・2	H5	
		5・6工区.上菅B	鷹取五反田遺跡	14,000	7,420	H2・5・6	H9・10	
10	吉井・田主丸	5工区.船越A	船越高原A遺跡	25,000	15,000	H8～	H11～	一部未調査あり
11	田主丸	5工区.船越B	船越二ノ上遺跡	20,000	18,500	H6～9	H10	
12	田主丸	5工区.植木		19,200				
13	田主丸	5工区.常盤	松門寺遺跡	15,000		H11～	H13	
14	田主丸	5工区.野田A		14,800				
15	田主丸	5工区.野田B	大的・日詰遺跡	10,800		H12～		
16	田主丸	5工区.野田C		13,500				
17	浮羽	7工区.	—	—	—	H6		

跡へ戻り、今度は町道の東側、約2,500㎡の調査を実施した。平成8年度は3月25日に調査を終了した。

平成9年度は4月23日に調査を再開し、5月28日には器材を撤収、仁右衛門畑遺跡の全ての調査を終了した。

2. 調査の組織

発掘調査関係者および報告書作成関係者は次の通りである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所（平成13年1月より国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所）

	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成11年度	平成12年度
事務所長	佐竹 芳郎	佐竹 芳郎	藤本 聡	藤本 聡 森 将彦	森 将彦
副所長	中馬 正昭	藤浪 元生	兼武征二郎	兼武征二郎	兼武征二郎
	中空 進	緒方 良一	別府 五男	新開幸一郎	田中 義高
建設監督官	松尾 義信	松尾 義信	有家 信義	有家 信義	有家 信義
	山川 武春	山川 武春	柴田 智	中島 浩二	
調査第二課長	西原 広寿	田中 義高	田中 義高	赤星 文生	赤星 文生
調査係長	芹口 臣也	鶴 敏信	沓掛 孝	沓掛 孝	大榎 謙
建設技官	島田 隆一	島田 隆一	島田 隆一	柳橋 孝博	松山ひろみ
工務課長	測 幸一	測 幸一	河野 良行	後藤 昌隆	後藤 昌隆
工務第一係長	黒木 俊彦	黒木 俊彦	梶原 俊之	古木 英昭	古木 英昭
工務第三係長	田口 仁	田口 仁	斉藤 啓嗣	斉藤 啓嗣	川内 学

福岡県教育委員会（平成10年度より教育庁総務部文化財保護課）

	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成11年度	平成12年度
総括					
教育長	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜
教育次長	松枝 功	松枝 功	松枝 功	藤吉純一郎	榊原 英夫
指導第二部長	丸林 茂夫	丸林 茂夫	竹若 幸二		
総務部長				岩本 誠	岩本 誠
文化課長	松尾 正俊	松尾 正俊	石松 好雄		
文化財保護課長				柳田 康雄	柳田 康雄
参事兼					
文化財保護室長	柳田 康雄	柳田 康雄	柳田 康雄		
参事				井上 裕弘	井上 裕弘
参事兼					
課長技術補佐				橋口 達也	橋口 達也 川述 昭人
課長補佐	元永 浩士	元永 浩士	城戸 秀明		

課長補佐兼

管理係長

角 伸幸 平野 義峰

参事補佐兼

室長補佐

井上 裕弘 井上 裕弘 井上 裕弘

調査班総括

橋口 達也 橋口 達也 橋口 達也

調査第一係長

児玉 真一 佐々木隆彦

調査第二係長

佐々木隆彦 児玉 真一

参事補佐

木下 修 木下 修 木下 修 中間 研志
中間 研志 中間 研志 新原 正典
小池 史哲 小池 史哲 中間 研志

庶務

管理係長

柴田 恭郎 黒田 一治 黒田 一治

事務主査

久保 正志 東 健二 鶴我 哲夫 吉武 祐二 吉武 祐二

調査・報告

主任技師

吉村 靖徳 吉田 東明 重藤 輝行 吉田 東明 吉田 東明

技師

重藤 輝行 重藤 輝行 進村 真之 進村 真之
吉田 東明

現場作業には地元吉井町をはじめ田主丸町、浮羽町、杷木町、甘木市からご参加いただいた。悪条件の中を熱心に作業にあたられた皆様に心から感謝申し上げます。

中川サトキ 矢幡光枝 権藤タキエ 中川トシ 中川初子 梶村サツキ 梶村上枝 古賀マサ子
本松幸子 権藤フミエ 佐藤ツイ子 田中スム子 中川君子 坂本サダ子 二宮真弓 高木マサ子
小林英子 石橋丸子 因間美枝子 伊藤夏子 山本文子 飯田澄枝 飯田尚子 山口由美子 堤忠
男 堤利夫 岩橋マサ子 宮崎ヤス子 岩橋カナエ 佐藤勝子 田中トミ子 善高義 古賀仁 樋
口始 宮崎シゲシ 渡辺強剛 重岡和子 迫貞子 古賀美恵子 高倉克己 山下重信 古賀コトミ
梶村裕二 金丸時太 樋口文夫 樋口奈美子 樋口幸子 堤チヨ子 高瀬セツ子 西田美代子 辻
啓子 岡泰子 高倉君子 松尾肅朗 北端摂子 石橋ヒサ子 牛嶋真由美 大塚ヒロ子 権藤エイ
子 才田ヒサ子 田中恒彦 中野ヒデ子 中村弘子 野口征子 丸山喜代子 林田愛子 中野強
中野正敏 郷原ハツ子 国武ヒサ子 原淑子 原美登里 中野淑子 大隈寿学 国武俱幸 田中弘
子 深町律子 深町信子 柴山ミネ子 本石セツ子 柴山ヤス子 矢野美智子 江頭敏之 横溝ス
ミ子 芳野マキ子 田中聖二 福嶋波津子 永田悦子 熊野智代 三善多衣子 大田明子 林多津
美 中津留ハツエ 星野恵美（調査補助員）

調査および整理の期間中には、文化財保護指導委員の方々をはじめ、近隣市町村文化財担当者、北筑後教育事務所、九州歴史資料館、甘木歴史資料館等多くの方々からご教示、ご支援を頂いた。また整理作業では九州大学大学院、九州大学、西南学院大学、福岡大学の学生諸君に諸々の面で協力を頂いた。お礼申し上げます。

Ⅱ 位置と環境

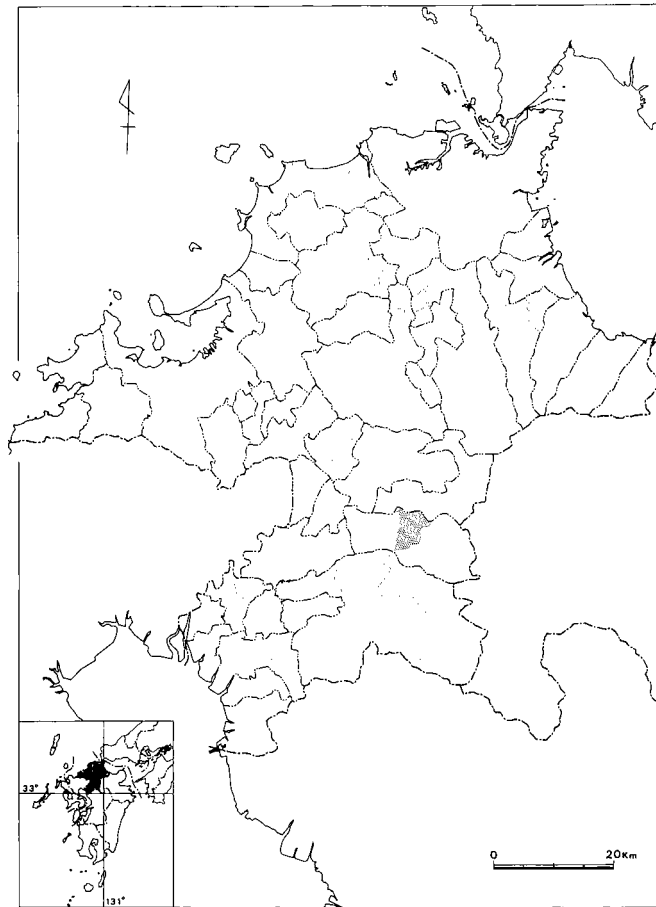
1. 地理的環境

仁右衛門畑 (NIEMONBATAKE) 遺跡は、福岡県浮羽郡吉井町大字新治字灰高346-1・347-4・348・349・350・352-1・353-1・360-1・361-1・362-1・362-2・363-1・364-1・365-1、字仁右衛門畑394・395・396・397-1に所在する。

遺跡の所在する吉井町は福岡県の南東部に位置する。東は浮羽町、西は田主丸町、北は筑後川を挟んで朝倉町・杷木町と接している。面積28.29km²、人口約17,500人。北部は福岡県第一の河川で「筑紫次郎」と称される筑後川を望み、その南には随一の穀倉地帯である筑後平野が広がる。南部には「屏風岳」とも呼ばれる水縄山地が座し、これから流れ出た小河川によって形成された扇状地が展開する。産業は平野部では水稲・野菜・植苗木、山裾部では果樹栽培といった農業が中心だが、豊富な山林資源をもとに木工産業も盛んである。

吉井町は「緑と清流、古墳と白壁の町」と言われる。そもそも「吉井」という地名は、「きれいな水が湧き出る井戸」が由来らしい。「五庄屋物語」として語り継がれる大石長野水道を代表に、町内には無数の農業用水がめぐり、周囲の水田に豊富な水を供給している。山裾部は富有柿の栽培が盛んであり、紅葉の季節になるとあたり一面が柿色にかわる。日岡古墳・珍敷塚古墳に代表される装飾古墳は全国的に有名であり、また平成9年2月に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された白壁づくりの町並みは、毎年2月から4月にかけて催される「筑後吉井おひな様めぐり」の時期になると多くの観光客でにぎわう。まさに自然と文化の調和した町である。

仁右衛門畑遺跡は筑後川の支流である美津留川の左岸、開析作用によって形成された自然堤防上に立地する。白壁づくりの町並みがのこる吉井町中心部の北西にあり、住宅街からは少し離れた距離にある。あたりには水田が広がるが、ここにも徐々に開発の波が押し寄せ、新築の家屋が目立つ。近くを通りがかった人の話によると、遺跡のある一帯は米も麦もよく実り、また昭和28年に起きた大水害の時にも浸水しなかったという。遺跡立地の条件としては非常に恵まれた土地である。



第1図 吉井町位置図

2. 歴史的環境

ここでは浮羽郡内の弥生時代の遺跡について見ていくこととする。なお、古墳時代以降の歴史的環境については『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』に述べている。

弥生時代前期の遺跡として、平成2年に浮羽バイパス建設に伴って調査された吉井町生葉所在の大碓遺跡が挙げられる。ここでは弥生時代前期後半～中期初頭の竪穴住居跡14棟、土坑50基、中期前半の甕棺墓5基と、集落を取り囲む可能性のある断面V字形の溝が4条検出された。竪穴住居跡は大半が円形プランのものであり、また大半が貯蔵穴と思われる土坑は方形プランあるいは楕円形プランになるものが多く、円形プランのものが意外に少ない。また断面が袋状になるものも非常に少ない。

浮羽町高見に所在し、昭和63年度に圃場整備事業に伴って発掘調査が行われた北淀遺跡では、弥生時代中期初頭の竪穴住居跡、土坑の他、後期後半の甕棺墓が検出されている。また同町高見に所在し、平成元年度に圃場整備事業に伴って発掘調査が行われた田島南遺跡では、夜臼式新段階まで遡るとされる壺棺墓が2基検出されている。これ以外にも弥生時代後期後半～古墳時代前期の竪穴住居跡、甕棺墓等が検出されている。やはり同町西高見に所在し、平成元年度に圃場整備事業に伴って発掘調査が行われた田島北遺跡では、弥生時代前期末前後の竪穴住居跡、貯蔵穴、土坑が検出された。これ以外にも弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡、土坑、溝、甕棺墓、石棺墓などが検出されている。

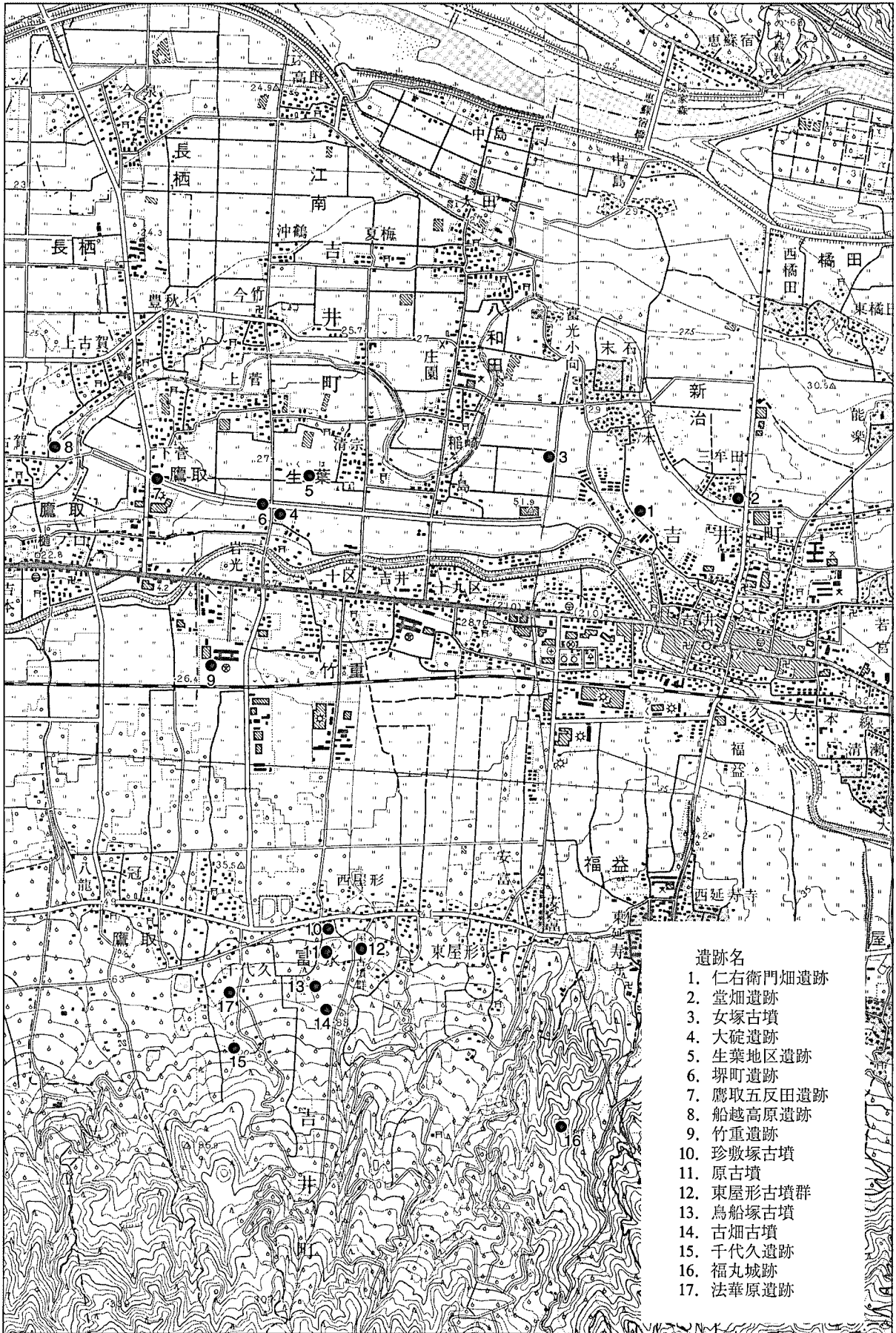
田主丸町豊城に所在し、平成10年に大型店舗建設に伴って発掘調査が行われた豊城中ツプロ遺跡では、弥生時代前期末～中期初頭の竪穴住居跡が検出された。これ以外にも板付Ⅰ式併行期位に位置付けられると思われる刻目突帯文系の土器も出土している。

弥生時代中期の遺跡としては、一般国道210号浮羽バイパスの建設に伴い平成2年、5年、6年に調査が行われた吉井町大字鷹取所在の鷹取五反田遺跡が挙げられる。ここでは弥生時代中期後半～後期前半の竪穴住居跡、甕棺墓、土坑、円形周溝状遺構などが検出された。竪穴住居跡は長方形プランで中央に炉を有し、二本柱を基本とする。また鷹取五反田遺跡と美津留川を挟んで対岸に位置する船越高原遺跡では、弥生時代中期後半を主体とする竪穴住居跡、土坑等が多数検出されている。

田主丸町大字船越に所在し、平成7年に圃場整備事業に伴って発掘調査された船越宮ノ前遺跡では弥生時代中期後半頃の竪穴住居跡が検出されている。また同船越に所在し、平成6年に圃場整備事業に伴って発掘調査された船越一ノ上遺跡では、弥生時代中期初頭～末の竪穴住居跡、土坑、溝、小児棺墓が検出されている。また近隣に所在し、一般国道210号浮羽バイパス建設に伴って発掘調査が行われた船越二ノ上遺跡でも弥生時代前期後半、中期後半、後期後半頃の遺物がわずかずつではあるが出土している。

弥生時代中期の墳墓群としては、浮羽町三春に所在し、昭和62年度に圃場整備事業に伴って発掘調査が行われた岩野遺跡が挙げられる。ここでは弥生時代中期前半～後期前半の甕棺墓群を主体とし、これら以外に土坑墓、箱式石棺墓、古墳時代前期の方形周溝墓、弥生時代中期後半の大溝が検出されている。

弥生時代後期の遺跡として、浮羽町大字山北に所在し、一般国道210号浮羽バイパスの建設に伴って昭和61年度に発掘調査が行われた日永遺跡が挙げられる。ここでは弥生時代後期前半～後半の竪穴住居跡等が検出されている。弥生時代の竪穴住居跡は長方形プランで中央に炉を有し、二本柱で



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

ベッド状遺構を持つものが少なからずある。また広形銅矛・広形銅戈が二本セットで出土しており注目される。吉井町大字徳丸・大字宮田に所在する塚堂遺跡でも弥生時代後期の竪穴住居跡が検出されている。

これまで弥生時代前期から後期までの遺跡を概観してきた。従前弥生時代の遺跡に関しては、古墳時代同様永らくその実態が不明であったが、近年の一般国道210号浮羽バイパス建設事業および県営圃場整備事業に伴う発掘調査が進むにつれ、次第に資料の蓄積が進んでいる。弥生時代もほぼ全期を通して土器相の把握が可能になりつつあるものの、早期～前期後半、後期初頭～前半の資料が現時点では欠落している。ただし平成11年～12年に浮羽バイパスの建設に先だって調査された船越高原遺跡では、前期でも古い段階に置くことの出来そうな刻目突帯文系の土器が出土している。また採集資料ではあるが、刻目突帯文土器が吉井町大字富永の法華原遺跡で多く出土している。

参考文献

- | | | | |
|------------|-----------------|------|---------------|
| 『吉井町誌』 | 第一巻 | 1977 | 吉井町誌編纂委員会 |
| 『浮羽郡誌』 | | 1966 | 浮羽郡誌刊行会 |
| 『浮羽町史』 | 上巻 | 1988 | 浮羽町史編集委員会 |
| 『田主丸町誌』 | 第一巻～第三巻 | 1996 | 田主丸町誌編集委員会 |
| 『塚堂遺跡Ⅰ』 | 浮羽バイパス関係文化財調査報告 | 第1集 | 1983 福岡県教育委員会 |
| 『塚堂遺跡Ⅱ』 | 浮羽バイパス関係文化財調査報告 | 第2集 | 1984 福岡県教育委員会 |
| 『塚堂遺跡Ⅲ』 | 浮羽バイパス関係文化財調査報告 | 第3集 | 1984 福岡県教育委員会 |
| 『塚堂遺跡Ⅳ』 | 浮羽バイパス関係文化財調査報告 | 第4集 | 1985 福岡県教育委員会 |
| 『塚堂遺跡Ⅴ』 | 浮羽バイパス関係文化財調査報告 | 第5集 | 1988 福岡県教育委員会 |
| 『日永遺跡Ⅰ』 | 浮羽バイパス関係文化財調査報告 | 第6集 | 1993 福岡県教育委員会 |
| 『日永遺跡Ⅱ』 | 浮羽バイパス関係文化財調査報告 | 第7集 | 1994 福岡県教育委員会 |
| 『鷹取五反田遺跡Ⅰ』 | 浮羽バイパス関係文化財調査報告 | 第9集 | 1998 福岡県教育委員会 |
| 『岩野遺跡』 | 浮羽町文化財調査報告書 | 第5集 | 1990 浮羽町教育委員会 |
| 『田島北遺跡』 | 浮羽町文化財調査報告書 | 第6集 | 1991 浮羽町教育委員会 |
| 『北淀遺跡』 | 浮羽町文化財調査報告書 | 第7集 | 1992 浮羽町教育委員会 |
| 『田島北遺跡』 | 浮羽町文化財調査報告書 | 第9集 | 1992 浮羽町教育委員会 |
| 『田島南遺跡』 | 浮羽町文化財調査報告書 | 第13集 | 1998 浮羽町教育委員会 |
| 『船越一ノ上遺跡』 | 田主丸町文化財調査報告書 | 第8集 | 1996 浮羽町教育委員会 |
| 『船越宮ノ前遺跡Ⅰ』 | 田主丸町文化財調査報告書 | 第9集 | 1997 浮羽町教育委員会 |
| 『豊城中ツプロ遺跡』 | 田主丸町文化財調査報告書 | 第10集 | 1998 浮羽町教育委員会 |
| 『船越宮ノ前遺跡Ⅱ』 | 田主丸町文化財調査報告書 | 第11集 | 1999 浮羽町教育委員会 |

Ⅲ 発掘調査の記録

1. 遺跡の概要

仁右衛門畑遺跡は美津留川の左岸、川より約150m程離れた自然堤防上に立地する。美津留川に最も近い調査区東側は標高29.7mを測り、調査区の中では最も高い。遺構はこの東側に集中する。これよりさらに東側は崖面を形成しており、低位段丘面とは約1.7mの比高差がある。この低位段丘面は、試掘調査の結果遺構が検出されなかったため、調査対象区域から除外した。調査区中央から西側にかけては緩やかに下降しており、それぞれ29.4m、28.8mを測る。遺構もこれに比例して徐々に稀薄になる。

検出した主な遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝・木棺墓・土壙墓・甕棺墓・落ち込み等である。出土遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石器・金属器である。

調査を実施するにあたり、便宜上、用水路部分から東をⅠ区、用水路から町道までをⅡ区、町道から西をⅢ区と区分けした。調査面積はそれぞれ3,465㎡、2,700㎡、1,950㎡で、合計8,115㎡。遺構番号は遺構を検出した順に付したが、先述した諸般の理由で調査区内を転々と移動せざるをえなかったため、遺構の位置が把握し難いものとなった。



仁右衛門畑遺跡周辺

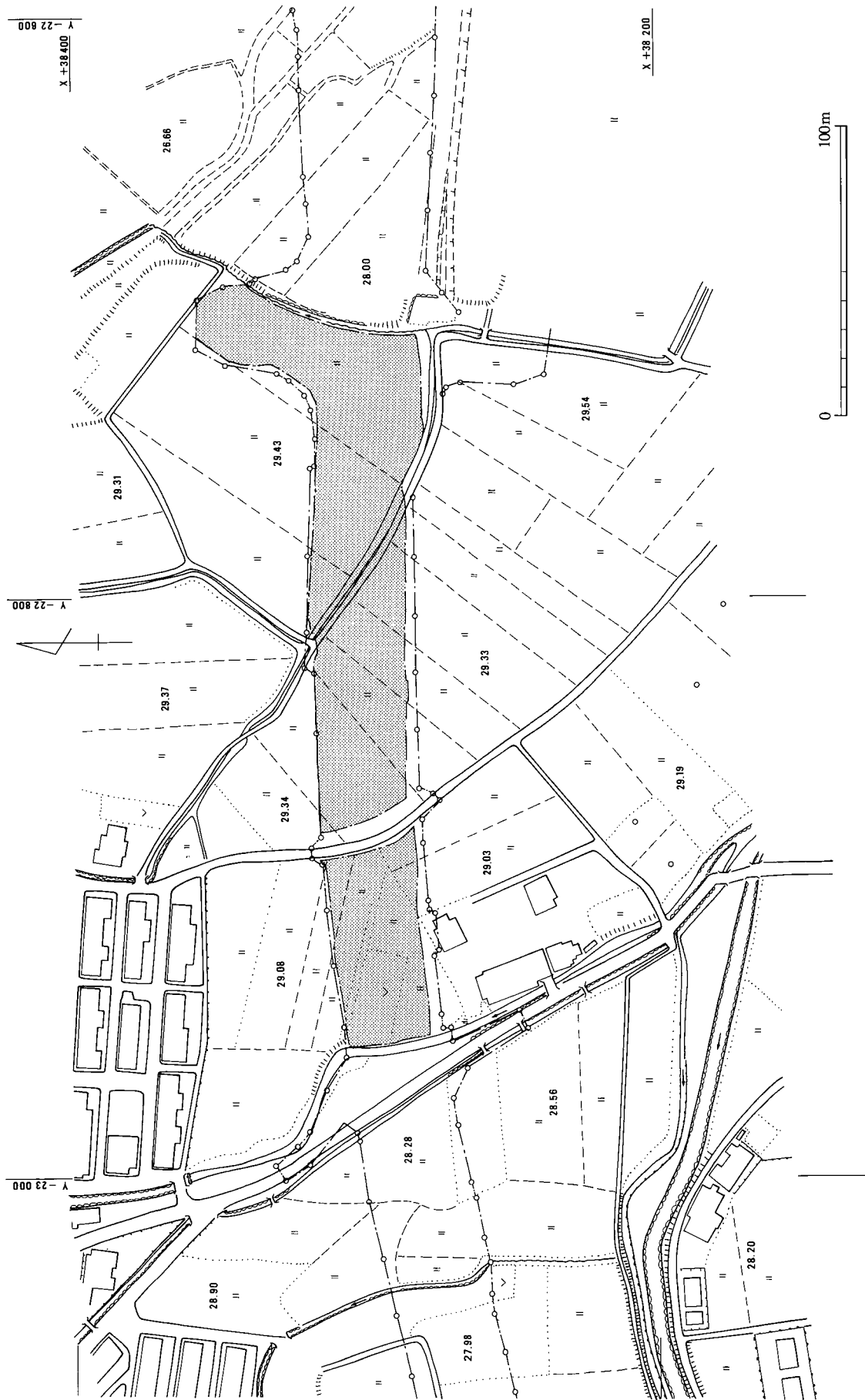
2. 基本層序（第4図）

当遺跡は自然堤防に立地するという地理条件上、土壌は河川の氾濫・浸食作用で形成された粘質土・シルトからなる堆積土である。

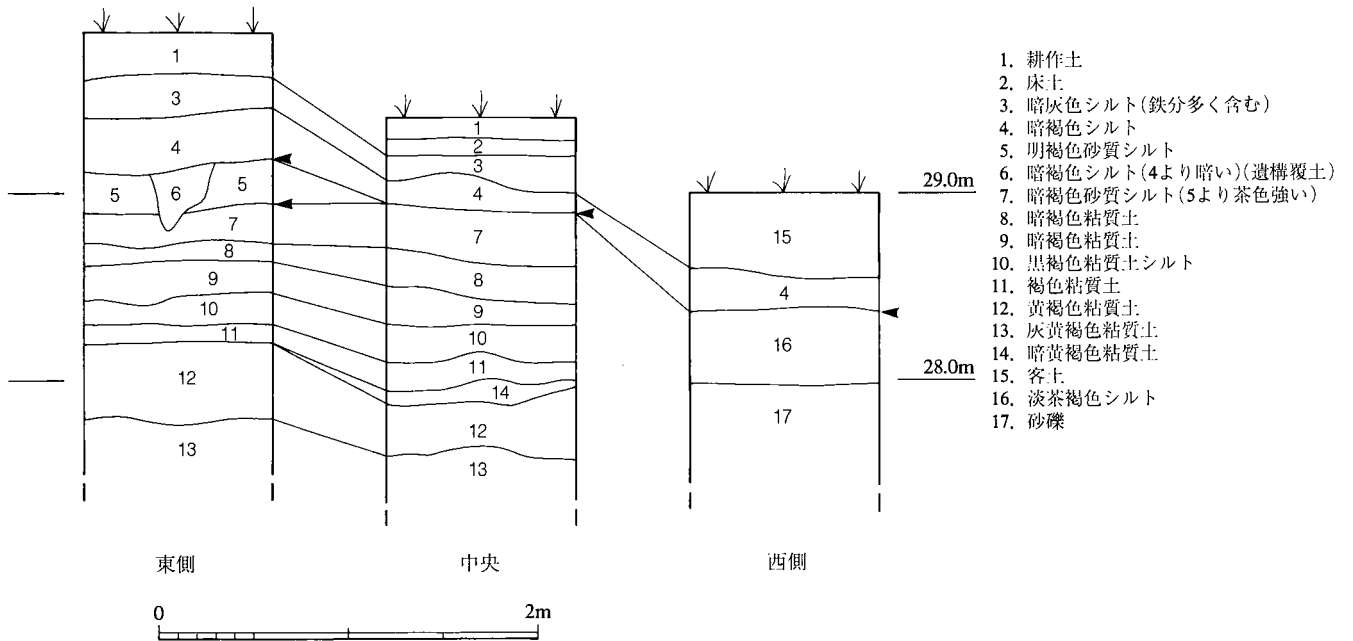
調査区東側は耕作土の下に鉄分を多く含んだ暗灰色シルト層が堆積する。床土が見られないのはこの土層図を作成したトレンチが水田畦畔にあたったためである。この暗灰色シルト層には遺物が若干含まれる。その下は暗褐色シルト層からなり、多くの遺物が包含される。第5層の明褐色砂質シルト層は調査区全体に認められるものではなく、部分的な堆積である。遺構はこの層の上面から掘り込まれており、第5層上面を遺構検出面とした。またこの層にはわずかではあるが遺物が含まれるため、下層の調査を実施した。第7層は第5層とほぼ同質であり、やや茶色が強い程度である。以下粘質土やシルトが堆積するが、これらには遺物は全く含まれない。

調査区中央は旧水田であり、最上層は耕作土・床土からなる。第3・4層は東側と同様。この付近には5層が存在せず、第4層の下には第7層が堆積する。従ってこの層の上面を遺構検出面とした。以下は東側と同様。

調査区西側は旧宅地だったため、約40cmの客土が盛られる。客土の下には耕作土・床土はなく、



第3図 調査区位置図 (1/2,000)



第4図 基本土層図 (1/40)

第4層暗褐色シルト層が認められた。やはり遺物包含層であるが、東側・中央と比べて遺物量が少ない。第4層の下には淡茶褐色シルト層が堆積しており、その上面を遺構検出面とした。この下には粗砂と拳大の円礫からなる砂礫層が厚く堆積する。尚調査区西側は堆積状況が複雑で、第4層の下層が砂礫層となる部分もあり、この砂礫層上面を遺構検出面とした場所もある。

3. 検出遺構と遺物 (弥生時代)

竪穴住居跡

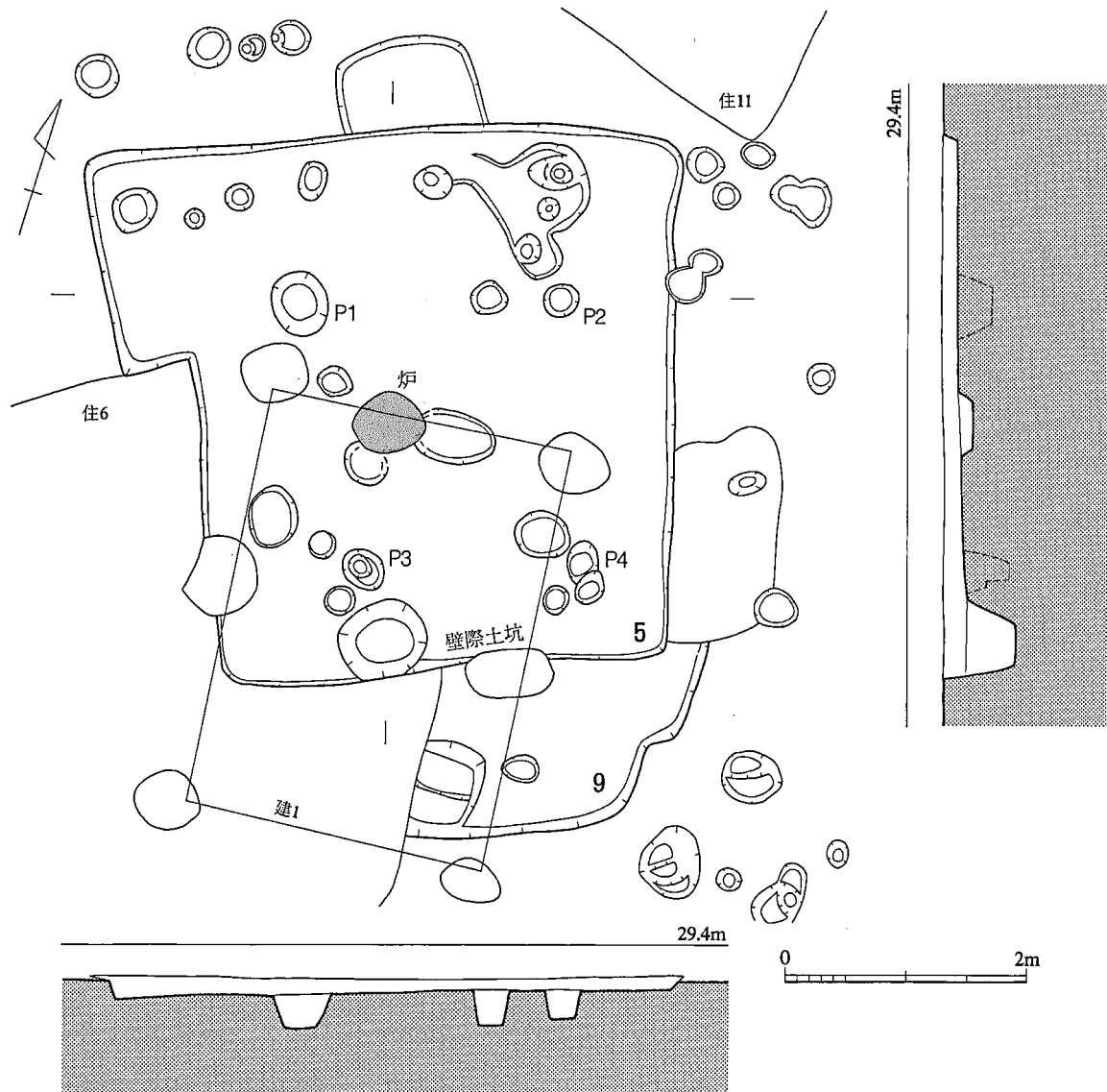
5号竪穴住居跡 (図版3、第5図)

調査区の中央よりやや北側に位置する。6・9号竪穴住居跡、1号掘立柱建物跡と重複関係にあり、6・9号竪穴住居跡よりも新しく1号掘立柱建物跡よりも古い。平面形は西壁の北隅に長方形の張り出し部を持った方形プランで、東壁4.3m、南壁3.7m、張り出し部は西壁1.8m、南壁0.6mを測る。深さは西側で20cm、北側で10cmを測る。床面積は18.9㎡。床面のほぼ中央で径60cmほどの円形の炉跡を検出した。深さは15cmを測り、内部には炭を多く含む。また南壁際のほぼ中央で壁際土坑を検出した。平面円形を呈し、径70cm、深さ40cmを測る。

主柱穴はP1～P4を検出した。P1は径60cm、深さ30cmを測るが、それ以外は径20cm前後、深さ25cm～40cmと小さなものである。これら以外にも幾つかのピットを検出したが、当住居跡に伴うものかどうかは判断できなかった。

出土土器 (第6図)

甕(1～7) 1は端部が断面三角形となり、口縁部付近が直立する甕。外面に一条の沈線を巡らせている。器表の剥落が著しく調整不明。2は断面が短い逆L字状を呈す口縁部片。細片のため傾きにやや不安が残る。図示した傾きが正しければ甕としてはやや口縁部が開きすぎる感があり、あ

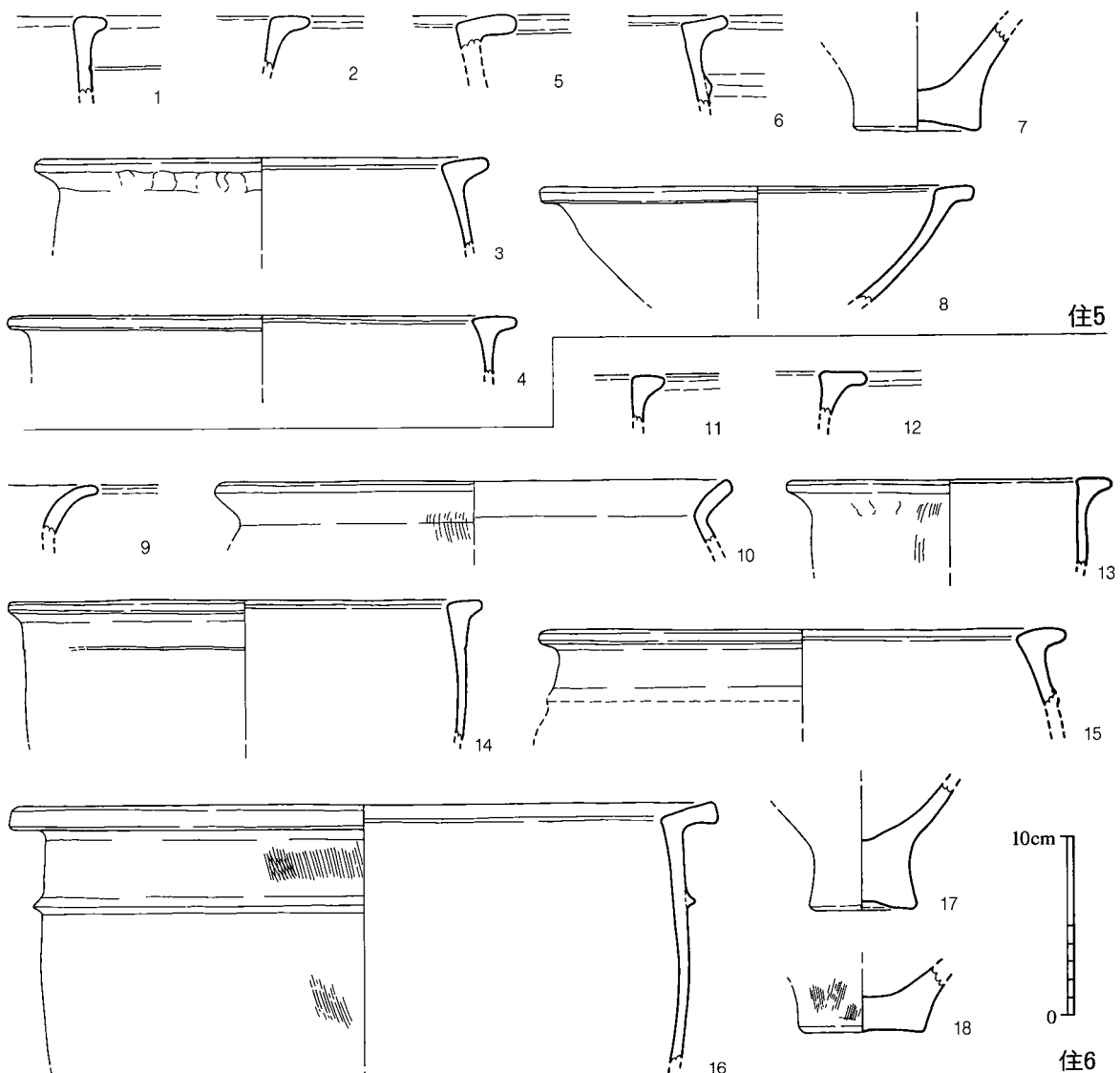


第5図 5・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)

るいは壺の口縁部となるかもしれない。器表の風化が著しく調整不明。3は口縁部付近がやや内傾する短い逆L字状口縁の甕。端部外面に指による整形痕を残すが、それ以外は風化のため調整不明。口径19.8cm。4は口縁内端がわずかに突出し、未発達な鋤先状を呈す口縁部である。口縁部上面はやや丸味を帯び、水平に伸びる。調整は風化のため不明。口径28cm。5は逆L字状に伸びる口縁端部片。端部上面はやや丸味を帯び、わずかに内傾する。6もやはり逆L字状口縁の甕。上面はわずかに窪み、内傾する。内端は鋭い稜を有す。外面の口縁部下に低い三角突帯を一条巡らす。風化が著しく調整不明。7は外底面がやや窪む甕の底部で、裾はほとんど開かず直立する。風化が著しく調整は不明。底径7.0cm。

高坏(8) 8は浅い体部となることから高坏の坏部と判断した。口縁部は水平に伸びた逆L字状口縁となる。内端をわずかにつまみ出し、また外端を面取りする。風化が著しく調整は不明。口径24cm。

出土遺物は1が時期的に若干古く中期初頭頃に位置付けられるものの、他のものは中期前半としてよいものである。張り出しを持った方形プランの竪穴住居跡は、円形・楕円形プランの竪穴住居



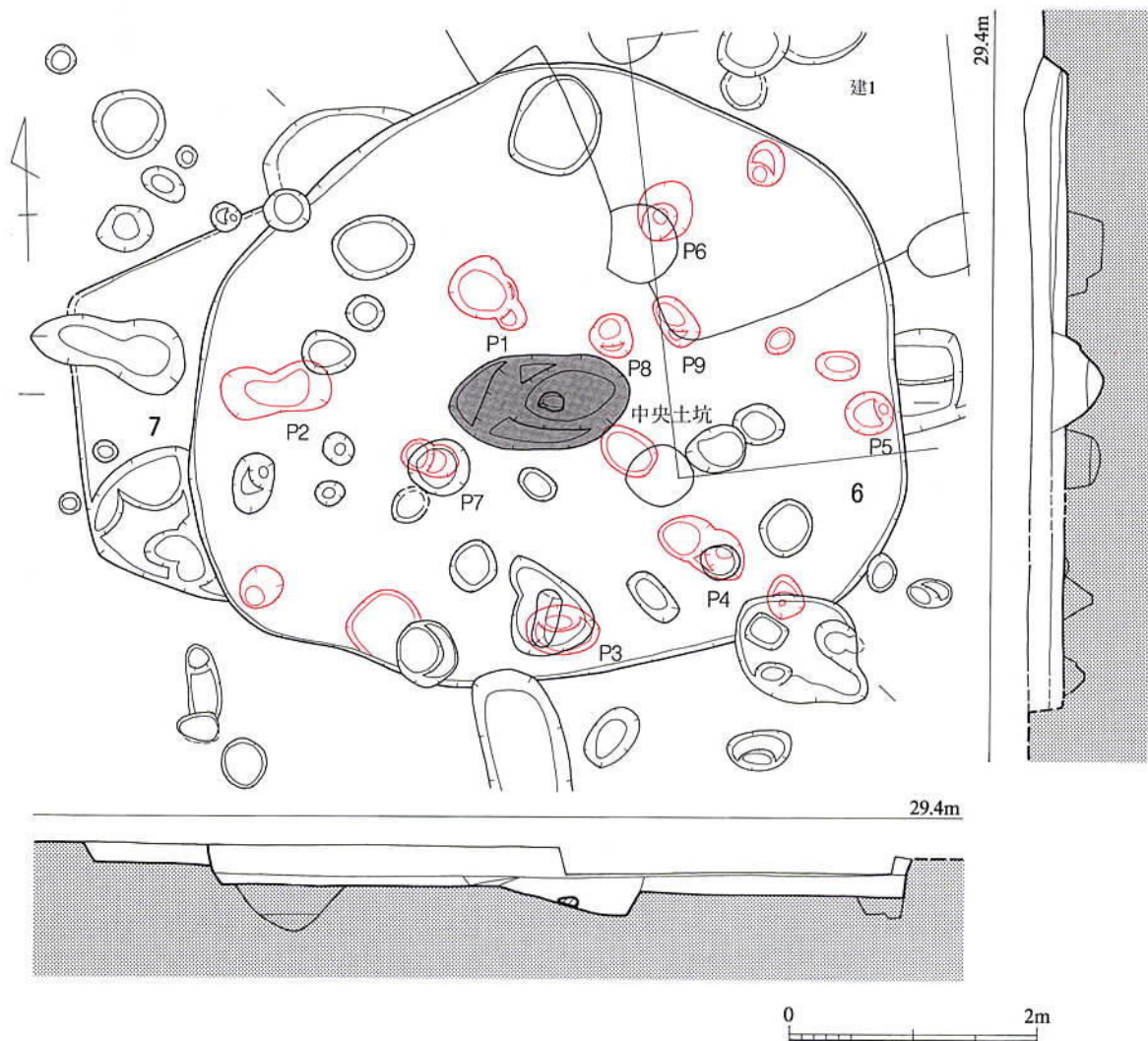
第6図 5・6号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

跡が大多数を占める当遺跡の中期の住居跡の中においては異質な存在である。

6号竪穴住居跡(図版3、第7図)

5号竪穴住居跡のすぐ南側に位置する住居跡である。5・7・9号竪穴住居跡、1号掘立柱建物跡と重複関係にあり、7・9号竪穴住居跡よりも新しく、5号竪穴住居跡、1号掘立柱建物跡よりも古い。平面形は東西に長い不整円形プランで、東西径5.7m、南北径5.0mを測る。深さは西側で25cm、中央で25cm、北側で35cmを測る。床面積は22.9㎡。床面のほぼ中央で、楕円形プランの土坑を検出した。この中央土坑は住居跡の平面プラン同様東西に長く、東西径1.4m、南北径0.75cmを測る。底面は西側に向かって深くなっており、最深部で30cmを測る。

支柱穴はP1～P6を、また補助柱穴としてP7～P9を想定したが、配置が不規則であり明確ではない。P1は径50cm、深さ30cm、P3は径40cm、深さ40cm、P8は径35cm、深さ40cmを測る。P2～P4、P7において柱穴の重複が認められ、建て替えを行ったものと思われる。これらの柱穴以外にも、床面上で大小のピットを検出したが、当住居跡に伴うものかどうかは判断できなかった。



第7図 6・7号竪穴住居跡実測図(1/60)

図示した土器のうち、9は貼床下層から、16~18は中央土坑からの出土である。また中央土坑内からは52の大型の砥石が出土しており、土坑の性格を考える上で重要である。他に160の石包丁が出土している。

出土土器(第6図)

甕(9~18) 9は如意形となる甕の口縁部。内外面ナデ調整を行う。10は口縁部付近が内傾し、口縁部がく字形に近く屈曲する。外面にわずかにハケ目が残る。混入品の可能性が高い。口径28.5cm。

11は断面三角形となる甕口縁部。胴部の口縁部付近は直立する。12は短い逆L字状となる口縁部片で、内端がわずかに突出している。細片であり傾きにやや不安が残る。13は断面が逆L字状に近い三角形となる小型甕。口縁部付近は垂直に近い立ち上がりとなる。風化が著しく内面の調整は不明だが、外面には縦方向のハケ目が、また屈曲部には指圧痕が観察される。口径18.0cm。14は断面三角形に近い口縁部となる甕。胴部上半は直立気味に立ち上がり、口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部上面はほぼ水平に短く伸びる。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。調整は風化が著しく不明。口径26.0cm。15は短く未発達な鋤先口縁となる甕。口縁部付近は大きく内傾する。上面は丸味を帯び水平に近く短く伸びる。また内端はわずかに突出する。外面の口縁部下には低い三角突帯

を一条巡らせている。口径29cm。16は直線的に内傾する逆L字状口縁をもつ甕。内端はわずかに突出し、また外端部は肥厚気味に仕上げ、その端部を面取りする。胴部は直立し、口縁部付近はわずかに内傾する。外面口縁部下には三角突帯を一条巡らせる。調整は、口縁部付近は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケを行う。

17は裾が直線的に若干開く柱状の甕底部。外底面はわずかに窪んでいる。全面風化が著しく調整は不明。底径5.8cm。18は低い平底となる底部片で、或いは壺の方が妥当かもしれない。外面に一部ハケ目が認められる。内面はナデ調整を行う。底径7.0cm。

出土土器から当住居跡の時期は弥生時代中期前半に比定できる。

7号竪穴住居跡（第7図）

6号竪穴住居跡の西側に位置する。6号竪穴住居跡に東側を大きく切られており、かろうじて西壁の一部が遺存する程度である。その遺存する部分で推測すれば、平面形は東西4.5m、南北3.5m程度の不整形楕円形プランになろうか。あるいは浅い土坑であった可能性もある。床面までの深さは15cmを測る。床面の南側に不整形の浅い落ち込みを検出している。出土遺物はわずかしかなかく、図示できるものはない。時期も不明である。

9号竪穴住居跡（第5図）

6号竪穴住居跡の東側に位置する。5・6号竪穴住居跡、1号掘立柱建物跡と重複関係にあり、これらよりも古い。大半を5・6号竪穴住居跡に切られているため、平面プランは全く不明であり、竪穴住居跡ではない可能性もある。深さは5cmを測るに過ぎない。出土遺物はわずかしかなかく、図示できるものはない。時期も不明である。

11号竪穴住居跡（図版4、第8図）

調査区中央付近の北端に位置する長方形プランの住居跡である。12号竪穴住居跡に切られ、22号土坑を切る。北側は調査区外へと続く。平面形は東西に長く、南壁7.4m、東壁5.4m、床面までの深さは20cmを測る。また南西コーナーにおいて南北2.7m、東西1.5mを測るベット状の高まりを造り付けている。

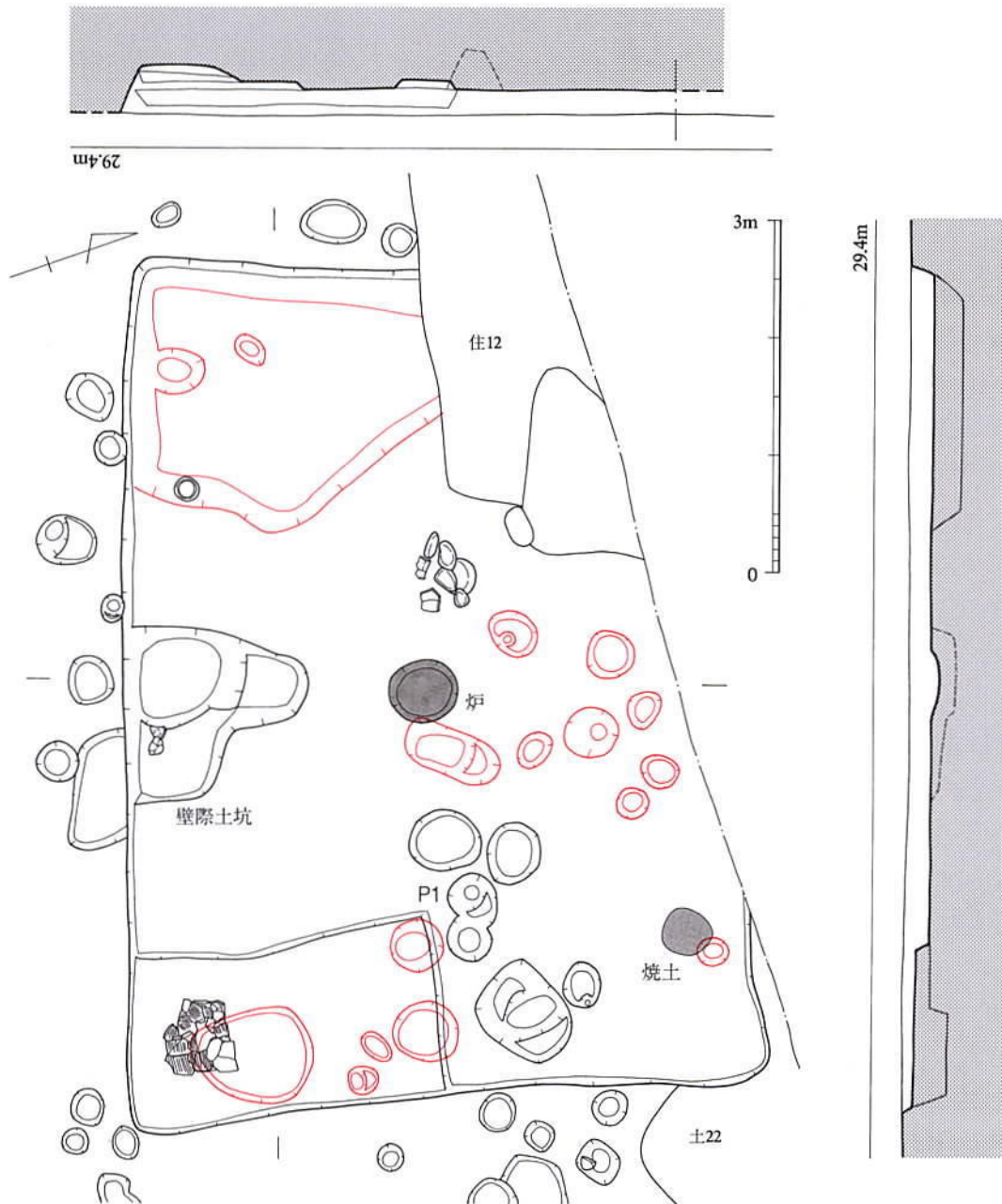
床面のほぼ中央で径50cm、深さ5cmの炉跡を検出した。また南壁際のほぼ中央で、不整形の壁際土坑を検出した。東西1.5m、南北1.5mを測り、南西側が最も深くなるが、20cmを測るに過ぎない。主柱穴はP1のみを検出することができた。本来は二本柱だったと推察されるが、P1に対応する位置を精査したが検出することができなかった。P1は径45cm、深さ30cmを測る。

床面はほぼ全面に貼り床が認められた。下層では幾つかのピットの他、西側で不整形の窪みが検出された。深さ15cmを測る。

遺物は図示した土器の他に、185のヤリガンナ、199の不明銅製品、貼床下層から42の砥石、81の石鏃、96・97のスクレイパーが出土している。このうち199は混入品の可能性が高い。

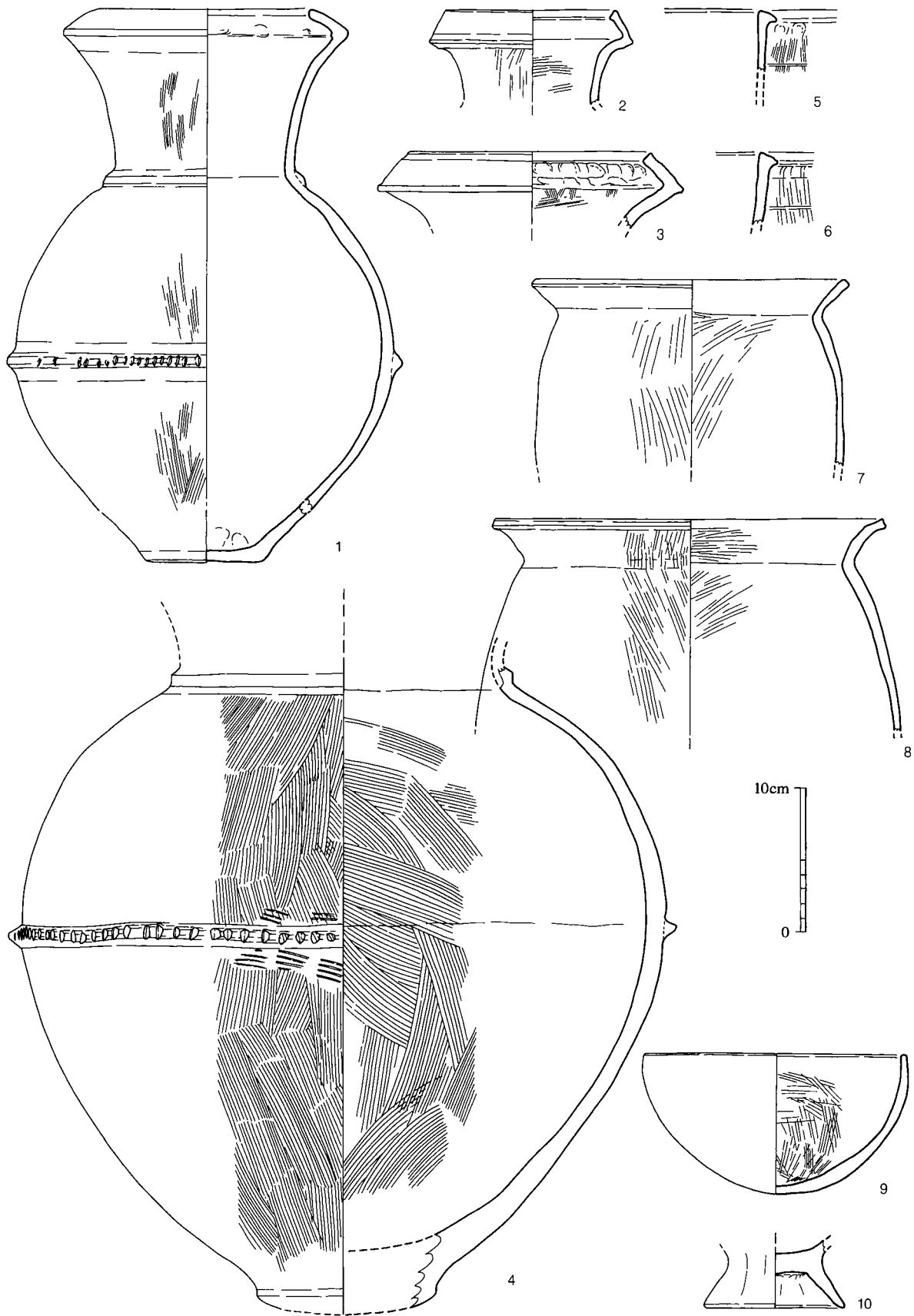
出土土器（図版41、第9図）

壺（1～4） 1はほぼ完形に復元できる二重口縁壺。底部は平底で胴部は球形に近い。最大径は中位にある。頸部付け根は割と締まっており、口縁部へ向かって緩やかに開く。口縁部は内湾気味



第8図 11号竖穴住居跡実測図 (1/60)

に大きく内傾し、端部は丸くおさめる。頸部の付け根に低い三角突帯を巡らせ、また胴部の最大径部に刻目突帯を巡らせる。外面はハケ目調整、内面はナデ調整を行う。内底部及び口縁部内面に指圧痕が認められる。口径14.6cm、胴部最大径27.2cm、底径8.0cm、器高38.5cm。2・3は二重口縁壺の口縁部。2は細い頸部の上半が強く開き、反転して直線的に内傾する口縁部へと続くもので、口縁端部は面取りしてシャープに仕上げる。口縁部内外面は横ナデ、頸部内外面はハケ目調整を行う。口径11.7cm。3もやはり口縁部が直線的に内傾するもので、端部は面取り整形を施し、さらに端部上面をつまみ上げ鋭い稜をなす。外面は風化のため調整が不明だが内面は指オサエ、ハケ目が認められる。器表の一部には化粧土が認められる。口径16.6cm。4は最大径が中位にある壺の胴部。底部は丸く不安定なレンズ状になる。頸肩境に三角突帯を巡らせ、また最大径部にハケ目工具による



第9图 11号竖穴住居迹出土土器实测图(1/4)

刻み目を施した突帯を巡らせている。調整は内外面ともにハケ目を行うが、外面の突帯付近にはタキ目が消えずに残る部分がある。胴部最大径45.9cm、頸部径23.5cm、底径12.4cm。

甕（5～8） 5・6はどちらも小さな三角口縁となる甕。口縁端部付近は内外面横ナデ、胴部は内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。どちらも中期初頭の混入品である。

7は口縁部が直線的に開く甕で、肩は張らずなで肩となる。口縁部は内外面横ナデ、胴部は粗いハケ目調整を行う。口径21.7cm。8もやはり肩が張らず、口縁部は外反しながら開き、口縁端部を強く横ナデし面取りを行う。内外面ハケ目調整を行う。口径27.0cm。

鉢（9） 9は半球形に近い形状の鉢。体部に比べて口縁部付近は器壁が薄くなる。内面にはハケ目が認められるが、外面は二次加熱を受け器表が剥落する。口径18cm、器高9.7cm。

台付鉢（10） 10は恐らく台付鉢の脚部であろう。直線的に開く低い脚部である。全体的に風化が著しく調整が不明瞭だが、一部に指ナデの稜線が認められる。脚裾部径9.7cm。

出土土器の中には2・3の口縁部の形状や4の底部に新しい要素が認められ、弥生時代後期後半の古い段階に比定してよいだろう。

18号竪穴住居跡（図版4、第10図）

調査区中央からやや東寄りに位置する正方形プランの竪穴住居跡である。南西コーナー部を試掘トレンチにより失うものの、平面プランの復元は可能である。北壁3.2m、東壁3.4m、深さは15cmを測る。床面のほぼ中央に不整円形の炉跡を検出しており、長軸70cm、短軸50cm、深さ15cmを測る。また南壁中央からやや内側で、楕円形の壁際土坑を検出した。長軸90cm、短軸55cm、深さ15cmを測る。

支柱穴はP1～P3を確認した。いずれも径30cm、深さ10cmを測る。またそれぞれ径20cm前後の柱痕を確認している。これらの支柱穴は他の竪穴住居跡と比較して、かなりコーナー近くに寄った位置にある。

床面はほぼ全面に貼り床が行われており、下層では幾つかの小ピットの他、不整形の掘り込みを検出している。

出土土器（図版42、第11図）

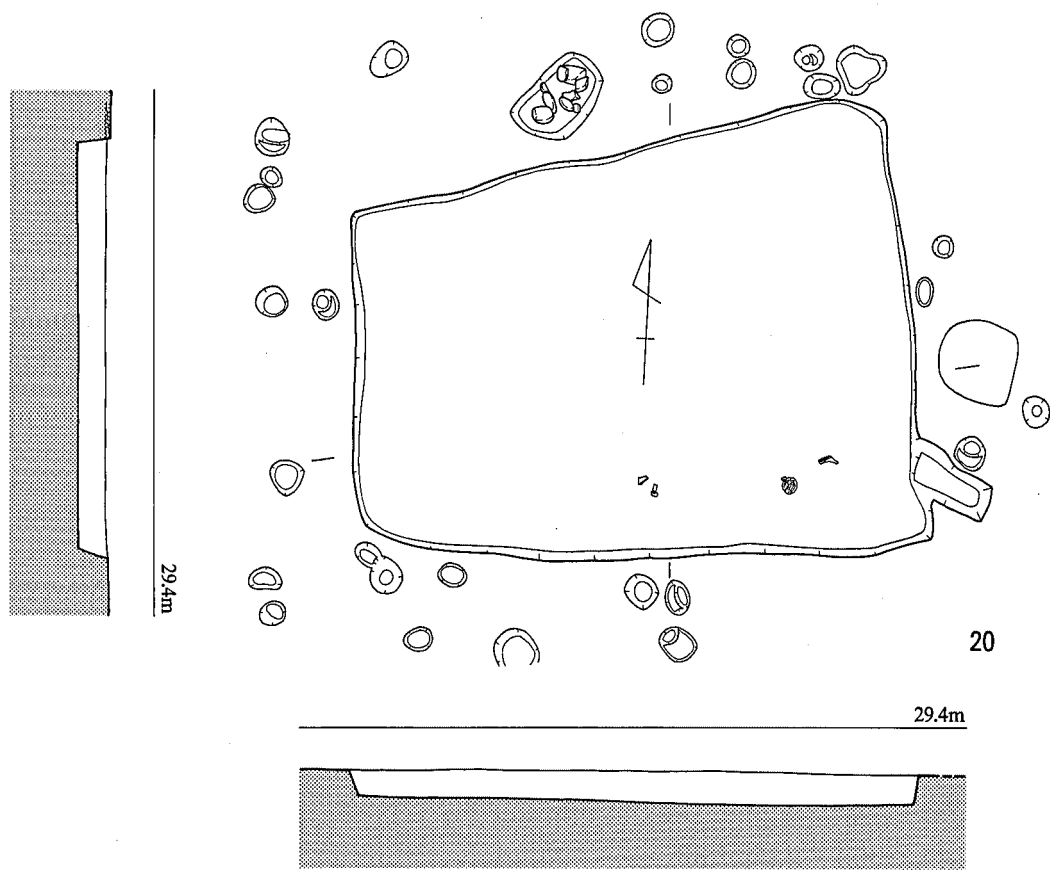
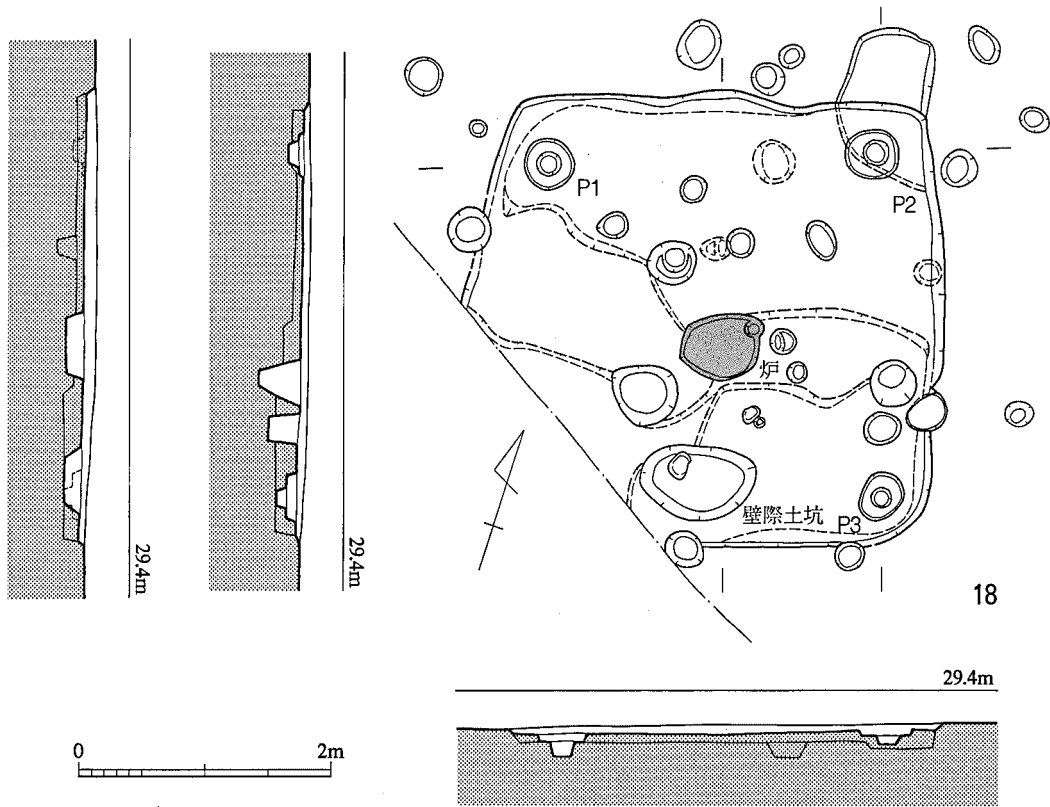
壺（1） 1は二重口縁壺の口縁部。口縁部は内湾しながら内傾し、端部はナデによる面取り整形を行う。調整は口縁部が横ナデ、外面口縁部下にハケ目が認められる。口径23.8cm。

甕（2・3） 2はわずかに丸味を帯びる平底の甕底部。胴部は緩やかに内湾しながら伸びる。底径8.2cm。3もやはり同様の底部片。底径6.4cm。

鉢（4） 4は口縁部が外反しながら開く鉢。屈曲部の稜は弱い。体部は丸味を帯びた器形になる。器表の風化が著しく調整不明。口径22cm。

台付鉢（5） 5は台付鉢の脚部。裾に向かってやや外反しながら開き、端部は四角くおさめる。内外面にハケ目が認められる。裾部径10.2cm。

高坏（6） 6は半球形の鉢形の坏部に径の大きな柱部が付く高坏。裾部は短く開く。坏部は器表がかなり風化するが、柱部には内外面にハケ目が認められる。全体的に指圧痕を残す雑な作りで、器壁も厚くシャープさに欠ける。坏部径15.0cm、裾部径10.3cm、器高14.6cm。



第10図 18・20号竪穴住居跡実測図 (1/60)

土師器皿（7） 7は底部糸切りの土師器皿である。全体的に風化が著しく調整不明。明らかに混入品である。

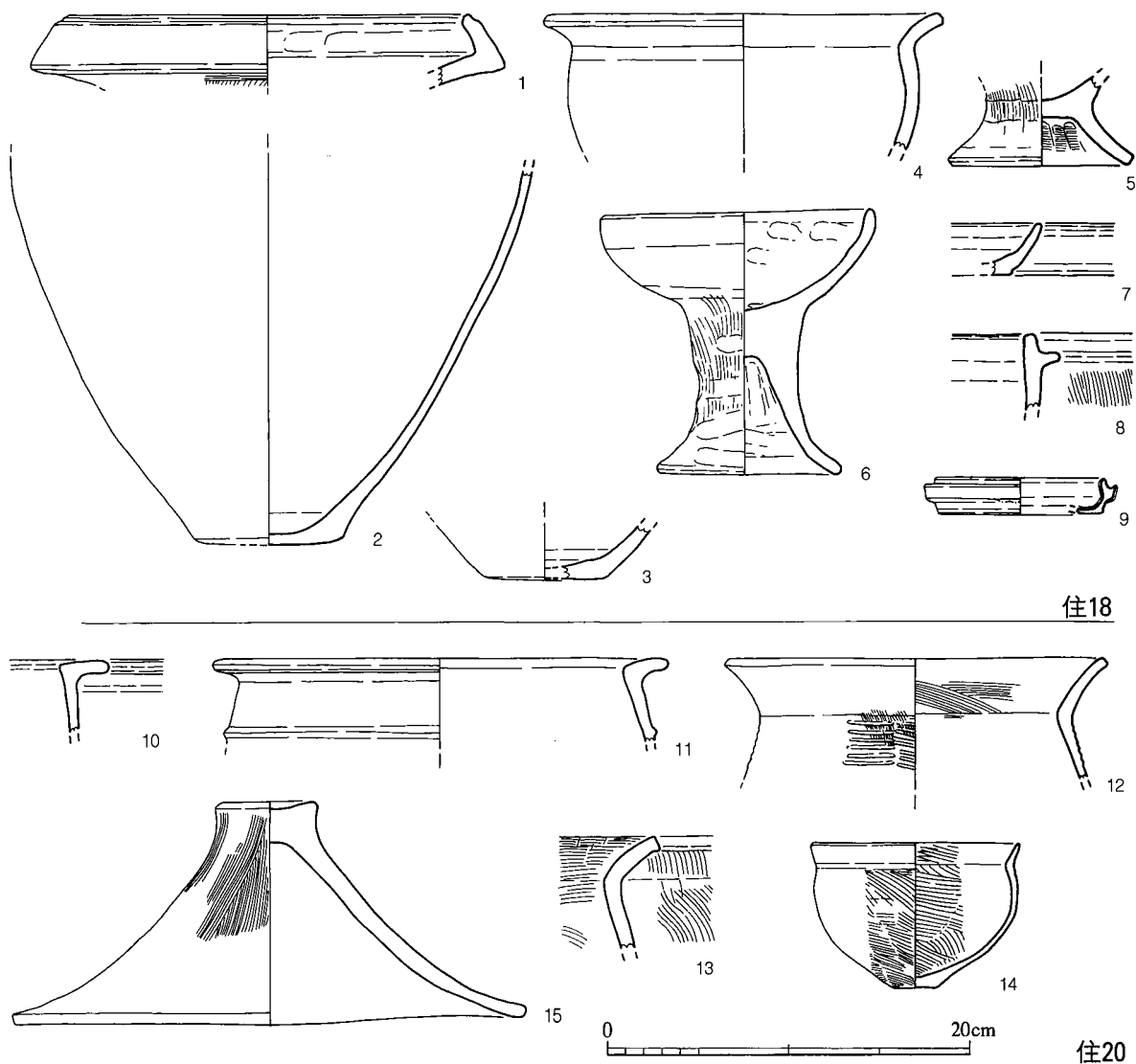
土師質鍋（8） 8は短い鍰部をもつ土師質鍋。口縁部及び鍰部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。混入品。

青白磁合子（9） 口径9.4cm、底径9.1cm、器高2.1cmを測る青白磁合子。外面胴部下半から底部にかけて露胎となる。混入品。

出土土器は弥生時代後期中葉に比定できる。

20号竪穴住居跡（図版5、第10図）

調査区東側に位置する不整長方形の竪穴住居跡である。平面形はかなり歪んでおり、北壁4.2m、南壁4.5m、東壁3.4m、西壁2.4mを測る。深さは西側で20cm、東側で25cmを測る。床面積は15.0㎡。床面を精査したが柱穴は全く見あらず、また平面プランが不整形だった事もあり住居跡ではない可能性も考えたが、床面は住居跡によく見られるように土間状に堅く締まっていたので竪穴住居跡と判断した。



第11図 18・20号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土土器（図版42、第11図）

甕（10～13） 10は水平に直線的に伸びる甕の口縁部片。内端はやや突出する。風化のため調整不明。弥生時代中期前半の混入品。11は短く伸びる逆L字状口縁の甕で、口縁部上面はわずかに内傾する。外面口縁部下に低い三角突帯を巡らせる。口径25cm。混入品。12はほとんど直線的に開く甕の口縁部で、端部を強く面取りし四角くおさめる。胴部の肩はほとんど張らない。口縁部内面は横ハケ目、口縁部外面、胴部内面はナデ、胴部外面は縦ハケ目の後タタキ調整を行う。口径21cm。13はわずかに外反する口縁部で、やはり端部を四角くおさめる。内外面ハケ目調整を行う。

鉢（14） 14は胴部上半が直立し、口縁部が短くわずかに開く鉢。口縁部は内外面とも横ナデ調整を行うが、内面のハケ目が消えずに残っている。胴部は内外面ともハケ目調整を行う。口径11.5cm、器高8.0cm、底径2.2cm。

蓋（15） 15は裾部が大きく開く甕蓋で、端部は丸くおさめる。全体的に器表の風化が進むが、外面上半にはハケ目が認められる。天井部径5.7cm、裾部径28.2cm、器高12.5cm。弥生時代中期前半頃の混入品。

これらの出土土器のうち、この住居跡の時期を示すのは12～14である。後期後半に比定できる。

26号竪穴住居跡（図版5、第12図）

調査区東側南端に位置する竪穴住居跡で、南半は調査区外へと続いているが恐らく長方形プランとなるだろう。唯一計測できる北壁は5.6mを測る。深さは西側で25cm、中央で30cm、東側で30cmを測る。床面中央付近で炉跡を検出しており、径80cm前後になると思われる。床面では幾つかのピットを検出したが、いずれも支柱穴になりそうなものはなかった。また北西コーナー付近において8個の河原石がまとまって出土したが、何らかの施設として機能したのか、或いはただ単に一ヶ所に廃棄されただけなのか、判断することはできなかった。

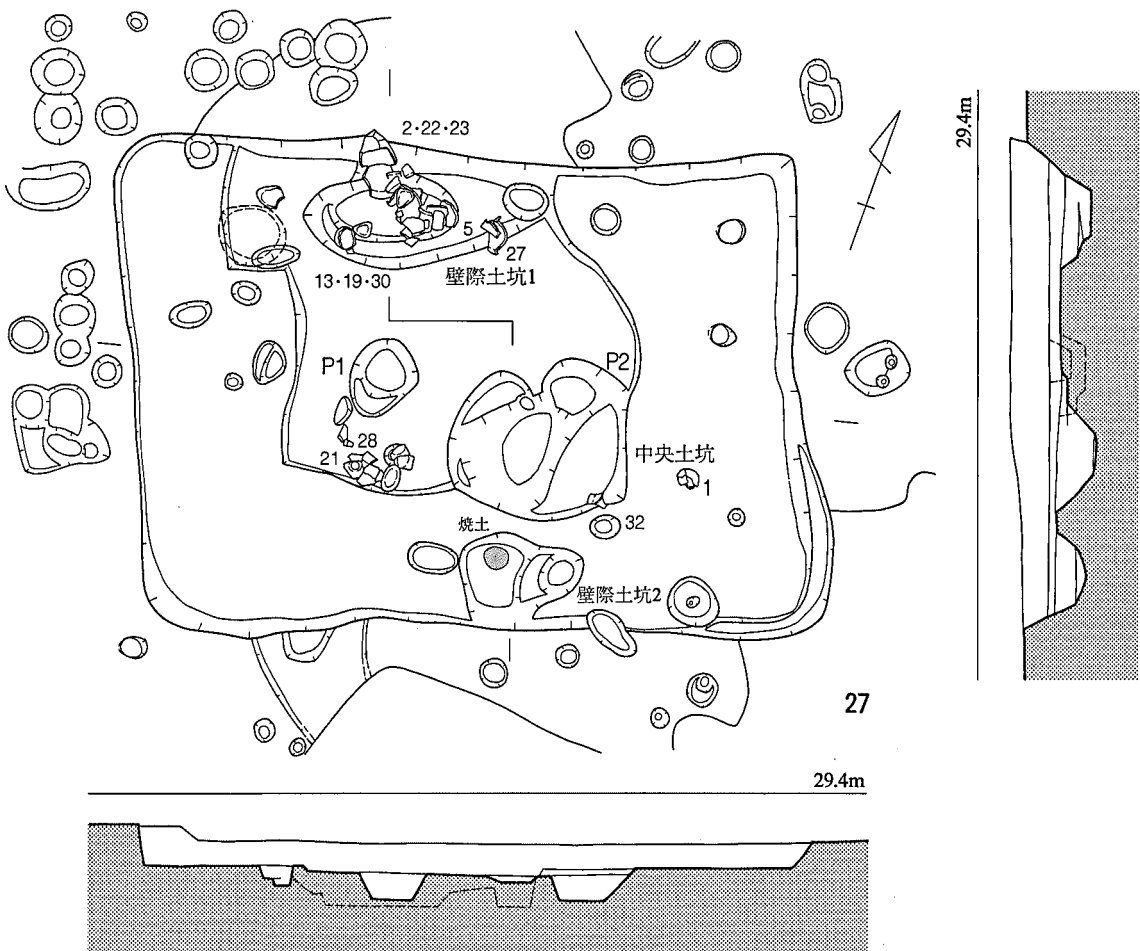
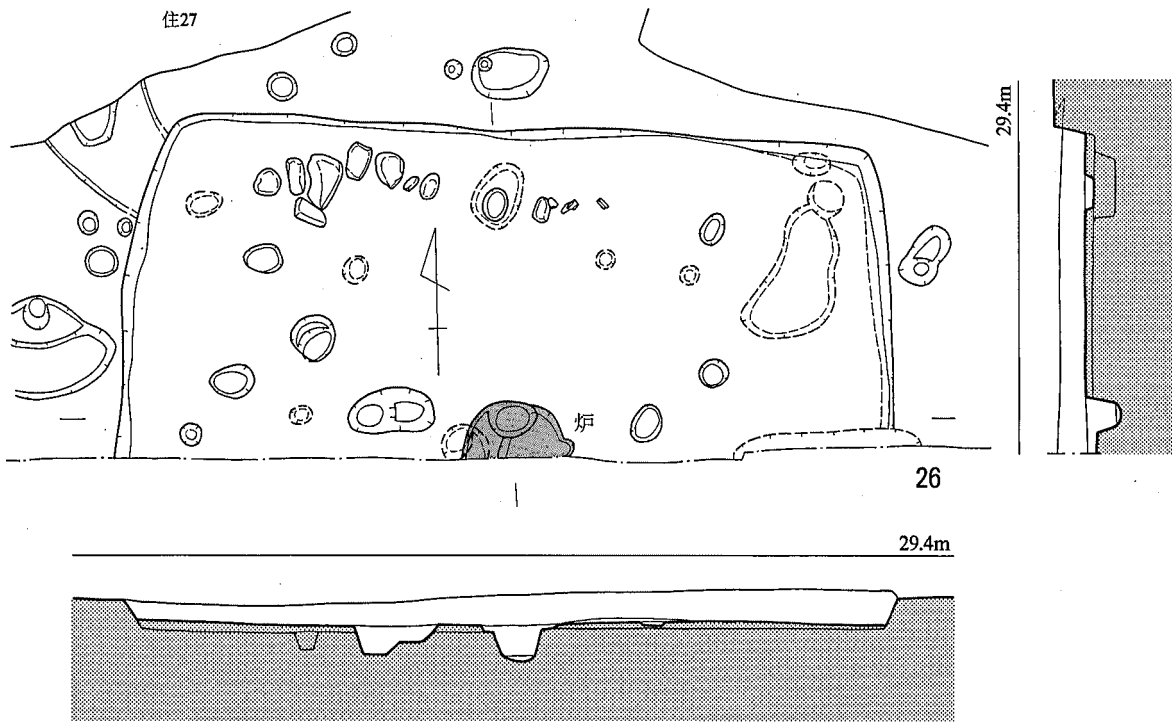
貼り床は全面に行われており、貼り床の下層では幾つかの小ピットを検出した。

出土遺物には図示した土器の他に床面直上から186のヤリガンナ、200のガラス小玉が出土した。

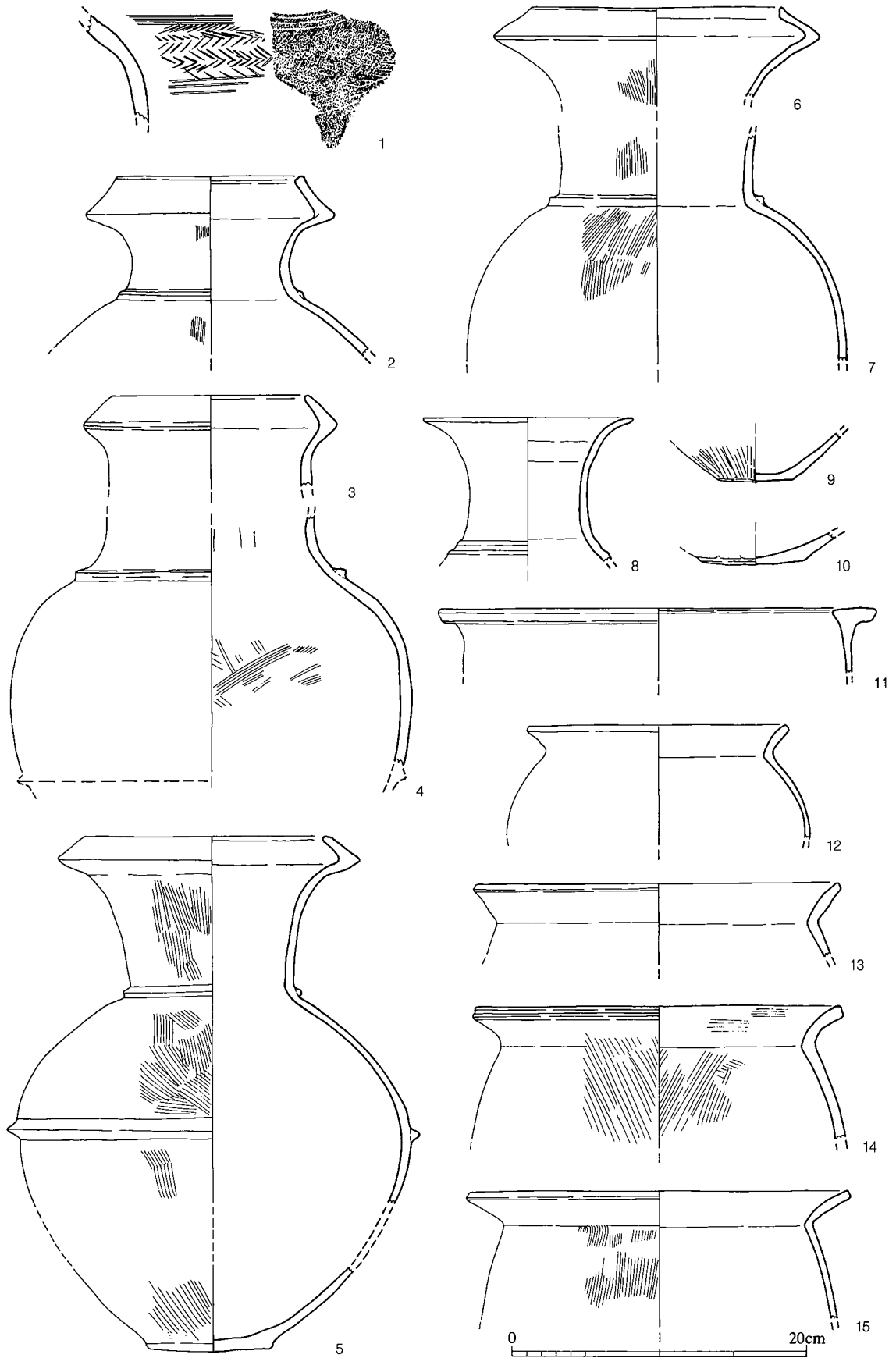
出土土器（図版42・43、第13・14図）

壺（1～10） 1は肩部に無軸羽状文、多重沈線からなる文様帯を巡らせる壺胴部片。器表がやや風化しており調整は不明。弥生時代前期末頃の壺であり混入品。

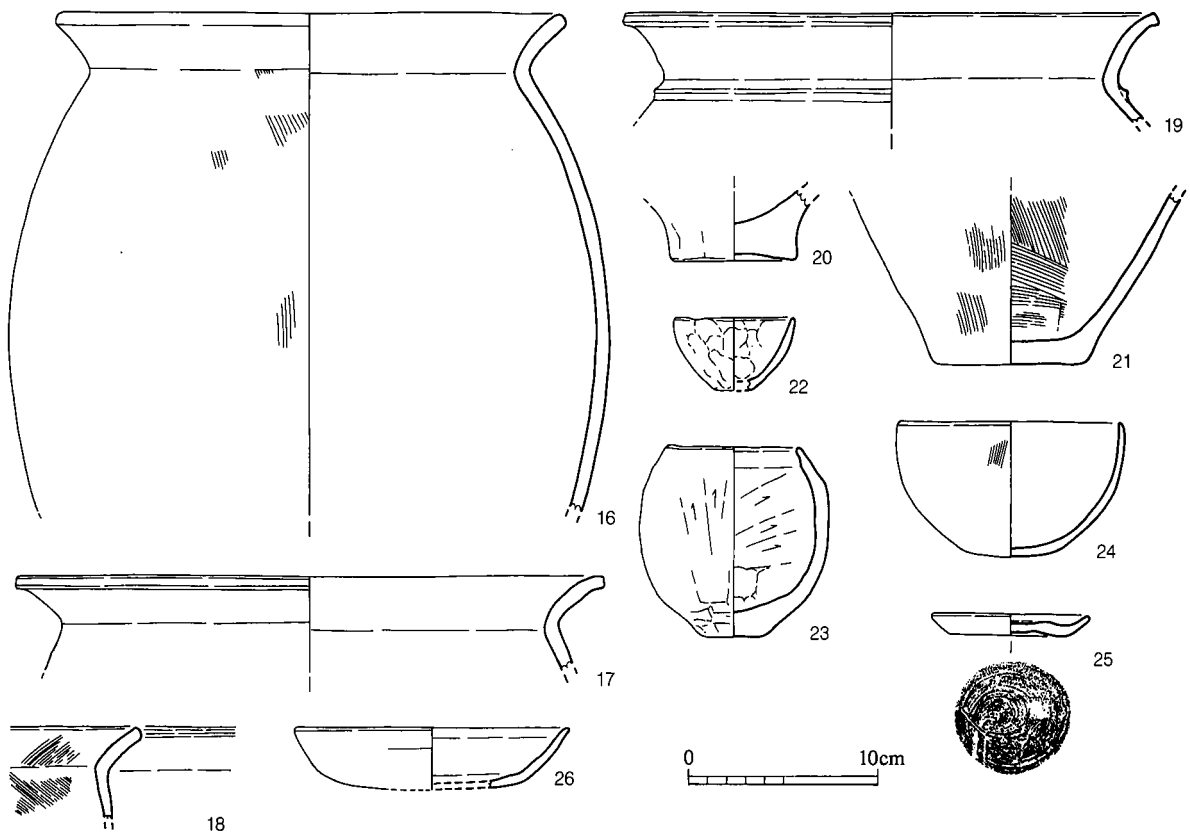
2は口縁部が外反しながら内傾する二重口縁壺。端部は面取り整形し四角くおさめる。肩部はあまり張らず、頸部は短く上半が急激に外反する。頸肩境に低い三角突帯を巡らす。口径12.6cm。3・4は接合しないが同一個体。胴部は最大径が上位にあり、頸部付け根はあまり締まらず、肩と頸の境も不明瞭である。頸部は垂直に上方へ伸びる。口縁部の開きは弱く、反転部から上は直線的に内傾し、端部を丸くおさめる。頸肩境に三角突帯を巡らせ、また胴部下方にも三角突帯が巡るようである。全体的に調整が不明瞭だが、胴部内面に部分的にハケ目が残る。口径13.3cm、胴部最大径27.2cm。5は胴部の一部を欠くが、ほぼ完形に復元できる二重口縁壺。底部はわずかにレンズ状となるが、ほとんど平底である。胴部最大径は中位よりやや上にあり、その箇所及び頸肩境に三角突帯を巡らす。頸部はよく締まり、口縁部に向かって大きく開く。口縁部は直線的に内傾し、反転部の稜は鋭い。口縁部は横ナデ、頸部及び胴部外面はハケ目、内面はナデ調整を行う。口径20.5cm、胴部最大径28cm、底径8.6cm。6は屈曲部が大きく開き、口縁部がほぼ直線的に強く内傾する二重口縁



第12図 26・27号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第13图 26号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/4)



第14図 26号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)

壺。頸部外面にハケ目が残る。口径22.0cm。7はなで肩の胴部から直線的に上方へと伸びる頸部をもつ壺。頸肩境には三角突帯を巡らす。胴部内面はナデ、外面はハケ目調整を行う。6と7は接合しないが同一個体の可能性がある。

8は細長く直立する頸部から、大きく外反して口縁部へと至る壺で、端部は丸くおさめる。肩部には低い三角突帯を二条巡らす。器表の風化が著しく調整不明。口径14.2cm。当地域では類例の少ない器形である。

9・10は壺の底部。9は平底で内面ナデ、外面ハケ目調整を行う。底径5.4cm。10はわずかにレンズ状となるが、ほとんど平底に近い。内外面ともにナデ調整を行う。底径7.2cm。

甕 (11~21) 11は水平に短く伸びる鋤先口縁の甕。内側への突出は短い。口径29.5cm。弥生時代中期前半のもので、混入品。

12は球形胴の甕で、口縁部はわずかに外反しながら開き、端部は四角くおさめる。屈曲部内面には弱い稜が認められる。器表の風化が著しく調整不明。口径19.6cm。13はく字形に開く口縁を持つ甕で、口縁中位がやや肥厚する。端部は面取り整形し、四角くおさめる。器表の風化が著しく調整不明。口径24.8cm。14は外反しながら開く口縁部の甕で、端部を強く横ナデしており沈線状の窪みを形成する。屈曲部内面の稜は比較的明瞭である。口縁部内面は横ハケ目、外面は横ナデ、胴部はハケ目調整を行う。口径25.0cm。15は13同様口縁中位がやや肥厚し、端部は四角く面取り整形する。屈曲部内面の稜は明瞭である。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。口径26.0cm。16は肩の張らない胴部から、稜を持たずに緩く屈曲し、外反気味に開く口縁部へと至る甕で、端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面はほとんど風化するが、わず

かにハケ目が認められる。口径26.8cm。17は外反しながら大きく開く口縁部で、端部は面取り整形し四角くおさめる。屈曲部内面の稜は弱い。口径31.0cm。18は直線的に短く開く口縁部で端部を上方につまみ出す。頸部はあまり締まらないようである。内面にハケ目調整が認められる。19は外反しながら開く口縁部で、端部は面取り整形を行い四角くおさめる。屈曲部内面には弱い稜を有し、また外面には低い三角突帯を巡らす。口径28.2cm。

20はやや上げ底となる甕の底部。器表の風化が著しく調整不明。底径6.6cm。恐らく弥生時代中前半頃のもので混入品であろう。21は平底の底部。内外面ハケ目調整を行う。底径8.0cm。

鉢（22～24） 22は手握ねの鉢で、指圧痕が明瞭である。口径6.4cm、底径2.0cm、器高3.9cm。23は口縁部が強く内傾する鉢で、胴部上半はヘラナデ調整を行う。口径7.1cm、底径3.1cm、器高10.2cm。24は半球形の鉢で底部は丸底である。口縁部は直立する。器表の風化が著しいが外面にわずかにハケ目が残る。口径11.9cm、器高7.2cm。

土師器小皿（25） 25は底部糸切りの土師器小皿。口径8.4cm、底径6.3cm、器高1.15cm。混入品。

土師器皿（26） 26は底部糸切りの土師器皿。口径14.4cm、器高3.4cm。混入品。

これらの土器は明らかな混入品を除き、ほぼ弥生時代後期中葉に比定できる。

27号竪穴住居跡（図版5、第12図）

26号竪穴住居跡のすぐ北西に位置する。やや歪んだ長方形プランを呈しており、北壁5.4m、東壁3.7mを測る。床面積は19.7㎡。北壁を除く3辺にベッド状の高まりが巡っており、いわゆる「コ」字状配置をとる。検出面から床面までの深さは25cm、ベッド状遺構の高さは5cmを測るにすぎない。北壁際では壁際土坑1とした楕円形の土坑を検出した。長軸190cm、短軸80cm、深さ20cmを測る。また南壁中央でも壁際土坑2とした不整形土坑を検出した。長軸100cm、短軸70cm、深さ25cmを測る。内部からは焼土が検出された。

床面からはP1・P2とした主柱穴および中央土坑を検出した。中央土坑からは焼土が検出されず、また極端に南東側に寄っており特異である。P1は径50cm、深さ30cm、中央土坑は長軸140cm、短軸90cm、深さ40cmを測る。

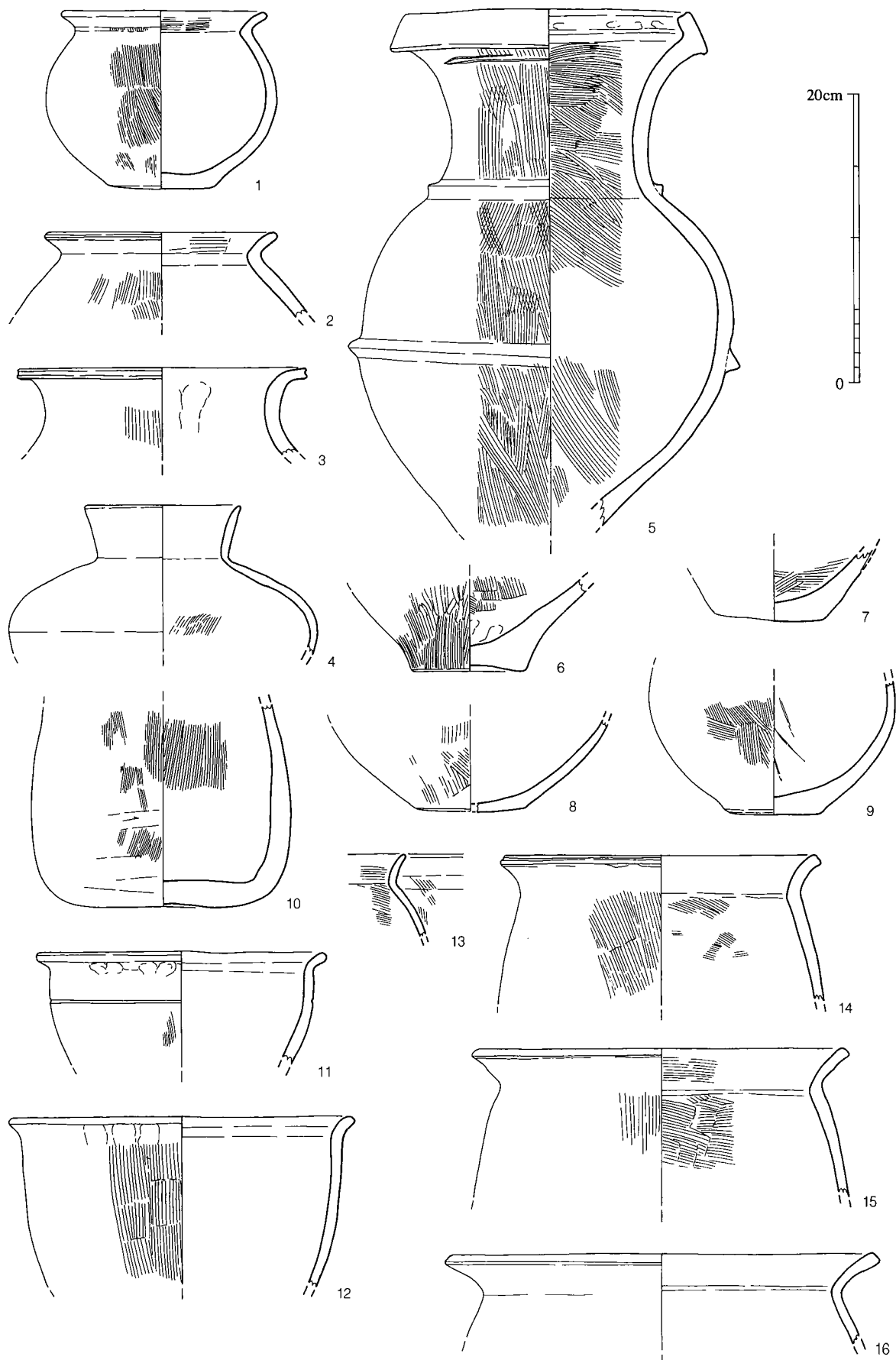
遺物には図示した土器の他、44の砥石、128の磨製石剣が出土している。

出土土器（図版43・44、第15～17図）

壺（1～10） 1はく字状口縁をもつ短頸壺。底部は平底で口縁部はわずかに外反しながら大きく開く。屈曲部の内面には鋭い稜を有す。頸部はよく締まり球形の胴部となる。調整は口縁部内面が横ハケ目、外面が横ナデ、胴部内面がナデ、外面が縦ハケ目調整を行う。口径14.2cm、底径7.4cm、器高12.5cm。2もやはり短頸壺であろう。屈曲部の稜は弱く、口縁部はわずかに外反しながら短く開く。口縁部内面横ハケ目、外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整。口径15.4cm。

3は頸部が直立し、口縁部が大きく開く壺。端部は一条の沈線が巡る。口縁部は内外面横ナデ、頸部は内面ナデ、外面縦ハケ目調整。内面には指ナデ痕が残る。口径19.8cm。4は扁平な胴部に短く直立気味に立ち上がる口縁部をもつ壺。屈曲部の稜は弱い。口縁部は横ナデ、胴部は内面に一部ハケ目が認められるものの、外面は風化のため調整不明。口径10.8cm、胴部径21.2cm。

5は底部を欠損する二重口縁壺。胴部は倒卵形に近く、底部にかけてすぼまる。頸部はよく締まり、口縁部にむかって緩やかに開く。口縁部は短く内傾する。胴部最大径にあたる位置と頸肩境に



第15图 27号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/4)

それぞれ一条の三角突帯を巡らす。調整は口縁部に横ナデを行う以外、全てハケ目を行う。口径19.6cm、胴部最大径27.0cm。

6はわずかに上げ底となる壺の底部片で、内面は底部付近が指オサエ、それより上が縦ハケ目、外面は底部付近が縦ハケ目、その上方が縦ヘラミガキ調整を行う。底径8.0cm。弥生時代中期初頭～前半の混入品であろう。

7はわずかにレンズ底となる壺の底部。内面にはハケ目が明瞭だが外面は風化が著しく調整不明。底径7.5cm。8もわずかにレンズ状になる壺の底部。器壁が非常に薄く作られる。全体的に風化が著しいが、外面にハケ目が認められる。底径7.8cm。9は平底の底部から球形の胴部へと続くもので、短頸壺であろうか。外面にハケ目が認められる。底径6.5cm。10は類例を知らない珍品である。平底の底部から、明確な境を持たずに内傾する胴部へと続く。内外面ハケ目調整、底部はナデ調整を行う。底径16.2cm。

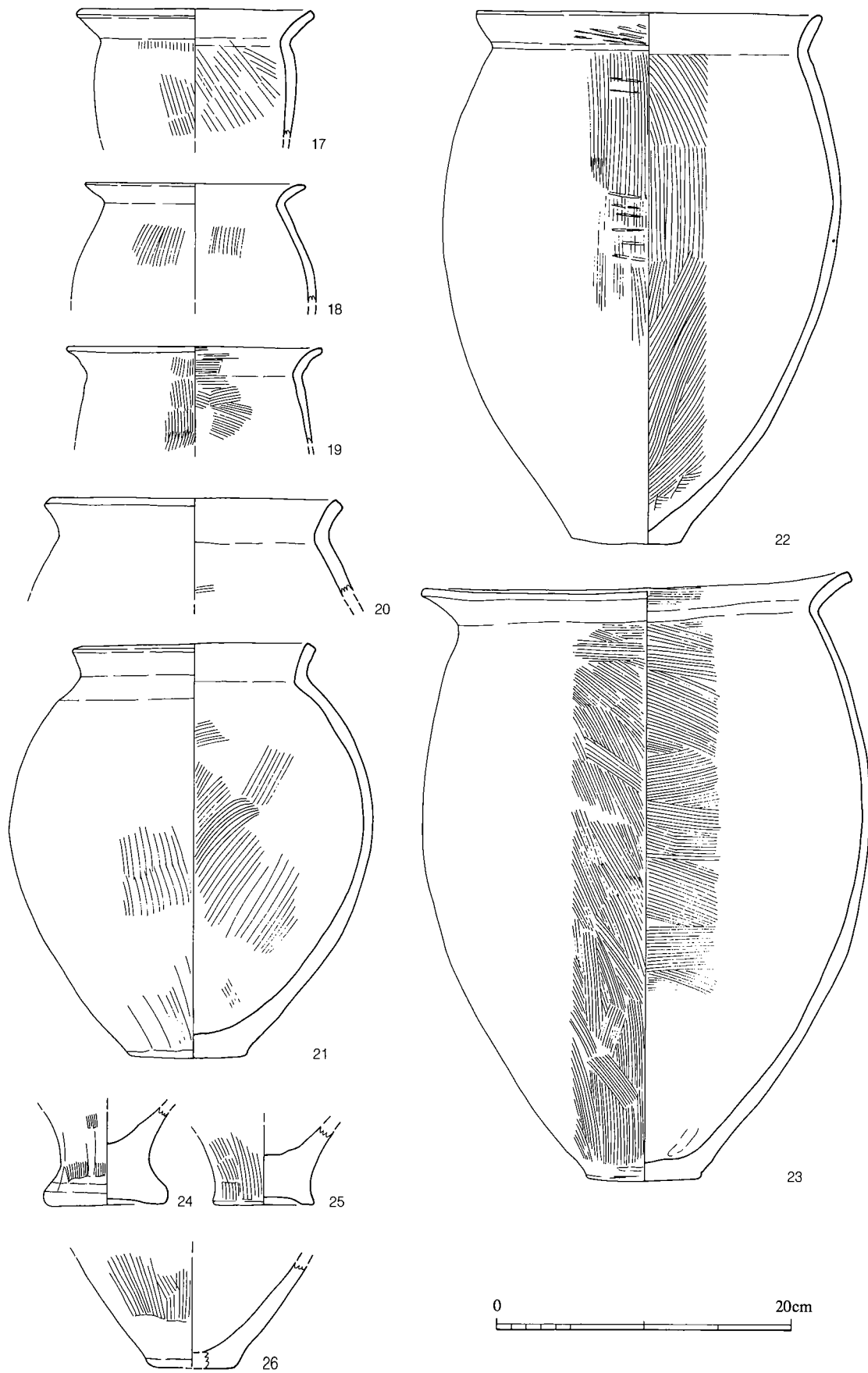
甕（11～26） 11は口縁部下に一条の沈線を巡らす如意形口縁の小型甕または鉢。口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径20.0cm。12もやはり如意形口縁の甕で、口縁部は横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径23.2cm。どちらも弥生時代中期初頭頃の混入品。

13は小型の甕となろうか。肩部が強く内傾し、口縁部は短く外反気味に開く。内外面ハケ目調整を行う。

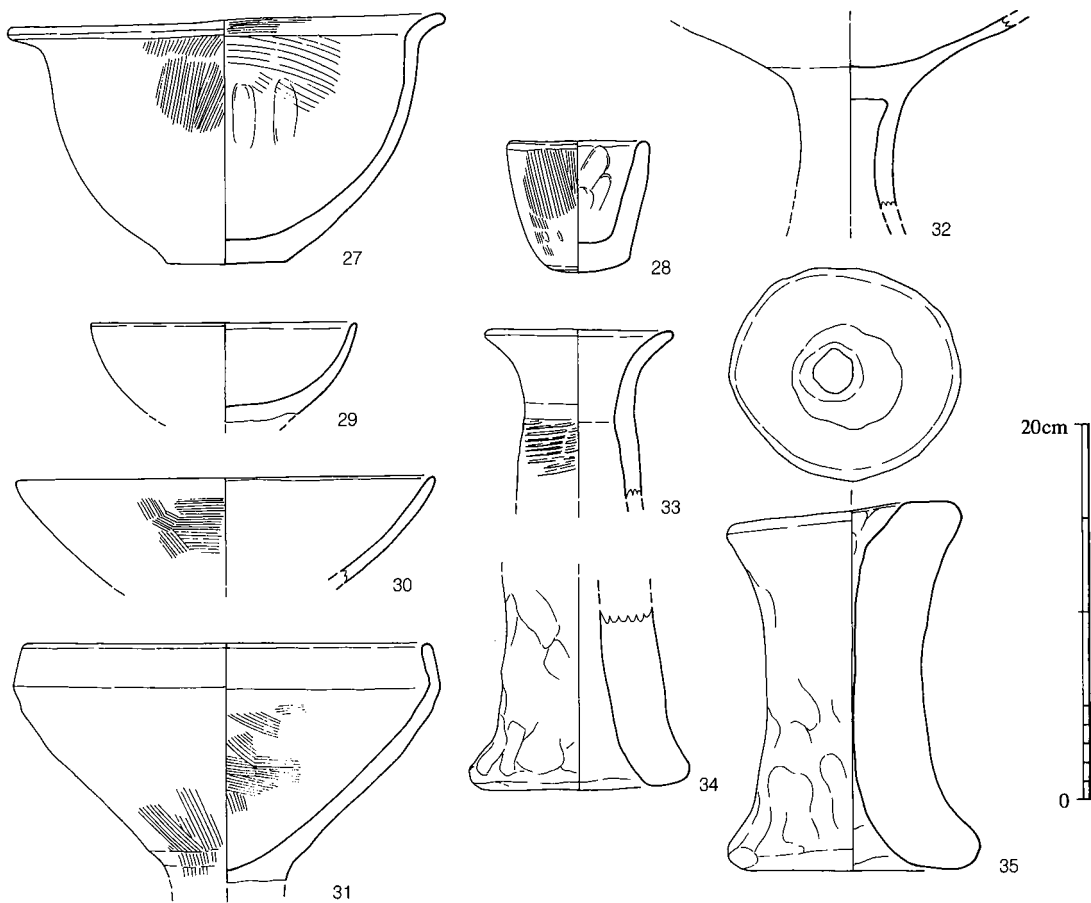
14は肩の張らない胴部から短く外反気味に開く口縁部へと至るもので、端部は四角くおさめる。口縁部は内外面横ナデ、胴部はハケ目調整を行う。口径21.0cm。15も14と同様の器形になる。内面は横ハケ目、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ目調整を行う。口径24.8cm。16は口縁部が直線的に開き、端部が肥厚する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は風化のため調整不明。口径30.0cm。17は肩部の張りが全くなく、口縁部が直線的に大きく開く小型の甕で、口縁部は横ナデ、胴部は内外面とも粗いハケ目調整を行う。口径15.4cm。18は頸部がやや締まり、胴部が丸味を帯びた器形の甕。口縁部は短く大きく開き、端部は尖り気味に仕上げる。口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整を行う。口径15.0cm。19は肩部の張りが無い甕で、口縁部は外反しながらやや長く開き端部は丸くおさめる。内外面ともにハケ目調整を行う。口径17.2cm。20は21と同様の器形になると思われる。口径18.9cm。

21は胴部最大径が中位よりやや上に位置し、底部は平底となる。頸部はやや締まり、口縁部は短くやや開く。口縁部は横ナデ、胴部は縦ハケ目調整を行う。口径16.4cm、底径8.0cm、器高28.3cm。22はわずかにレンズ状となる底部の甕。胴部最大径は中位よりやや上に位置し、肩はあまり張らず、また口縁部もあまり開かない。端部は丸くおさめる。口縁部は内外面横ナデ調整を行うが、外面に一部タタキ目が残る。胴部は内外面ハケ目調整。口径23.4cm、底径7.6cm、器高36.2cm、胴部最大径27.0cm。23は底部がわずかにレンズ状を呈する甕。口縁部はやや外反して大きく開き、端部を面取りして四角くおさめる。口縁部は横ナデを行うが、内面には横ハケ目が残る。胴部は内外面ハケ目調整。口径29.0cm、底径7.8cm、器高41.8cm、胴部最大径30.2cm。

24は裾が大きく開く柱状の甕底部片。底径8.4cm。弥生時代中期初頭の混入品。25は底部が厚くやや上げ底となる。底径6.8cm。弥生時代中期前半頃の混入品。26は小さな平底の底部片。内面ナデ、外面縦ハケ目調整。底径5.6cm。



第16图 27号竖穴住居跡出土土器実測図② (1/4)



第17図 27号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/4)

鉢 (27・28) 27は口縁部が外反しながら大きく開く鉢。底部は平底となる。内外面ハケ目調整を行うが、内面と外面とではハケの工具が異なる。口径23cm、底径6.3cm、器高13.3cm。28は体部に深みのある小型の鉢で、胴部は直線的に伸び、あまり開かない。底部はレンズ状となり不安定である。器壁が非常に厚く全体的に粗雑である。内面指ナデ、外面縦ハケ目調整。口径7.5cm、底径4.5cm、器高7.0cm。

高坏 (29~32) 29は鉢形の坏部で、脚部は剥離する。器表の風化が著しく調整不明。口径14.0cm。30は直線的に開く高坏の坏部。外面にハケ目が認められる。口径21.6cm。31もやはり高坏の坏部。下方は直線的に開き、口縁部は弱く屈曲し、内傾しながら伸びる。内外面にハケ目が観察される。口径22.4cm。32は坏部下半から柱部にかけての破片。全体的に風化が著しく調整不明。柱部径4.8cm。

器台 (33) 33は上部が外反しながら短く大きく開く器台。中位外面にはタタキ目が残る。上部径10.0cm。

支脚 (34・35) 34・35はどちらも器壁が非常に厚い支脚で、全面指による整形を行う。34は最大径11.6cm。35の円孔は中心からはずれている。上部径12.3cm、下部径13.3cm、器高19.5cm。

上記の土器は6の壺や11・12・24・25の甕といった弥生時代中期の明らかな混入品を除けば比較的良好な一括資料である。弥生時代後期中葉に比定できる。

53号竪穴住居跡（図版6、第18図）

遺構の最も集中する調査区中央に位置する竪穴住居跡である。46～48・50・51号竪穴住居跡に切られ、54号竪穴住居跡、101号土坑を切っている。遺存する部分から判断すれば、平面形は東西に長い楕円形プランとなり、規模は長軸5.3m、短軸3.8m程度になるものと思われる。深さは25cmを測る。

主柱穴はP 1のみ検出したが、他のものは主柱穴と判断するまでには至らなかった。貼り床は全面に行っており、下層では幾つかの小ピットの他、南西側で不整形の落ち込みを検出した。また南壁際で不整形の土坑を検出しており、当住居跡に伴う可能性もある。規模は長軸110cm、短軸100cm、深さ20cmを測り、土坑内からは3個の河原石が出土している。

出土土器（第19図）

壺（1） 1は外反しながら大きく開き、端部が素口縁となる壺口縁部片。器表の風化が著しく調整不明。

甕（2～6） 2・3は未発達な逆L字状口縁で、上面がやや丸味を帯びる。4もやはり未発達な逆L字状口縁であり胴部の口縁部付近は直立する。上面はほぼ水平に伸びる。口径22.0cm。内外面風化のため調整不明。5も未発達な逆L字状口縁だが、4と異なり口縁部上面が内傾する。内面の稜は鋭くシャープな作りとなる。胴部の口縁部付近はやや内傾する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。風化のため調整は不明。口径28.0cm。

6は底部の器壁が厚く、またやや上げ底になる。裾部はほとんど開かず垂直に近く、端部はシャープに仕上げられる。調整は風化のため不明。底径7.1cm。

台付鉢（7） 7は裾部が短く開く脚部で、台付鉢となろうか。裾端部は丸くおさめられる。内外面ともにナデ調整を行う。裾部径10.4cm。

出土土器はどれも弥生時代中期前半に比定できるものである。

54号竪穴住居跡（図版6、第18図）

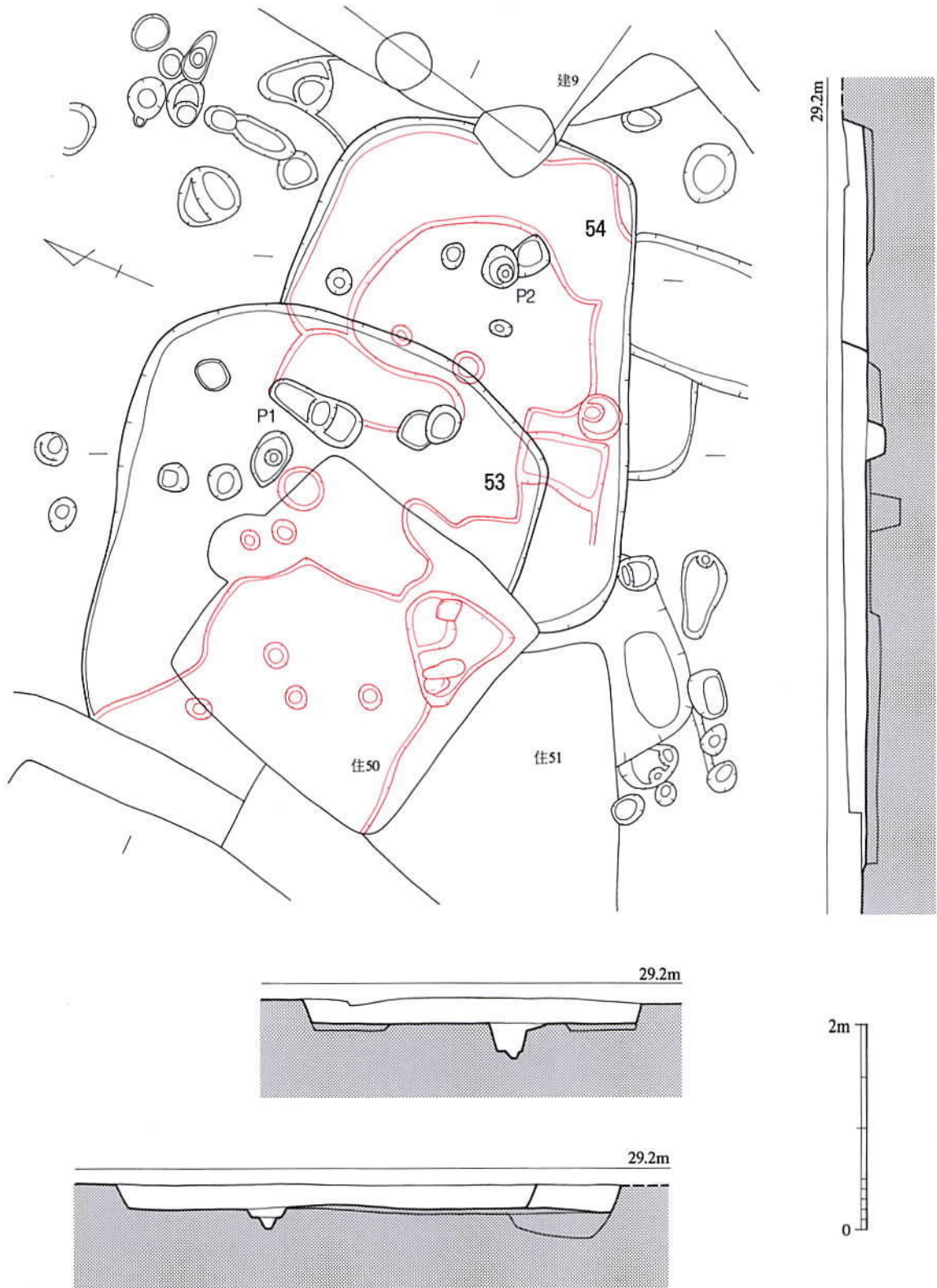
53号竪穴住居跡の南東側に位置する竪穴住居跡である。50・53号竪穴住居跡、9号掘立柱建物跡に切られ、56号竪穴住居跡、106・120号土坑を切っている。遺存する部分から判断すれば、長軸5.0m、短軸3.6m程度になるだろう。深さ25cmを測る。主柱穴はP 2のみ検出したが、他のものは主柱穴と判断するまでには至らなかった。貼り床は全面に行われており、下層では幾つかの小ピットの他、不整形の落ち込みを確認した。落ち込みは壁際に沿って巡っている。また南壁際で土坑状の長方形プランの落ち込みを検出しており、これが壁際土坑になる可能性もある。長軸90cm、短軸50cm、深さ25cmを測る。

出土遺物には図示した土器の他、56の安山岩製敲石、150の挟入片刃石斧、171の石包丁が出土している。

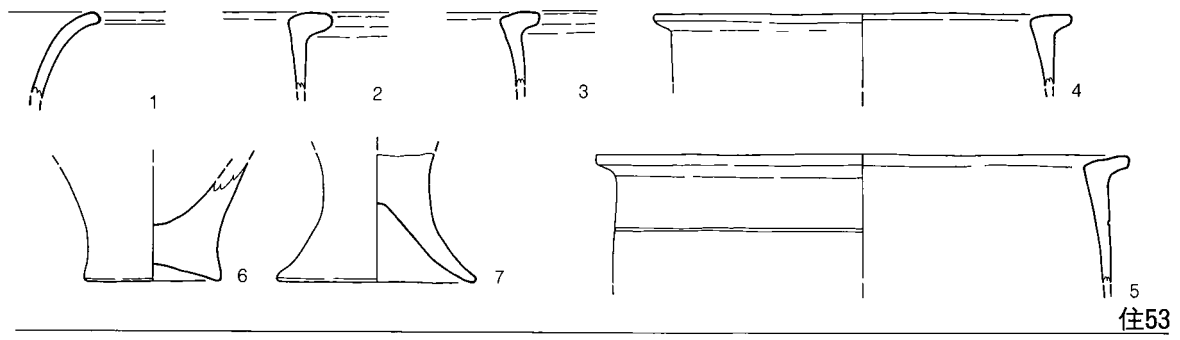
出土土器（第19図）

甕（8～14） 8は小さな三角口縁となる甕口縁部片で、上面は外傾する。胴部上半は垂直に立ち上がる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。9もやはり上面が外傾する三角口縁。10の口縁端部外面は稜がなく丸く仕上げられる。また内面を強くナデており弱く突出する。

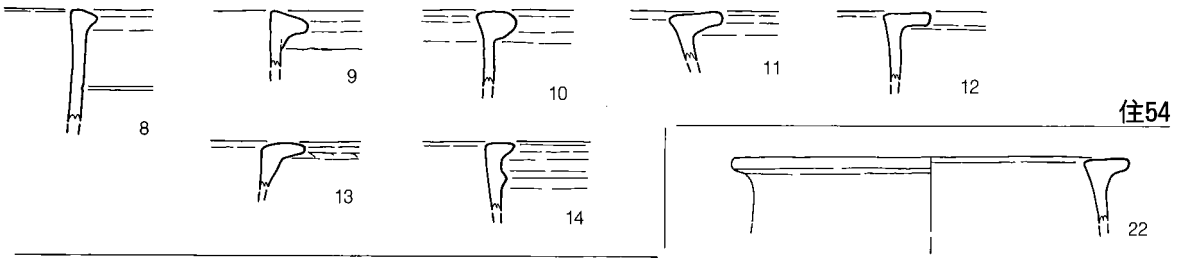
11は口縁部付近がやや内傾する逆L字状口縁の甕で、内面も弱く突出する。上面は水平に近い。



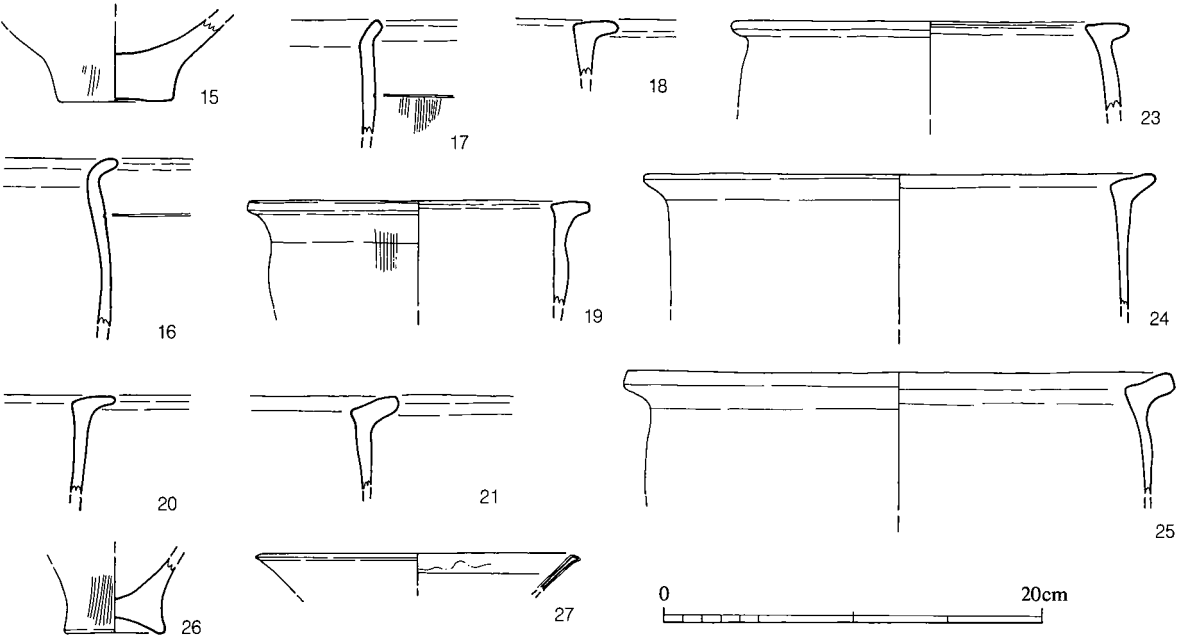
第18図 53・54号竖穴住居跡実測図 (1/60)



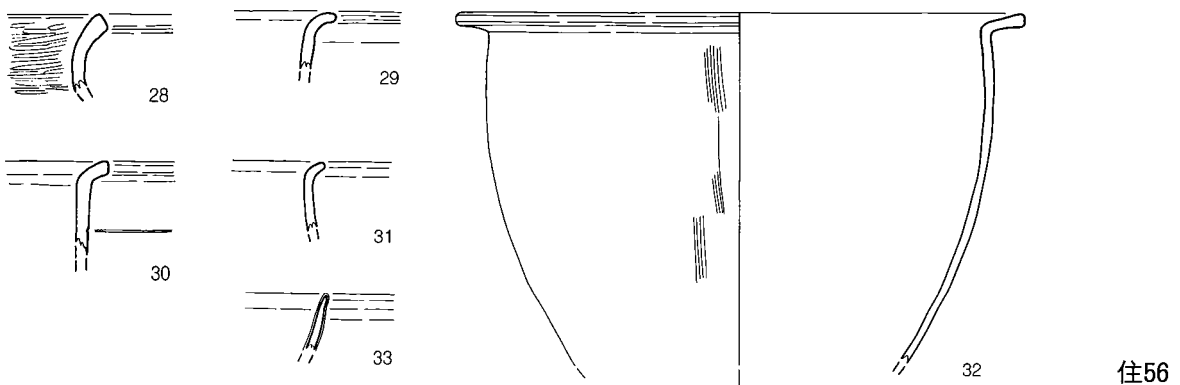
住53



住54



住55



住56

第19图 53~56号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)

12もやはり逆L字状口縁だが外端部を面取り整形し四角く仕上げる。胴部上半は直立する。13は胴部上半がやや開くようであり、壺もしくは鉢の口縁部である可能性もある。短い逆L字状口縁となり、上面は丸味を帯びて水平に伸びる。内面への突出は認められない。14は小さな三角口縁となり、外面の口縁直下に三角突帯を一条巡らせている。上面はほぼ水平になる。口縁部の傾きは垂直に近い。

出土土器には中期初頭的要素のものと前半的要素のものがあるが、当住居跡は弥生時代中期前半に位置付けて良いだろう。

55号竪穴住居跡（図版6、第20図）

調査区中央に位置し、54号竪穴住居跡の東隣に位置する円形プランの竪穴住居跡である。56号竪穴住居跡を切り、26号溝、7号掘立柱建物跡に切られる。径6.9m～7.3mと比較的大型の部類に入る。深さは10～15cmを測る。床面積は40.2㎡。床面のはほぼ中央で、軸を東西にとり、長軸240cm、短軸100cmを測る楕円形の中央土坑を検出した。深さは中央が最も深く40cmを測る。

床面ではP1～P8の支柱穴を確認した。いずれも径60～70cm、深さ60cm前後を測り、非常にしっかりしている。これらの支柱穴のうち、P1・P3～P5で径25cm前後の柱痕を確認する事ができた。またこれら以外にも柱穴底面で柱痕状の窪み或いはテラスを複数有したのものがあり、数回にわたる建て替えが行われたようである。さらに中央土坑の両端にはP9・P10としたピット状の窪みが認められ、これらは棟持柱の柱穴として機能していたものと考えられる。

床面下層からは不整形の浅い掘り込みが検出された。ちょうど支柱穴をとりまくように住居跡平面形に沿って掘削されており、途切れた所もあるがほぼ全周する。深さは10～20cmを測る。

出土遺物は図示した土器の他、25の土製紡錘車、36・49の砥石、79の石鏃、117の打製石斧、130・136の磨製石剣、142・143の柱状片刃石斧、175の石包丁が出土している。

出土土器（第19図）

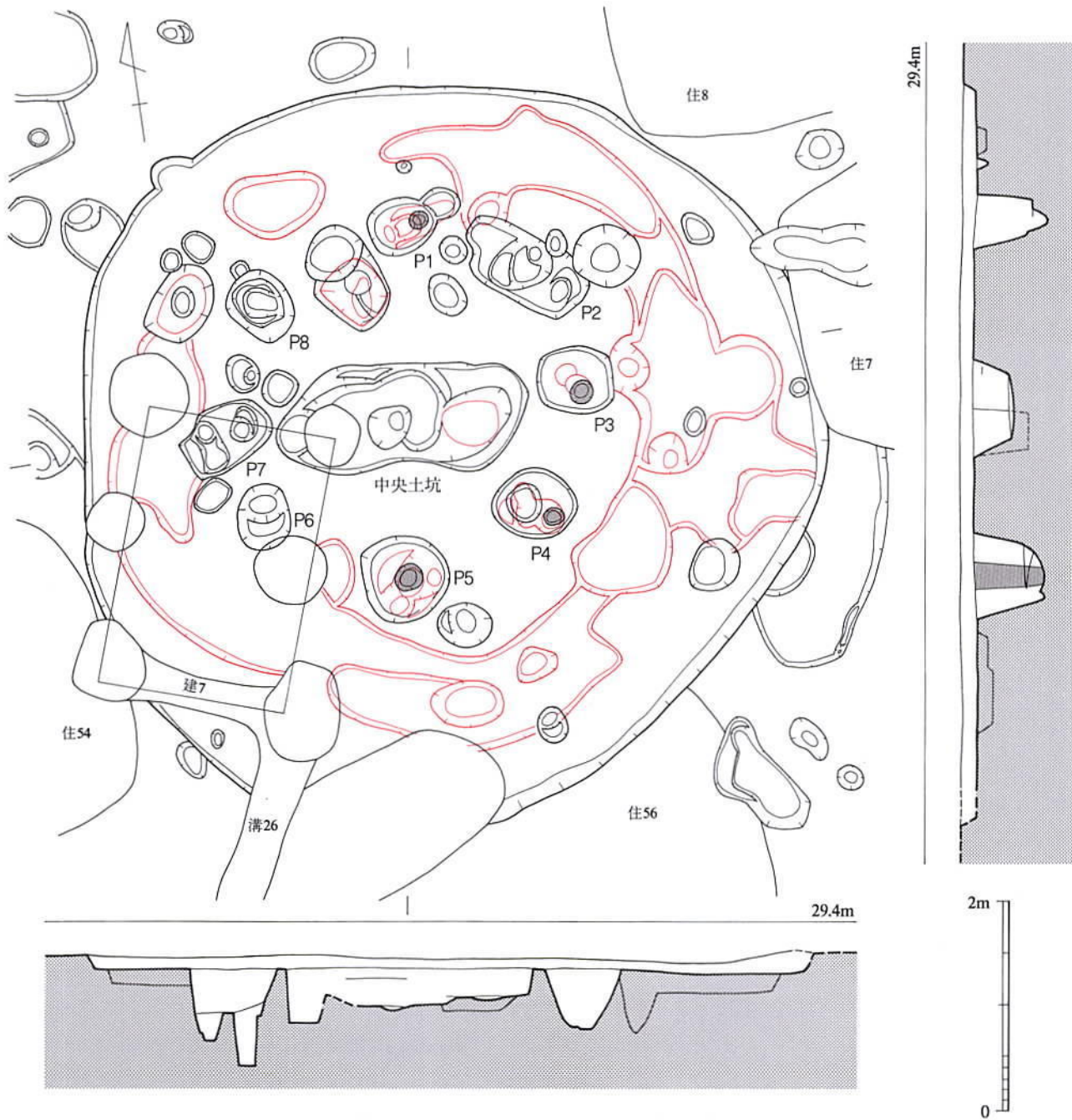
壺（15） 15は壺の底部片であろう。底部は非常に厚く、垂直に立ち上がる。底面は上げ底にならず、ほぼ全面で接地する。外面の一部にハケ目が観察される。底径6.0cm。

甕（16～26） 16・17は如意形口縁となる甕。どちらも胴部はほとんど内傾せず垂直に近く立ち上がり、口縁部は緩く短く外反する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。17は口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ調整を行っており、風化が著しく調整が不明な16も同様であっただろう。17は貼床下層からの出土。

18～25は短い逆L字状口縁となる甕。19・22・23のように三角形に近いものもある。20・21・24・25は口縁部上面が内傾する。21は口縁内側がやや伸びる。23は胴部上半が内傾し、口縁内部が内側へとわずかに伸びる。25もやはり胴部上半が内傾する。口縁部は強いナデ整形を加えており、断面四角形となる。全体的に風化が著しく調整不明。口径は、19が18.0cm、22が21.0cm、23が21.4cm、24が27.4cm、25が29.2cm。

26は底面がやや上げ底になる甕底部片。裾はあまり開かず、端部はシャープに仕上げる。内面及び底面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。底径5.2cm。

白磁碗（27） 27は口縁部が外側に鋭く短くのびる白磁碗の口縁部片。内側に一条の沈線を巡らす。口径17.0cm。混入品。



第20図 55号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土土器には弥生時代中期初頭の要素も見られるものの、おおよそ中期前半に比定できる。

56号竪穴住居跡第 (図版6、第21図)

55号竪穴住居跡の南西に位置する円形プランの竪穴住居跡である。120号土坑を切り、55号竪穴住居跡、26号溝、95号土坑に切られている。平面形は東西にやや長く、長軸6.8m、短軸5.9mを測る。深さは10cm程度しか遺存していない。床面のほぼ中央で方形に近いプランの中央土坑を検出した。規模は長軸75cm、短軸70cm、深さ40cmを測る。床面積は32.4㎡。

床面ではP1～P9の支柱穴を確認した。径40cm前後、深さ30cm前後を測る。これらのうちP2

～P 8で柱痕を確認する事ができた。ただしこれらが全て同時期に機能していたとは考え難く、恐らく建て替えによる主柱穴の配置替えによるものであろう。従って、本来は主柱は6本程度の数だったのではないと思われる。また、中央土坑の両側に位置するP10・P11は棟持柱穴として機能していたものと思われる。

床面下層では、主に西半部で浅い掘り込み、小ピットを検出した。掘り込みは壁に沿って掘削されており、深さ10cm前後のものである。

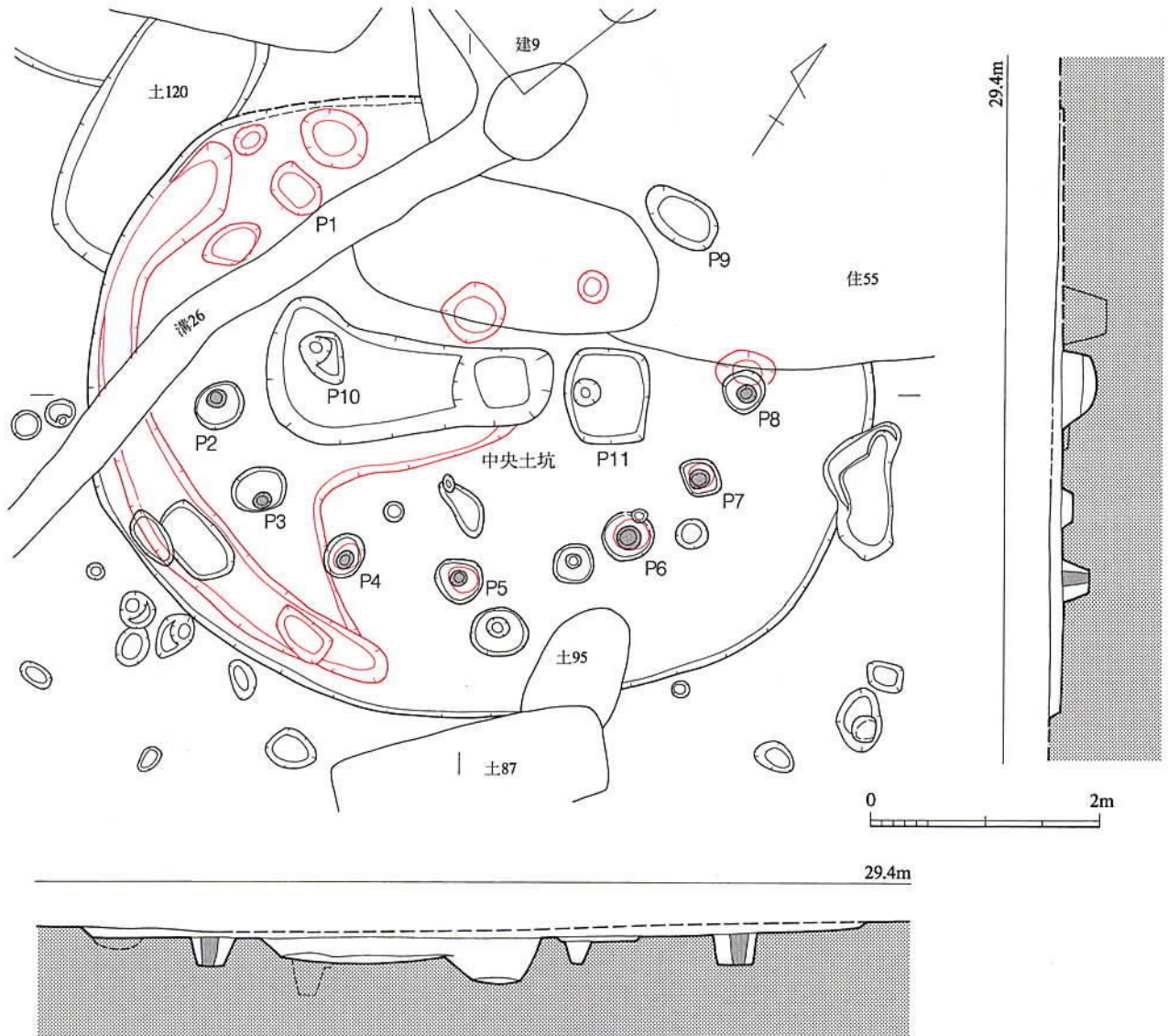
上記の55・56号竪穴住居跡は平面形、規模、柱穴の配置において類似点が幾つか指摘でき、位置からしても強い関連性をもっていたものと推察される。

出土遺物には図示した土器の他、31の砥石が出土している。

出土土器（図版44、第19図）

壺（28） 28は短く直立する頸部から、わずかに外反する口縁部へと至る壺。端部を面取りし四角くおさめる。内面にはヘラミガキが観察されるが外面は風化が著しく調整不明。

甕（29～32） いずれも如意形口縁の甕。31・32は胴部上方が内傾気味に立ち上がる。32は如意形



第21図 56号竪穴住居跡実測図（1/60）

というよりもくの字形に近く、強く外側に屈曲して内面に稜をもつ。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。口径30.0cm。31・32は中央土坑からの出土。

青磁碗 (33) 33は青磁碗の口縁部片。端部はシャープで釉は薄い。釉色はやや黄色がかった緑色に発色する。混入品。

出土土器のうち、32は新しい要素をもったものとして捉えられるが、その他のものに関しては弥生時代中期初頭としてよいだろう。

60号竪穴住居跡 (図版7、第22図)

調査区中央南端に位置する竪穴住居跡で、3号溝に切られる。南端が調査区外へと続くため全体の形態は不明だが、恐らく楕円形プランとなるであろう。短軸3.5m、深さ25~30cmを測る。床面を精査したが、支柱穴になりそうなものは検出できなかった。また炉跡等も確認できなかった。従って竪穴住居跡ではなかった可能性もある。

出土土器 (図版44、第23図)

壺 (1) 1は未発達な鋤先口縁となる壺。頸部は外反しながら大きく開く。口縁部上面はほぼ水平に伸びる。器表の風化が著しく調整不明だが、内面に指整形の痕跡が認められる。口径27.4cm。

甕 (2~8) 2は如意形というより屈折口縁に近い甕口縁部小片。口縁部付近は直立する。風化が著しく調整不明。

3は三角口縁の甕で、上面は水平に仕上げられる。口縁部付近は内傾する。風化が著しく調整不明。口径26.8cm。

4~8は短い逆L字状口縁の甕。4・8は胴部上半が垂直近く立ち上がり口縁上面が水平に近いが、それ以外は胴部上半、口縁部上面ともにやや内傾する。いずれも風化が著しく調整は不明。口径は4が30.0cm、5が30.8cm、6が32.8cm。

器台 (9・10) 9は上方、下方ともに径が変わらず上下の区別が付き難い器台。内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。端部径9.4cm、中央部径5.8cm。10も9と同様の器形になるだろう。端部は器壁が薄く、丸く仕上げられる。器表の風化が著しく調整不明。端部径8.4cm、中央部径5.8cm。

支脚 (11) 11は端部がほとんど開かない柱状の支脚。器壁は非常に厚く、内外面指ナデ・指オサエ整形を行う。径7.3~8.0cm。

出土土器は全て弥生時代中期前半に比定できる。

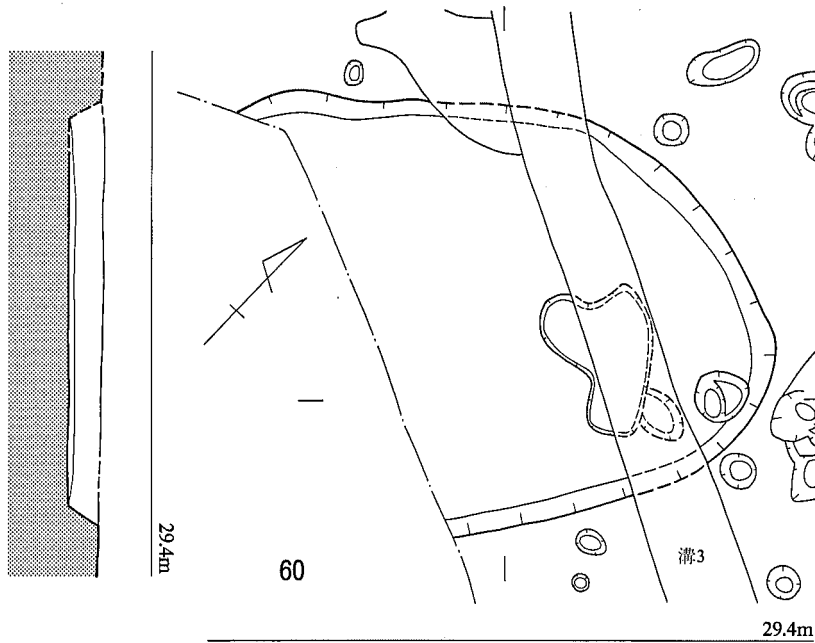
61号竪穴住居跡 (図版8、第22図)

調査区中央東西寄りに位置する竪穴住居跡である。1号竪穴住居跡、1号溝と重複しており、これらよりも古い。東側を1号竪穴住居跡に大きく切られているものの、恐らく楕円形プランの住居跡となるだろう。規模は推定で長軸4.2m、短軸2.6mを測り、比較的小型の部類に属する。深さは15~20cmを測る。

床面の中央よりやや北側に寄った位置で炉跡を検出した。径60cmの範囲で焼土の広がりが見られたが、掘り込みは検出できなかった。また、床面を精査したものの支柱穴は検出できなかった。

出土土器 (第23図)

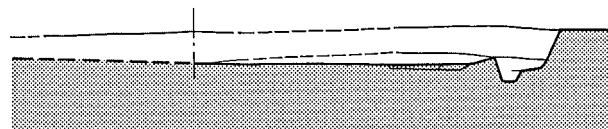
甕 (12) 12は逆L字状口縁の甕。口縁の屈曲部は薄く小さく作られ、端部は鋭い稜をもつ。口縁



部は横ナデ、胴部は内面ナデ、外面縦ハケ目調整。口径27.0cm。

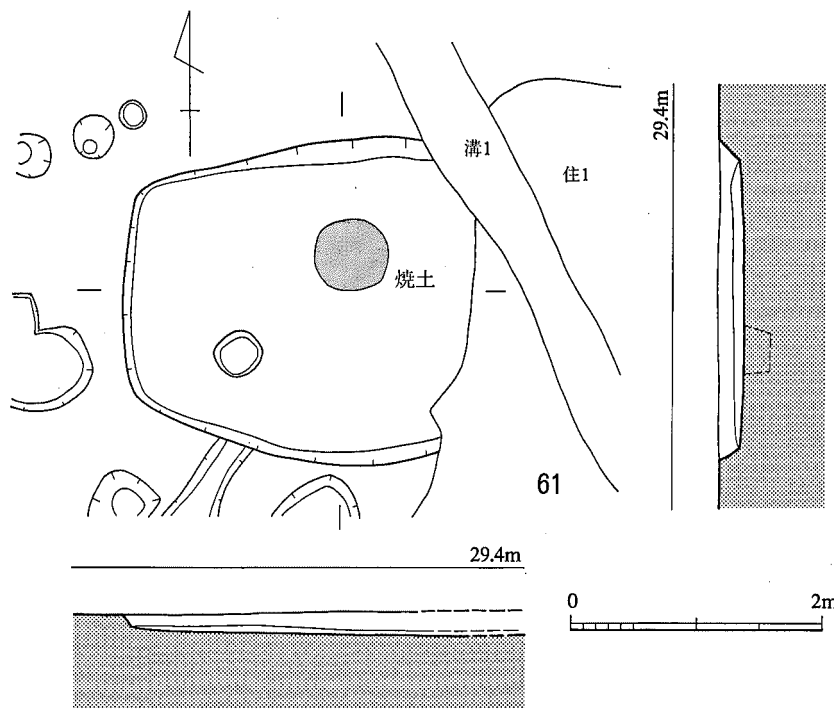
鉢(13) 13は胴部上半が大きく開くので鉢であろう。口縁端部は三角形で上面は水平となる。器表の風化が著しく調整は不明瞭だが、内面に指ナデが一部認められる。口径30.4cm。

遺物の出土量が少なく時期比定は困難だが、弥生時代中期前半頃であろう。



62号竪穴住居跡(図版8、第24図)

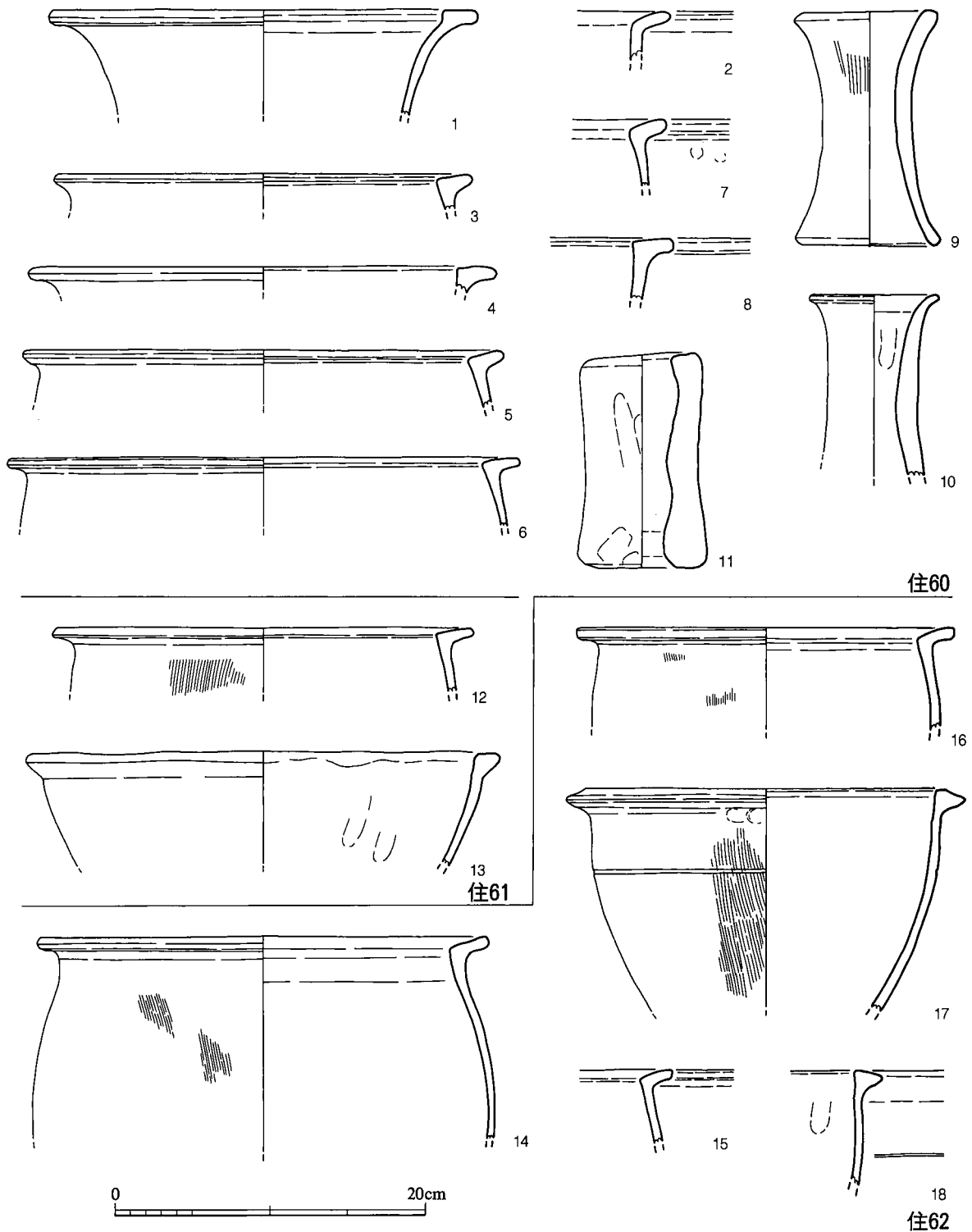
調査区中央西寄りに位置する竪穴住居跡である。63・64号竪穴住居跡を切っており、また1号竪穴住居跡に切られている。半分以上を1号竪穴住居跡に切られているが、恐らく東西に長い楕円形プランの住居跡になるだろう。遺存する部分で短軸3.5m、深さ15cmを測る。西端で浅い円形の掘り込みを確認したが、これが中央土坑になるものと思われる。また床面を精査したが、支柱穴は検出できなかった。



第22図 60・61号竪穴住居跡実測図(1/60)

出土土器(第23図)

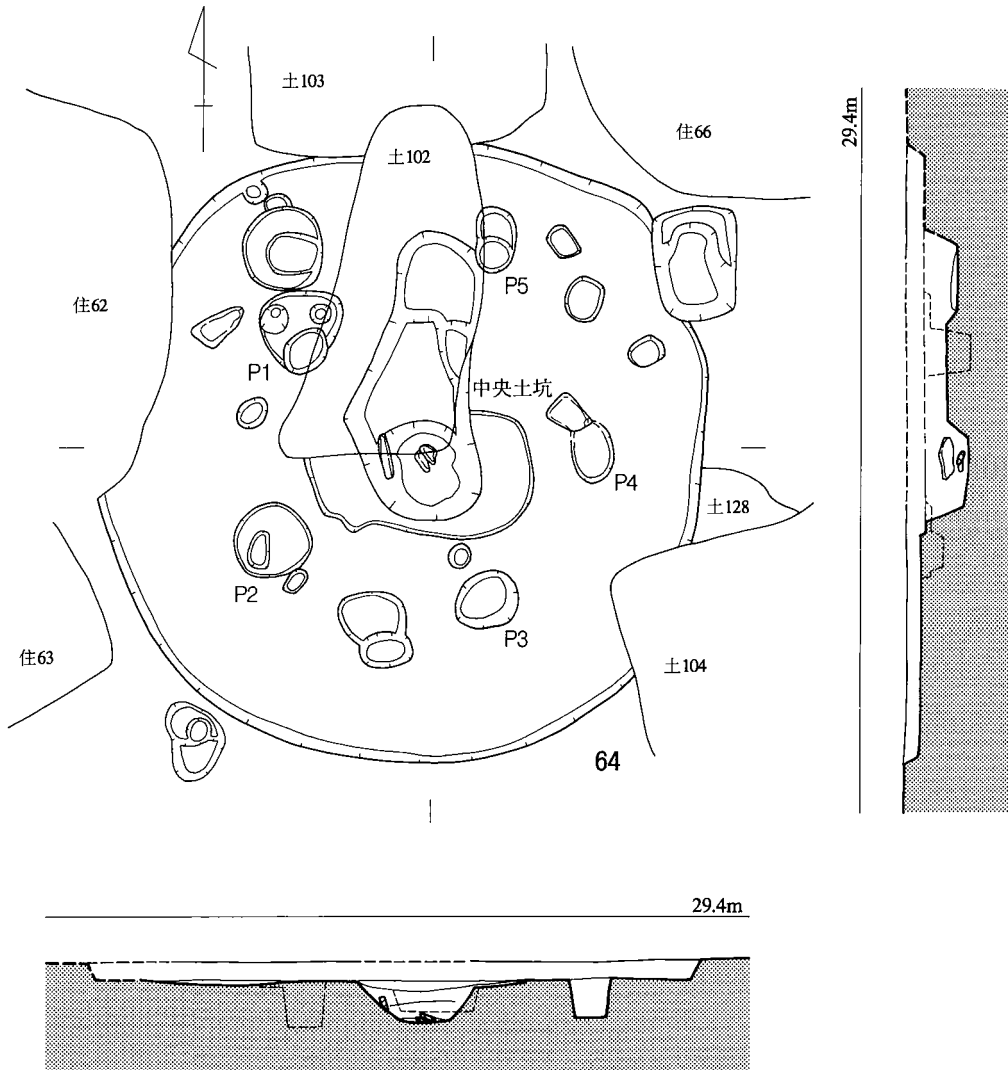
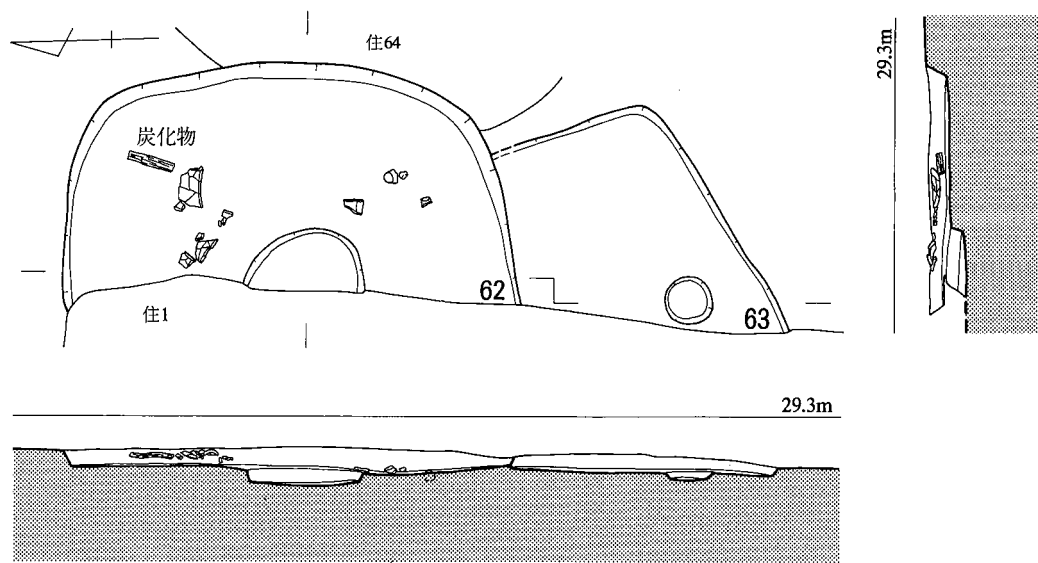
甕(14~18) 14~16は逆L字状口縁となる甕。



第23図 60～62号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

14は胴部上半が内傾し、口縁部近くはやや直立気味に立ち上がる。口縁部は上面が直線的に内傾し、屈曲部は肥厚する。内面の稜は割と明瞭である。口縁部は横ナデ、胴部は内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径29.0cm。15・16は口縁上面がやや丸味を帯びて内傾し、端部は面取り整形する。16は器表の風化が著しいが胴部外面に一部ハケ目が残る。口径24.4cm。

17・18は三角口縁の甕で、どちらも上面は外傾する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。17は



第24図 62~64号竖穴住居跡実測図 (1/60)

口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。口径25.6cm。竪穴住居跡の時期は弥生時代中期前半に比定してよいだろう。

63号竪穴住居跡（図版8、第24図）

62号竪穴住居跡の南側に位置する住居跡である。1・62号竪穴住居跡に大きく切られており、全体の形状は不明である。従って、竪穴住居跡ではなく浅い土坑状の遺構であった可能性も考えられる。深さは北側で10cm、西側で15cmを測る。床面南側でピットを1個検出した。径40cm、深さ5cmを測る。非常に浅く、主柱穴とはなり得ない。出土遺物も非常に少なく、図示できるものはない。

64号竪穴住居跡（図版8、第24図）

62号竪穴住居跡の東側に位置する円形プランの竪穴住居跡である。ほぼ正円形をなし、径は4.8m～4.9m、深さは12cm～15cmを測る。床面積は19.6㎡。62号竪穴住居跡、102～104号土坑に切られ、128号土坑を切る。床面の中央から北側にかけて、不整楕円形の中央土坑を検出した。住居中心にあたる土坑南側がもっとも深く、深さ35cmを測る。覆土には焼土を含んでおり、炉として機能していたことが判る。これから北に向かって不整形に伸びる掘り込みは、恐らく灰を掻き出したものであろう。この落ち込みの深さは南側で20cm、北側で25cmを測り、北側がピット状に深くなっている。

主柱穴はP1～P5を検出している。配置にややばらつきがあり、径も30～60cm、深さも20～35cmと不規則となる。またこの住居に関しては棟持柱をもたない構造だったようで、中央土坑付近を精査したがそれらしき柱穴は見当たらなかった。

出土遺物には図示した土器の他、129の磨製石剣が出土している。

出土土器（第26図）

壺（1） 1は平底となる壺底部。屈曲部は稜をもたず、底部から胴部へとなだらかに移行する。風化が著しく内外面調整不明。底径8.4cm。中央土坑出土。

甕（2～6） 2は如意形口縁となるやや大型の甕。胴部は直立し、口縁部は短く緩く外反する。口縁端部は丸くおさめ、外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らせる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。口径33.2cm。

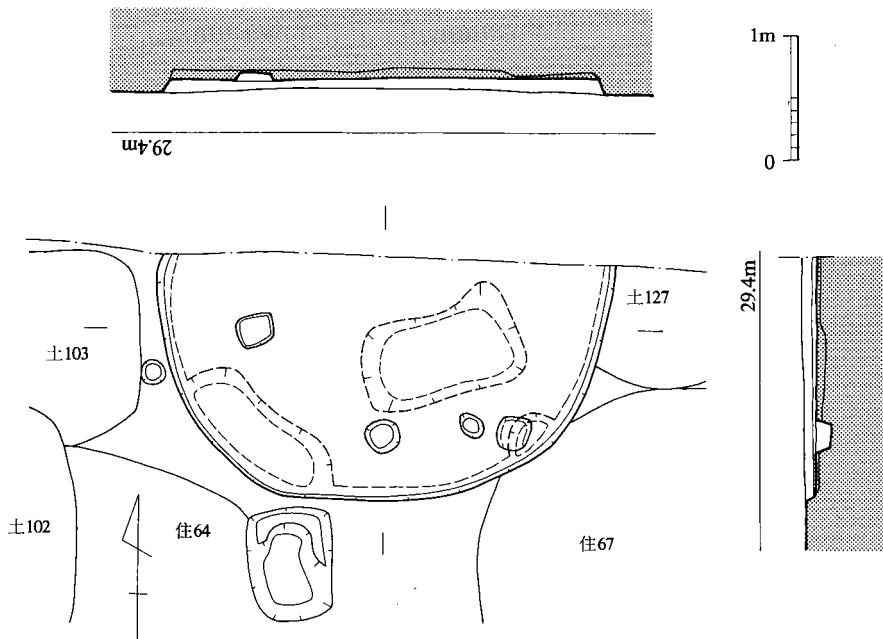
3は胴部が直立し口縁部が小さな三角口縁となる甕。風化が著しく調整不明。4・5は短い逆L字状口縁の甕。どちらも胴部はやや内傾し、口縁上面はほぼ水平になる。器表の風化が著しく調整不明。4は口径27.0cm、5は口径33.0cm。5は中央土坑出土。

鉢（6） 6は胴部が開くことから鉢とした。口縁部は大きな三角口縁で上面はほぼ水平になる。口縁内側はわずかに突出している。内外面とも調整不明。口径29cm。

出土土器には1～3のように弥生時代中期初頭に比定できるものと4～6のように中期前半に比定できるものがある。竪穴住居の平面形も勘案し、この住居の時期は弥生時代中期前半でも初頭に近い時期と考えておきたい。

66号竪穴住居跡（図版9、第25図）

66号竪穴住居跡の北東側に位置する竪穴住居跡である。67号竪穴住居跡、127号土坑と重複しており、これらよりも新しい。北側が大きく調査区外へと続いており、平面形が果たして円形になる



第25図 66号竪穴住居跡実測図 (1/60)

のか楕円形になるのかは判断できない。しかし楕円形住居の67号竪穴住居跡を切っ
て営まれていること
から、時期的に後出
する楕円形となる可
能性が高い。確認し
た範囲で言えば、東
西3.6m、南北1.9m
を測る。深さは5~10cm
を測る。

床面上では幾つか
のピットを検出した
が、明確に支柱穴と
断定できるものはな

い。また全面に貼り床を行っており、その下層では南東および中央付近で不整形の掘り込みを検出した。

出土遺物には図示した土器の他、85の石鏃、貼床下層から135の磨製石剣が出土している。

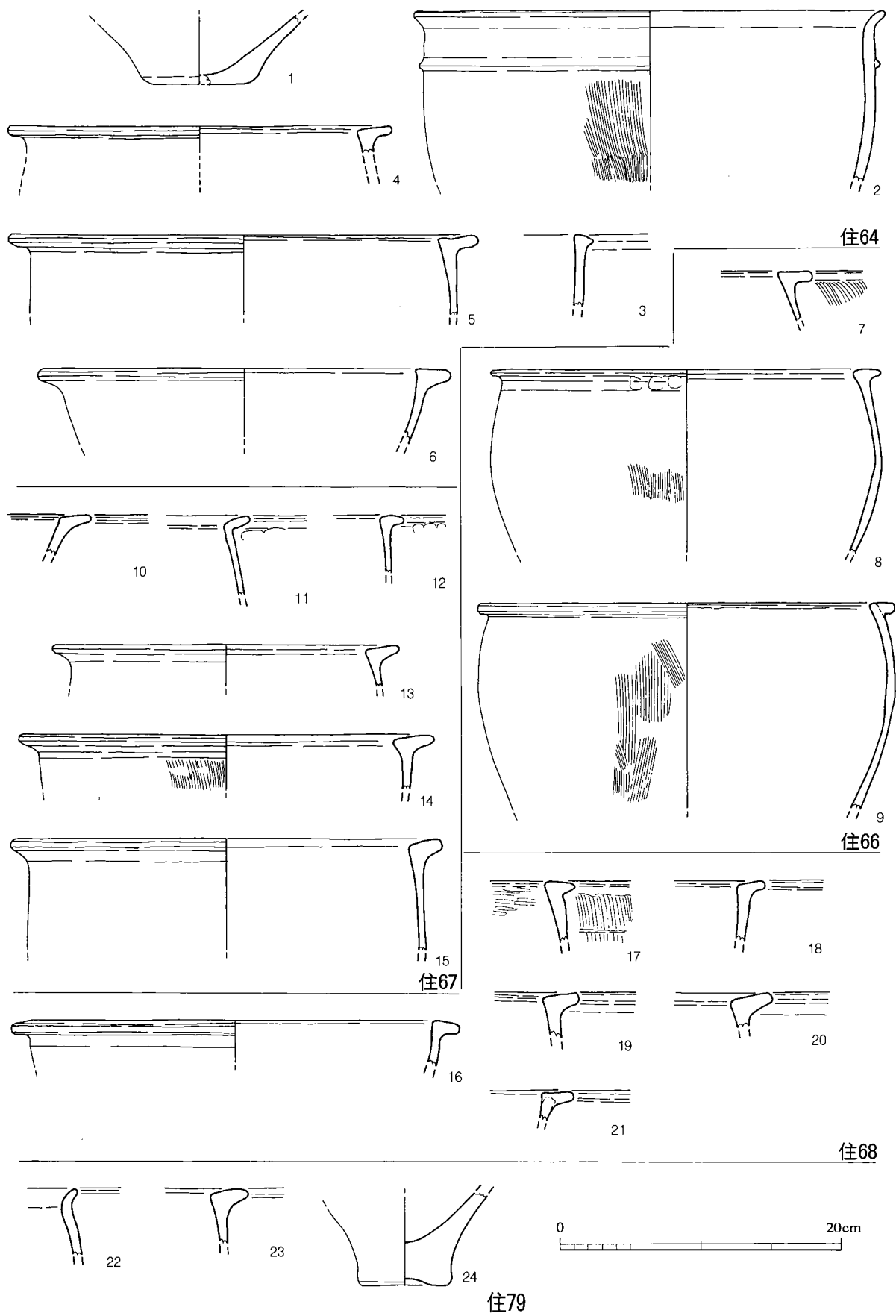
出土土器 (第26図)

甕 (7~9) 7は逆L字形口縁の甕で、口縁部付近が強く内傾する。8・9はどちらも良く似た器形の甕である。胴部は最大径が上方にあり、口縁部が締まるために全体的に丸味を帯びた器形となる。口縁部は小さな三角口縁となり、上面は水平に仕上げられる。器壁は薄い。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。8は口縁外端部がやや尖り、屈曲部外面に指圧痕を残す。口径27.4cm、9は口縁外端部が丸い。口径29.4cm。ともに床面直上から出土。

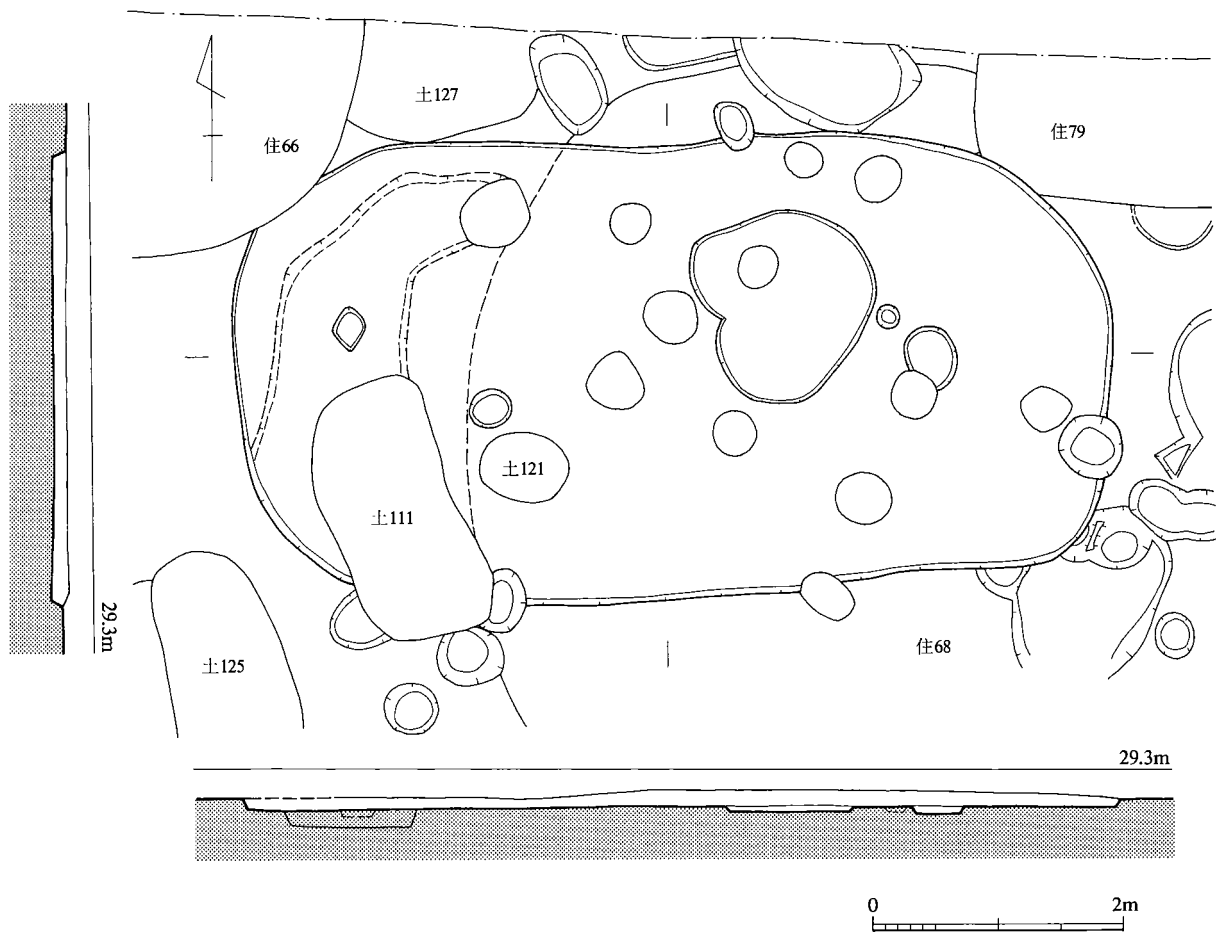
出土土器が少なく時期比定が困難だが、重複関係も考えて弥生時代中期前半として良いだろう。

67号竪穴住居跡 (図版9、第27図)

66号竪穴住居跡の南東側に位置する竪穴住居跡である。68・79号竪穴住居跡を切り、66号竪穴住居跡、111・121号土坑に切られる。東西に長い楕円形で長軸6.9m、短軸3.7mを測り、他の楕円形住居跡と比較してもかなり長軸の比率が長いものとなる。深さは西側で10cm、中央で15cm、東側で10cmを測る。床面積は23.0㎡。床面上は精査したが、明確な中央土坑は検出されなかった。強いてあげれば、中央やや北東寄りに位置する不整形の掘り込みがこれに相当するだろうか。長軸150cm、短軸120cm、深さ5cmを測り、かなり浅い。また幾つかの柱穴を確認したが支柱穴と明確に判断できるものはない。床面下層では西側で不整形の落ち込みを検出したが、中央から東側にかけては68号竪穴住居跡と重複しており検出できなかった。



第26图 64·66~68·79号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第27図 67号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土土器 (第26図)

壺 (10) 10は口縁部が短く水平に伸びる壺。内外面横ナデ調整を行う。

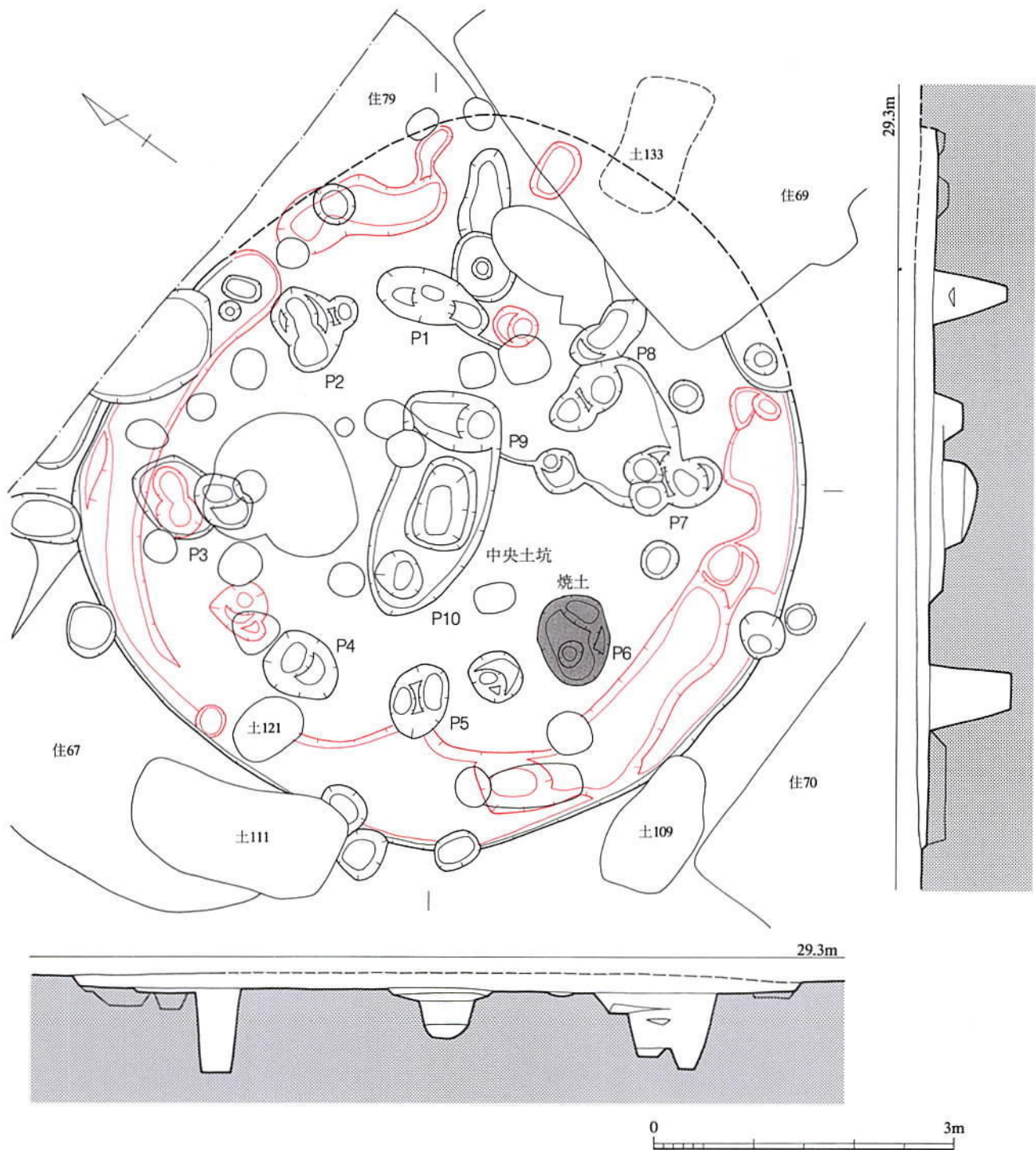
甕 (11~15) 11は如意形というよりもく字形に近く屈曲する口縁となる甕。胴部はやや内傾する。器壁が薄く、小型の器形になると思われる。調整は風化が著しく不明。

12は小さな三角口縁の甕。胴部は直立し、口縁部上面は丸味を帯びて水平に伸びる。器表の風化が著しく調整は不明。13~15は逆L字状口縁となる甕。いずれも胴部上半はやや内傾し、口縁部上面も直線的に内傾する。14は口縁内側がやや突出する。14には胴部外面に縦ハケ目が観察できるものの、他は風化が著しく調整不明。口径は13が24.4cm、14が29.2cm、15が30.4cm。

出土土器は12のように弥生時代中期初頭に近い要素をもつものもあるが、それ以外は弥生時代中期前半に比定できるであろう。

68号竪穴住居跡 (図版9、第28図)

67号竪穴住居跡のすぐ東側に位置し、これと重複する竪穴住居跡である。67・69・79号竪穴住居跡、109・111号土坑に切られているがほぼ全体の形状は復元でき、径6.7~7.0m前後の円形プランとなる。深さは南西側で10cm、中央で15cm、北東側で20cmを測る。床面積は39.6㎡。床面のほぼ中央で、長軸を南西—北東にとる中央土坑を検出した。長軸235cm、短軸100cmを測る。中央付近は長



第28図 68号竪穴住居跡実測図(1/60)

軸95cm、短軸60cmの大きさでさらに土坑状に深くなっており、深さ50cmを測る。両端部はP9・P10としたピットが接しており、この2つのピットは棟持柱穴として機能したものであろう。

主柱穴はP1～P8を検出した。径50～90cm、深さ70～80cmと比較的規模が大きくしっかりしたものであり、配置も規則的である。これらの主柱穴の底部の形状から、何回かの建て替えが行われたことが窺える。またP6の覆土には焼土を多く含んでいた。

床面下層では、壁に沿って浅い不整形の掘り込みを検出した。これは69号竪穴住居跡に切られた

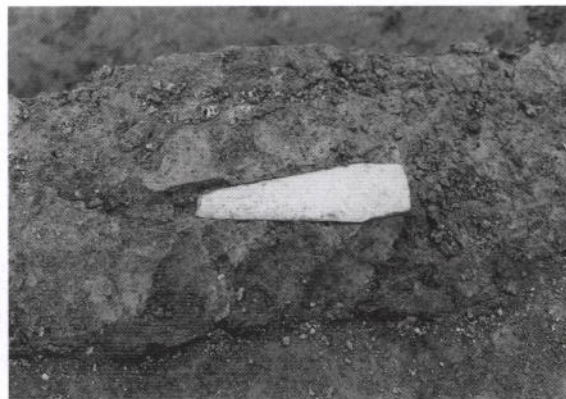
東側を除いて途切れながらもほぼ全周する。
深さは5~15cmを測る。

出土遺物は図示した土器の他、床面直上から139の磨製石剣が出土している。

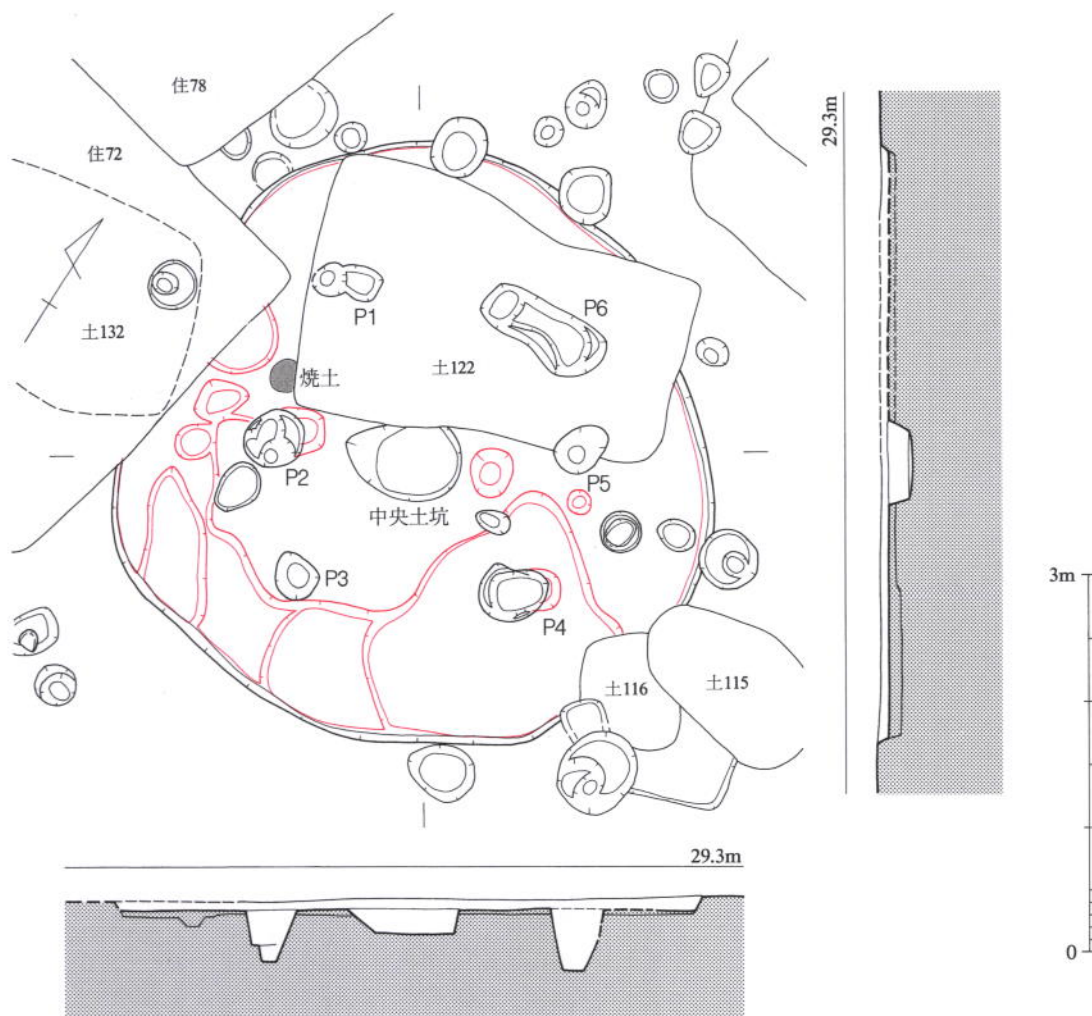
出土土器（第26図）

甕（16~21） 16・17は三角口縁の甕である。17は口縁部付近は内傾気味に立ち上がり、口縁部上面はやや外傾する。内端は丸く、外端部は比較的シャープにおさめられる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。調整は内面に横ヘラミガキが行われている。口縁部上面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ目。

18~21は短い逆L字状口縁となる甕。18は胴部上半が直立し、口縁部上面は内傾する。19・20は胴部上半が内傾し口縁部上面が直線的に内傾する。21は胴部上半がやや外傾しており、鉢となるかもしれない。上面は直線的に水平に伸びる。



石剣出土状態



第29図 73号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土土器はおおよそ弥生時代中期前半に比定できる。

73号竪穴住居跡（図版36、第29図）

調査区中央付近で、55号竪穴住居跡の北西側、68号竪穴住居跡の南東側に位置する。72号竪穴住居跡、115・116・122・132号土坑と重複しており、これらの中で最も古くなる。平面形は東西に若干長い円形プランで、東西4.7m、南北4.5mを測る。深さは西側で5cm、東側で10cmを測る。床面積は17.2㎡。床面の中央で不整形の中央土坑を検出しており、長軸90cm、短軸60cm、深さ20cmを測る。またこの中央土坑から西に約70cm程離れた位置で、焼土を検出している。

主柱穴はP1～P6を検出する事ができた。ただしP5は床下層での検出である。径25～45cm、深さ40～50cmを測り、規則的な配置をとる。またP4・P6の柱穴底部の形状は建て替えを想定させる。

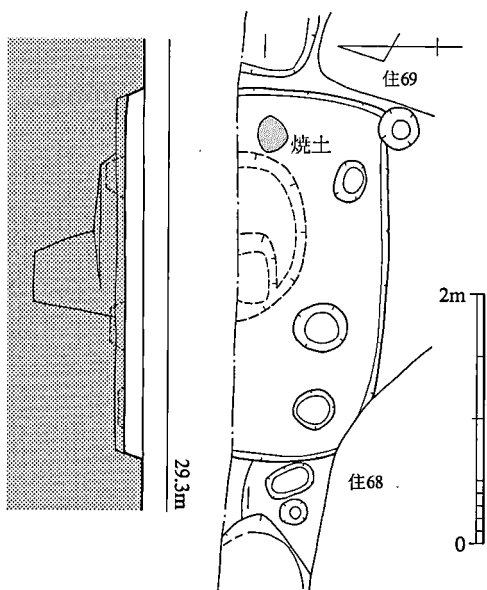
床面下層では、南半部で壁に沿った不整形の掘り込みを検出した。深さ5～15cm程度の浅いものである。この掘り込み以外にも幾つかの小ピットを検出している。遺物は若干出土したものの、図示できるものはない。

79号竪穴住居跡（第30図）

調査区中央北端に位置する竪穴住居跡で、68号竪穴住居跡に切られる。北側が大きく調査区外へと続いているため平面形はよく判らない。検出した部分に関して言えば、隅丸方形に近い形状になり、南壁は2.8m、深さは20cmを測る。床面東端で径20cm程度の焼土の広がりを検出したが、これが炉となるのだろうか。他に3個のピットを検出したが、主柱穴と判断するまでには至らない。貼り床は全面で認められ、下層からは調査区端において径70cm、深さ65cmのピットを検出している。

出土土器（第26図）

甕（22～24） 22は如意形口縁の甕。胴部上半は内傾し口縁部は短く緩く外反する。風化が著しく調整不明。



第30図 79号竪穴住居跡実測図（1/60）

23は逆L字状口縁の甕。胴部は直立気味に立ち上がり口縁部上面はやや内傾する。風化のため調整は不明。

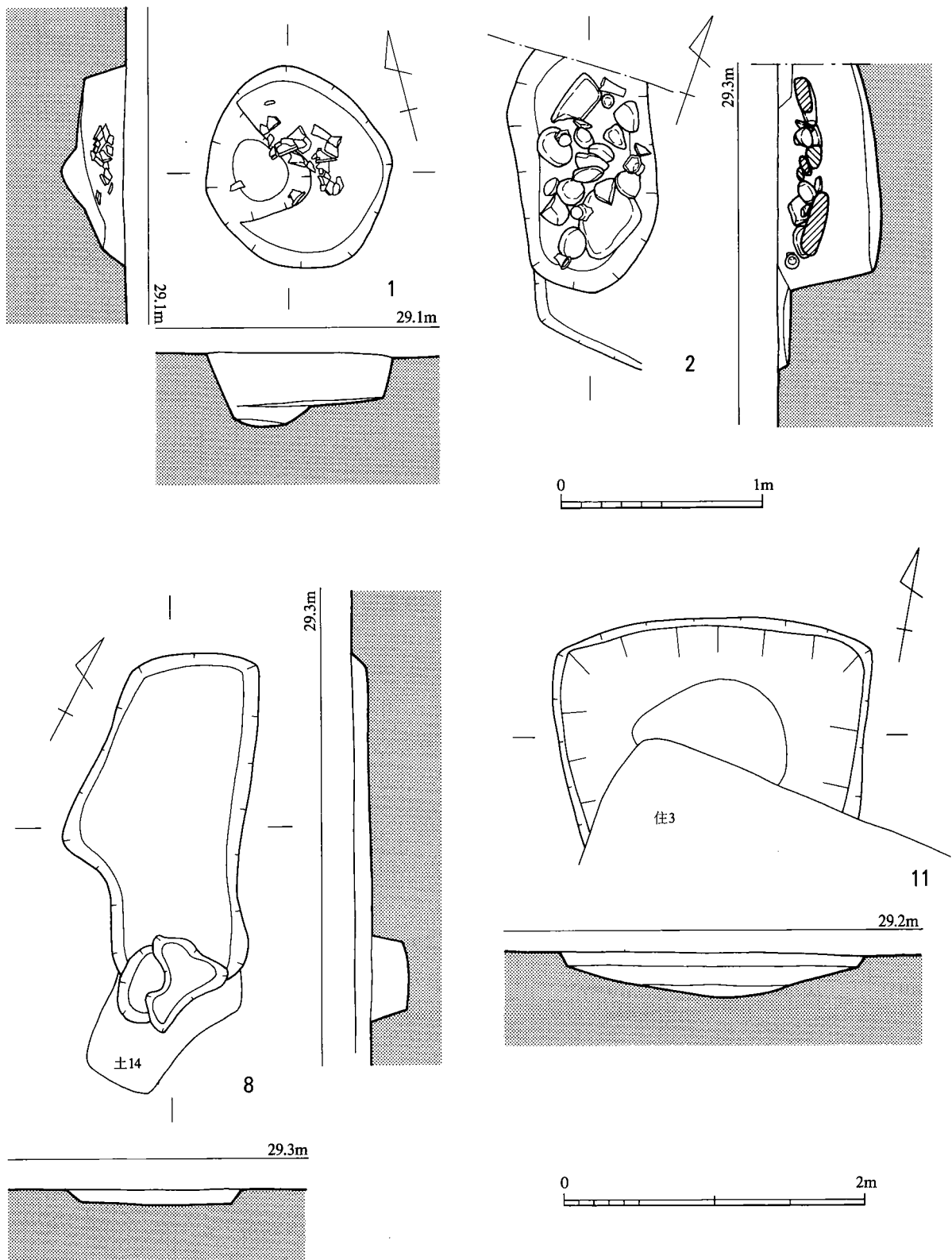
24は若干上げ底となる甕底部。裾が開かず垂直に立ち上がる。器表の風化が著しく調整不明。底径6.4cm。

出土土器は22がやや時期的に遡る可能性があるものの、他の2点については弥生時代中期前半としてよいものである。

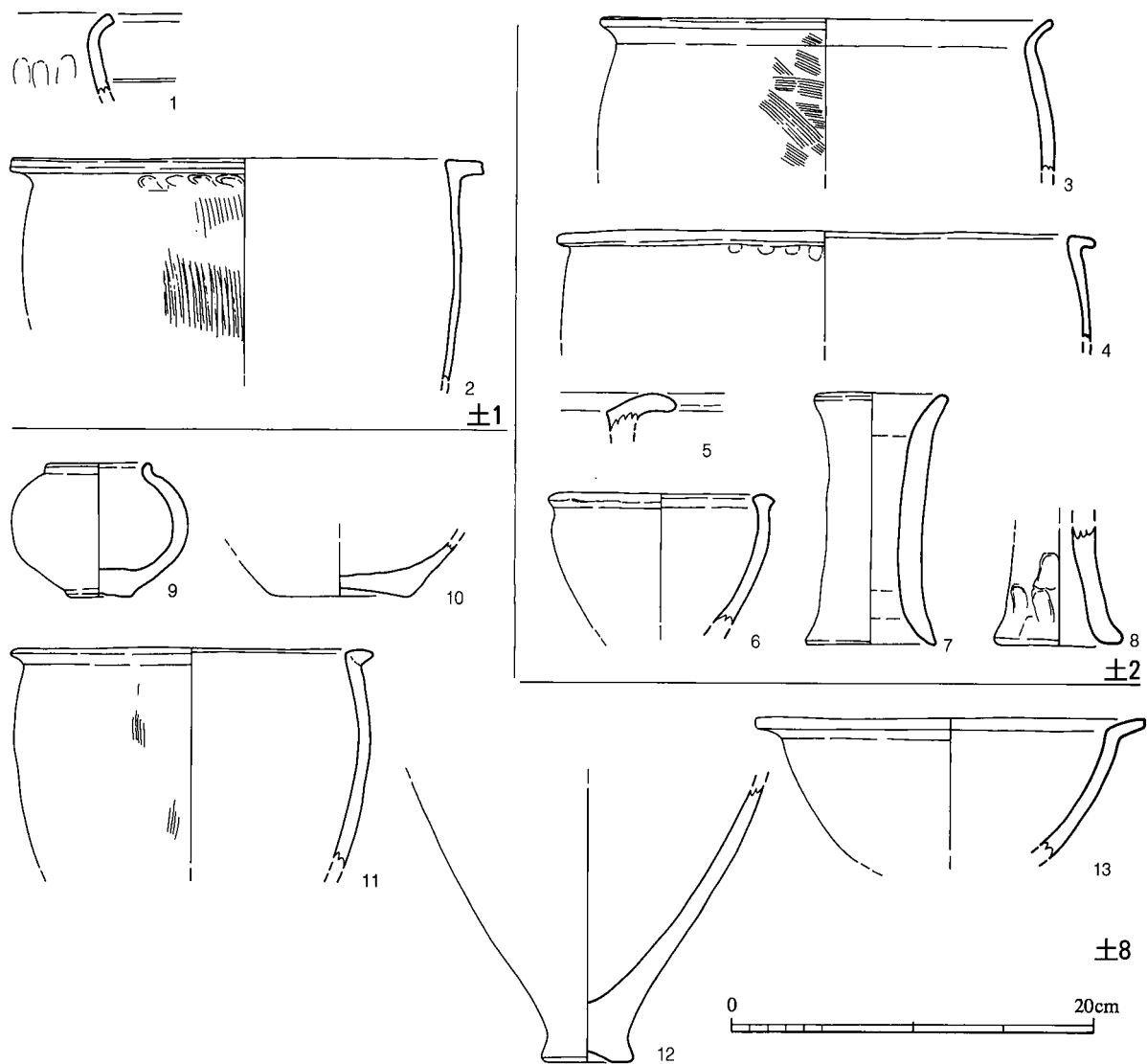
土坑

1号土坑（図版10、第31図）

調査区中央西寄りに位置する円形の土坑である。直径100cm、底面は西側がピット状に深くなっており、最も深い所で40cmを測る。壁は比較的急な立ち上がりとなる。遺物は底面から10cm程浮いて出土しており、



第31図 1・2・8・11号土坑実測図 (1・2:1/30、8・11:1/40)



第32図 1・2・8号土坑出土土器実測図(1/4)

破碎した状態であることから廃棄されたものであろう。

出土土器(図版45、第32図)

甕(1・2) 1は如意形口縁の甕。胴部上半は内傾し口縁部は短く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部はナデ、胴部内面には縦方向の指ナデが認められる。

2は逆L字状口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部付近がわずかに内傾する。口縁部上面は水平に短く伸びる。口縁部外端は面取り整形し断面四角形に仕上げる。調整は口縁部が横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行い、屈曲部の外面には明瞭な指圧痕が認められる。口径26.0cm。

2の甕は中期前半として良いものであり、当土坑の時期もこの頃としてよいだろう。

2号土坑(図版10、第31図)

調査区中央北寄りに位置する土坑で、北側は調査区外へと続いている。現状で推測すれば長軸150cm、短軸70cmの楕円形プランとなる。底面は北側がやや浅くなっており深さは南側で50cm、北側で

40cmを測る。検出面から10cm程掘り下げた段階で多数の河原石、土器片がまとまって出土したが、これらはレンズ状に堆積しており、土坑埋没途中に一括廃棄されたものであろう。

出土土器（図版45、第32図）

甕（3～5） 3は口縁部付近がやや内傾し、口縁部は如意形口縁となる甕。口縁部は胴部に対して器壁が薄く、端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部は内面ナデ、外面には単位の短い斜ハケ目調整を行う。

4は小さな三角口縁となる甕。胴部の口縁部付近は内傾し、口縁部上面は外傾する。全面器表の風化が著しいが、口縁部の付け根に指圧痕が認められる。口径29.6cm。5は長く伸びた逆L字状口縁の甕。上面は丸味を帯びて内傾し、内端部にわずかな突出が認められる。器表が風化しており調整不明。

鉢（6） 6は胴部上半が直立し、口縁部が三角形というより丸く肥厚させる小型の鉢。風化のため調整は不明。口径12.6cm。

器台（7・8） 7は上部と下部の形状がほぼ同じとなる器台。端部はシャープに仕上げる。器表は風化のため調整不明。端部径7.4cm、中央部径5.3cm。8は半分を欠失するが、7と同様上下の差がない器形となるだろう。外面に指圧痕が明瞭に残り、器壁も厚く粗雑な感を受ける。或いは支脚とした方が妥当かもしれない。端部径7.1cm。

出土土器には弥生時代中期初頭的な要素のものと同期前半的な要素を持つものがある。当土坑の時期は弥生時代中期前半に比定できる。

8号土坑（第31図）

調査区中央南東寄りに位置する不整形の土坑である。14号土坑と重複しており当土坑のほうが切られている。平面形は南北に長く、また南側は不整形のピットが掘り込まれる。長軸250cm、短軸120cm、深さは北側で10cm、中央で10cm、南側のピット内で35cmを測る。

出土土器（図版45、第32図）

壺（9・10） 9は小型の短頸壺。底部はわずかに上げ底となり、器壁が厚く、胴部は球形となる。口縁部は短く直立し端部を丸くおさめる。風化が著しく調整不明。口径5.8cm、胴部径9.8cm、底径3.9cm、器高7.4cm。10はやや上げ底になる壺の底部。底面の器壁は薄い。調整は不明。底径7.8cm。

甕（11・12） 11は三角口縁の甕。胴部上半はわずかに内傾し、口縁部上面はほぼ水平になる。口縁部付近は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目がわずかに観察される。口径20.0cm。

12は裾が短く開き、底面の中央が深く窪み、高い底部となる。底部から胴部下半にかけて、あまり湾曲せず直線的に開く。内面はナデ、外面は器表が完全に剥離する。底径5.2cm。

鉢（13） 13は口縁部が逆L字状に屈曲する鉢または高坏の坏部。口縁部上面は直線的に伸び、内傾する。端部は丸味を帯びる。屈曲部内面には明瞭な稜を有す。内外面ともに器表が風化しており調整不明。口径21.6cm。

出土土器は11の口縁部形態にやや古い様相を残すものの、それ以外に関しては弥生時代中期前半として良いものである。

11号土坑（図版10、第31図）

調査区中央南東寄りに位置する土坑で、3号竪穴住居に大きく切られるが、遺存している部分から推察すれば方形プランとなるだろう。北壁は2.0m、底面は中央に向かってすり鉢状に窪んでおり、最深部で30cmを測る。

遺物は遺構検出面とほぼ同レベルで出土している。床面からはかなり浮いた状態にある。数個の河原石とともに細片で出土しており、廃棄した状況が見て取れる。

出土遺物には図示した土器の他、29の砥石、174の石包丁が出土している。

出土土器（図版45、第33図）

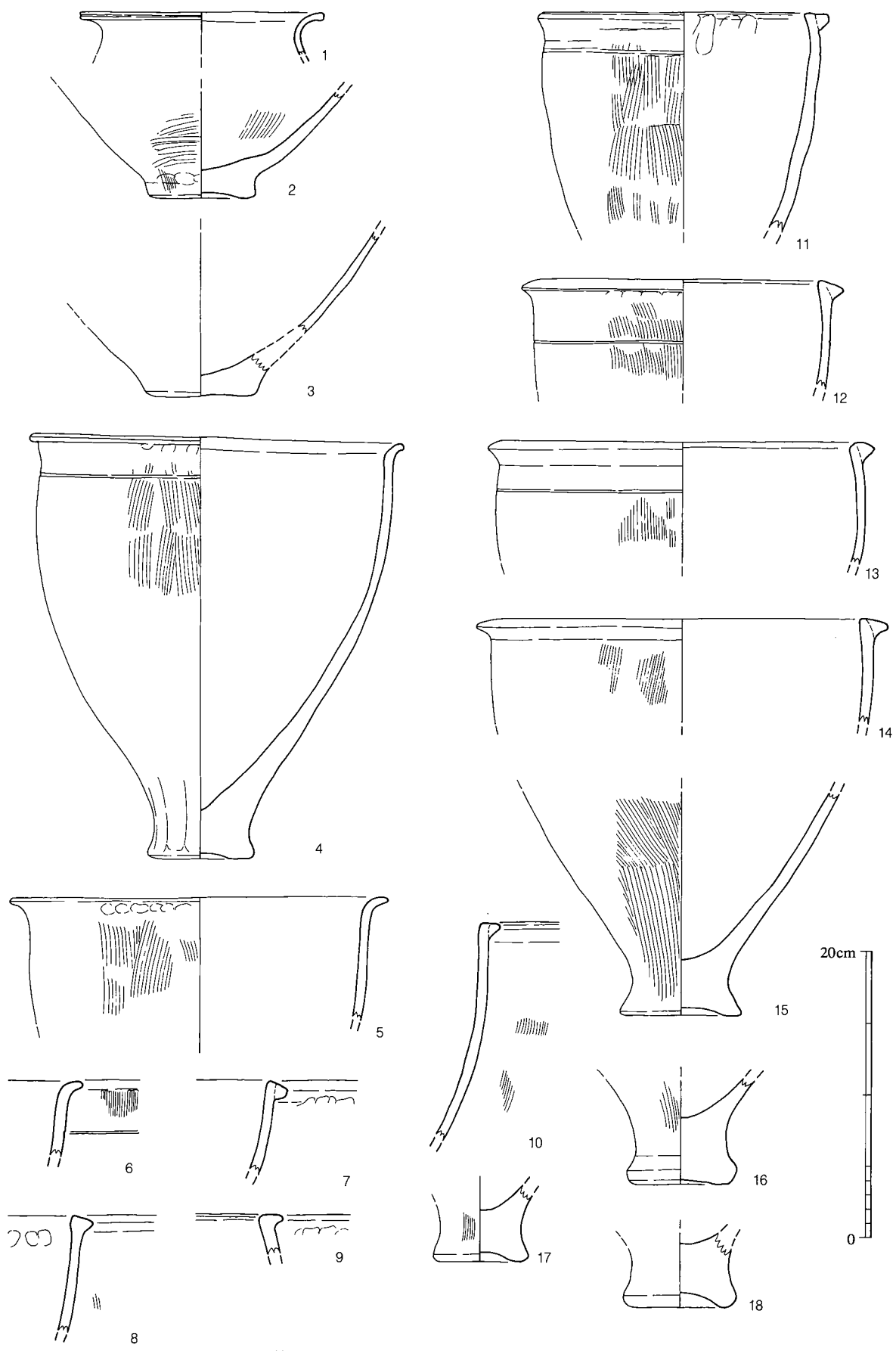
壺（1～3） 1は口縁部が大きく外反し、上面がほぼ水平となる壺。口縁端部に沈線状の浅い窪みを巡らす。器壁は非常に薄い。風化が著しく調整不明。口径17.4cm。

2はやや上げ底となる壺底部。底部は短く直立し、湾曲して胴部へと続く。内面にはハケ目が認められ、外面はハケ目の後に横ヘラミガキを行う。湾曲部には指圧痕が残る。器表には部分的に化粧土が認められる。底径7.4cm。3は平底の壺。底部と胴部の境目はあまり明瞭ではない。風化のため調整不明。底径7.8cm。

甕（4～18） 4～6は如意形口縁の甕。4は底部が器壁が厚く上げ底で、裾部がわずかに開く。胴部上半は直立し肩が全く張らない。口縁部は短く外反し端部は丸くおさめている。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。調整は口縁部が横ナデ、胴部内面がナデ、外面上半が縦ハケ目、下半は風化のため調整不明、底部付近は指ナデが認められる。口径26.0cm、底径7.4cm、器高29.5cm。5は4と同様胴部上半が直立して肩が全く張らない。口縁部は横ナデで外面口縁部直下に指圧痕が明瞭に認められる。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径26.2cm。6もやはり胴部上半が直立し肩の張りが無い。口縁部は短くやや強めに外反する。口縁部下に一条の沈線を巡らせている。調整は口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目を行う。

7～14は三角口縁の甕。7は胴部上半がわずかに外傾し、口縁部は小さく形の整った三角口縁で上面は外傾する。口縁部下に指圧痕が認められる。器表の風化が著しく調整は不明瞭。8は胴部上半が直立し、口縁部上面は外傾する。口縁内面に粘土紐を貼付した際の指圧痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は風化が進むが一部ハケ目が認められる。9は細片であり傾きにやや不安が残る。胴部上半が内傾し口縁部上面が水平になる。外面口縁部下に指圧痕が認められる。風化が進み調整は不明。10もやはり胴部上半が直立する。口縁部上面はわずかに外傾する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整。11は器壁が厚くシャープさに欠ける甕。胴部上半は直立し口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部上面は水平になる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部内面は指ナデ後に横ナデ、外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整。口径20.3cm。12もやはり胴部上半が直立する甕。口縁部上面は外傾し、外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は丁寧な縦ハケ目調整を行う。口径22.5cm。13は胴部上半がわずかに内湾する甕。口縁部上面は丸味を帯び外傾し、外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整。口径27.2cm。14は胴部上半が直立する甕で、口縁部上面は外傾する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径28.9cm。

15～18は甕底部。15は裾が短く開き、やや上げ底となる。端部はシャープに仕上げられる。胴部はほとんど湾曲せず直線的に伸びる。内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。底径8.5cm。16は底部



第33图 11号土坑出土土器实测图 (1/4)

が高く裾が開き、やや上げ底となる。裾端部は丸く仕上げられる。内面ナデ、外面縦ハケ目調整。底径7.8cm。17は裾が開く高い底部でやや上げ底となる。器表の風化が著しいが外面にわずかにハケ目が認められる。底径6.8cm。18は上げ底の高い底部で、裾がやや開き端部は丸く仕上げられる。風化が著しく調整不明。底径8.0cm。

出土土器は全て弥生時代中期初頭におさまるものであり、比較的良好な一括資料である。

12号土坑（図版11、第34図）

調査区中央南東寄りに位置する円形の土坑で、径115cm、底面は中央に向かってすり鉢状に落ち込んでおり、最深部で30cmを測る。遺物は中心付近で、底面からやや浮いた状態で出土している。

出土土器（第35図）

甕（1～8） 1は如意形口縁の甕。胴部上半は直立し口縁部は短く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整。

2は三角口縁の甕。上面は短く水平に伸びる。口縁部横ナデ、胴部内面指ナデ、外面縦ハケ目調整。

3～7は胴部上半がやや内傾し、口縁部上面がほぼ水平に伸びる逆L字状口縁の甕。3は口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は風化のため調整不明。4は口縁部内端をわずかに突出させる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整。口径24.1cm。5は風化が著しく調整不明。口径24.2cm。6は口縁部上面がやや丸味を帯び内端をわずかに突出させる。口縁部は横ナデ調整を行い内面に指圧痕が観察できる。胴部内面はナデ、外面は非常に細かい縦ハケ目調整。口径26.0cm。7は口縁内端部を尖り気味に仕上げ、外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。風化が進んでおり調整は不明。口径26.2cm。

8はやや上げ底となる高い底部の甕。裾が若干外に開き端部は丸くおさめる。風化が進み調整は不明。底径6.5cm。

出土土器のうち、1は弥生時代中期初頭と思われるものである。細片でもあり混入の可能性が高い。これ以外は全て弥生時代中期前半のものである。

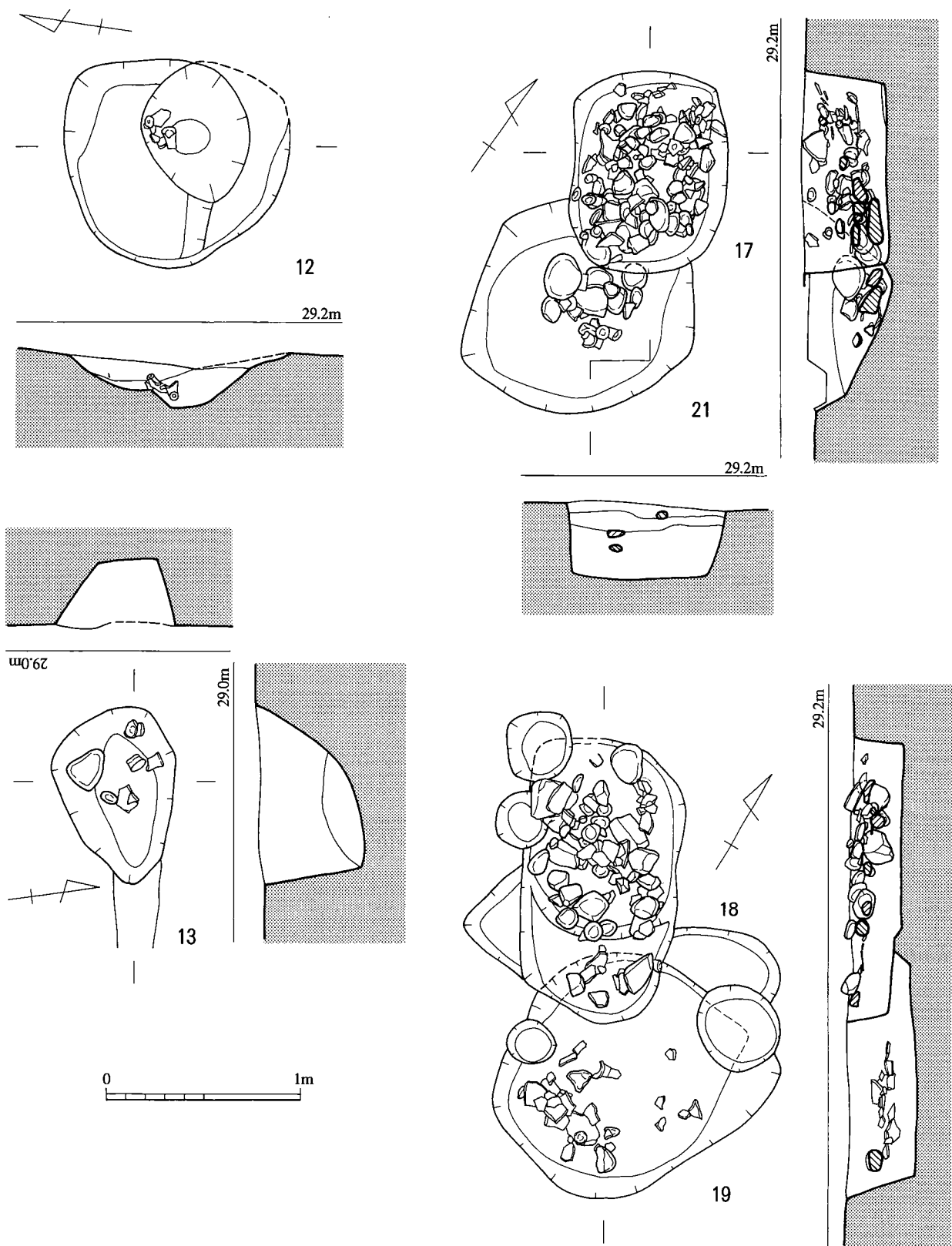
13号土坑（図版11、第34図）

調査区中央南東寄りに位置する不整楕円形の土坑で、長軸90cm、短軸60cmを測る。底面は東側が深くなっており、西側で35cm、東側で50cmを測る。壁は割と緩やかな立ち上がりとなる。遺物はそれほど多くはなく、底面からかなり浮いて出土した。

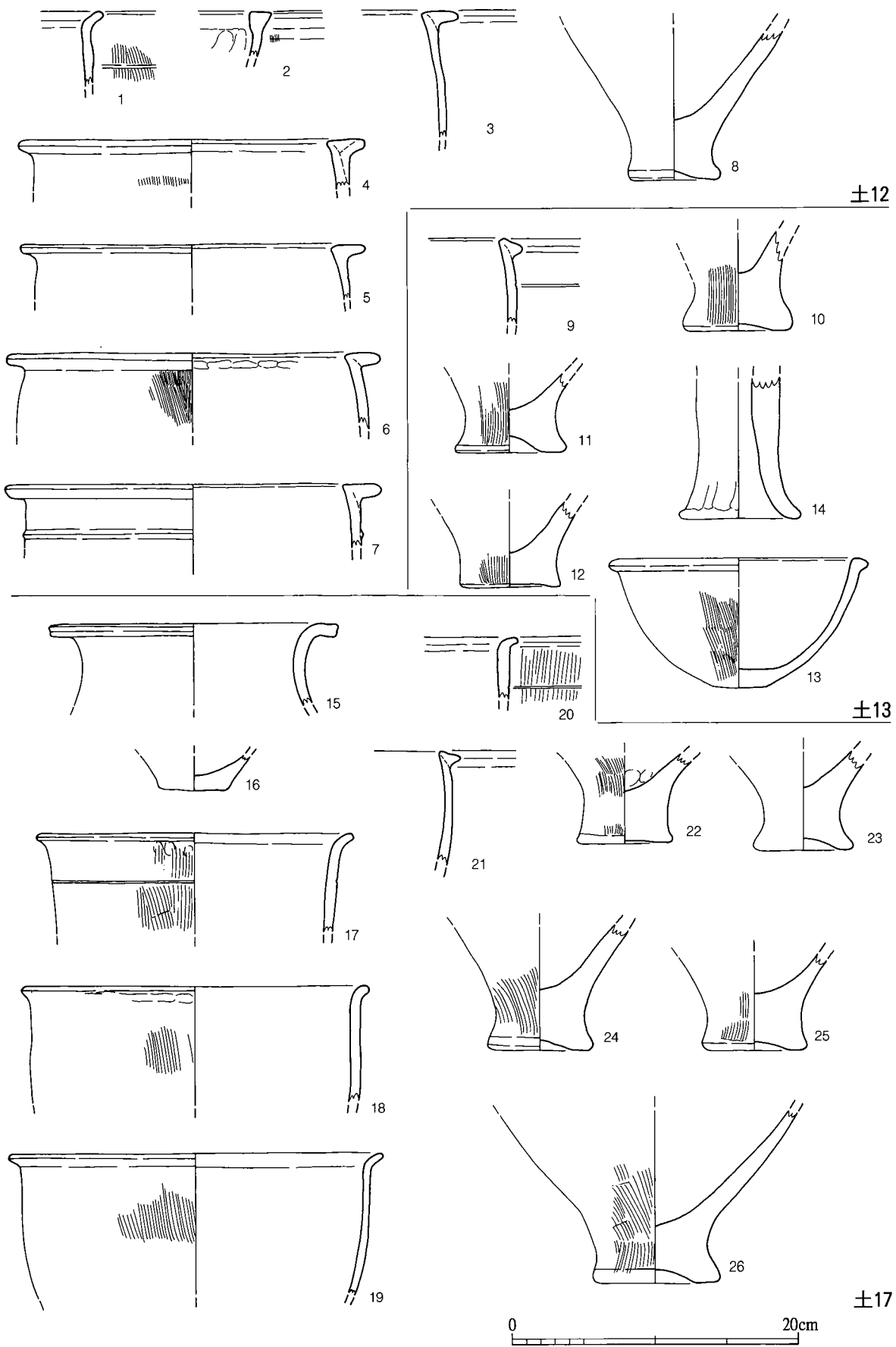
出土土器（第35図）

甕（9～12） 9は三角口縁の甕。胴部上半は直立し口縁部上面は外傾する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。風化が著しく調整不明。

10～12は甕の底部。10は上げ底となる高い底部で裾が大きく開き端部を丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目調整。底径7.6cm。11・12は10と比べて底部が薄い。11は底面が大きく窪み、裾は緩やかに開き端部を尖り気味におさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目。底径7.8cm。12はわずかに上げ底で裾はほとんど開かない。端部は尖りシャープに仕上げる。風化が進むものの外面には縦ハケ目が観察される。底径7.0cm。



第34图 12·13·17~19·21号土坑实测图 (1/30)



第35图 12·13·17号土坑出土土器实测图 (1/4)

鉢 (13) 13は三角口縁となる鉢。底部は径が小さな平底で、胴部は丸く内湾して口縁部へと至る。口縁部上面は外傾する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。口径18.0cm、底径3.8cm、器高9.0cm。

器台 (14) 14は器壁が厚くシャープさに欠ける器台。端部は薄くつくられ、外面に指ナデが認められる。端部径8.5cm。

出土土器には弥生時代中期初頭の要素をもつものと前半の要素をもつものがある。この土坑の埋没時期は弥生時代中期前半と考えられる。

17号土坑 (図版11、第34図)

調査区中央南東寄りに位置する隅丸長方形の土坑で、長軸105cm、短軸80cmを測る。21号土坑と重複しており当土坑の方が新しい。底面はほぼ平坦で、深さ45cmを測る。覆土からは多くの河原石、土器片が出土したが、堆積状況から北から南へと廃棄された状況が推察される。

出土遺物には図示した土器の他、48の砥石が出土している。

出土土器 (第35図)

壺 (15・16) 15は素口縁の壺。頸部は内傾し、口縁部は大きく水平に開く。端部を強く面取りし断面四角形に仕上げる。風化が進んでおり調整は不明。口径40.0cm。16は小型壺の底部。底部と胴部の境目に屈曲をもたない。風化が進み調整は不明。底径5.5cm。

甕 (17~26) 17~20は胴部上半が直立する如意形口縁の甕。17はわずかに開き気味となる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行い、屈曲部外面に指圧痕を残す。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口径22cm。18は口縁部が短く外反する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。屈曲部外面に指圧痕を残す。口径24.2cm。19は18よりも口縁部が長い。口縁部は横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整。口径26.0cm。20は器壁が厚くシャープさに欠ける甕。口縁部は短く強く屈曲し、胴部と比べてやや薄い。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。

21は小さな三角口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部上面は外傾する。風化が進み調整は不明。

22~26は甕底部。22はわずかに上げ底となる高い底部で、裾が若干開く。端部は尖りシャープに仕上げられる。内面には指圧痕が認められ、外面には縦ハケ目が観察できる。底径6.6cm。23~26はほぼ同形となる。底面は上げ底で裾は開き、端部は丸味を帯びる。23は風化が著しく調整不明。底径6.4cm。24は内面ナデ、底面ナデ、外面縦ハケ目。底径6.6cm。25は内面ナデ、底面ナデ、外面縦ハケ目。底径7.3cm。26は大型の甕になるだろう。内面ナデ、底面ナデ、外面縦ハケ目。底径8.5cm。

出土土器は全て弥生時代中期初頭に比定できる。

18号土坑 (図版12、第34図)

17号土坑の西側に位置する不整長方形の土坑で、長軸145cm、短軸80cmを測る。19号土坑と重複しており当土坑の方が新しい。底面は南側にテラス状の段を持ち、この部分で深さ25cm、北側で30cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。覆土から多くの河原石、土器片が出土しており、堆積状況が

ら南側から北側へと流入した状況が見て取れる。

出土土器（第36図）

壺（1～4） 1・2は端部が小さく屈曲し、若干肥厚する小型壺の口縁部である。口縁部上面はほぼ水平になり、内端に弱い稜は認められるものの突出はない。どちらも風化のため調整不明。

3は口縁部が大きく開く素口縁の壺。端部はわずかに屈曲し上面に水平面をもち、外端部は面取り整形する。風化が著しく調整不明。口径23.2cm。

4は壺の底部か小型甕の底部であろう。底面はわずかに上げ底となる。端部は明瞭な稜を有してシャープに仕上げられ、胴部はあまり開かずに立ち上がるようである。底径6.0cm。

甕（5～14） 5～13は短い逆L字状口縁となる甕。5は胴部がやや開き、口縁部内面が短く内側へと突出する。上面はわずかに外傾する。器表が風化しており調整不明。口径26.8cm。6もやはり口縁内端がわずかに突出し、上面が丸味を帯びてほぼ水平になる。口縁部付近はやや内傾する。器壁は薄い。風化が進み調整不明。口径26.2cm。7は外端部が薄く尖り、上面は直線的に水平に伸びる。内外面横ナデ調整を行う。8は胴部が大きく内傾し丸味を帯びた大型の甕になると思われる。内端部は鋭く稜をもち、上面は内傾する。9は口縁部が直角に屈折する。胴部上半は直線的に内傾する。器壁は非常に薄い。外面の口縁部からかなり下がった位置に小さな三角突帯を一条巡らす。風化が進み調整不明。10は胴部上半がやや開いた器形になる。器壁の厚さや調整などから甕としたが、傾きからすれば壺の可能性もある。口縁部上面は短く水平にのび、端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整。屈曲部外面に指圧痕が認められる。口径26.0cm。11は胴部上半が直立し、口縁部上面は水平に伸びる。全体的に風化が進むが口縁部内外面に指圧痕が認められる。口径26.8cm。12は口縁部付近が内傾し、口縁部上面は直線的に水平に伸びる。口径28.2cm。13は比較的大型に属する。口縁部付近は内傾し、口縁部はやや丸味を帯びて水平に伸びる。外面口縁部下に三角突帯を一条巡らせる。風化が進んでおり調整不明。口径36.6cm。14は一応甕の底部としたが壺の可能性もある。底面はやや上げ底となり、底部の器壁はやや薄い。端部は尖ってシャープにつくられる。裾は開かず直立し、なだらかに胴部へと移行する。風化が進み調整は不明。底径8.8cm。

蓋（15・16） 15・16はどちらも裾が大きく開く甕蓋。端部は丸くおさめる。15は口径28.6cm。

出土土器は全て弥生時代中期前半に比定できるものである。

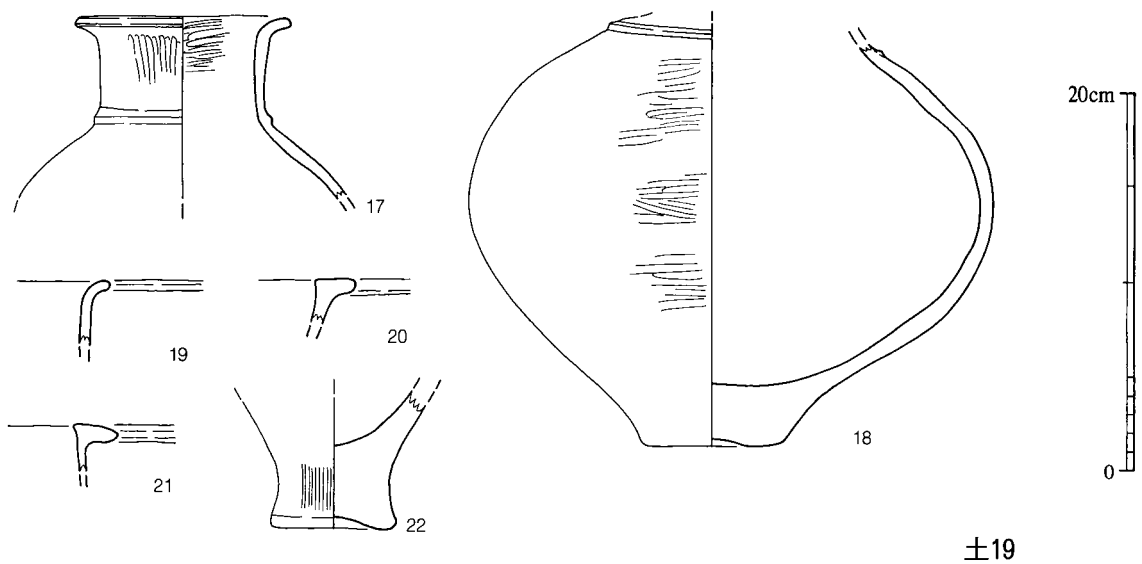
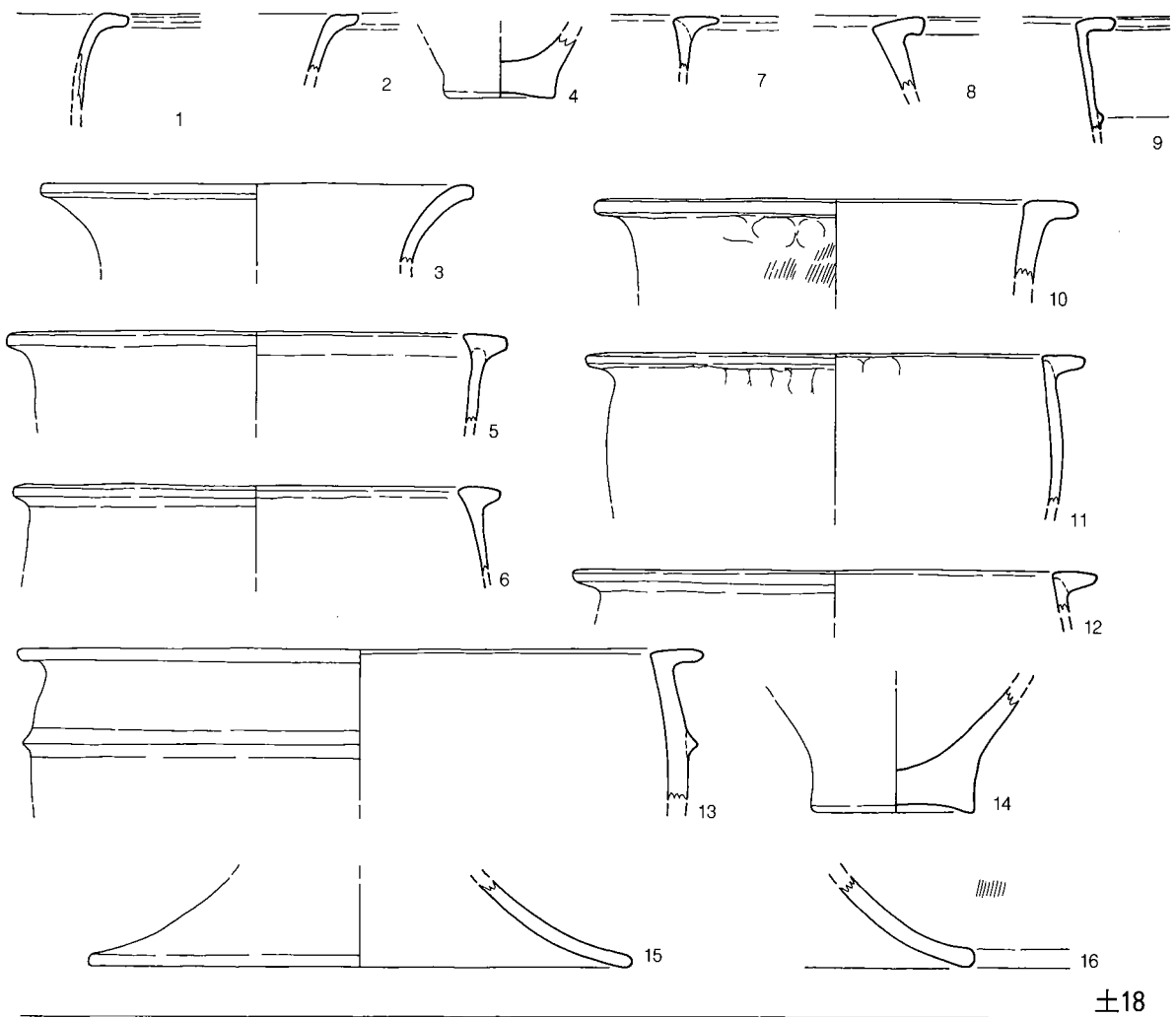
19号土坑（図版12、第34図）

18号土坑のすぐ南側に位置する不整形の土坑で、18号土坑と重複するが当土坑の方が古い。長軸160cm、短軸120cmを測る。底面はほぼ平坦で、深さは35cmを測る。遺物は底面から10cm程浮いた状態で幾つかの河原石とともに出土した。

出土土器（図版45、第36図）

壺（17・18） 17は素口縁の壺。肩はあまり張らずに内傾し、頸部は直立する。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめられる。頸胴境に一条の三角突帯を巡らせる。頸部は内面横ヘラミガキ、外面縦ヘラミガキを施し、また外面および内面頸部付近まで化粧土が認められる。口径11.4cm、頸部径8.6cm。

18はやや扁平な球形胴の壺。底部は厚く底面の中央が窪む。端部に稜はなく丸くおさめ、また底



第36图 18·19号土坑出土土器实测图 (1/4)

部と胴部の境目も不明瞭である。胴部最大径はほぼ中央にある。頸胴境には三角突帯を一条巡らせる。内面は不明瞭だが外面には横ヘラミガキが認められる。また外面には化粧土が認められる。胴部最大径27.6cm、底径7.4cm。

甕（19～22） 19は如意形口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部は短く外反する。器壁は薄く、端部は丸く仕上げる。風化が著しく調整不明。20・21は短い逆L字状口縁の甕。20は上面が水平に伸びる。21は上面が外傾し、内面にわずかに突出が見られる。どちらも風化が進み調整不明。

22はやや上げ底となる高い底部。裾はわずかに開き、端部は比較的シャープに仕上げられる。内面は風化が著しく調整不明、外面には縦ハケ目が認められる。底径6.5cm。

出土土器からこの土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

20号土坑（図版12、第37図）

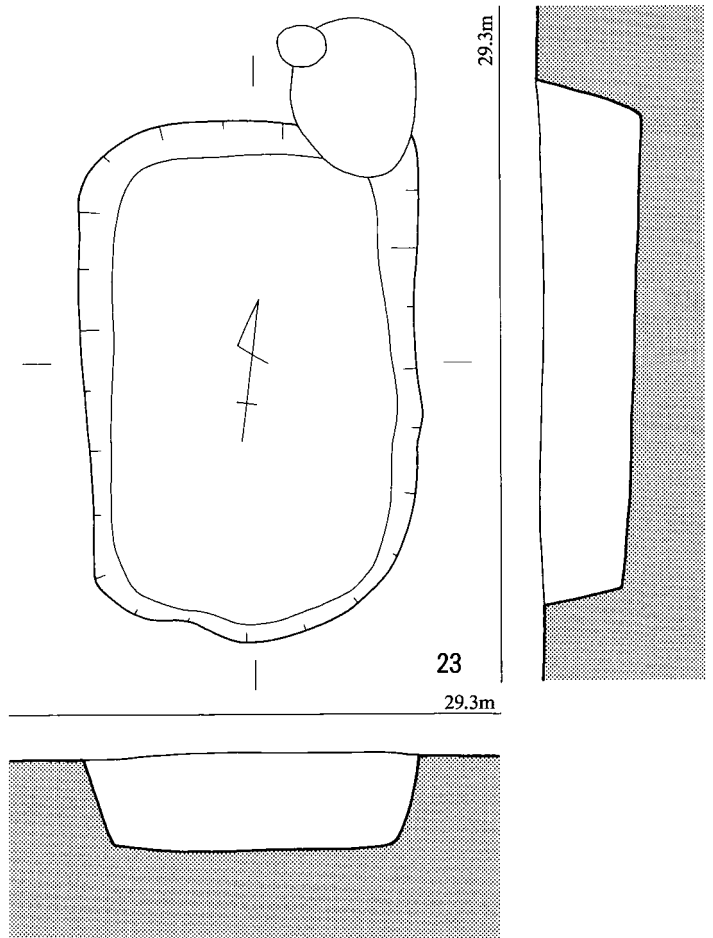
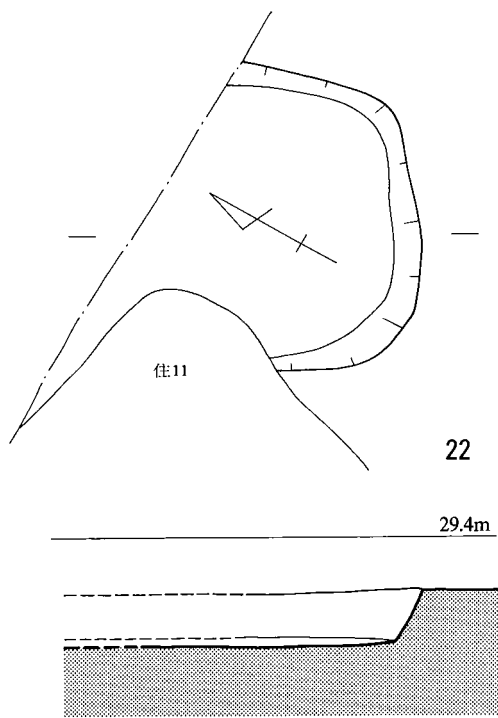
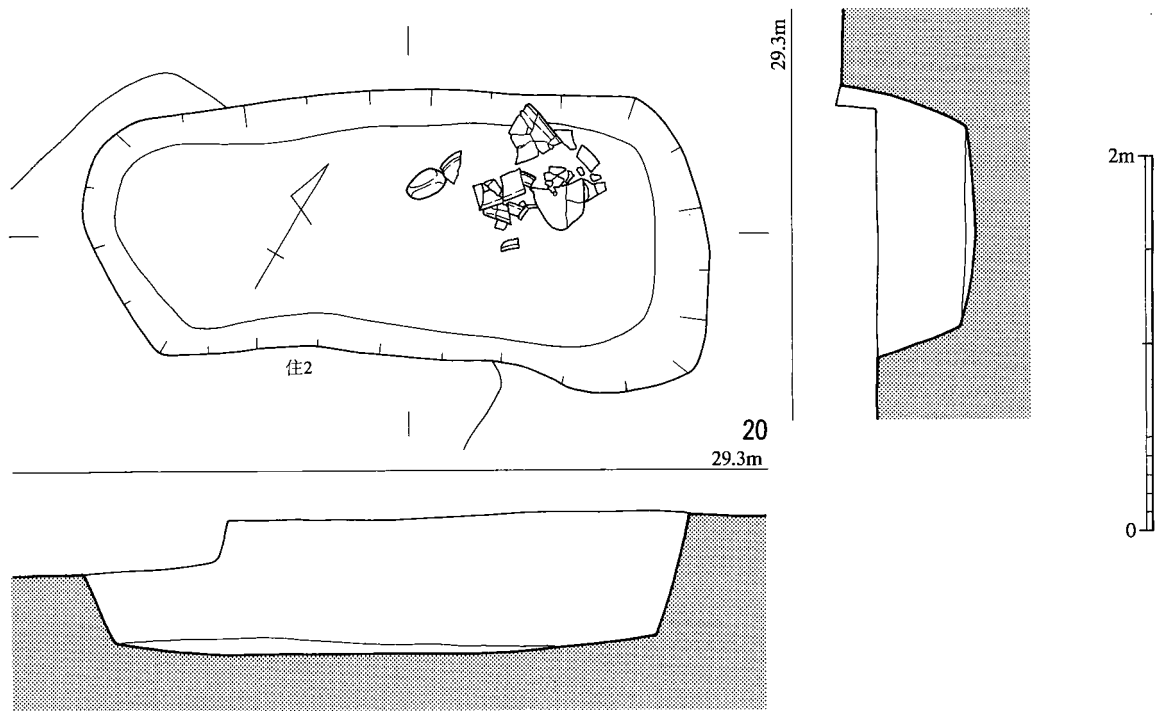
調査区中央南東側に位置する長方形の土坑で、2号竪穴住居跡に切られる。長軸320cm、短軸140cmを測る。底面はほぼ平坦で、深さ75cmを測る。壁は割と急な立ち上がりとなる。遺物は東側から比較的まとまって出土した。

出土土器（図版45・46、第38・39図）

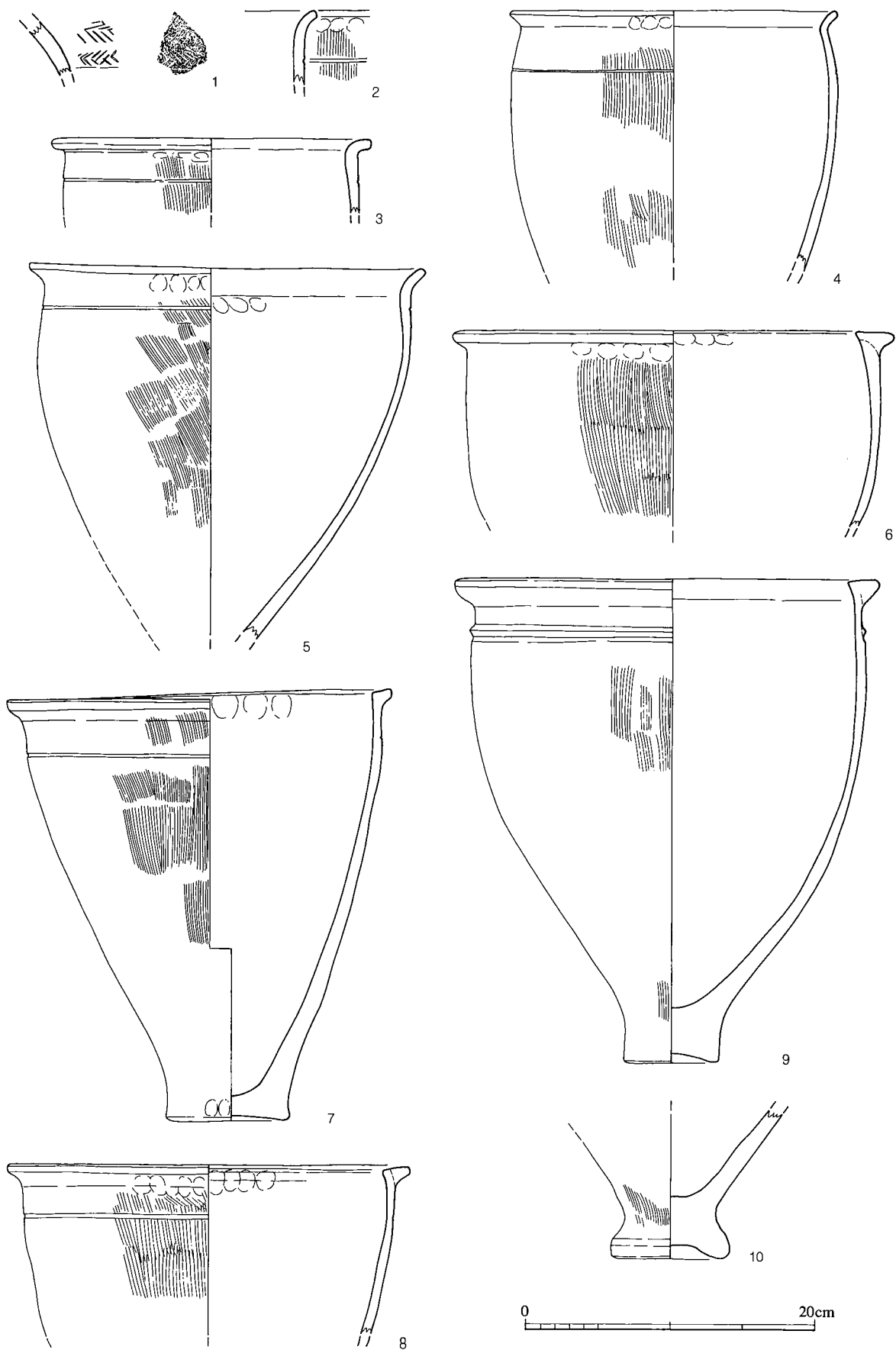
壺（1） 1は壺の肩部片。無軸羽状文と沈線からなる文様帯を肩部に巡らせるものである。

甕（2～14） 2～5は如意形口縁の甕。2は胴部上半が直立し、口縁部は短く緩やかに外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整で、屈曲部外面には指圧痕が認められる。3は胴部上半が直立し、口縁部が短く強く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整。屈曲部外面に指圧痕が残る。口径22.0cm。4は口縁部付近が内傾して胴部が丸味を帯びる。口縁部は短く外反し、外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口縁の屈曲部外面には指圧痕が明瞭に残る。口径22.6cm。5は胴部上半が直立し、口縁部が緩く外反する。外面の口縁部に近い高い位置に一条の沈線を巡らす。口縁の屈曲部内外面には口縁部を折り曲げた際の指圧痕が残る。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面斜ハケ目調整。口径27.4cm。

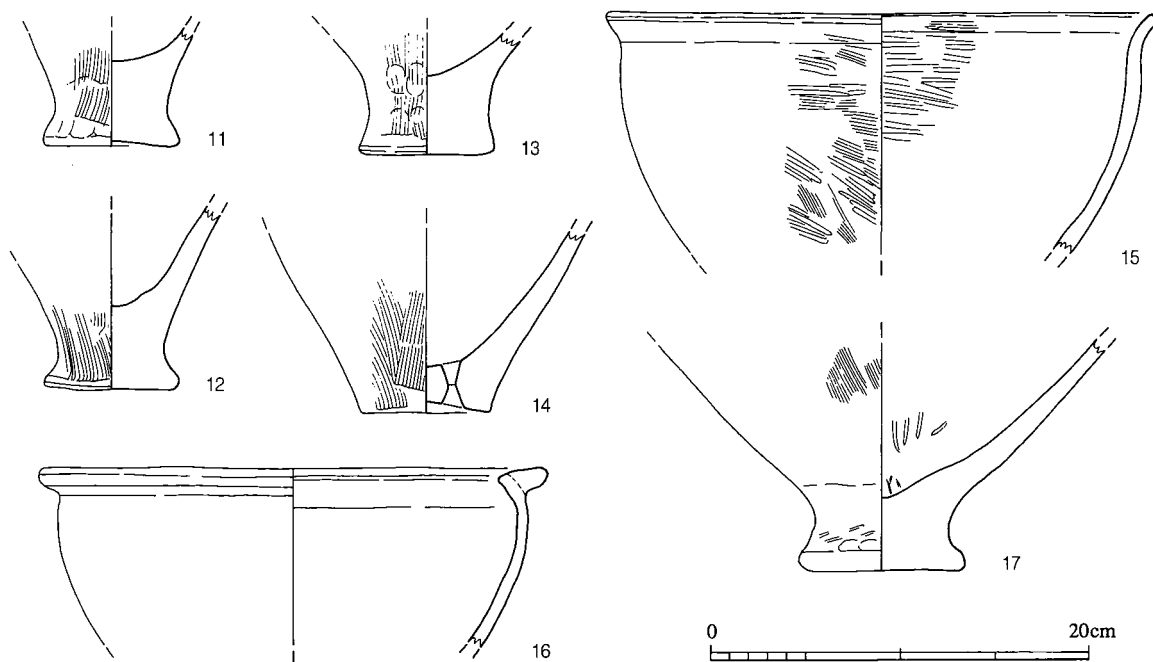
6～9は三角口縁の甕。6は丸味を帯びた胴部からやや内傾する口縁部へと至る。口縁部上面は水平に仕上げられ、内端は鋭い稜を有している。口縁部は横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整。口径30.5cm。7は他と比べて径が大きくやや薄い底部となる。底面は若干上げ底となり、裾はほとんど開かない。胴部はほとんど膨らまず直線的に開き、口縁部付近は直立する。口縁部は小さな三角口縁となり、上面は内傾する。内端は明瞭な稜を有し、また外面口縁部下には一条の幅の広い沈線を巡らす。全体的にややいびつで胴部が大きく傾く。口縁部は横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口縁部内面及び底部外面に指圧痕が認められる。口径26.7cm、底径8.6cm、器高29.8cm。8は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる甕で、上面は内傾する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデを行い内外面に指圧痕が残る。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径28.0cm。9は大きな三角口縁をもった甕。底部は高く、やや上げ底となる。裾は開かず直立し、端部はシャープにおさめる。胴部は丸味を帯び、上半は直立する。口縁部内端は稜を有してわずかに突出し、上面はほぼ水平になる。外面口縁部直下に一条の低い三角突帯を巡らせる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整。口径29.5cm、底径6.6cm、



第37图 20·22·23号土坑实测图 (1/40)



第38图 20号土坑出土土器实测图① (1/4)



第39図 20号土坑出土土器実測図② (1/4)

器高33.6cm。

10～14は甕底部。10は底面が大きく窪み、裾が短く大きく開いて端部が丸くなる。胴部は直線的に開く。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.2cm。11は底面がやや上げ底になり、裾が短く開き端部はシャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ調整。底径7.1cm。12は底面が平坦で裾が短く開く。胴部はあまり開かず直線的に立ち上がる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ調整。底径7.0cm。13もまた底面が平坦で、裾はそれほど開かない。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ調整で、外面には指圧痕が認められる。胎土から8の口縁部と同一個体になると思われる。底径7.1cm。14は裾が開かずそれほど厚底にはならない底部である。底面は上げ底で端部はシャープに仕上げられる。底面に焼成後の両面穿孔を行っており甑として転用する。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.8cm。

鉢 (15～17) 15は如意形口縁となる鉢。胴部上半は直立し、口縁部は緩く外反する。内外面ともヘラミガキ調整を行う。口径29.0cm。16は大きな三角口縁をもつ鉢。口縁部付近は急に内傾し、上面もまた内傾する。全体的に器表の風化が著しく調整不明。口径26.6cm。17は厚底の底部をもち、胴部が大きく開くことから鉢あるいは壺の底部となろう。底面は平坦で裾部は大きく短く開き、端部は丸くシャープさに欠ける。内面はナデだが内底部には板状工具の痕跡を残す。外面は風化が著しいが一部にハケ目が残る。底径7.7cm。

出土土器には1のように通常前期末として位置付けられるものもあるが、他は弥生時代中期初頭～中期前半に位置付けられる。土坑の時期は中期前半に比定できる。

21号土坑 (図版13、第34図)

17号土坑の南側に位置する不整円形の土坑で、17号土坑に切られる。長軸130cm、短軸110cmを測る。底面は中心に向かってすり鉢状に窪んでおり、中心部で深さ40cmを測る。底面付近からは数個

の河原石とともに土器がまとまって出土した。

出土遺物には図示した土器の他、28の円板状石製品、66の石鍋転用品が出土したが、66は明らかに混入品である。

出土土器（第40図）

壺（1・2） 1は口縁部が大きく開く素口縁の壺。端部は面取りする。器表の風化が著しく調整不明。2はやや上げ底となる壺底部。端部は丸味を帯びる。外面での底部と胴部の境は明瞭である。風化が著しいが、外面の指圧ナデの際の稜線が残る。底径8.5cm。

甕（3～6） 3は如意形口縁の甕。胴部は直立し、口縁部は短く緩く外反する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。4・5は逆L字状に近い三角口縁の甕。4は口縁部付近が内傾し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は丸味を帯び、ほぼ水平に仕上げられる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整。口径30.0cm。5は口縁部付近が内傾し、口縁部上面がわずかに外傾する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。口縁部内面には指圧痕が認められる。6はやや上げ底となる高い底部。裾は若干開き、端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ調整を行う。底径6.6cm。

出土土器は弥生時代中期初頭に位置付けられる。

22号土坑（図版13、第37図）

調査区中央北端に位置する土坑で、西側を11号竪穴住居跡に切られ、また北側は調査区外へと続く。確認できた部分から推察すると長方形プランとなろうか。南壁は130cm、底面はほぼ平坦で、深さ30cmを測る。壁は割と緩やかな立ち上がりとなる。

出土土器（第40図）

甕（7・8） 7は口縁部付近が内傾し、上面が水平に短く伸びる逆L字状口縁の甕。内端には強い稜を形成する。風化が著しく調整不明。8は短い逆L字状口縁となる甕。風化のため調整不明。

7・8は共に弥生時代中期前半としてよいものである。

23号土坑（図版13、第37図）

調査区中央北東寄りに位置する長方形の土坑で、長軸280cm、短軸175cmを測る。底面は北側がやや深くなっており、北側で55cm、南側で45cmを測る。壁は急角度で立ち上がる。

出土遺物には図示した土器の他、51の砥石が出土した。

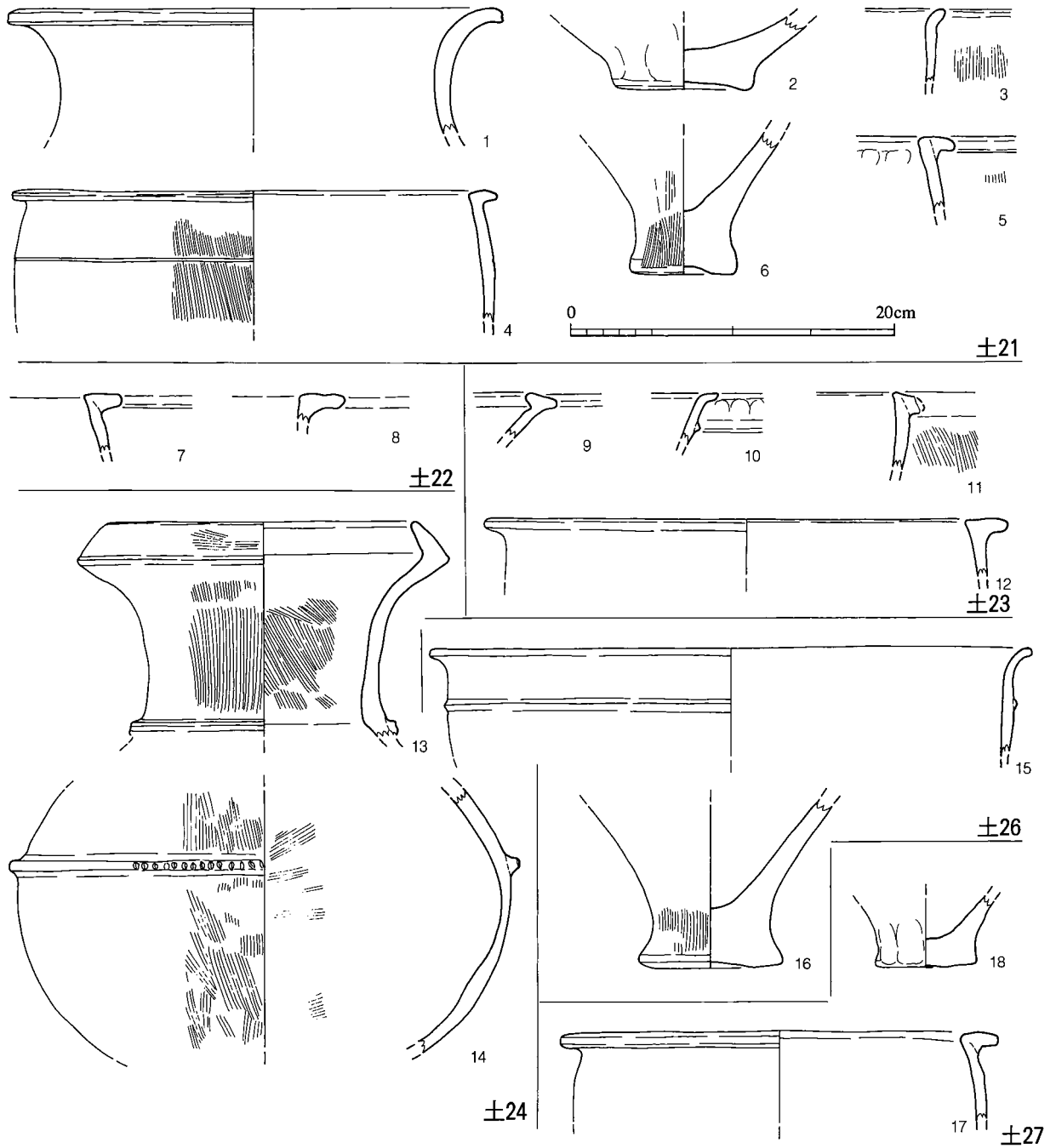
出土土器（第40図）

壺（9） 9は口縁端部の内側に三角形の突帯を貼付する壺。口縁部は大きく開く。風化のため調整不明。

甕（10） 10は如意形口縁の小型甕。胴部上半はかなり開くようである。口縁部は短く外半し、上面を水平にする。口縁端部は鋭く尖り、口縁部下に一条の三角突帯を一条巡らす。全体的に風化が進むが、口縁の屈曲部下に指圧痕が認められる。

11は胴部上半が直立し、三角口縁となる甕。口縁上面は外傾する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。

12は短い逆L字状口縁となる甕で、上面は水平に仕上げられる。内面は鋭い稜を形成する。風化



第40図 21～23・24・26・27号土坑出土土器実測図(1/4)

が進み調整不明。口径32.5cm。

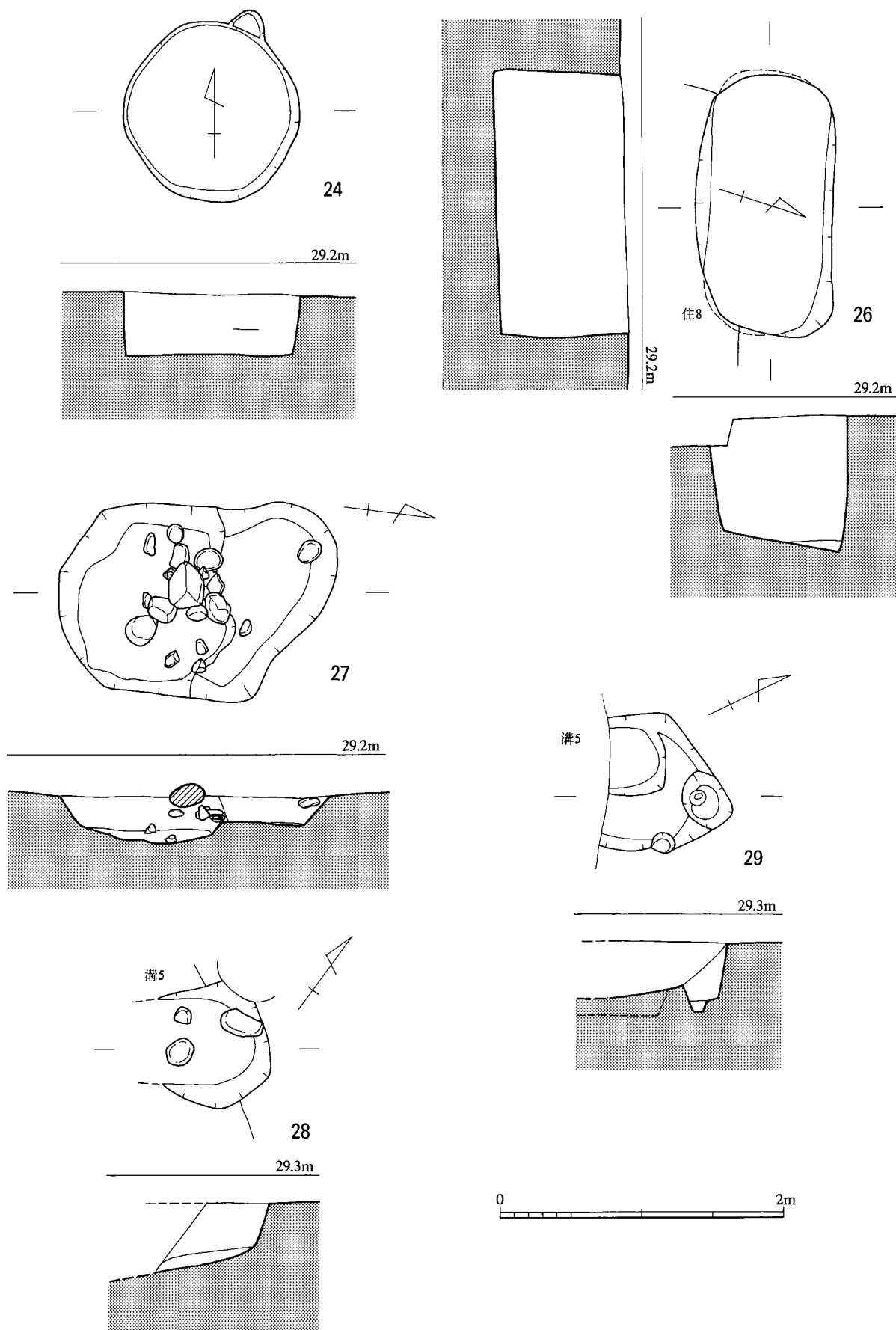
出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期前半に比定できる。

24号土坑(図版14、第41図)

調査区中央東寄りに位置する円形の土坑で、径125cmを測る。底面はほぼ平坦で、深さ45cmを測る。かべは垂直に近い角度で立ち上がる。

出土土器(第40図)

壺(13・14) 13・14は接合しないが同一個体。口縁部は短く内湾しながら内傾する。口縁部は丸くおさめる。頸部は下方が直立気味に立ち上がり、上方で大きく開く。頸胴境には三角突帯を一条



第41图 24·26~29号土坑实测图 (1/40)

巡らす。胴部は球形に近く、最大径部分に刻目突帯を一条巡らす。調整は内外面ともハケ目調整を行う。口径18.8cm、頸部径14.2cm、胴部径31.6cm。

出土土器は弥生時代後期中葉頃に比定できる。

26号土坑（図版14、第41図）

調査区中央北東寄りに位置する長方形の土坑で、長軸185cm、短軸100cm、底面は北側がやや深くなっており、南側で80cm、北側で95cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近く、西側及び東側は一部オーバーハングする部分もある。

出土遺物には図示した土器の他、156の磨製石斧が出土した。

出土土器（第40図）

甕（15・16） 15は如意形口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部は緩く外反する。口縁部外面に一条の三角突帯を巡らせる。全体的に風化が進んでおり調整不明。口径37.0cm。16はやや上げ底となる底部で、裾は短く開き端部はシャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目調整。底径8.8cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

27号土坑（図版14、第41図）

調査区北東端に単独で位置する不整形の土坑で、長軸200cm、短軸140cmを測る。底面は北側がテラス状の段を有しており、ここまでの深さは20cm、南側の最深部では35cmを測る。土坑内では河原石がまとまって出土した。

出土土器（第40図）

甕（17・18） 17は胴部上半がやや内傾し、口縁部が短い逆L字状口縁となる甕。全体的にシャープさに欠ける。風化が著しく調整不明。口径27.0cm。18は平底となる底部。裾はほとんど開かず、またそれほど厚くもない。内面ナデ、外面縦指ナデ。底径6.3cm。

出土土器は弥生時代中期前半に比定できる。

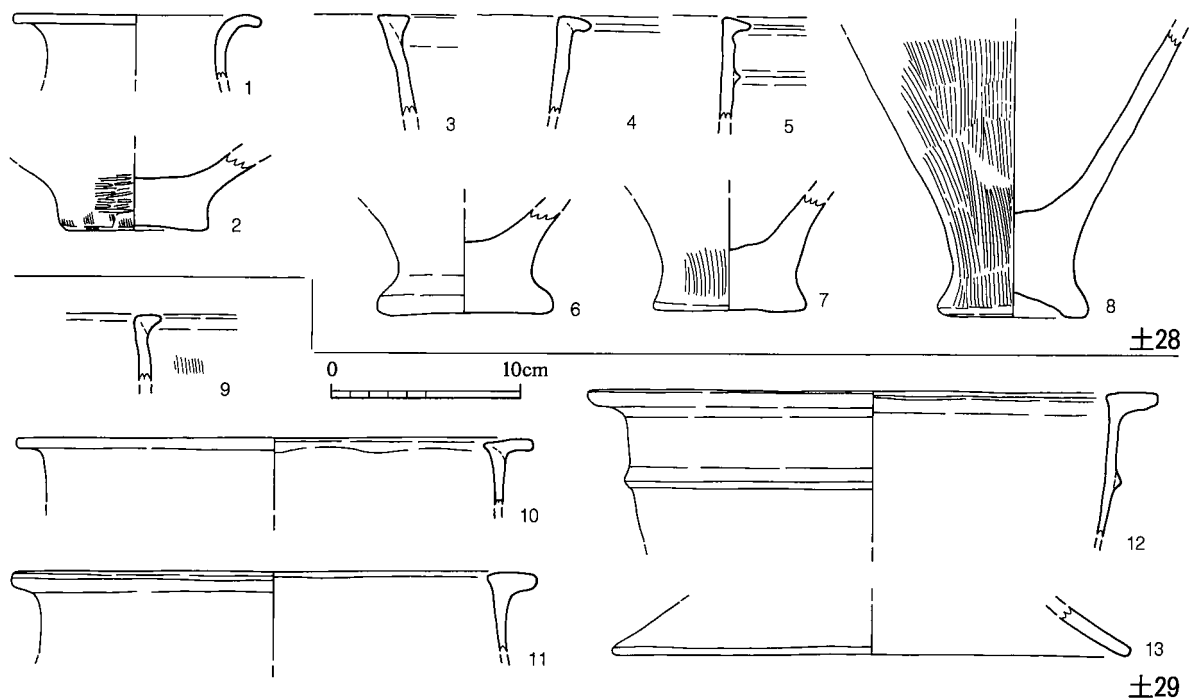
28号土坑（図版15、第41図）

調査区北東側に位置する土坑で、5号溝に大きく切られている。現状から推測すると、長方形プランとなろうか。短軸90cm、底面は西側に向かって下降しており、最も深い所で50cmを測る。覆土から3個の河原石が出土している。

出土土器（第42図）

壺（1・2） 1は小型壺の口縁部。直立気味に立ち上がる頸部から、大きく水平にまで開く口縁部へと至る。風化のため調整不明。口径13.0cm。2は厚めの壺底部。底部はわずかに上げ底となり、裾は開かず短い柱状の底部となる。底部から胴部へは緩やかに移行する。内面は風化が著しく調整不明。外面はハケ目の後に横ヘラミガキ調整を行う。底径7.8cm。

甕（3～8） 3～5は三角口縁の甕。3は胴部上半が内傾し、口縁部上面は水平になる。口縁端部はシャープに仕上げる。風化が著しく調整不明。4は胴部上半がやや外傾し、口縁上面が外傾して短く伸びる。5は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は外傾する。外面口縁部下に三角突帯を巡らす。風化が著しく調整不明。



第42図 28・29号土坑出土土器実測図(1/4)

6～8は甕の底部。6は低い厚底の底部となる。底面は平坦で裾が大きく短く開く。端部は丸くおさめシャープさに欠ける。風化が著しく調整不明。底径9.2cm。7もやはり低い厚底となる。底面はほとんど窪まず平坦で、裾は広がり端部はシャープに仕上げられる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ調整を行う。底径8.0cm。8は大きく上げ底となる高い底部。裾は開き端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かず直線的に伸びている。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ調整を行う。底径8.0cm。

出土土器はおおよそ弥生時代中期初頭におさまるものと思われるが、中には7のようにやや新しい様相が認められるものもある。

29号土坑(図版15、第41図)

28号土坑の北西側に位置する土坑で、5号溝に大きく切られる。遺存する部分から判断すると、長方形プランとなろうか。短軸は100cmを測る。北端及び東端にそれぞれ小さなピットが掘り込まれる。底面は西側が段を持って深くなっており、最深部で50cmを測る。

出土土器(第42図)

甕(9～12) 9は三角口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁上面は水平になる。口縁部は横ナデ、内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。

10～12は逆L字状口縁の甕。いずれも胴部は直立し、上面はほぼ水平に伸びる。口縁内端は短く突出する。風化が著しく調整不明。10は口径27.2cm。11は口径27.6cm。12は外面口縁部下に三角突帯を巡らせる。口径30.2cm。

蓋(13) 13は細片だが傾きから甕蓋になると思われる。端部は四角くおさめる。径27.4cm。

9に関しては古い様相が認められるものの、他は全て弥生時代中期前半として良いものである。

30号土坑（図版15、第43図）

調査区北東張り出し部の西端に位置する土坑である。上面はやや崩れているものの、底部付近は整った長方形プランを留めている。この部分では長軸165cm、短軸95cmを測る。底面は中央に向かって窪んでおり、検出面から最深部までの深さ75cmを測る。土器は主に最上層から出土しており、また底面近くから数個の河原石が出土している。



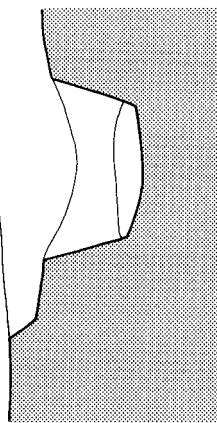
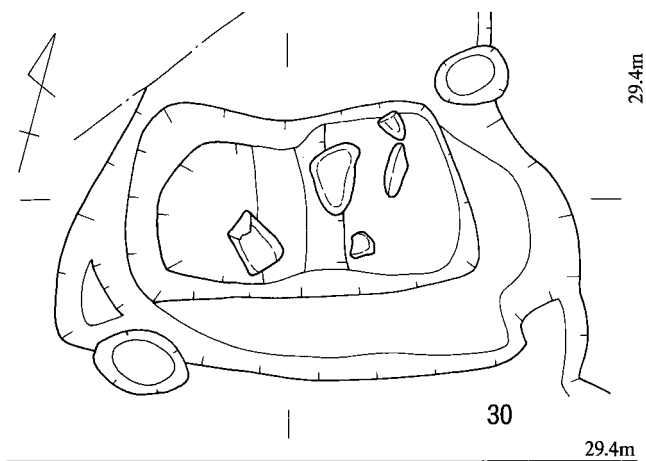
30号土坑

遺物は図示した土器の他、下層から3・8・18の管状土錘、上層から165の石包丁が出土している。

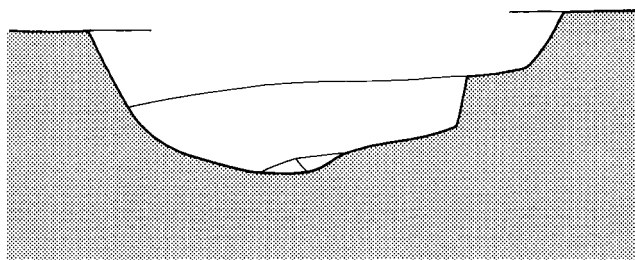
出土土器（図版46・47、第44・45図）

甕（1～25） 1～8は如意形口縁の甕。1は胴部上半が直立し、口縁部付近がやや内傾する。口縁部は短く外反し、胴部と比べて器壁が薄くなる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。全体的に風化が著しく調整は不明。口径21.6cm。2は胴部上半がわずかに内傾し、口縁部は1と比べると強く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面は縦方向の指ナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。屈曲部外面には指圧痕が認められる。口径22.6cm。3は完形の甕。底面は深く窪み裾はわずかに広がる。直立する底部から直線的に広がる胴部へとなだらかに移行し、胴部上半は直立する。口縁部は短く緩く外反し端部は丸くおさめる。口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面はほとんど器表が剥離するが、一部に縦ハケ目が観察できる。底面はナデ。口径24.4cm、底径7.8cm、器高28.0cm。4は胴部上半が直立し、口縁部は短く緩く外反する。口縁部は胴部に比べて器壁がやや薄い。外面の口縁部に近い位置に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面はほとんど風化するが、一部縦ハケ目が観察される。口径25.6cm。5は胴部上半がわずかに開き、口縁部は短く外反する。口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。全体的に風化が著しく調整不明。口径26.6cm。6は胴部が丸味を帯びて上半がやや内傾する。口縁部は短く強く外反し、外面に屈折の際の指圧痕が残る。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目調整を行う。口径28.0cm。7は胴部上半が直立する。口縁端部は面取り整形し断面四角形に仕上げる。外面口縁部下に一条の細い沈線を巡らせるが、若干波打っている。器壁は非常に薄い。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径28.6cm。8は胴部が膨らみ口縁部付近が内傾する甕で、端部は短く外反する。器壁は比較的薄い。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径28.1cm。

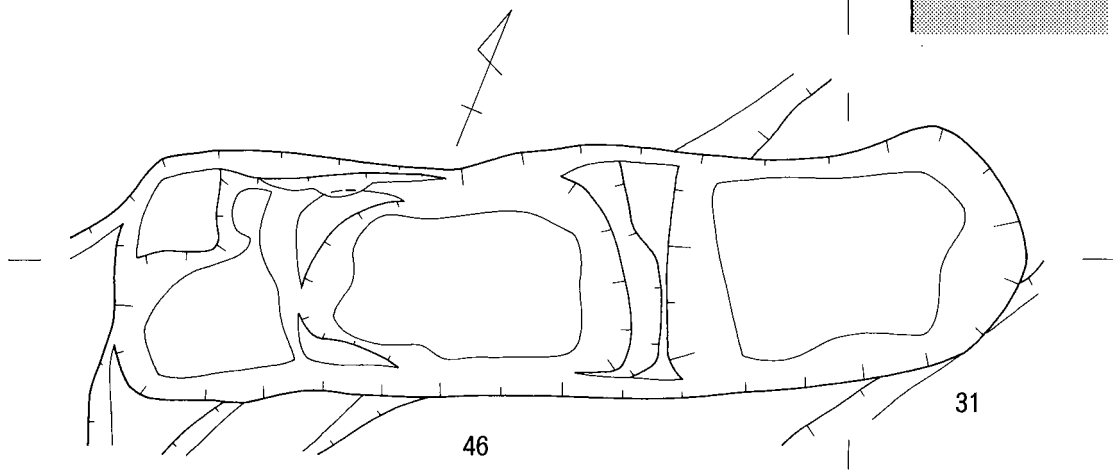
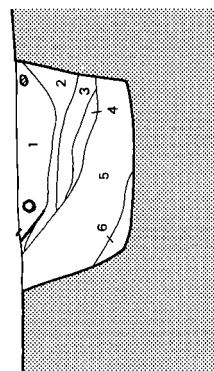
9～16は三角口縁の甕。9は胴部上半がやや内傾する。口縁部は形の整った三角口縁で、上面は外傾する。外面口縁部下には接合の際の指圧痕が残る。口径20.6cm。10は口縁部が開き、鉢になるかもしれない。口縁部は三角口縁というよりも外側に強く折り曲げた形にする。上面は大きく外傾する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は細かい縦ハケ目。口径23.0cm。11は胴部がやや丸味を帯び上半が直立する。口縁部は小さな三角口縁となる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。



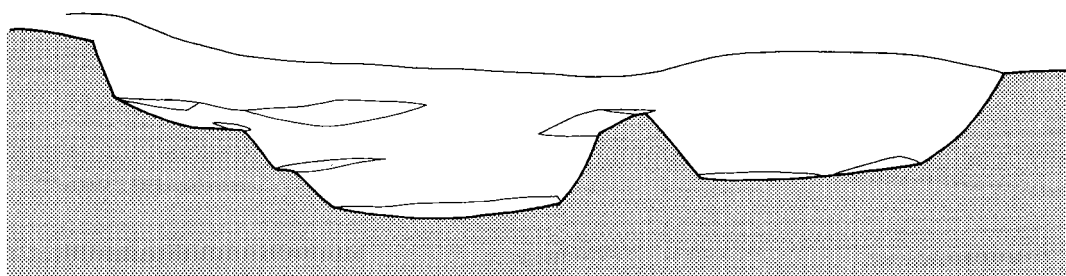
1. 暗褐色土 (土器多, 炭化物少含)
2. 黑褐色砂質土 (炭多、土器、燒土含)
3. 褐色粘質土
4. 黑褐色粘質土 (土器含)
5. 暗灰褐色砂質土
6. 暗黃褐色砂質土



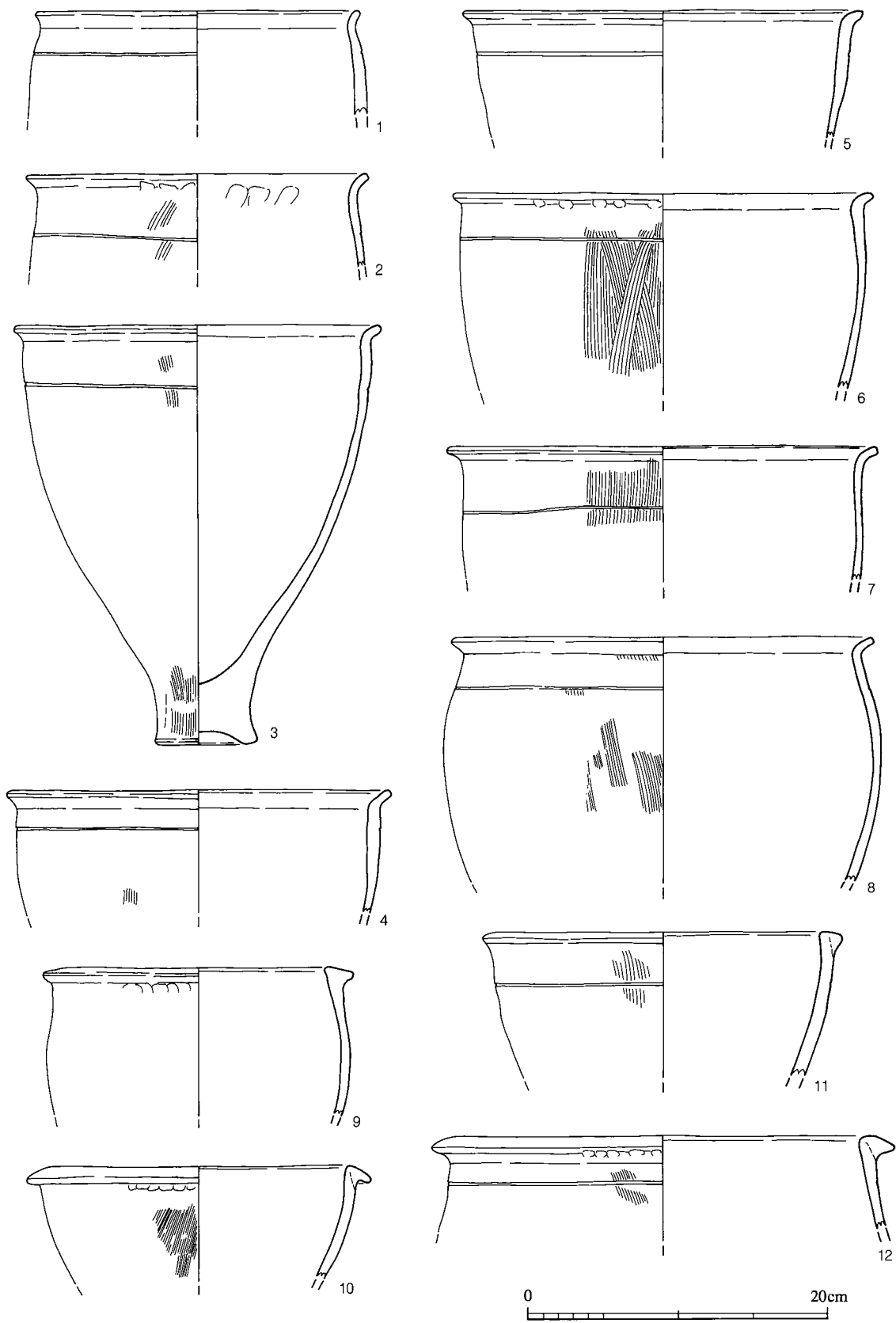
29.1m



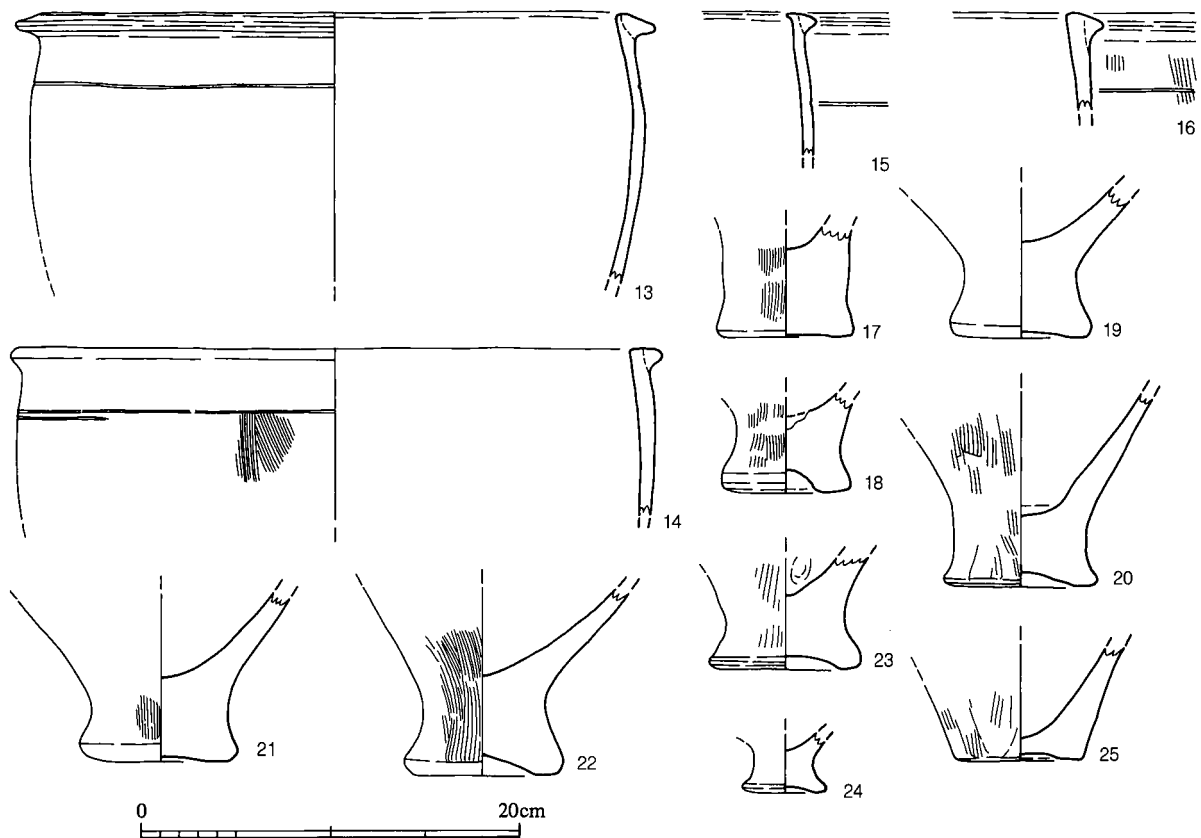
29.1m



第43图 30·31·46号土坑实测图 (1/40)



第44图 30号土坑出土土器实测图① (1/4)



第45図 30号土坑出土土器実測図② (1/4)

口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。口径24.0cm。12は胴部上半が内傾し、口縁部は大きめの三角口縁で上面は外傾する。外面口縁部下に接合の際の指圧痕が明瞭に残り、さらにその下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径30.8cm。13は胴部上半が内傾し、わずかに胴が張る器形となる。口縁部は外端を尖り気味に薄く仕上げ、上面は大きく外傾する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。器表の風化が著しく調整不明。口径33.6cm。14も口縁部付近がわずかに内傾する。口縁部は小さな三角口縁で上面は水平になる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす、起点と終点とがうまく繋がっていない。調整は口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径43.3cm。15は小さな三角口縁だが内端がわずかに突出している。胴部上半はやや内傾する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は風化のため調整不明。16も胴部上半が内傾し口縁上面が外傾する。外端部は尖り気味に仕上げ、口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整。

17~25は甕の底部。17は柱状の高い脚部となる。底面は平坦で裾が少し開く。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.2cm。18は底面中央が深く窪む。裾は大きく開き端部は丸く仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.8cm。19は底部がわずかに上げ底となり裾が大きく開く。端部は丸くおさまられる。全体的に風化が進み調整は不明。底径6.9cm。20の底面は上げ底となり、裾は短く開き、端部はシャープにつくられる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。裾部付近には整形の際の指ナデ痕が残る。底径8.0cm。21は底面がほぼ平坦で裾は短く開く。端部は丸くおさまる。内面ナデ、外面細かい縦ハケ目、底面ナデ。底径8.4cm。22は底面中央が深く窪み裾は

大きく開く。端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.4cm。24は小型甕の底部であろう。底部は上げ底で裾は外反しながら大きく開き、端部は跳ね上げたように上外方を向く。底径4.6cm。25は他と異なり薄い底部のものである。底面はわずかに上げ底となり、裾は全く開かず胴部から直線的に底部へと続く。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.0cm。

出土土器には25のように時期的に後出すると思われるものもあるが、それ以外は弥生時代中期初頭の良好な一括資料である。

31号土坑（図版16、第43図）

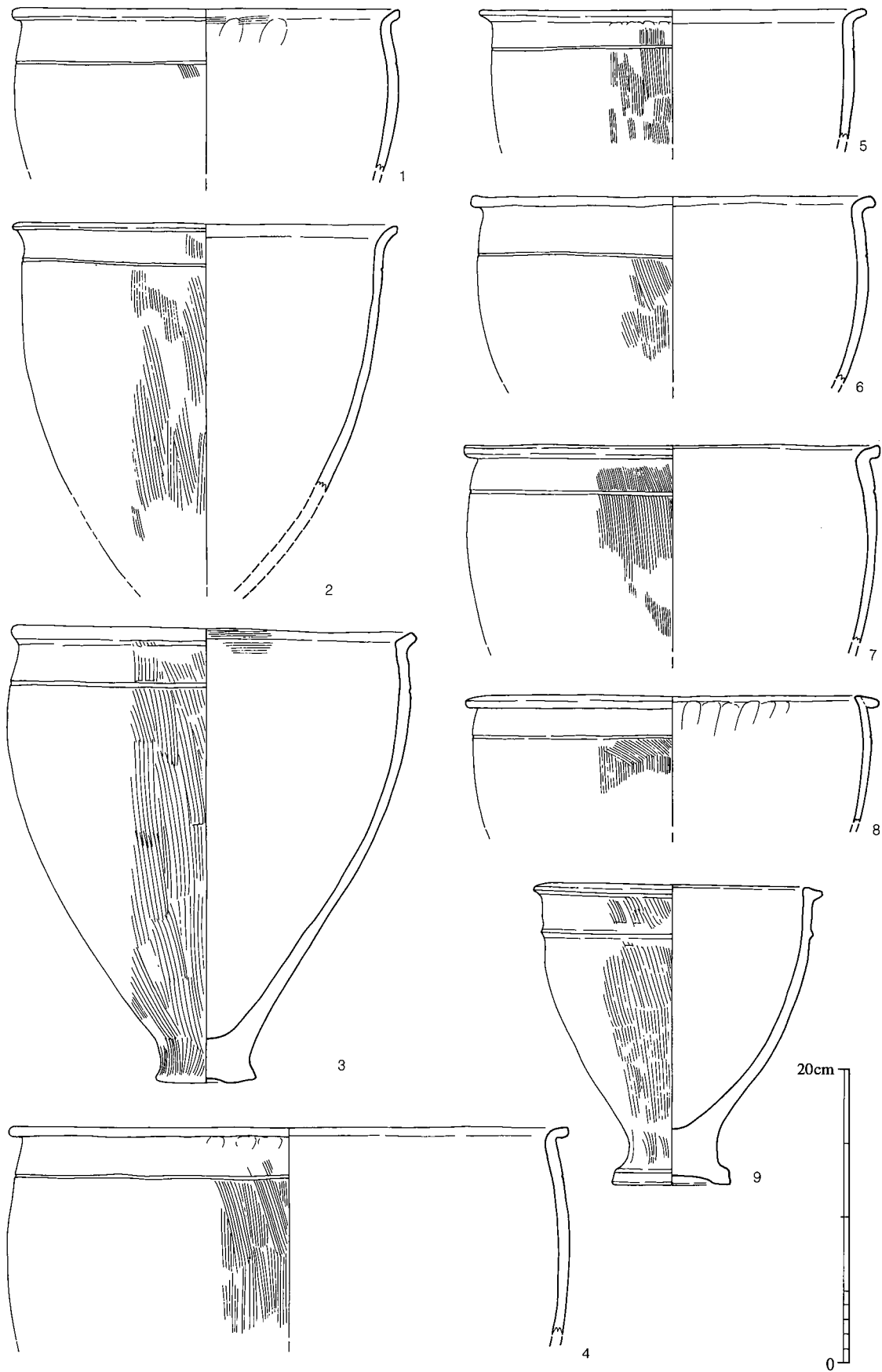
調査区東端に位置し、34号土坑・46号土坑とともに縦列する土坑である。7・8号溝に切られる。検出面では46号土坑とともに一つの土坑と認識して掘り下げを行ったが、底面近くでそれぞれ別の遺構として取り扱ったものである。しかし掘り方上面を共有しており同時併存していた可能性が高い。

当土坑の平面プランは長方形で、長軸190cm、短軸120cm、底面はほぼ平坦で、深さ65cmを測る。

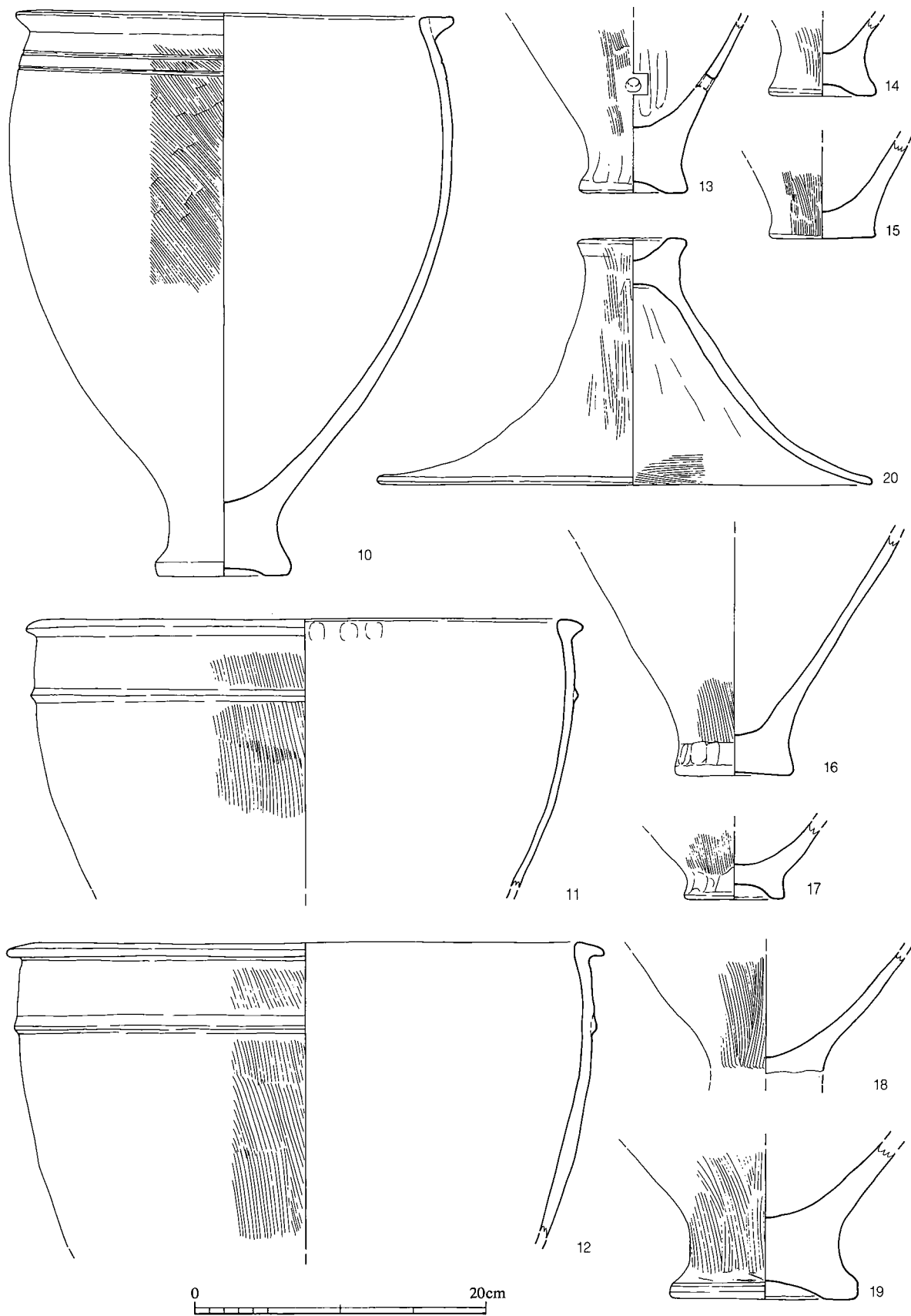
出土土器（図版47、第46・47図）

甕（1～19） 1～7は如意形口縁の甕である。1は胴部上半が内傾し、わずかに胴が張った器形となる。口縁部は短く強く外反し、端部は丸い。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部内面横ハケ目、外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.0cm。2は器高に対して口径が小さいスリムな器形となる。胴部上半が直立し口縁部は短く緩く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径25.8cm。3は口縁部内面にしっかりとした稜をもつ甕である。底部はそれほど高くならず裾は短く開く。底面は中央が窪み裾端部はシャープに仕上げる。胴部上半は直立し、口縁部は短く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部内面横ハケ目、外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径28.9cm、底径6.8cm、器高31.4cm。4は胴部上半が内傾し、口縁部を短く外側に折り曲げ上面がほぼ水平になる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径37.6cm。5は胴部上半が直立し口縁部が短く強く外反する。端部は胴部に比べて器壁を薄く仕上げる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.0cm。6は胴部上半が内傾し、やや丸味を帯びた器形となる。口縁部は短く強く外反し、外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径27.2cm。7は胴部上半が内傾し丸味を帯びた器形となる。口縁部は短く強く外反し、端部は面取りして四角くおさめる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面細かい縦ハケ目調整を行う。口径28.0cm。

8～12は三角口縁となる甕。8は胴部上半が内傾し、口縁部上面が直線的に外傾する。内端はわずかに突出し、外端は丸く仕上げられる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。内面ナデで口縁部付近には縦方向の指ナデが顕著に認められる。口縁部外面ナデ、胴部外面斜・縦ハケ目調整を行う。口径27.9cm。9は小型の甕。底部はやや上げ底で裾が大きく強く開き、胴部に対して底部が大きい。胴部上半は直立する。口縁部は小さな三角口縁となり上面は外傾する。口縁部下には一条の三角突帯を巡らせる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、胴部外面縦ハケ目調整を行う。口径19.4cm、底径8.0cm、器高20.4cm。10は底面中央がやや窪み、裾は大きく開き端部を丸くおさめる。胴部は丸味を帯び胴部上半はやや内傾する。口縁部は小さな三角口縁となり上面は水平に仕上げる。外面口縁部下



第46图 31号土坑出土土器实测图① (1/4)



第47图 31号土坑出土土器实测图② (1/4)

には二条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面斜ハケ目、底面ナデ調整を行う。口径30.0cm、底径9.3cm、器高39.3cm。

11・12は大型の甕。11は胴部上半がやや内傾して胴部が丸味を帯びる。口縁部は小さな三角口縁となり上面は丸味を帯びて外傾する。外面口縁部下には低い三角突帯を一条巡らす。口縁部内面は縦方向の指ナデ、外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行い、外面には一部に化粧土が認められる。口径38.0cm。12は胴部が直立し口縁部は小さな三角口縁となる。口縁上面は直線的に外傾し、外端部は薄く尖り気味に仕上げる。外面口縁部下には低い三角突帯を一条巡らす。内面ナデ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ目調整を行う。この時期にしては珍しく、外面の一部に丹塗りが認められる。口径41.0cm。

13～19は甕の底部。13は底面中央が窪み、裾が開く。端部はシャープに仕上げる。胴部はあまり開かないようである。胴部下方に焼成後の穿孔を行っており甑として転用している。内面縦指ナデ、胴部外面縦ハケ目、底部外面は縦指ナデ、底面ナデ調整を行う。底径7.5cm。胎土や色調、調整から5と同一個体になると思われる。14は底面中央が窪み裾が開き、端部は尖り気味にシャープに仕上げられる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ調整を行う。底径7.4cm。15は底部が薄く裾が開かない。底面は平坦で裾端部はシャープに仕上げられる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ調整を行う。底径7.2cm。16は底部があまり高くなり、底面はわずかに上げ底となる。裾はわずかに短く開き、端部は尖り気味に仕上げる。胴部はあまり開かず直線的に伸びる。内面ナデ、胴部外面縦ハケ目、底部外面指オサエ、底面ナデ。底径8.0cm。17は甕ではなく鉢の底部かもしれない。底部に低い断面三角形の高台が付いた形状となる。裾端部はわずかに開く。内面ナデ、外面細かい縦ハケ目、底部付近は指オサエ、底面はナデ調整を行う。底径6.8cm。18は恐らく高い柱状の底部となるであろう。内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。19は大型の甕底部。底面は上げ底となり裾は短く大きく開く。胴部は他と比べやや開き気味に立ち上がる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径13.0cm。

蓋(20) 20は甕蓋。器高が高く、裾は外反しながら大きく開く。端部は丸くおさめる。上部外面は甕同様中央が大きく窪み、端部がやや開く。裾内面は横ハケ目、外面は横ナデ、体部内面ナデ、外面縦ハケ目、上面ナデ調整を行う。裾部径33.0cm、上部径7.4cm、器高17.0cm。

出土土器は全て弥生時代中期初頭と考えて良いものであり、良好な一括資料である。

32号土坑(第49図)

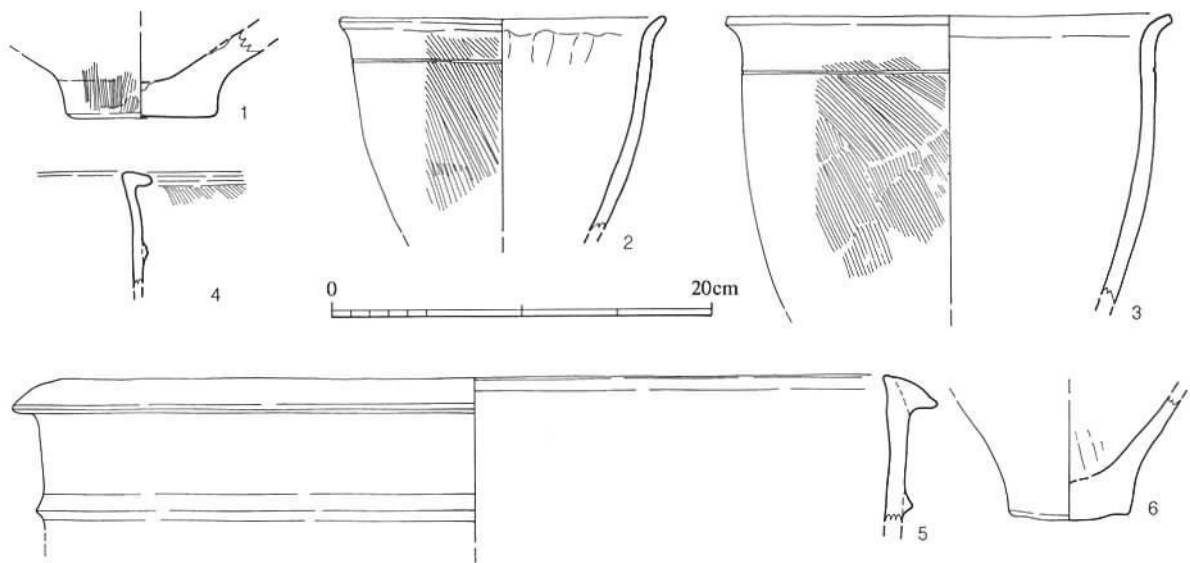
31号土坑の北側に位置し、これと並列する土坑である。7号溝に切られる。平面形は長方形プランで、長軸170cm、短軸70cmを測る。底面は中央がやや深くなっており、深さ80cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南側及び北側の一部はオーバーハングする。

出土遺物には図示した土器の他、45の砥石が出土している。

出土土器(第48図)

壺(1) 1は壺の底部。底面はほぼ平坦で端部は丸味を帯びる。底部は厚く外面は直立気味に立ち上がり、大きく外反して胴部へと続く。内面ナデ、外面細かい縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。

甕(2～6) 2・3は如意形口縁の甕。2は小型の甕で胴部はあまり丸味を帯びず、口縁部付近が開く。口縁部は短く弱く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内



第48図 32号土坑出土土器実測図(1/4)

面ナデ、外面斜ハケ目。口径17.0cm。3は胴部上半が直立し、口縁部は強く外反し、端部を面取りして四角くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面斜ハケ目調整を行う。口径23.6cm。

4・5は三角口縁の甕。4は口縁部上面がわずかに外傾しながら伸びており、逆L字状口縁に近くなる。胴部上半はやや内傾する。外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。5は大型の甕である。胴部上半は直立し、口縁部上面は直線的に外傾し、内外端部とも尖り気味でシャープに仕上げる。外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。全体的に器表の風化が進み調整不明。口径48.8cm。6は底面が凸レンズ状に出る甕底部。裾は開かず直立し、端部はシャープにおさめる。底部から胴部へと外反しながら続く。内面にはナデの際の工具痕が見え、外面は風化のために調整不明となる。底径6.4cm。

出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

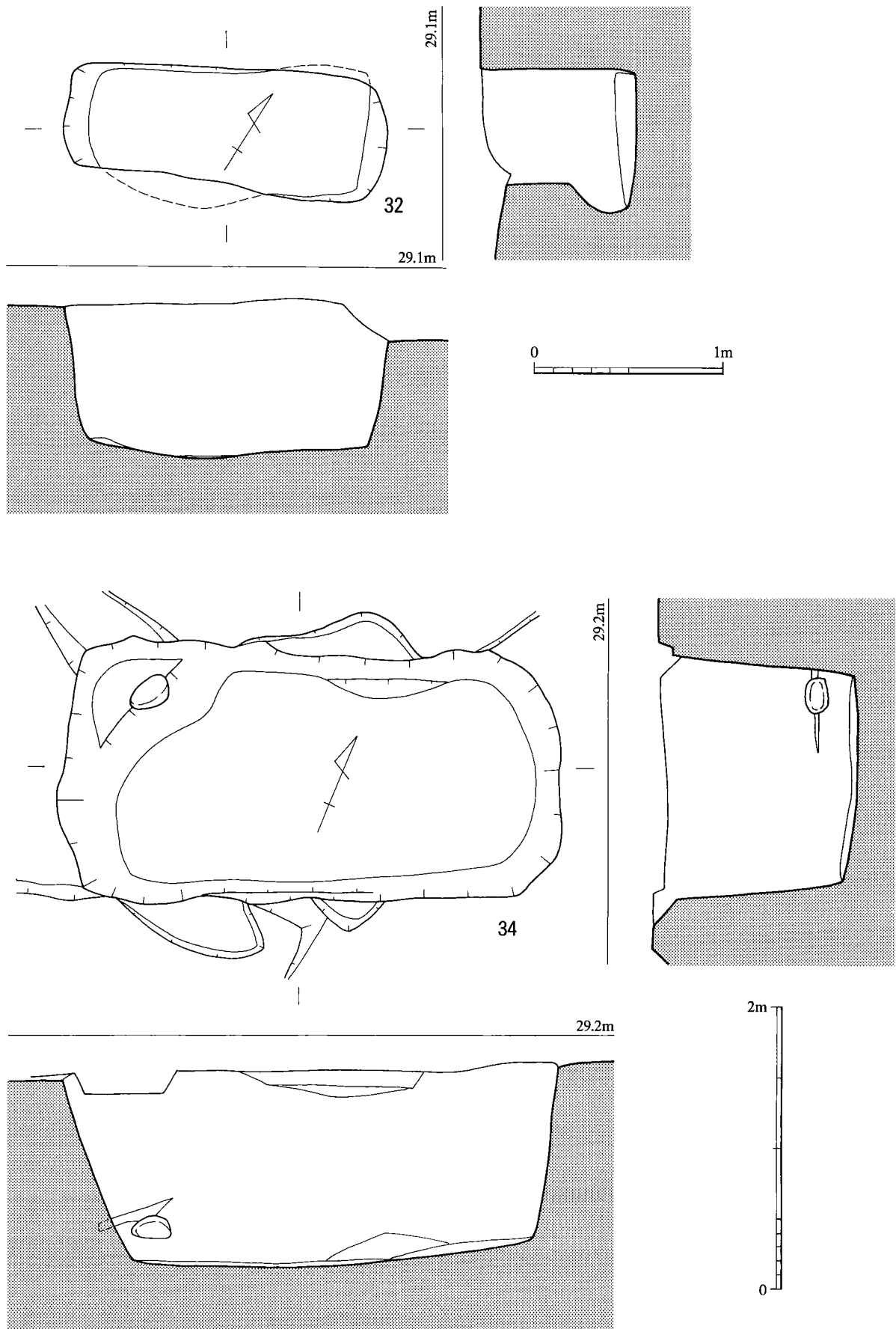
34号土坑(図版16、第49図)

調査区東端に位置し、31・46号土坑と一直線に並ぶ長方形の土坑である。15号竪穴住居跡、7・8号溝に切られる。長軸355cm、短軸180cm、底面はほぼ平坦で深さ140cmを測るかなり大型の土坑である。壁は垂直に近い立ち上がりとなる。遺物は多量に出土し、良好な一括資料となる。

出土遺物には図示した土器の他、16の管状土錘、40の砥石、84の石鏃、158の磨製石斧、161の石包丁が出土している。



34号土坑



第49图 32·34号土坑实测图 (32 : 1/30、34 : 1/40)

出土土器（図版48～50、第50～55図）

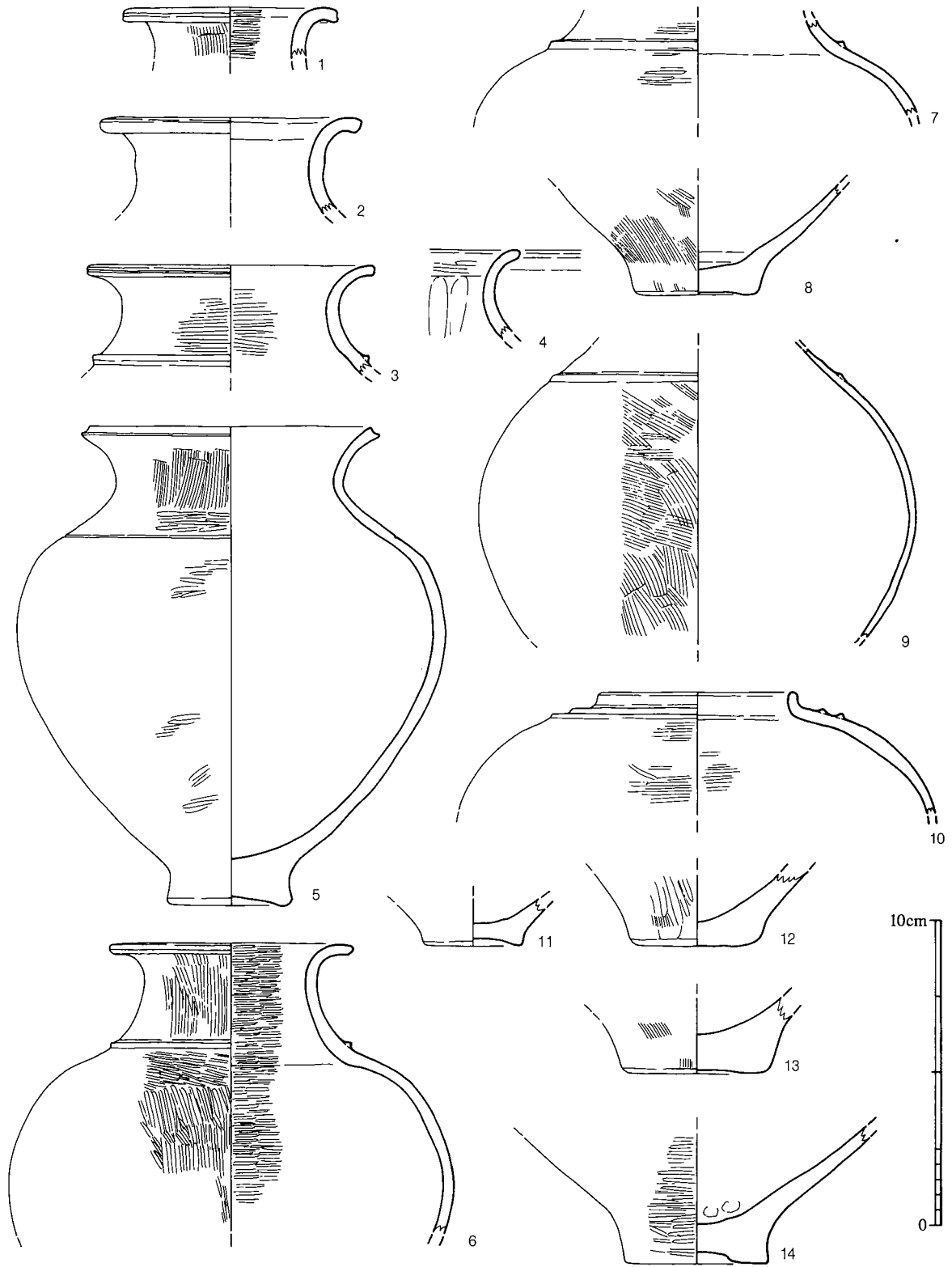
壺（1～14） 1は口縁部が大きく外反し、上面が外傾する小型壺。端部は沈線状の窪みを有す。内面横ヘラミガキ、外面縦ハケ目調整を行う。口径14.1cm。2もやはり口縁部が大きく外反し、上面がわずかに外傾する。端部は丸くおさめる。全体的に風化が進むが、一部ハケ目が観察される。口径17.0cm。3は肩部に三角突帯を一条巡らせ、口縁部は大きく開く。口縁端部は丸くおさめるが、その端部に一条の不明瞭な沈線を巡らす。内外面とも横ヘラミガキを行う。口径18.8cm。4は口縁部が外反し、端部は丸くおさめる。風化が進むが口縁部内面には横ヘラミガキが認められる。頸部内面には指ナデ痕が残る。

5は完形に復元できる壺。底部は厚く、やや上げ底となる。端部は丸く、裾はわずかに開く。胴部は最大径が中位よりやや上に位置し、肩部には一条の沈線を巡らす。口縁部は大きく外反し、端部は非常に太い沈線を巡らす。胴部内面はナデ、頸部外面は縦ハケ目の後沈線付近のみ横ヘラミガキ、胴部は横ヘラミガキを行う。底径8.1cm、胴部最大径28.0cm、口径19.4cm、器高31.5cm。6は肩部が大きく張り、最大径が上位に位置する。頸部は内傾し、頸胴境に一条の三角突帯を巡らす。口縁部は強く外反し、上面は外傾する。端部は丸くおさめる。内面は横ヘラミガキ、外面は頸部縦ハケ目後縦ヘラミガキ、肩部横ヘラミガキ、胴部縦ヘラミガキを行う。口径15.9cm。

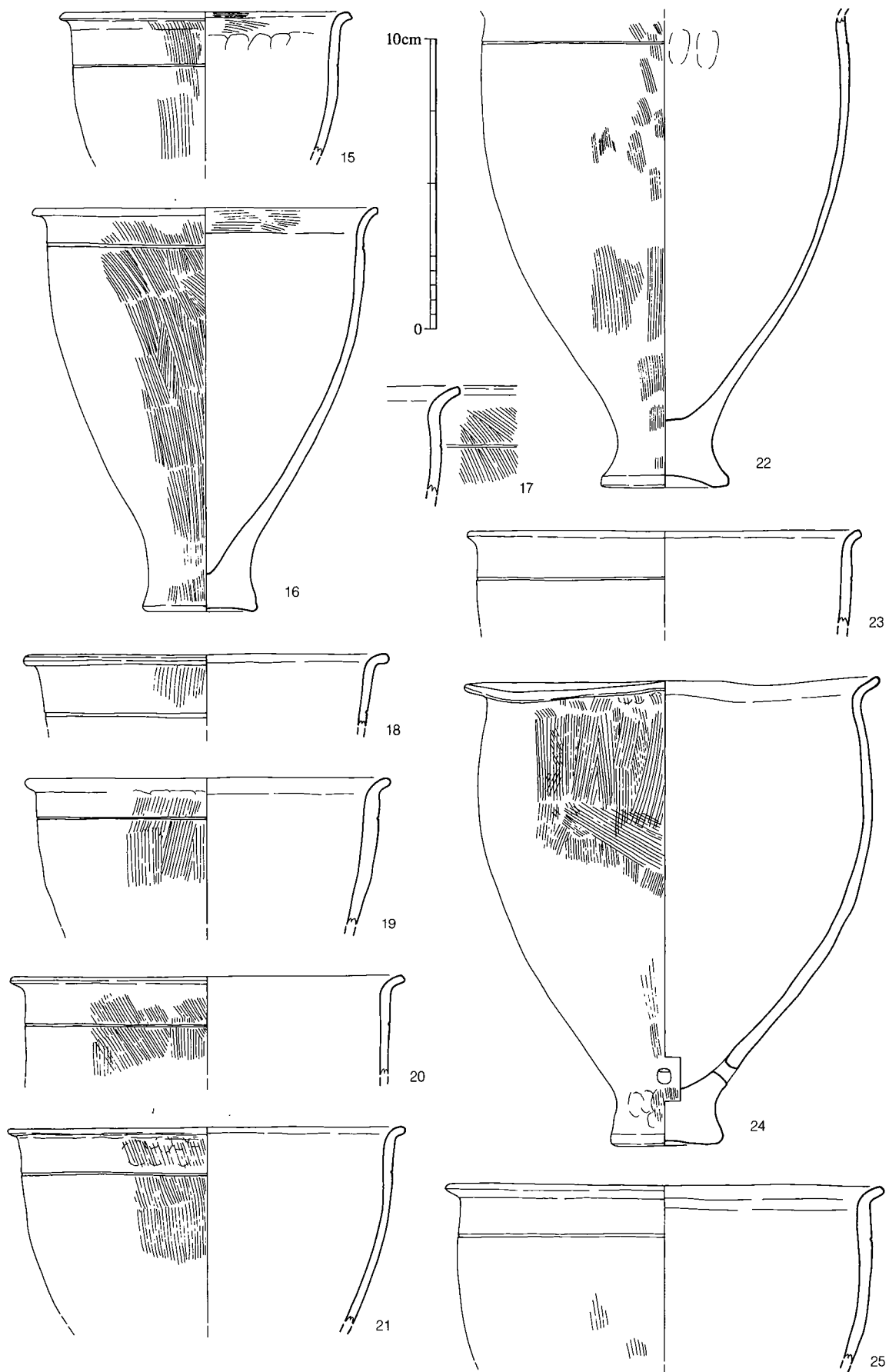
7と8は接合しないが同一個体。底部はあまり厚くならず底面は平坦になる。端部はあまり明瞭な稜をもたず、また底部と胴部の境も不明瞭である。頸胴境には一条の三角突帯を巡らせ、頸部は内傾する。肩部内面はナデ、外面は横ヘラミガキ、胴部下方は内面ナデ、外面縦ハケ目の後ヘラミガキを行う。底径8.2cm。9は球形胴で肩が張らず、最大径が中位に位置するやや異質な壺胴部。頸胴境に一条の低い三角突帯を一条巡らす。全体的に器壁が薄く作られている。内面は風化が著しく調整不明。外面はハケ目調整の後に粗いヘラミガキを行う。胴部最大径28.5cm。10は肩が丸味を帯び強く張る。頸部は強く締まり、口縁部は短く直立して端部を丸くおさめる。口縁部のすぐ下に二条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部は内外面ともに横ヘラミガキを行う。口径13.0cm。

11～14は壺底部。11は小型壺。底面はやや上げ底となり、端部は稜を有して割とシャープに仕上げる。底部と胴部の境目は不明瞭である。風化が著しく調整不明。底径6.4cm。12は底面が平坦で、端部は稜をもたず丸く仕上げる。底部と胴部の境は全くなく、底部からゆるやかに外反して胴部へと続く。内面はナデ、外面は縦ハケ目後に縦ヘラミガキを行う。底径8.5cm。13は底面がわずかに上げ底となり、端部は丸く稜をもたない。底部と胴部の境は全く認められない。全体的に風化が進むが、外面には一部ハケ目が残る。底径9.6cm。14は底面中央が大きく窪み、端部は鋭くシャープにつくられる。底部は直立し、緩やかに外反しながら胴部へと続く。内面はナデ調整を行い、底部付近には指圧痕が認められる。外面は横ヘラミガキ、底面はナデ調整を行う。底径9.3cm。

甕（15～67） 15～35は如意形口縁の甕である。15は胴部上半が直立し口縁部が短く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部内面は横ハケ目後横ナデ、胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目を行う。口径20.0cm。16は胴部の張りが少ない完形の甕。底部はわずかに上げ底となり裾はやや開く。端部はシャープにおさめる。胴部下半はあまり開かず立ち上がり胴部上半は直立する。口縁部は緩く開いて端部は丸くおさめる。外面口縁部下のやや高い位置に一条の沈線を巡らす。口縁部内面は横ハケ目後横ナデ、外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目、底面はナデを行う。口径23.5cm、底径7.4cm、器高27.8cm。17は胴部が直



第50图 34号土坑出土土器实测图① (1/4)



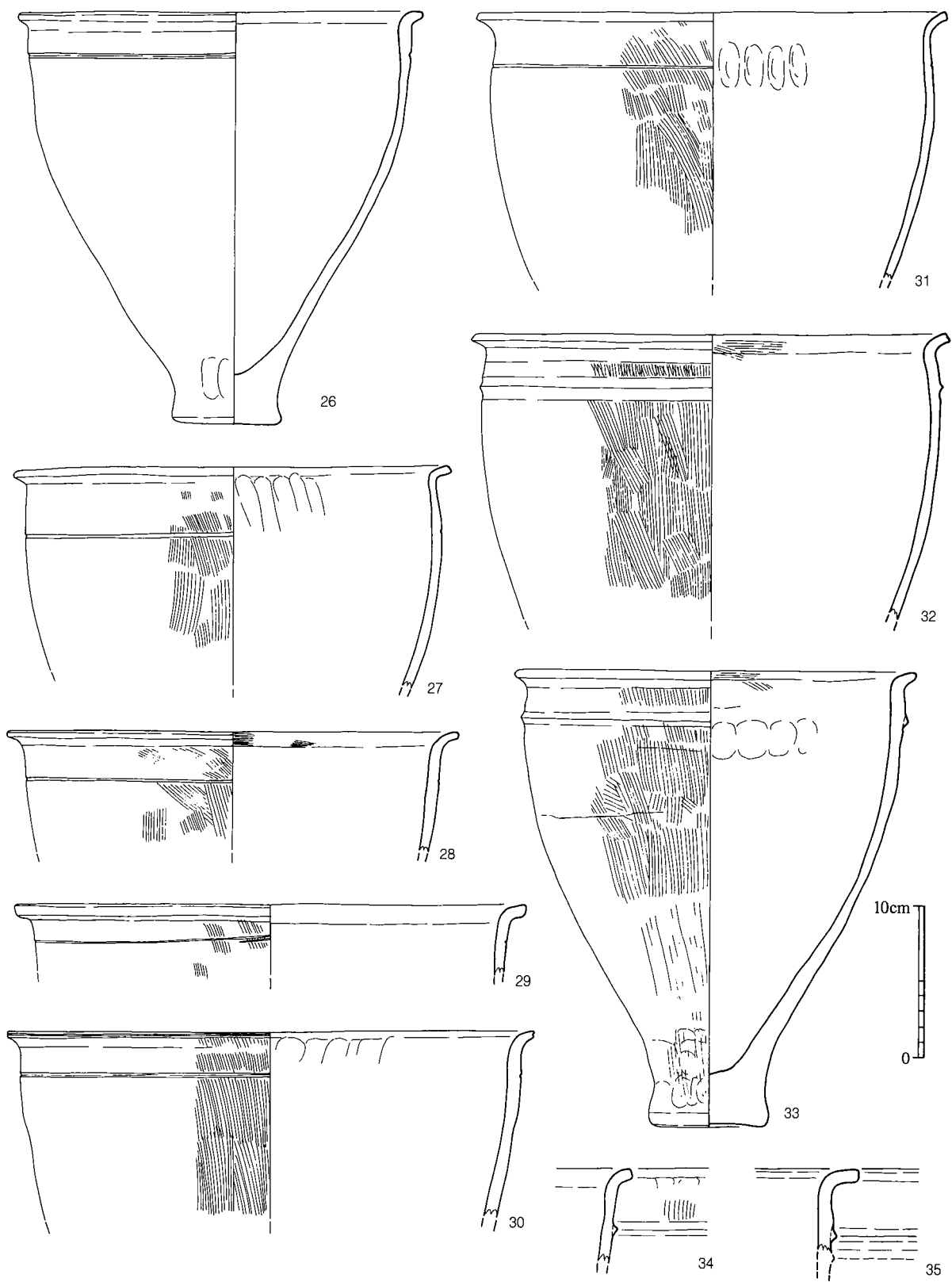
第51图 34号土坑出土土器实测图② (1/4)

立し口縁部が比較的長く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。18は胴部上半がわずかに開き、口縁部が短く強く外反する。外面口縁部下に幅広の沈線を一条巡らせる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。口径25.0cm。19は器壁が非常に厚い。胴部上半は直立し、口縁部は短く外反する。口縁部の器壁は薄くなり、端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部内面横ハケ目後横ナデ、外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径25.0cm。20は胴部が直立し口縁部が短く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦・斜ハケ目調整を行う。口径27.0cm。21もまた胴部上半が直立し口縁部が短く強く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径27.2cm。

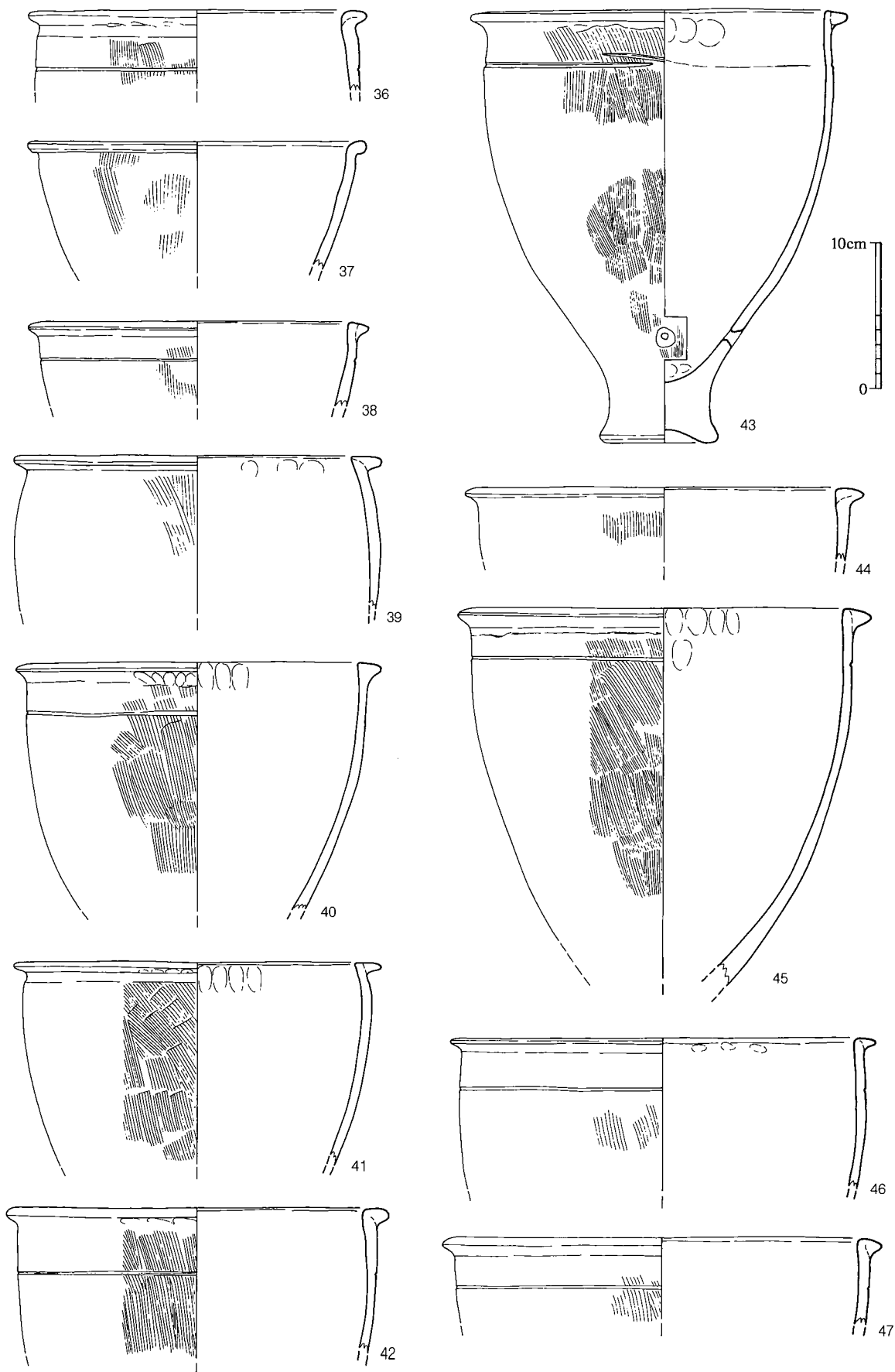
22は口縁部を欠失する。底面は大きく窪み裾は大きく開く。端部は稜を有して割とシャープにつくられる。胴部上半は直立する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。内面口縁部下には口縁部を屈曲させた際の指オサエが残る。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.7cm。23も胴部が直立し口縁部が短く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。器表の風化が著しく調整は不明。口径27.0cm。24は器高に対して幅広の胴部となる甕。底部はわずかに上げ底となり裾は開き端部は丸くおさめる。胴部下半は他に比べて大きく開き、胴部上半はわずかに内傾する。口縁部は大きく長く外反し、端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は短いハケ目を雑に施す。胴部下方に焼成後の穿孔を行い甑に転用している。口径28.7cm、底径7.2cm、器高31.9cm。25もまた胴部が直立し口縁部が短く強く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径30.0cm。

26は器高の割に口径が大きな甕。底面は平坦で裾はほとんど開かず低い柱状になる。端部は丸くシャープさに欠ける。胴部下半は直線的に開き、上半は直立する。口縁部は短く強く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は強い二次加熱を受け器表が剥落しており調整不明。口径26.9cm、底径6.9cm、器高27.6cm。27は胴部上半がやや内傾し丸味を帯びる。口縁部は短く強く外反する。外面口縁部下に一条の幅広の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、内面胴部上半は指ナデが明瞭に観察される。外面は縦ハケ目。口径29.1cm。28は胴部上半がやや開き気味に立ち上がり、口縁部が短く強く外反する。口縁部の器壁はやや薄く、端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデを行うが、内面には横ナデの前の横ハケ目が残る。胴部内面はナデ、外面は斜ハケ目調整を行う。口径30.0cm。29は胴部上半が開き気味に立ち上がり、口縁部が短く水平近くまで強く外反し、端部を面取りして四角くおさめる。外面の口縁部すぐ下に一条の沈線を巡らす、やや歪んでおり端部が接しない。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径34.0cm。30は胴部の張りがほとんどなく上半は外傾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁部はやや薄くなり、端部には一条の沈線を巡らす。また口縁部下にも一条の沈線を巡らす。口縁部はナデ、胴部上半は縦指ナデ、外面は縦ハケ目を行う。口径35.0cm。31は胴部がやや丸味を帯び上半が直立し、口縁部は外反する。端部は面取りし四角く仕上げる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、内面口縁部下は指ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目を行う。口径31.6cm。

32は胴部が丸味を帯び上半は内傾する。口縁部は短く外反し端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には三角突帯を一条巡らす。口縁部内面は横ハケ目後横ナデ、口縁部外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。口径32.0cm。33は完形品。底部は高く裾がほとんど



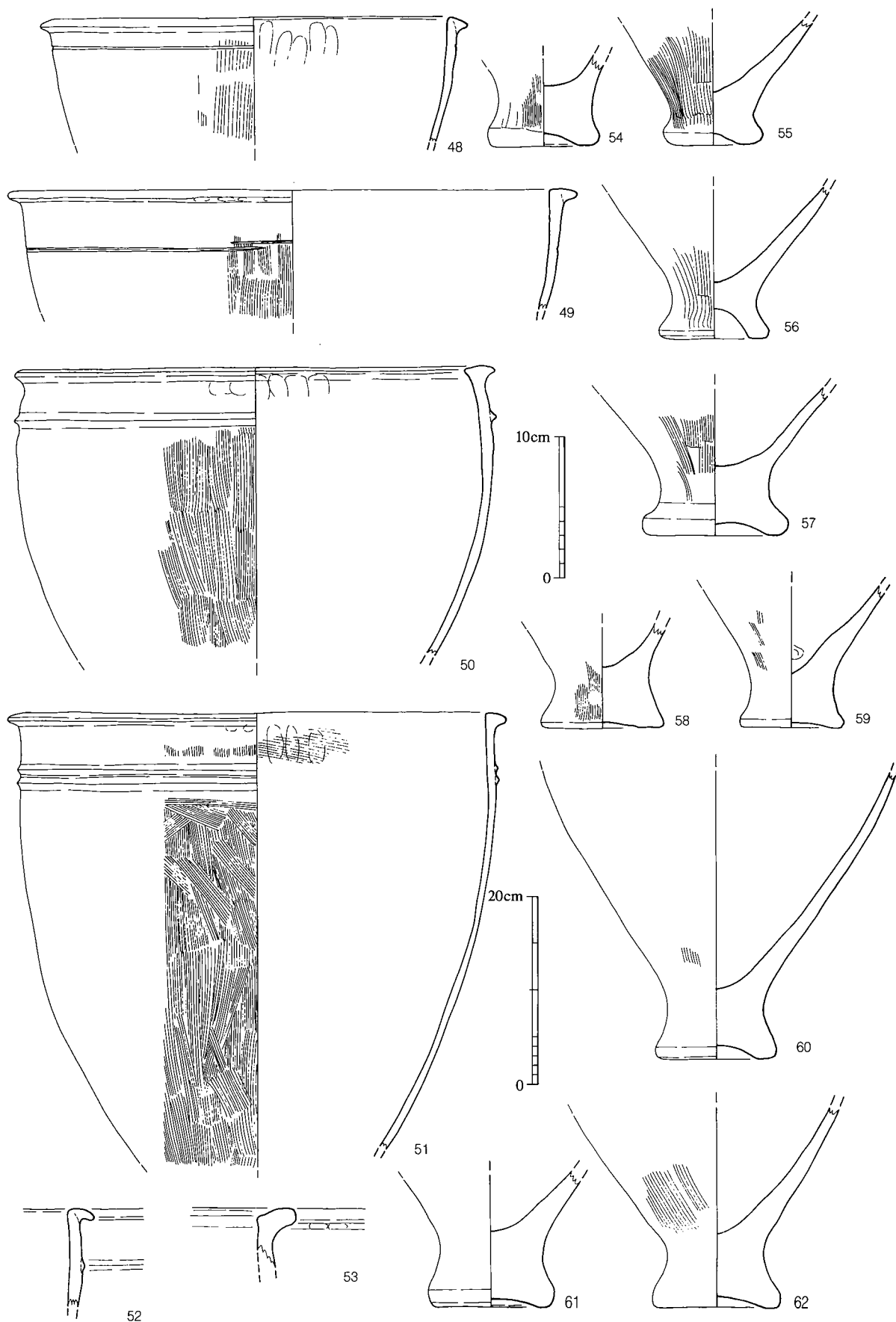
第52图 34号土坑出土土器实测图③ (1/4)



第53图 34号土坑出土土器实测图④ (1/4)

開かない。底面はほぼ平坦で端部は丸くおさめる。胴部はあまり丸味を帯びず上半は直立する。口縁部は短く強く外反して三角口縁に似る。端部は丸い。外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデを行うが、内面には横ナデ前の横ハケ目が観察される。突帯の内側には突帯を貼付した際の指圧痕が残る。胴部内面ナデ、外面は短いハケ目を行う。全体的に器壁が厚く、またシャープさに欠ける。口径26.7cm、底径7.4cm、器高30.4cm。34は胴部上半がやや外傾し、口縁部が短く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。35は胴部上半が直立し口縁部は水平近くまで折り曲げる。端部は面取りして四角くおさめる。口縁部下には二条の三角突帯を巡らす。全面ナデ調整。

36～52は三角口縁の甕。36は胴部上半が内傾し、口縁部上面は外傾する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目を施す。口径23.0cm。37は胴部上半が開いており、鉢の可能性もある。口縁部は三角というより丸くおさめられる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径23.0cm。38も胴部上半がやや開き、口縁部は小さな三角口縁となる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径23.0cm。39は胴部上半がやや内傾し、口縁部上面が水平になる。口縁部内面には粘土紐を貼付した際の指圧痕が残る。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整。口径25.0cm。40は胴部上半が直立し、口縁部はシャープで小さな三角口縁となる。上面は外傾し、さらに口縁部内面及び外面下部には口縁の粘土紐を貼付した際の指圧痕が認められる。胴部には一条の沈線を巡らす。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径24.8cm。41は胴部上半が内傾し、胴部がやや丸味を帯びる。口縁部は小さく薄い三角口縁となり、上面はほぼ水平になる。口縁部内外面に粘土紐を貼付した際の指圧痕が認められる。胴部内面ナデ、外面斜ハケ目を行う。口径25.0cm。42は胴部上半が直立し、口縁部上面は丸味を帯びて外傾する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面長い縦ハケ目。口径26.0cm。43は完形品。底部は高く、底面は上げ底で裾が短く開き、端部は丸くおさめる。胴部は丸味を帯び上半はやや内傾する。胴部下方には焼成後の穿孔があり、甌として転用している。口縁部は小さな三角口縁となり、上面はほぼ水平になる。口縁部内面には指圧痕が残る。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。端部が接していない。内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行うが、口縁部付近と胴部とではハケ目の工具が異なる。口径25.8cm、底径7.0cm、器高29.7cm。44は胴部上半が直立し、口縁部上面は丸味を帯びて外傾する。端部はシャープに仕上げる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径27.0cm。45も胴部上半が直立し、口縁部上面は丸味を帯びて外傾する。外端部は尖りシャープに仕上げられる。口縁部内面には指圧痕が明瞭に残る。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。胴部内面ナデ、外面細かい縦ハケ目。口径28.2cm。46は胴部が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は外傾するものの、ほとんど水平に近い。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデを行うが、内面には横ナデ前の指圧痕が残る。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径29.0cm。47は胴部上半がわずかに開き、口縁部上面は丸く外傾する。外端部は尖りシャープに仕上げられる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径30.0cm。48は胴部上半が開き気味に立ち上がり、口縁部は小さな三角口縁となり上面は外傾する。外端部は尖り気味にしておりシャープに仕上げる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部内面には縦指ナデが認められる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径30.0cm。



第54図 34号土坑出土土器実測図⑤ (51 : 1/6、他は1/4)

49はやや大型の甕。胴部上半は直立し、口縁部上面はほぼ水平になる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。起点と終点が一致せずずれている。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。口径40.0cm。50もやや大型の甕。胴部は丸味を帯び上半は内傾する。口縁部は小さな三角口縁となるが、上面は水平に伸び、さらに内端は小さく突出する。外面口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。口縁部内外面に指圧痕が認められる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径33.6cm。

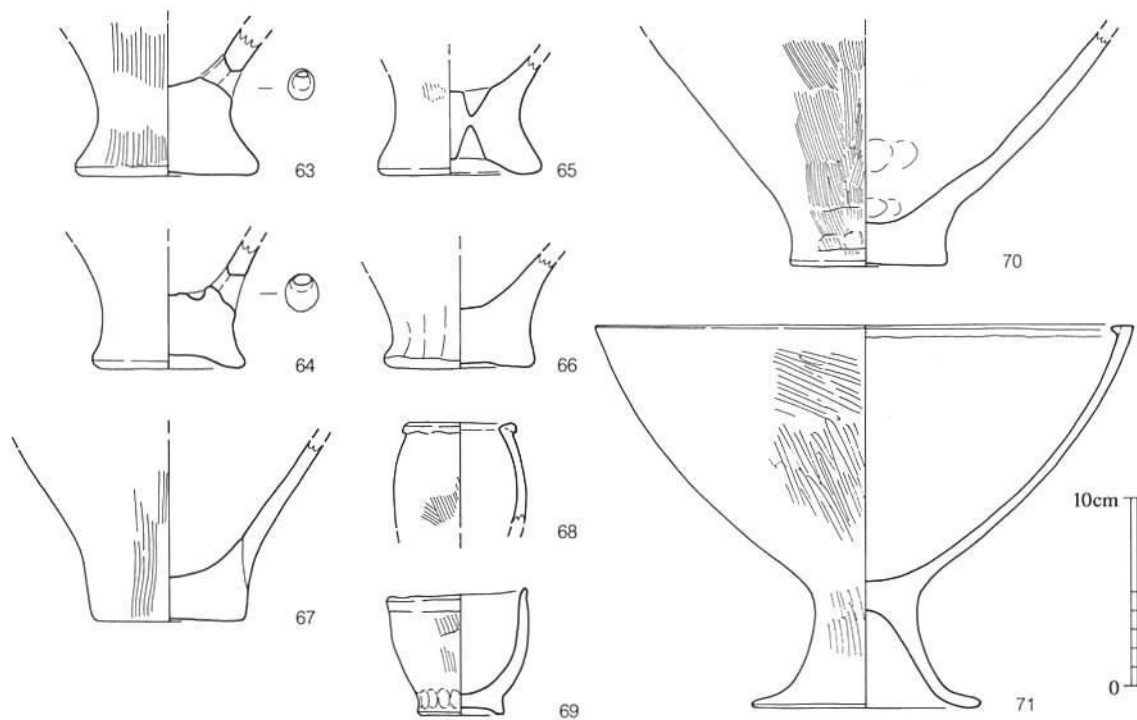
51は口径53.1cm、胴径50.7cmを測る非常に大型の甕。胴部上半は直立し口縁部上面は外傾する。外面口縁部下には二条の三角突帯を巡らせる。口縁部内面は横ハケ目の後に指オサエを行い、さらに横ナデを行っている。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目を行う。52は胴部上半が直立し、口縁部が小さな三角口縁となる。口縁部上面は外傾し、外端部は丸く下方に垂れた形となる。外面口縁部下に低い一条の突帯を巡らす。風化が著しく調整不明。53は口縁部が短く外反し、内面に粘土紐を貼付して肥厚させるものである。内端は低く不明瞭な三角形となる。

54～67は甕の底部。54は高い柱状の底部となる。底面は深く窪み裾は長めにやや開く。端部は丸く仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.8cm。55は底面が深く窪み裾は短く大きく開く。端部は丸い。胴部は直線的に開く。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.0cm。56は底面が大きく窪み裾が大きく開き、高台状となる。端部は丸い。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.8cm。

57はやや大型のものである。底面が上げ底となり裾は大きく短く開き、端部は丸く仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径10.2cm。58は高い底部のものである。底面が平坦で裾は大きく長く開き、端部を三角形にシャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.6cm。59は底部がわずかに上げ底となり裾はやや開き端部はシャープに仕上げる。胴部はあまり開かず直線的に伸びる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.4cm。60は底面がやや窪み、裾は長くやや開く。端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かずわずかに丸味を帯びて立ち上がる。内面ナデ、外面はほとんど風化するがわずかに縦ハケ目が観察される。底面はナデ。底径8.5cm。61は底面がわずかに上げ底となり裾はやや開く。端部は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。底径6.8cm。62は底部がやや上げ底となり裾が大きく開く。端部は丸味を帯びた三角形に仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ調整。底径9.0cm。

63は底面が平坦で裾が大きく開き、端部は丸味を帯びた三角形に仕上げる。胴部下方に焼成後に両面穿孔を行い甑とする。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径9.6cm。64は底面がやや上げ底で裾が開き、端部は比較的シャープに仕上げる。風化が著しく調整不明。胴部下方に焼成後に両面穿孔を行い、さらにその内側には内面からの穿孔途中で諦めた円孔がある。底径8.1cm。65は底面が窪み裾が大きく開き端部は丸味を帯びた三角形に仕上げる。底部内外面に焼成後に穿孔を試みているものの、貫通していない。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.6cm。

66は底面がほぼ平坦で裾が短く開き、端部はシャープに仕上げる。底部はそれほど高くはない。内面ナデ、外面は裾付近に縦指ナデが認められる。底面ナデ。底径8.0cm。67は高い柱状部をもたない底部。裾は全く開かず底部と胴部の境目はない。底面は平坦で端部はシャープな稜をもつ。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。



第55図 34号土坑出土土器実測図⑥ (1/4)

鉢 (68~70) 68は甕の形状に近い小型の鉢。胴部は丸味を帯び上半は内傾する。口縁外端に小さく粘土を貼付し肥厚させる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面ハケ目調整。胎土には比較的精良な粘土を使用する。口径5.6cm。69は断面三角形の低い高台をもち、胴部上半は直立して口縁部はわずかに外反する小型の鉢。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は粗い縦ハケ目。底部外面には明瞭な指圧痕が認められる。口径7.4cm、底径4.6cm、器高6.4cm。70は胴部が大きく開くことから鉢とした。底部は低い柱状となる。底面は平坦で端部は鋭い稜をもつ。胴部は大きく開いてわずかに内湾する。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ調整。底径8.1cm。

台付鉢 (71) 71は低い脚部をもった台付鉢である。裾は大きく開き、さらに端部は外反して大きく開く。体部はやや内湾しながら大きく開く。口縁端部は内面に小さな三角突帯を貼付し、内側へと短く突出する。上面は水平に伸びる。内面は風化が進み不明瞭だがナデか。外面の口縁部付近は横ヘラミガキ、下半は斜ヘラミガキ、脚部は縦ヘラミガキ、脚部内面はナデ。口径29.5cm、裾径12.1cm、器高20.4cm。

出土土器は全て弥生時代中期初頭に比定できるものであり、器種も豊富で非常に良好な一括資料である。

35号土坑 (図版17、第56図)

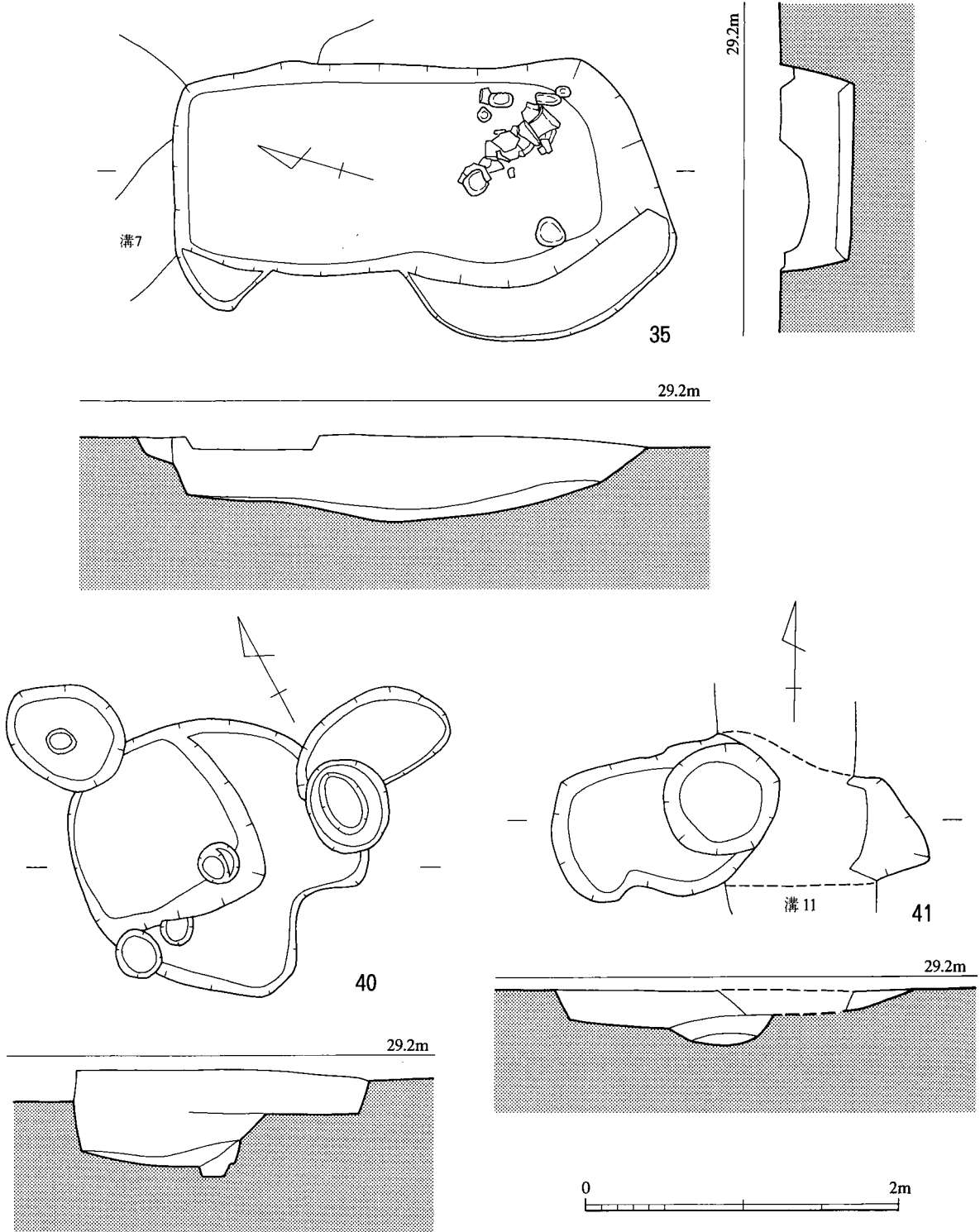
調査区東端に位置する土坑で、7号溝に切られる。平面形は南側がやや崩れるものの、底



35号土坑土器出土状態

面のプランは整った長方形プランである。長軸310cm、短軸185cmを測る。底面は中央が若干深くなっており、深さ55cmを測る。遺物は南側からまとまって出土した。底面からかなり浮いた状況で出土している。破碎された状況にあり、投棄されたものと思われる。

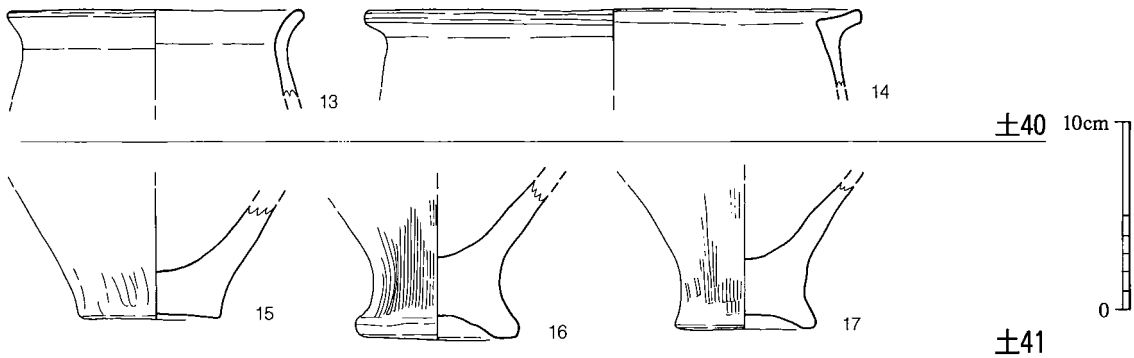
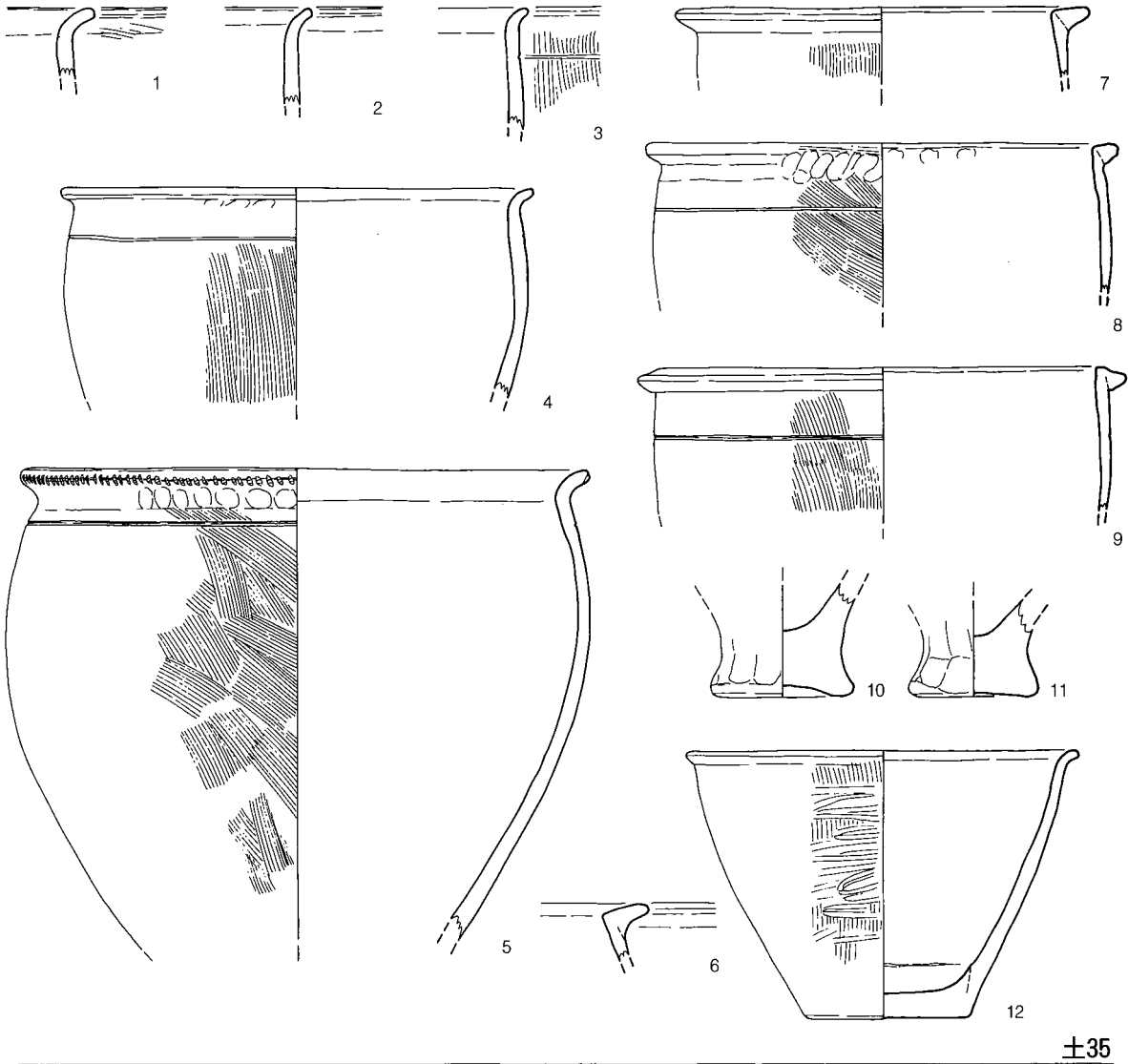
出土遺物には図示した土器の他、47の砥石、73の石鏃が出土している。



第56図 35・40・41号土坑実測図(1/40)

出土土器（図版50、第57図）

甕（1～11） 1～5は如意形口縁の甕。1は口縁部付近が直立し口縁部が短く外反する。端部は丸くおさめる。全体的に風化が進むが口縁部外面には横ハケ目が観察される。2は胴部の口縁部付近が直立し、口縁部が短く緩く外反する。口縁部は胴部に比べて器表がやや薄く、端部は四角くおさめる。風化が著しく調整不明。3は口縁部付近がわずかに内傾し、口縁部が短く外反する。端部



第57図 35・40・41号土坑出土土器実測図（1/4）

は丸い。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。4は胴部上半がやや内傾し、胴部が丸味を帯びる。口縁部は短く強く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.0cm。5は口縁下端部にハケ目工具による刻目を入れる。胴部最大径がかなり上位にあり、上方は内傾する。口縁部は強く外反する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は短いハケ目を行う。口径31.4cm、胴部最大径32.3cm。

6～9は三角口縁の甕。6は口縁上面が内傾し、また直線的に伸びており逆L字状に近い。外端部は丸い。7は口縁部付近がわずかに内傾し、口縁部上面は水平方向に短く伸び逆L字状に近い。内端にはしっかりとした稜を形成する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径22.8cm。8は胴部上半が直立し、口縁部上面は水平に仕上げる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部内外面に粘土貼付の際の指圧痕が認められる。胴部内面ナデ、外面斜ハケ目。口径26.0cm。9は胴部上半が直立し、口縁部上面は外傾する。口縁部には強い横ナデを加え整った断面三角形に仕上げる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口径27.0cm。

10・11は甕底部。10はやや上げ底で裾が開き、端部は丸くおさめる。全体的に風化が著しいが、外面に指圧痕が残る。底径7.9cm。11は底面が平坦で裾が開き、端部は丸くおさめる。風化が著しいが外面には整形の際の指ナデが残る。底径7.1cm。

鉢 (12) 12は平底の鉢。底部と胴部の境目はなく、底部から胴部へと直線的に開く。口縁部は短く外反する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目後粗い横ヘラミガキ。口径21.8cm、底径9.2cm、器高15.1cm。

5は口縁部下端に刻目を有しており古い特徴を残すものの、それ以外に関しては弥生時代中期初頭としてよいだろう。

40号土坑 (第56図)

調査区東側に位置する不整形の土坑である。長軸190cm、短軸175cmを測る。底面は南側から東側にかけてテラス状の段を有し、西側は段を持って深くなる。最深部で60cmを測る。

出土土器 (第57図)

甕 (13・14) 13は如意形口縁の小型甕。胴部上半はやや内傾し、口縁部は緩く外反する。端部は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。口径15.6cm。

14は短い逆L字状口縁の甕。胴部上半はやや内傾し口縁部上面は内傾する。口縁内端は鋭い稜を有し、シャープに仕上げる。風化が著しく調整不明。口径26.2cm。

14は弥生時代中期前半のものであり、土坑の時期もこの頃とみて良いだろう。

41号土坑 (図版18、第56図)

調査区東側に位置する土坑で、11号溝に大きく切られる。復元すると、長軸240cm、短軸100cmの不整形長方形プランになる。中央付近が浅くピット状に窪んでおり、このピットまでの深さは35cmを測る。

出土土器 (第57図)

壺 (15) 15は底面がやや上げ底になり端部がシャープな稜をもつ。底部と胴部の境目はほとんど

なく、わずかに湾曲する程度である。底部の器壁は厚い。内面は風化が進み調整不明。外面は縦方向のヘラミガキがかすかに認められる。底面はナデ。底径7.5cm。

甕 (16・17) 16は底面が大きく窪み、裾が開き端部を丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.6cm。17は底面が大きく上げ底となり、裾はやや開き端部は三角形に近く薄く作られる。内面ナデ、外面縦ハケ目。底面ナデ。底径7.4cm。

出土土器からこの土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

42号土坑 (第58図)

41号土坑の南側に位置する長方形の土坑で、7号溝に切られる。長軸200cm、短軸110cm、底面は中央が最も深く、深さ85cmを測る。遺物は割とまとまって出土している。

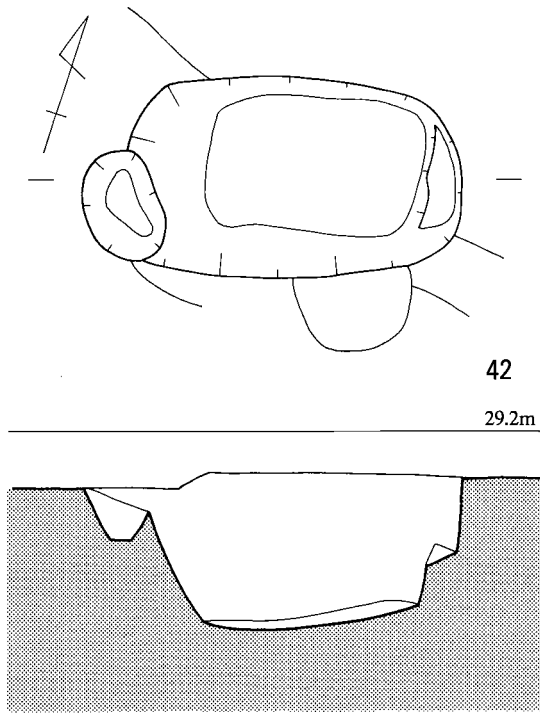
出土土器 (図版50、第59図)

壺 (1～3) 1は頸部が内傾し、口縁部が大きく外反する壺。端部は面取りして断面四角形に仕上げる。外面のハケ目調整が観察される。口径17.6cm。2は肩部の張りが弱く頸部が内傾し、口縁部は大きく開いて上面が水平近くにまでなる。肩部には二条の三角突帯を巡らせ、また口縁端部に一条の沈線を巡らせる。全面的に風化が著しいが、口縁部下にわずかにハケ目が認められる。口径16.9cm。3は口縁部が直線的に開く壺。胎土は弥生土器に似るが、古墳時代土師器の混入品であろう。口径15.8cm。

甕 (4～12) 4～8は如意形口縁の甕。4は小型の部類に含まれる。胴部は丸味を帯びず外傾し、口縁部は短く外反する。端部は器壁が薄く尖り気味に仕上げられる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面には縦方向のナデの稜線が残る。外面は長いハケ目。口径19.6cm。5は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデを行うが、内面には横ナデ前の横ハケ目が残る。胴部内面はナデ、外面は細かい縦ハケ目を丁寧に行う。口径23.4cm。6は完形品。底部は高い柱状部をもち、底面は深い上げ底となる。裾は若干開き端部はやや丸味を帯びた三角形に仕上げる。胴部は上半で直立し、口縁部は緩く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデを行うが内面には横ナデ前の横ハケ目がかすかに残る。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径23.9cm、底径7.7cm、器高29.0cm。7は胴部上半が直立し、口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部は短く外反し、端部は四角くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は内面横ハケ目後横ナデ、胴部は内面ナデ、外面縦ハケ目。口径25.0cm。8は胴部上半がわずかに開き、口縁部が強く短く外反する。口縁部は強い横ナデのために器壁がやや薄くなり、端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には一条の細い沈線を巡らす。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。口径28.2cm。

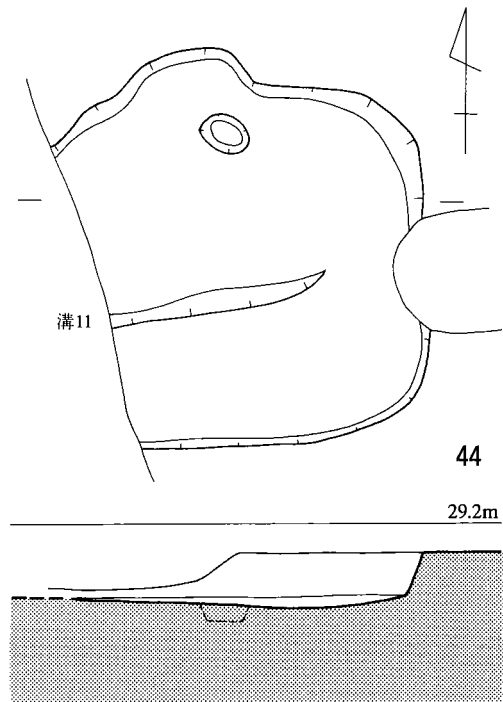
9・10は三角口縁の甕。9は胴部上半が内傾し、胴部が丸味を帯びた器形になる。口縁部はやや大きめの三角口縁となり、上面は丸味を帯びて外傾する。口縁部内外面に粘土紐を貼付した際の指圧痕が残る。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす、上下に蛇行しており起点と終点が接しない。胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目調整を行う。口径26.2cm。10は口縁部付近が内傾し、口縁部上面が水平に伸びる。風化が著しく調整不明。口径33.4cm。

11は柱状となる底部。底面は窪み、裾は開いて端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面は風化のため調整不明。底径8.9cm。12は大型の甕となろう。底面中央は大きく窪み、裾が大きく開き、端部



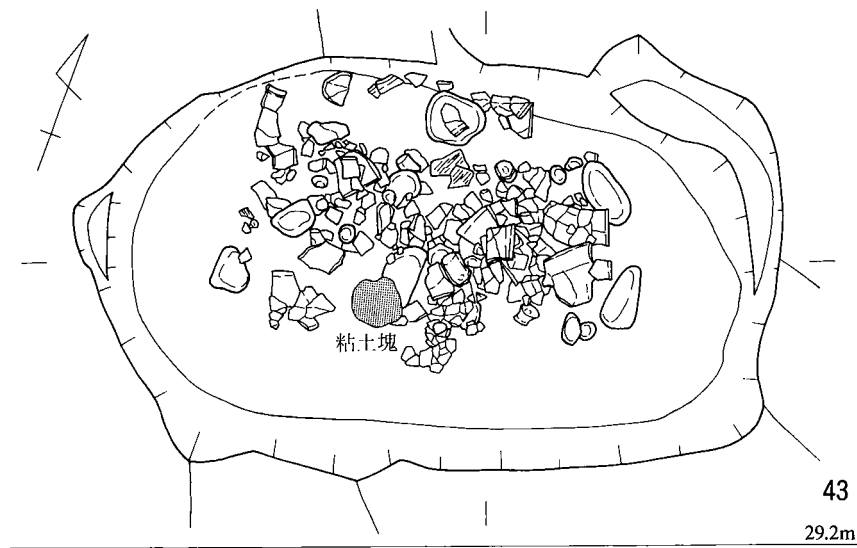
42

29.2m



44

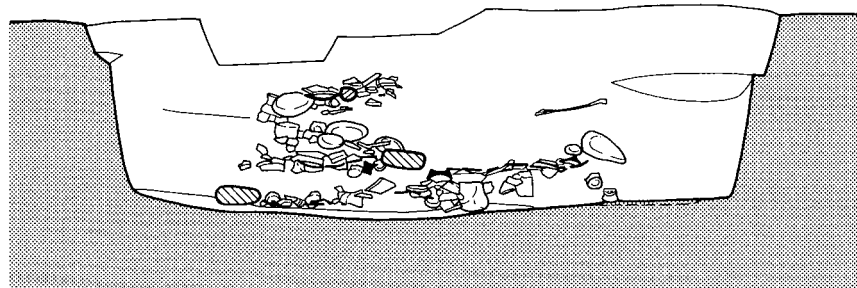
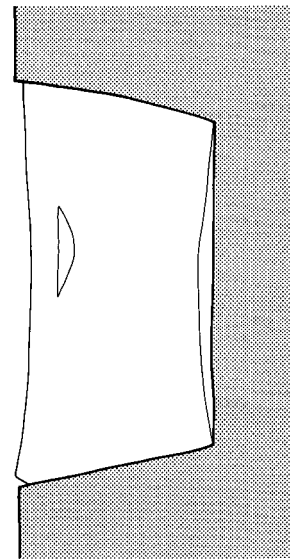
29.2m



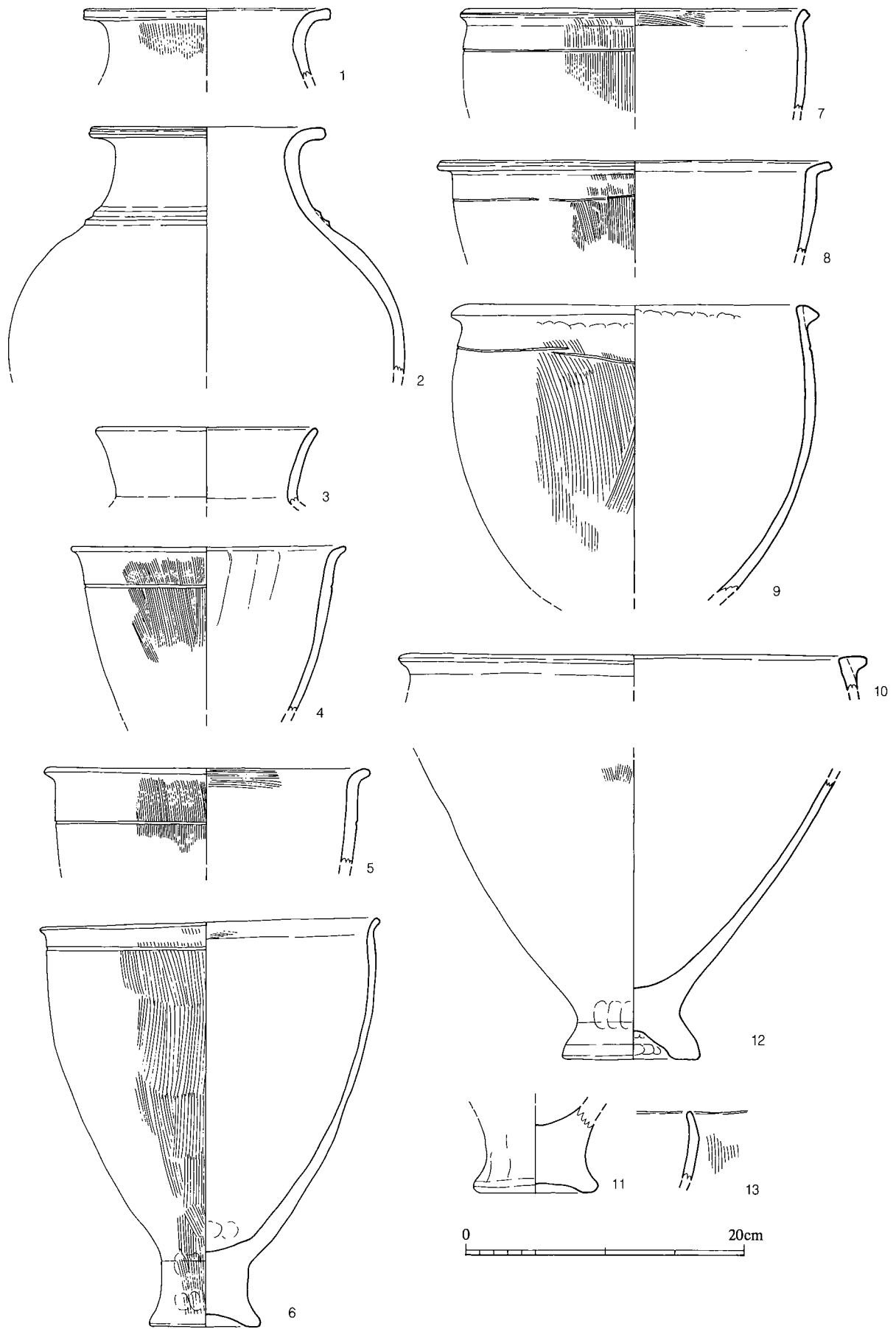
43

29.2m

29.2m



第58图 42~44号土坑实测图 (1/40)



第59图 42号土坑出土土器实测图 (1/4)

は丸味を帯びた三角形に仕上げる。底部と胴部の境には指圧痕が明瞭に認められる。胴部内面ナデ、外面はほとんど風化するが、一部縦ハケ目が観察される。底面には指圧痕が認められる。底径9.8cm。

鉢 (13) 小片であり全体の器形は判然としないが、鉢とした。胴部は直立気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部は器壁が薄くなり、端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。

出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。良好な一括資料である。

43号土坑 (図版18、第58図)

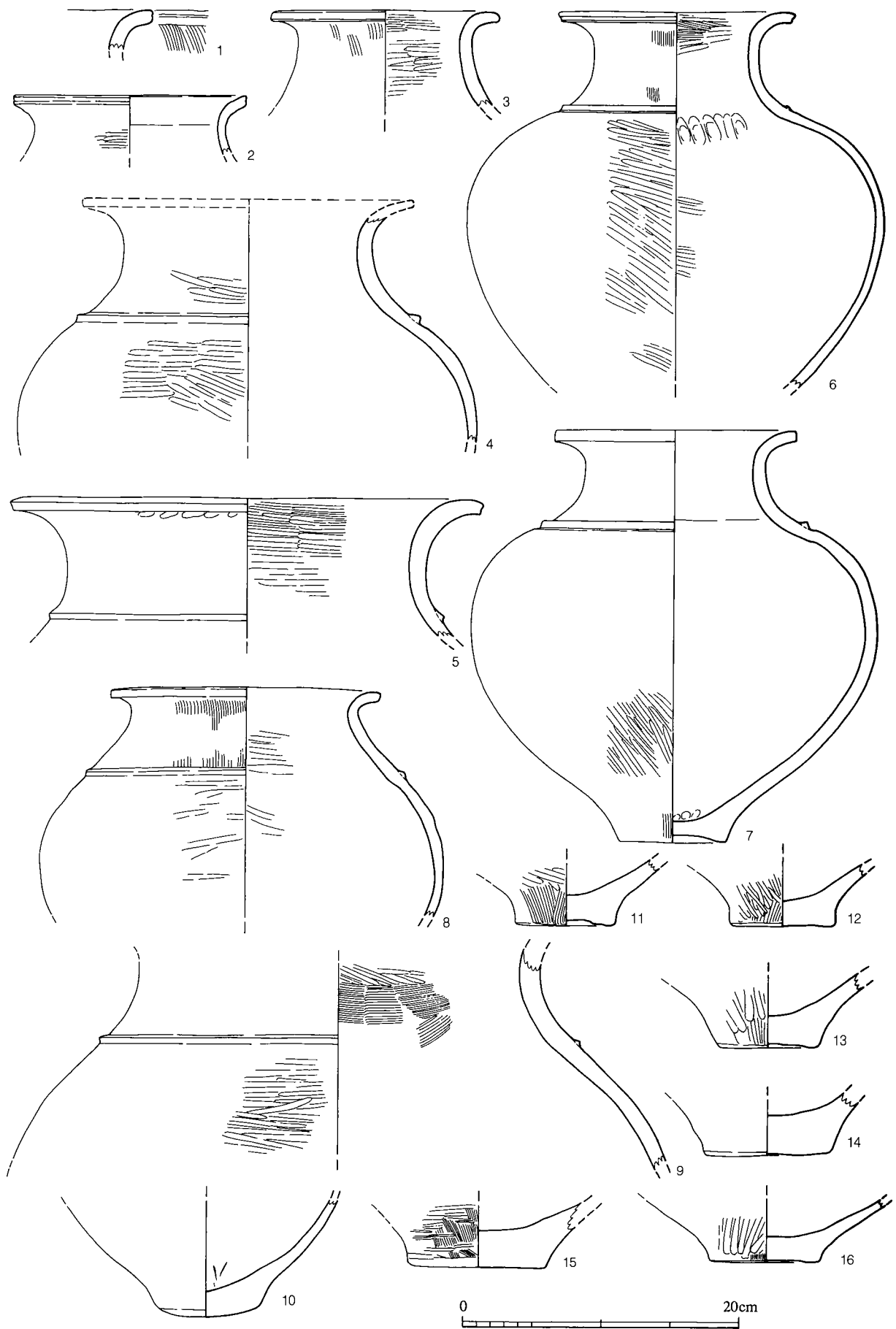
調査区東側に位置する長方形プランの土坑で、7・10号溝に切られる。長軸360cm、短軸215cmを測り、大型の部類に属する。土坑底面はほぼ平坦で、深さ105cmを測る。壁は急な立ち上がりとなる。土坑内部からは多量の土器・河原石等が出土したが、この出土状況から埋没過程において大きく3回に亘って土器が廃棄された様子が見て取れる。

出土遺物には図示した土器の他、41の砥石、91・101のスクレイパー、140の扁平片刃石斧、144・145の柱状片刃石斧、170の石包丁、177の石包丁未製品が出土している。

出土土器 (図版50~52、第60~64図)

壺 (1~16) 1は口縁部が大きく外反する壺の口縁部。端部に一条の沈線を巡らす。外面には縦ハケ目が残る。2は頸部が内傾し、口縁部が外反するが他と比べると外反度が弱い。端部は面取りし沈線状の浅い窪みを巡らす。全体的に風化が著しいが、頸部外面に一部横ヘラミガキが認められる。3は頸部が内傾しながら長く伸び、口縁部は強く外反して上面がほぼ水平になる。端部は丸い。内面は横ヘラミガキ、外面は口縁部下に縦ハケ目が残るが、その下は風化が著しく不明。口径16.4cm。4は口縁部を欠失するが、大きく外反する素口縁の壺になると思われる。肩部は大きく張り、強く内傾する。頸部から口縁部にかけては大きく外反する。頸胴境には一条の三角突帯を巡らせる。内面は風化が著しく調整不明。外面は横ヘラミガキを行う。肩部径33.0cm。5は大型の壺である。頸部が内傾し、口縁部が大きく長く外反して上面は外傾する。口縁端部は面取り整形し四角くおさめる。頸肩境に一条の三角突帯を巡らす。内面には横ヘラミガキが認められるものの、外面は風化のため調整不明。口径34.0cm。6は胴部最大径が上位にあり、肩の張る器形となる。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は大きく水平近く外反する。口縁端部には一条の太い沈線を巡らす。頸胴境には一条の三角突帯を巡らす。口縁部内面は横ハケ目後横ヘラミガキ、頸部内面はナデ、内面頸胴境には接合の際の指オサエが明瞭に残る。胴部内面は横ヘラミガキがかすかに残る。外面は頸部が縦ハケ目、胴部は横・斜ヘラミガキを行う。口径17.1cm、胴部最大径30.2cm。

7は完形品。底部は薄く、底面は上げ底となり、端部は鋭い稜をもちシャープにつくられる。底部と胴部の境は明瞭ではない。胴部は最大径がやや上位にあり、肩の張った器形になる。頸部は内傾しながら立ち上がり、口縁部は大きく外反する、口縁端部は面取り整形し四角くおさめる。外面の頸肩境に一条の三角突帯を巡らす。全体的に器表の風化が著しく調整が不明な場所が多いが、胴部下半は外面に斜ヘラミガキが残り、内面はナデを行う。内底部には指圧痕が残り、外底部はハケ目が認められる。8は肩部から頸部へと直線的に内傾し、口縁部が強く短く外反する。口縁部は水平近くまで大きく開き、端部は面取りして四角くおさめる。肩部には一条の三角突帯を巡らす。内



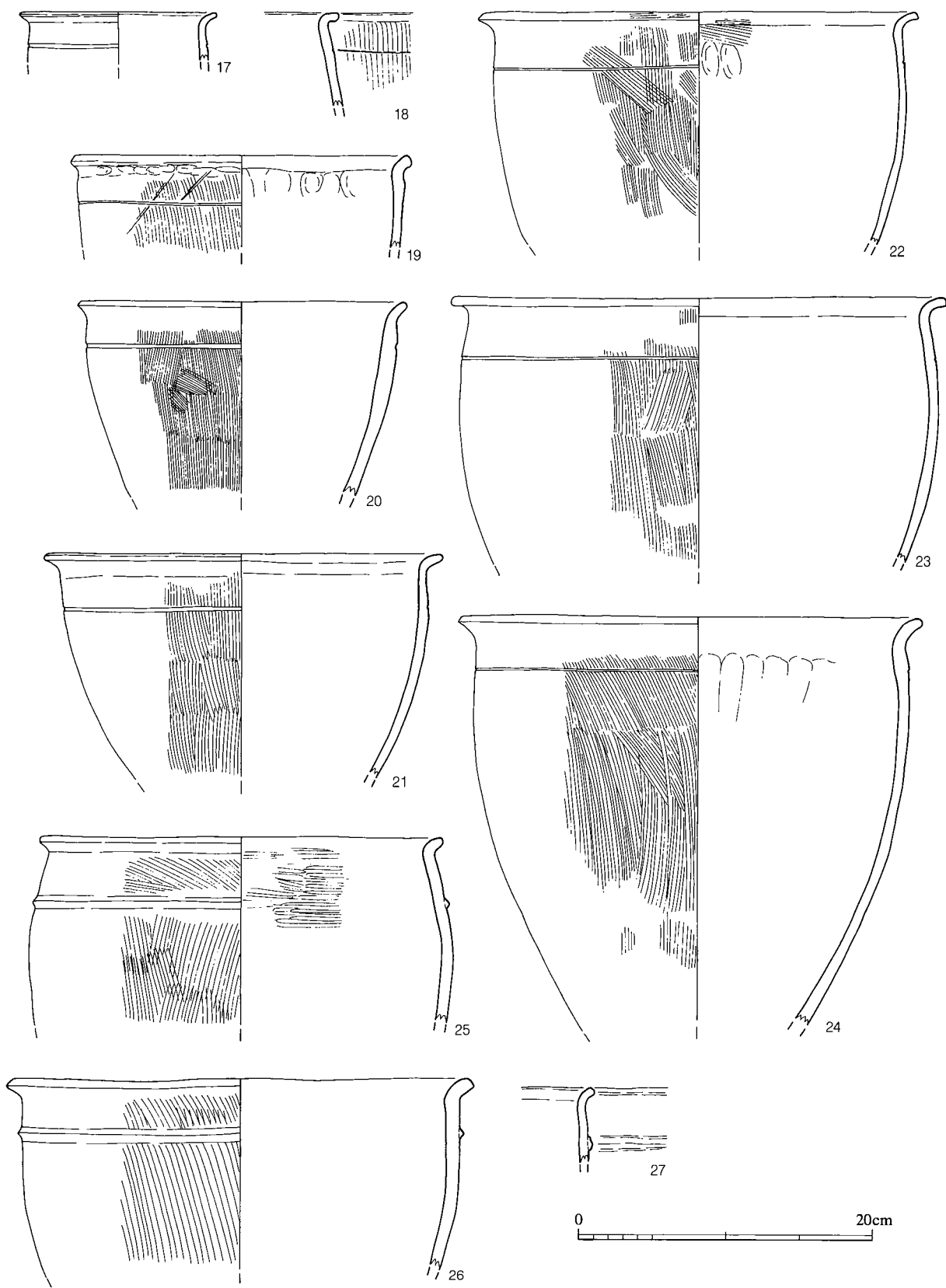
第60图 43号土坑出土土器实测图① (1/4)

面は横ヘラミガキ、外面は口縁部付近が縦ハケ目、胴部が横ヘラミガキを行う。口径19.4cm、胴部最大径29.1cm。

9は大型壺の肩部。肩部はやや丸味をもって内傾し、頸部は内傾しながら立ち上がる。頸肩境には一条の小さな三角突帯を巡らせる。頸部内面は横ハケ目後横ヘラミガキ、肩部外面は横ヘラミガキ、これら以外の場所は風化が進んでおり調整は不明である。

10～16は壺の底部。10は丸くレンズ状を呈し、不安定である。端部も丸味を帯び、明瞭な稜線を有していない。胴部は丸味を帯びて立ち上がる。底径7.2cm。11は底面中央が窪み、底部は低い高台状になる。端部はしっかりとした稜線を有しシャープにつくられる。胴部は大きく開き、底部と胴部の境目はあまり明瞭ではない。内面はナデ、外面は縦ハケ目の後に横ヘラミガキ調整を行う。底径7.2cm。12は底面が平坦で端部はしっかりとした稜線を形成する。底部外面は直立し、外反して大きく開く胴部へと続く。内面はナデ、外面は縦ハケ目後斜ヘラミガキを行う。底径7.6cm。13はわずかに上げ底となり、端部はやや丸くおさめる。外面の底部と胴部の境は全くなく、緩やかに外反して胴部へと続く。内面ナデ、外面縦ハケ目後縦ヘラミガキを行う。底径7.4cm。14は底部の器壁が厚い。底面はほぼ平坦で端部は丸味を帯び、外面の底部と胴部の境ははなく、外反しながら胴部へと続いている。風化が著しく調整不明。15は底面が平坦で端部ははっきりとした稜線を有す。内面ナデ、外面縦ハケ目後横ヘラミガキ。底面ナデ。底径10.0cm。16は他と比べて底部の器壁がやや薄い。底面は平坦で端部がしっかりとした稜線を有す。胴部は大きく開き、外面の底部と胴部の境目は不明瞭である。内面ナデ、外面縦ハケ目後縦ヘラミガキ。底径8.1cm。

甕 (17～55) 17～31は如意形口縁の甕。17は小型の甕である。口縁部付近はわずかに内傾し、口縁部は短く外反して端部を丸くおさめる。外面口縁部下には一条の幅広の沈線を巡らせる。風化が著しく調整不明。口径13.4cm。18は細片であるため傾きにやや不安が残る。胴部上半が直線的に内傾し、口縁部は強く外側に折り返す。端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の不明瞭な沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は粗い縦ハケ目。19は胴部上半が直立し口縁部は短く外反する。端部は面取りし四角くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。胴部外面は縦ハケ目、内面は指ナデ、外面口縁部下には指オサエ痕が残る。口径23.0cm。20は胴部上半が外傾し、口縁部は短く外反する。胴部の器壁は厚く、口縁部はそれに比べて薄くなる。口縁部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には一条の太い沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面細かい縦ハケ目。口径22.2cm。21は胴部上半が直立し口縁部は短く強く外反する。端部は丸い。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.9cm。22は胴部上半が直立し、口縁部付近がやや内傾する。口縁部は短く強く外反し、端部は面取り整形して四角くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ハケ目の後横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦・斜ハケ目。口径30.0cm。23は胴部上半が内傾し、胴部が丸味を帯びる。口縁部は短く強く外反し、端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径33.6cm。24は胴部上半が直立し、さらに口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部は緩く外反し、端部を丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、口縁部に近い位置は縦方向の指ナデ、外面は縦ハケ目。口径31.4cm。25は胴部上半が大きく内傾し口の締まった器形になる。口縁部は短く外反する。外面口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面は横ヘラミガキ、外面の口



第61图 43号土坑出土土器实测图② (1/4)

縁部から突帯までの間は斜ハケ目、突帯以下は縦ハケ目をおこなう。器壁は他と比べて厚い。口径27.4cm。26は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。口縁部上面はやや肥厚する。外面口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面粗い縦ハケ目。器壁は他と比べて厚い。口径31.6cm。27は小型の甕であろう。胴部上半が直立し、口縁部は短く緩く外反する。外面口縁部下には一条の低い三角突帯を巡らせる。風化が著しく調整は不明。

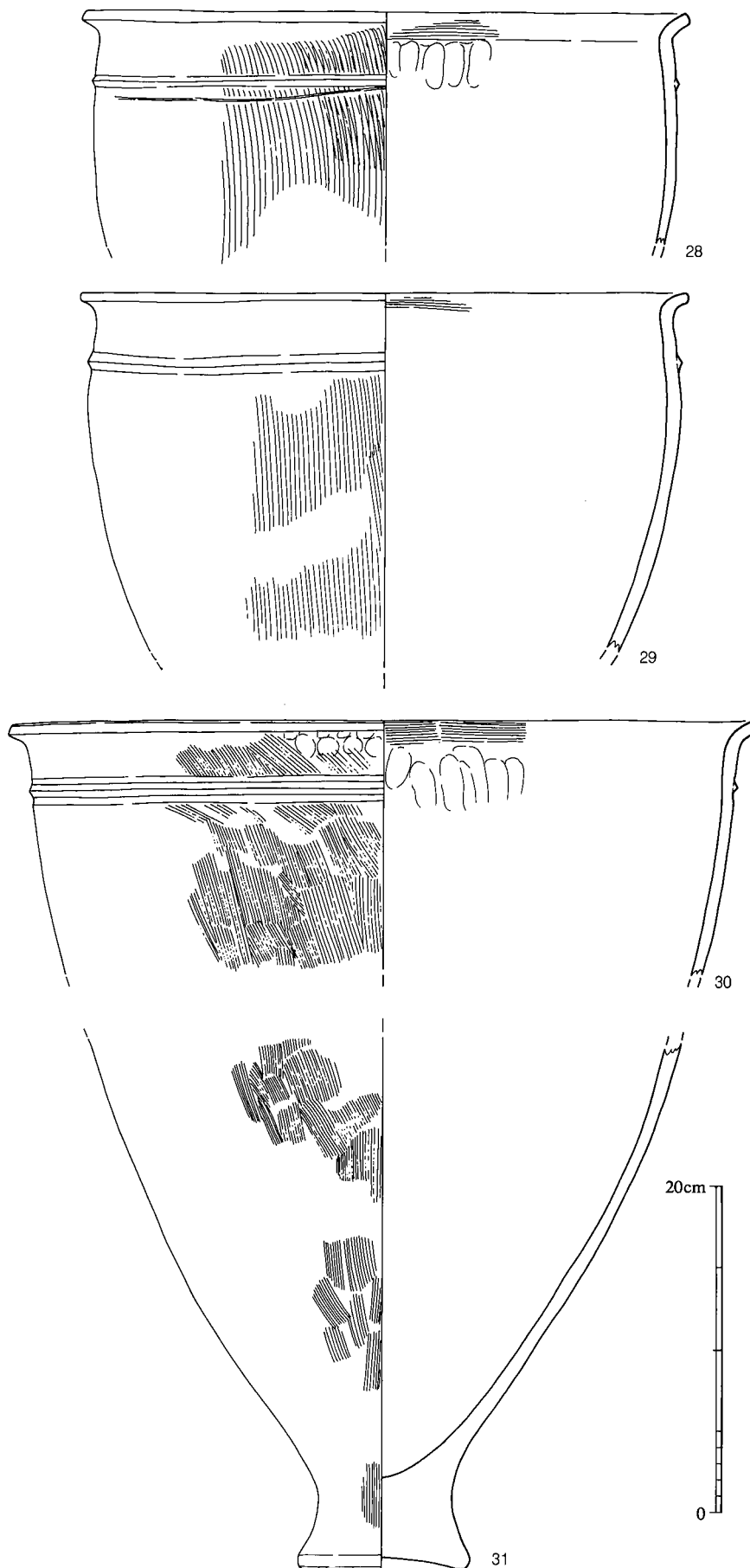
28～31は大型に属する如意形口縁の甕で、いずれも外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。28は口縁部付近がやや内傾し、口縁部は緩やかに外反する。三角突帯のすぐ下に一条の沈線が観察される。計画線として沈線を引いた後に突帯を巡らせたのであろうが、沈線が歪んでいたために残ったものである。口縁部は横ナデを行うが内面には横ナデ前の横ハケ目が残る。またその下には縦長の指オサエが認められる。外面は粗いハケ目を長く施す。口径36.8cm。29も28と良く似た形状をなす。口縁部横ナデだが内面に横ナデ前の横ハケ目が残る。胴部内面ナデ、外面は長い縦ハケ目。口径37.0cm。30と31は接合しないが同一個体である。底部は上げ底で裾が長く大きく開き、端部は丸味を帯びた断面三角形に仕上げる。胴部下半はあまり開かず直線的に伸び、上半はやや外傾して立ち上がる。口縁部は短く強く外反し、端部は面取りして四角くおさめる。口縁部下の三角突帯はかなり高い位置にある。口縁部内面は横ハケ目、その下は縦長の指オサエ、胴部内面はナデ、外面は短い縦ハケ目。口径45.6cm、底径10.2cm。

32は口縁部が如意形と三角形の中間のような形態をした甕。胴部上半は内傾し、全体的に丸味を帯びる。口縁部は短く外側に屈曲し、端部は器壁が薄くなる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部のすぐ下には指オサエを行っている。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデで、一部ナデの前のハケ目が残る。外面は細かい縦ハケ目。口径24.6cm。

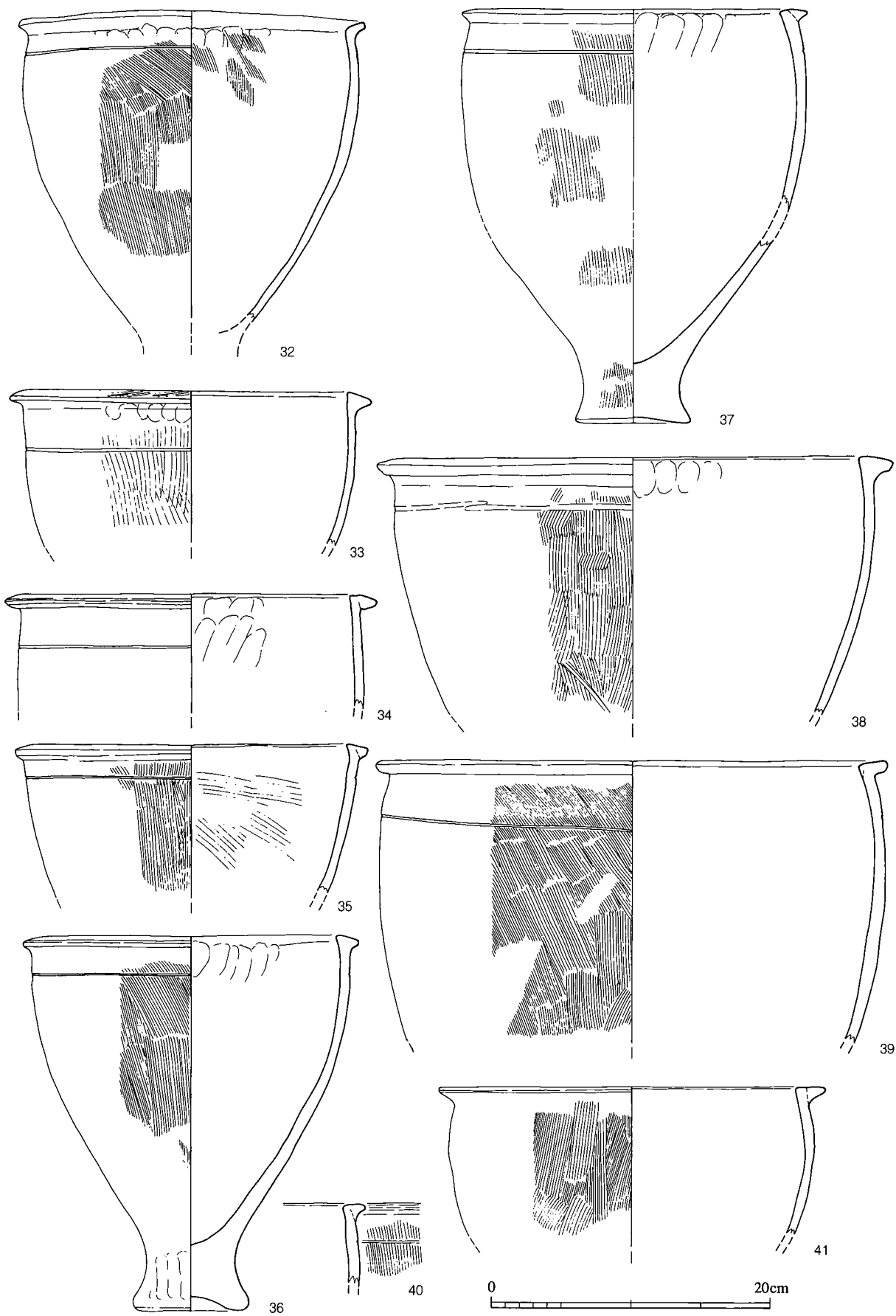
33～43は三角口縁の甕。33は胴部上半が直立し、口縁部は形の整った三角形をなす。口縁部上面は外傾する。端部は尖りシャープに仕上げる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデを行うが上面には横ナデ前のハケ目が残る。胴部内面はナデ、外面は粗い縦ハケ目。口径25.7cm。34は胴部上半がやや内傾し、口縁部上面は外傾する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面は縦長の指ナデ、外面の調整は風化が著しく不明。35は胴部上半が開き気味に立ち上がり、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は外傾する。外面口縁部のすぐ下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面は粗いハケ目状工具による擦過を行う。外面は長い縦ハケ目。口径25.4cm。36は完形品。底部は高く、底面は上げ底となる。裾は大きく開き端部は丸くおさめる。胴部上半は直立し、口縁部は小さい三角口縁となる。上面は直線的に外傾する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、内面口縁部下は縦長の指オサエ、胴部内面はナデ、外面は細かい縦ハケ目、底部のくびれ部は縦長の指ナデ、底面はナデ。底径8.4cm、口径24.0cm、器高26.8cm。37は胴部の一部を欠失するが、ほぼ完形に復元できる甕。底部は高く底面はやや上げ底となり、裾は大きく開いて端部はシャープに仕上げる。胴部上半は直立し、さらに口縁部付近は内傾して全体的に丸味を帯びる。口縁部上面はほぼ水平になり端部は尖り気味に仕上げる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部外面は横ナデ、口縁部内面には縦長の指ナデが認められる。胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目。口径24.6cm、底径8.2cm、器高は30cm程度となるだろう。38は大型の部類に属する甕。胴部下半は直線的に開き、上半は直立する。口縁部上面は外傾する。外面の口縁部下には幅広の沈線を一条巡らす。口縁部外面はナデ、内面は指オサエ、胴部内面はナデ、外面は短い

縦ハケ目。口径36.8cm。
 39は胴部上半が内傾し丸味を帯びた胴部となる。口縁部は短く水平に伸び、逆L字状口縁に近い。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。やや歪んでいる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は細かい斜ハケ目。口径36.6cm。
 40は胴部上半がわずかに内傾し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面はほぼ水平になり、端部は尖る。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。
 41は口縁部付近が内傾し、丸味を帯びた胴部となる。口縁部上面はほぼ水平に仕上げられる。口縁部外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目を行うが、このハケ目には二種類の異なる工具を使用している。口径27.7cm。

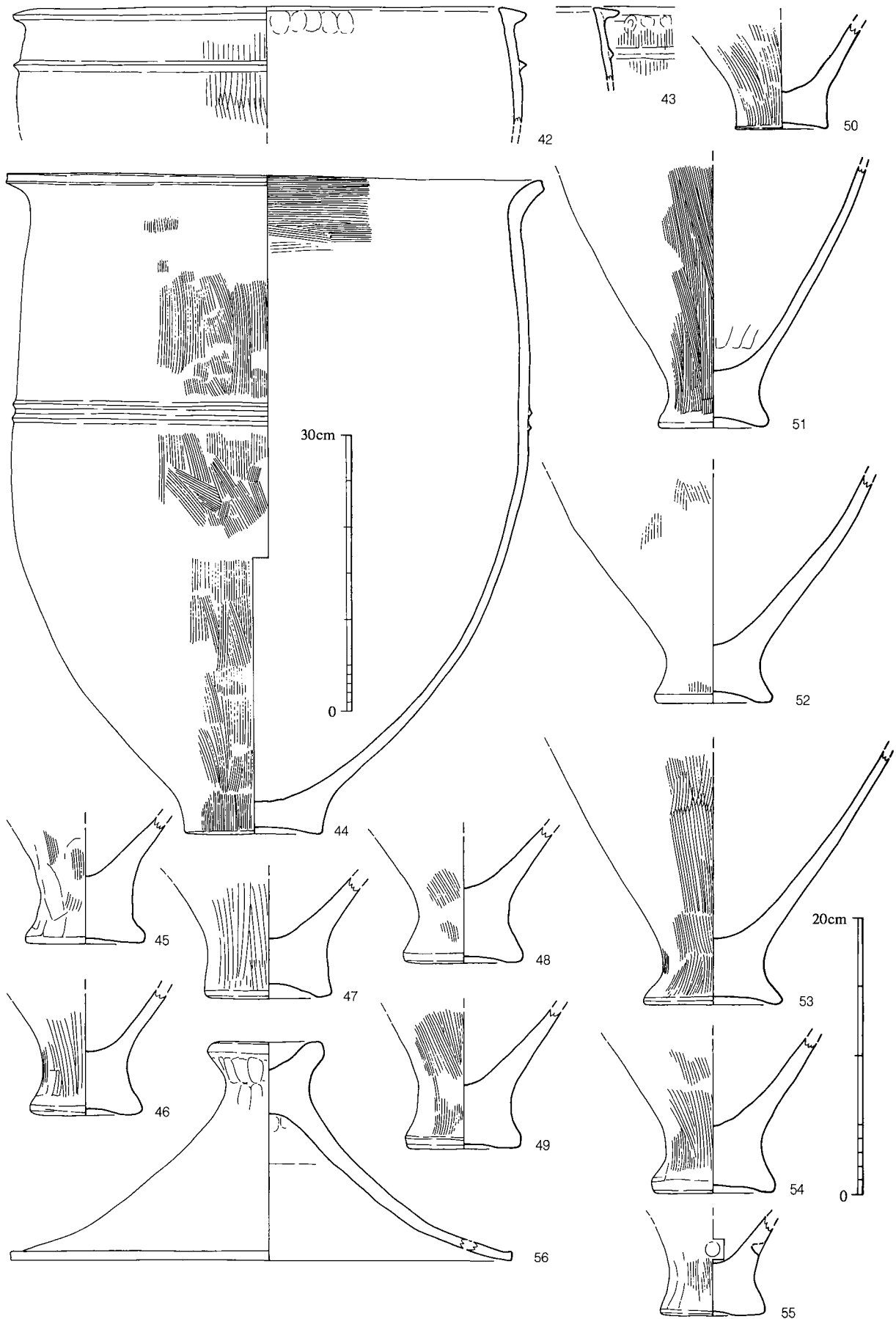
42は大型に属する甕。胴部上半は内傾し、口縁部上面は外傾する。外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らせる。口縁部外面はナデ、内面は指オサエ、胴部内面はナデ、外面は粗い



第62図 43号土坑出土土器実測図③ (1/4)



第63图 43号土坑出土土器实测图④ (1/4)



第64図 43号土坑出土土器実測図⑤ (44 : 1/6、他は1/4)

縦ハケ目。口径36.6cm。43は胴部上半が内傾し、口縁部に短く伸びる三角口縁を持つ甕。上面は外傾する。外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。器壁が薄く小型品の可能性が高い。口縁部は横ナデ、外面口縁部下は指オサエ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。

44は通常甕棺に使用される大型の甕。底面はやや上げ底となり、端部は断面三角形に仕上げる。最大径は胴部中位にあり、その部分に二条の小さな三角突帯を巡らせる。胴部上半は直立するが口縁部付近はわずかに内傾し、口縁部は緩く外反する。口縁部は若干肥厚し、端部は中央を窪ませる。口縁部内面は横ハケ目、外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目を行う。口径58.5cm、器高71.7cm、胴部最大径56.0cm、底径14.7cm。

45～55は甕の底部。45は高い柱状部をもつ。底面はやや上げ底となり裾は大きく開く。端部は丸味を帯びる。内面ナデ、外面縦ハケ目。底径8.6cm。46は底面が上げ底となり裾は大きく開いて端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面粗い縦ハケ目。底径8.0cm。47はやや大型の甕底部であろう。底面がやや上げ底となり、裾はほとんど開かず直立気味に立ち上がる。内面ナデ、外面粗い縦ハケ目、底面ナデ。底径9.1cm。48は底面がやや上げ底となり、裾は直線的に大きく開く。端部は丸味を帯びた断面三角形に仕上げる。内面ナデ、外面斜ハケ目、底面ナデ。底径8.6cm。49は底面がわずかに上げ底となり、裾は開く。端部は丸味を帯びる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面はナデ。底径8.2cm。

50は底面がやや上げ底となり、裾は開かず底部が直立する。端部は尖り気味にシャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面はナデ。底径6.6cm。51は底面がやや上げ底となり裾が開く。端部は丸味を帯びるが、割とシャープな作りとなる。胴部下半はあまり開かずスマートな器形になる。内面ナデ、外面は細かい縦ハケ目。底径7.8cm。52は底部が大きく窪み、裾が開く。端部はシャープに作られる。胴部下半はわずかに丸味をもって伸びる。内面ナデ、外面縦ハケ目。底径8.4cm。53は大型の甕底部。底面がやや上げ底となり裾は大きく長く開く。端部はシャープに作られる。胴部下半は直線的に開く。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径12.0cm。54は底面が上げ底となり裾が開く。端部は丸味を帯びるものの比較的シャープな作りとなる。内面ナデ、外面縦ハケ目。底径8.8cm。55は底面中央が若干窪む。裾は丸味を帯びて開く。底部と胴部の境よりもわずかに上方に、焼成後に外面からの穿孔を試みるが貫通してはいない。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.6cm。

蓋(56) 56は器高の高い甕蓋である。裾は大きく開き端部は面取りして四角くおさめる。上面は大きく窪み、上端は丸味を帯びて大きく開く。全面的に風化が著しい。裾部径35.8cm、器高15.9cm。

出土土器はすべて弥生時代中期初頭に比定できる。器種も豊富で良好な一括資料である。

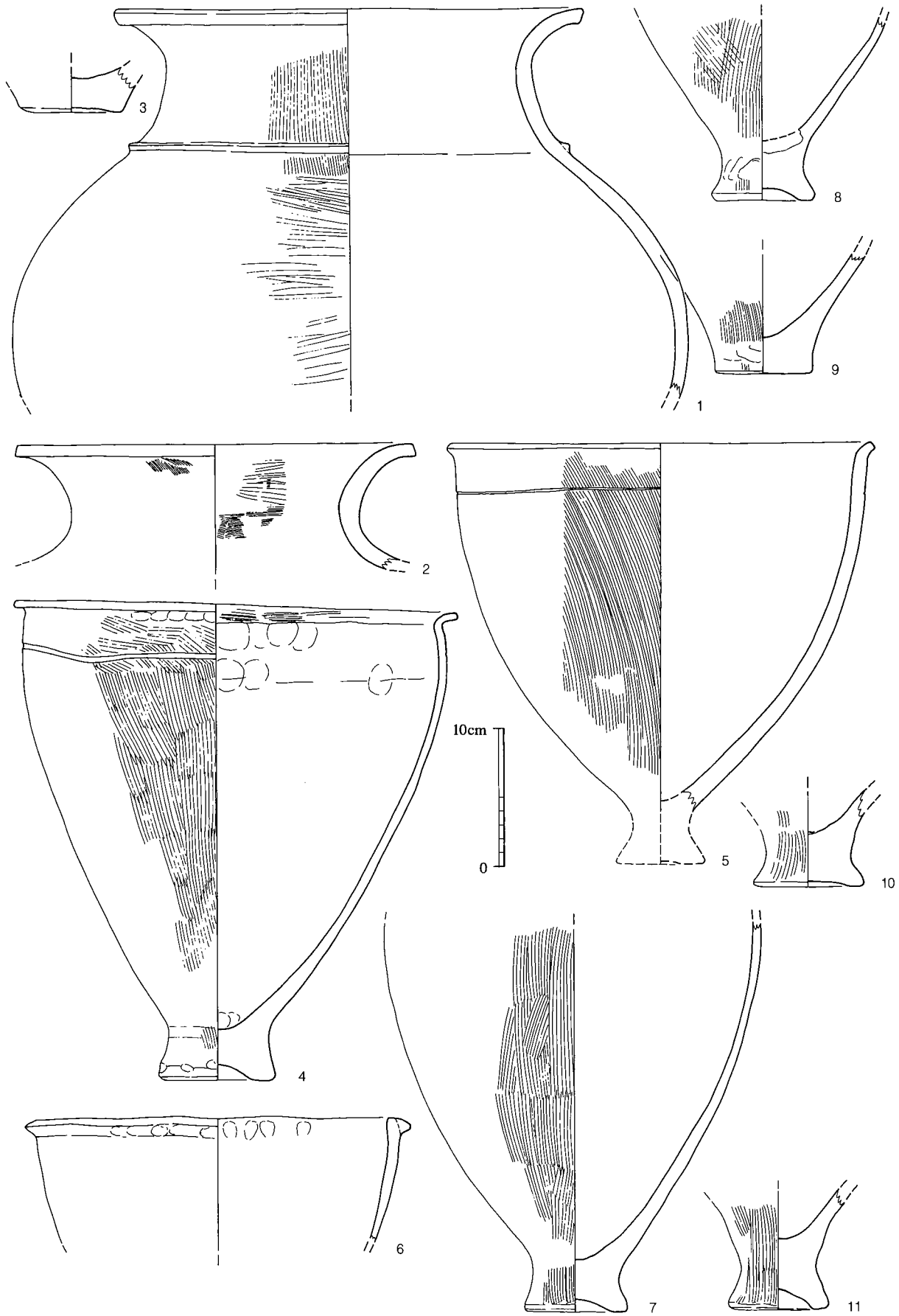
44号土坑(図版19、第58図)

41号土坑の北東側に位置する不整形の土坑で、西側を10号溝に切られる。東西長190cm、南北長210cm、底面は北側が最も深く、30cmを測る。底面北側で径15cmの小ピットを1個検出した。

出土遺物は図示した土器の他、71の石鎌、184の鑄造鉄斧片が出土している。

出土土器(図版52、第65図)

壺(1～3) 1・2は壺の口縁部。1は大型の壺。頸部は内傾し口縁部は大きく外反する。端部は面取りする。頸肩境に一条の三角突帯を巡らす。内面は風化が著しく調整不明。外面は口縁部は



第65图 44号土坑出土土器实测图 (1/4)

ナデ、頸部は縦ハケ目の後に雑な横ヘラミガキ、胴部は横ヘラミガキ。口径33.8cm。2は明瞭な頸部を持たず、肩部から大きく外反して口縁部へと至る。端部は面取りして四角くおさめる。口縁部内面は横ヘラミガキ、口縁部下方は横ハケ目、外面は口縁部付近にハケ目が見られる。口径28.6cm。3はやや上げ底の壺底部である。端部は稜を有するものの、やや丸味を帯びる。底径7.4cm。

甕（4～11） 4・5は如意形口縁の甕。4は完形品。底部は高く、底面は深く窪み高台状となる。裾はやや開く。胴部は直線的に開き、胴部上半はわずかに内傾する。口縁部は短く水平に折り曲げられ、端部は丸くおさめる。外面の口縁部下には一条の太い沈線を巡らす、かなり歪んでいる。口縁部内面横ハケ目、外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。内底部には指圧痕が残る。口径31.4cm、底径7.6cm、器高34.1cm。5は器高に対して口径が大きな甕。底部は径がかなり小さなものとなりそうである。胴部は丸味をもって開き、胴部上半は直立する。口縁部は短く緩く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は長いハケ目。口径30.6cm。6は三角口縁の甕。胴部上半がやや開きながら立ち上がり、端部上面は丸味をもって外傾する。口縁部内外面に粘土紐貼付の際の指圧痕が残る。全体的に器表の風化が著しく調整は不明。7は口縁部を欠失する。底部は高く底面が深く窪み、裾は開いて高台状をなす。胴部はわずかに丸味をもって立ち上がり、胴部上半は直立する。内面ナデ、外面縦ハケ目。底径7.2cm。

8～11は甕の底部。8は底面が深く窪み裾が開いて高台状をなす。胴部下半は直線的に伸びる。内面ナデ、外面縦ハケ目。底径7.4cm。9は底部が厚いものの底面が平坦で裾が全く開かず、端部は鋭い稜をもってシャープに作られる。内面はナデ、外面は縦ハケ目。外面の底部付近には工具痕が残る。底径7.0cm。10は底面がわずかに上げ底となり、裾が開き、端部は鋭い稜を有しシャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.8cm。11は底面が大きく窪み裾が開き、高台状になる。端部は丸味を帯びる。胴部はあまり開かず伸びるようである。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.2cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期初頭に比定できる。

45号土坑（図版19、第66図）

調査区東側に位置する長方形の土坑で、33号土坑の下層で検出した。長軸200cm、短軸130cm、底面は東側がやや浅くなっており、深さは東側で80cm、西側で95cmを測る。壁はオーバーハングして立ち上がっており、断面袋状となる。

出土遺物には図示した土器の他、106の使用痕ある剥片が出土している。

出土土器（図版52・53、第67図）

甕（1～8） 1～4は如意形口縁の甕。1は胴部上半が直立し、口縁部は緩く外反する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目、口縁屈曲部外面には指圧痕が残る。口径23.0cm。2は完形品。底部は高く底面中央がやや窪む。裾は開き端部は稜を有するものの丸味を帯びている。胴部は最大径が上方にあり、胴部上半は直立して口縁部付近はやや内傾する。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目、底面はナデ。口縁屈曲部外面と底部外面に指圧痕が残る。口径25.7cm、底径7.6cm、器高30.0cm。3は口縁部付近がわずかに外傾し、口

縁部は短く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。風化が著しく調整不明。4もやはり口縁部付近がやや外傾し、口縁部は短く緩く外反する。端部は面取りする。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。

5・6は小さな三角口縁の甕。5はやや内傾する口縁部の外端に、刻目を施した小さな突帯を貼付する。6は胴部上半が内傾し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は外傾し、外面口縁部下に一条の低い三角突帯を貼付する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。

7・8は甕の底部。7は底面が深く窪み裾が大きく開く。裾は丸くおさめる。胴部下半はあまり開かず直線的に伸びる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径10.4cm。8は底面が深く窪んで裾が開き、高台状になる。端部は丸味を帯びる。内面ナデ、外面縦ハケ目。裾端部は横ナデ、底面はナデ。底径10.2cm。

出土土器の中には5のように古相のものもあるが、他は弥生時代中期初頭に比定できる。

46号土坑（図版16、第43図）

先述した31号土坑と掘り方上面を共有する土坑である。34号とも縦列する関係にある。7・8号溝に切られる。平面プランは長方形で、長軸275cm、短軸120cm、土坑内部は西側が階段状のテラスを有しており、東側が最も深くなる。検出面から最深部までの深さは80cmを測る。

出土遺物には図示した土器の他、23の土製紡錘車が出土している。

出土土器（第67図）

甕（9～11） 9・10は如意形口縁の甕。9は胴部上半がやや開き、口縁部は短く外反する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデを行うが内面には横ナデ前の横ハケ目が残る。胴部内面はナデ、外面は細かい縦ハケ目。口径24.7cm。10は胴部上半がやや外傾し、口縁部は短く緩く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。風化が著しく調整不明。11は底部中央がわずかに窪み、裾が開いて端部は丸くおさめる。全体的に風化が著しく調整不明。底径8.3cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期初頭に比定できる。

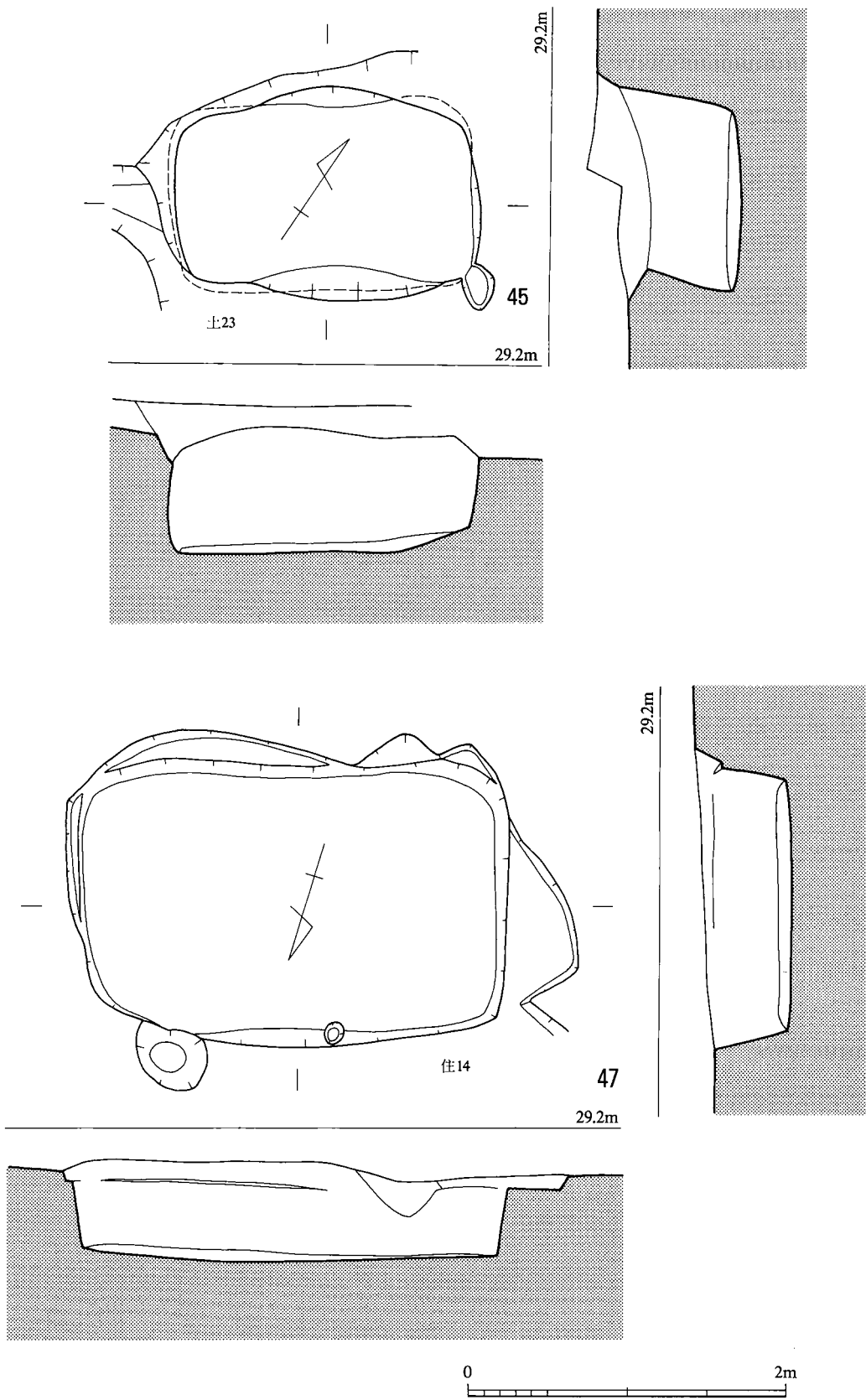
47号土坑（第66図）

調査区東側に位置する長方形の土坑で、14号竪穴住居跡及び6号溝の下層で検出した。長軸230cm、短軸180cm、底面はほぼ水平で、深さ65cmを測る。壁はかなり急な立ち上がりとなる。

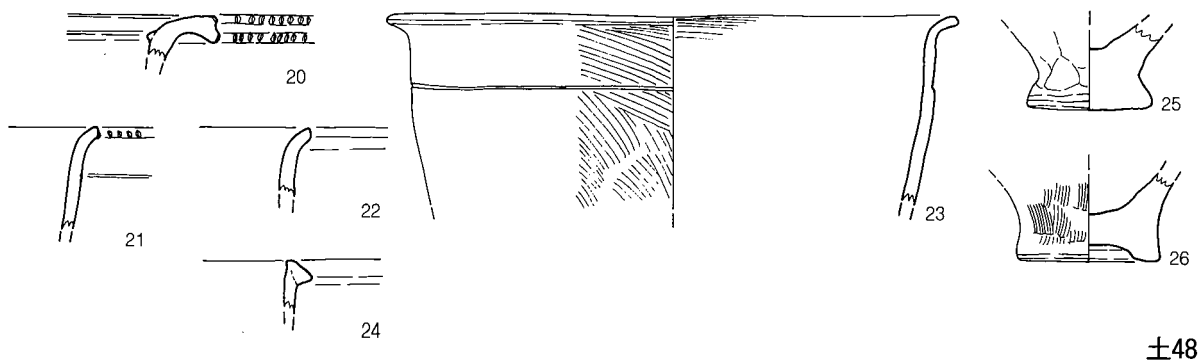
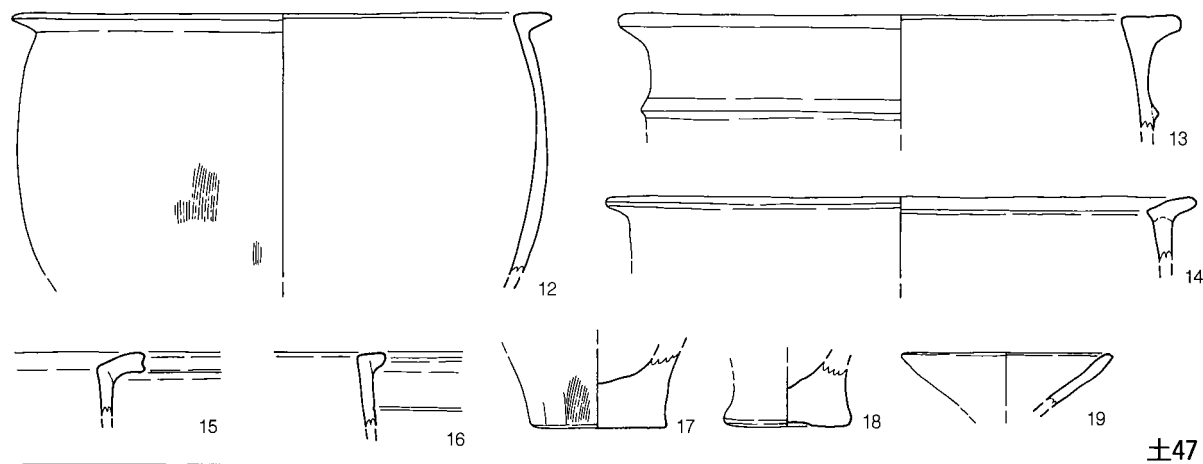
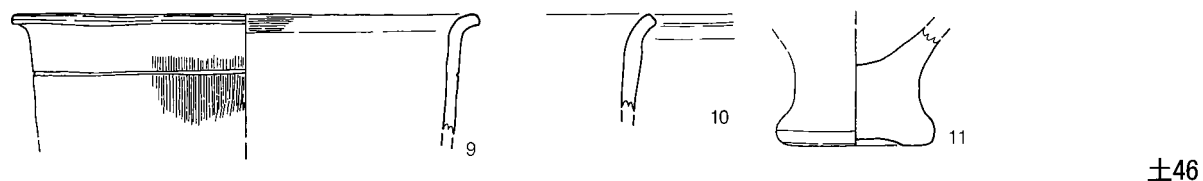
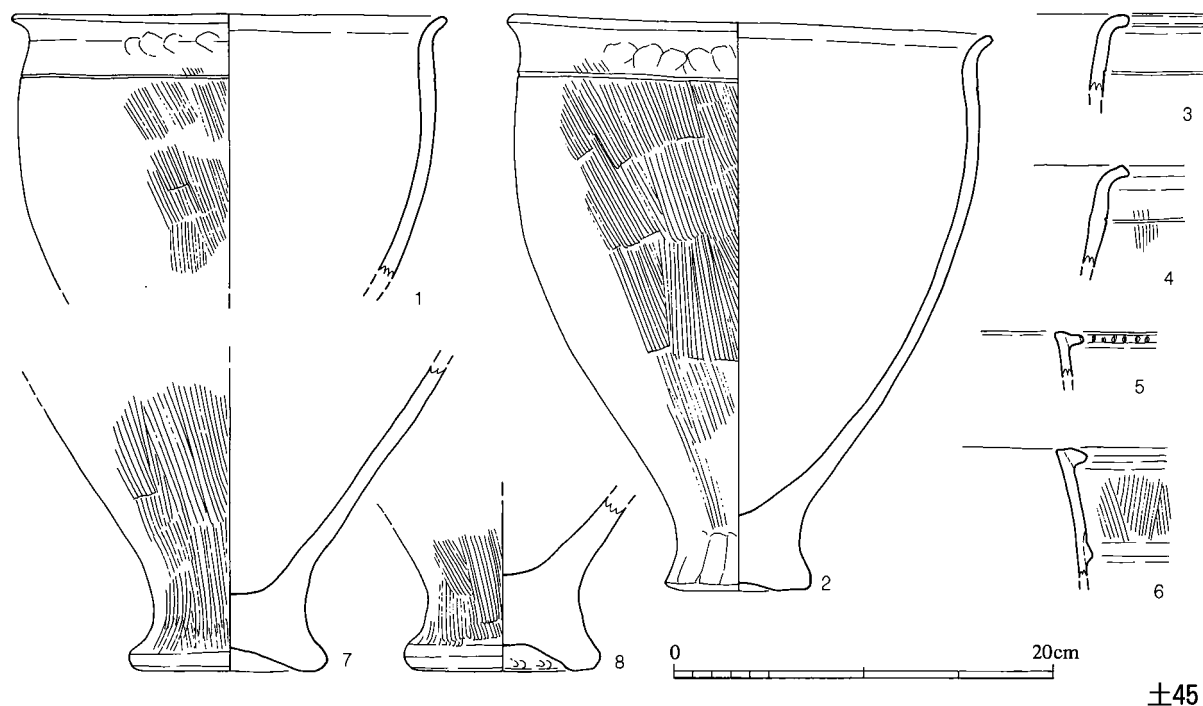
出土土器（第67図）

甕（12～18） 12～15は断面逆L字状になる口縁の甕。12は胴部上半が内傾し、丸味を帯びた器形になる。口縁部は長い三角形を呈し、上面が水平方向に伸び外端部は尖る。全体的に風化が進み調整は明瞭ではないが、胴部内面にわずかに縦ハケ目が認められる。口径28.2cm。13は胴部上半がやや内傾し、口縁部上面が水平方向に短く伸びる。内端部は稜を有し突出気味に仕上げる。外面口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。外面及び口縁部内面は横ナデ、胴部内面はナデ。口径29.5cm。14は口縁部上面が内傾し、内端がわずかに突出する。風化が著しく調整不明。口径31.2cm。15は口縁部が外側に強く屈曲し、外端部に強いナデを加えて凹線を巡らす。屈曲部内面には稜を有す。

16は小さな三角口縁の甕。胴部上半は内傾し、上面はほぼ水平になる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。風化が著しく調整不明。



第66图 45·47号土坑实测图 (1/40)



第67图 45~48号土坑出土土器实测图 (1/4)

17・18は甕の底部。17は底面が平坦で裾は開かず、底部はそれほど厚くならない。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.2cm。18は底面中央がやや窪み、裾はわずかに開く。底部の器壁はそれほど厚くない。底径6.7cm。

鉢？(19) 19は胎土からすれば弥生土器だが、類例を知らない器形である。細片であり器形に不安が残るが、口縁部の形状から径・傾きを復元すると図のようになる。体部は大きく開き、浅い器形となる。口縁部は丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。一部に化粧土が認められる。

出土土器のうち、16は弥生時代中期初頭のもので混入品と思われる。その他のものは弥生時代中期前半に比定できる。

48号土坑（第68図）

調査区南東端に位置する長方形の土坑で、長軸230cm、短軸120cmを測る。底面は西側がやや浅くなっており、深さは西側で40cm、東側で50cmを測る。壁は東側のみ急な立ち上がりとなる。

出土遺物には図示した土器の他、126の磨製石鏃、163の石包丁が出土している。

出土土器（第67図）

壺(20) 20は比較的大型となる壺の口縁部。頸部は外傾し、口縁部はさらに大きく外反する。端部は拡張し、上端・下端に刻目を巡らす。内面には低い三角突帯を貼付する。全面横ナデ調整。

甕(21～26) 21は胴部上半が外傾し、口縁部は短くわずかに外反する。口縁部外端に小さな刻目を巡らせ、またその下方には一条の沈線を巡らす。外面及び口縁部横ナデ、胴部内面ナデ。22もやはり口縁部が短く外反し、端部は面取りする。風化が著しく調整不明。23は胴部が開き気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁部端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデだが内面には横ナデ前の横ハケ目が観察される。胴部内面はナデ、外面は粗い斜ハケ目。口径30.0cm。24は小さな三角口縁の甕。上面は大きく外傾する。全面ナデ。

25・26は甕の底部。25は底面が平坦で裾が強く開く。端部は丸味を帯びた三角形となる。内面ナデ、外面指オサエ、底面ナデ。底径6.6cm。26は底面が大きく窪み高台状になる。裾はほとんど開かない。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.6cm。

出土土器は弥生時代前期末の様相をもつものと中期初頭の様相をもつものがある。当土坑の埋没時期は中期初頭であろう。

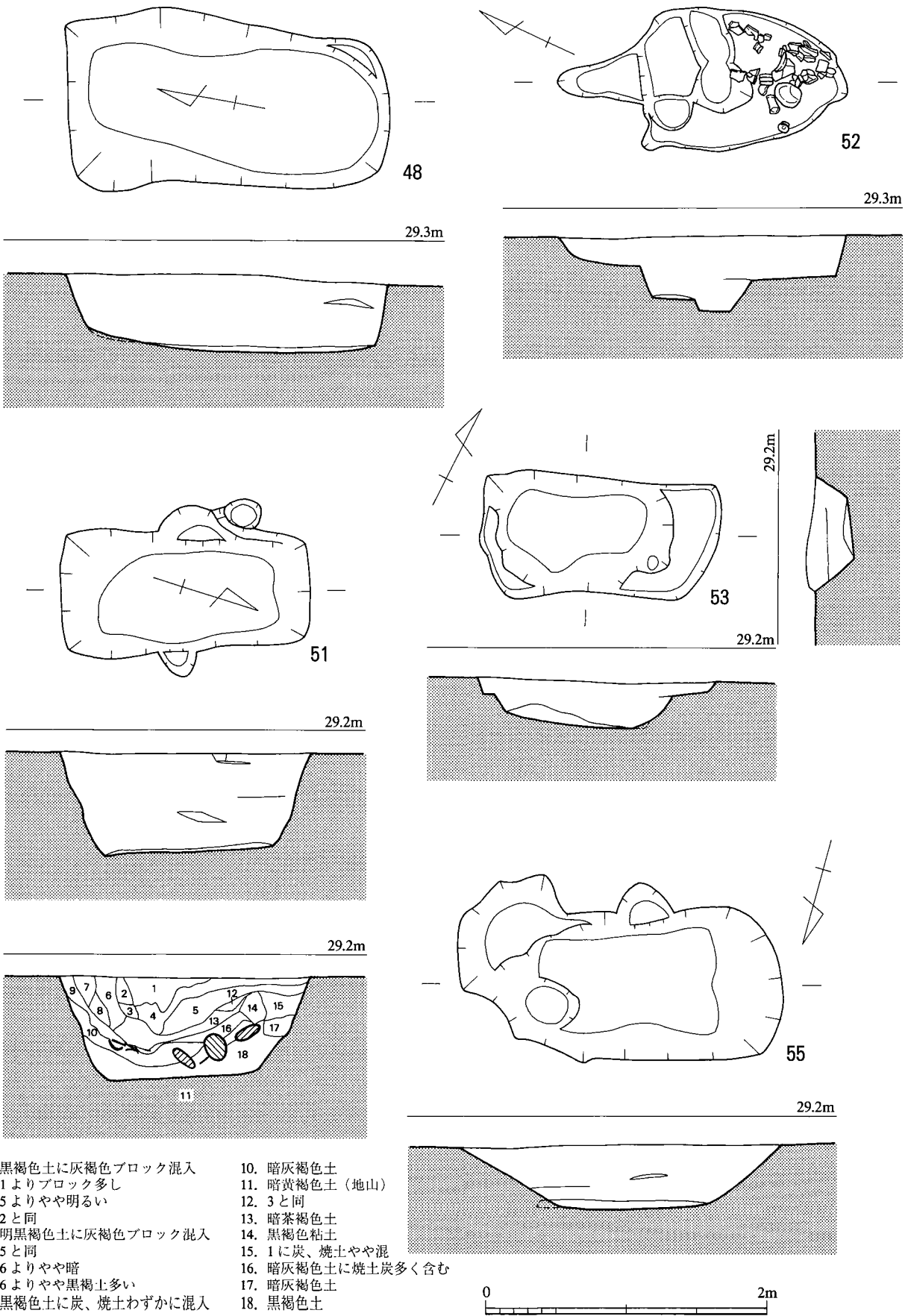
51号土坑（図版19、第68図）

調査区東端に位置する長方形の土坑である。長軸175cm、短軸90cm、底面はほぼ水平で、深さ70cmを測る。壁は東側及び西側が急な立ち上がりとなる。遺物は土坑南側の底面付近から比較的まとまって出土している。

出土遺物には図示した土器の他、54の凹石が出土している。

出土土器（第69図）

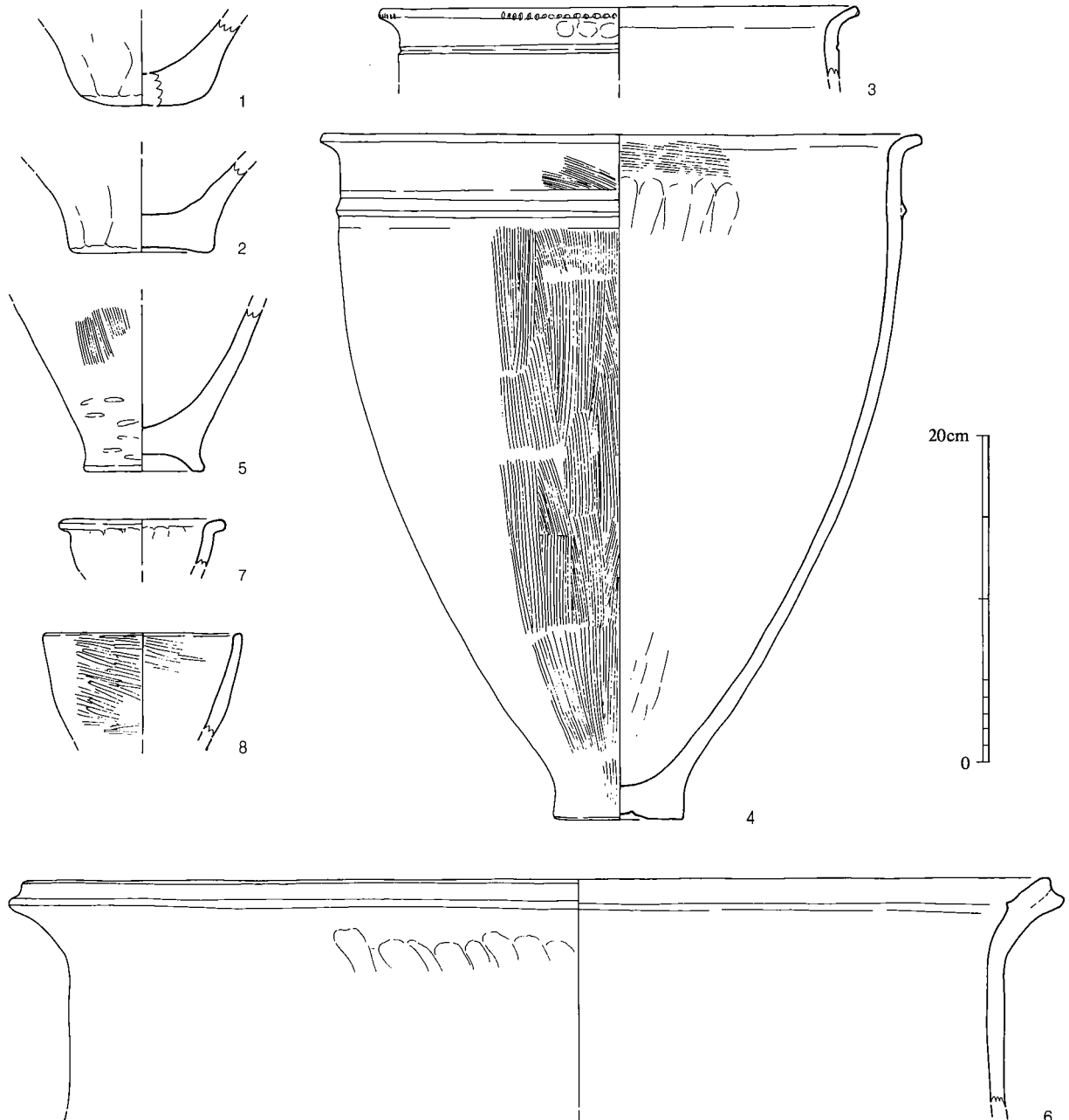
壺(1・2) 1は底部がレンズ状に丸く、不安定な形状をなす。端部は稜をもたない。器表の風化が進むが、外面には指ナデの際の稜線が残る。底径5.5cm。2は底面がわずかに上げ底となり、端部はしっかりとした稜を有す。胴部はあまり開かず、スリムな器形になると思われる。器表の風化が進むが外面には指ナデの稜線が残る。底径8.6cm。



- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 黒褐色土に灰褐色ブロック混入 | 10. 暗灰褐色土 |
| 2. 1よりブロック多し | 11. 暗黄褐色土（地山） |
| 3. 5よりやや明るい | 12. 3と同 |
| 4. 2と同 | 13. 暗茶褐色土 |
| 5. 明黒褐色土に灰褐色ブロック混入 | 14. 黒褐色粘土 |
| 6. 5と同 | 15. 1に炭、焼土やや混 |
| 7. 6よりやや暗 | 16. 暗灰褐色土に焼土炭多く含む |
| 8. 6よりやや黒褐色土多い | 17. 暗灰褐色土 |
| 9. 黒褐色土に炭、焼土わずかに混入 | 18. 黒褐色土 |

第68図 48・51～53・55号土坑実測図（1/40）

甕(3~6) 3は胴部上半が直立し、口縁部が外反する。口縁部下端に小さな刻目を施す。外面の口縁部直下に一条の太い沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は風化が進み調整不明。口径29.0cm。4は完形に復元できる大型の甕。底部はそれほど厚くならない。底面はわずかに上げ底となり、裾は開かず直立する。端部はしっかりとした稜を有しシャープなおさめる。胴部上半は直立し、口縁部は短く強く外反する。外面口縁部したには一条の低い三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデを行うが、内面には横ナデ前の横ハケ目が観察される。胴部上半には縦長の指オサエが残る。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目、底面はナデ。口径36.4cm、底径7.6cm、器高41.6cm。



第69図 51号土坑出土土器実測図(1/4)

5は底部が厚くならない。底面が大きく窪み、高台状になる。裾は開かず直線的に立ち上がる。胴部はあまり開かず、スリムな器形になるようである。内面ナデ、胴部外面縦ハケ目、底部外面はハケ目の前の工具痕が残る。底面はナデ。底径7.2cm。

6は通常甕棺として使用される大型甕。胴部上半はほとんど内傾せず、直立気味に立ち上がる。口縁部は緩く外反してわずかに肥厚する。端部は強くナデて凹面を形成する。口縁内面には小さな三角突帯を一条巡らせる。口縁部は横ナデ、胴部内面は恐らくヘラミガキだが単位が不明。外面は風化が著しく不明。外面口縁部下には口縁部を折り曲げた際の指圧痕が残る。口径64.0cm。

鉢（7・8） 7・8はどちらも小型の鉢。7は胴部が丸味を帯びて外傾し、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデし、口縁部下には指圧痕が残る。口径10.0cm。8は深めの胴部となる。口縁部は直立し、端部を丸くおさめる。口縁端部は横ナデ、それ以外は横ヘラミガキを行う。口径12.0cm。

出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定される。

52号土坑（図版20、第68図）

調査区東側に位置する不整形の土坑である。長軸200cm、短軸100cmを測る。北側はテラス状の段や不整形のピット状の窪みが形成される。遺物は南半に集中して出土したが、これらのほとんどは底面からかなり浮いた状態で出土している。

出土遺物には図示した土器の他、76の石鏃、168の石包丁が出土している。

出土土器（図版53、第70図）

壺（1） 1は頸部が内傾し、口縁部が大きく外反する。端部は丸くおさめる。口径19.8cm。

甕（2～7） 2は逆L字状口縁となる甕。胴部上半は内傾し、口縁部の内端は短く突出する。上面はほぼ水平に伸びる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径28.6cm。3は大きめの三角口縁をもった甕。胴部上半は丸味を帯び直立する。口縁上面はほぼ水平に仕上げる。全面風化が著しく調整不明。口径29.6cm。4は胴部が丸味を帯び口縁部付近が内傾する。口縁部は三角口縁となる。上面は丸く内傾する。口縁部内外面に指圧痕が明瞭に残る。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径32.0cm。5は完形品。底部は厚くならず、底面はやや上げ底となる。裾は開かず胴部下半からそのまま端部まですばまっている。胴部上半は直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は外傾する。口径25.8cm、底径6.0cm、器高31.8cm。

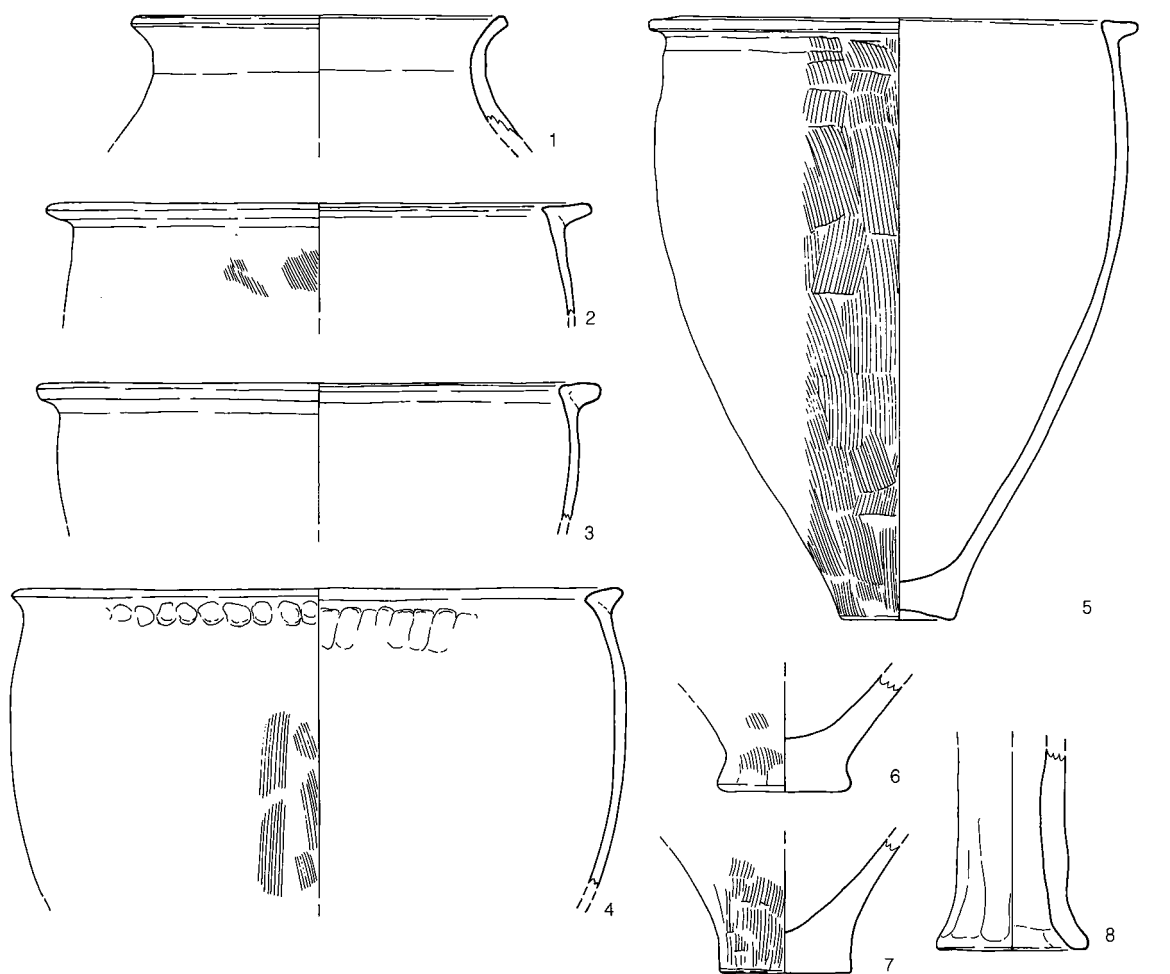
6・7は甕の底部。6は底面が平坦で裾は短く開く。端部は丸い。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。裾付近に指圧痕が残る。底径7.0cm。7は底面が平坦で裾は開かず直立する。端部はシャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目。底径7.0cm。

器台（8） 8は端部が短く開く器台。器表の風化が進むが内外面に指ナデの際の稜線が残る。端部径8.0cm、柱状部径5.6cm。

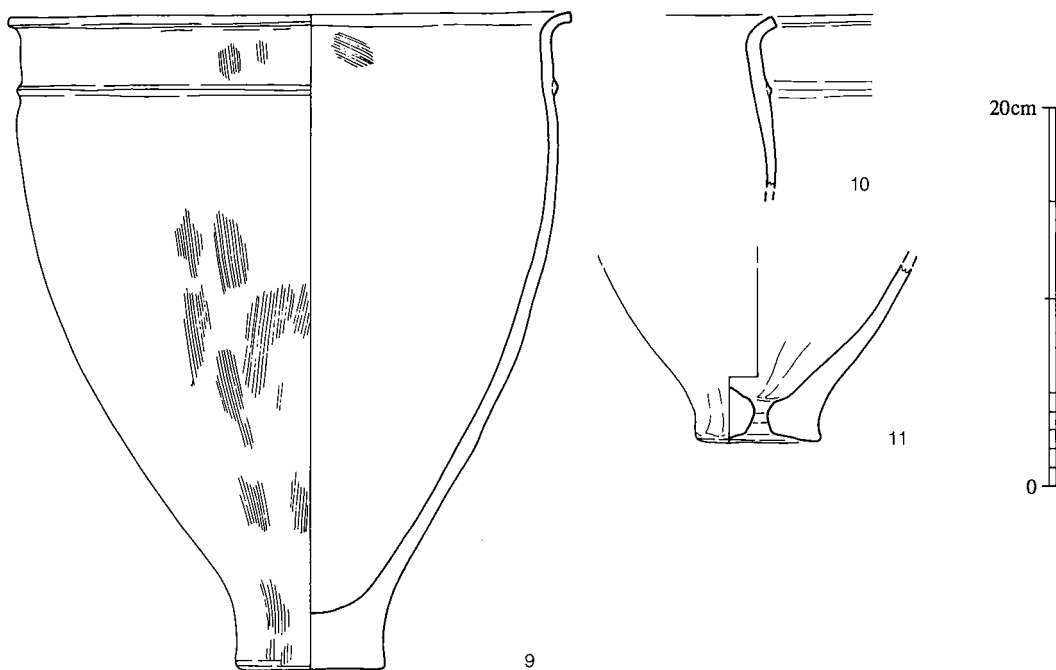
出土土器は2・3の口縁部や5・7の底部にやや新しい様相を認めうる。弥生時代中期前半でも古い頃としておきたい。

53号土坑（図版20、第68図）

調査区の東側、20号竪穴住居跡の北側に位置する長方形の土坑で、長軸170cm、短軸85cmを測る。



±52



±53

第70图 52·53号土坑出土土器实测图(1/4)

内部は東壁及び西壁にテラス状の段を有しており、内底面に向かって緩やかに傾斜している。底面は西側がやや浅くなっており、深さはこの西側で15cm、最も深い中央付近で30cmを測る。遺物はこの土坑中央付近からまとまって出土したが、底面からやや浮いた状態での出土である。

出土土器（図版53、第70図）

甕（9～11） 9は完形品。底部は平坦でそれほど高くない。裾は開かず直立し、端部は鋭い稜をもってシャープに仕上げられる。胴部上半は直立し口縁部は短く外反する。口縁端部は面取りし四角くおさめる。外面口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデを行うが、上方の一部にハケ目が認められる。胴部外面は縦ハケ目、底面はナデ。口径29.5cm、底径7.9cm、器高34.6cm。10は胴部上半がやや内傾し、口縁部は短く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には一条の低い三角突帯を巡らす。器表の風化が著しく調整は不明。11は胴部が丸味を有しており、壺の可能性が高い。底部はやや上げ底となり裾はわずかに開く。内面ナデ、外面は風化のため不明。底部外面は指ナデ。底部に焼成後の穿孔を行う。底径6.6cm。

出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

55号土坑（図版20、第68図）

調査区東側に位置する不整長方形の土坑で、東側コーナー部に張り出し部を持つ。長軸230cm、短軸100cm、底面は北東隅にピットを有し、ここまでの深さは50cm、底面中央付近で45cmを測る。壁は緩やかな立ち上がりとなる。遺物は比較的多く出土しているが、底面からやや浮いた状態での出土である。

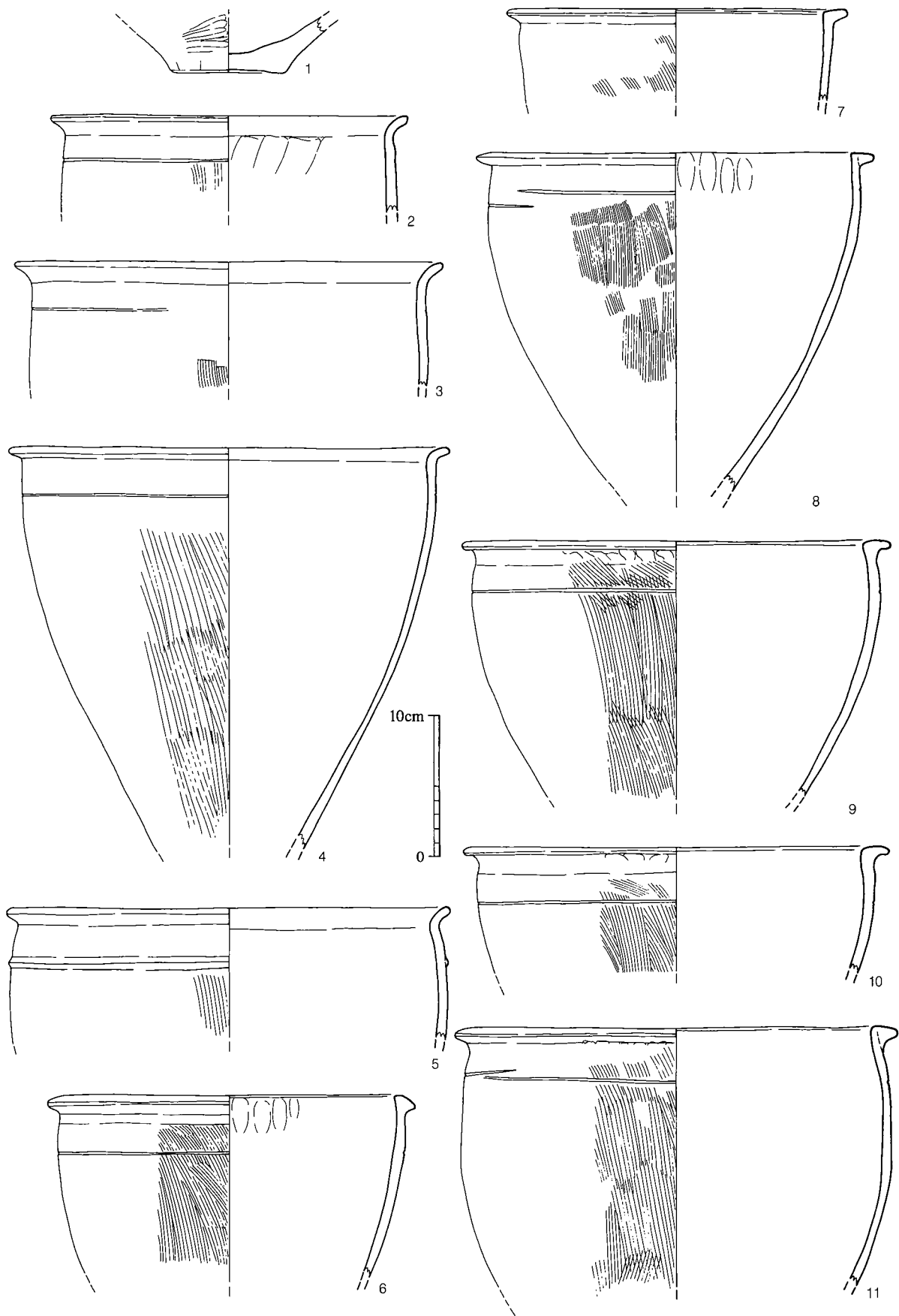
出土遺物には図示した土器の他、32の砥石が出土した。

出土土器（図版53、第71・72図）

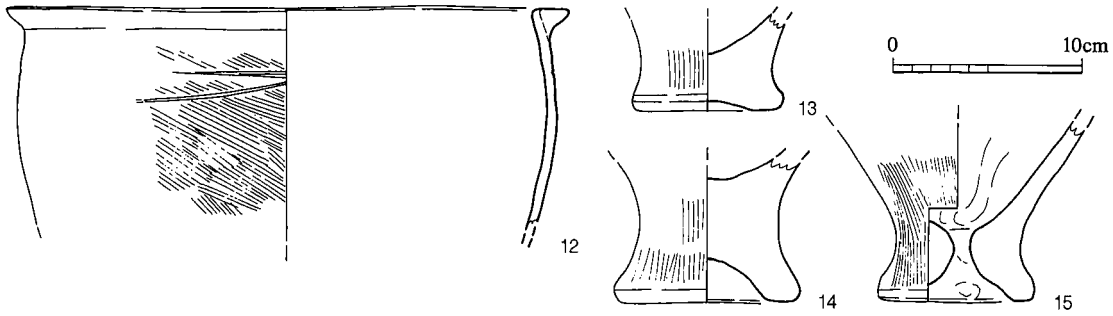
壺（1） 1は壺の底部。底面はわずかに上げ底となり、胴部は大きく開く。内面ナデ、外面横ヘラミガキ、底面ナデ。底径8.1cm。

甕（2～15） 2～5は如意形口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部は緩やかに外反する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面縦指ナデ、外面縦ハケ目。口径25.0cm。3は胴部上半が直立し、口縁部は長く緩やかに外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径30.0cm。4は胴部下半が締めりスリムな器形となる。胴部上半は直立する。口縁部は短く外反し、端部は丸い。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面粗い縦ハケ目。口径31.0cm。5は胴部上半が直立し、口縁部付近がわずかに内傾する。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径31.0cm。

6～12は三角口縁の甕。6は口縁部付近が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は外傾する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部外面は横ナデ、内面は縦長の指オサエ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径24.2cm。7は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。口縁部上面は水平方向に短く伸びる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は斜ハケ目。口径23.8cm。8は胴部下半が強くすぼまり胴部上半は直立する。口縁部は小さな三角口縁となる。口縁部上面はやや外傾し、端部はシャープに仕上げる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。起点と終点とが一致していない。口縁部外面は横ナデ、内面は縦長の指オサエ、胴部内面はナデ、外面



第71图 55号土坑出土土器实测图① (1/4)



第72図 55号土坑出土土器実測図② (1/4)

は縦ハケ目。口径25.4cm。9は口縁部付近がやや内傾し、丸味を帯びた器形となる。口縁部は小さな三角口縁となる。上面は水平に短く伸び、端部は丸い。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデを行うが、外面には指圧痕が残る。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径30.0cm。10は胴部がやや丸味を帯び、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は丸味を帯び、ほぼ水平になる。端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径29.8cm。11は胴部上半がやや内傾し、丸味を帯びた器形となる。口縁部上面は直線的に外傾する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす、起点と終点が一致しない。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径31.0cm。12は口縁部付近がやや内傾し、口縁部上面がほぼ水平になる。外端部は尖る。外面口縁部下に二条の並列しない沈線が認められるが、これは恐らく一条沈線の起点と終点が一致しないものであろう。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面斜ハケ目。口径29.6cm。

13~15は甕の底部。13は厚底ではあるがそれほど高くはならない。底面はやや上げ底となり裾はわずかに開く。内面ナデ、外面縦ハケ目。底径7.6cm。14は高い底部の甕。底面は大きく窪み、裾が開き、高台状をなす。端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面は縦ハケ目、底面はナデ。底径9.2cm。15もやはり高い底部。底面は大きく窪み、裾が開く。胴部は直線的に開く。底部に焼成後に両面穿孔を行う。内面指ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.2cm。

出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

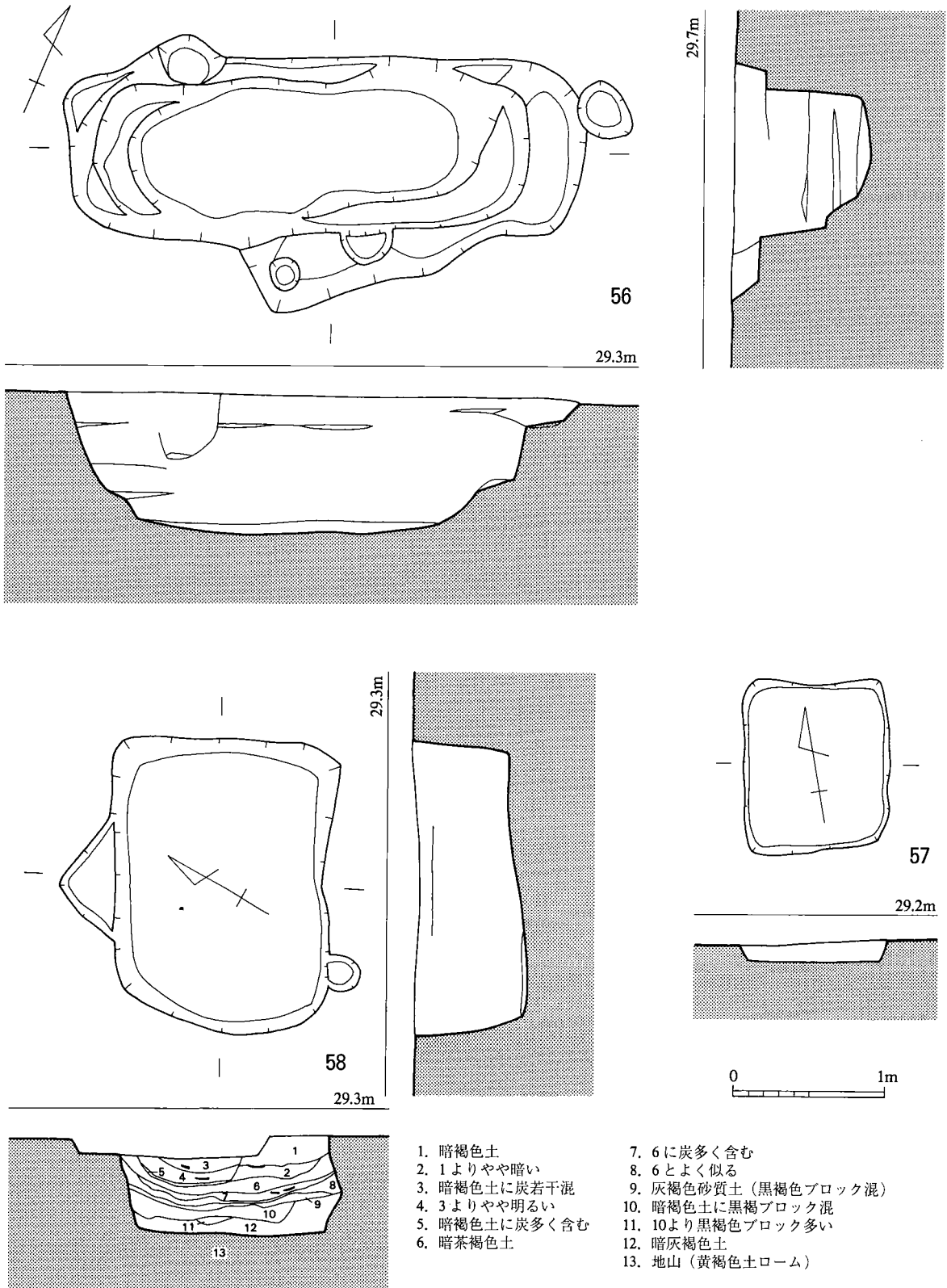
56号土坑 (図版21、第73図)

調査区東側に位置する長方形の土坑で、長軸335cm、短軸120cmを測る。底面はほぼ水平で、深さ90cmを測る。壁は西壁及び東壁はテラスを有しながら階段状に底面に向かって下降する。北壁・南壁は急な立ち上がりとなる。遺物は土坑内から多く出土しているが、底面からは浮いた状態である。またかなり破碎された状況にあり、投棄された事が想定される。

出土遺物には図示した土器の他107のメノウ製石核、147の抉入片刃石斧が出土している。

出土土器 (図版53・54、第74・75図)

壺 (1・2) 1は古い特徴を残す壺。底面がわずかに上げ底になる厚い底部となり、外面は直立する。胴部最大径は器高のちょうど中位にある。肩はあまり張らず、縦長の器形になる。頸部は長く内傾し、口縁部は短く外反して端部を丸くおさめる。外面の頸肩境に沈線状の段を有すが内面には段は見られない。調整は口縁部外面が縦ハケ目後横ヘラミガキ、頸部は横ヘラミガキ、胴部上半は横ヘラミガキ、下半が斜ヘラミガキ。内面は不明瞭だがヘラミガキであろう。口径13.6cm、胴部



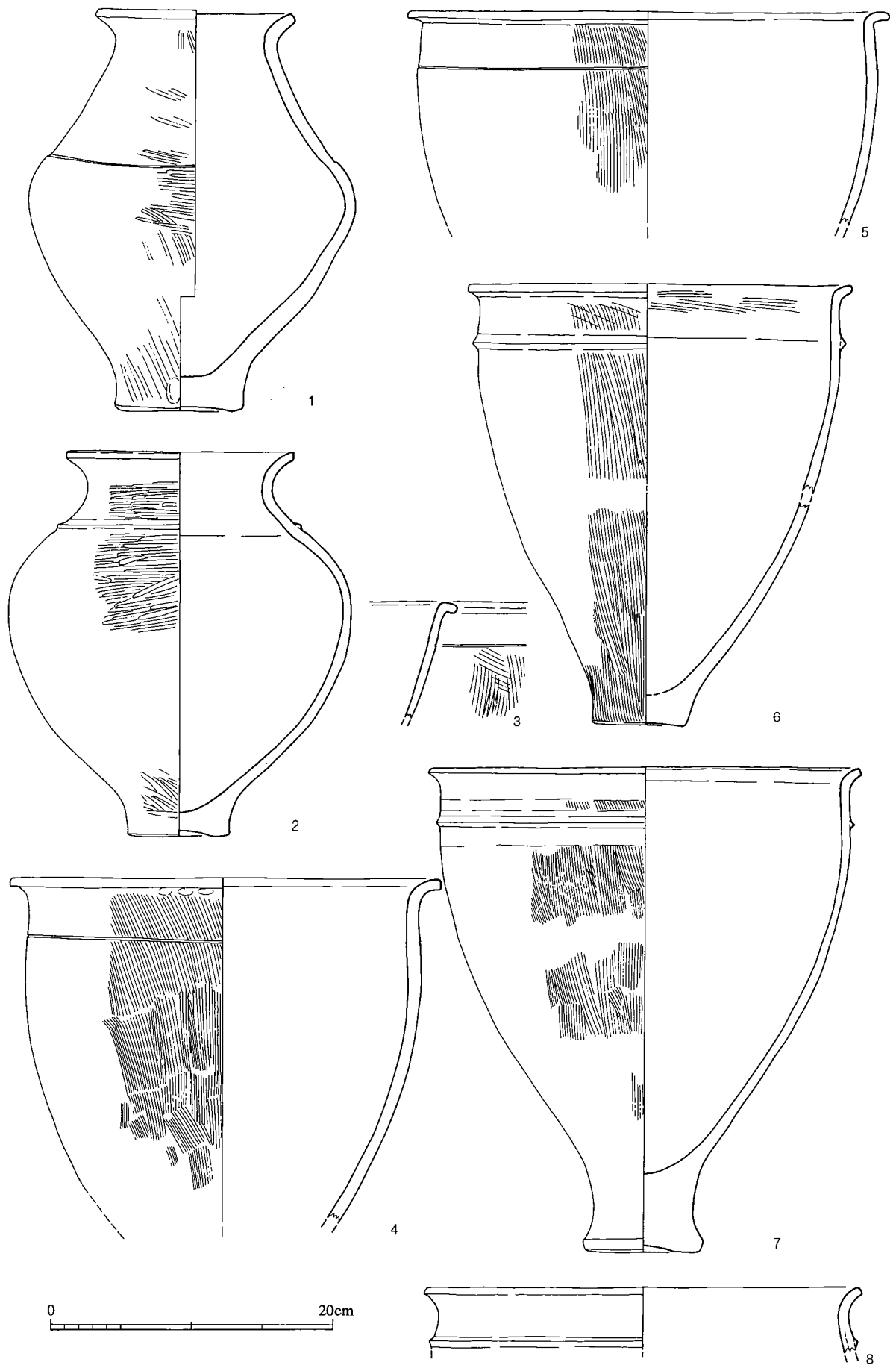
第73図 56～58号土坑実測図（1/40）

径23.0cm、底径9.0cm、器高28.6cm。2は底部がそれほど厚くならず、底面がわずかに上げ底となり端部は鋭い稜を有してシャープに仕上げる。胴部は丸味を帯び、最大径は中位よりやや上にある。頸部は強く内傾し、口縁部は緩やかに開く。端部は面取りして四角くおさめる。頸肩境には一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ヘラミガキ、頸部及び胴部内面はナデ、外面は頸部から胴部上半にかけて横ヘラミガキ、底部付近は斜ヘラミガキ、底面はナデを行う。口径16.0cm、胴部最大径24.2cm、底径7.2cm、器高27.4cm。

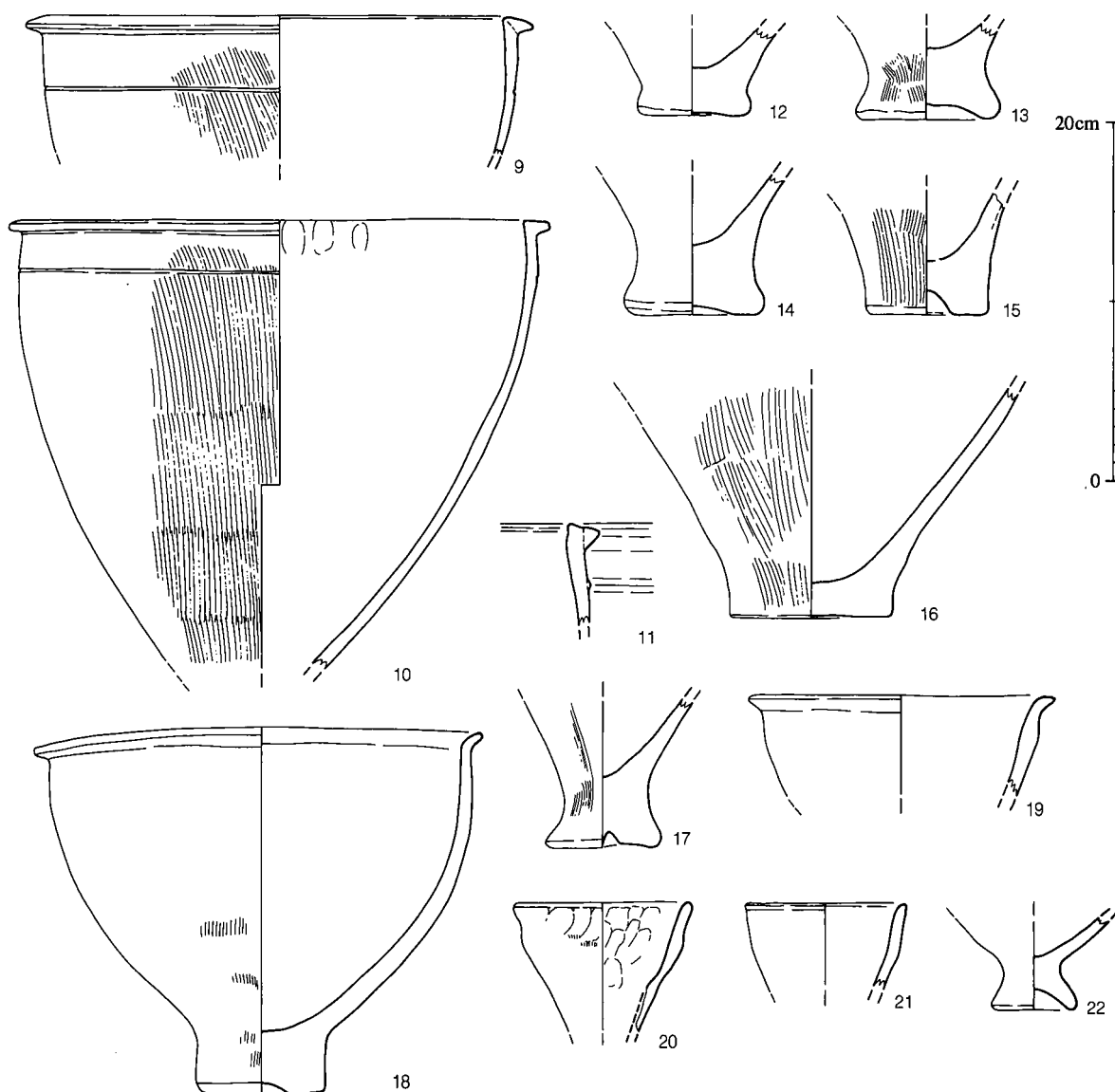
甕 (3~17) 3~8は如意形口縁の甕。3は胴部上半が開きながら立ち上がり、口縁部は短く強く外反する。端部は丸くおさめる。器壁が薄く小型の甕になると思われる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。4は胴部上半が直立し、口縁部が強く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径30.4cm。5は胴部上半がわずかに内傾し、丸味を帯びた器形となる。口縁部は短く強く外反し、端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目。口径34.0cm。6は胴部上半と下半が接合しないが、器形はほぼ復元できる。底部は厚いが高くはならない。裾端部はシャープに仕上げ、外面の底部から胴部下半へと続く線はスムーズで、境は不明瞭である。胴部上半は直立し、口縁部は短く外反する。外面口縁部下には一条の三角突帯を巡らせる。口縁部は横ナデ、内面の口縁部直下は横ハケ目、胴部はナデ、外面は長い縦ハケ目、底面はナデ。口径27.3cm、底径6.7cm、器高は31cm程度となるだろう。7は器高の割には口径が大きく、寸詰まりの器形になる甕。底部は高く、底面は上げ底となる。裾は短く開く。胴部上半は直立し、口縁部は短く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には一条の低い三角突帯を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目、底面はナデ。口径30.3cm、底径8.4cm、器高34.2cm。8は胴部上半が内傾し、口縁部は緩く外反する。端部は丸い。外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。器表の風化が著しく調整は不明。口径30.8cm。

9~11は三角口縁の甕。9は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は直線的に外傾し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部内面横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径28.0cm。10は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は水平となる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らせる。口縁部外面は横ナデ、内面は指オサエ、胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目。口径30.0cm。11は胴部上半がわずかに内傾し、口縁部上面は外傾する。外面口縁部下には低い三角突帯を貼付する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は風化が著しく調整不明。

12~17は甕底部。12は底面がほぼ平坦で裾がわずかに開く。端部は丸味を帯びる。風化が著しく調整不明。底径6.2cm。13は底面が窪み裾が開いて高台状になる。端部は丸い。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。14は底面がわずかに上げ底となり裾は開いて端部を丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。底径7.8cm。15は底面中央が大きく窪み、裾は開かず底部が垂直に立ち上がる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.8cm。16は大型の甕底部。底面はそれほど厚くなく、また裾も開かない。胴部は直線的に上外方へと伸びる。内面ナデ、外面粗い縦ハケ目、底面ナデ。底径9.0cm。17は小型の甕となろうか。底面はほぼ平坦で裾が大きく長く開き、端部は丸味を帯びる。胴部下半はあまり開かずスマートな器形になると思われる。底面には焼成後に穿孔を試みて途中で諦めた円孔が認められる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.4cm。



第74图 56号土坑出土土器实测图① (1/4)

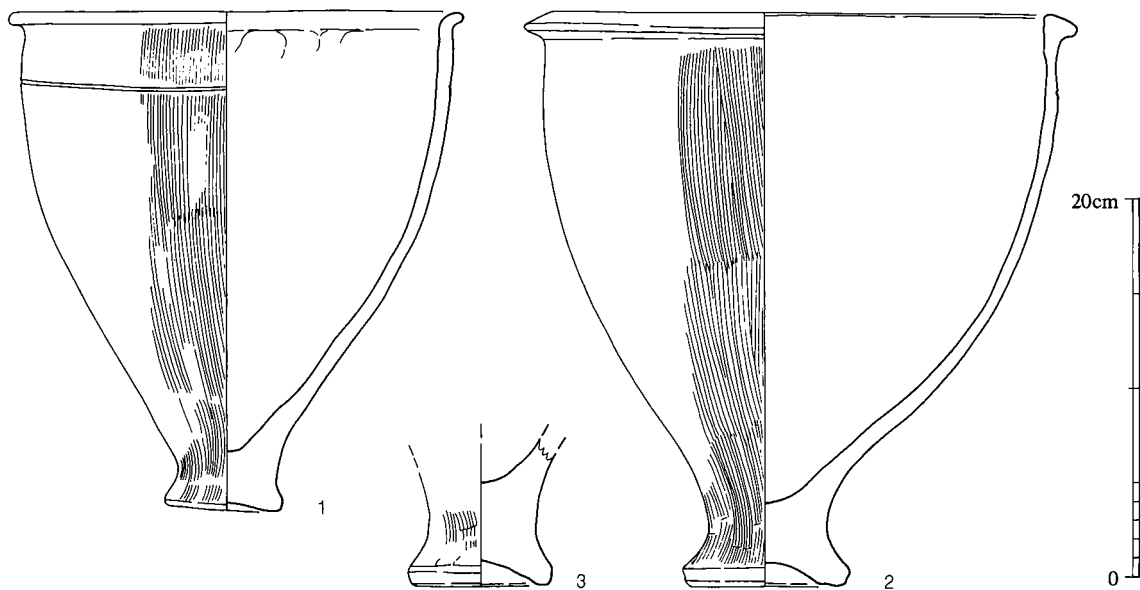


第75図 56号土坑出土土器実測図② (1/4)

鉢 (18~21) 18は高い底部をもつ鉢。底面中央が大きく窪み、裾は開かず底部が直立する。胴部は丸味を帯び、半球形を呈す。胴部上半は直立し、口縁部は短く外反する。端部は丸い。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目、底面はナデ。口径25.0cm、底径6.8cm、器高20.5cm。19~21は小型の鉢。19は小片であり径に不安が残る。胴部は開き、口縁部は短く外反する。端部は丸い。全体的に風化が著しく調整不明。口径17.2cm。20は底部が強くすぼまり、口縁部にむかって直線的に開く小型の鉢。端部は丸くおさめる。内外面指による整形を行う。図面では鉢形の焼塩土器に似るが、胎土は全く異なり弥生土器である。口径10.0cm。21は胴部から口縁部にかけてわずかに内湾しながら立ち上がる小型の鉢。口縁部は丸くおさめる。内面にナデを行うが、外面は風化のため不明。口径9.1cm。

台付鉢 (22) 22は小型の鉢であろう。脚部は大きく開き、端部は丸味を帯びる。胴部はあまり開かず立ち上がるようであり、深い器形になると思われる。裾部径4.8cm。

出土土器は弥生時代中期初頭に比定でき、良好な一括資料である。



第76図 57号土坑出土土器実測図 (1/4)

57号土坑 (第73図)

調査区東側に位置する長方形の土坑である。58号土坑と重複しており、これを切っている。長軸60cm、短軸50cm、深さは15cm程度と小さく浅いものである。

出土土器 (図版54、第76図)

甕 (1～3) 1は如意形口縁の甕。胴部に対して底部は小さい。底面はわずかに上げ底となり裾が開く。胴部下半はあまり開かずスリムな器形となり、胴部上半は直立する。口縁部は短く強く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、内面口縁部下は指オサエ、胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目、底面はナデを行う。口径24.0cm、底径6.3cm、器高26.3cm。2は器高の割に口径の大きな甕。底部は高く、底面は上げ底となり裾が大きく開く。端部は丸くおさめる。胴部上半は直立し、口縁部は粘土紐を貼付して三角口縁とする。上面はやや丸味を帯び外傾する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目、底面はナデ。口径29.2cm、底径8.8cm、器高30.3cm。3は高い底部となる。底面は上げ底となり裾は長めに開く。端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かない器形になると思われる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.6cm。

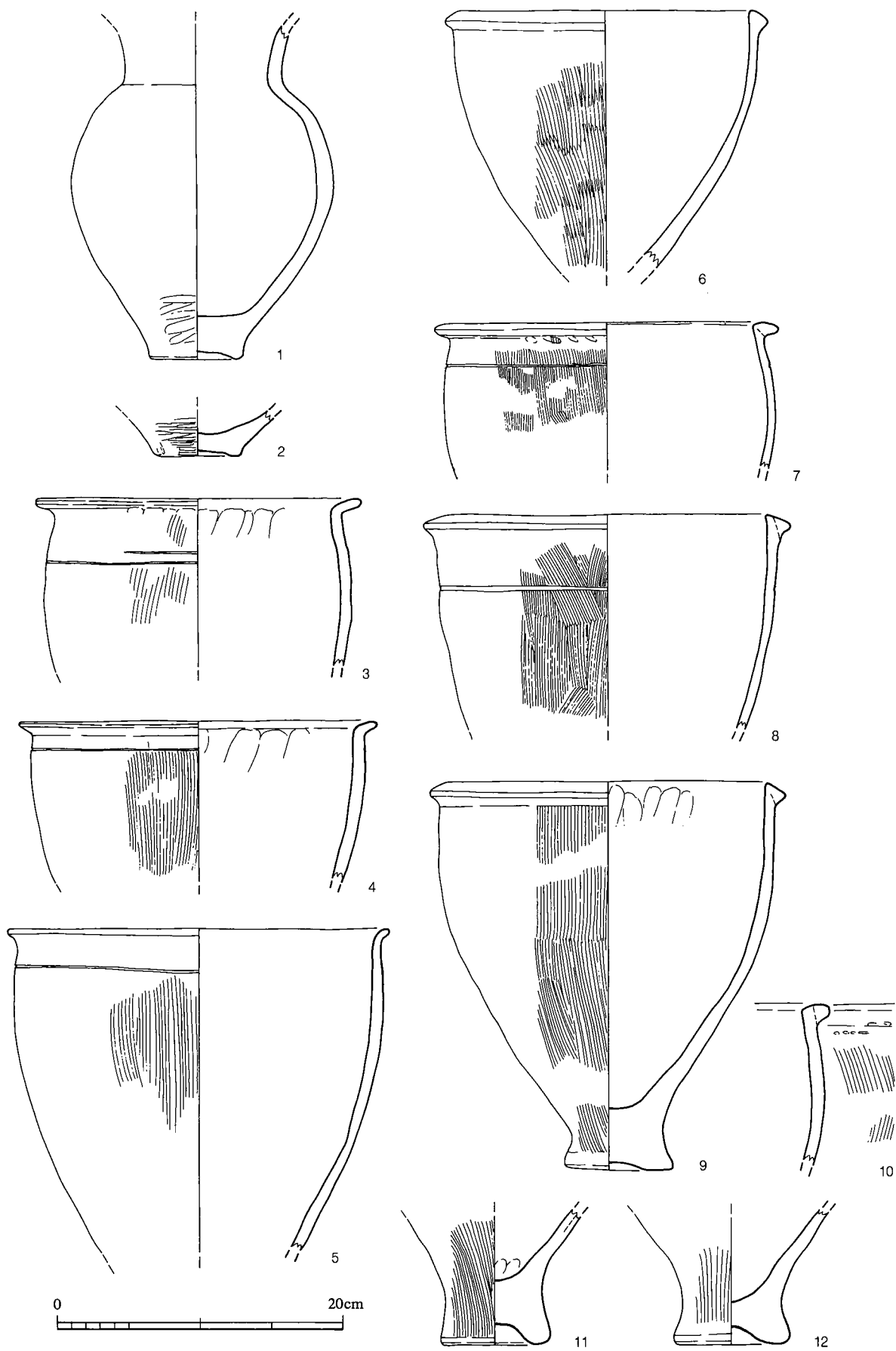
出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定される。

58号土坑 (図版21、第73図)

調査区東側に位置する長方形の土坑である。長軸195cm、短軸135cm、底面は西側がやや深くなっており、深さは西側で75cm、東側で65cmを測る。壁は垂直に近い立ち上がりとなる。

出土土器 (図版54・55、第77図)

壺 (1・2) 1は長胴の壺。底部は厚く、底面は上げ底となる。胴部最大径は中位よりやや上にある。頸部は外反する。全体的に風化が著しいが、底部外面に横ヘラミガキが残っており、恐らく



第77图 58号土坑出土土器实测图 (1/4)

全面ヘラミガキが行われたのであろう。胴部最大径18.3cm、底径6.6cm。2は壺の底部片。底面はやや上げ底となり胴部は大きく開く。内面ナデ、外面横ヘラミガキ。底径5.9cm。

甕（3～12） 3～5は如意形口縁となる甕。3は口縁部付近が内傾し、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸くおさめ、屈曲部内面には不明瞭な稜を有す。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、その下は両面とも指オサエが残る。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径22.6cm。4は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。外面の口縁部直下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデを行うが、上方には縦長の指ナデが認められる。胴部外面は縦ハケ目。口径25.0cm。5は胴部最大径が上方にあり、口縁部付近は直立する。口縁部は短く外反する。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目。口径26.6cm。

6～10は三角口縁の甕。6は最大径がかなり上位にあり、胴部上半は直立する。口縁部上面は外傾する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面短い縦ハケ目。口径22.6cm。7は胴部上半がやや内傾する。口縁部上面は丸味を帯び外傾する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデを行うが、外面には指圧痕が残る。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径24.0cm。8は胴部上半がやや外傾し、最大径が口縁部にある。口縁部上面は外傾する。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面はナデ、外面は細かい縦ハケ目。口径24.7cm。9は完形品。底部は高く、底面はやや上げ底となり裾が開く。胴部上半は直立し、口縁部はシャープに仕上げる。上面は外傾する。口縁部は横ナデを行うが、内面には縦方向の指ナデが観察される。胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目。口径24.9cm、底径7.6cm、器高27.3cm。10は口縁部付近がわずかに内傾する。口縁部上面は丸く水平になる。口縁部は横ナデを行うが、外面の口縁部直下には指圧痕が残る。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。

11は高い底部。底面は大きく窪み裾がやや開いて高台状になる。端部は丸い。内面ナデで内底面には指圧痕が残る。外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.7cm。12は底部がそれほど厚くならない。底面は大きく窪み、裾がやや開く。端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.1cm。

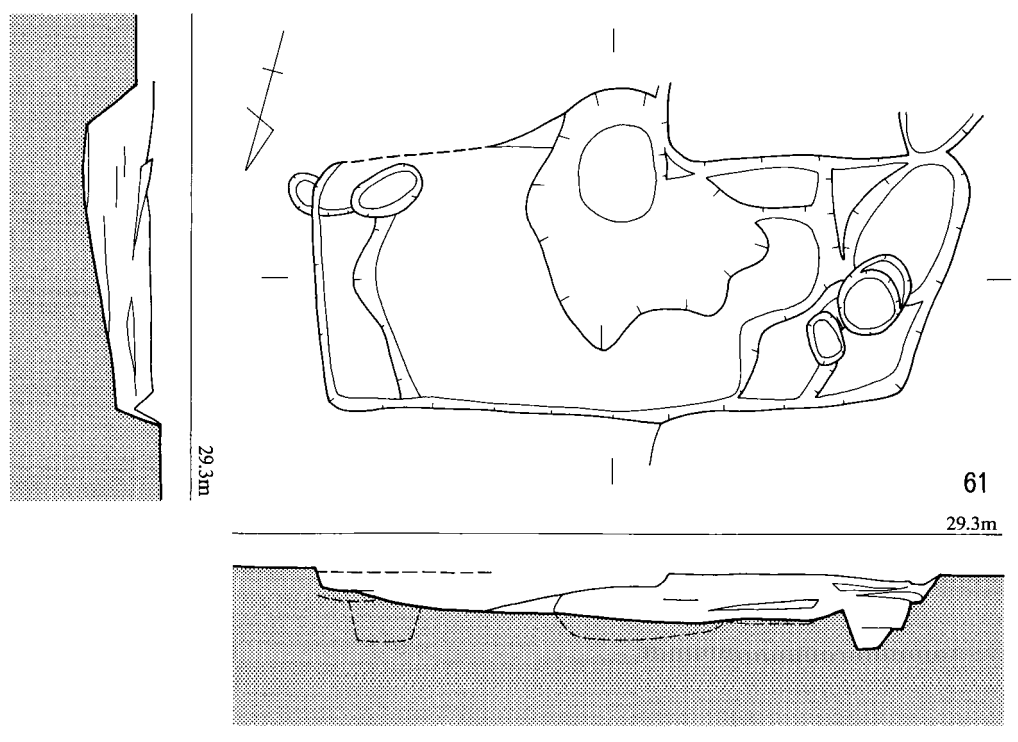
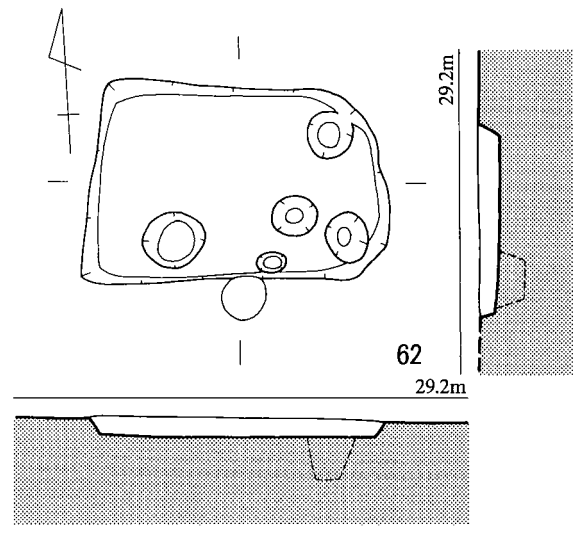
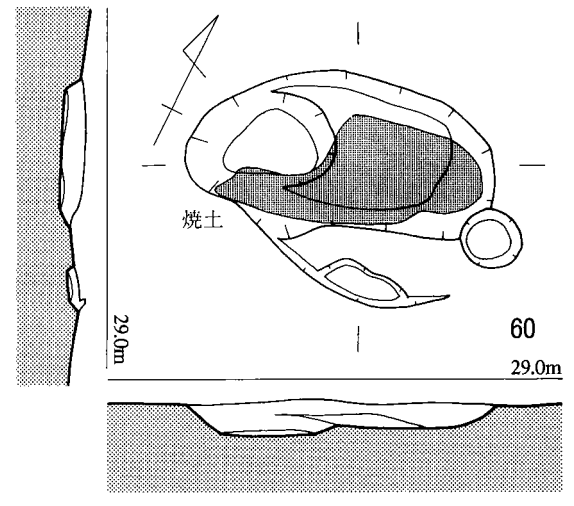
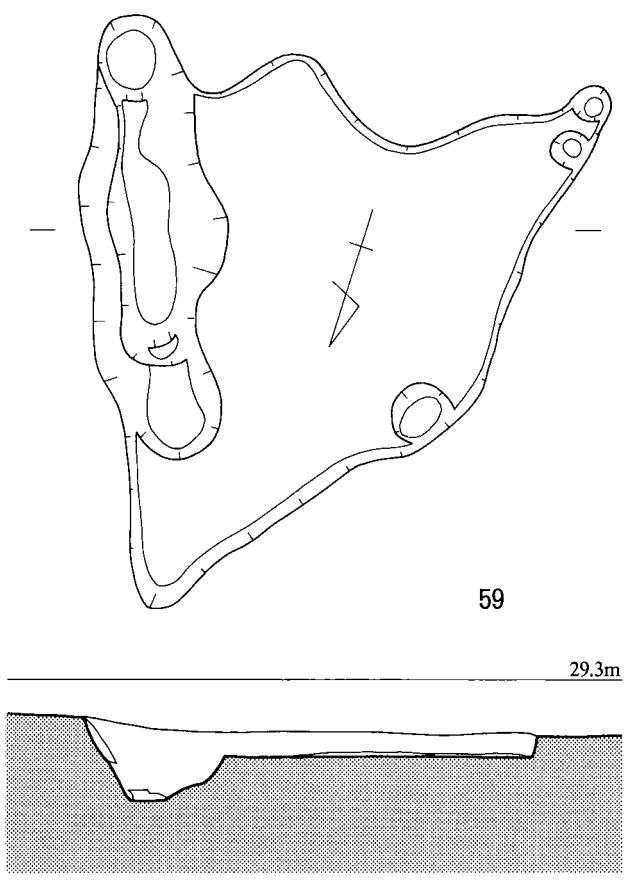
出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。比較的良好な一括資料である。

59号土坑（第78図）

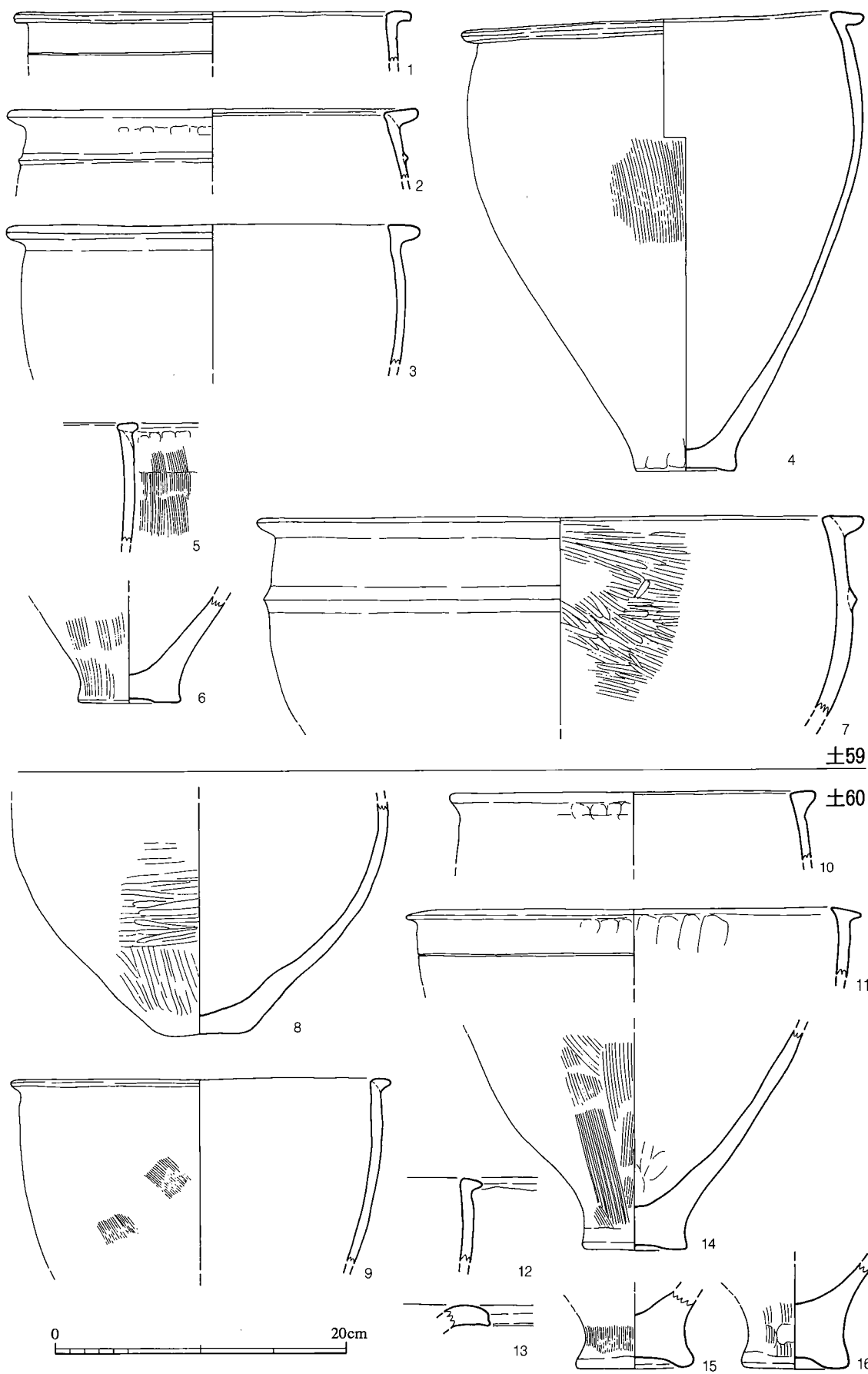
調査区東側に位置する不整形の土坑である。東西長270cm、南北長320cm、深さは中央から西側にかけては12cmを測る。東側にはさらに長軸235cm、短軸75cm、深さ40cmの不整楕円形の掘り込みがある。形状からして削平された堅穴住居跡の可能性が高い。

出土土器（図版55、第79図）

甕（1～6） 1～4は逆L字状口縁の甕。胴部は直立し、口縁部は短く直角に折り曲げ、上面は水平に伸び、端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口径27.0cm。2は胴部上半が内傾し、口縁部は短く三角形に近い。上面は直線的に内傾する。内端は明瞭な稜を有す。外面口縁部下には一条の低く小さな三角突帯を巡らす。全体的に風化が著しく調整不明だが、外面の口縁部直下には指圧痕が認められる。口径27.8cm。3は胴部がわずかに丸味を帯び、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は三角口縁に近く、口縁部上端はほぼ水平になり内端部は鋭い稜をも



第78图 59~62号土坑实测图 (1/40)



第79图 59·60号土坑出土土器实测图(1/4)

つ。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は器表が剥落し調整不明。口径28.2cm。4は完形品。底部は薄く底面はわずかに上げ底となり、端部は稜を有す。胴部下半は直線的に開き、胴部最大径は上位にある。口縁部付近は内傾し、胴部が丸味を帯びた器形となる。口縁部は三角口縁となるが、上面が外傾してやや長く伸びる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。底部付近は指ナデ、底面はナデ。口径27.7cm、底径6.9cm、器高31.7cm。

5は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は水平になる。外面口縁部下には一条の沈線がかすかに認められる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は細かいハケ目。6はあまり厚くならない底部。底面はわずかに中央が窪み、裾はほとんど開かず直立する。端部はシャープに仕上げられる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面はナデ。底径6.9cm。

鉢(7) 7は大型の鉢である。胴部は丸味を帯び口縁部付近は内傾する。口縁部は大きな三角口縁となり、上面は水平になる。外面口縁部下に低い三角突帯を一条巡らせる。外面の口縁部から突帯にかけては横ナデを行うが、それ以下は器表が剥落しており調整不明。内面は横・斜ヘラミガキを密に施す。口径41.7cm。

出土土器は5のように異質なものもあるが、その他は中期前半に比定できる。

60号土坑(図版22、第78図)

調査区南東側に位置する不整楕円形の土坑である。長軸165cm、短軸80cm、底面は西側が最も深く、深さ20cmを測る。底面中央から南側にかけて焼土の広がりを確認した。

出土土器(第79図)

壺(8) 8は底面は平坦だが端部は稜を全く形成せず丸くおさめ、底部と胴部に境がない。胴部は丸味を帯び、球形に近い形状になると思われる。内面は風化が著しいが、ヘラミガキか。外面は底部付近が縦ヘラミガキ、それより上は横ヘラミガキを行う。底径5.8cm。

甕(9~16) 9~12は三角口縁の甕。9は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は丸味を帯び、ほぼ水平になる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は不明瞭だが一部に斜ハケ目が残る。口径26.0cm。10は口縁部付近が内傾し、口縁部は大きめの三角口縁となる。上面は直線的で水平に仕上げ、内面は稜を有す。外面の口縁部直下には指圧痕が残る。それ以外は風化が著しく調整不明。口径25.2cm。11は口縁部付近が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は直線的に外傾し、内端・外端とも鋭く稜を有してシャープに仕上げられる。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、内面口縁部下は縦方向の指ナデ、外面の口縁部直下にも指圧痕が残る。胴部外面は風化が著しく調整不明。口径31.3cm。12は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は外傾する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は不明瞭だがナデか。

13は大型の甕あるいは壺の口縁部であろう。上面は丸味をもって水平に伸び、端部は面取りして下端を突出させる。上面はヘラミガキ、それ以外はナデ。

14~16は底部である。14はそれほど高い底部とはならない。底面はやや上げ底で裾は短くわずかに開き、端部はシャープに仕上げる。胴部は直線的に伸びる。胴部内面ナデ、内底面は指ナデの痕跡が残る。外面は縦ハケ目だが二種類の異なるハケ工具を使用する。底面はナデ。底径7.2cm。15は底面が窪んで上げ底となり、裾は短く開いて端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面はナデ。底径7.6cm。16は柱状の高い底部となる。底面は中央が大きく窪み、端部は丸くおさめ

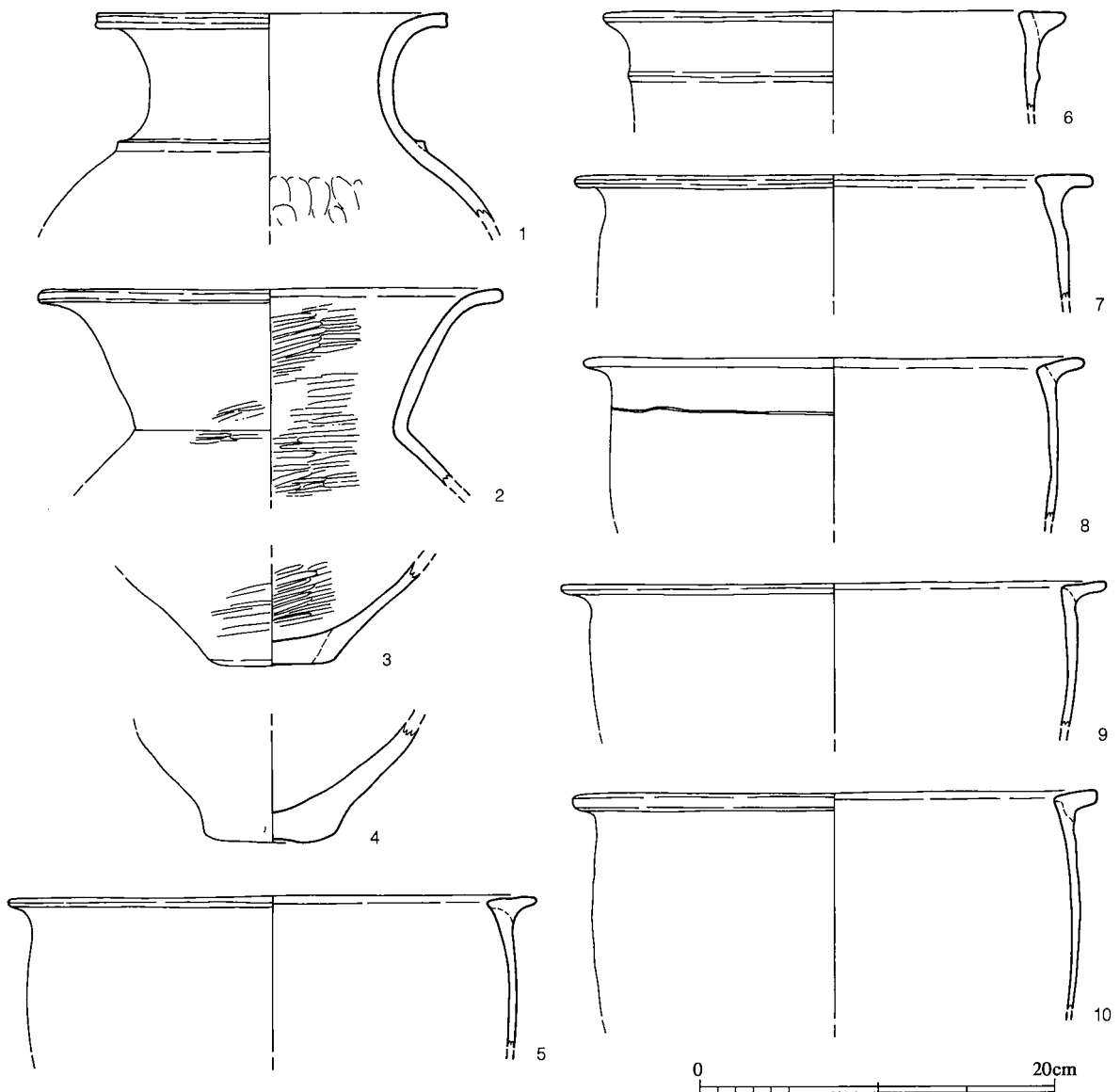
る。内面は風化が著しく調整不明、外面は縦ハケ目で指圧痕が残る。底面はナデ。底径7.0cm。
出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

61号土坑（図版22、第78図）

調査区南東端に位置する長方形の土坑で、23号竪穴住居跡に切られる。長軸345cm、短軸135cm、底面には不整形のピットやテラスを有しており平坦ではない。中央から南側にかけて不整形の落ち込みがあり、この中が最も深くなる。深さは最深部で35cm、東側の平坦面で20cmを測る。遺物は土坑の中央付近で多く出土している。幾つかの河原石とともに破碎された状況で出土しており、投棄されたものであろう。

出土土器（図版55、第80・81図）

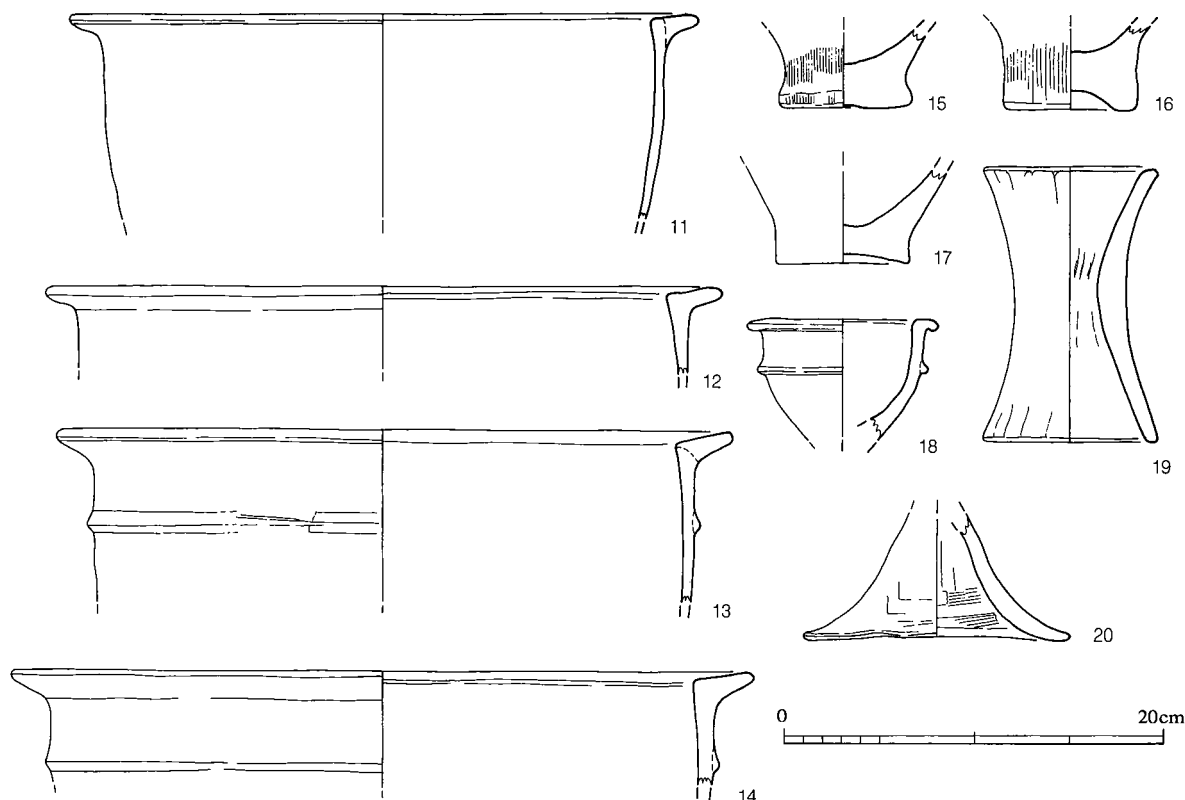
壺（1～4） 1は頸部の付け根から大きく外反して口縁部が水平にまで開く。端部は中央を窪ま



第80図 61号土坑出土土器実測図①（1/4）

せ凹線状におさめる。頸肩境には一条の三角突帯を巡らす。器表の風化が著しく調整不明。肩部内面には指圧痕が残る。口径19.8cm。2と3は接合しないが同一個体である。頸部付け根から口縁部にかけて直線的に大きく開き、さらに口縁部は緩く外折する。端部は丸くおさめる。底部は薄く底面が平坦となり、端部は不明瞭な稜を有す。口縁部外面は横ナデ、底面はナデ、それ以外は全て横ヘラミガキを行う。口径26.0cm、底径7.0cm。4は底面は平坦だが端部は丸く稜線を持たない。全体的に器表の風化が著しく調整不明。底径7.6cm。

甕（5～17） 5～14は全て逆L字状口縁となる。5は胴部上半が直立し口縁部付近はやや内傾する。口縁部上面はほぼ水平に伸び、内端・外端ともシャープに尖る。特に内端はわずかに突出する。口径29.8cm。6は胴部上半が直立し、口縁部はやや外側に伸びた三角口縁となる。口縁部上面はほぼ水平になる。外面の口縁部下には一条の低い三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面はほぼ風化し調整不明。口径26.0cm。7は口縁部付近が内傾し、口縁部は未発達な鋤先口縁となる。上面は水平に伸び、内端はわずかに突出する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は風化が著しく調整不明。口径29.0cm。8は胴部上半が直立する。口縁部上面は内傾し、内端にはしっかりとした稜を有す。外面の口縁部下には一条の細い沈線を巡らす。全体的に風化が著しく調整は不明。口径28.0cm。9は胴部上半が直立し、口縁部上面は直線的に内傾する。内端はしっかりとした稜を有す。全体的に風化が著しく調整不明。口径30.7cm。10は口縁部付近が内傾し、口縁部は短い逆L字状口縁となる。上面はほぼ水平に伸び、内端にはしっかりとした稜を有す。口径29.5cm。11は口縁部胴部上半が直立し、口縁部上面は短く水平に伸びる。内端はしっかりとした稜を有す。器表の風化が著しく調整は不明。口径33.2cm。12は胴部上半が直立し、口縁部上面はやや内傾する。



第81図 61号土坑出土土器実測図② (1/4)

内端は明瞭な稜を有す。口径35.6cm。13は胴部上半が直立し、口縁部は直線的に内傾する。内端は明瞭な稜を有す。外面口縁部下には一条の三角突帯を巡らす、一部剥落した箇所があり、そこには貼付前の計画線が認められる。器表の風化が著しく調整は不明。口径35.8cm。14は胴部上半が直立し、口縁部上面は直線的にやや内傾する。内端はしっかりした稜をもつ。外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。器表の風化が著しく調整不明。口径39.0cm。

15～17は底部。15は底部が平坦で裾がわずかに開き、端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.7cm。16はやや高い直立する底部となる。底面中央は大きく窪み、高台状になる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.7cm。17は底面が薄くやや上げ底となり端部はシャープな稜をもつ。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.9cm。

鉢 (18) 18は小型の鉢。胴部上半は直立し、口縁部には粘土紐を貼付して断面逆L字状にする。上面は外傾する。外面口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。全面ナデ調整を行い、一部に化粧土が認められる。口径10.0cm。

器台 (19) 19は上下が同形となる器台。端部は丸味を帯び、器壁が若干薄くなる。内外面に指ナデの稜線が残る。端部径9.2cm、中央部径5.9cm。

土師器高坏 (20) 20は裾部が大きく開く高坏脚部。端部は丸くおさめる。柱状部内面縦ナデ、裾部内面横ハケ目。外面はほとんど風化しており調整不明。裾部径14.0cm。混入品。

20を除き、出土土器は全て弥生時代中期前半に比定できる。良好な一括資料である。

62号土坑 (図版22、第78図)

61号土坑の西側に位置する長方形の土坑である。長軸155cm、短軸105cm、深さ10cmを測る。底面では幾つかの小ピットを検出した。遺物はほとんど出土せず、図示できるものもない。

64号土坑 (図版23、第82図)

調査区南東側の第二遺構面で検出した長方形の土坑である。長軸460cm、短軸165cm、底面はほぼ水平で、深さ25cmを測る。壁は比較的急な立ち上がりとなる。

出土土器 (第83図)

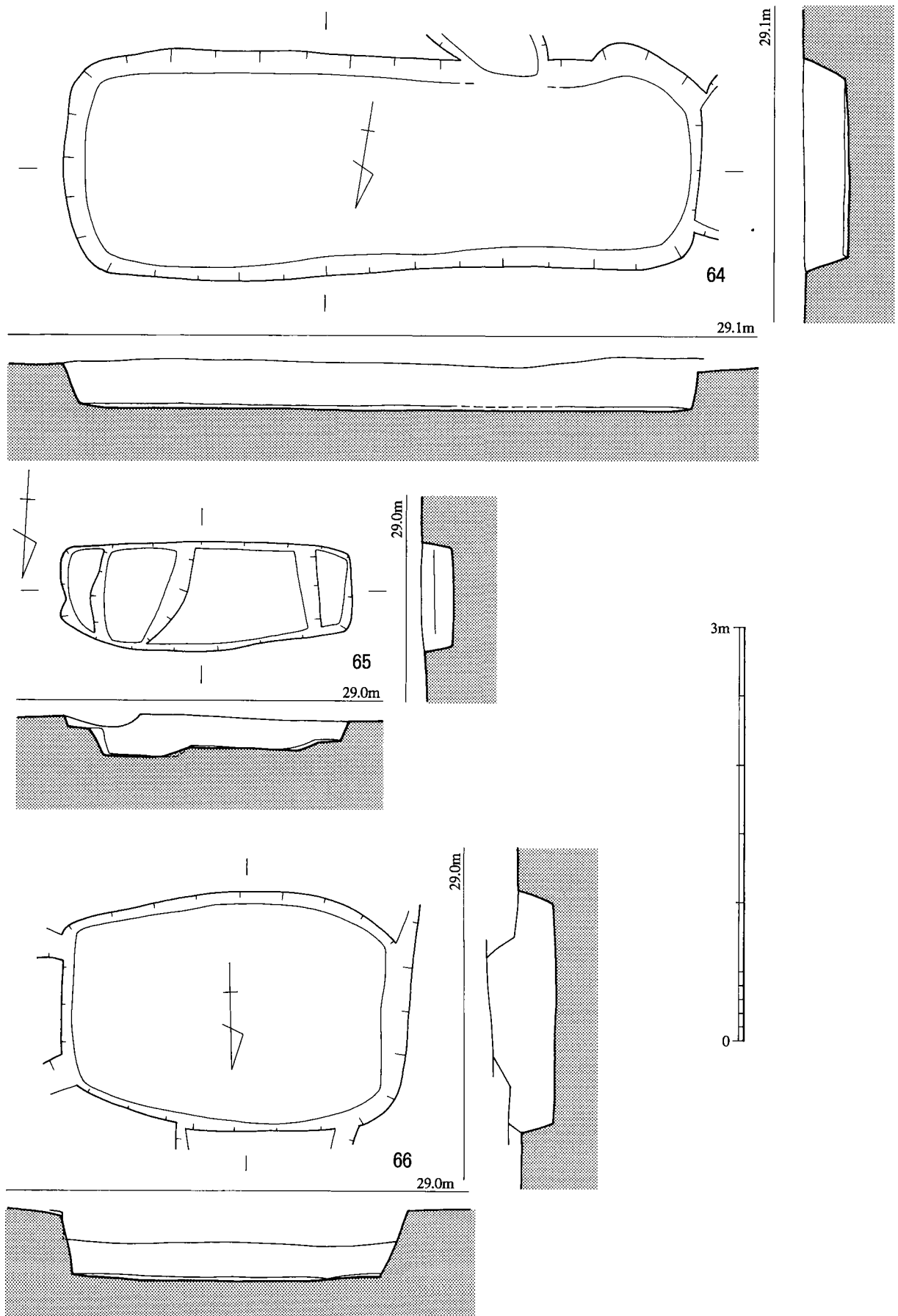
甕 (1～6) 1は如意形口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部は短く緩く外反する。器表の風化が著しく調整不明。口径26.6cm。2は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。口縁部上面は外傾する。口縁部は横ナデ、胴部はナデ。

3～6は逆L字状口縁の甕。3は上面が水平に伸び、横長の三角形に近い。全面風化が著しく調整不明。4は胴部上半が直立し、口縁部上面は水平に伸びる。全面風化が著しく調整不明。口径22.4cm。5・6は上面がほぼ水平に伸び、内端は明瞭な稜を有し突出気味にする。風化が著しく調整は不明。

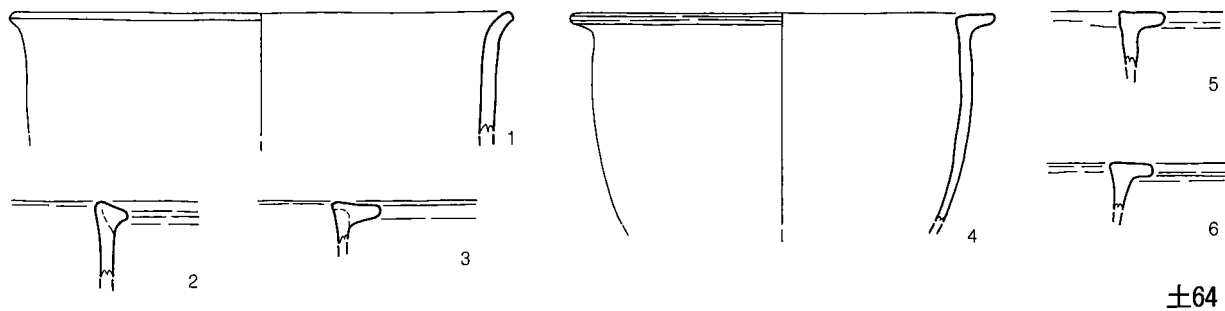
出土土器のうち、1・2は古相を呈するが、それ以外のものは弥生時代中期前半に比定でき、土坑の時期もこの時期であろう。

65号土坑 (図版23、第82図)

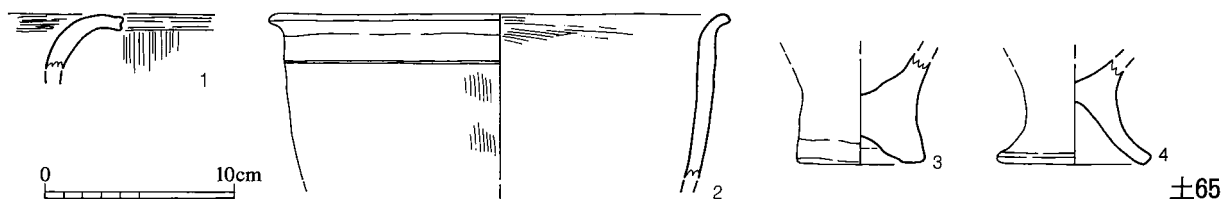
64号土坑同様、調査区南東側の第二遺構面で検出した長方形の土坑である。長軸210cm、短軸75



第82図 64~66号土坑実測図 (1/40)



±64



±65

第83図 64・65号土坑出土土器実測図(1/4)

cm、底面はテラスを有して階段状に掘削されており、最も深い部分で深さ30cmを測る。壁は垂直に近い立ち上がりとなる。

出土遺物には図示した土器の他、98のスクレイパーが出土している。

出土土器(第83図)

壺(1) 1は直口縁の壺。口縁部は大きく開き端部は水平に伸びる。外端は浅い沈線状に中央を窪ませる。内面は横ヘラミガキ、外端は横ナデ、外面は縦ハケ目。

甕(2・3) 2は如意形口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部は短く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部外面横ナデ、内面横ハケ目、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径24.0cm。3は高い底部で底面内部が大きく窪む。裾は外側へとやや開く。器表の風化が著しく調整不明。底径6.6cm。

台付鉢(4) 4は台付鉢の脚部。裾は外反して大きく開き、端部は丸くおさめる。体部内面ナデ、脚部は風化が著しく調整不明。裾部径6.5cm。

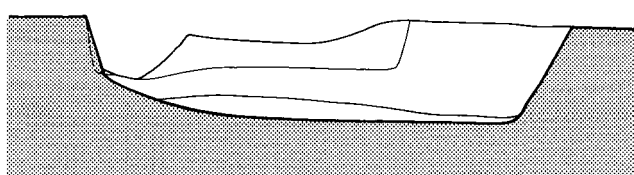
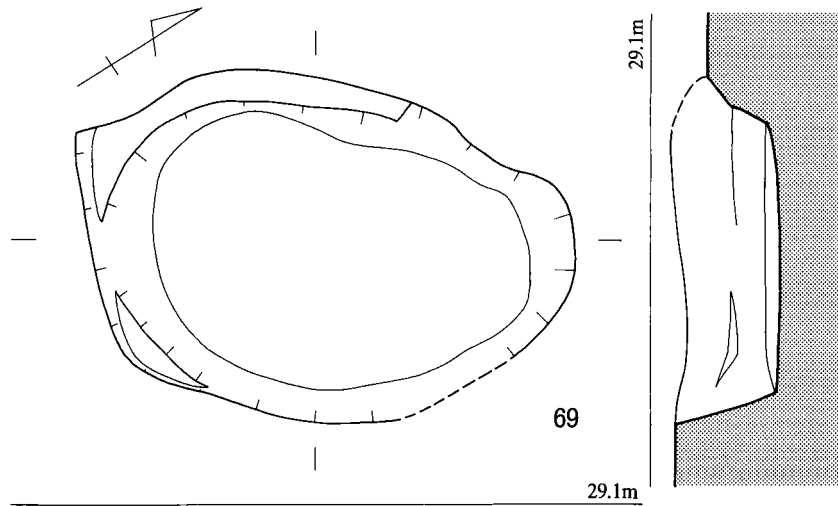
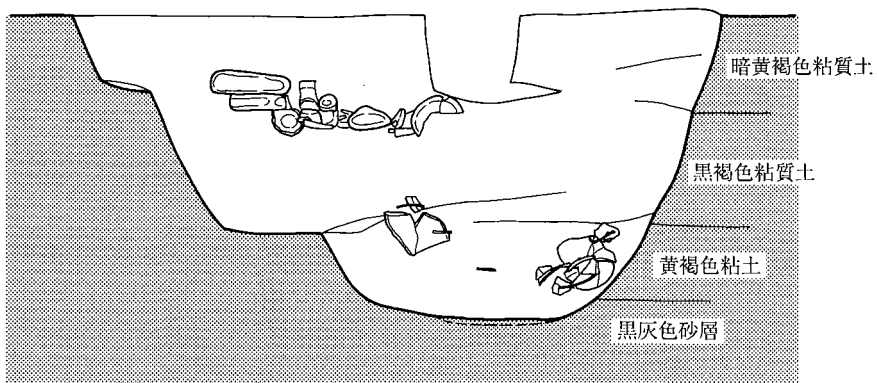
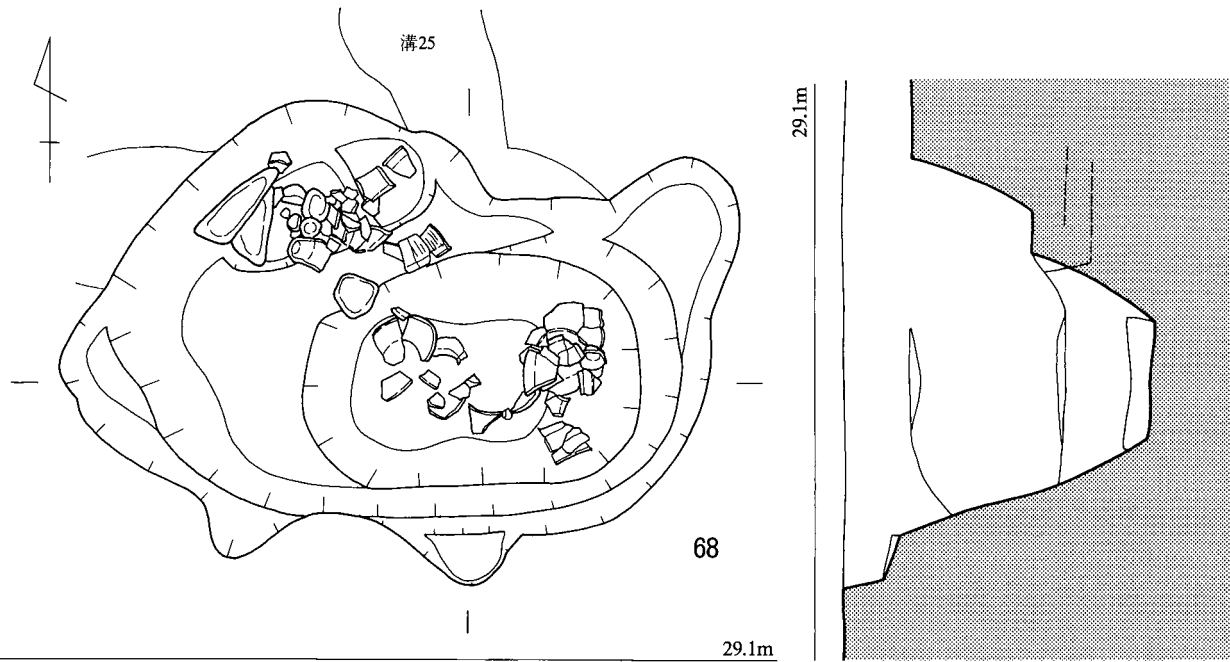
出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

66号土坑(図版23、第82図)

64号土坑同様、調査区南東側の第二遺構面で検出した長方形の土坑である。長軸250cm、短軸175cm、底面はほぼ水平で、深さ50cmを測る。壁は割と急な立ち上がりとなる。遺物はほとんど出土せず、図示できるものはない。

68号土坑(図版24、第84図)

調査区中央南寄りに位置する不整形の土坑で、25号溝、99号土坑と重複しこれらよりも新しい。長軸345cm、短軸220cmを測り、かなり大型の部類に属する。底面は土坑の中心よりもやや東側に偏っており、長軸100cm、短軸70cmの長方形状を呈している。深さは165cmを測り、地山の粘土層を突き抜け黒灰色砂層の湧水層まで達している。東壁は底面に向かってなだらかに下降するが、西壁は幾つかのテラスを形成し階段状になっている。また北西のテラス上面には大型の河原石が2個据え置



第84図 68・69号土坑実測図 (1/40)

かれていた。遺物はこのテラス周辺及び底面から40～50cm上層からまとまって出土した。

出土した土器のうち、3・7・11・16・18・19・21・24・25・30は覆土上層、それ以外は覆土下層からの出土である。

出土土器（図版55・56、第85～87図）

壺（1～7） 1は完形品。底部は不安定な丸底である。胴部は最大径が中位よりやや上にあり、頸部は強く内傾し、口縁部は短く外反する。端部は丸くおさめる。器表の風化が全体的に進むが、外面口縁部下にハケ目、肩部外面に横ヘラミガキが観察でき、ハケ目後に全面ヘラミガキ調整を行っていた事が推察される。また外面には部分的に化粧土が残っており、恐らく全面に塗布されたのであろう。口径13.8cm、胴部最大径23.7cm、底径7.6cm、器高25.5cm。

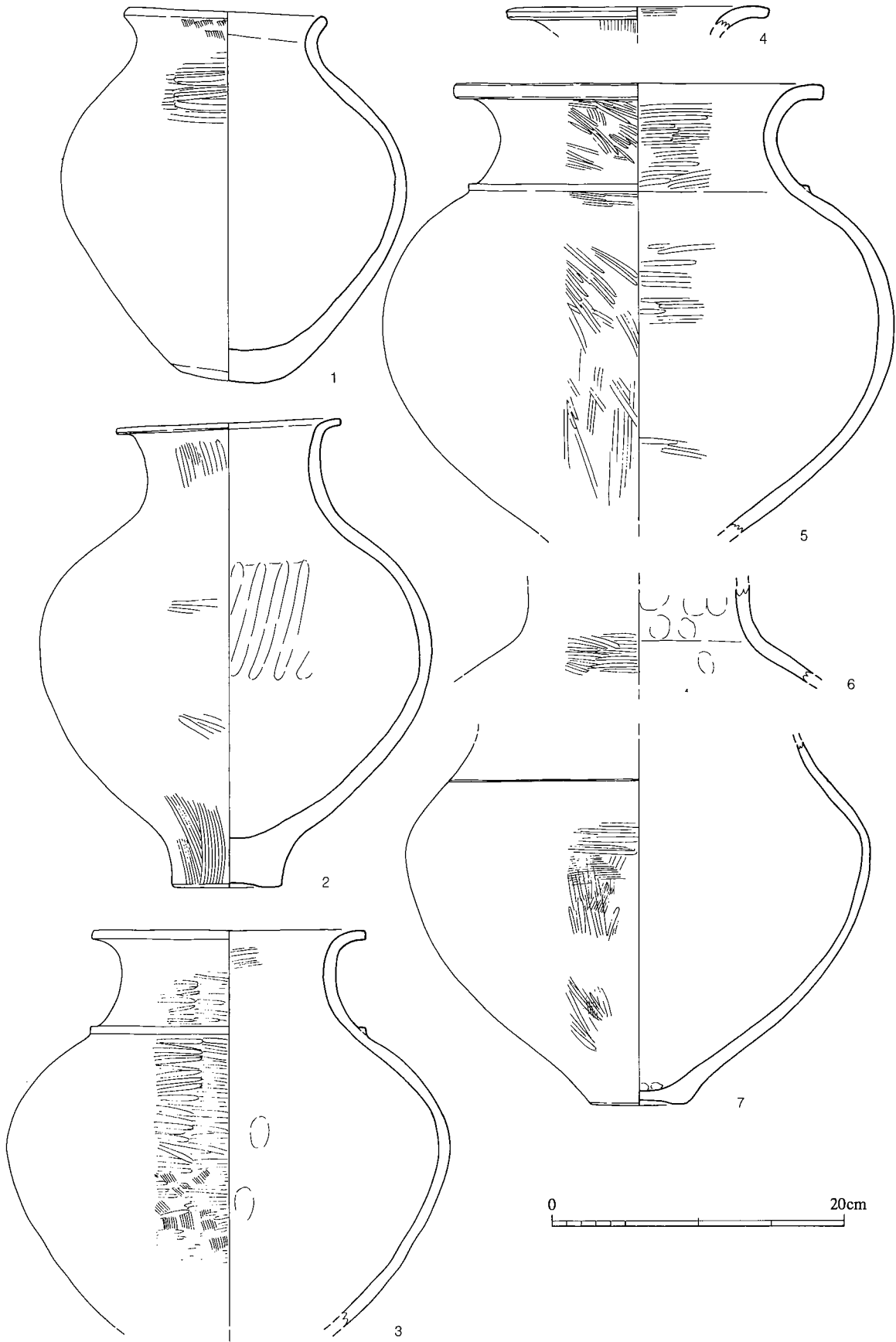
2も完形品。底部は分厚く直立し、底面は中央がやや窪む。端部は鋭い稜を有す。胴部は球形で最大径が中位にある。頸部は内傾するものの、直立に近い位まで立ち上がっている。口縁部は短く折り返し、端部は面取りして四角くおさめる。内面及び口縁部外面はナデで、胴部には縦長の指ナデを行った際の稜線が明瞭に残る。頸部外面は縦ハケ目後に縦ヘラミガキ、胴部は横ヘラミガキ、底部付近は縦ハケ目でヘラミガキはここまで及んでいない。底面はナデ。口径15.4cm、胴部最大径26.8cm、底径7.5cm、器高32.4cm。

3は胴部最大径が中位よりやや上にあり、頸部は内傾するものの直立に近く立ち上がり、口縁部は外反して端部を四角くおさめる。外面の頸肩境には一条の三角突帯を巡らす。口縁部内面は横ヘラミガキ、外面は横ナデ、胴部内面はナデで部分的に指圧痕が残る。外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。口径18.8cm、胴部最大径30.2cm。4は小型の壺。口縁部は大きく開き、上面はほぼ水平にまでなる。端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、内面は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ目。口径18.0cm。

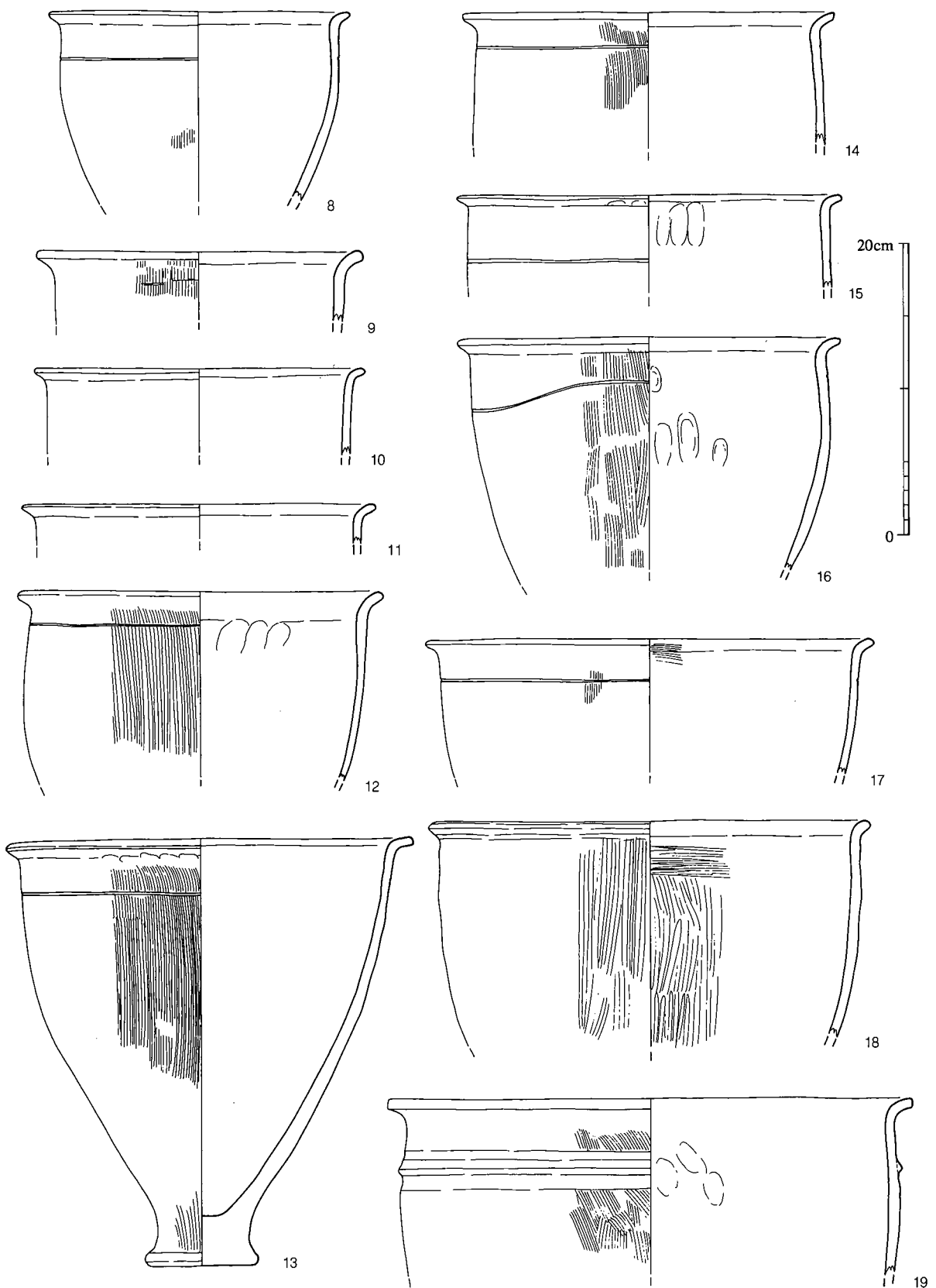
5は大型の壺で、扁平な器形となる。胴部は最大径が中位よりやや上にあり、肩は丸く張る。頸部は強く外反し、口縁部は水平近くまで開く。端部は面取りして四角くおさめる。外面の頸肩境に一条の三角突帯を巡らす。口縁部横ナデ、頸部内面横ヘラミガキ、外面斜ヘラミガキ、胴部内面横ハケ目、外面縦ハケ目後に雑なヘラミガキを行う。口径25.3cm、胴部最大径35.0cm。

6は壺の肩部片。肩部は強く内傾し、頸部は直立に近く立ち上がる。内面ナデで一部指圧痕が認められる。外面横ヘラミガキ。7は底部の径が小さく、器壁は薄い。またわずかに上げ底となる。胴部は最大径が中位にあり、肩が強く張る器形となる。外面頸肩境に一条の沈線を巡らす。胴部は内面はナデ、外面はハケ目後にヘラミガキを行う。底部は内面指オサエ、外面ナデ。胴部最大径31.8cm、底径6.6cm。

甕（8～30） 8～19は如意形口縁の甕。8は小型品。胴部上半は直立し、口縁部は短く緩く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径20.5cm。9も胴部上半が直立し、口縁部が短く緩く外反する。口縁部は横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径22.3cm。10は器壁が薄い。やはり胴部上半が直立し、口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。全面風化が著しく調整不明。口径22.5cm。11もほぼ同形となる。口径24.0cm。12も胴部上半が直立し、口縁部は短く緩く外反し端部を丸くおさめる。外面口縁部下のかなり上方に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデで上方には縦長の指ナデが認められる。外面は長い縦ハケ目。口径24.9cm。



第85图 68号土坑出土土器实测图① (1/4)



第86图 68号土坑出土土器实测图② (1/4)

13は完形品。底部は厚く、底面は平坦で上げ底とならない。裾は短く開く。胴部は丸味を持たず直線的に開き、胴部上半は大きく歪んでおり、直立あるいはやや外傾気味に立ち上がる。口縁部はやや強めに外反し、端部を丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目。口径27.8cm。14は胴部上半がわずかに内傾し、口縁部は短く外反する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径25.3cm。15は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデで上方には縦長の指圧痕が残る。外面は風化が著しく調整不明。口径26.3cm。16は口縁部付近がやや内傾し、胴部が丸味を帯びた器形となる。口縁部は短く外反し端部を丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす、直線とはならず、かなり歪んだものである。口縁部横ナデ、胴部内面ナデで部分的に指圧痕が残る。外面は縦ハケ目。口径26.2cm。17もやはり胴部上半が直立し、口縁部は短く外折する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデで内面に一部ハケ目が観察される。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径30.5cm。18は胴部上半が直立し、口縁部が短く外反する。口縁部横ナデ、胴部内面上半は横ヘラミガキ、下半は縦ヘラミガキ、外面は長い縦ハケ目。口径30.0cm。

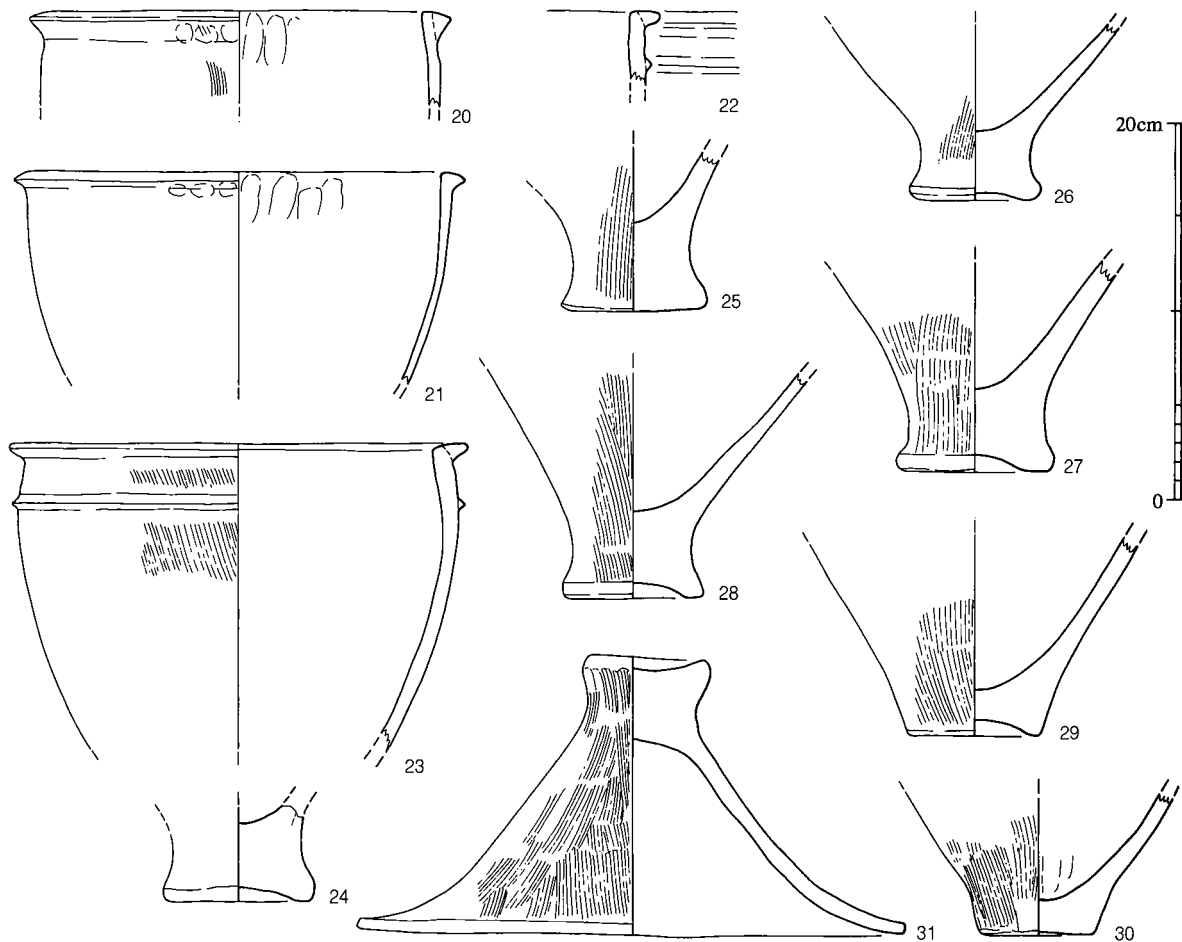
19は大型の甕となる。口縁部付近がわずかに内傾し、口縁部は強く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面の口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。内面はナデで突帯の内側には貼付の際の指オサエが残る。外面は縦ハケ目。口径35.9cm。

20～23は三角口縁の甕。20は口縁部付近がやや内傾し、口縁部上面は外傾する。口縁部内外面には指圧痕が認められる。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径22.4cm。21は胴部上半がわずかに開き、口縁部は小さな三角口縁となる。口縁部内外面には粘土紐貼付の際の指圧痕が明瞭に残る。胴部内面はナデ、外面は風化が著しく調整不明。口径23.7cm。22は口縁部付近が直立し、口縁部は逆L字形に近い三角口縁となる。外面の口縁部に近い所に一条の三角突帯を巡らす。内外面横ナデ調整。23は口縁部付近が内傾し、丸味を帯びた器形になる。口縁部は小さな逆L字形口縁となる。外面口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径24.1cm。

24～30は甕の底部。24は底面が窪み、裾はわずかに開いて端部を丸くおさめる。器表の風化が進み、調整不明。底径7.4cm。25は高い底部となる。底面はほぼ平坦で裾が開き、端部はしっかりとした稜をもちシャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.0cm。26は底面がやや上げ底となり裾が開き、端部を丸くおさめる。胴部はやや開いた器形となるようである。内面は風化が著しく調整不明。外面は縦ハケ目、底面はナデ。底径6.9cm。27は高い底部。底面が窪み、裾は開き、端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.9cm。28もやはり高い底部となる。底面は上げ底となり裾は開き、端部は丸味を帯びるものの比較的シャープなつくりである。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.4cm。

29は底部がそれほど厚くならず、また裾が開かず底部から胴部へと直線的に伸びる。底面は大きく上げ底となり、端部で接地する。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.0cm。30もやはり底部は厚くなく、裾が開かず底部と胴部の境が不明瞭なものである。底面は平坦で端部はシャープに仕上げられる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径5.8cm。

蓋(31) 31は甕の蓋。裾径に対して器高の高い器形となる。裾は外反して開き、端部は丸味を帯



第87図 68号土坑出土土器実測図③ (1/4)

びる。上面は大きく窪み、また上端は若干開く。端部は丸味を帯びる。内面ナデ、外面縦ハケ目。裾径28.8cm、上端径6.6cm、器高15.0cm。

出土土器には29や30にやや新しい様相を認めうるものの、それ以外のものに関しては弥生時代中期初頭に比定出来る。器種も豊富で良好な一括資料である。

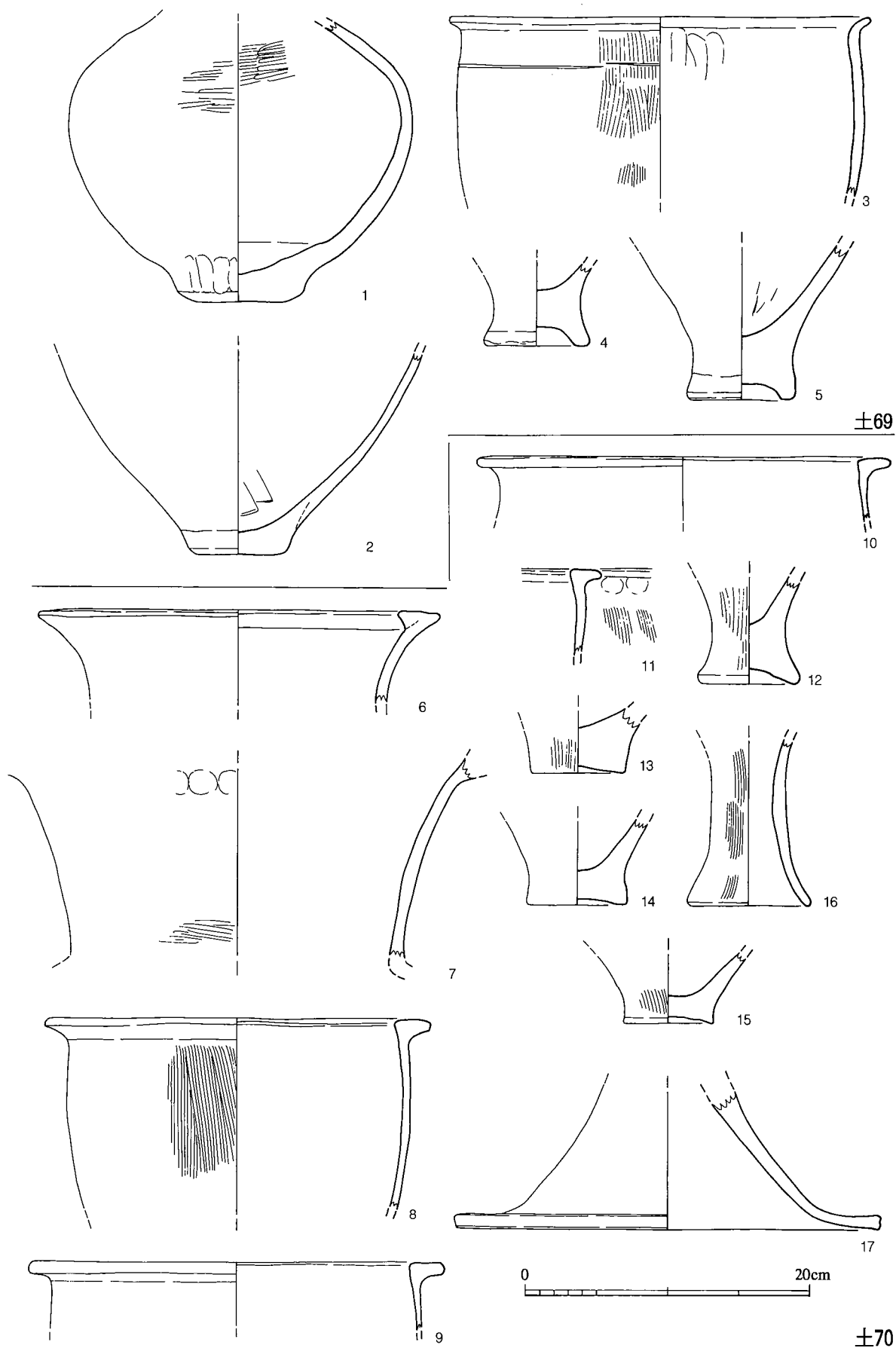
69号土坑 (図版24、第84図)

調査区中央南寄りに位置する楕円形の土坑で、8号掘立柱建物跡、70号土坑と重複しており、これらに切られる。長軸260cm、短軸185cm、底面はほぼ水平で、深さ50cmを測る。壁はやや急な立ち上がりとなる。

出土遺物には図示した土器の他、22の土製紡錘車が出土した。

出土土器 (図版56、第88図)

壺 (1・2) 1は底部がやや厚く、底面は平坦で端部は丸味を帯び稜をもたない。胴部は球形で最大径が中位にある。肩部は丸味をもって強く内傾する。肩部内面横ヘラミガキ、外面横ヘラミガキ、胴部内面横ナデ、外面は風化が著しく調整不明。底部外面には縦長の指圧痕が残る。底径8.8cm、胴部最大径24.1cm。2はやや胴長の器形となろうか。底部はやや厚く、底面は平坦である。端部は丸く、明瞭な稜を持たない。器表の風化が進み調整は不明瞭である。内底部には工具による縦ナデの痕跡が残る。底面はナデ。底径6.9cm。



第88图 69·70号土坑出土土器实测图 (1/4)

甕（3～5） 3は胴部上半が直立し、口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデで上方には縦指ナデが認められる。外面は縦ハケ目。口径29.3cm。4は底面が大きく窪み裾がやや開き、端部は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。底径7.1cm。5は4とほぼ同形。胴部はあまり開かない。器表の風化が著しいが、内面には縦方向の工具痕が残る。底径7.3cm。

出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

70号土坑（図版24、第89図）

69号土坑の東側に位置する不整楕円形の土坑で、69号を切っている。長軸210cm、短軸135cmを測る。底面は北側が段をもって深くなっており、深さは北側で50cm、南側で20cmを測る。壁は北側が緩やかな立ち上がりとなる。遺物は土坑の北側に集中して出土した。幾つかの河原石とともに破碎された状態で出土しており、投棄されたものであろう。

出土土器（図版56、第88図）

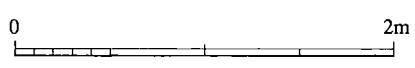
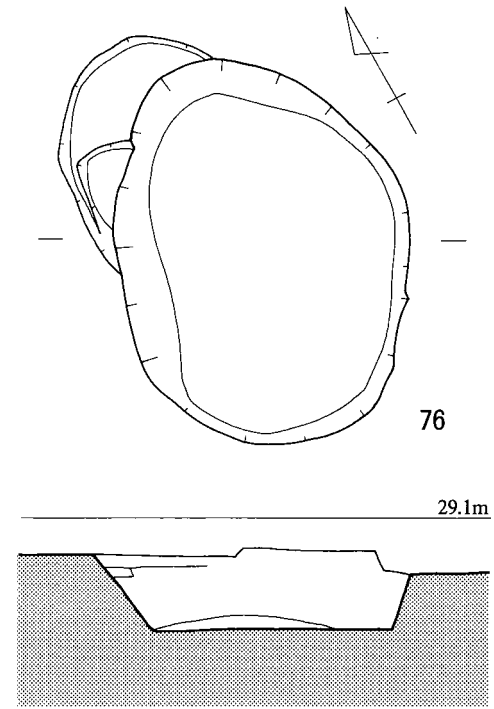
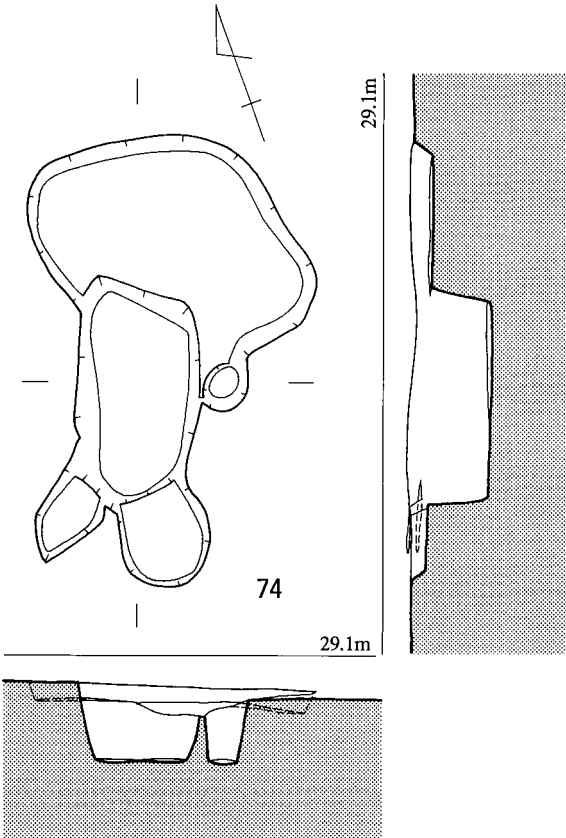
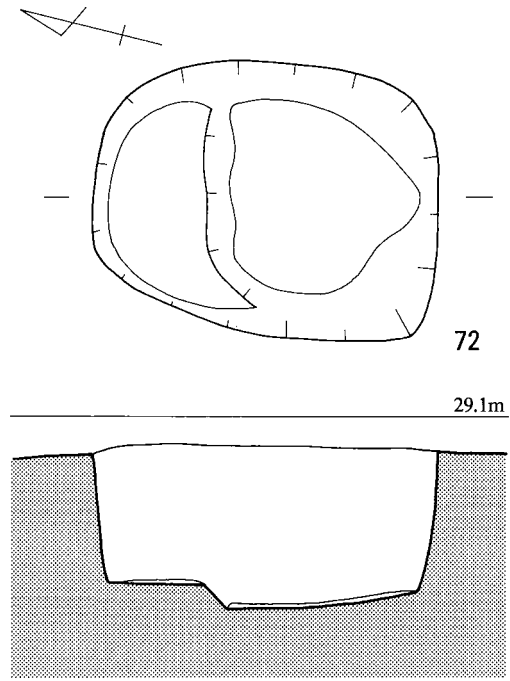
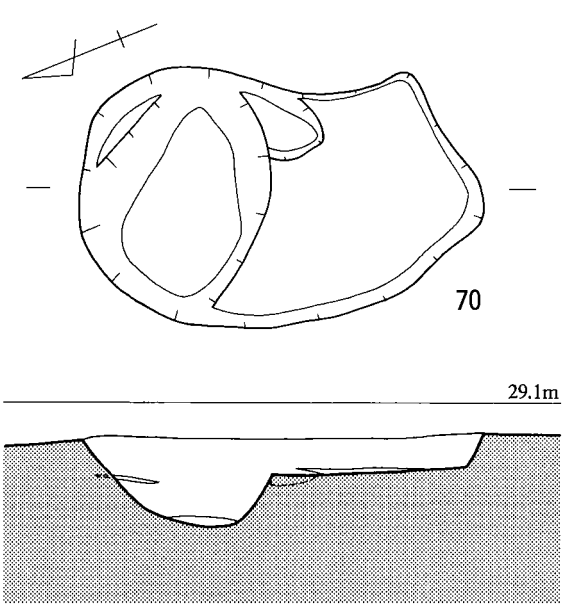
壺（6・7） 6は口縁部が大きく開き、内端に粘土帯を貼付して大きな三角形の突出をもつ。上端は水平に伸びる。風化が著しく調整は不明。口径28.2cm。7は頸部付け根から外反しながら大きく開く。内面はナデ、外面は口縁部下に指オサエ、下方に横ヘラミガキが認められる。

甕（8～15） 8～11は逆L字状口縁の甕。8は口縁部付近がやや内傾し、胴部が丸味を帯びる。口縁部は短い逆L字状口縁となり、上面は丸味を帯びて水平に伸びる。内端はわずかに突出する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.9cm。9は胴部上半が直立し、口縁部は短く外側に伸びる。上面は水平になる。風化が著しく調整不明。口径29.0cm。10は口縁部付近が内傾し、口縁部は外側に短く伸びた三角形状となる。内端はしっかりとした稜を有し、上面は丸味を帯びて水平に伸びる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は風化が進んでおり調整不明。口径28.8cm。11は胴部上半が直立し、口縁部は小さな逆L字状口縁となる。端部は丸く、上面は水平になる。口縁部は横ナデで外側に指圧痕が残る。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。

12～15は甕底部。12は高い底部となる。底面は上げ底となり裾は長めに開く。端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かない器形になるようである。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.2cm。13は厚い底部だが高くはならない。底面はやや上げ底となり、裾は開かない。端部はしっかりと稜を有し、シャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.5cm。14は裾がわずかに開くが高い底部とはならない。底面はやや上げ底となる。器表は風化が進んでおり調整不明。底径7.0cm。15は裾が開かず直立し、底部の器壁もあまり厚くならない。底面は若干上げ底となり、端部は鋭くシャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.3cm。

器台（16） 16は片方の端部を欠失するが、上下ほぼ同形になると思われる器台。裾部は緩やかに開き、端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目。端部径8.6cm、中位径5.2cm。

蓋（17） 17は反転復元したもので、端部の形状から割り出した径を信用すれば甕の蓋となる。しかし端部や体部の形状から見れば壺の口縁部として良いものであり、この場合端部が大きく歪んでいることになる。ここでは一応蓋として報告しておきたい。上方は直線的に開き、裾部はさらに屈曲して大きく開く。端部はやや肥厚し、外端を面取りする。器表の風化が著しく調整不明。端部径29.7cm。



第89图 70·72·74·76号土坑实测图 (1/40)

出土土器のうち、12は古い様相を認めうるものの、それ以外は弥生時代中期前半に比定できる。

72号土坑（図版24、第89図）

70号土坑の東側に位置する楕円形の土坑で、96号土坑と重複しておりこれを切っている。長軸180cm、短軸145cm、底面は南側が段をもって深くなっており、この南側で深さ85cm、北側で75cmを測る。壁は北側が急だが、それ以外は割と緩やかに立ち上がる。遺物は土坑底面付近からまとまって出土している。破碎された状況にあり、投棄されたものであろう。

出土遺物には図示した土器の他、34の砥石、159の磨製石斧が出土している。

出土土器（図版56、第90・91図）

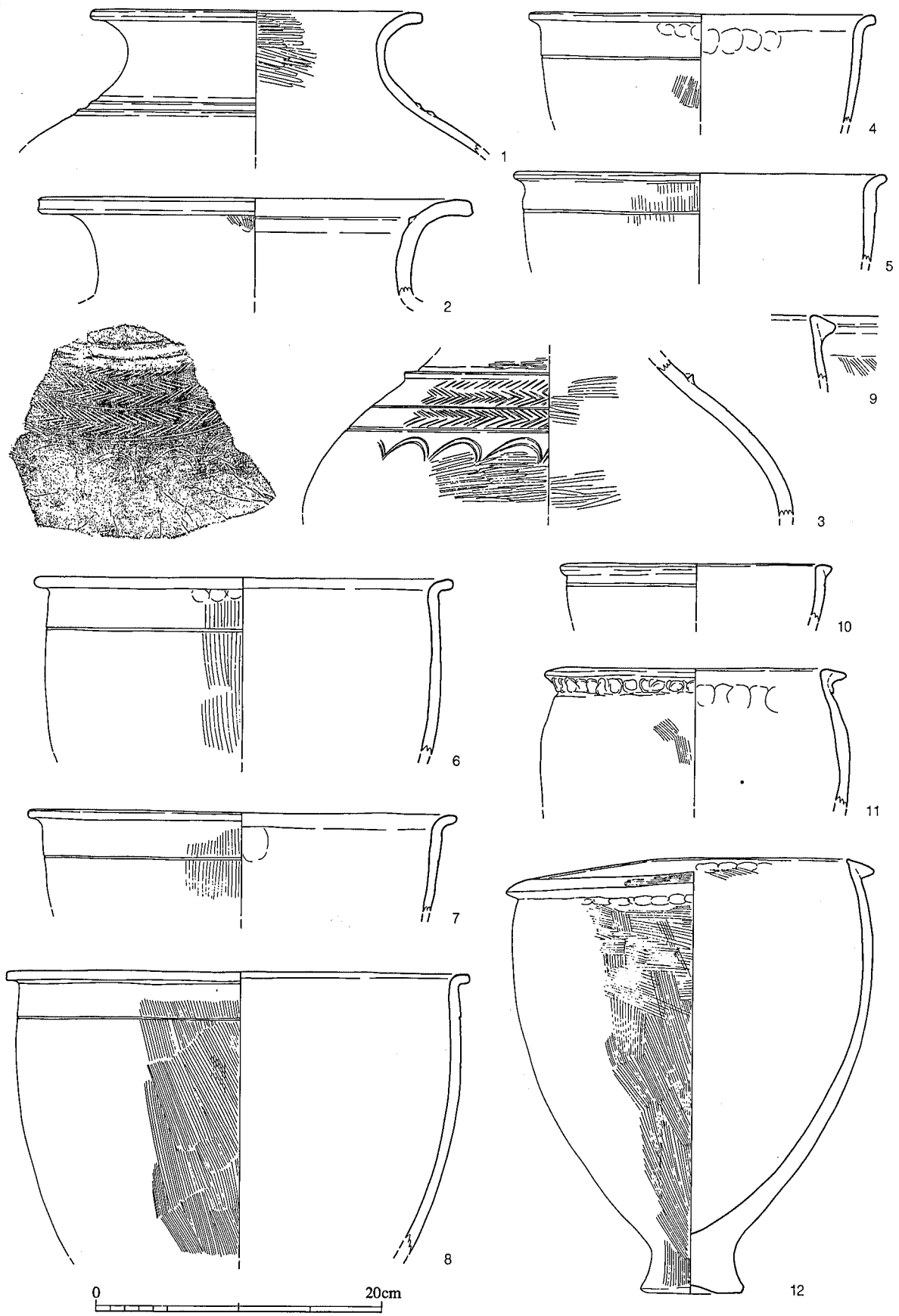
壺（1～3） 1は肩部が大きく内傾し、頸部が短く口縁部が大きく外反して上面が水平にまでなる。端部は丸くおさめる。外面頸肩境に二条の三角突帯を巡らす。全体的に器壁が薄い。口縁部は内面横ヘラミガキ、外面横ナデ、肩部は内外面とも風化しており調整不明。外面には化粧土が認められる。口径23.1cm。2は頸部が短く直立し、口縁部が大きく外反して上面が水平に伸びる。端部は面取りする。口縁部内面には小さな三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデで外面の一部に細かい縦ハケ目が残る。頸部付近は風化が著しく調整不明。外面に一部化粧土が残る。口径30.0cm。

3は肩部が丸味を帯び、頸部に向かって強く内傾する。肩部外面には無軸羽状文、沈線、二重の重弧文からなる文様帯を巡らせ、その上部には鋭い三角突帯を一条巡らす。文様はヘラで施される。内外面横ヘラミガキ調整。

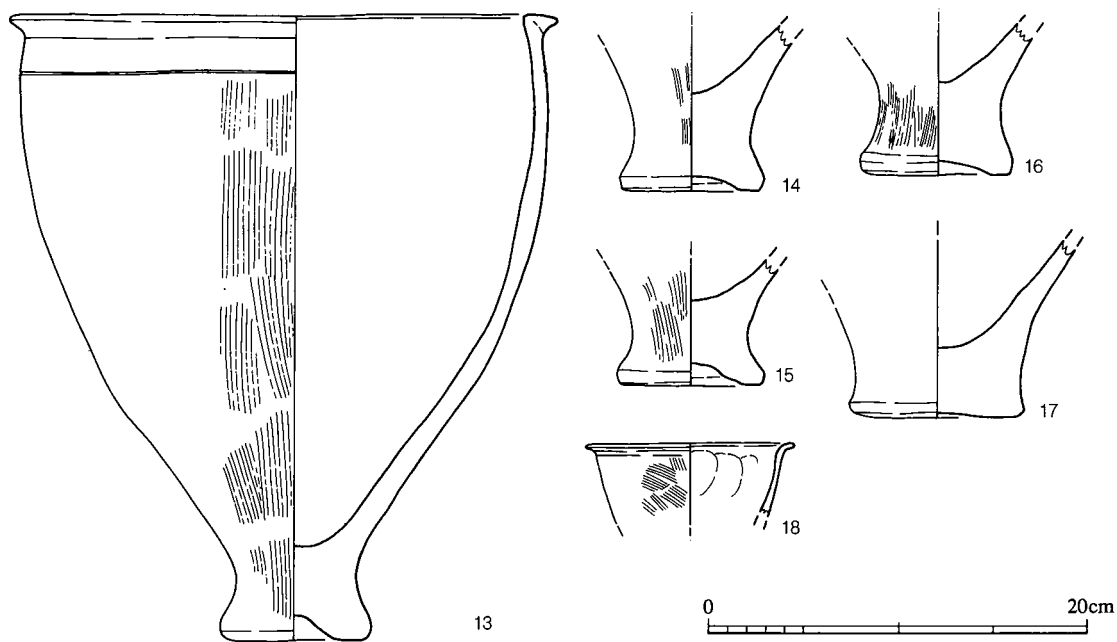
甕（4～17） 4～8は如意形口縁の甕。4は胴部上半がやや開き、口縁部は短く外反する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデで上方には指圧痕が認められる。胴部外面は縦ハケ目。口径24.1cm。5は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。胴部に比べて口縁部の器壁が薄く、端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.0cm。6は胴部上半が直立し、さらに口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部は短く強く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径29.0cm。7は胴部上半がわずかに外傾し、口縁部は短く強く外反する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径32.4cm。

9～13は三角口縁の甕。9は口縁部付近が内傾し、口縁部は形の整った三角形になる。上面は外傾する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。10は小型の甕としたが鉢となる可能性もある。口縁部は小さな三角口縁となる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は風化が著しく調整不明。口径19.0cm。11は小型の甕。口縁部付近が内傾し、口縁部は三角口縁とするが、下面には粘土紐貼付の際の指圧痕が明瞭に残る。また内面にはその際の指圧痕が薄く残る。上面は外傾する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径21.2cm。

12は完形品。底部は高く底面中央がやや窪み、裾が開く。胴部上半は丸味を帯び、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は若干垂下した三角口縁となる。口縁部内外面に粘土帯貼付の際の指圧痕が残る。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は上方が横ハケ目、下方が縦ハケ目。口径25.8cm、底径



第90图 72号土坑出土土器实测图①(1/4)



第91図 72号土坑出土土器実測図② (1/4)

7.2cm、器高30.5cm。

13も完形品。底部は高く、底面が大きく窪んで裾はやや開く。端部は丸味を帯びる。胴部は上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面はほぼ水平に伸び、外端部は鋭くシャープに仕上げる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。口径28.8cm、底径7.8cm、器高33.0cm。

14~17は甕底部。14は底面が上げ底となり裾が開く。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.5cm。15は底面が深く窪み、裾は大きく開く。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.7cm。16は底面が窪み、裾は開いて端部を丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。17は大型甕の底部。底面中央がわずかに窪み、裾はほとんど開かず底部が直立する。風化が著しく調整は不明。底径9.2cm。

鉢 (18) 18は小型の鉢。体部は開き口縁部が短く外反する。上面は丸味を帯び、ほぼ水平になる。口縁部横ナデ、胴部内面指ナデ、外面斜ハケ目。口径11.0cm。

出土土器には3のように古い様相を残すものもあるが、他は全て弥生時代中期初頭のものとして良いものである。比較的良好な一括資料である。

74号土坑 (図版25、第89図)

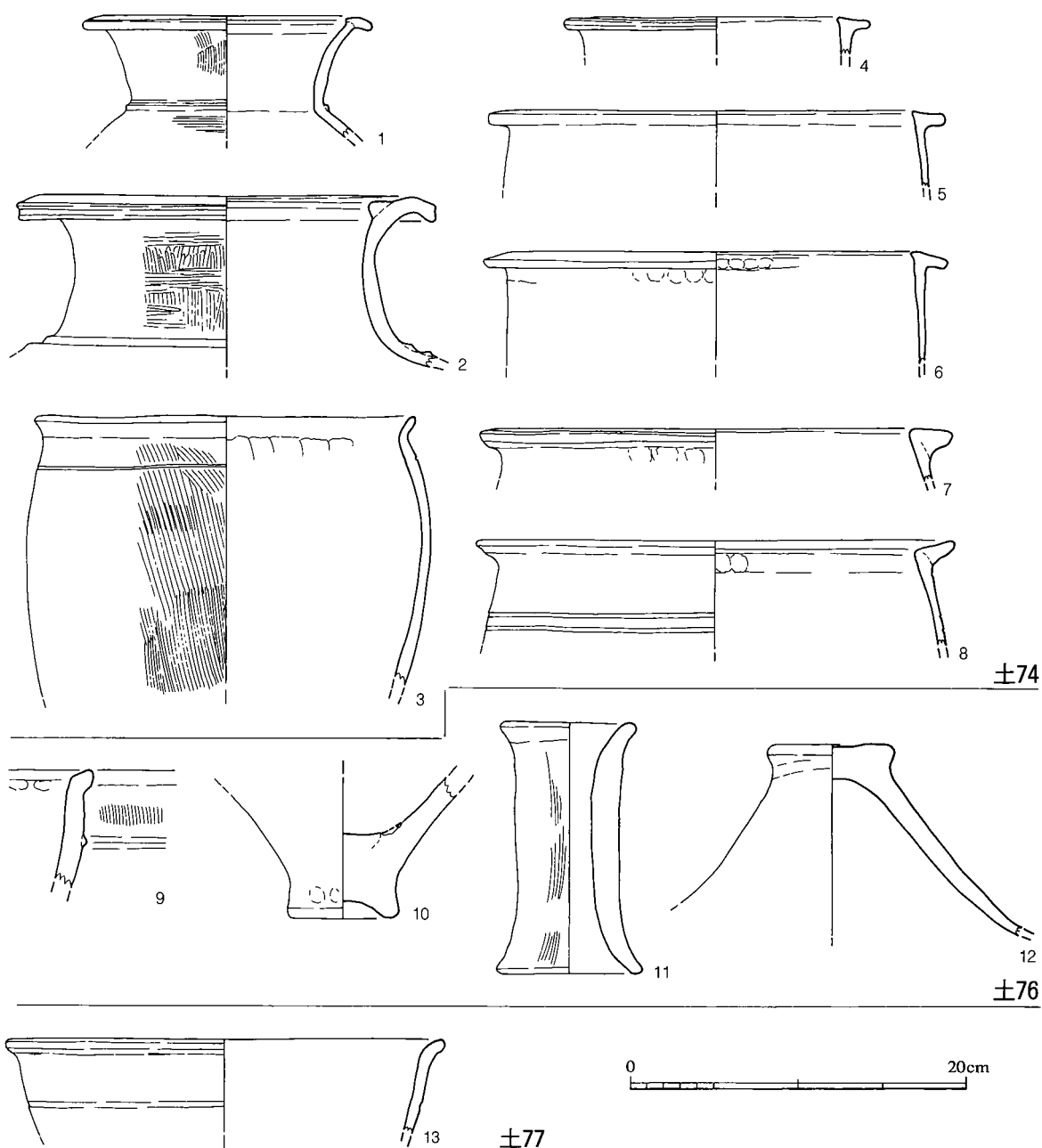
調査区中央に位置する不整形の土坑で、43号竪穴住居跡に切られている。南北長240cm、東西長は北側で150cm、南側で60cmを測る。中央付近は長軸110cm、短軸65cmの規模でさらに深く掘り込んでおり、この掘り込みの底面はほぼ水平である。深さは北側で10cm、中央の掘り込み部分で40cm、南側で10cmを測る。壁は割と急な立ち上がりとなる。遺物は底面からやや浮いた状態で出土している。細片が多く、恐らく投棄されたものであろう。

出土遺物には図示した土器の他、60の打製石錘、102の使用痕ある剥片、125の磨製石鏃が出土している。

出土土器（図版57、第92図）

壺（1・2） 1は頸部付け根から開き、口縁部が短い鋤先口縁となる壺。頸肩境に一条の三角突帯を巡らす。口縁部上面は外傾し、内側にもやや突出する。全体的にハケ目調整の後にナデを行う。口径17.2cm。2は頸部下半はやや内傾し、口縁部が強く外反しており、端部上面は外傾する。外端部は上下に拡張し、また幅広の沈線を一条巡らせる。外面頸肩境に二条の三角突帯を巡らせ、また口縁部内面にも大きな三角突帯を貼付する。口縁部は両面ともナデ、頸部内面はナデ、外面は細かい縦・横ヘラミガキ。口径24.8cm。

甕（3～8） 3は如意形口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部付近は内傾する。口縁部は短く緩く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面



第92図 74・76・77号土坑出土土器実測図（1/4）

はナデで上方には指ナデ痕が残る。胴部外面は縦ハケ目。口径22.4cm。

4～8は逆L字状口縁の甕。4は上面が水平に伸び、内端はわずかに突出する。全面横ナデ調整を行う。口径18.0cm。5は口縁部付近がやや内傾し、上面はわずかに外傾する。内端はシャープな稜を有している。器表の風化が著しく調整不明。口径27.2cm。6は胴部上半が直立し、口縁部上面は外傾し、内端は短く突出する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は風化のため調整不明。口径27.4cm。7は胴部の口縁部付近が内傾し、口縁部は大きな三角形形状となる。全面ナデ調整。口径27.8cm。8は胴部上半が内傾し、口縁部は伸びた三角形形状となる。上面は内傾する。外面口縁部下には二条の沈線が巡るように図化しているが、細片のため本当に二条沈線となるのか不安が残る。口径28.4cm。

出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期前半に比定できる。

76号土坑（図版25、第89図）

調査区中央に位置する楕円形の土坑で1号溝、77号土坑と重複しており、1号溝よりも古く77号土坑よりも新しい。長軸200cm、短軸155cm、底面は北側がやや浅くなっており、北側で35cm、南側で45cmを測る。壁は割と緩やかに立ち上がる。遺構検出面直下で多くの円礫とともに土器片も出土しており、廃棄された状況を示す。

出土遺物には図示した土器の他、198の鉄滓が出土しているが、混入の可能性も否定できない。

出土土器（図版57、第92図）

甕（9・10） 9は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。外面口縁部下には一条の小さな三角突帯を巡らす。器壁は非常に厚い。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。10は高い底部で底面中央が深く窪むものの裾は開かない。端部は丸くおさめる。器表の風化が著しく調整不明。底径5.9cm。

器台（11） 11は端部が等しく開き、上下の区別がつかない。端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目。端部径8.6cm、中央付近径6.0cm。

蓋（12） 12は天井部があまり厚くならず、端部もほとんど開かない。天井部外面はほぼ平坦となる。器表の風化が著しく調整は不明。端部径7.6cm。

出土土器に良好なものがなく、今一つ決め手に欠ける。中期初頭～前半と幅を持たせておきたい。

77号土坑（図版25、第93図）

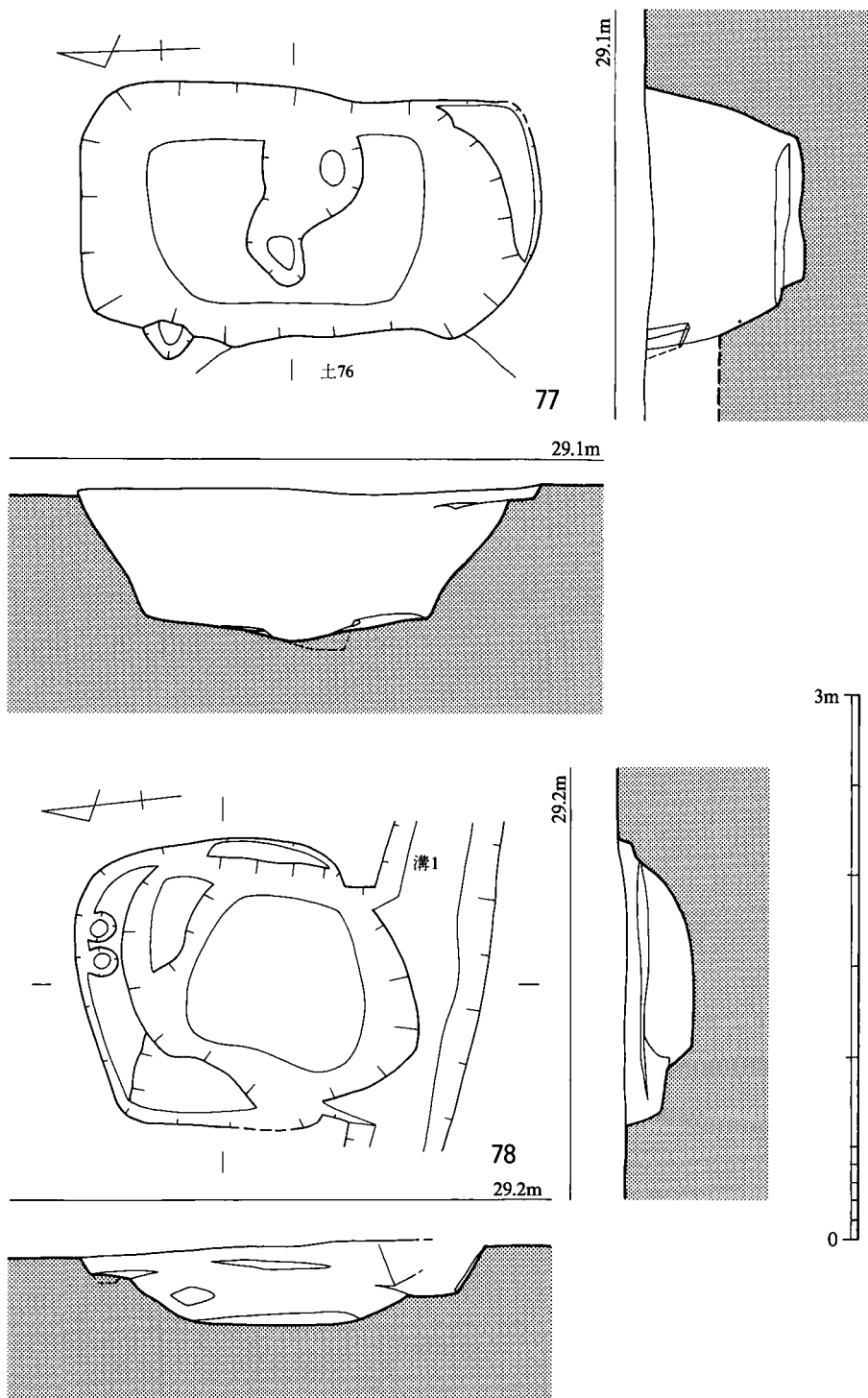
76号土坑の東側に位置する長方形の土坑で、76号土坑に切られている。長軸255cm、短軸145cmを測る。底面は中央付近が不整形に窪んでおり、この窪みまでの深さは85cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、底面に向かってすり鉢状に下降する。

出土遺物には図示した土器の他、152の磨製石斧が出土した。

出土土器（第92図）

甕（13） 13は胴部上半が開き、口縁部はさらに短く外反する。外面口縁部下に太めの沈線を一条巡らす。全面風化が著しく調整不明。口径26cm。

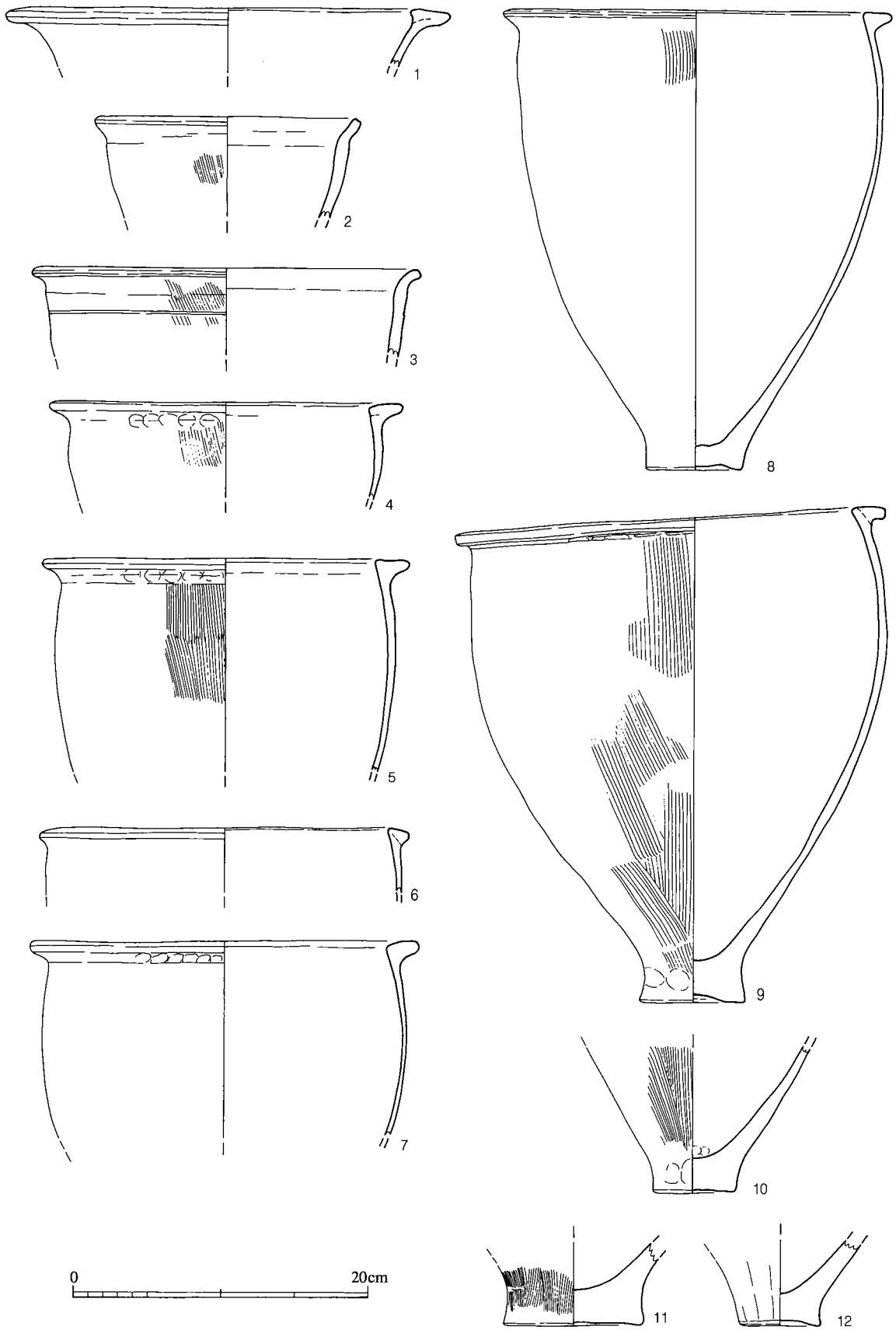
出土土器は弥生時代中期初頭に比定できる。



第93図 77・78号土坑実測図 (1/40)

78号土坑 (図版25、第93図)

77号土坑の東隣に位置する方形の土坑で、南側を1号溝に切られる。長軸180cm、短軸160cm、底面は中央付近がやや深くなっており、深さ45cmを測る。壁は南側は緩やかに傾斜し、北側は段をもって底面に向かって下降している。遺物は底面からやや浮いた状態で多く出土した。破碎された状況にあり、投棄された事が窺える。



第94图 78号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土遺物には図示した土器の他、109の打製石斧が出土している。

出土土器（図版57、第94図）

壺（1） 1は口縁部が大きく外反し、内端部に粘土帯を貼付して内側に突出させる。上面は外傾する。風化が著しく調整不明。口径30.0cm。

甕（2～12） 2は小型の甕か、または体部の深い鉢になると思われる。胴部上半は開き気味に伸び、口縁部はやや外反する。端部は面取りして四角くおさめる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径18.0cm。3は如意形口縁の甕。胴部上半はやや開き、口縁部は短く緩く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.2cm。

4～9は三角口縁または逆L字状口縁となる甕。4は胴部上半が直立し、口縁部は外側に伸びた三角口縁となる。上面はほぼ水平に伸びる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径23.8cm。5は胴部上半が直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は外側に伸びた三角形となり上面は水平になる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径24.8cm。6は胴部の口縁部付近がやや内傾し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は外傾する。風化が著しく調整は不明。口径25.0cm。7は胴部上半が内傾し、口縁部は短い逆L字状口縁となる。上面は丸味を帯び、内傾する。口縁部外面下方には指圧痕が残る。風化が著しく調整不明。口径26.4cm。

8は底部は薄く、わずかに上げ底となる。裾は開かず直立し、端部はシャープに仕上げる。胴部下半は直線的に伸び、上半は直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は三角口縁となるが、上面は水平に伸びる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径26.5cm、底径5.5cm、器高31.1cm。9は器高の割に口径が大きい。底部はやや厚く、底面は窪み、裾がわずかに開く。端部はシャープに仕上げる。胴部上半は内傾し、胴部が丸味を帯びた器形となる。口縁部は短い逆L字状口縁となる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目、底部外面指オサエ、底面ナデ。口径29.4cm、底径7.2cm、器高33.0cm。

10～12は甕の底部。10は底部がやや厚く、底面はわずかに上げ底となる。裾は開かず直立し、胴部もあまり開かずスマートな器形になると思われる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径5.1cm。11は径が大きく大型の甕底部になると思われる。底面はほぼ平坦で裾はわずかに開き、端部は比較的シャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径9.4cm。12は底面がわずかに上げ底となり、裾は開かず底部から胴部へと直線的に伸びる。内面ナデ、外面は指ナデ整形の際の稜線が観察される。底面はナデ。底径5.5cm。

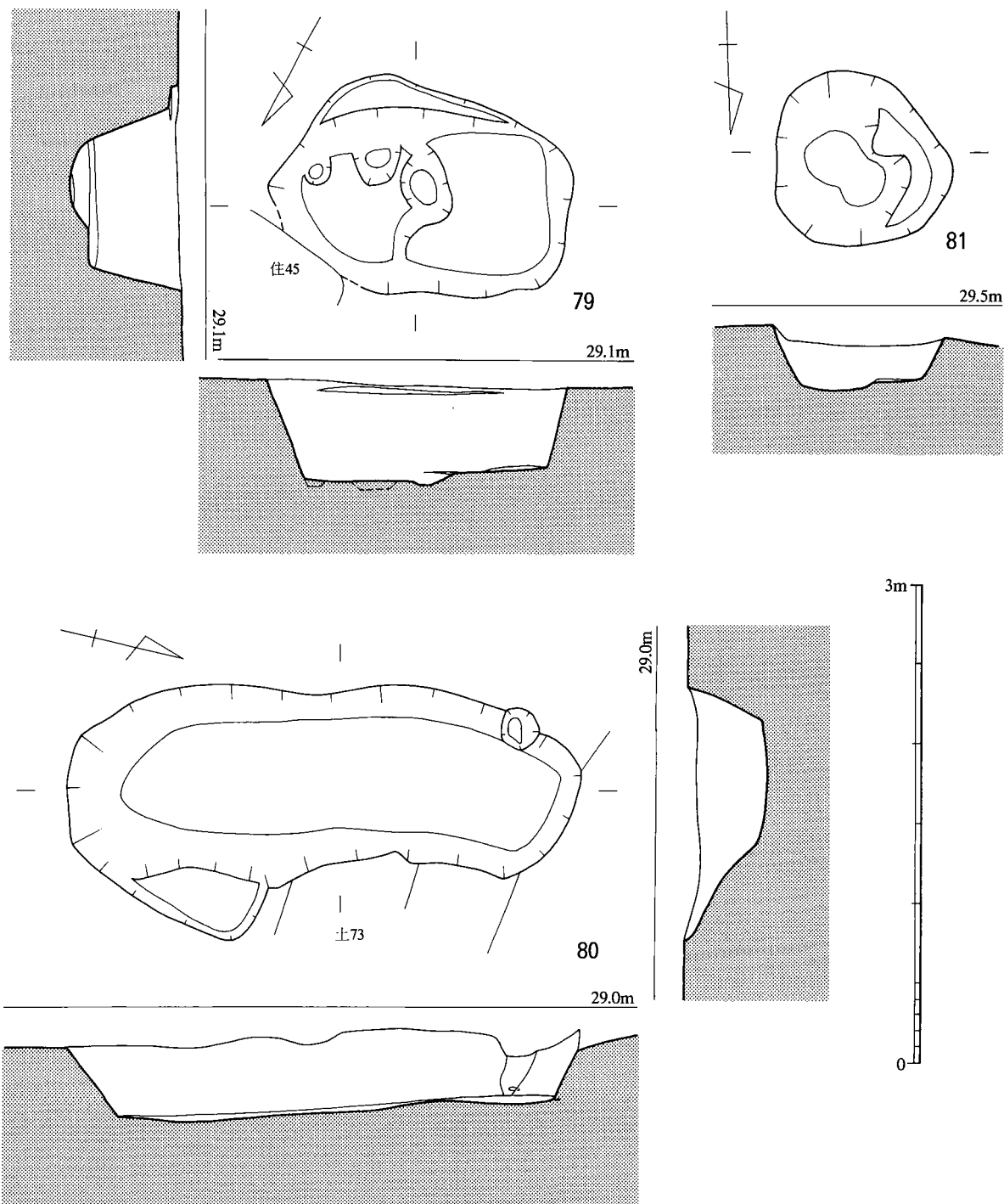
出土土器には6のようにやや古相を示すものもあるが、これ以外は弥生時代中期前半として良いものである。比較的良好な一括資料である。

79号土坑（図版26、第95図）

78号土坑の北側に位置する不整楕円形の土坑で、北西側を45号竪穴住居跡に切られる。長軸185cm、短軸140cm、底面は東側が段をもって深く、さらに3個のピットが掘り込まれる。深さは東側で60cm、西側で50cmを測る。壁は北側から西側にかけて急な立ち上がりとなる。遺物は底面からかなり浮いた状態で出土している。

出土土器（図版57、第96図）

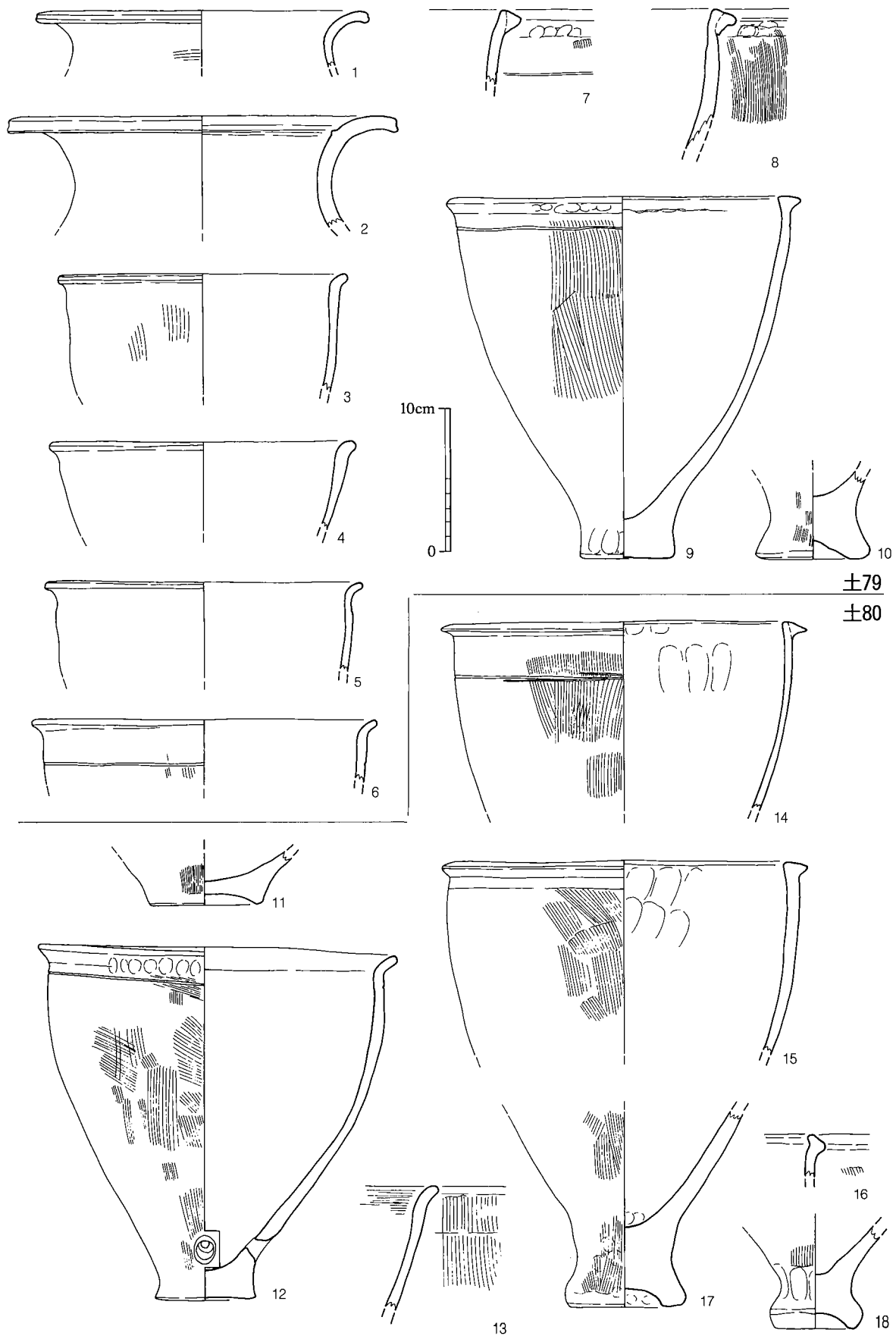
壺（1・2） 1は口縁部が大きく外反し、端部は丸くおさめる。風化が進んでおり調整は不明瞭



第95図 79～81号土坑実測図 (1/40)

だが、全面にヘラミガキを施しているようである。また全面に化粧土を塗布する。口径23.0cm。2は頸部がよく締まり、口縁部は大きく外反して口縁部上面はわずかに外傾する。端部は強くナデて凹線状の沈線を巡らせる。口縁部内面には小さな三角突帯を巡らす。器表の風化が進み、調整は不明。口径27.2cm。

甕 (3～10) 3～6は如意形口縁の甕。3は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反し端部を丸くおさめる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径20.0cm。4は胴部上半がやや開き、口縁部はわずかに外反する。端部は丸くおさめる。器表の風化が著しく調整不明。口径21.2cm。5



第96图 79·80号土坑出土土器实测图 (1/4)

は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。器壁は非常に薄い。風化が著しく調整不明。口径22.0cm。6は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径24.0cm。

7～9は三角口縁の甕。7は口縁部付近が開き、口縁部上面は外傾する。口縁部直下には粘土帯貼付の際の指圧痕が明瞭に残る。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。8は胴部上半が直立気味に立ち上がる。口縁部は大きめの三角口縁となるが、その下面には粘土帯貼付の際の指圧痕が明瞭に残る。口縁部上面は外傾する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。9は完形品。底面は平坦で底部は裾が開かず直立する。胴部上半はやや外傾し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面はほぼ水平になる。口縁部内面には粘土の接合痕が残り、外面には粘土帯貼付の際の指圧痕が認められる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径24.8cm、底径6.6cm、器高25.3cm。

10は甕の底部。底面は大きく窪み、裾は開き端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期初頭に比定できる。

80号土坑（図版26、第95図）

調査区中央南寄りに位置する楕円形の土坑である。73号土坑と重複しておりこれに切られる。長軸320cm、短軸120cm、底面は南側がやや深くなっており、深さは南側で55cm、北側で45cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は底面からかなり浮いている。破碎されており投棄されたものと思われる。

出土遺物には図示した土器の他、80の石鏃が出土した。

出土土器（図版57・58、第96図）

壺（11） 11は壺の底部。底面は上げ底となり、端部で接地する。底部と胴部の境目は明瞭ではない。内面は風化が著しく調整不明。外面は縦ハケ目、底面はナデ。底径7.8cm。

甕（12～18） 12・13は如意形口縁の甕。12は完形品。底部は厚いが高くはならない。底面は平坦で裾は短く開き、端部はシャープに仕上げる。胴部下半は直線的に伸び、胴部上半は直立する。口縁部は緩く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部直下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデで外面には口縁部屈曲の際の指圧痕が残る。胴部は内面ナデ、外面縦・斜ハケ目、底面ナデ。胴部の底部に近い位置に焼成後の穿孔を行う。口径25.0cm、底径6.9cm、器高24.9cm。13は鉢になるかもしれない。胴部上半は外傾し、口縁部はわずかに外反する。端部は丸くおさめる。口縁端部は横ナデ、内面は横ハケ目。胴部内面はナデ、外面は口縁部直下から縦ハケ目。

14～16は三角口縁の甕。14は口縁部付近が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。口縁部上面は外傾し、外端は鋭く尖る。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面はナデで上方には指圧痕が残る。胴部外面縦ハケ目。口径25.5cm。15は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。口縁部上面は外傾する。口縁部外面は横ナデ、内面は縦長の指ナデ。胴部外面は短い縦・斜ハケ目、内面はナデ。口径25.6cm。16は強い横ナデのために口縁部付近が外反し、内面が窪み、一見端部を折り返したような形状となる。上面は丸くおさめる。口縁部横ナデ、胴部内面は風化のため調整不明。外面は縦ハケ目。

17・18は甕の底部。17は高い底部となる。底面は大きく窪み、裾は開いて高台状になる。胴部は直線的に伸びる。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。内底面には指圧痕が残る。底部外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.9cm。18は小型の甕であろう。底面は大きく窪み、裾は大きく開いて端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目でくびれ部には強い指圧痕が認められる。底面はナデ。底径5.8cm。

出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

81号土坑（図版27、第95図）

調査区中央付近の南端に位置する円形の土坑である。直径110cm、土坑西側にテラス状の段をもっており、このテラスまでの深さは25cm、底面は中央からやや東側に寄っており、深さ40cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、中央に向かってすり鉢状に下降している。遺物は土坑内から多く出土したが、破碎されており、恐らく投棄されたものと思われる。

出土遺物には図示した土器の他、183の鉄斧再加工品が出土している。

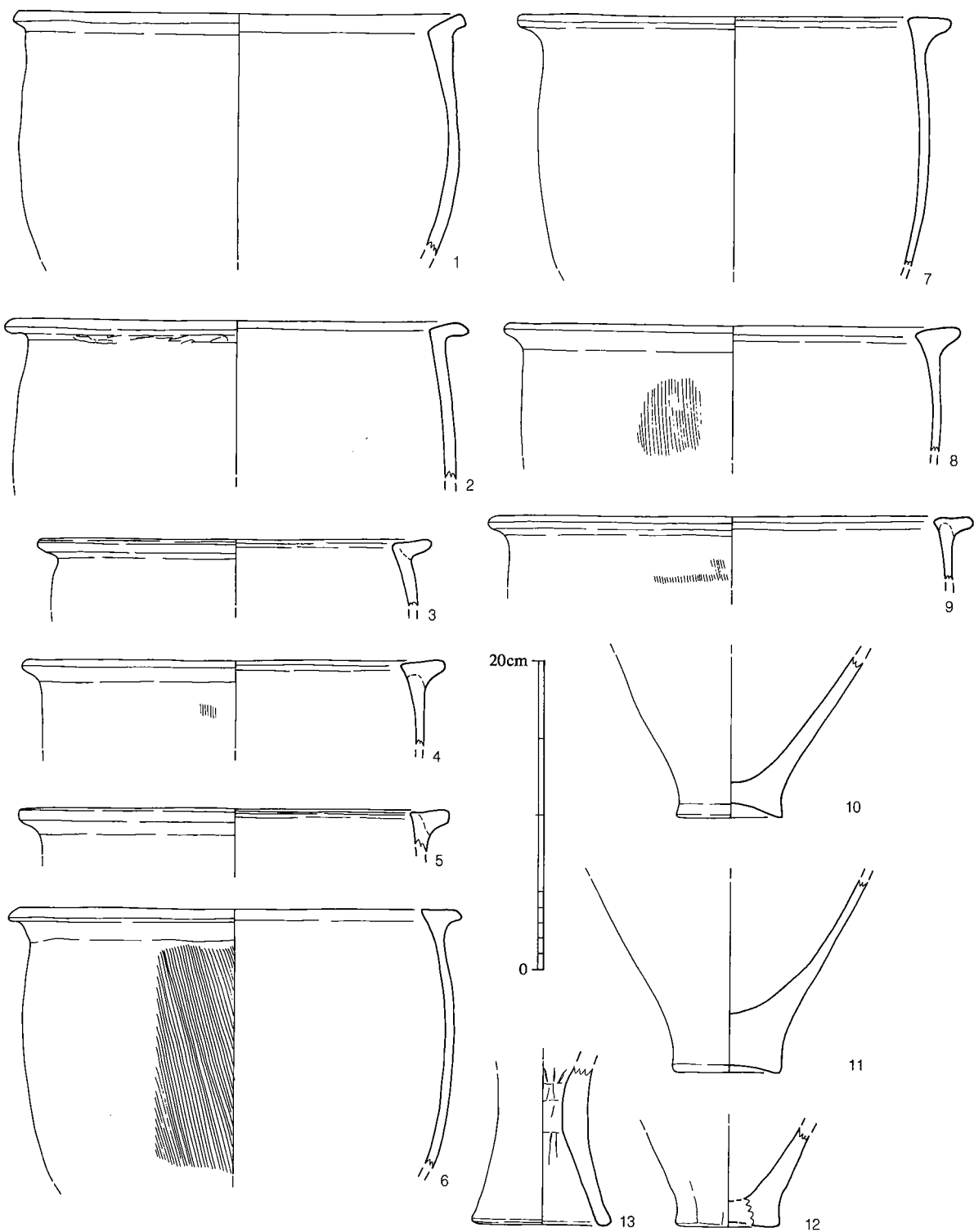
出土土器（図版58、第97図）

甕（1～12） 1～9は口縁部が逆L字状あるいはそれに近い形状となる甕。1は胴部上半がやや内傾し、口縁部は外面に折り返した様な形状となる。内面には稜を有し、屈折部外面は肥厚する。上面は大きく内傾する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面のハケ目は完全に器表が剥離するために観察できない。口径29.0cm。2は胴部上半が内傾し、口縁部は鋭く屈折して逆L字状をなす。内面にはしっかりとした稜を有し、外端は丸くおさめる。上面はやや内傾する。風化が著しく調整不明。口径29.8cm。3は口縁部付近が内傾し、上面はわずかに内傾する。内端はやや丸味を帯びた稜を有し、外端は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。口径25.4cm。4もやはり口縁部付近が内傾し、口縁部上面はわずかに内傾して直線的に伸びる。内面はわずかに突出する。口縁部は横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径27.2cm。5は短い逆L字状をなす。上面はほぼ水平に伸び、内端はわずかに突出する。口縁部横ナデ。口径27.7cm。6は胴部上半が内傾し、丸味を帯びた器形となる。口縁部上面は水平に伸び、内端は鋭く突出する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面長い縦ハケ目。口径28.1cm。

7は胴部上半がやや内傾し、口縁部上面は水平に伸びる。内面はわずかに突出する。全面風化が進み、調整は不明。口径28.2cm。8は胴部上半が直立し、口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部上面はわずかに丸味を帯び、内傾する。内端は鋭くやや突出する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径29.4cm。9は口縁部付近が直立し、口縁部上面はほぼ水平に伸びる。内面は鋭く突出する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径31.2cm。

10～12は甕の底部。10は底部が薄く、底面は上げ底となり端部は鋭い稜を有す。胴部下半はあまり開かずスマートな器形となる。風化が著しく調整は不明。底径6.7cm。11は厚い底部となる。底面はやや上げ底となり、裾は開かず直立する。端部は鋭く仕上げる。胴部はあまり開かず直線的に伸びる。風化が著しく調整不明。底径7.0cm。12はやや厚い底部。底面はわずかに窪み、裾はほとんど開かない。胴部はあまり開かない器形となるようである。器表の風化が著しく調整不明。底径6.6cm。

器台（13） 13は約半分を欠失するが、両端部の器形がほぼ同形となる器台であろう。柱状部から



第97図 81号土坑出土土器実測図 (1/4)

端部へは湾曲せず直線的に開き、接地面は丸味を帯びるものの面取りを行っている。内面はナデの際の稜線が認められる。外面もナデ。端部径9.0cm、柱部径5.8cm。

出土土器は全て弥生時代中期前半に比定できるものである。

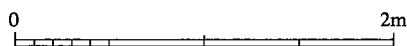
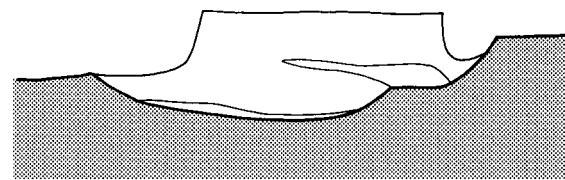
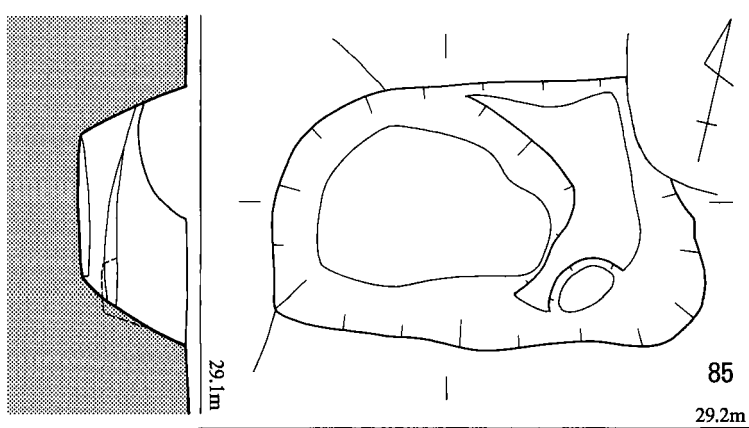
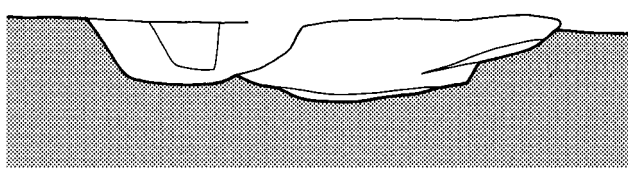
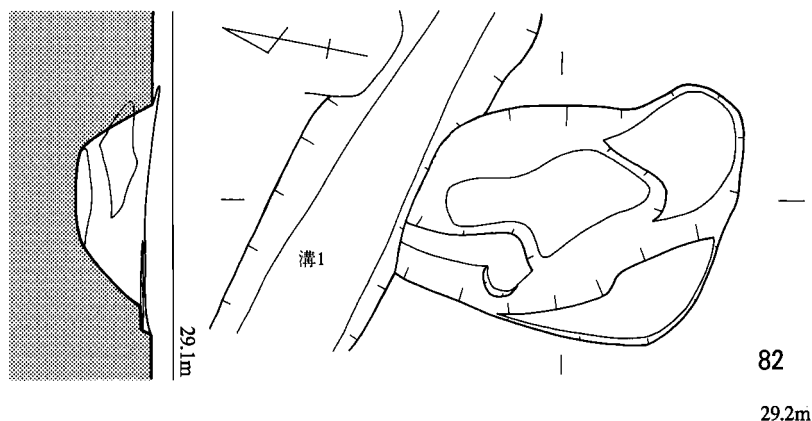
82号土坑（図版27、第98図）

80号土坑の東側に位置する土坑で、北側を1号溝に切られるため本来の形状は不明である。長方形プランであろうか。遺存する範囲で南北長180cm、東西長125cmを測る。底面は中央北寄り最も深くなっており、深さ45cmを測る。壁はテラス状の段を有して底面に向かって下降している。遺物は土坑内から多く出土したが、破碎されており、恐らく投棄されたものと思われる。

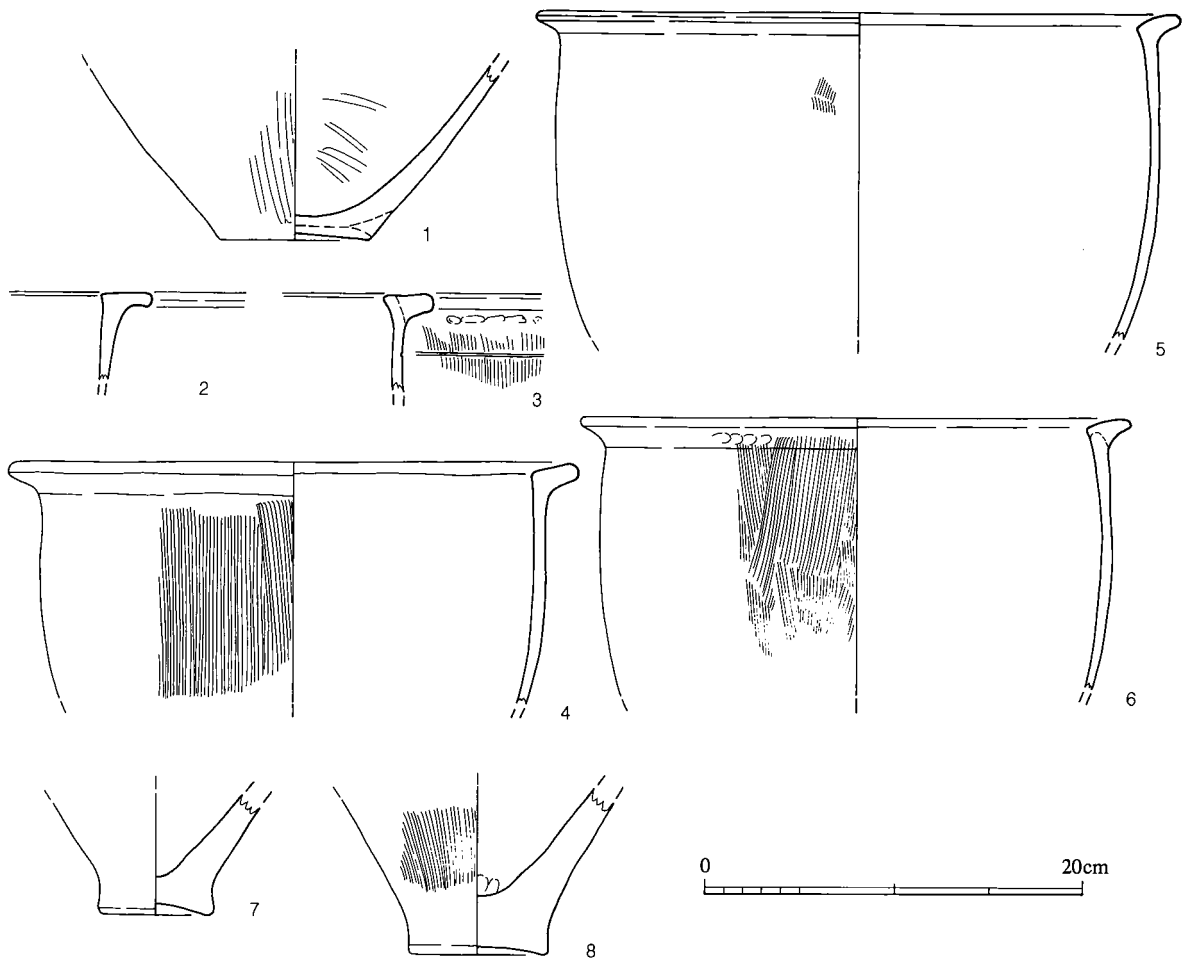
出土土器（図版58、第99図）

壺（1） 1は底部が薄く、やや上げ底となる。端部は鋭い稜をもち、シャープに仕上げる。外面に底部と胴部の境目はなく、底部から直線的に胴部へと続いている。内面横ヘラミガキ、外面縦ヘラミガキ、底面ナデ。底径7.8cm。

甕（2～8） 2～6は口縁部が逆L字状となる。2は口縁部付近がわずかに外傾し、口縁部は水平に伸びる。上面は直線的となり、内端はわずかに突出する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は風化が著しく調整不明。3は胴部上半が直立し、口縁部は内傾する。上面は水平に伸び、内端は鋭く尖る。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。4は胴部上半が直立し、口縁部上面は直線的に内傾する。内端は鋭い稜をもつ。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面長い縦ハケ目。口径30.0cm。5は胴部上半



第98図 82・85号土坑実測図（1/40）



第99図 82号土坑出土土器実測図(1/4)

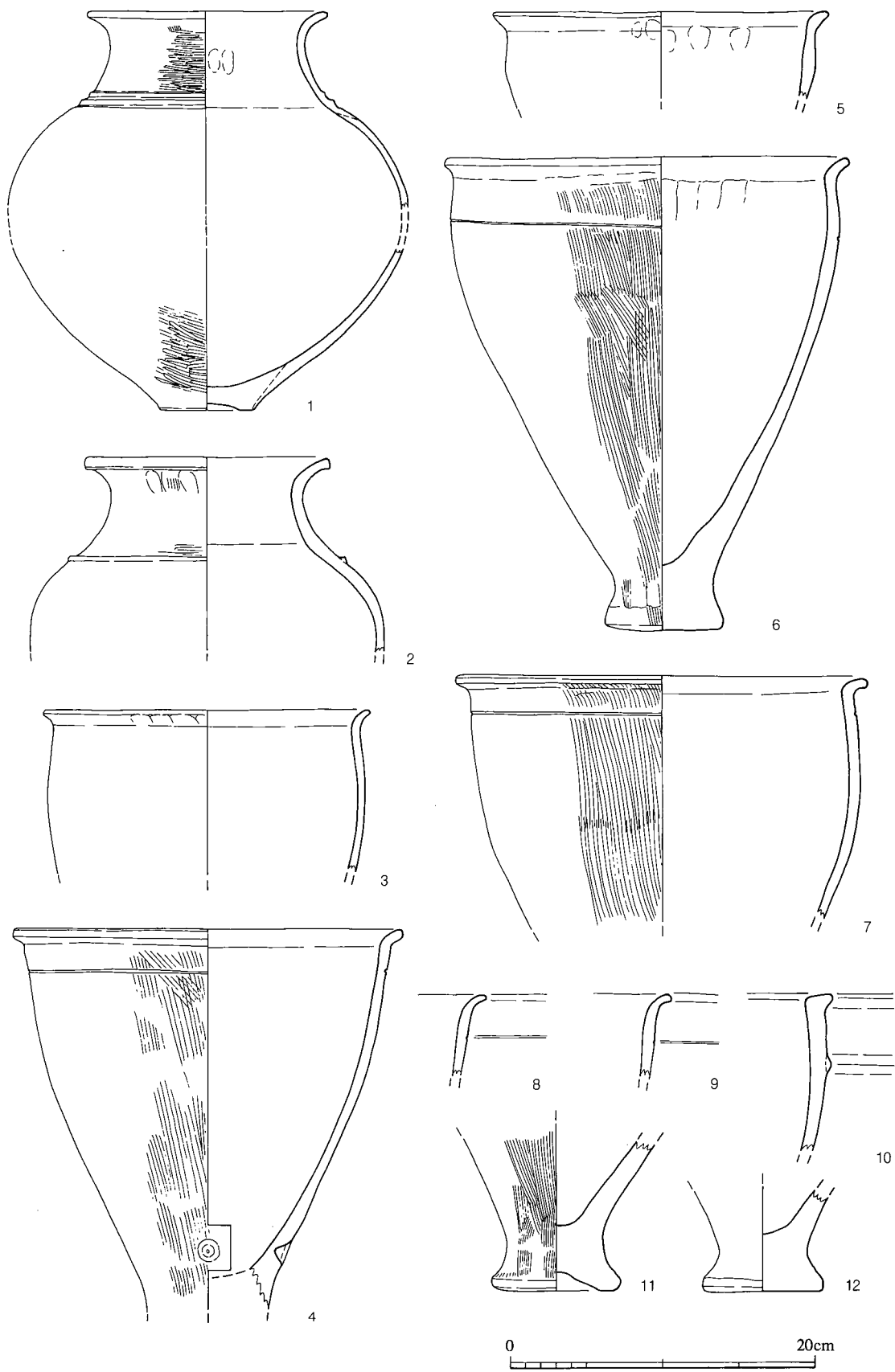
が直立し、口縁部付近はやや内傾して丸味を帯びた器形になる。口縁部上面は内傾し、内端は鋭い稜を有し外端は器壁が薄くなる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径34.0cm。6は胴部上半が直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部上面は丸味を帯びて内傾し、内端は鋭い稜を有し、外端は器壁が薄くなる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径28.5cm。

7・8は甕の底部。7は底面が上げ底となり裾は開かず底部が直立する。端部はやや丸味を帯びる。底部の器壁はそれほど厚くならない。器表は風化が著しく調整不明。底径6.0cm。8は底面がわずかに上げ底となり裾は開かず直立する。端部は丸味を帯びるが比較的シャープな作りとなる。底部はやや厚い。内面ナデ、胴部外面縦ハケ目、底部外面から底面にかけてナデを行う。底径7.0cm。

出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期前半に比定できる。

85号土坑(図版27、第98図)

調査区中央からやや南東に寄った位置にある長方形の土坑である。84・86号土坑と重複しており、これらに切られる。長軸230cm、短軸140cm、底面は中央付近が最も深く、55cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、東側から北側にかけてテラス状の段があり、またこのテラスの南側には深さ10cm程の浅いピットが1個検出された。遺物は底面からかなり浮いた状態でまとまって出土している。



第100图 85号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器（図版58、第100図）

壺（1・2） 1は底部が薄く、底面がやや上げ底となる。外面の底部と胴部の境目は明瞭ではなく、底部から緩やかに湾曲して胴部下半へと続く。胴部は球形に近く、最大径は中位にある。頸部は内傾し、口縁部は短めに外反する。端部は丸くおさめる。外面の頸肩境に二条の低い三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、頸部内面は縦指ナデ、胴部内面はナデ、頸部外面は横ヘラミガキだがその前の縦ハケ目が残る。胴部上半は風化が著しく調整不明だが恐らく横ヘラミガキであろう。胴部下半は横ヘラミガキ、底面はナデ。口径15.8cm、底径6.2cm、胴部最大径は26.2cm、器高は26.4cm程度になると思われる。

2は胴部最大径がやや上にあり、肩のやや張る器形となる。頸部は内傾し、口縁部は短く外反する。端部は面取りし四角くおさめる。外面の頸肩境には一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、頸部内面はナデ、外面は一部に縦ハケ目、横ヘラミガキが残る。肩部内面はナデ、外面は風化が著しく調整不明だが、恐らくヘラミガキであろう。口径16.0cm。

甕（3～12） 3～9は如意形口縁の甕。3は胴部上半が直立し、口縁部は短く緩く外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には指圧痕が残る。器表の風化が著しく調整は不明。口径21.5cm。4は胴部下半がすぼまりスリムな器形となる。胴部上半はやや開き気味に立ち上がる。口縁部は短く緩く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。胴部下方の底部に近い位置に、焼成後に外面からの穿孔を試みるが、途中で諦めており貫通しない。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径25.4cm。5は器壁が厚く粗雑な感を受ける。胴部上半は直立し、口縁部は短く外反する。端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデで、その下は内外面共に指圧痕が残る。胴部内面はナデ、外面は風化が著しく調整不明。口径22.0cm。

6は完形品。底部は高く、底面は平坦である。裾は開き、端部は丸味を帯びる。胴部下半は直線的に開き、口縁部付近は直立する。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、内面口縁部下は縦指ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目、底面はナデ。外面の底部と胴部の境目には指圧痕が残る。口径26.5cm、底径7.8cm、器高31.0cm。7は胴部上半が直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は短く強く外反し、端部を丸くおさめる。外面の口縁部に近い位置に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径27.0cm。8・9はほぼ同形。胴部上半はやや外傾し、口縁部は緩く短く外反する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。器表の風化が著しく調整は不明。

10は非常に小さな三角口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部上面は面取りする。外面の口縁部下に一条の低い三角突帯を巡らす。全面器表が風化し調整不明。

11・12は甕の底部。11は底面が深く窪み、裾は大きく開き、端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かず直線的に伸びる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面はナデ。底径8.4cm。12は底面が平坦で裾は短く大きく開く。端部は丸味を帯びる。胴部はあまり開かないようである。内面ナデ、胴部外面は風化のため不明、底部外面は横ナデ、底面はナデ。底径7.9cm。

出土土器は全て弥生時代中期初頭のものである。良好な一括資料である。

86号土坑（図版28、第101図）

85号土坑の北東に位置し、これを切る長方形プランの土坑である。長軸205cm、短軸110cm、壁は

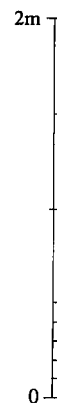
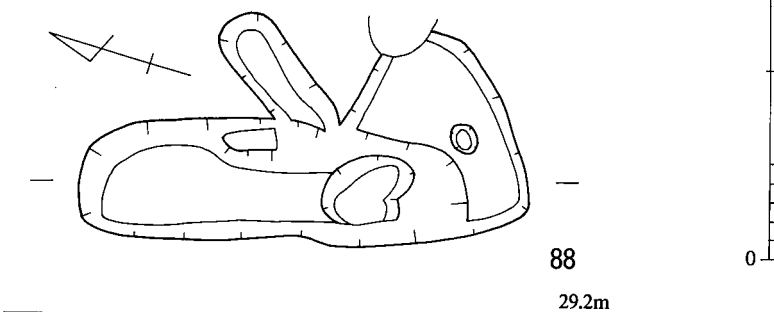
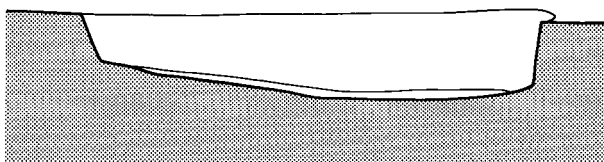
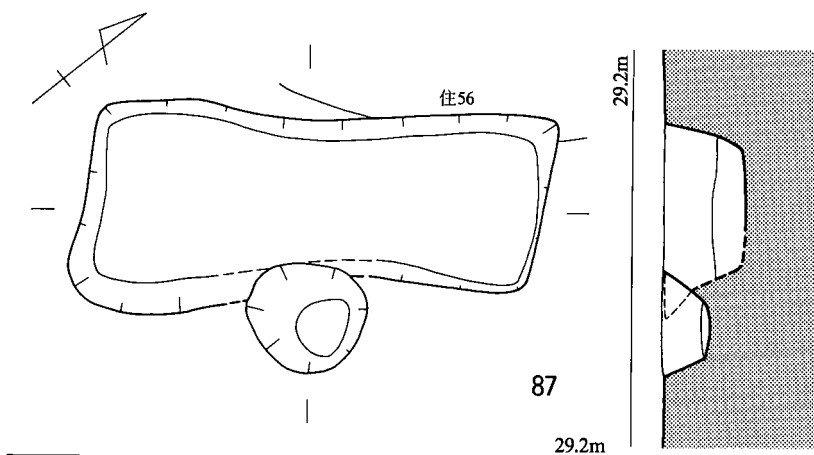
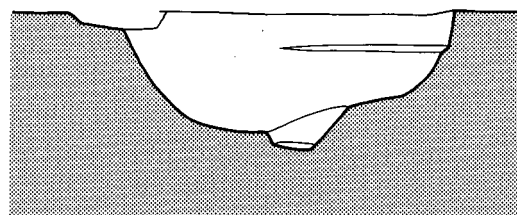
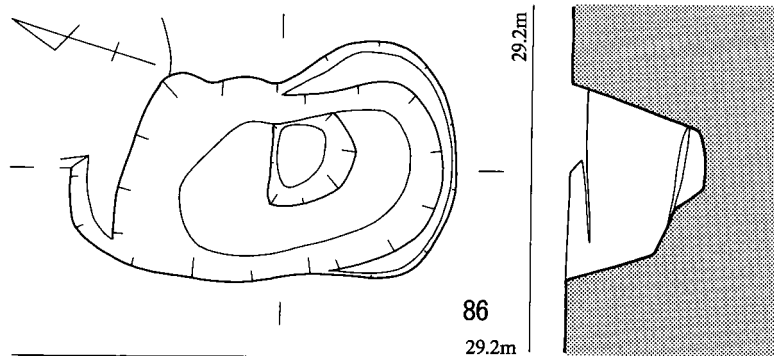
中央に向かって緩やかに傾斜しており、底面は長軸125cm、短軸65cmの規模で楕円形を呈す。底面の中央北寄りには径45cm大ききでピット状に掘り込まれている。

出土遺物には図示した土器
 の他、1の管状土錘、141の
 扁平片刃石斧が出土した。

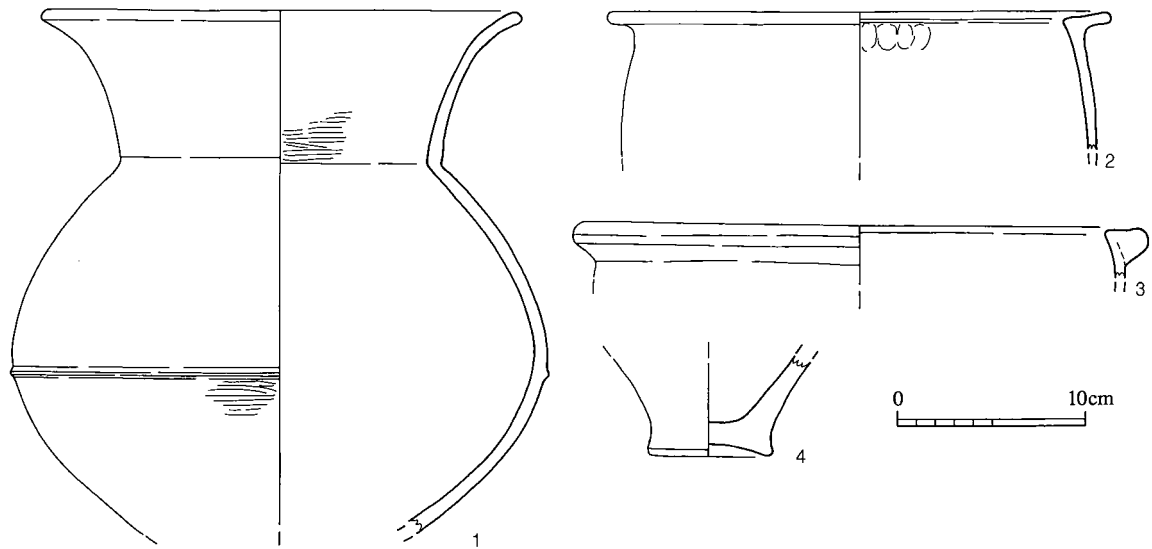
出土土器（図版58、第102図）

壺（1） 1は扁球形の胴部
 となり、最大径のある中位に
 小さな三角突帯を巡らす。頸
 部はあまり締まらず、頸部の
 付け根から口縁部にかけて大
 きく開く。口縁部は素口縁と
 なる。器表の風化が進むが、
 頸部内面は横ヘラミガキ、胴
 部下半は横ヘラミガキが認め
 られることから、少なくとも
 外面及び頸部内面にヘラミガ
 キが行われたものと思われる。
 また外面に化粧土が所々見ら
 れ、恐らく全面に亘っていた
 ものと思われる。口径25.3cm、
 胴部最大径28.4cm。

甕（2～4） 2は逆L字状
 口縁の甕。胴部上半は内傾し、
 口縁部上面は直線的に内傾す
 る。内端は鋭い稜を有し、外
 端は丸くおさめる。口縁部は
 横ナデ、胴部内面はナデ、外
 面は風化が著しく調整不明。
 口径26.6cm。3は肥厚して丸
 味を帯びた三角口縁の甕。口
 縁部内面は内傾し、上面は水
 平になる。胴部の器壁は薄い。
 風化が著しく調整不明。口径



第101図 86～88号土坑実測図（1/40）



第102図 86号土坑出土土器実測図(1/4)

30.4cm。

4は甕の底部。底面はやや上げ底となり、裾は開かず端部は鋭い稜を有す。底部の器壁はあまり厚くならない。風化が著しく調整不明。底径6.7cm。

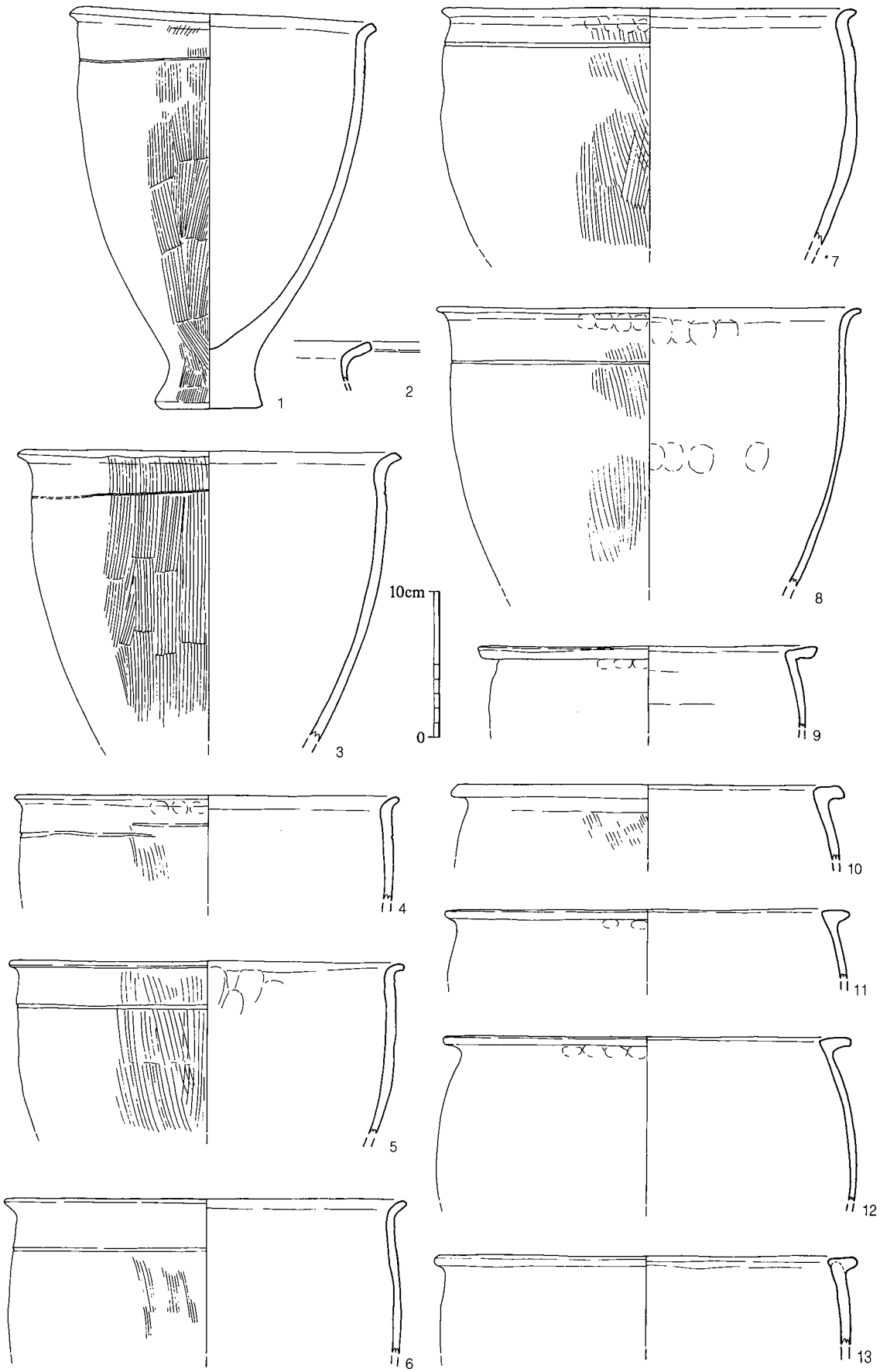
出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期前半に比定できる。

87号土坑(図版28、第101図)

86号土坑の北側に位置する長方形の土坑である。56号竪穴住居跡、95号土坑と重複しており、これらを切って営まれる。長軸240cm、短軸115cm、底面は北東側がやや深くなっており、北東側で40cm、南西側で25cmを測る。壁はやや急な立ち上がりとなる。遺物は南側にまとまって出土したが、底面からはかなり浮いた状態にある。幾つかの河原石とともに破碎された状況で出土しており、投棄されたものと思われる。

出土土器(図版58・59、第103・104図)

甕(1~18) 1~8は如意形口縁の甕。1は器高に対して口径が小さく、スリムな器形となる甕。底部は高く、底面は平坦で裾が開く。端部は丸味を帯びる。胴部上半は直立し、口縁部は短く外反する。端部は面取りし四角くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。口径21.0cm、底径7.2cm、器高27.6cm。2は胴部の口縁部付近が内傾し、口縁部が短く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。胴部は器壁が非常に薄く、口縁部は逆に肥厚する。調整は横ナデを行う。3は胴部上半が直立し、口縁部は短く緩く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には一条の細い沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.1cm。4は胴部上半が直立し、口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。胴部上方の口縁部のすぐ下に一条の沈線を巡らす。起点と終点とが一致していない。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径26.2cm。5は胴部上半が直立し、口縁部は短く強く外反する。口縁部端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、内面の口縁部下は指ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径26.0cm。6は胴部上半が直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は短く緩く外反し、端部

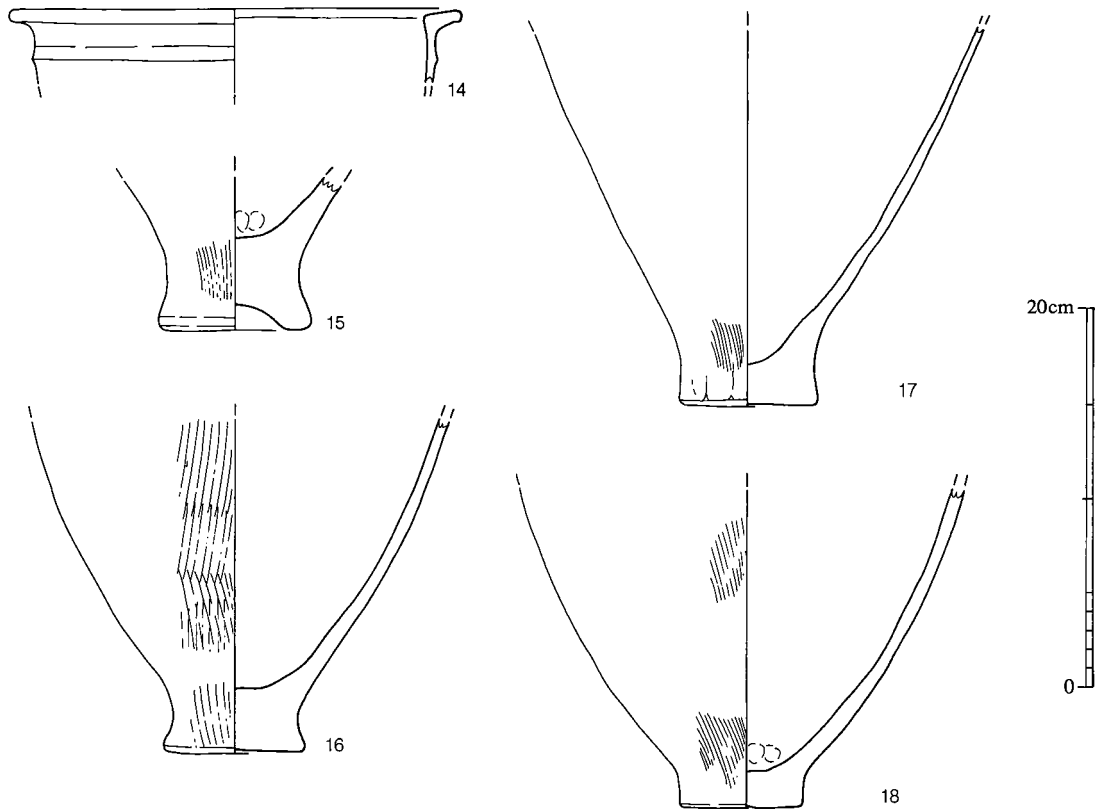


第103图 87号土坑出土土器实测图① (1/4)

は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径27.2cm。7は胴部上半が直立し、口縁部付近はやや内傾し、胴部が丸味を帯びた器形となる。口縁部は短く強く外反し、端部は尖り気味に仕上げる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は粗い縦ハケ目。口径28.0cm。8は胴部上半が直立し、口縁部は緩く外反する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、湾曲部は内外面に指圧痕が認められる。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径28.8cm。

9～14は三角口縁または短い逆L字状口縁となる甕。9は胴部上方が内傾し、口縁部は短く強く屈折する。上面は直線的に内傾し、内端は丸く、外端はやや肥厚する。器表の風化が著しく調整は不明。口径23.2cm。10は胴部上半が内傾し、口縁部は短い逆L字状となる。上面はわずかに内傾し、内端は丸くおさめ、外端は面取りする。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径26.8cm。11は胴部上半が内傾し、口縁部は三角口縁となる。口縁部上面はほぼ水平になり、内端は鋭い稜をもつ。風化が著しく調整は不明。口径27.6cm。12は胴部上半が強く内傾し、胴部が丸味を帯びた器形となる。口縁部は短い逆L字形口縁で、上面はほぼ水平に伸び、内面には鋭い稜を有す。器表の風化が著しく調整不明。口径27.8cm。13は口縁部付近がやや内傾し、口縁部上面に粘土帯を貼付して短い逆L字状としたものである。上面はほぼ水平に伸び、内面は短く突出する。風化が著しく調整は不明。口径28.6cm。14は胴部上半が直立し、口縁部は短い逆L字状口縁となる。上面はほぼ水平に伸びる。外面口縁部下に一条の低い三角突帯を巡らす。調整は全面横ナデ。また全面に化粧土を塗布する。口径23.8cm。

15～18は甕底部。15は底部が高く、底面が大きく窪んで高台状をなす。裾はわずかに開く。胴部



第104図 87号土坑出土土器実測図② (1/4)

内面はナデで内底面には指圧痕が認められる。外面は縦ハケ目、底面はナデ。底径8.2cm。16は底面が平坦で裾は短く開き、端部は鋭い稜をもつ。胴部はやや丸味を帯びながら開く。底部の器壁は厚いが、高くはならない。内面ナデ、外面粗いハケ目、底面ナデ。底径7.1cm。17は底面は平坦で裾はわずかに開き、端部はシャープに仕上げる。胴部はあまり開かず、直線的に伸びる。胴部は器表の風化が著しいが、外面の底部付近には縦ハケ目が観察される。底部外面は指オサエ。底面はナデ。底径7.3cm。18は底面が平坦で裾は開かず直立する。底部の器壁は厚い。胴部はやや丸味を帯びて開く。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.5cm。

出土土器のうち、如意形口縁のものに関しては弥生時代中期初頭の特徴を持つものの、逆L字形口縁のものは中期前半としてよいものである。また底部に関しても15は中期初頭に、17や18は中期前半に見られる形状である。従って弥生時代中期前半でも初頭に近い時期としておきたい。

88号土坑（図版28、第101図）

87号土坑の南東に位置する不整形の土坑で、長軸235cm、短軸は南側で110cm、北側で65cmを測る。底面は北側が最も深く、深さは北側で35cm、中央付近のピット内で30cm、南側のテラスで15cmを測る。壁は比較的急な立ち上がりとなる。遺物はまとまって出土したが、底面からはやや浮いている。また破碎された状況にあり、投棄されたものと思われる。

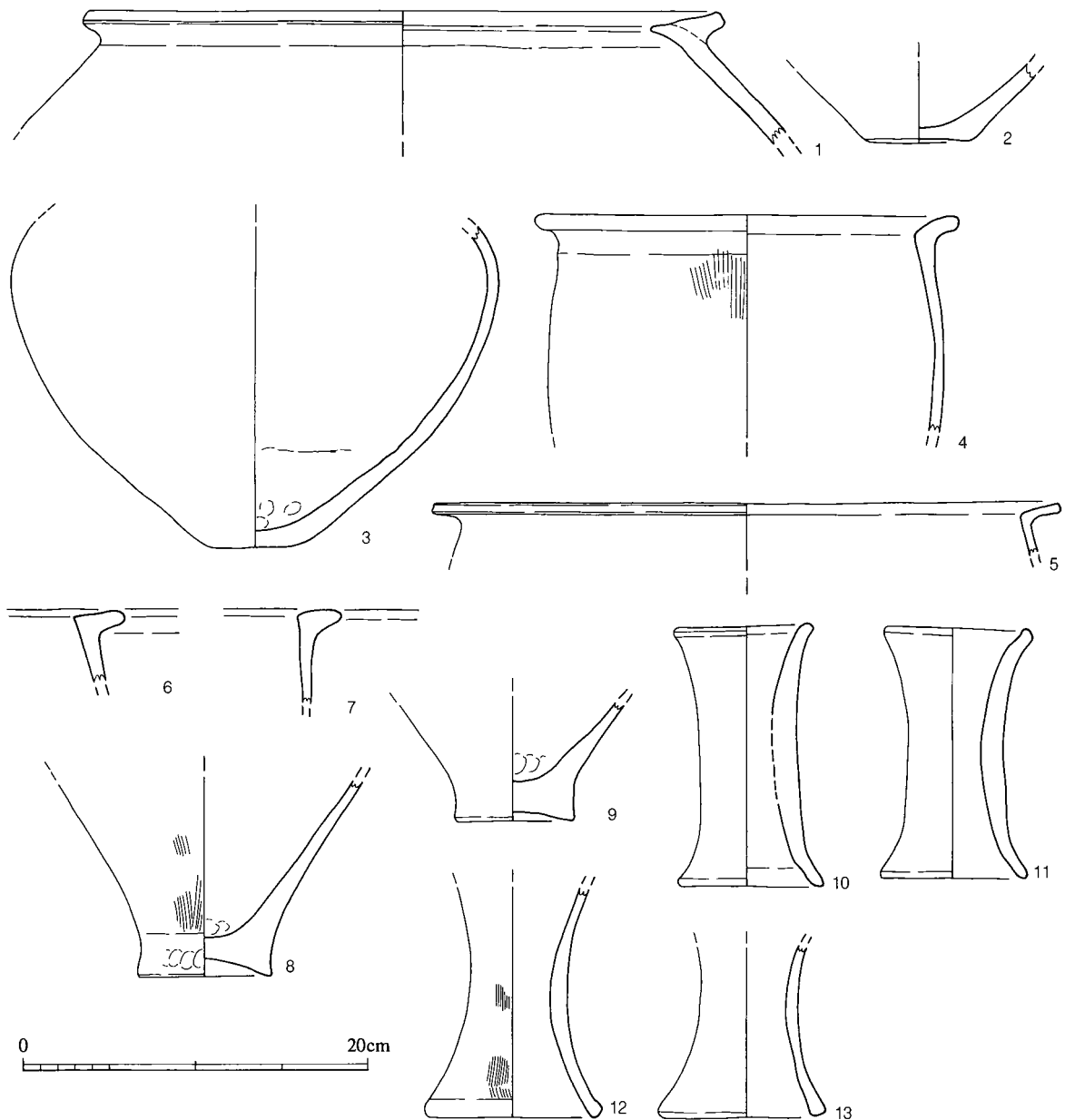
出土土器（図版59、第105図）

壺（1～3） 1は大型の無頸壺。肩部は大きく内傾し、外端に粘土紐を貼付して口縁部とする。内端は鋭く稜を有し、内側へと突出する。口縁部上面は直線的に伸び、内傾する。口縁部は横ナデ、肩部は内外面とも風化のため調整不明。口径31.4cm。2は底面がわずかに上げ底となり、外面に底部と胴部の境はなく直線的に開く。底部の器壁は薄い。底径5.8cm。3は底面が平坦で外面に底部と胴部の境がなく、また端部も丸く稜をもたない。胴部は中位よりやや上に最大径がある。肩部は大きく内傾するようである。胴部内面はナデ、外面は風化が著しく調整不明。底部内面は指オサエ、底面はナデ。胴部最大径28.4cm、底径4.6cm。

甕（4～9） 4は胴部上半が内傾し、口縁部は外側に折り曲げた形状となる。口縁部上面は丸味を帯びて内傾し、内端はしっかりとした稜を有し、外端は丸くおさめる。屈曲部外面は肥厚する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径23.8cm。5は口縁部付近が内傾し、口縁部はく字状に強く折り曲げる。上面は内傾し、内端は稜を有す。器表は非常に薄い。口縁部は横ナデ。口径36.5cm。6は口縁部付近が内傾し、口縁部は逆L字状となる。上面は直線的に内傾し、内端は鋭い稜を有す。外端は丸くおさめる。全面横ナデ調整。7は形状が壺の口縁部に似ており、その可能性もある。胴部上半が直立し、口縁部は短い逆L字状となる。口縁部上面は丸味を帯びて水平に伸び、内面にはしっかりとした稜を有し、外面は丸くおさめる。器表の風化が著しく調整不明。

8・9は甕の底部。8は底面が上げ底となり端部は鋭くシャープに仕上げる。底部外面は直立し、胴部下半はあまり開かず直線的に伸びる。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目、底部内面指オサエ、底面ナデ。底径7.6cm。9は底面がやや上げ底になり、端部は鋭い稜を有す。底部は直立し、胴部は直線的に開く。底部の器壁はやや厚い。胴部は器表の風化が著しく調整不明。底部内面は指オサエ、外面はナデ。底径7.0cm。

器台（10～13） 12・13は片方の裾部を欠失するが、恐らく両裾部とも同形となると思われる。10



第105図 88号土坑出土土器実測図(1/4)

は裾部があまり開かず、端部は丸くおさめる。器表の風化が著しく調整は不明。端部径8.5cm、中央部径5.6cm、器高15.3cm。11は裾部が湾曲してやや大きく開く。端部は丸くおさめる。全面風化が著しく調整不明。端部径8.6cm、中央部径5.4cm、器高19.6cm。12は裾部が直線的に開き、端部は面取りする。内面ナデ、外面は縦ハケ目、端部は横ナデ。端部径10.3cm、中央部径5.6cm。13は裾部が湾曲しながら開く。端部は面取りして四角くおさめる。中央部径5.8cm、端部径5.7cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

92号土坑(図版29、第106図)

調査区中央からやや西寄りに位置する不整楕円形の土坑で、93号土坑と重複しておりこれを切つて営まれる。長軸180cm、短軸100cm、底面はほぼ水平で、深さ50cmを測る。底面東側では径10cm、

深さ10cm程度の小ピットを1個検出した。壁は東側が緩やかに立ち上がる他は垂直に近い立ち上がりとなり、一部オーバーハングする。遺物は西側にまとまって出土した。やや底面から浮いた状態にある。恐らく投棄されたものであろう。

出土土器(図版59・60、第107・108図)

壺(1) 1は器高の割に肩が張らず、スリムな器形である。底部は非常に厚く、底面は平坦で裾は開かず柱状に直立する。胴部は最大径がやや上



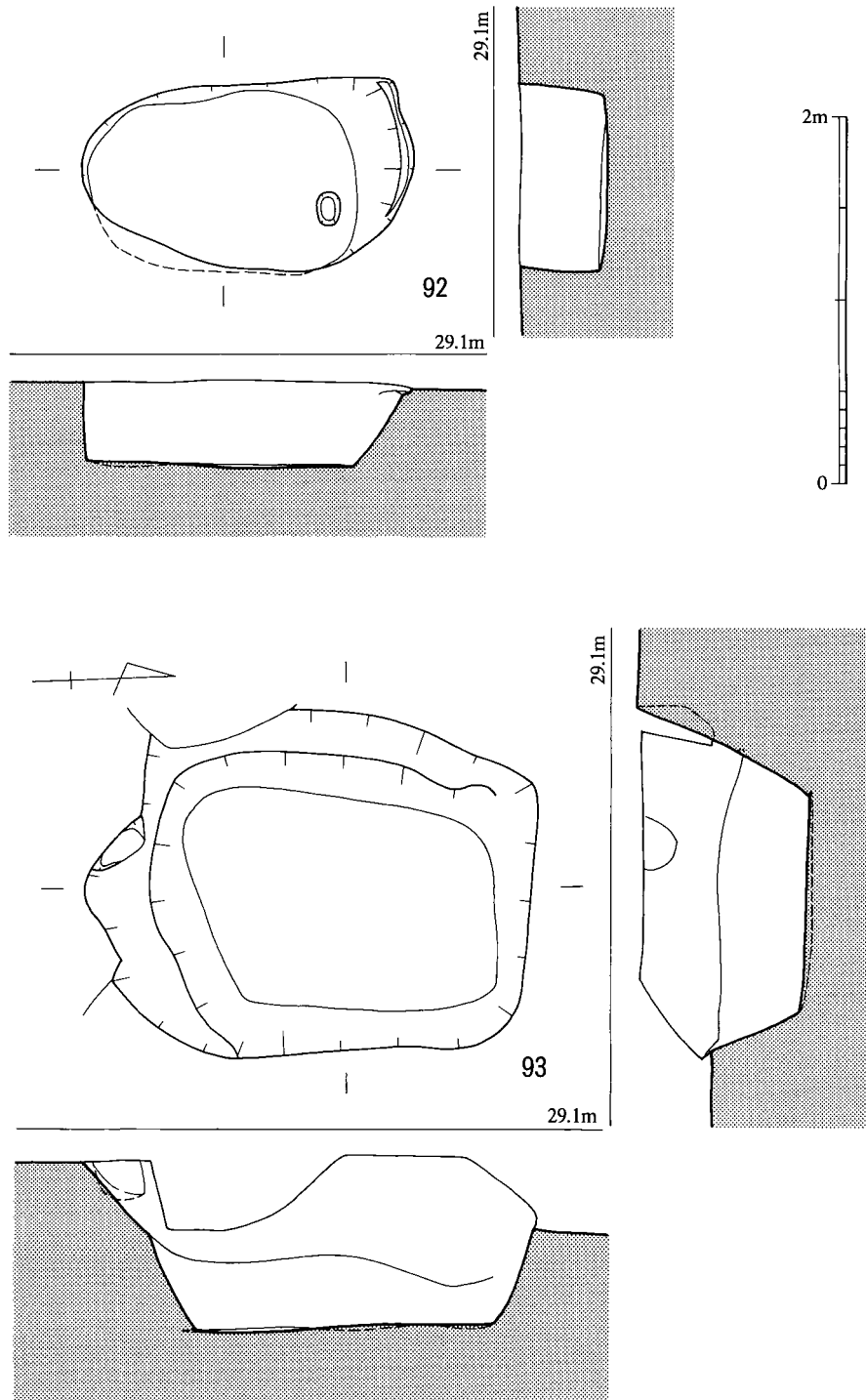
92号土坑遺物出土状態

端部は面取りを行う。口縁部外面は横ナデ、内面

は横ヘラミガキ、頸部外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ、内面はナデ、胴部内面は上半がナデ、下半が横ヘラミガキ、外面は上半が縦ハケ目後に横ヘラミガキ、下半はほとんど風化するが横ヘラミガキ、底部外面は指整形の後縦ヘラミガキ、底面はナデ。口径13.7cm、胴部最大径22.8cm、底径8.0cm、器高32.9cm。

甕(2~18) 2~8は如意形口縁の甕。2は小型の甕である。底面はわずかに上げ底となり、裾が開く。底部はやや高くなる。胴部下半はあまり開かず立ち上がり、上半はやや外傾し、口縁部は短くわずかに外反し端部を尖り気味におさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデを行うが、内面には横ナデ前の横ハケ目が残る。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。底面はナデ。口径20.0cm、底径7.8cm、器高24.2cm。3は胴部上半が直立し、口縁部は短く緩く外反する。口縁部端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目。口径26.2cm。4は胴部上半が直立し、口縁部付近は内傾する。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。5は胴部上半がやや丸味をもって直立し、口縁部は短く外反する。端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径26.0cm。6は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反して端部を丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面細かい斜ハケ目。口径27.6cm。7は胴部上半が丸味をもち口縁部付近が内傾する。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。全面器表の風化が著しく調整不明。口径26.6cm。8は口縁部付近がやや内傾し、胴部上半が丸味を帯びた器形となる。口縁部はわずかに外反し、端部は面取りする。口縁部内面横ハケ目、外面横ナデ、胴部内面ナデで上方には縦方向の指ナデが観察される。外面は口縁部付近が横ハケ目、以下が縦ハケ目となる。口径32.0cm。

9~12は三角口縁の甕。9は口縁部付近が開き気味に立ち上がり、口縁部上面は外傾する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径24.2cm。10は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。口縁部上面はほぼ水平になる。器表の風化が著しく調整不明。口径23.4cm。11は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。全体的に器表の風化が著しいが、胴部外面には縦ハケ目がかすかに残る。口径26.3cm。12は胴部上半が直立し、口縁部は上面が外傾する。外端は薄く仕上げる。外面

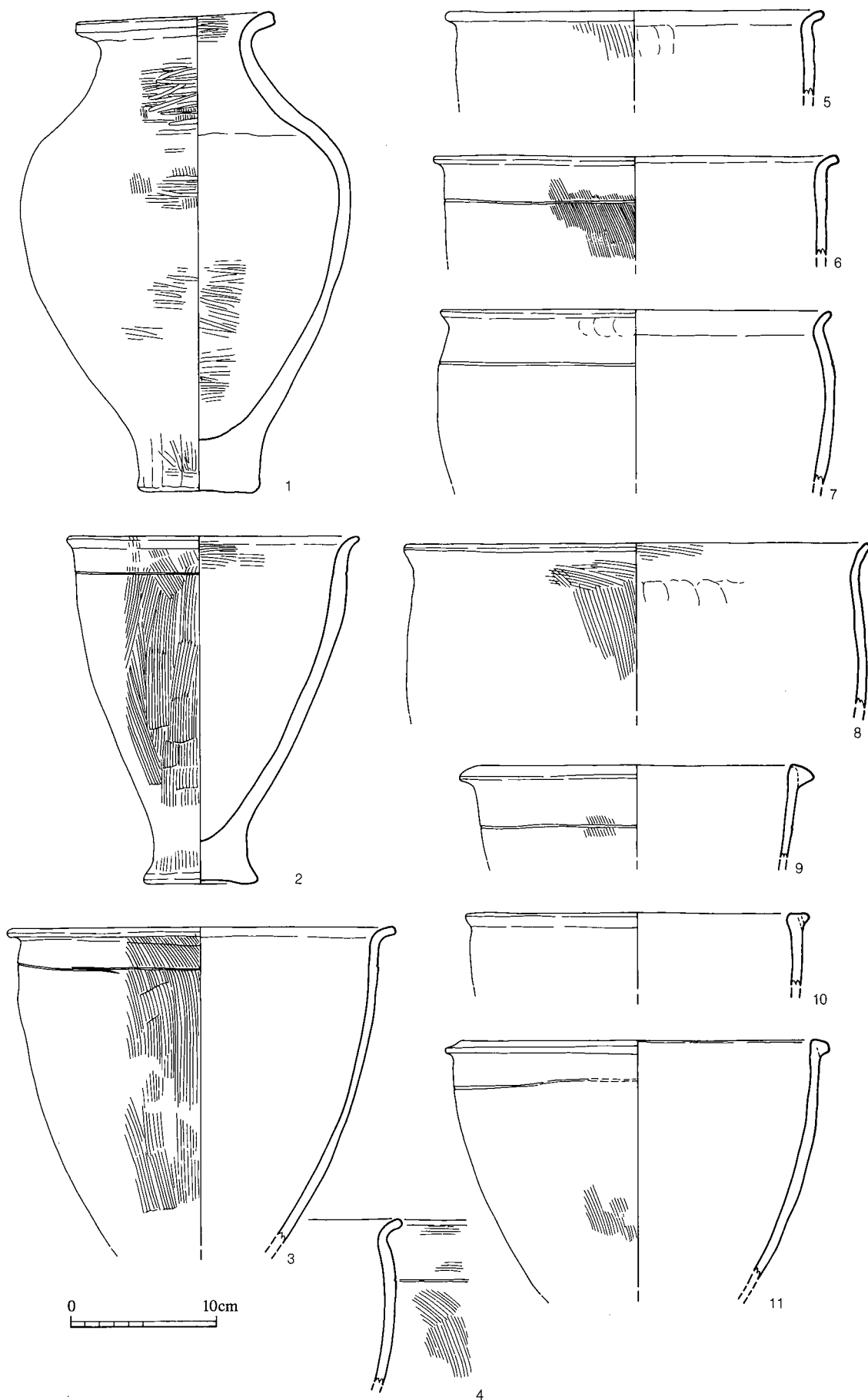


第106図 92・93号土坑実測図 (1/40)

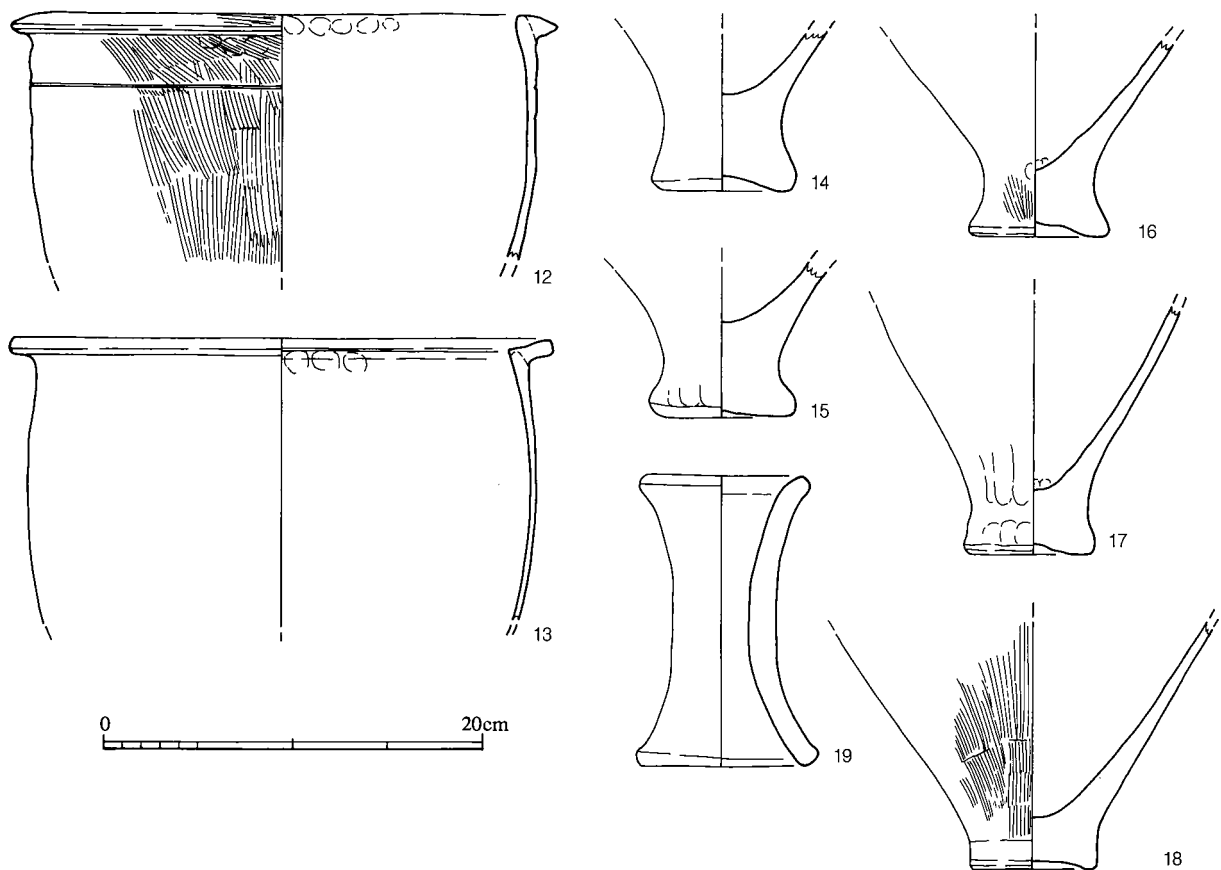
口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデで内面には指圧痕が観察される。胴部内面はナデ、外面は口縁部付近が斜ハケ目、沈線付近とその下方は縦ハケ目となる。口径29.0cm。

13は逆L字状口縁の甕。胴部上半から口縁部にかけてやや内傾し、丸味を帯びた器形となる。口縁部上面は内傾し、また上下から強い横ナデを加えるために中央が凹み、外端部が肥厚する。外端部は弱い面取りを行う。内端はわずかに突出する。全体的に風化が著しく調整不明。口径28.6cm。

14~18は甕の底部。14は底面がやや上げ底となり、裾がやや開く。端部は丸くおさめる。内面は



第107图 92号土坑出土土器实测图①(1/4)



第108図 92号土坑出土土器実測図② (1/4)

ナデ、外面は器表の風化が著しく調整不明。底面はナデ。底径7.6cm。15は底面がわずかに窪み、裾は大きく開く。端部は丸くおさめる。器表は風化が著しく調整不明。底径7.8cm。16はあまり高くはならない。底面はやや上げ底となり裾は大きく開き、端部は丸味を帯びるもののシャープに仕上げられる。内面ナデ、外面は底部付近に縦ハケ目が認められる。底面はナデ。底径7.0cm。17は底面がやや窪み、裾はわずかに開く程度である。端部は丸味を帯びる。胴部はあまり開かない。胴部内面ナデ、外面は風化のため調整不明。底部外面は指ナデ、底面はナデ。底径6.8cm。18は他と比べて厚さを減じる。底面はやや上げ底となり裾は全く開かず、短く直立する。胴部は直線的に開く。内面は風化のため調整不明、外面は縦ハケ目、底面はナデ。底径6.7cm。

器台 (19) 19は上下の形状が若干異なる。上端は端部が丸味を帯びる。下端は上端よりも長めに開き、端部は弱く面取りする。全体的に器表の風化が著しく調整不明。上端径9.0cm、下端径9.6cm、中央部径5.4cm、器高15.5cm。

出土土器のうち、13や18は新しい様相を認めうるが、これら以外は弥生時代中期初頭としてよいものである。比較的良好な一括資料である。

93号土坑 (図版29、第106図)

92号土坑の北側に位置し、これに切られる長方形の土坑である。長軸245cm、短軸185cm、底面はほぼ水平で、深さ90cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は底面からかなり浮いた状況で出土している。破碎された状況にあり、投棄されたものと思われる。

出土土器（図版60、第109図）

甕（1～12） 1～7は如意形口縁の甕。1は小型の完形品。底部は高く柱状となり、底面は平坦で裾はわずかに開く。胴部は下半が直線的に開き、胴部上半はやや上方を向くものの直立するまでには至っていない。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は長い縦ハケ目、底部付近は指オサエ、底面はナデ。口径20.6cm、底径7.2cm、器高21.5cm。2は胴部上半が直立し、口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、内外面口縁部下には指圧痕が残る。胴部は器表の風化が著しく調整不明。口径21.8cm。3は胴部上半が直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は短く外反し、内面に明瞭な稜を有す。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径26.7cm。4は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデで口縁部下には内外面に指圧痕が残る。胴部は内外面とも風化が著しく調整不明。口径29.2cm。5は完形品。底部は厚いが高くはならない。底面はわずかに上げ底となり、裾は短く開く。胴部は口縁部付近が丸味をもって内傾し、口縁部は緩く外反する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面は風化するが、恐らくナデであろう。胴部外面は上方のみ斜ハケ目が残る。底部外面は縦ハケ目、底面は不明。口径25.7cm、底径8.0cm、器高27.3cm。6は胴部がやや丸味を帯び口縁部付近は直立する。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。器表の風化が著しく調整は不明。口径26.9cm。7は口縁部付近が直立し、口縁部は短く緩く外反する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。器表の風化が著しく調整不明。

8は三角口縁の甕。口縁部付近は直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は直線的に外傾する。外面口縁部下には指圧痕がかすかに残る。口縁部は横ナデ、胴部は風化が著しく調整不明。

9～12は甕の底部。9は底部中央が大きく窪み、裾は若干開く。端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かないようである。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。10は高い底部となる。底面中央が大きく窪み、裾は強く開き端部は丸味を帯びる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.8cm。11はいびつな器形となる。底面はわずかに窪み、裾はわずかに開き、端部は丸味をおびる。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目、底部は内底面に指圧痕が観察でき、外面は指整形を行う。底径5.4cm。12は底部がそれほど厚くない。底面は大きく窪み、裾はわずかに短く開く。端部はシャープに仕上げられる。内面ナデ、外面は風化が著しく調整不明。底面はナデ。底径8.8cm。

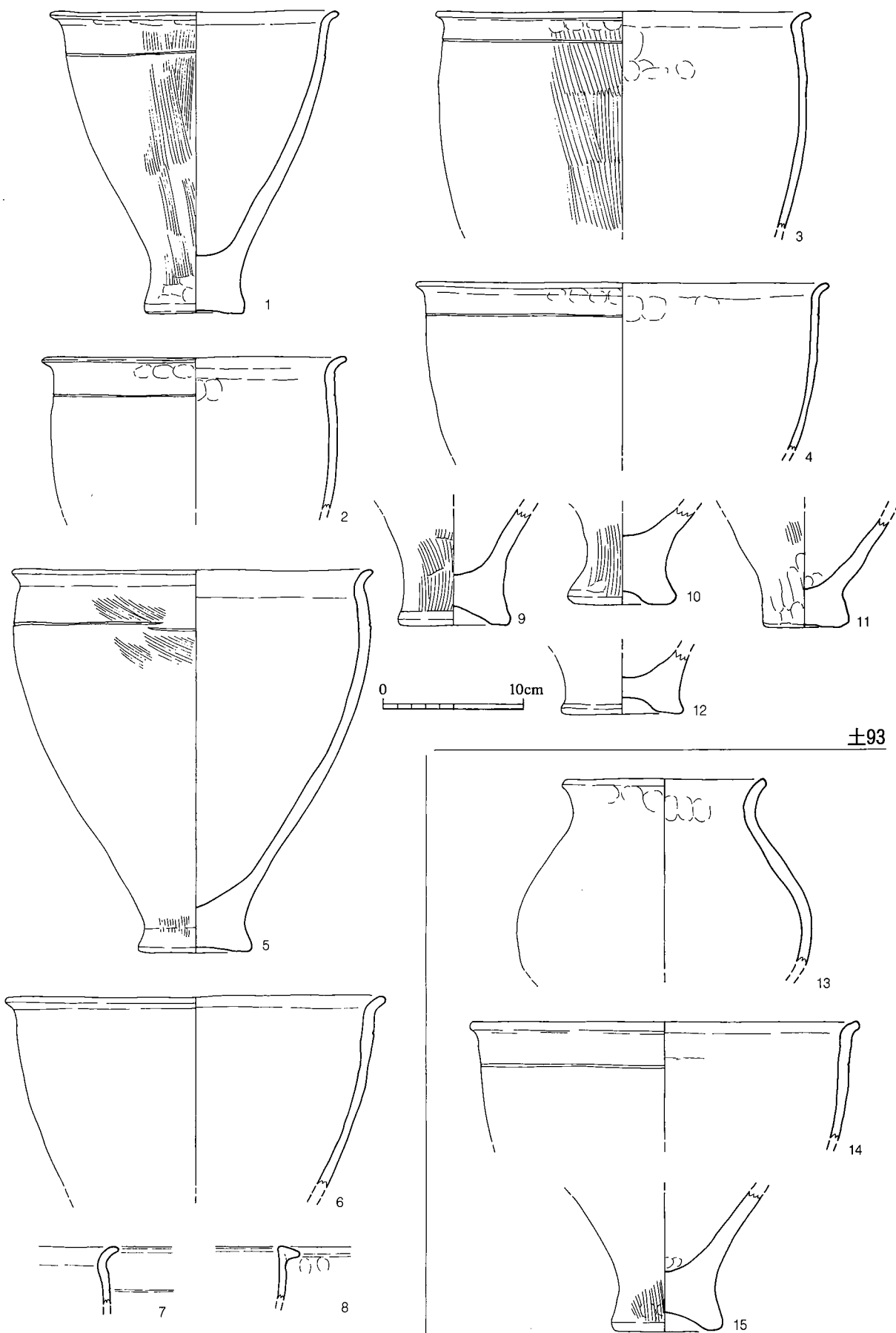
出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。



93号土坑遺物出土状態

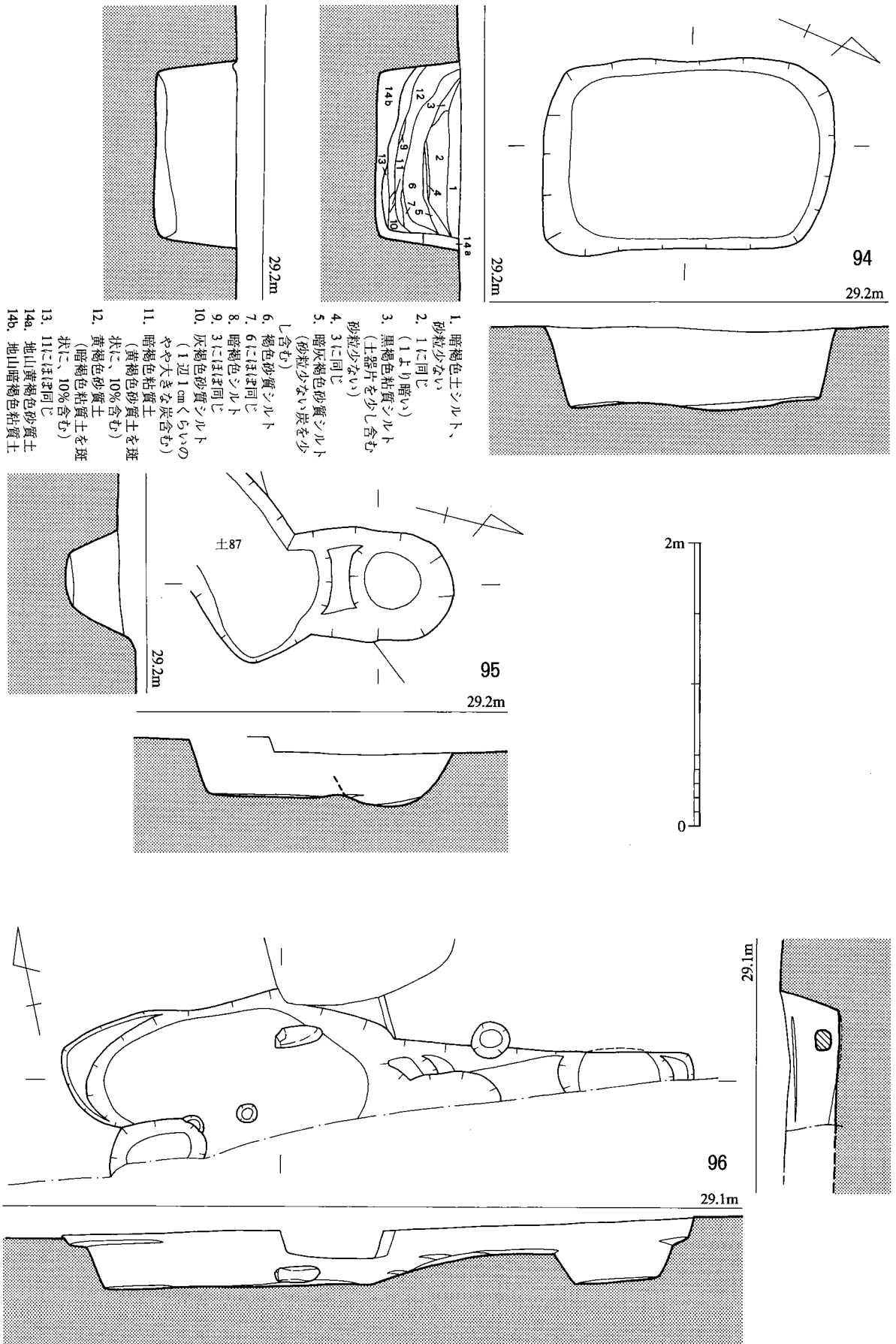
94号土坑（第110図）

調査区中央付近に位置する長方形の土坑である。長軸205cm、短軸135cm、底面は北隅がやや浅く



第109图 93·94号土坑出土土器实测图 (1/4)

±94



第110図 94~96号土坑実測図 (1/40)

なっており、この部分で深さ40cm、他の部分は55cmを測る。壁は比較的急な立ち上がりとなる。

出土土器（第109図）

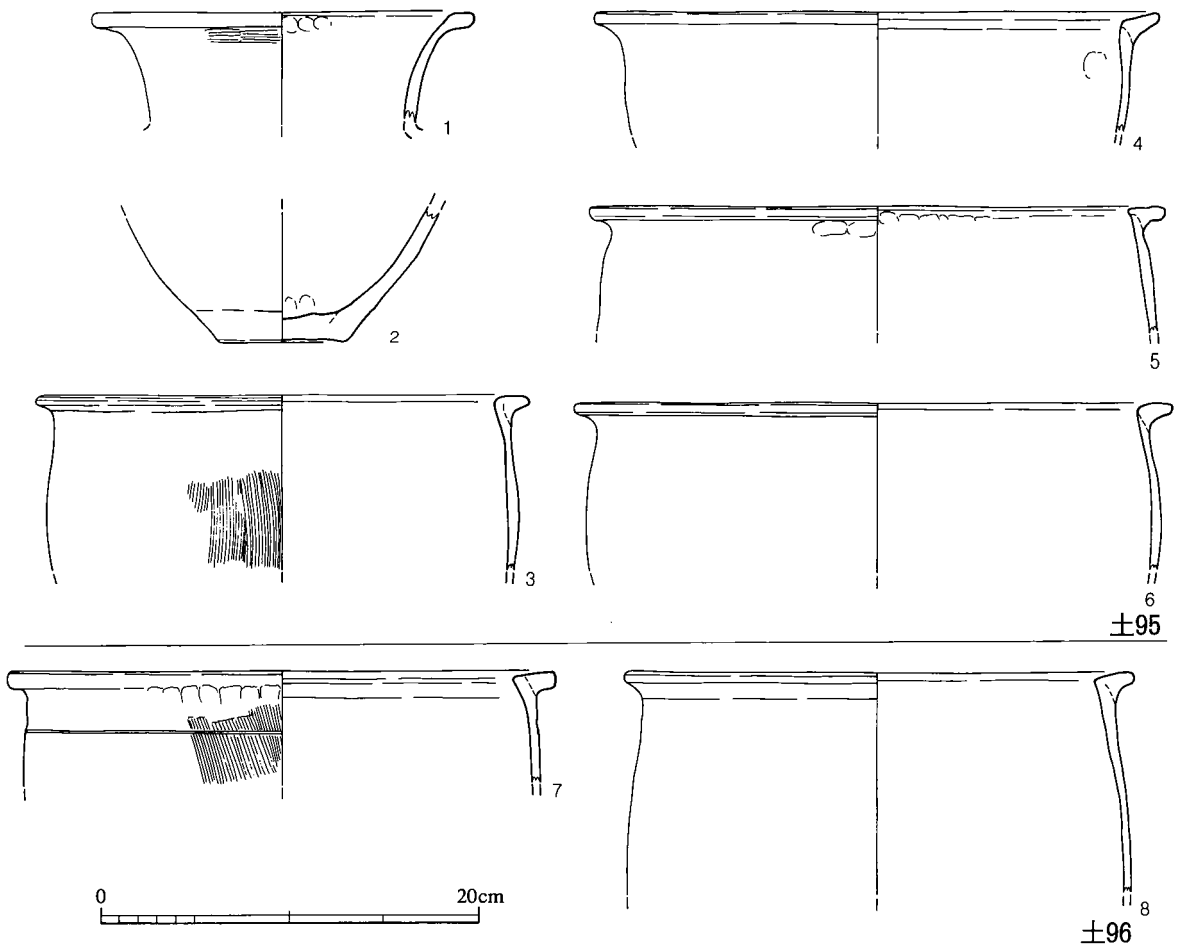
壺（13） 13はやや小型の壺。胴部は丸く肩が張らない。頸部は内傾し、口縁部は緩やかに外反する。端部は丸くおさめる。口縁端部は横ナデ、それより下は内外面とも指圧痕が認められる。胴部は内外面とも風化が著しく調整不明。口径14.6cm。

甕（14・15） 14は胴部上半が直立し、口縁部が短く外反する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部はナデ、胴部は風化が著しく調整不明。口径27.6cm。15は底面中央が大きく窪み、裾はやや開く。端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かない。胴部は内外面とも風化が著しく調整不明。内底面には指圧痕が観察される。底部外面は縦ハケ目、外底面はナデ。底径7.2cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期初頭に比定できる。

95号土坑（第110図）

87号土坑の北側に位置する楕円形の土坑である。南側を87号土坑に切られ、また56号竪穴住居跡を切っている。南壁を87号土坑に完全に壊されているため本来の規模は不明だが、遺存している部分で長軸110cm、短軸80cmを測る。底面は北側が深くなっており、深さ40cmを測る。壁は緩やかな



第111図 95・96号土坑出土土器実測図（1/4）

立ち上がりとなる。

出土土器（第111図）

壺（1・2） 1は頸部が外反し、口縁部が小さく丸く肥厚する。口縁部内面には指圧痕が残り、外面には横ヘラミガキが認められる。頸部は風化が著しく調整不明。口径20.2cm。2は底部がわずかに上げ底となり、端部はしっかりとした稜を有す。外面での底部と胴部の境目は認められない。胴部は丸味をもちながら開く。器表の風化が著しく調整不明。底径6.7cm。

甕（3～6） 3～6は逆L字状口縁の甕。3は胴部上半がやや内傾し、口縁部は未発達で三角口縁に近い。口縁部上面はやや丸味を帯び、水平に短く伸びる。内端は丸く稜をもたない。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面細かい縦ハケ目。口径26.0cm。4は胴部上半が直立し、口縁部は器壁が薄く逆L字状口縁となる。上面は内傾し、内端は丸く稜を持たない。器表の風化が著しく調整不明。口径29.8cm。5は口縁部付近が内傾し、上面は小さな逆L字状口縁となる。上面はほぼ水平に伸び、内面は鋭くわずかに突出する。口縁部内外面に指圧痕が認められる。胴部は風化が著しく調整不明。口径30.3cm。6は胴部上半が直立し、口縁部付近が内傾して、胴部が丸味を帯びた器形になる。口縁部は三角口縁に近い逆L字形口縁で、上面は丸味を有し水平に伸びる。内端は丸くなり、しっかりとした稜をもたない。器表の風化が著しく調整は不明。口径31.0cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

96号土坑（図版29、第110図）

調査区中央から南に寄った位置にある不整形の土坑で、北側を72号土坑にられ、また大半が調査区外へと続くために全体の形状は不明である。検出した範囲についてのみ言えば、長軸440cm、短軸100cm、深さは西側で40cm、東側のピット内で40cmを測る。ただし土坑の東側は壁が直線的になっており、本来は楕円形の土坑と竪穴住居跡が切り合っていたものを、それと認識せずに掘り下げてしまった可能性もある。遺物は土坑底面直上から出土している。

出土土器（図版60、第111図）

甕（7・8） 7・8ともに逆L字状口縁の甕。7は口縁部付近がわずかに内傾し、口縁部上面は短く水平に伸びる。内端は鋭い稜を有し、外端は面取りする。外面口縁部下には一条の沈線が巡る。口縁部上面及び内面は横ナデ、外面は指圧痕が残る。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径29.0cm。8は胴部上半が内傾し、口縁部は短い逆L字状口縁となる。上面はやや内傾し、内端はしっかりとした稜を有す。外端は丸くおさめる。器表の風化が著しく調整不明。口径27.0cm。

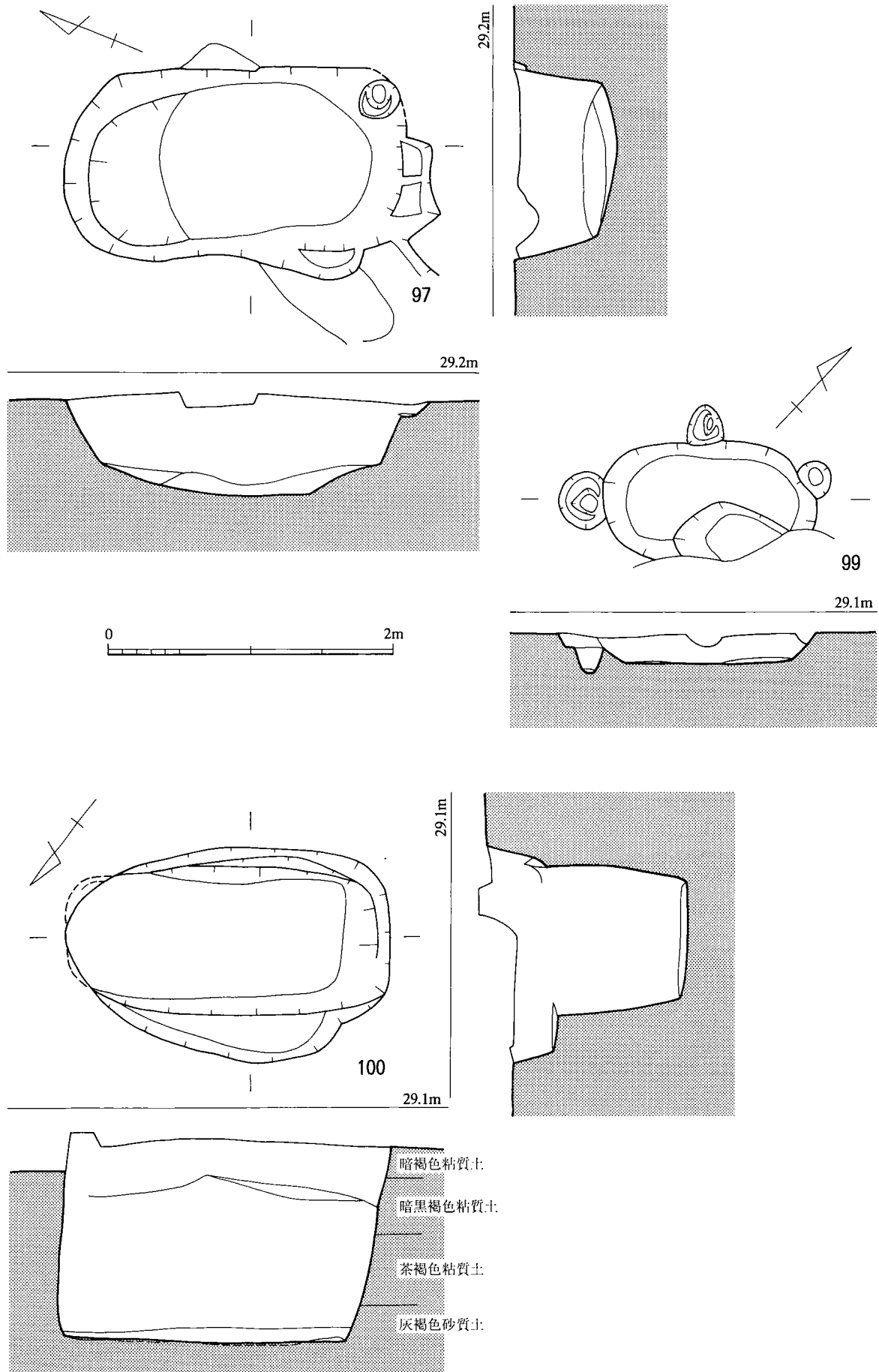
出土土器から当土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

97号土坑（図版30、第112図）

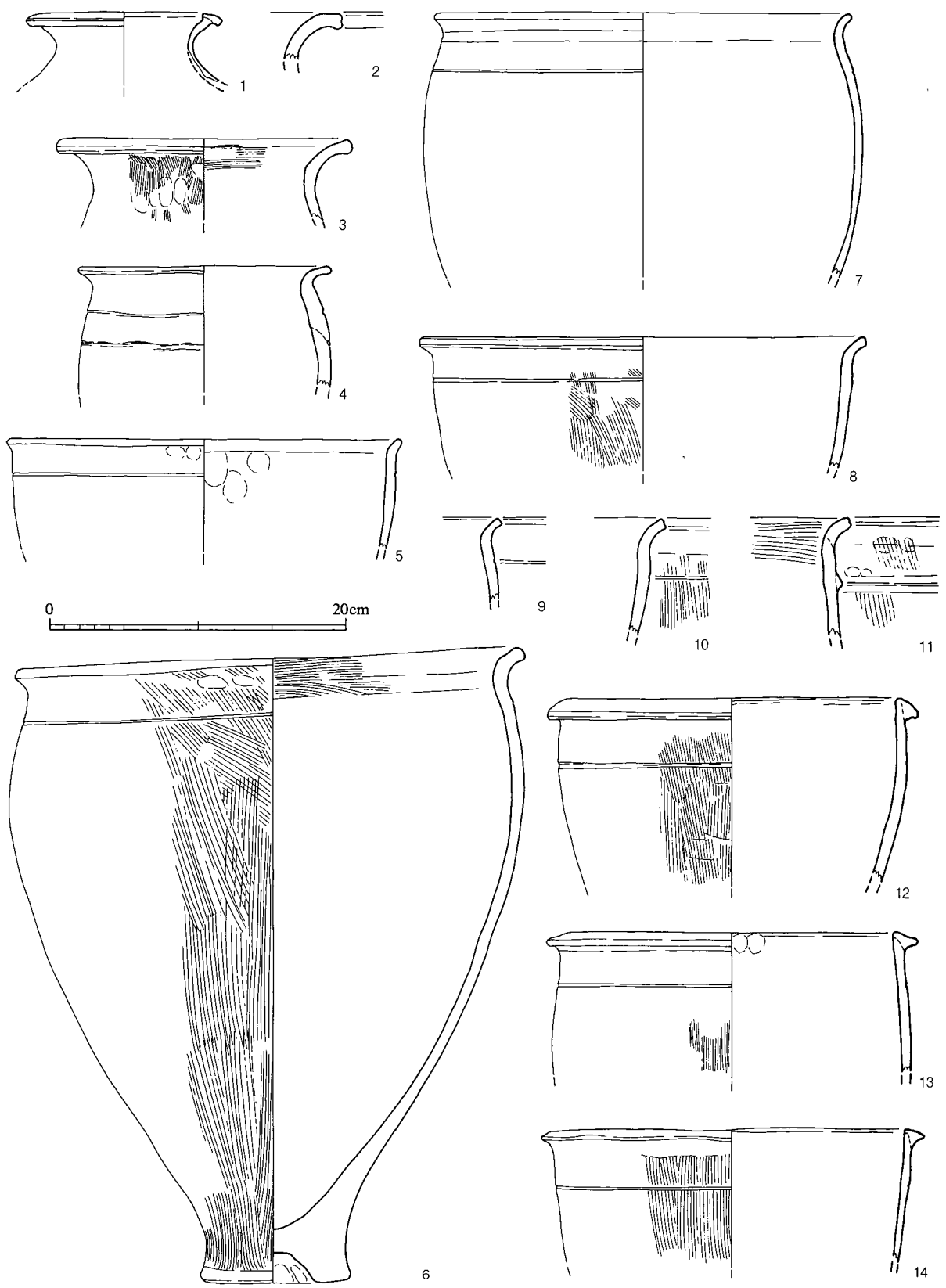
調査区中央から南に寄った位置にある長方形の土坑で、91号土坑に切られる。長軸250cm、短軸130cm、底面は中央に向かって皿状に窪んでおり、深さ70cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、やはり中央に向かってすり鉢状に窪む。遺物は底面直上からまとまって出土したが破碎された状況にあり、投棄されたものと思われる。

出土土器（図版60、第113・114図）

壺（1～3） 1は小型の壺。肩部は内傾し、頸部は大きく外反する。口縁部は小さな鋤先形とな



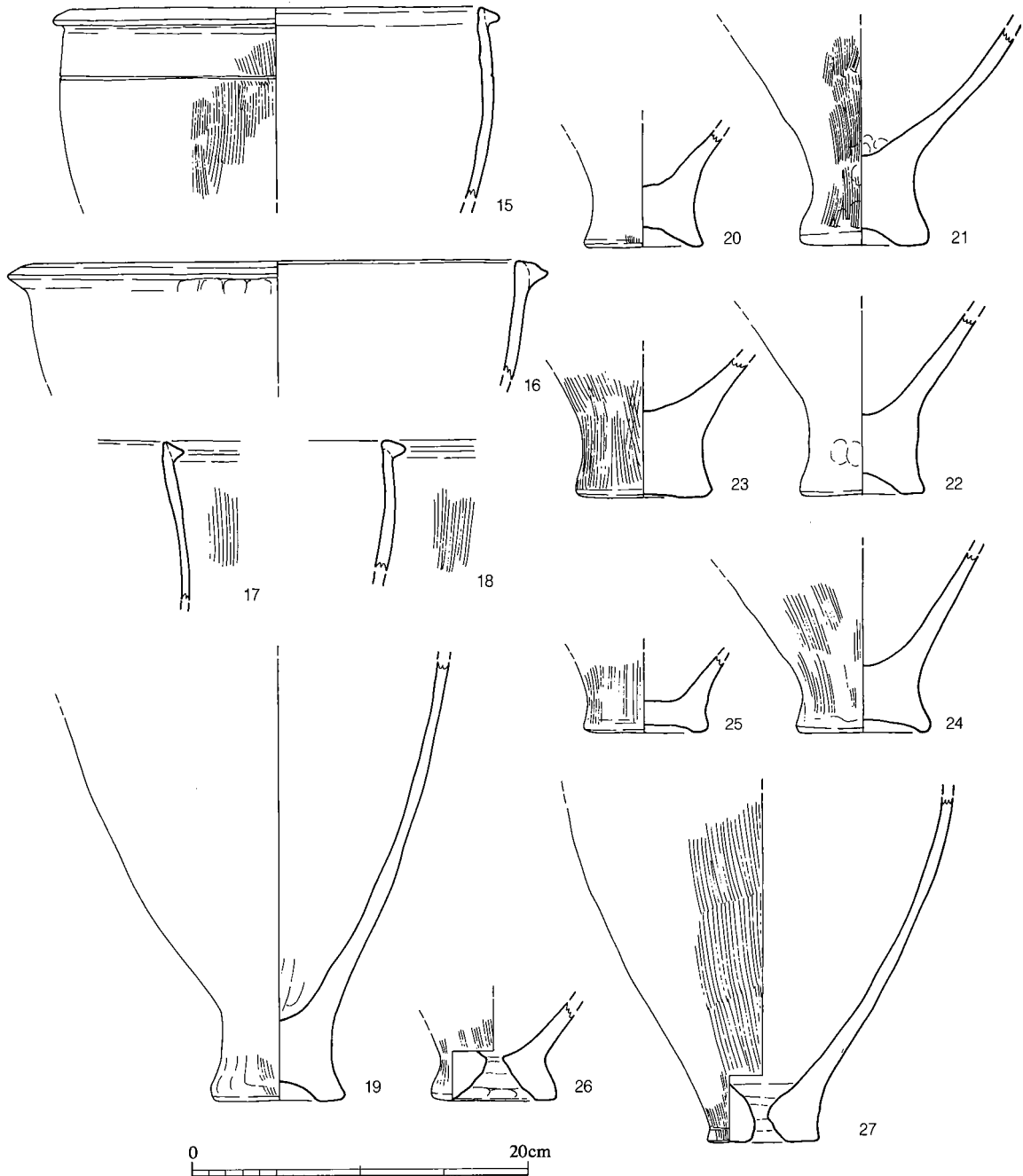
第112図 97・99・100号土坑実測図 (1/40)



第113图 97号土坑出土土器实测图①(1/4)

り、上面は外傾する。内端は短く突出する。全体的に器表が風化しており調整不明。口径13.2cm。
 2は口縁部が大きく開き、端部は面取りして四角くおさめる。全面風化が著しく調整不明。3は甕
 の可能性もあるが、一応壺として報告する。頸部が内傾し、口縁部が開く。端部は丸くおさめる。
 口縁端部は横ナデ、内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目で、頸部の湾曲部外面には指圧痕が明瞭に残
 る。口径20.0cm。

甕（4～27） 4～11は如意形口縁の甕。4は小型の甕である。胴部上半は内傾し、口縁部は短く
 強く外反する。口縁端部は丸味を帯びる。胴部は器壁が非常に厚く、対して口縁部は薄く作られる。
 外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部は内外面ともナデ調整を行う。外
 面には粘土帯の接合痕が明瞭に残る。口径17.1cm。5は胴部が直立し、口縁部は短くわずかに外反



第114図 97号土坑出土土器実測図②（1/4）

する。端部は丸くおさめる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面はナデで上方に指圧痕が残る。外面は風化が著しく調整不明。口径26.6cm。

6は完形品。底部はあまり高くはない。底面中央が大きく窪み、端部はやや丸味を帯びるが比較的シャープな作りである。くびれはあまり強くなく、胴部に対して底径が大きく安定する。胴部下半は直線的に開き、胴部上半は丸味を帯び口縁部付近は内傾する。口縁部は緩やかに外反する。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部内面は横ハケ目、口縁端部は横ナデ、外面から胴部にかけては縦ハケ目、胴部内面はナデ、底面はナデ。口径34.4cm、底径10.1cm、器高42.9cm。7は口縁部付近が内傾し、胴部が丸味を帯びた器形となる。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。器壁は同型の甕と比べて非常に薄く作られる。器表の風化が著しく調整は不明。口径28.0cm。8は胴部上半が開き気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径30.0cm。

9は口縁部付近が内傾し、口縁部は短く緩く外反する。胴部に比べ、口縁部の器壁は薄くなる。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。器表の風化が著しく調整は不明。10は胴部上半が開き気味に立ち上がり、口縁部は短く緩く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。11は口縁部付近がわずかに内傾し、口縁部は緩やかに外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面の口縁部下に一条の三角突帯を巡らせる。口縁部外面横ナデ、内面横ハケ目、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。

12～18は三角口縁の甕。12は胴部上半が直立し、口縁部はやや垂下した三角口縁となる。外面の口縁部下に一条の太い沈線を巡らす。口縁部外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径25.1cm。13は胴部上半が内傾し、口縁部は小さく形の整った三角口縁となる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径25.1cm。14は胴部上半がやや開き、口縁部は小さな三角口縁となる。口縁部は内端、外端ともシャープな稜をもつ。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.0cm。

15は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.5cm。16は口縁部付近がやや開き、口縁部は整った形の三角口縁となる。口縁部外端は鋭く尖り、その下には指圧痕が認められる。風化が著しく調整不明。口径32.0cm。17は胴部上半が内傾し、口縁部は小さく形の整った三角口縁となる。外端は鋭く尖る。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。18は胴部上半が直立し、口縁部は小さくやや丸味を帯びた三角口縁となる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。

19～27は甕の底部。19は底部が高く、底面中央が大きく窪み裾はやや開く。胴部はあまり開かず、直線的に伸びる。胴部内面はナデ、外面は風化が著しく調整不明。底部外面はわずかに縦ハケ目が観察される。底面はナデ。底径8.0cm。20は底面中央が大きく窪み、裾がやや開いて端部は比較的シャープに作られる。内面ナデ、外面はわずかに縦ハケ目が観察される。底面はナデ。底径7.0cm。21は底面中央が大きく窪み、裾が開き端部は丸味を帯びる。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目、内底面は指オサエ、底面はナデ。底径7.7cm。22は底部中央が大きく窪み、裾はほとんど開かず高い柱状の底部となる。端部は比較的シャープな作りとなる。器表の風化が著しく調整は不明。底部外面にわずかに指圧痕が残るのみである。底径7.3cm。24は底部があまり高くない。底面は上げ

底で裾が大きく開き、端部は丸味をもつものの、比較的シャープな作りとなる。胴部は直線的に伸びる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。25は薄い底部となる。底面は上げ底となり裾はわずかに開く。端部は比較的シャープな作りとなる。内面はナデ、外面は縦ハケ目、底面はナデ。底径7.4cm。

26・27は底部穿孔を行う甕。26は底面がやや上げ底となり裾は短く直線的に開く。端部は比較的シャープな作りとなる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底面に焼成後の穿孔を外側から行う。底径7.4cm。27は底面が平坦で裾は開かず、端部は鋭くシャープに仕上げる。胴部はわずかに内湾しながら立ち上がる。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底面に焼成後の両面穿孔を行う。底径6.6cm。

出土土器には1の口縁部や6・7の肩部、27の底部にやや新しい傾向を認めることが出来るものの、全体的に見れば弥生時代中期初頭のものとして良いだろう。

99号土坑（図版30、第112図）

調査区中央に位置する楕円形の土坑で、68号土坑に切られる。長軸150cm、短軸80cm、底面はほぼ水平で、深さ20cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。非常にしっかりした土坑であり多数の遺物の出土が予想されたものの、意に反して遺物はあまり出土しなかった。

土器は図示できるものがなかったが、149の挟入片刃石斧が出土している。

100号土坑（図版30、第112図）

調査区中央に位置する長方形の土坑で、51号竪穴住居跡下層で検出した。長軸230cm、短軸150cm、底面は整った長方形を呈し長軸200cm、短軸85cm、ほぼ水平に掘削され、深さは145cmを測る。この土坑底面には厚さ5～15cmの厚さで灰白色粘土を検出しており、おそらく敷き詰められたものであろう。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北東壁はオーバーハングする。遺物は多く出土している。

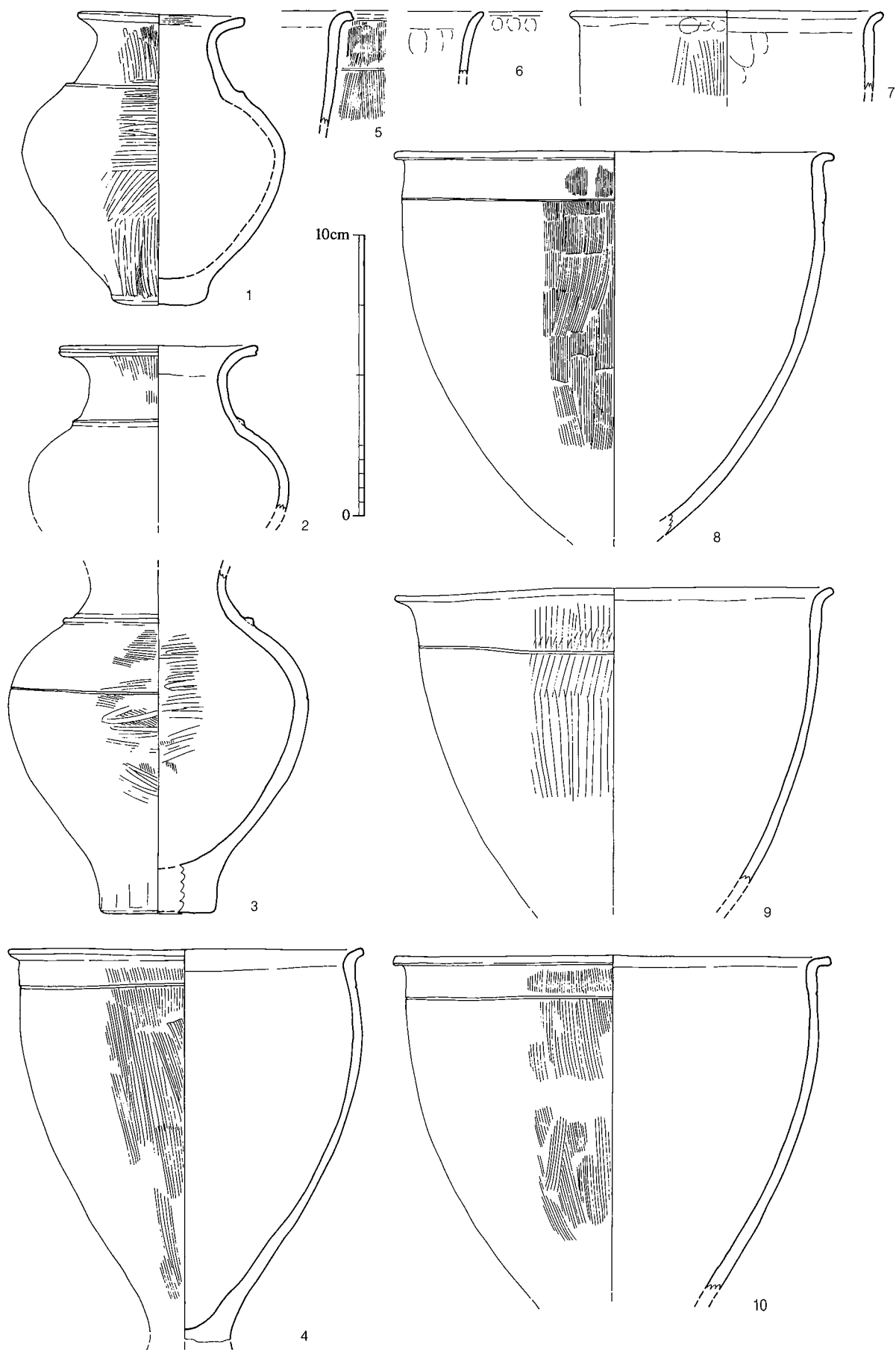


100号土坑

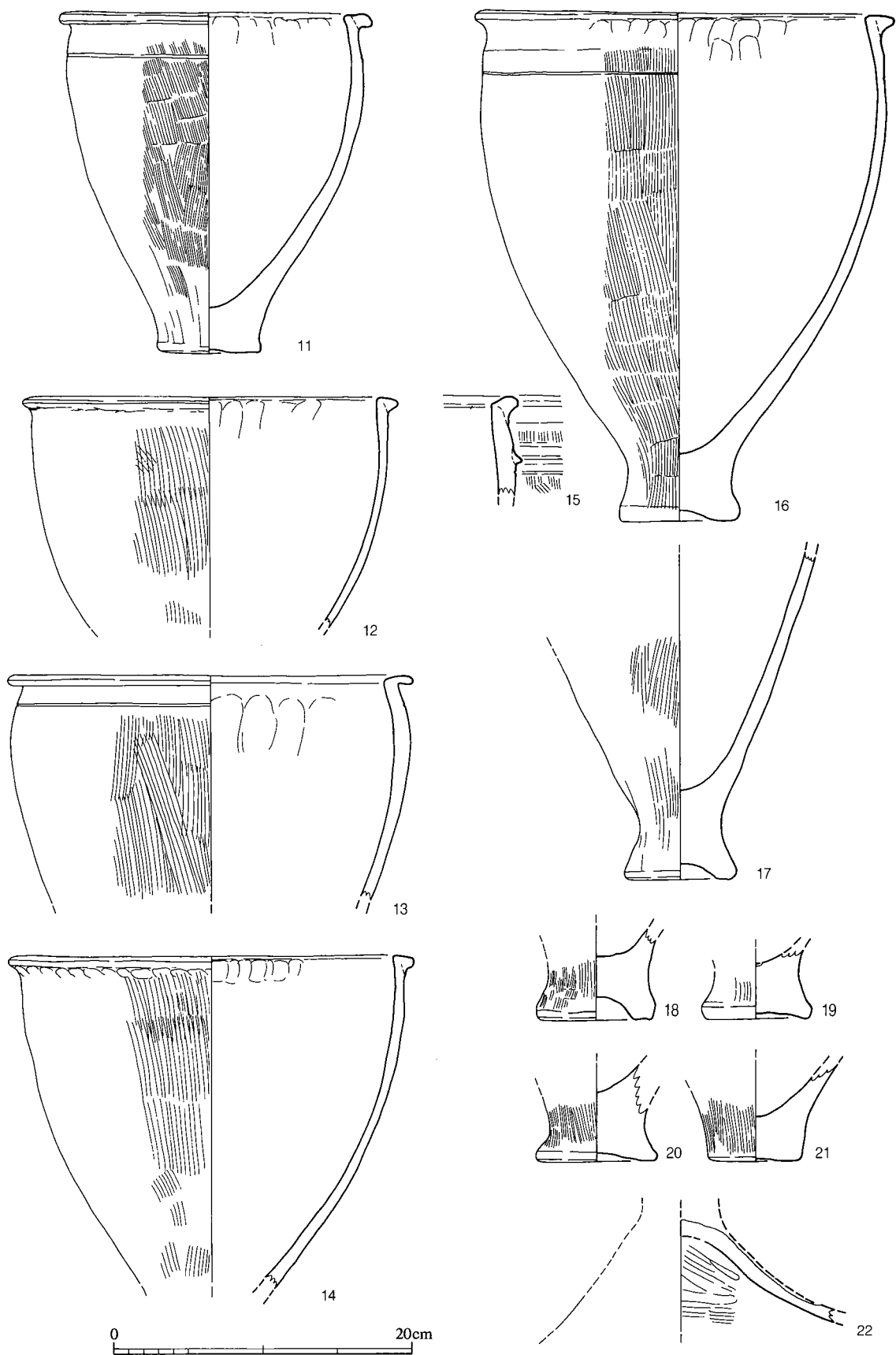
出土土器のうち、4・7・8・10・14～16は覆土上層、1・3・9・11～13・21は覆土下層からの出土である。また55の敲石も下層出土である。

出土土器（図版60～62、第115・116図）

壺（1～3） 1は底部が平坦で底端部は丸味を帯び、外面の底部と胴部の境目は不明瞭である。胴部最大径は中位よりやや上にあり、やや肩の張った器形となる。頸部は内傾し、口縁部は大きく開く。頸肩境に明瞭な段を有している。口縁端部は丸くおさめる。口縁端部は横ナデ、口縁部は横ヘラミガキ、頸部内面は風化が著しく調整不明、頸部外面は縦ハケ目後縦ヘラミガキ、胴部内面は不明、胴部外面は、上位は横ヘラミガキ、中位は斜ヘラミガキ、下位は縦ハケ目後縦ヘラミガキ、底面はナデを行う。口径11.8cm、胴部最大径18.6cm、底径6.8cm、器高20.9cm。2は胴部が丸味を帯



第115图 100号土坑出土土器实测图①(1/4)



第116图 100号土坑出土土器实测图② (1/4)

び、最大径が中位にある。頸部は内傾するものの直立に近い。口縁部は大きく開き、外端部に一条の沈線を巡らす。外面の頸肩境に一条の三角突帯を巡らす。全体的に器表の風化が進むが、外面の口縁部から頸部にかけて縦ハケ目が観察される。口径14.1cm、胴部最大径18.5cm。3は底部が非常に厚く、裾が開かず直立する。底面は平坦である。胴部は中位よりやや上に最大径があり、肩部は内傾して頸部は強く締まる。外面の頸肩境に一条の三角突帯を巡らせ、また胴部最大径のある位置のわずかに上に、極細の沈線を一条巡らす。内面は縦ハケ目後に横ヘラミガキ、外面は横・斜ハケ目後に粗い横ヘラミガキを行う。胴部最大径21.2cm、底径8.3cm。

甕（4～21） 4～10は如意形口縁の甕。4は胴部下半は直線的に開き、上半は直立し口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径25.0cm。5は胴部上半が直立し、口縁部は短く緩く外反する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。6は口縁部付近がやや外傾し、口縁部はわずかに外反する。端部は丸くおさめる。全面横ナデ。7は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径22.1cm。

8は胴部上半が直立し、丸味を帯びた器形になる。口縁部は短く強く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は細かく短い縦ハケ目。口径31.2cm。9は口縁部付近が直立し、口縁部は短く緩く外反する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は粗い縦ハケ目。口径31.2cm。10は胴部上半が直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は短く強く外反し、端部は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径31.0cm。

11～16は三角口縁の甕。11は底部が厚くなるものの、高くはならない。底面はわずかに窪み、裾は開かず直立する。端部は割とシャープに仕上げる。胴部は上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面はほぼ水平に伸び、逆L字状に近い。内端は丸味を帯びてわずかに突出する。外端は丸くおさめる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は細かく単位の短い縦ハケ目。口径21.0cm、底径7.0cm、器高23.9cm。12は胴部上半が直立し、口縁部は小さく形の整った三角口縁となる。口縁部外面は横ナデ、内面は縦長の指ナデ。胴部内面はナデ、外面は粗い縦ハケ目。口径25.0cm。13は口縁部付近が内傾し、最大径がかなり上位にある。口縁部は短い逆L字に近い形状となる。上面はわずかに内傾し、内端、外端とも丸くおさめる。外面の口縁部にかなり近い位置に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデで上方には縦長の指ナデが認められる。外面は縦ハケ目。口径27.0cm。14は胴部下半が直線的に開き、胴部上半が直立する。口縁部は小さな三角口縁で、上面は水平になる。口縁部上面はナデを行うが、内面及び外面の口縁部直下は明瞭な指圧痕が残る。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径27.2cm。

15は口縁部付近がわずかに内傾し、端部外面に上向きの粘土紐を貼付する。外面の口縁部下には一条の小さな三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。16は完形品。底部は高く底面中央がやや窪む。裾は開き、端部は丸くおさめる。胴部下半は直線的に伸び、上半は直立し、口縁部付近は若干内傾する。口縁部は形の整った三角口縁で、上面は水平になる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデで、その下方は内外面とも指圧痕が明瞭に残る。

胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目、底面はナデ。口径28.1cm、底径7.7cm、器高34.4cm。

17~21は甕の底部。17は高い底部となる。底面中央が窪み、裾は大きく直線的に開く。端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かず直線的に伸び、非常にスリムな器形となる。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.4cm。18はあまり高くはならない。底面は深く窪み、裾はやや開き端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。19は底面がやや上げ底となり裾が開き端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.4cm。20は底面がやや上げ底となり、裾は短く大きく開く。端部は比較的シャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.1cm。21は裾が全く開かず、底部から胴部へと外反しながらスムーズに伸びる。底面はわずかに上げ底となり端部は比較的シャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.3cm。

蓋(22) 22は両端部を欠失するが、恐らく蓋であろう。天井部から裾部にかけて、外反しながら大きく開く。外面は器表が剥離しており調整不明、内面は太いヘラミガキを施す。

出土土器は全て弥生時代中期初頭におさまるものである。良好な一括資料である。

101号土坑(第117図)

調査区中央に位置する不整楕円形の土坑で、48・50号竪穴住居跡の下層で検出したものである。長軸180cm、短軸100cm、底面は中央から西側にかけて最も深くなり、長軸90cm、短軸50cmの大きさで平坦となる。深さはこの部分で35cm、東側のテラス部分で10cmを測る。壁は緩やかな立ち上がりとなる。遺物はほとんど出土せず、図示できるものはない。

102号土坑(図版31、117図)

調査区中央に位置する不整長方形の土坑で、64号竪穴住居跡、103号土坑を切る。長軸300cm、短軸115cm、底面は東側がピット状に深くなっており、この部分までの深さは35cm、北側では15cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。遺物は底面から10cm程浮いた状態で出土している。

出土遺物には図示した土器の他、137の磨製石剣が出土している。

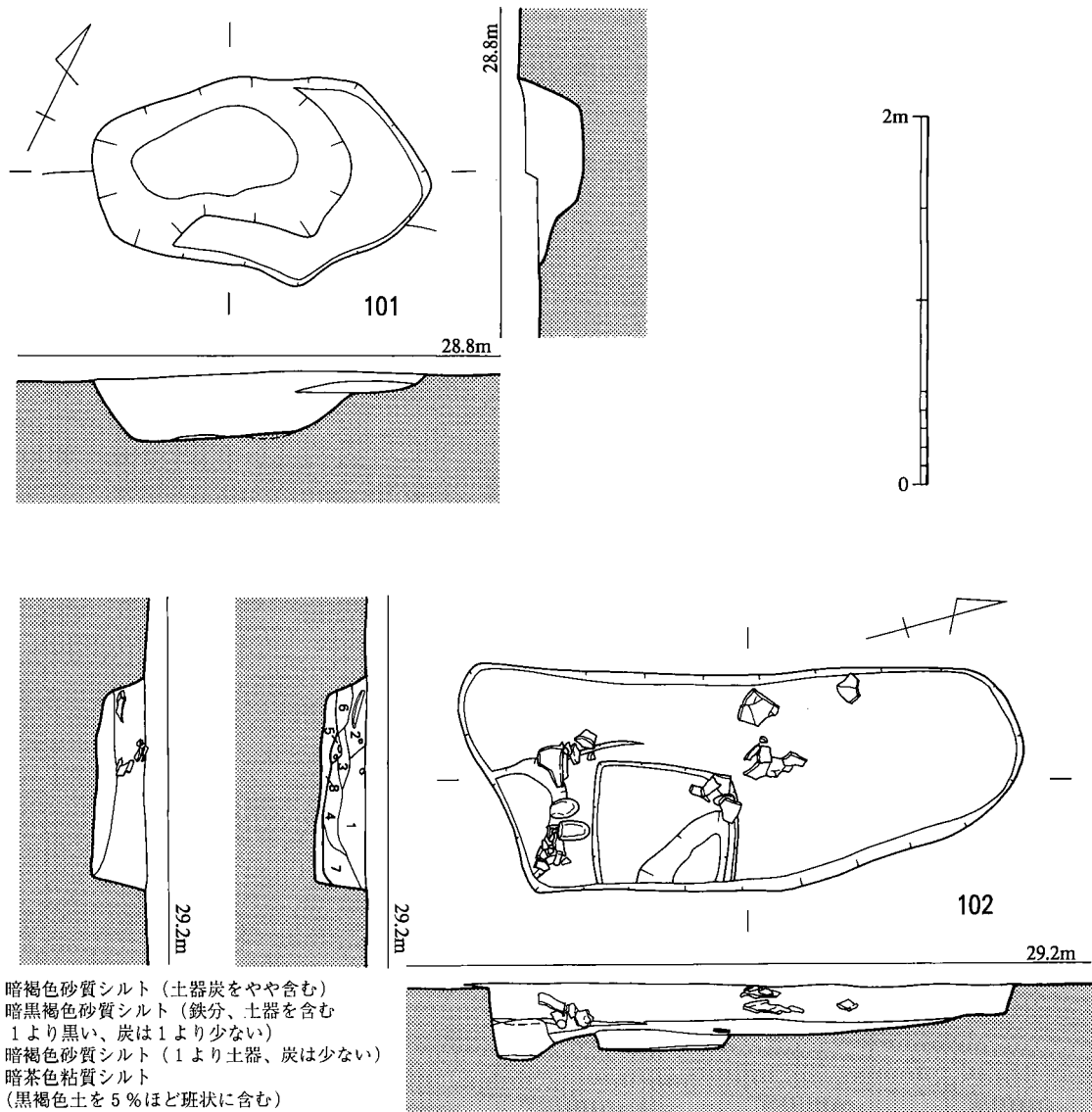
出土土器(図版62、第118図)

壺(1) 1は口縁部が大きく開き、端部は丸くおさめる。上面は水平に短く伸び、内面が突出する。風化が著しく調整不明。口径24.0cm。

甕(2~15) 2・3は三角口縁に近い口縁部となる甕。2は胴部が張りをもたず、口縁部付近が直立する。口縁部は丸味を帯びた三角口縁となり、上面は内傾する。口縁部外面には粘土帯貼付の際の指圧痕が認められる。風化が著しく調整不明。口径25.0cm。3は胴部上半が直立し、口縁部は形の整った三角口縁となる。口縁部内面付近には縦方向の指ナデの稜線が認められる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は風化が著しく調整不明。口径27.0cm。



102号土坑土層

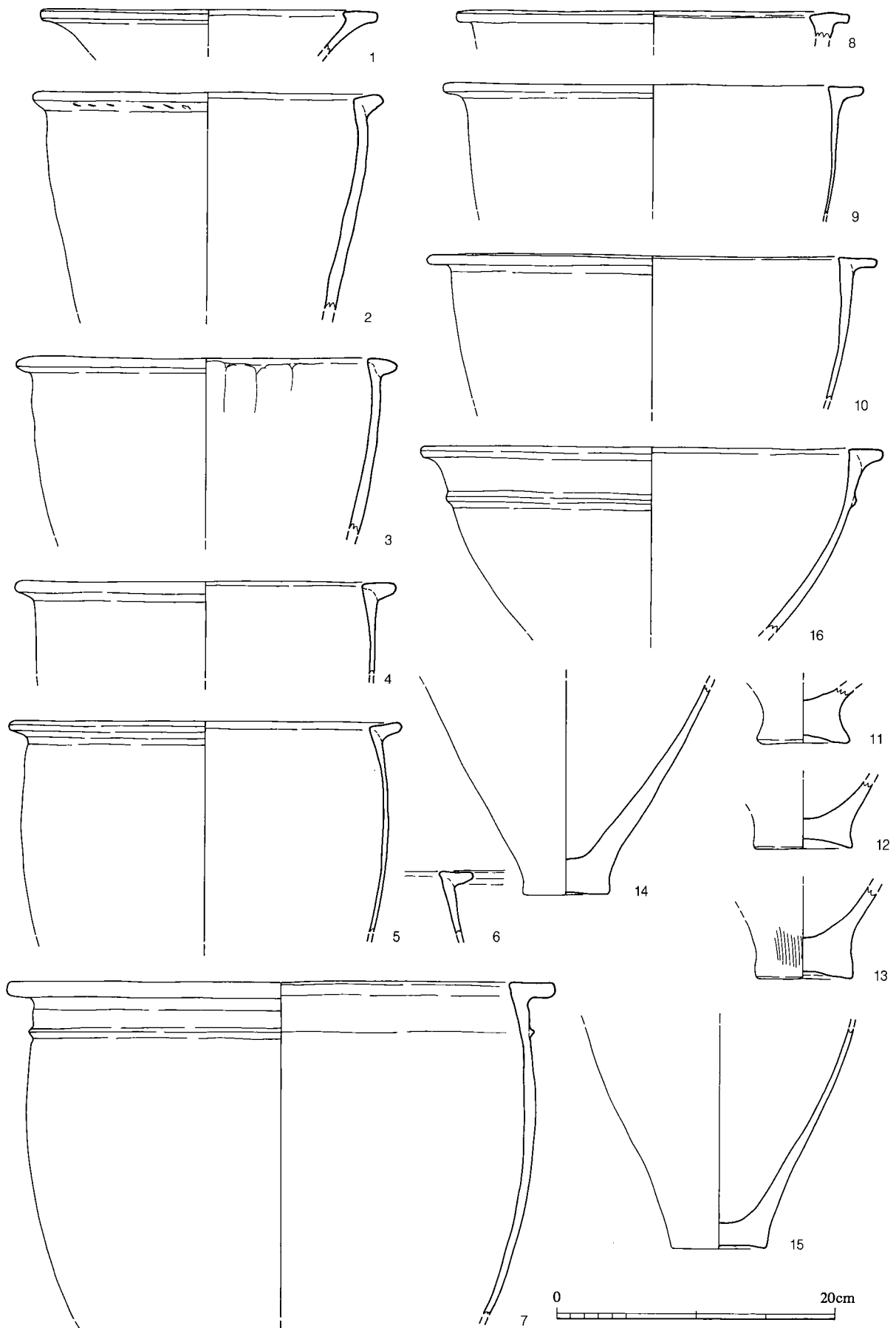


1. 暗褐色砂質シルト（土器炭をやや含む）
2. 暗黒褐色砂質シルト（鉄分、土器を含む
1より黒い、炭は1より少ない）
3. 暗褐色砂質シルト（1より土器、炭は少ない）
4. 暗茶色粘質シルト
（黒褐色土を5%ほど班状に含む）
5. 暗褐色粘質シルト
6. 暗褐色粘質シルト（黄褐色土をブロック、かつ班状に30%くらい含む）
7. 暗褐色砂質シルト（5に類似炭、土器を少し含む）
8. 暗褐色灰色粘質シルト（焼土、炭すこしまじる）

第117図 101・102号土坑実測図（1/40）

4～10は逆し字形口縁の甕。4は口縁部付近がやや内傾し、口縁部上面は短く水平に伸びる。内端、外端ともに丸く仕上げられる。口径27.0cm。5は胴部上半が直立し、口縁部付近が内傾して丸味を帯びた器形となる。口縁部上面は内傾し、内端はシャープな稜を有す。外端は丸く仕上げる。胴部の器壁は非常に薄い。全面風化が著しく調整不明。口径28.0cm。6は口縁部付近が内傾し、口縁部上面は水平に短く伸びる。内端、外端ともに丸く仕上げられる。風化が著しく調整不明。7は口縁部付近が内傾し、丸味を帯びた器形となる。口縁部上面は水平に伸び、内端は尖り気味に仕上げる。外面口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。風化が著しく調整は不明。口径39.0cm。

8は口縁部上面が水平になり、内端は突出気味に仕上げる。風化が著しく調整は不明。口径28.0cm。9は胴部上半が直立し、口縁部は水平に伸びる。内面は鋭く稜を有し、突出気味に仕上げる。風化が著しく調整は不明。胴部の器壁は非常に薄い。口径30.0cm。10は胴部上半が直立し、口縁部はほぼ水平に伸びる。内端は鋭く稜を有し、わずかに突出する。胴部の器壁は薄く、口縁部付近は



第118图 102号土坑出土土器实测图 (1/4)

やや厚くなる。風化が著しく調整は不明。口径32.0cm。

11～15は底部。11は底面が上げ底で裾が短く開く。底部はやや厚い。風化が著しく調整は不明。底径6.6cm。12は底面が上げ底となり端部は鋭くシャープに仕上げる。底部外面は直立する。風化が著しく調整は不明。底径7.0cm。13は底面がやや上げ底となり端部は鋭くシャープに仕上げられる。底部外面は直立する。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.0cm。14は底部がわずかに上げ底となり端部は鋭く稜を有しシャープに仕上げられる。底部外面は直立し、胴部はあまり開かず直線的に伸びる。全体的に風化が著しく調整は不明。底径6.2cm。15は底面がわずかに上げ底となり端部は鋭く稜を有す。胴部はあまり開かず底部から胴部にかけては直線的に続く。風化が著しく調整は不明。底径6.7cm。

鉢 (16) 16は鉢としたが、高坏坏部の可能性もある。口縁部が短い逆し字状となり、口縁部上面はほぼ水平に伸びる。内端は鋭く稜を有す。外面口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。全体的に器表の風化が著しく調整は不明。口径33.0cm。

出土土器のうち2・3にはやや古い様相を認めうるものの、全体的に見れば弥生時代中期前半としてよいものである。

103号土坑 (図版31、第119図)

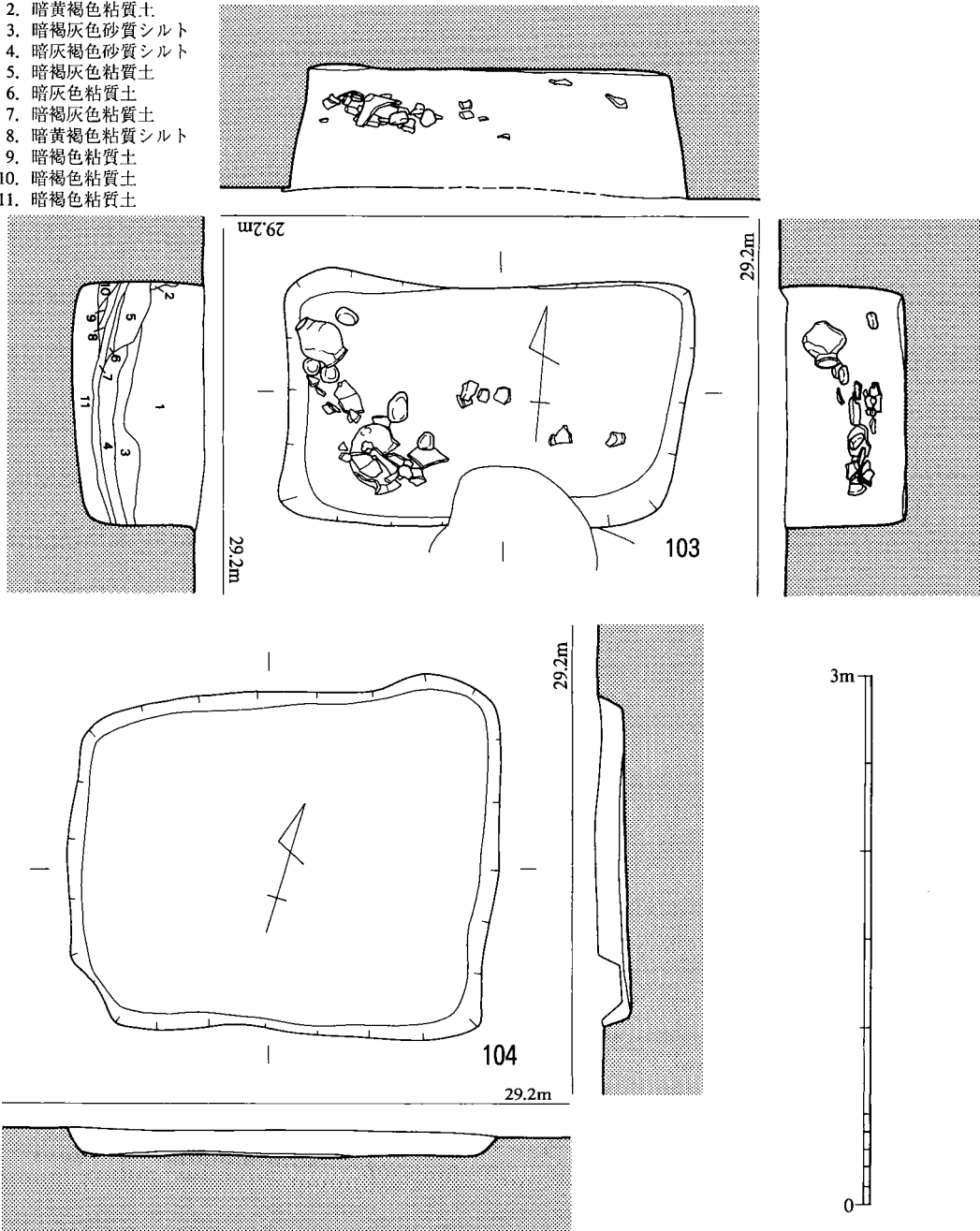
調査区中央の北寄りに位置する土坑で、64号竪穴住居跡と接し、102号土坑に切られる。長軸225cm、短軸135cmを測り、整った長方形プランとなる。底面はほぼ水平で、深さは70cmを測る。遺物は西側にまとまっており、底面から10cm程浮いた状態で出土している。

出土土器 (図版62・63、第120図)

壺 (1～3) 1は胴部が球形で頸部が強く締まり、口縁部が短く外反する。口縁端部外面には一条の沈線を巡らす。口縁端部は横ナデ、口縁部内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目後粗い横ヘラミガキ。胴部内面はナデを行うが、指圧痕が明瞭に残る。外面は全面風化が著しく調整不明。口径15.8cm、胴部最大径27.6cm。2は口縁端部を欠失する。底部は厚く、底面は平坦で端部は丸く稜をもたない。底部と胴部の境は不明瞭で、なだらかに湾曲する。胴部は最大径がほぼ中位にあり、頸部は強くすばまる。口縁部は大きく外反する。風化が著しく、調整は全く不明。胴部最大径25.5cm、底径9.3cm。器高は29cm程度であろう。3は底部が厚く底面は平坦で、端部は丸く稜をもたない。胴部は丸味を有して立ち上がり、球形に近い形状となるだろう。内面は風化が著しく調整不明。外面は縦ハケ目の後粗いヘラミガキを行う。底径7.8cm。

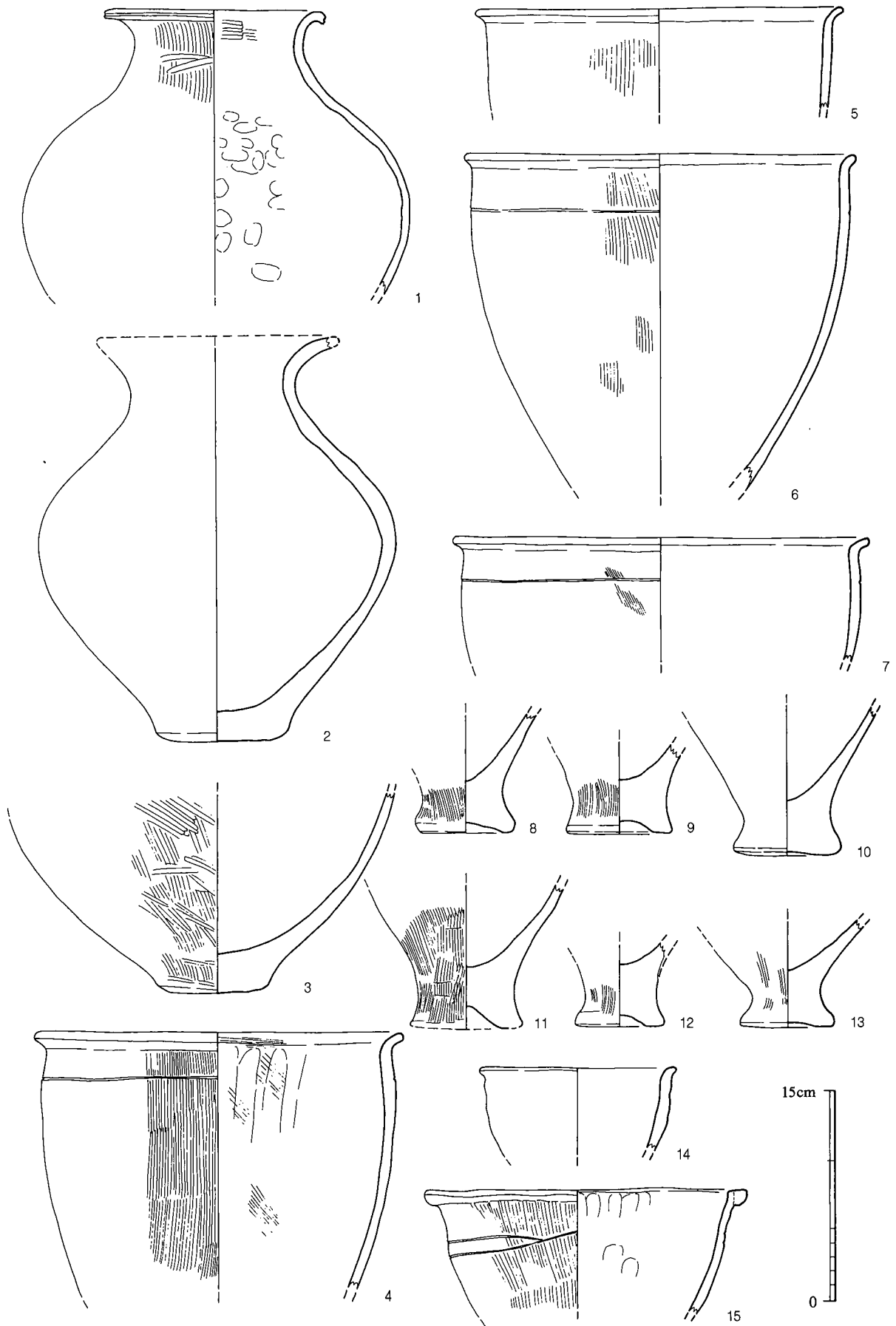
甕 (4～13) 4～7は如意形口縁の甕。4は胴部上半が直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデで、内面に横ハケ目が残る。胴部内面はナデで上半には縦長の指ナデが認められる。外面は長い縦ハケ目。口径26.4cm。5は胴部上半が直立し、口縁部が短く外反する。端部は丸くおさめる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.2cm。6は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径28.0cm。7は胴部上半が直立し、口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径35.6cm。

1. 暗褐色砂質シルト
2. 暗黄褐色粘質土
3. 暗褐色砂質シルト
4. 暗灰褐色砂質シルト
5. 暗褐色粘質土
6. 暗灰色粘質土
7. 暗褐色粘質土
8. 暗黄褐色粘質シルト
9. 暗褐色粘質土
10. 暗褐色粘質土
11. 暗褐色粘質土



第119図 103・104号土坑実測図 (1/40)

8～13は甕の底部。8は底面がやや窪み、裾が開き、端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かず
に立ち上がるようである。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.1cm。9は底面中央が窪み、
裾がやや開き、端部をシャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.8cm。10
は底面がわずかに窪み、裾は大きく開き、端部は丸味を帯びる。胴部は直線的に開く。風化が著し
く調整不明。底径7.6cm。11は底面中央が大きく窪み、裾はやや開いて端部は比較的シャープに仕
上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。12は小型の甕であろう。底面中央が深
く窪み、裾は短く開き、端部は比較的シャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。
底径6.4cm。13は底面がわずかに上げ底となり裾は大きく短く開く。端部はシャープに仕上げる。
胴部はやや開き気味に立ち上がる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.7cm。



第120图 103号土坑出土土器实测图(1/4)

鉢 (14・15) 14は小型の鉢。胴部上半が直立し、口縁部は短くわずかに外反する。端部は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。口径14.0cm。15は胴部から口縁部にかけて内湾しながら開く。口縁部は丸味を帯びた三角口縁となる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。非常に雑で一部二条になる。口縁部は横ナデ、内面は指オサエ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径23.1cm。

出土土器からみて、当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

104号土坑 (図版32、第119図)

調査区中央に位置する長方形の土坑で、64号竪穴住居跡、113・125・128号土坑と重複しておりこれらの中で最も新しい。長軸235cm、短軸195cm、底面はほぼ水平で、深さ15cmと浅い。

出土土器 (第121図)

甕 (1～6) 1～3は如意形口縁の甕。1は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。端部は面取りする。口縁部内面は横ハケ目、外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径22.6cm。2は口縁部付近が直立し、口縁部は緩く外反する。器表の風化が著しく調整は不明。3は口縁部付近がやや開き、口縁部は緩やかに外反する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。風化が著しく調整不明。

4～6は甕の底部。4は底面が大きく窪み、裾が開き端部は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。底径7.8cm。5は高い底部となる。底面は深く窪み、裾がやや開き、端部は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。底径7.8cm。6は底面中央が窪み、裾はやや開く。端部は丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。底径7.6cm。

出土土器から、当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

105号土坑 (図版32、第122図)

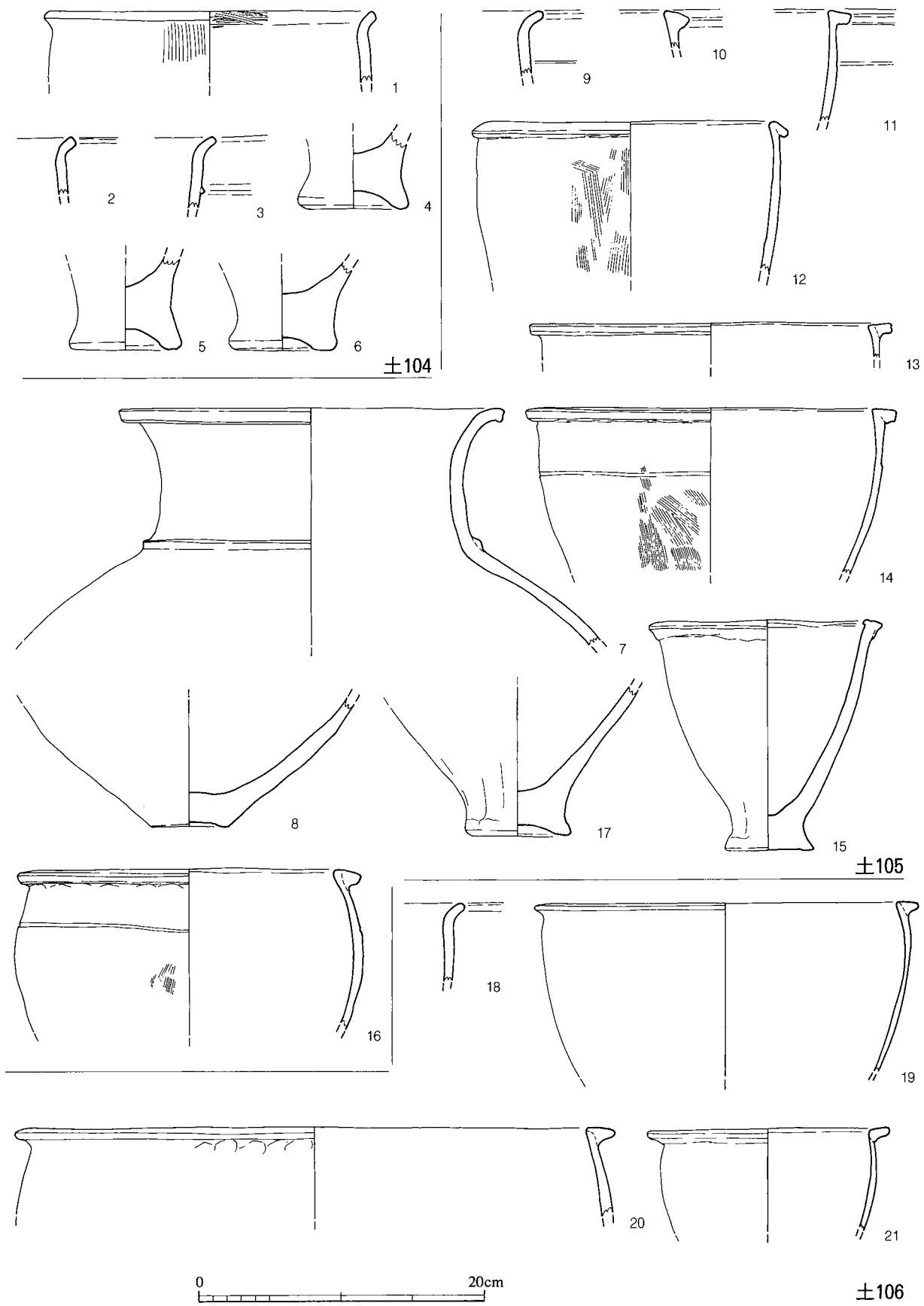
調査区中央に位置する長方形の土坑で、106号土坑に切られる。長軸195cm、短軸130cmを測る。底面は中央付近がやや深くなっており、この部分で深さ60cm、北側で45cmを測る。覆土からは多くの遺物が出土したが、これらは土坑底面から10cm程浮いた位置にある。

出土土器 (図版63、第121図)

壺 (7・8) 7は大型の壺。肩部は丸味を帯びて内傾し、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部は緩やかに外反し、端部はさらに強く開いて水平近くにまでなる。端部は面取りして四角くおさめる。外面の頸肩境に一条の三角突帯を巡らす。風化が著しく調整は不明。口径27.0cm。8は底部が小さい。底面はやや上げ底となり端部は明瞭な稜を有す。底部の器壁は厚い。外面の底部と胴部の境はなく、端部からそのまま胴部へと続く。胴部はやや丸味を帯びる。風化が著しく調整不明。底径5.6cm。

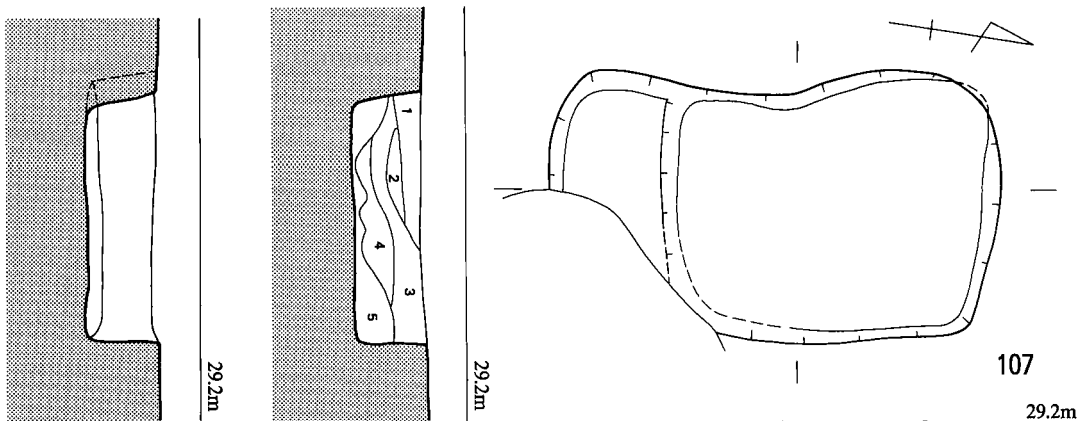
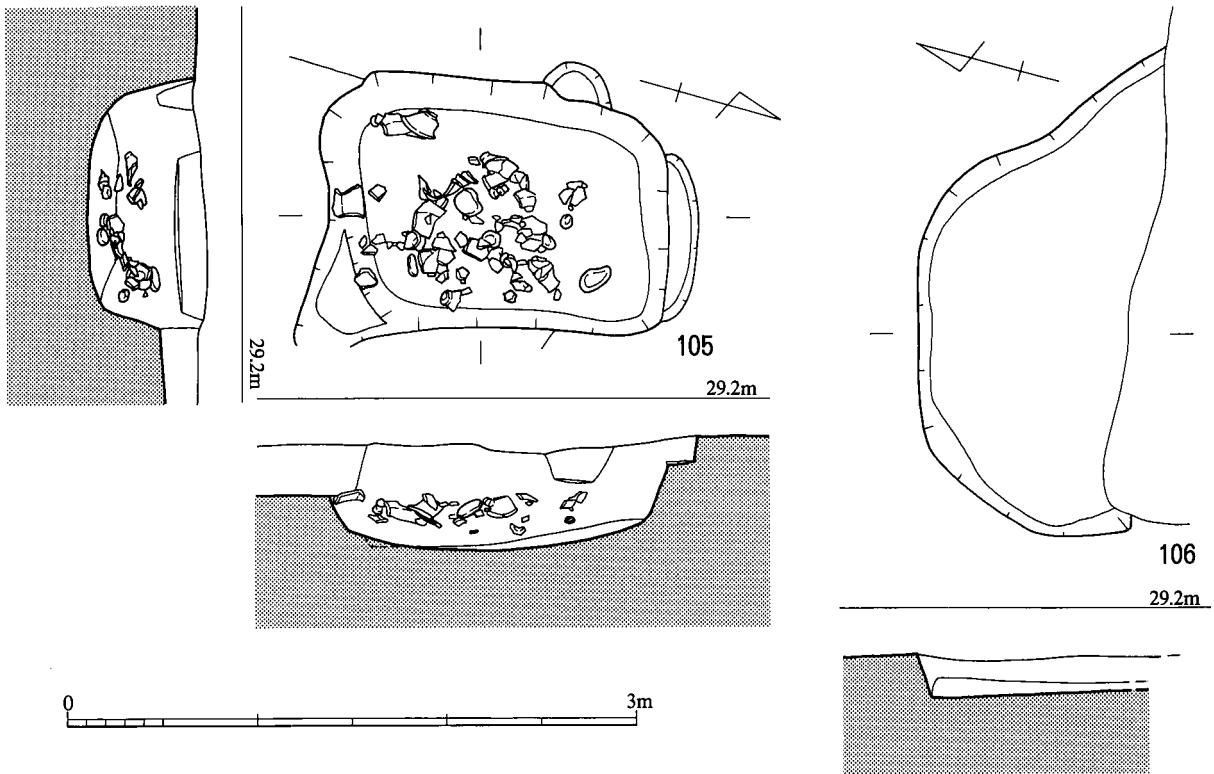
甕 (9～15) 9は如意形口縁の甕。口縁部付近はわずかに内傾し、口縁部は緩やかに外反する。口縁部端部は丸くおさめる。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。器表の風化が著しく調整は不明。

10～16は三角口縁の甕。10は口縁部がやや内傾し、整った三角口縁とする。上面は外傾する。全面ナデ調整。11は口縁部付近が直立し、口縁部は逆L字状口縁に近い三角口縁となり上面はやや外傾する。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。風化が著しく調整は不明。12は胴部上半が直立し、口縁部は小さく垂下した三角口縁となる。端部は丸くシャープさに欠ける。口縁部は横ナデ、胴部



第121图 104~106号土坑出土土器实测图 (1/4)

内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径22.2cm。13は口縁部付近が直立し、口縁部は小さく短い逆し字状をなす。上面はほぼ水平に伸び、内端はわずかに突出し、外端は面取りして四角くおさめる。口径25.4cm。14は胴部上半が直立し、口縁部は小さく短い逆し字状となる。内端は明瞭な稜を有し、外端は面取りして四角くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径26.0cm。15は小型甕。底部はやや高く、底面は平坦で裾が大きく開く。端部は鋭く尖る。胴部はあまり湾曲せず、口縁部まで開く。口縁部は三角口縁となるが、



1. 暗灰褐色シルト
(5%くらい黄褐色土含む)
2. 灰褐色シルト土
(30%くらい黄褐色粘質土含む)
3. 暗灰褐色シルト
(20%くらい黄褐色土含む)
4. 黄褐色粘質シルト
(10%くらい暗茶褐色粘質土含む)
5. 暗茶褐色粘質土
(30%くらい黄褐色粘質土含む)

第122図 105~107号土坑実測図 (1/40)

外側へはあまり伸びず、逆に内側へ短く突出する。風化が著しく調整は不明。口径16.3cm、底径6.1cm、器高16.4cm。16は口縁部付近が大きく内傾し、丸味を帯びた器形となる。口縁部は比較的形の整った三角口縁で、上面が外傾する。内端、外端とも丸く仕上げられる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径24.0cm。

17は甕の底部。底面はやや上げ底となり、裾は短く開く。端部は割とシャープに仕上げる。胴部は直線的に開く。風化が著しく調整は不明だが、底部の外面に指ナデの稜が認められる。底径7.4cm。

出土土器の中にはやや新しい様相を認めうるものもあるが、全体的に見れば弥生時代中期初頭としてよいものである。

106号土坑（図版32、第122図）

105号土坑の南側に位置する土坑で、105号土坑を切り、また65号竪穴住居跡に南半部を大きく切られる。遺存する部分で東西長260cm、南北長110cmを測る。底面はほぼ水平で、深さは20cmを測る。

出土土器（第121図）

甕（18～21） 18は如意形口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部は短く緩く外反する。端部は丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。

19～21は三角口縁の甕。19は口縁部付近が内傾し、丸味を帯びた器形となる。口縁部は小さな三角口縁となり、上面はわずかに外傾する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は風化が著しく調整不明。口径26.9cm。20は大型の甕。口縁部付近が内傾し、口縁部は形の整った三角口縁となる。上面はやや外傾する。外面には指圧痕が残る。風化が著しく調整は不明。口径42.0cm。21は小型の甕または鉢であろう。口縁部付近は直立し、口縁部は短く逆L字状に近い。内端、外端とも丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。口径17.0cm。

出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

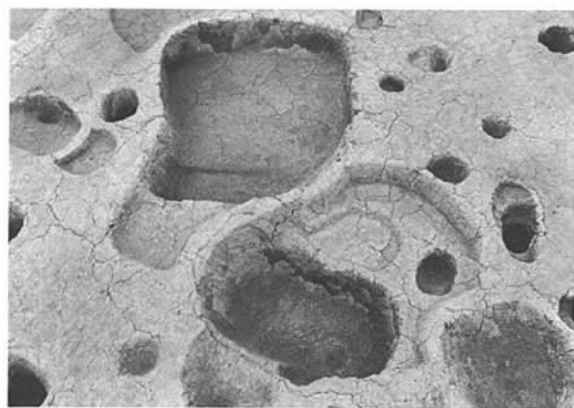
107号土坑（図版33、第122図）

106号土坑の南東側に位置する長方形の土坑で、108号土坑に南東隅を切られる。短軸140cm、長軸240cmを測る。南側にテラス状の段を有し、これまでの深さは15cm、底面はほぼ水平で、深さ35cmを測る。

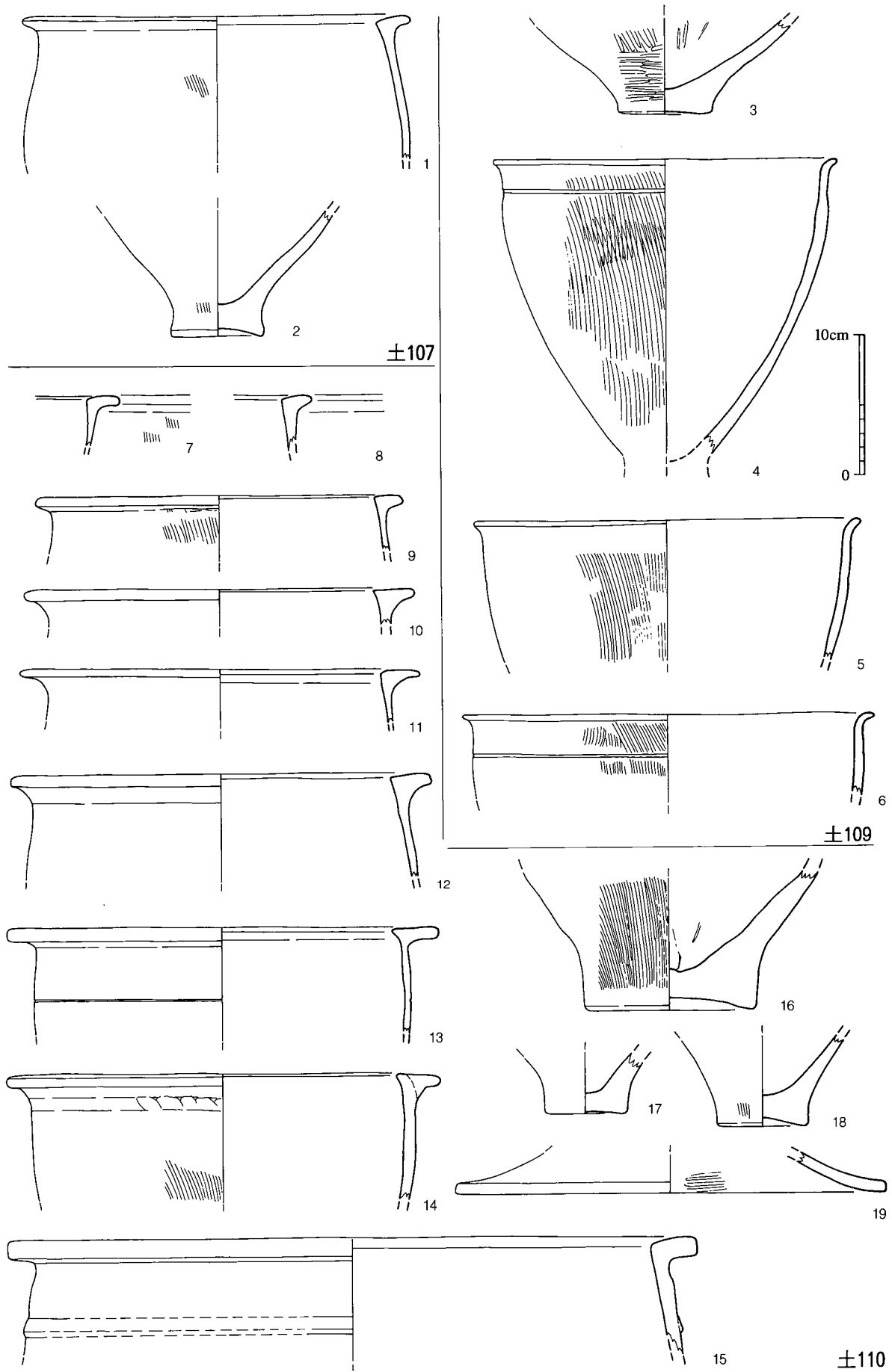
出土土器（図版63、第123図）

甕（1・2） 1は逆L字状口縁の甕。口縁部付近が内傾し、口縁部は三角形に近い逆L字状となる。上面は内傾し、内端は鋭く尖り、外端は丸くおさめる。口縁部横ナデ、胴部内面はナデ、外面にはわずかに縦ハケ目が認められる。口径13.6cm。

2は甕の底部。底面はやや上げ底となり裾が短く開き、端部は尖りシャープに仕上げる。底部の



107・108号土坑



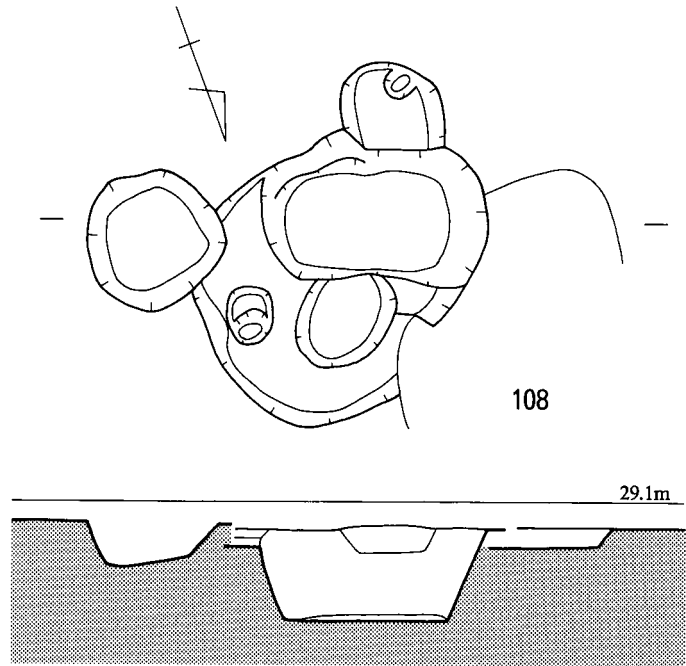
第123图 107·109·110号土坑出土土器实测图(1/4)

器壁はそれほど厚くならない。内面ナデ、外面はわずかに縦ハケ目が認められる。底面はナデ。底径6.6cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

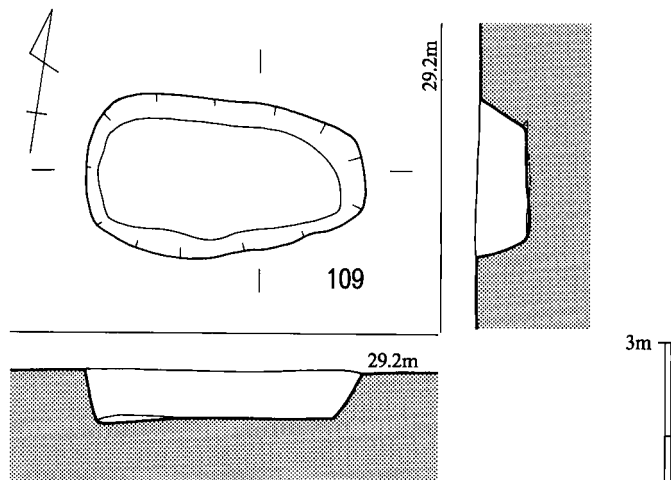
108号土坑（図版33、第124図）

107号土坑の南側に位置し、これを切る土坑である。後世のピット等に攪乱されて不整形となるが、本来は楕円形に近い形状をなす。長軸170cm、短軸140cmを測る。内部は北側が長軸120cm、短軸70cmの大きさでさらに深くなっており、この底面までの深さは50cmを測る。遺物は若干出土したものの、図示できるものはない。



109号土坑（図版33、第124図）

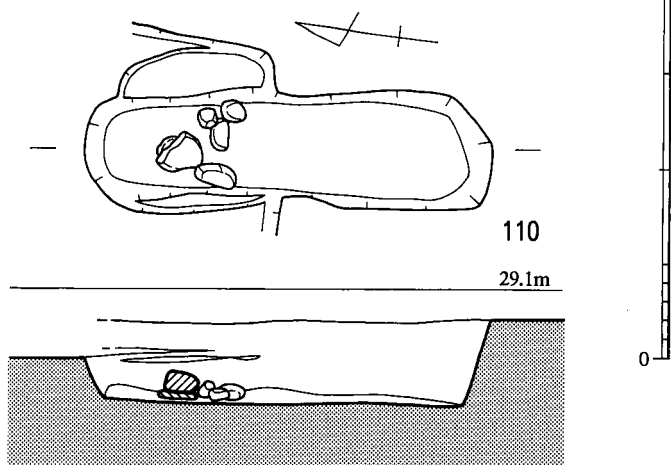
108号土坑の北東側に位置する土坑で、長軸145cm、短軸85cmを測り楕円形を呈す。底面はほぼ水平で、深さ25cmを測る。壁は西側は急角度な、それ以外は割と緩やかな立ち上がりとなる。



出土土器（図版63、第123図）

壺（3） 3は壺の底部。底面はほぼ平坦で、端部は鋭く稜を有す。底部から胴部へは緩やかに湾曲し、外面の底部と胴部の境目は不明瞭である。内面はナデで縦方向の板状工具痕が残る。外面は底部付近が横ヘラミガキ、それより上は縦ヘラミガキ。底面はナデ。底径6.6cm。

甕（4～6） 4～6は如意形口縁の甕。4は胴部下半が直線的に開き、口縁部付近は直立する。口縁部は短く緩やかに外反し、端部は器壁が薄く尖り気味に仕上げる。外面口縁部



第124図 108～110号土坑実測図（1/40）

下のやや高い位置に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面粗い縦ハケ目。口径24.2cm。5は胴部上半が開き気味に立ち上がり、口縁部は短く緩く外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径27.3cm。6は口縁部付近が直立し、口縁部は短く外反して端部を丸くおさめる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径29.1cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期初頭に比定できる。

110号土坑（図版34、第124図）

108号土坑の南西側に位置する長方形の土坑で、北側を65号竪穴住居跡に切られる。長軸215cm、短軸60cm、底面は南側がやや深く、深さ45cmを測る。底面の北側からは河原石をまとめて検出した。

出土遺物には図示した土器の他、178の石包丁未製品が出土している。

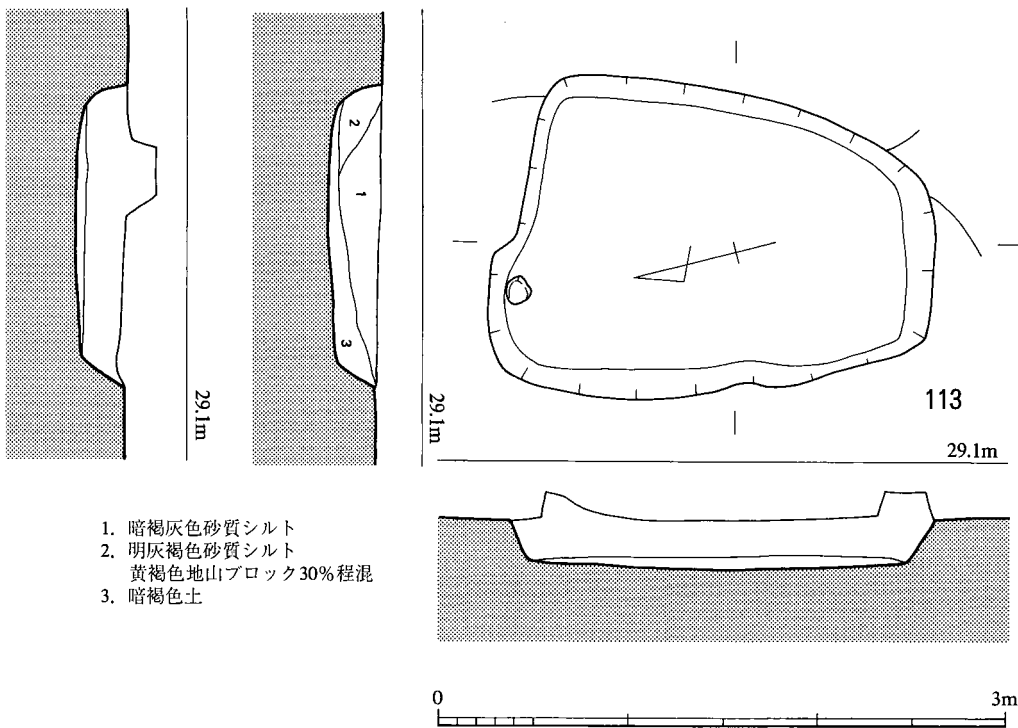
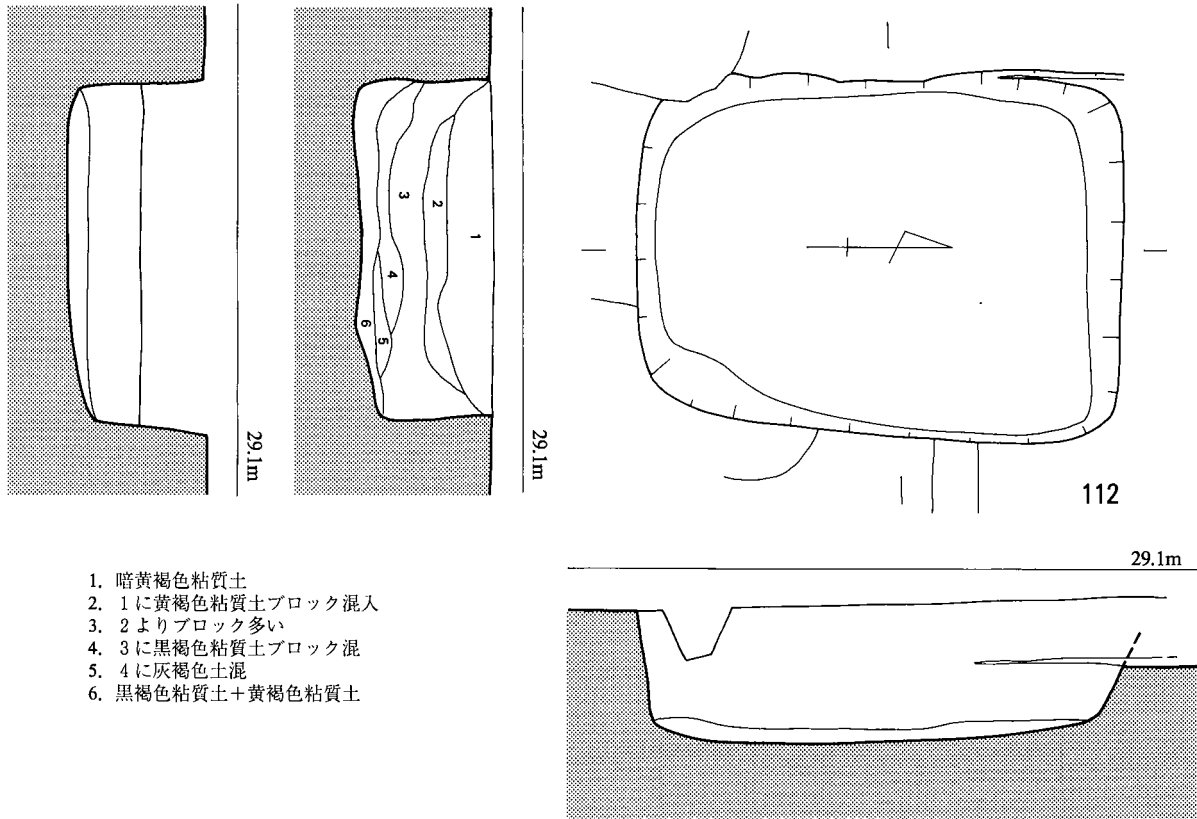
出土土器（図版63、第123図）

甕（7～18） 7～15は逆L字状口縁となる甕。7は口縁部付近が直立し、口縁部はほぼ水平に伸びる。胴部の器壁は非常に薄い。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。8は口縁部付近がやや内傾し、口縁部は三角形に近い逆L字状になる。上面はやや内傾し、内端には鋭い稜を有す。全面ナデ調整。9は口縁部付近が内傾し、口縁部は三角形に近い逆L字状となる。口縁部上面はほぼ水平に伸び、内端は鋭い稜を有す。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.0cm。10は口縁部付近が直立し、口縁部上面はほぼ水平に伸び、内面は鋭く突出する。外面は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。口径27.6cm。11は口縁部付近がやや内傾し、口縁部はほぼ水平に伸びる。内端は丸く稜をもたず、口縁外側は器壁が薄く、端部は丸く仕上げられる。風化が著しく調整は不明。口径28.3cm。12は胴部上半が内傾し、口縁部上面はやや内傾する。内端は鋭く突出し、外端は丸くおさめられる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は風化が著しく調整不明。口径29.6cm。13は胴部上半が直立し、口縁部は水平に伸び、内面は三角形状に突出し、外端は面取りして四角くおさめる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口径30.5cm。14は胴部上半が直立し、口縁部は水平に伸びる。内面は三角形状に突出し、外端は丸くおさめる。口縁部外面には指圧痕が明瞭に認められる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径30.6cm。

15は大型の甕である。口縁部付近は内傾し、口縁部は短く直角に外折する。内端は明瞭な稜を有し、外端は面取りして四角くおさめる。外面の口縁部下には一条の低い三角突帯を巡らす。風化が著しく調整は不明。口径48.7cm。

16～18は甕の底部。16は大型甕の底部である。底面は上げ底となり端部は明瞭な稜をなす。底部外面は直立する。底面の器壁はそれほど厚くならない。内面ナデ、外面細かい縦ハケ目、底面ナデ。底径12.1cm。17は底面が平坦で端部は明瞭な稜を有す。底部外面は直立する。風化が著しく調整は不明。底径5.7cm。18は底面が上げ底となり端部は明瞭な稜を有してシャープに作られる。底部外面はやや外傾気味に立ち上がる。内面ナデ、外面にはわずかに縦ハケ目が観察される。底面はナデ。底径6.4cm。

蓋（19） 19は甕蓋の裾部。大きく開き、端部を面取りして四角くおさめる。外面は風化が著しく調整不明。内面には横方向のヘラミガキが認められる。裾部径30.4cm。



第125図 112・113号土坑実測図 (1/40)

出土土器から当土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

112号土坑（図版34、第125図）

108号土坑の南東側に位置する長方形プランの土坑で、52・70号土坑に切られる。長軸260cm、短軸190cm、深さ75cmを測る。壁は北側がやや緩やかに、それ以外は垂直に近い立ち上がりとなる。

出土遺物には図示した土器の他、182の鉄斧再加工品が出土している。

出土土器（第126図）

甕（1～4） 1は如意形口縁の甕。口縁部が緩く外反する。全面横ナデを行う。2・3は三角口縁の甕。2は上面がほぼ水平に伸びる。全面横ナデ調整。3は口縁部上面がやや内傾し、内端は鋭く稜をもつ。全面横ナデ調整。4は甕の底部。底面は大きく上げ底となり、端部は比較的シャープに仕上げる。全面ナデ調整。底径5.9cm。

器台（5） 5は器台の裾部。端部は丸く仕上げられる。裾部径9.8cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

113号土坑（図版35、第125図）

調査区中央からやや北寄りに位置する土坑で、64号竪穴住居跡、104号土坑に切られる。長軸235cm、短軸170cmを測り、不整長方形プランとなる。底面はほぼ水平で、深さ40cmを測る。

出土土器（第125図）

甕（6・7） 6は如意形口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部は短く緩やかに外反する。端部は丸くおさめる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。7は逆し字状口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部はほぼ水平に伸びる。内端は明瞭な稜を有す。口縁部横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。

出土土器のうち、6は弥生時代中期初頭に、7は中期前半に比定できる。当土坑の時期は弥生時代中期前半としておきたい。

114号土坑（第127図）

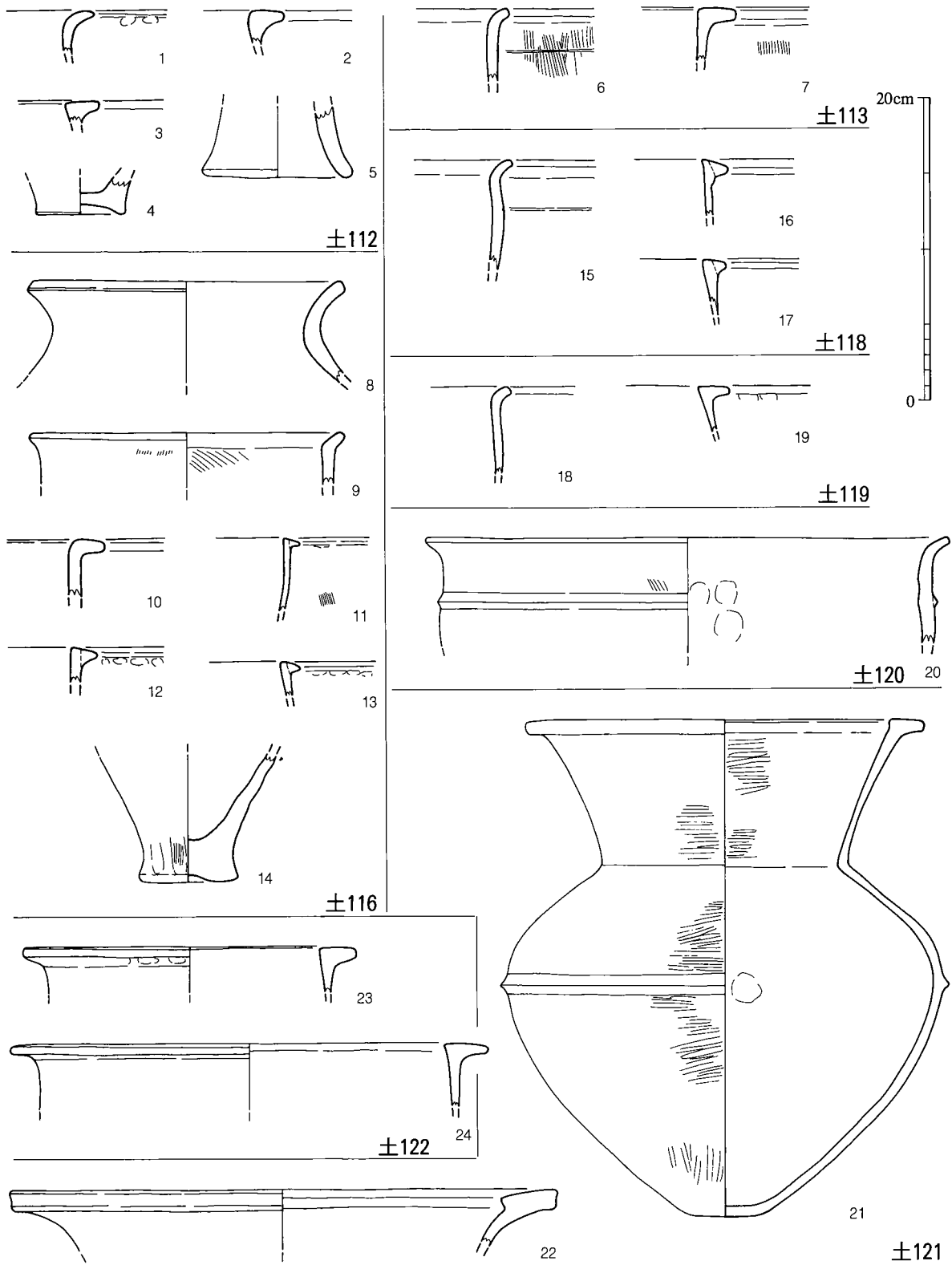
調査区中央からやや東寄りに位置する長方形の土坑で、長軸150cm、短軸125cmを測る。土坑内部は北側にテラス状の段を有しており、ここまでの深さは25cm、底面はほぼ水平で、深さは35cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。遺物はほとんど出土せず、図示できるものはない。

115号土坑（第127図）

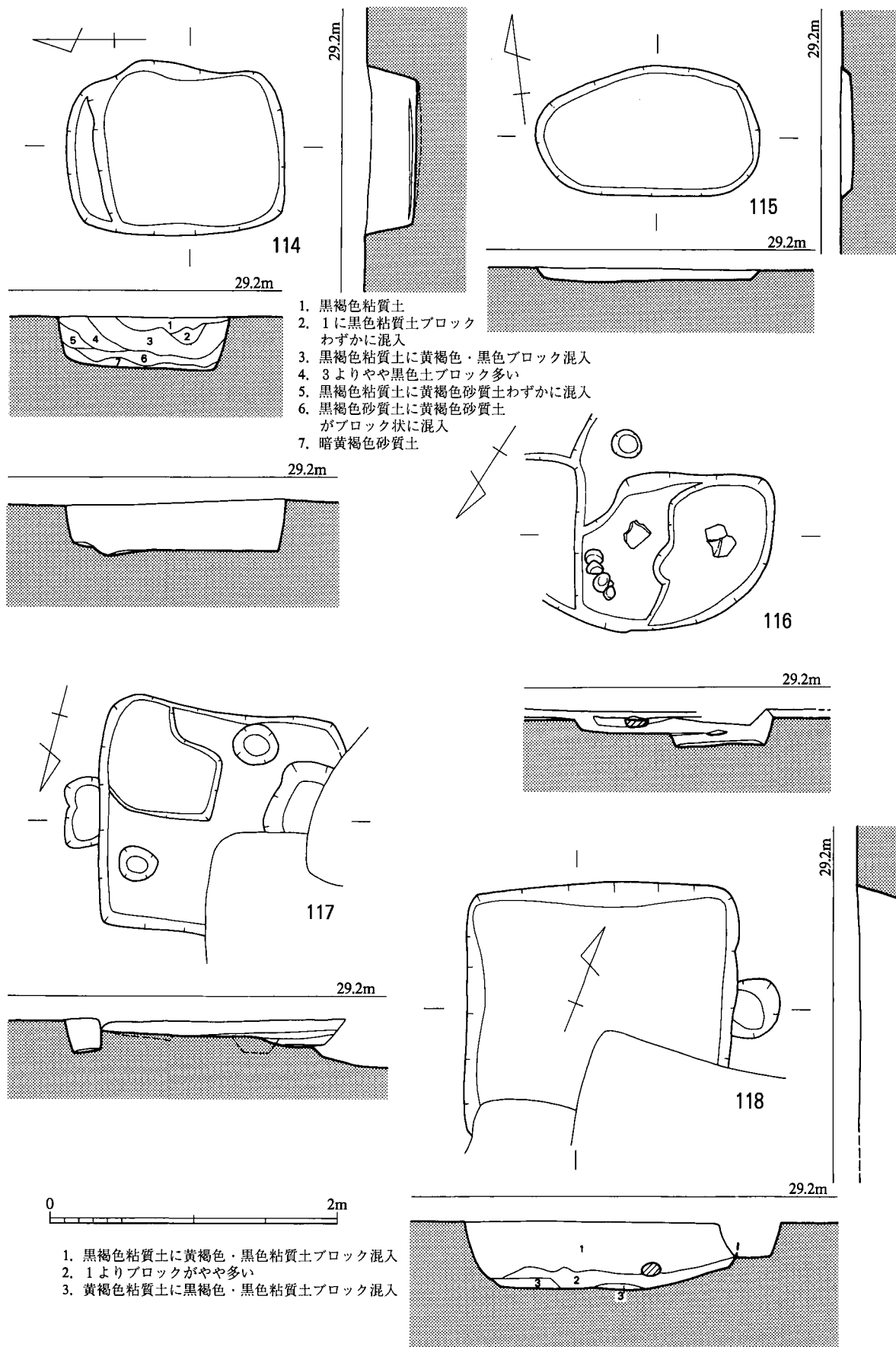
114号土坑の南側に位置する楕円形の土坑で、73号竪穴住居跡、116号土坑を切る。長軸155cm、短軸95cmと小型のものである。底面はほぼ水平で、深さ7cmと非常に浅い。遺物は非常に少なく、図示できるものはない。

116号土坑（図版35、第127図）

115号土坑の南側に位置し、73号土坑を切り、115号土坑に切られる不整形の土坑である。重複が著しいために本来のプランは明確ではなく、現状では長軸135cm、短軸115cmを測る。土坑内部は北



第126图 112·113·116·118~122号土坑出土土器实测图 (1/4)



第127図 114~118号土坑実測図 (1/40)

東側が一段高くなっており、深さ10cm、南東側で深さ20cmを測る。

出土土器（第126図）

壺（8） 8は肩部が内傾し、口縁部が外反して開く壺で、口縁部の開きは弱い。端部は面取りして四角くおさめる。風化が著しく調整不明。口径20.9cm。

甕（9～14） 9は胴部上半が直立し、口縁部が短く緩く外反する。端部は丸く、屈曲部内面には不明瞭な稜を有す。口縁部は横ナデ、胴部内面は板状工具による斜ナデ、外面はナデ。口径20.8cm。10は口縁部付近が直立し、口縁部は直角に外折し、端部は丸くおさめる。全面横ナデ調整を行う。11は非常に器壁が薄く、小型になると思われる。胴部上半は直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面はやや外傾する。口縁部は横ナデ、胴部内面は風化が著しく調整不明。外面は細かい縦ハケ目。12は口縁部付近が直立し、口縁部はシャープな三角口縁となる。上面は直線的に外傾し、内端は鋭い稜を有す。口縁部外面には指圧痕が認められる。内面ナデ、外面横ナデ調整。13は胴部の口縁部付近が内傾し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は外傾し、内端は鋭い稜を有す。外面には指圧痕が認められる。全面ナデ調整。

14は甕の底部。底面は中央付近が窪み、裾はやや開く。胴部はあまり開かず直線的に伸びる。胴部内面ナデ、外面は風化が著しく調整不明、底部外面は指によるナデ整形後に縦ハケ目、底面はナデ。底径6.6cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期初頭に比定できる。

117号土坑（図版35、第127図）

115号土坑の北東側に位置する方形の土坑で、西側を124号土坑土坑に切られる。ほぼ一辺170cm程度の正方形プランになるだろう。底面はやや不整形となるが西側が最も深く、20cmを測る。出土遺物は少なく図示できる土器はないが、151の挟入片刃石斧が出土している。

118号土坑（図版35、第127図）

117号土坑の北西側に位置し、117・124号土坑に切られる土坑である。南壁を完全に失うが、一辺190cm前後の正方形プランになるだろう。底面は西側が最も深く、50cmを測る。壁はやや急な立ち上がりとなる。

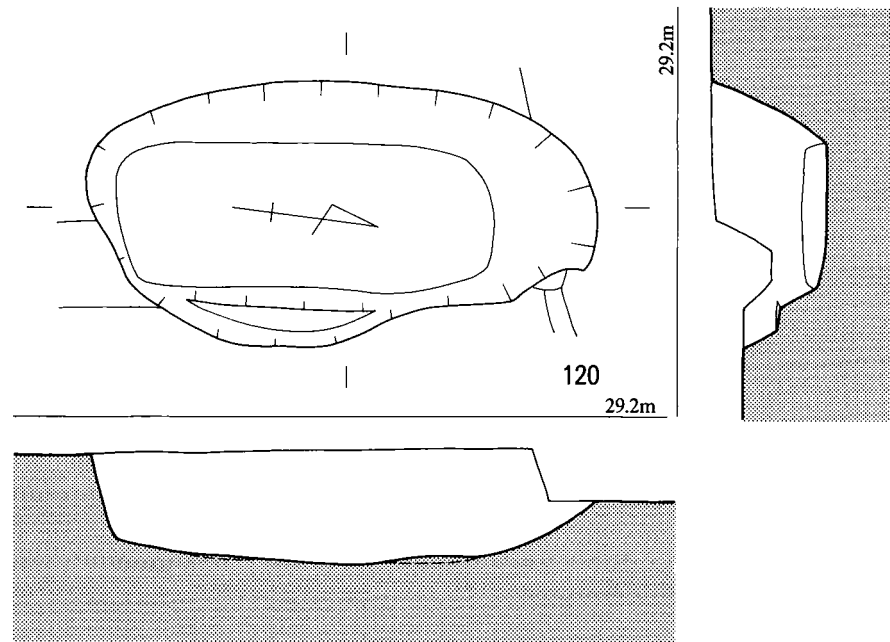
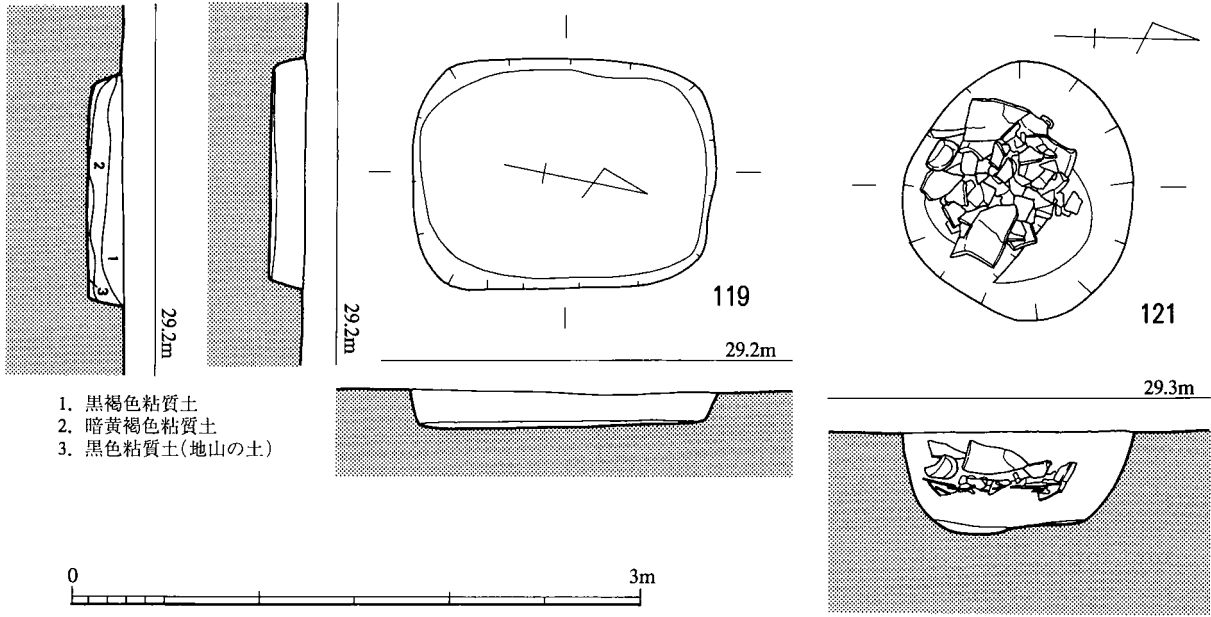
出土土器（第126図）

甕（15～17） 15は胴部上半が直立し、口縁部は短く緩く外反する。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。器表の風化が著しく調整は不明。16は胴部上半が直立し、口縁部は三角口縁となる。上端は鋭く稜を有す。風化が著しく調整は不明。17は口縁部付近がやや内傾し、口縁部は三角口縁となる。上端は鋭い稜を有す。

出土土器から当土坑は弥生時代中期初頭に比定できる。

119号土坑（図版36、第128図）

118号土坑の北東側に位置する長方形の土坑である。長軸160cm、短軸120cm、底面はほぼ水平で、深さ20cmを測る。壁は急角度で立ち上がる。



第128図 119～121号土坑実測図 (1/40)

出土土器 (第126図)

甕 (18・19) 18は胴部上半が直立し、口縁部が短く外反する。端部は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。19は胴部の口縁部付近が内傾し、口縁部は逆L字状をなす。内端は明瞭な稜を有し、外端は丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。

出土土器のうち、18は弥生時代中期初頭に、19は中期前半に比定される。当土坑の時期は弥生時代中期前半としておきたい。

120号土坑 (第128図)

調査区中央に位置し、54・56号竪穴住居跡の下層で検出した土坑である。検出面では長軸270cm、

短軸140cmの楕円形状を呈す。底面は長軸200cm、短軸75cmの長方形を呈す。底面は中央付近が最も深く、60cmを測る。壁は南側が急な、それ以外は緩やかな立ち上がりとなる。

出土土器（第126図）

甕（20） 20は胴部上半が直立し、口縁部が緩く外反する。口縁部は胴部に比べて器壁が薄く作られ、端部は丸くおさめられる。外面口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデで一部指圧痕が認められる。外面はわずかに縦ハケ目が観察される。口径34.5cm。

出土土器から当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定できる。

121号土坑（図版34・36、第128図）

調査区中央から北寄りに位置する径60cmを測る円形の小型の土坑である。底面は南側が最も深く、30cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。土坑内からは土器がまとまって出土したが、底面から10cm程浮いた状態である。

出土土器（図版63、第126図）

壺（21・22） 21は完形の壺。底部は小さく丸味を帯び、不安定な形状となる。胴部は最大径が中位よりやや上にあり、その部分に三角突帯を巡らす。頸部はあまり締まらず、口縁部は大きく直線的に開く。口縁端部は短く未発達な鋤先口縁となる。上面はわずかに外傾し、内端はわずかに突出する。口縁部は内外面横ヘラミガキ、胴部は内面ナデ、外面横ヘラミガキ、底部外面は縦ヘラミガキ、底面はナデ。口径26.4cm、頸部径16.4cm、胴部最大径29.7cm、器高32.6cm。器壁は全体的に薄く作られる。22はやや大型の壺。口縁部は外反しながら大きく開き、口縁部は未発達な鋤先口縁となる。上面は直線的に内傾し、内端は三角形に突出する。外端は面取りして四角くおさめる。風化が著しく調整は不明。口径36.0cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

122号土坑（図版36、第129図）

114号土坑の西側に位置する土坑で、73号竪穴住居跡と重複し、これを切っている。長軸300cm、短軸210cmを測り、南壁がやや崩れるものの、長方形プランに復元できる。底面はほぼ水平で、深さ25cmを測る。

出土土器（第126図）

甕（23・24） 23・24はどちらも逆L字状口縁となる甕。23は口縁部付近が直立し、口縁部上面は水平に伸びる。内端は鋭い稜を有す。外面口縁部下に指圧痕が認められる以外は風化が著しく調整不明となる。口径21.9cm。24は胴部上半が直立し、口縁部上面はわずかに外傾する。内端はわずかに突出し、外端は丸くおさめられる。風化が著しく調整不明。口径31.6cm。

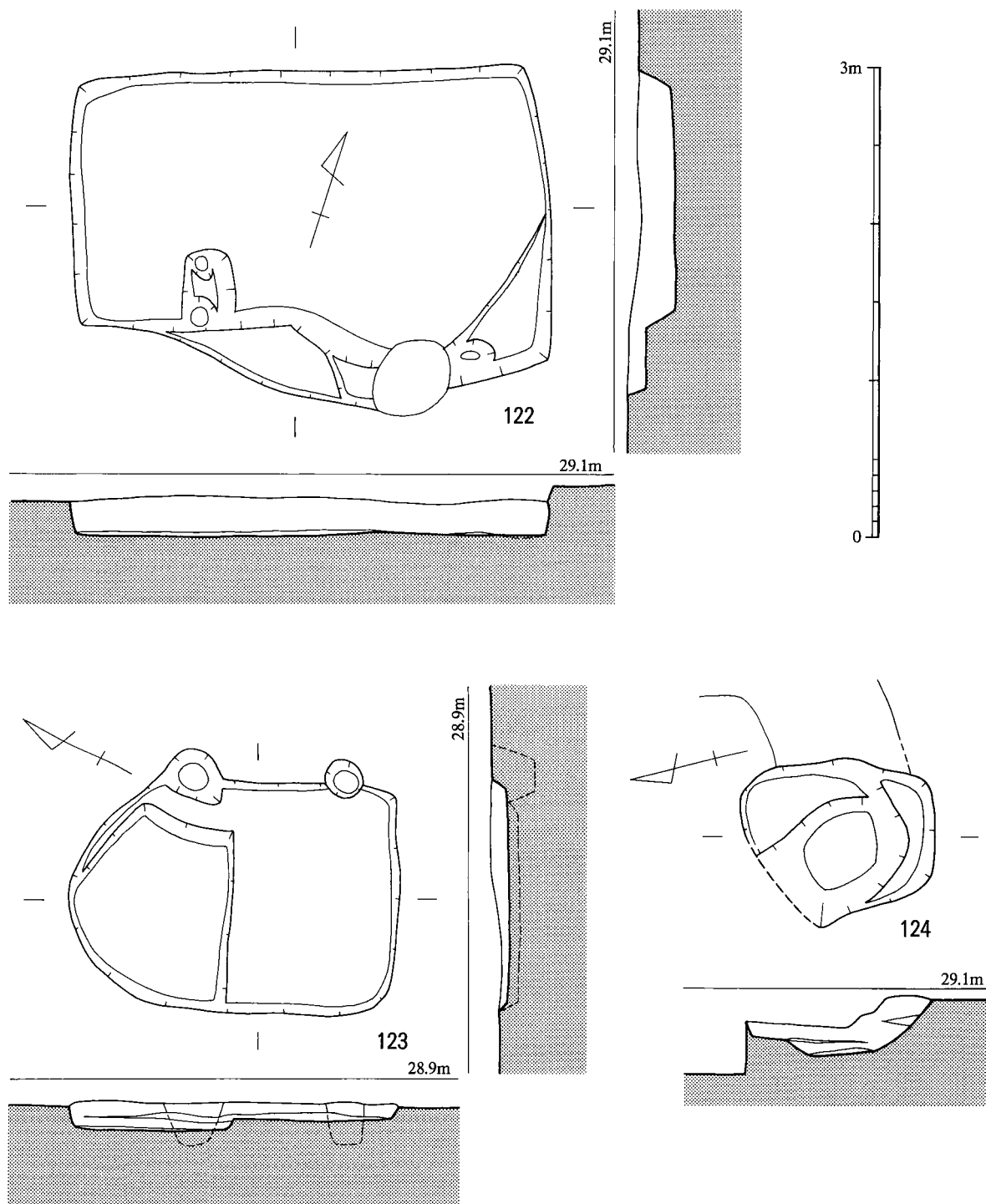
出土土器から当土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

123号土坑（図版37、第129図）

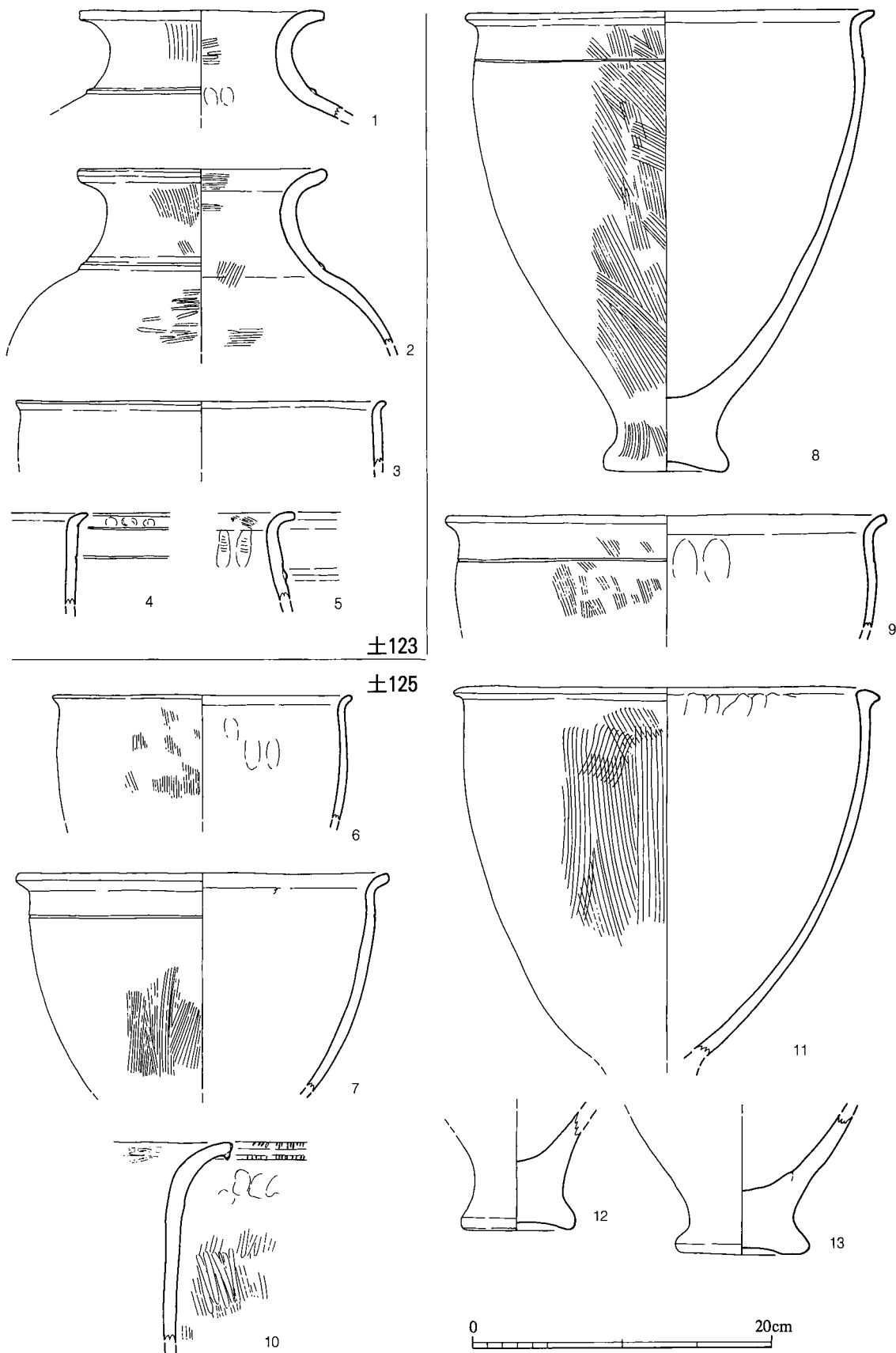
106号土坑の南側に位置し、65号竪穴住居跡の下層で検出した土坑である。長軸210cm、短軸145cmを測り、不整長方形プランを呈す。底面は北側が一段深くなっており20cmを測るが、それ以外はおおよそ深さ10cmを測る。

出土土器（第130図）

壺（1・2） 1は頸部が内傾し、口縁部は大きく外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面の頸肩境には一条の三角突帯を巡らす。内面には突帯貼付の際の指圧痕が残る。口縁端部は横ナデ、口縁部内面は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ目が観察される。外面には一部化粧土が残る。口径16.3cm。2は肩部が丸味を帯び、頸部は内傾して口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。外面の頸肩境には一条の非常に低い突帯を巡らす。口縁端部は横ナデ、口縁部内面は横ヘラミガキ、



第129図 122～124号土坑実測図（1/40）



第130图 123·125号土坑出土土器实测图(1/4)

外面は縦ハケ目、肩部は内外面横ヘラミガキを行う。口径16.6cm。

甕（3～5） 3～5は如意形口縁の甕。3は口縁部付近が直立し、口縁部は非常に短く外反する。端部は丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。口径24.7cm。4は胴部上半が直立し、口縁部は非常に短く外反し、端部は尖り気味に仕上げる。口縁部外面には屈曲の際の指圧痕が残る。外面口縁部下に二条の沈線を巡らす。風化が著しく器表の調整は不明。5は胴部上半がやや内傾し、口縁部は短くやや強く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。外面の口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ハケ目後横ナデ、胴部内面はナデで上方には指圧痕が残る。外面は風化が著しく調整不明。

出土土器から当土坑は弥生時代中期初頭に比定できる。

124号土坑（図版35、第129図）

117・118号土坑の南側で検出した土坑である。当初個別の土坑と認識できず、117・118号土坑を掘り下げる途中で確認したため、北半部を掘り過ぎてしまった。重複の先後関係はこの124号土坑が最も新しい。遺存する部分で判断すれば、長軸130cm、短軸100cmの不整楕円形プランとなる。底面までの深さは35cmを測り、壁はテラス状の段を有しながらすり鉢状に落ち込んでいる。遺物は若干出土したが、図示できたものはない。

125号土坑（図版37、第131図）

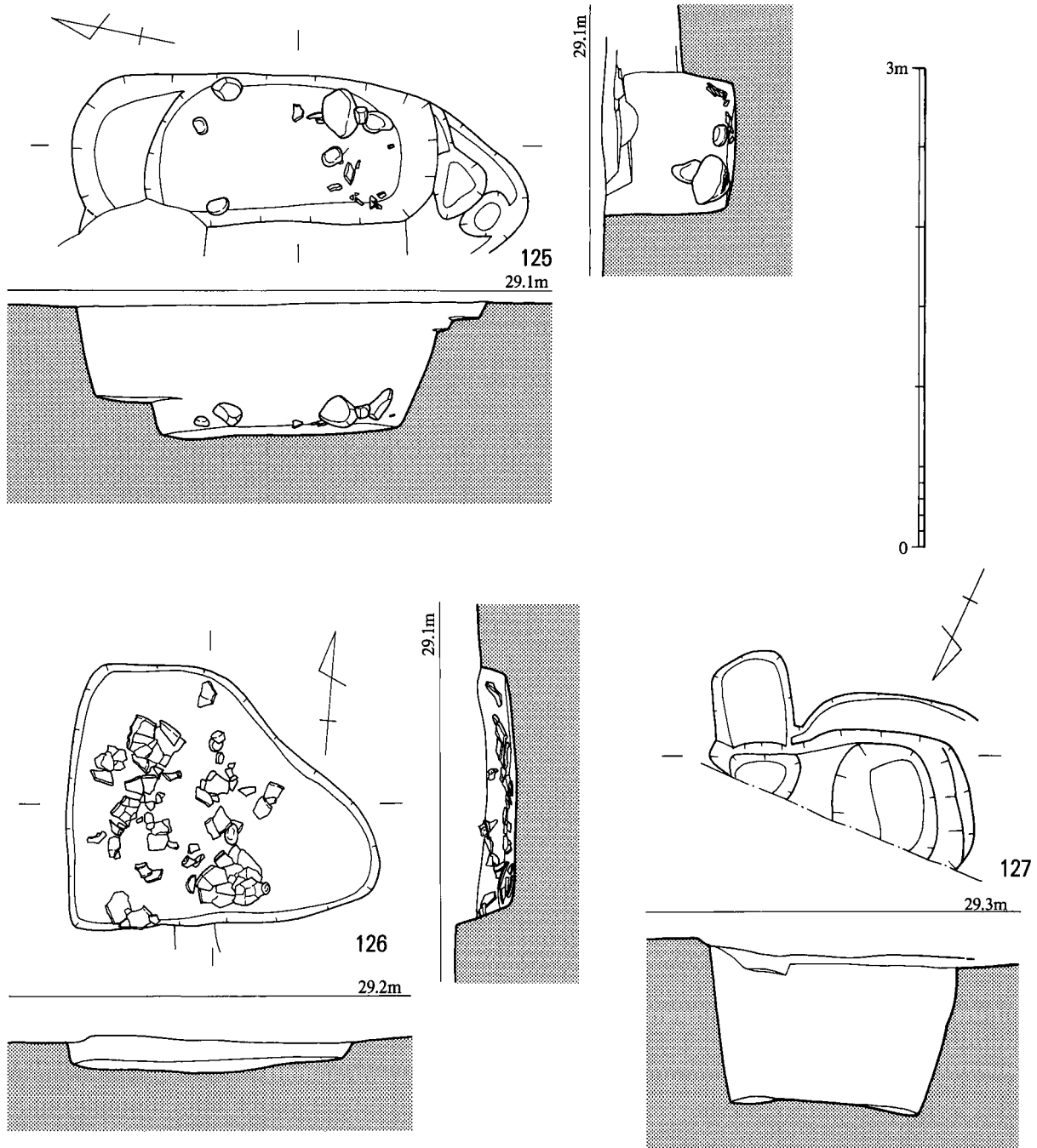
104号土坑の南側に位置し、これに切られる土坑である。付近は幾つかの土坑が重複しておりプランを不明確なものとしているが、現状では長軸280cm、短軸90cmを測り楕円形を呈す。底面は長軸150cm、短軸75cmの隅丸長方形となる。底面はほぼ水平で、深さ80cmを測る。底面付近からは土器片とともに幾つかの河原石が出土した。

出土遺物には図示した土器の他、30の砥石、105の使用痕ある剥片、134の磨製石剣が出土している。

出土土器（図版64、第130図）

甕（6～13） 6～10は如意形口縁の甕。6は胴部上半が直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は短く緩く外反し、端部を丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径20.0cm。7は口縁部付近が直立し、口縁部は短く外反する。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径24.8cm。8は完形品。底部は高く底面がやや上げ底となる。裾は短く開き、端部は丸くおさめる。胴部は上半が直立し、口縁部は短く強く外反し、端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部は外面斜ハケ目、内面ナデ、底面はナデ調整を行う。口径27.4cm、底径8.4cm、器高30.8cm。9は胴部上半が直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は短く緩く外反し、端部を丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデで上方には指圧痕が残る。外面は縦ハケ目。口径29.4cm。10は或いは甕ではないかもしれない。胴部は全く丸味を帯びず直立し、口縁部は大きく外反する。口縁部は下端がやや突出し、上下端に小さな刻目を施す。口縁部外面は横ナデ、内面は横ヘラミガキ、胴部外面は縦ヘラミガキ、内面はナデ。

11は三角口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。口縁部外面は横ナデ、



第131図 125～127号土坑実測図 (1/40)

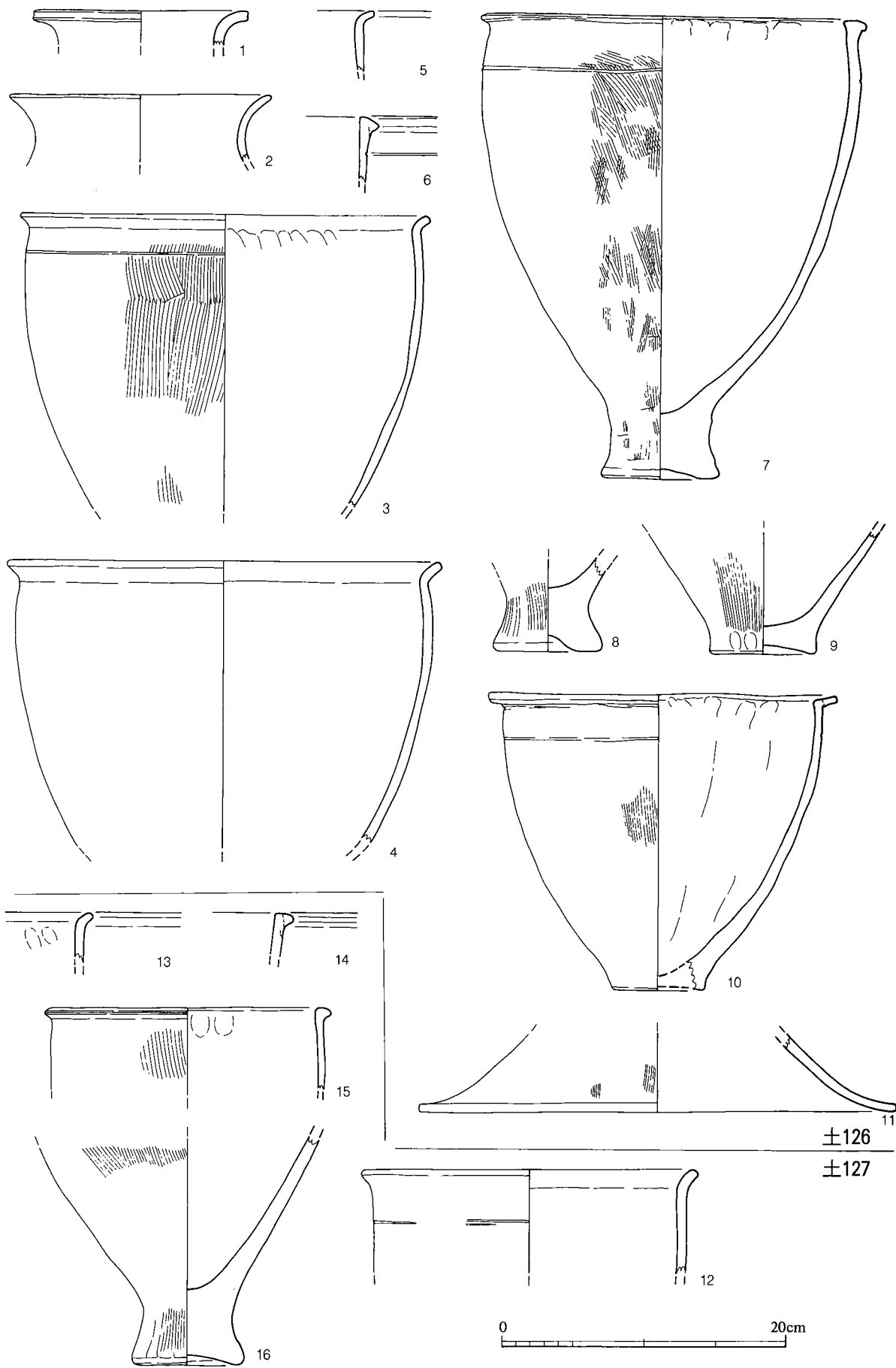
内面は指オサエ、胴部内面はナデ、外面は粗い縦ハケ目。口径26.6cm。

12・13は甕の底部。12は底面がやや上げ底となり、裾が開き、端部を丸くおさめる。風化が著しく調整不明。底径7.6cm。13は底面が若干上げ底となり、裾が大きく短く開き、端部は丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。底径9.0cm。

出土土器のうち、10は古相を示すと思われるが、それ以外は弥生時代中期初頭に比定できる。

126号土坑 (図版37、第131図)

125号土坑の北西側に位置し、62・64号土坑の下層で検出した不整形の土坑である。長軸190cm、



第132图 126·127号土坑出土土器实测图 (1/4)

短軸165cm、底面は中央がやや深く、25cmを測る。土坑内からは多くの遺物が底面から若干浮いた状態で出土した。

出土遺物には図示した土器の他、37の砥石、93のスクレイパー、180の石包丁未製品が出土している。

出土土器（図版64、第132図）

壺（1・2） 1は小型の壺。口縁部が大きく外反し、端部は面取りして四角くおさめる。風化が著しく器壁の調整は不明。口径15.0cm。2もやはり口縁部が外反し、端部は丸くおさめる。1と比べて外反度は強くない。風化が著しく調整は不明。器壁はやや薄い。口径18.4cm。

甕（3～9） 3～5は如意形口縁の甕。3は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデで上方には指圧痕が残る。外面は縦ハケ目。口径28.8cm。4は胴部上半が直立し、口縁部付近が内傾して胴部が丸味を帯びる。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。口径30.5cm。5は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。端部は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。

6・7は三角口縁の甕。6は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。外面口縁部下に一条の沈線を巡らす。風化が著しく調整不明。7は完形品。底部は高く、底面は中央がやや窪み、裾が開き、端部はシャープに仕上げる。胴部上半はわずかに内傾し、口縁部は小さな三角口縁となる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部外面は横ナデ、内面には指圧痕が残る。胴部内面はナデ、外面は雑な縦ハケ目、底面はナデ。口径28.0cm、底径8.2cm、器高32.7cm。

8・9は甕の底部。8は底部中央が深く窪み、裾が開き、端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.6cm。9は底部が厚くならない。底面はやや上げ底となり、端部は比較的シャープにおさめる。裾は開かず底部が短く直立する。胴部は直線的に開く。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目、底部外面は指オサエ、底面はナデ。底径7.6cm。

鉢（10） 10は器高の高い鉢。底部は薄く、やや上げ底になると思われる。底端部は明瞭な稜線を有し、胴部は丸味を帯びて、胴部上半は直立気味に立ち上がる。口縁部は直角近く外折する。上面はやや内傾し、内端は丸味を帯びるものもしっかりとした稜を有す。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、内面の口縁部下には指圧痕が認められる。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径24.4cm、底径6.4cm、器高20.9cm。

蓋（11） 11は器高の高い甕の蓋であろう。体部下半が直線的に開き、裾がやや開く。端部は丸くおさめる。風化が著しいが、外面にはわずかに縦ハケ目が認められる。端部径33.7cm。

出土土器のうち、9や10は新しい様相を認めうるが、全体的に見れば弥生時代中期初頭に比定できるものである。

127号土坑（第131図）

調査区中央の北端に位置する土坑で、北側は調査区外へと続くため全体の形状は不明である。検出した範囲から推察すると、長軸170cm、短軸90cmの長方形となろうか。底面は西側がやや深くなっており、深さ100cmを測る。壁は垂直に近い立ち上がりとなる。

出土土器（図版64、第132図）

甕（12～16） 12・13は如意形口縁の甕。12は胴部上半が直立し、口縁部は短く緩く外反する。外

面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。風化が著しく調整不明。口径23.6cm。13もやはり口縁部付近が直立し、口縁部は短く緩く外反する。内面には指圧痕が認められる。風化が著しく調整不明。

14・15は三角口縁の甕。14は口縁部付近がやや外傾し、口縁部は小さな三角口縁となる。風化が著しく調整不明。15は胴部上半が直立し、口縁部は小さく形の整った三角口縁となる。口縁部外面は横ナデ、内面は指圧痕が残る。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径20.1cm。

16は甕の底部。底部は高く、底面はやや上げ底となり、裾がやや開いて端部は丸くおさめる。胴部下半は直線的に開く。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目、底面はナデ調整を行う。底径7.8cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期初頭に比定できる。

128号土坑（図版38、第133図）

64号竪穴住居跡、104・113号土坑の下層で検出した長方形の土坑である。長軸260cm、短軸120cmを測る。底面は中央からやや東に寄った位置に不整形の掘り込みがあり、ここまでの深さは135cm、西側は深さ100cmを測る。壁は垂直に近い立ち上がりとなる。遺物は上層にも多く出土したがまとまった状況ではなく、下層からは図示した様に東側から流入した状態でまとまって出土した。

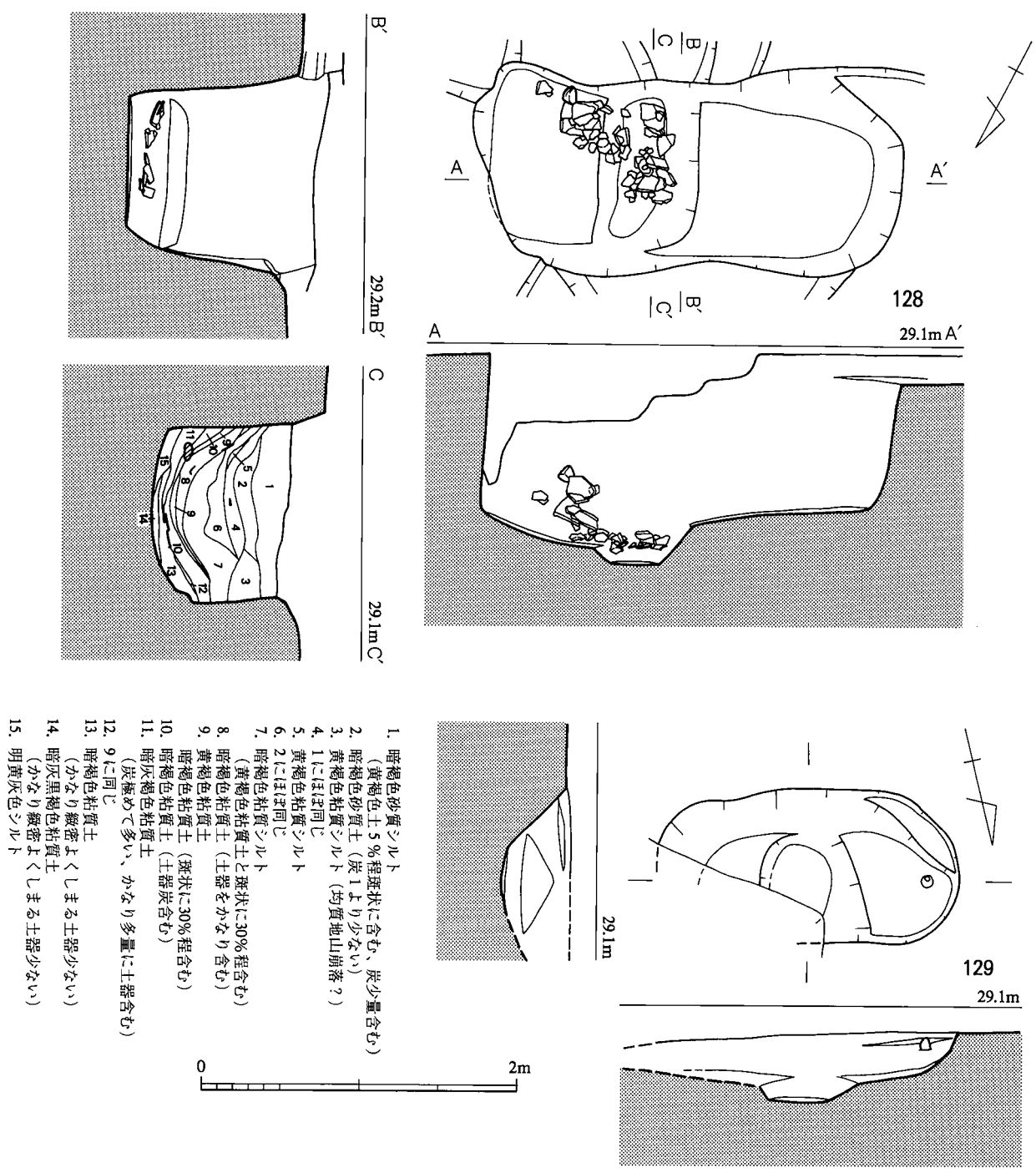
出土遺物には図示した土器の他、167の石包丁、181の石包丁未製品が出土した。

出土土器（図版65、第134・135図）

壺（1～4） 1は口縁部が大きく外反し、上面はほぼ水平になる。端部は面取りして四角くおさめる。内外面風化が著しく調整不明。口径15.1cm。2は胴部が球形で最大径が中位にある。肩部から頸部にかけて強く内傾し、口縁部は大きく開く。端部は丸くおさめる。外面の頸肩境に一条の三角突帯を巡らす。内面及び口縁部外面は風化が著しく調整不明、頸部外面横ヘラミガキ、胴部外面横ヘラミガキを行う。口径16.2cm、胴部最大径24.2cm。3は肩部があまり張らず丸味を帯び、頸部は内傾して口縁部が外反する。口縁端部は丸くおさめる。外面の頸肩境には一条の三角突帯をめぐらす。口縁部内外面横ヘラミガキ、胴部内外面横ヘラミガキ。口径16.2cm。4は胴部がやや扁平な球形となる。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。端部には一条の沈線を巡らす。口縁部内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目、胴部内面は判然としないがヘラミガキ、外面は細かいハケ目の後に横ヘラミガキを行う。口径19.6cm、胴部最大径29.4cm。

甕（5～16） 5～9は如意形口縁の甕。5は小型の甕である。胴部下半は強くすぼまり、スリムな器形となる。胴部上半は開きながら立ち上がり、口縁部は短く緩く外反する。端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径20.7cm。6もやはり小型の甕。胴部上半は直立し、口縁部は直角に外折し、上面はほぼ水平になる。端部は面取りして四角くおさめ、内端は丸くおさめる。器壁はかなり薄い。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は斜ハケ目。口径23.0cm。7は胴部上半が直立し、口縁部は直角に外折する。上面はわずかに内傾する。端部は面取りして四角くおさめ、内端は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面は横方向の板状工具によるナデ、外面にはかすかに縦ハケ目が認められる。口径28.8cm。

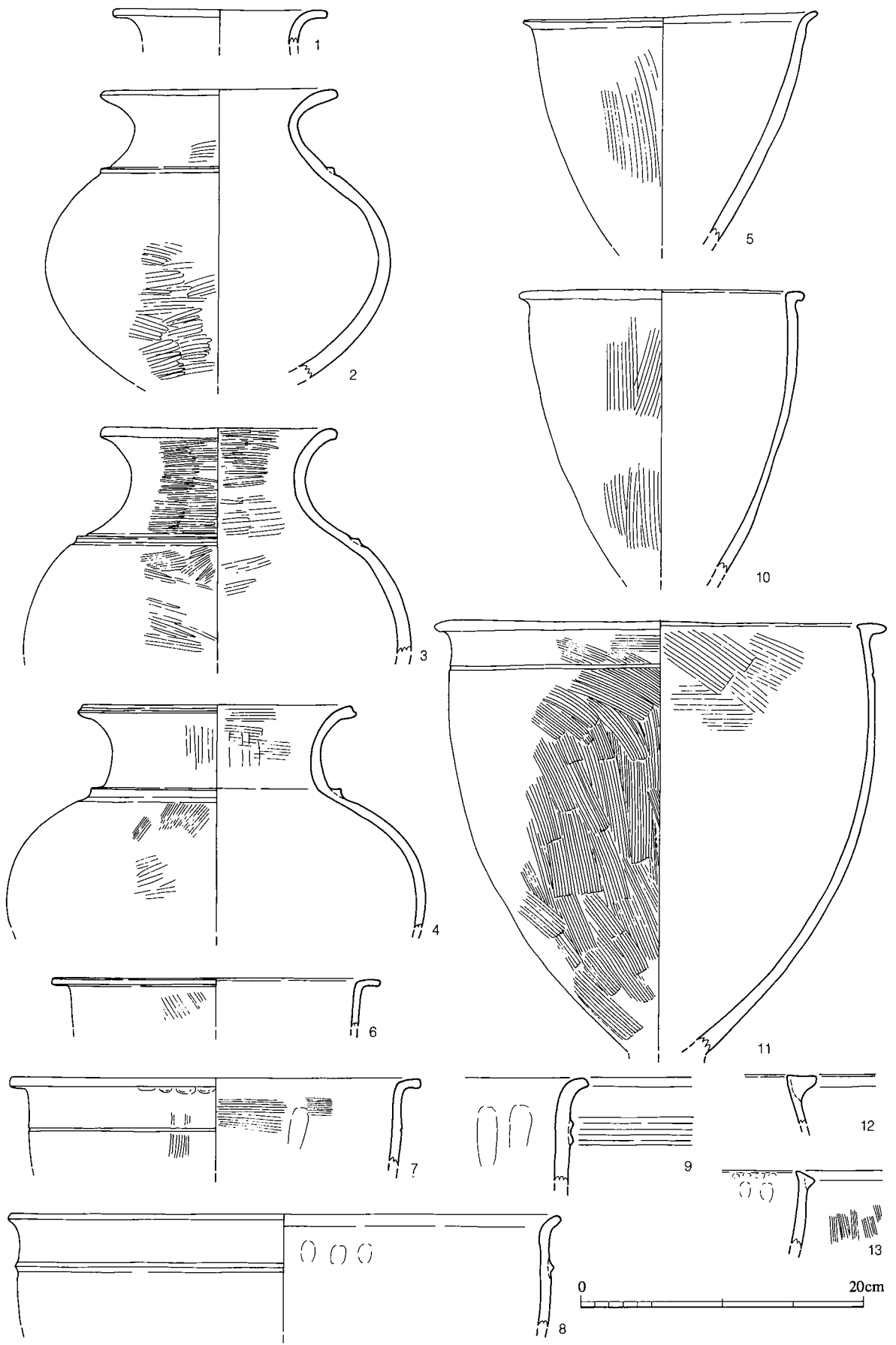
8・9は大型の甕である。8は胴部上半が直立し、口縁部は短く緩く外反する。外面の口縁部下には一条の低い三角突帯を巡らす。全体的に風化が著しく調整は不明瞭だが、内面にわずかに指圧痕が認められる。口径38.9cm。9は口縁部付近が直立し、口縁部は緩く外反する。端部は面取りし



第133図 128・129号土坑実測図 (1/40)

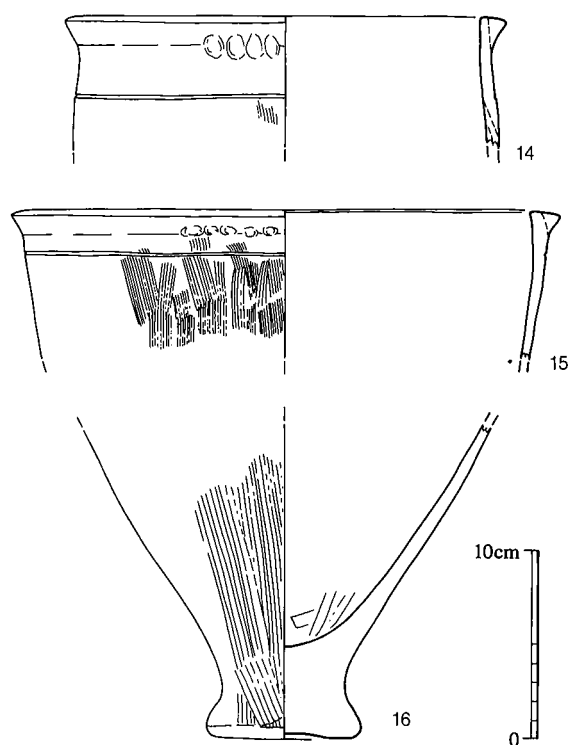
て四角くおさめる。外面の口縁部下には二条の三角突帯を巡らす。全体的に器表の風化が進むが、内面に縦長の指オサエが認められる。

10~15は三角口縁の甕。10は小型の甕で、器高の割には口径が小さく、スリムな器形となる。胴部上半は直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は水平になり、外端は丸くおさめる。口縁部外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径20.1cm。11は胴部上半が直立し、口縁部付近はやや内傾して、胴部が丸味を帯びた器形になる。口縁部は小さな三角口縁となり、上面はほ



第134图 128号土坑出土土器实测图① (1/4)

ほ水平に伸び、内端もわずかに突出する。外端は丸くおさめる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部上半は内面粗いハケ目の後にナデ、外面斜ハケ目、下半は内面ナデ、外面縦ハケ目。口径31.7cm。12は口縁部付近が内傾し、口縁部は形の整った三角口縁となる。上面はほぼ水平になり、内端は鋭い稜を有す。全面横ナデ。13は口縁部付近がやや開き、口縁部は小さな三角口縁となる。口縁部は内端、外端とも鋭い稜を有す。口縁部内面は指オサエ、外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。14は胴部上半がわずかに内傾し、口縁部は形の整った三角口縁となる。上面はわずかに外傾し、内端、外端とも鋭い稜を有す。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。また口縁部外面には指圧痕が明瞭に認められる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径23.3cm。



第135図 128号土坑出土土器実測図② (1/4)

15は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面はほぼ水平になり、内端、外端ともに鋭く稜を有す。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部外面には指圧痕が認められる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径29.0cm。

16は底部が高く、底面はわずかに窪む。裾は大きく開き、端部は丸くおさめる。胴部は直線的に開く。内面ナデ、外面縦ハケ目、内底面には縦方向の工具痕が認められる。底面ナデ。底径7.4cm。

出土土器は全て弥生時代中期初頭としてよいものである。良好な一括資料である。

129号土坑 (図版38、第133図)

調査区中央からやや西寄り、129号土坑の北西に位置する土坑である。北東側を農業用水路により破壊されるが、おおよそ長軸170cm、短軸100cmの楕円形プランに復元できる。土坑内は中央に向かってすり鉢状に窪んでおり、中央付近で深さ45cmを測る。

出土土器 (図版65、第136図)

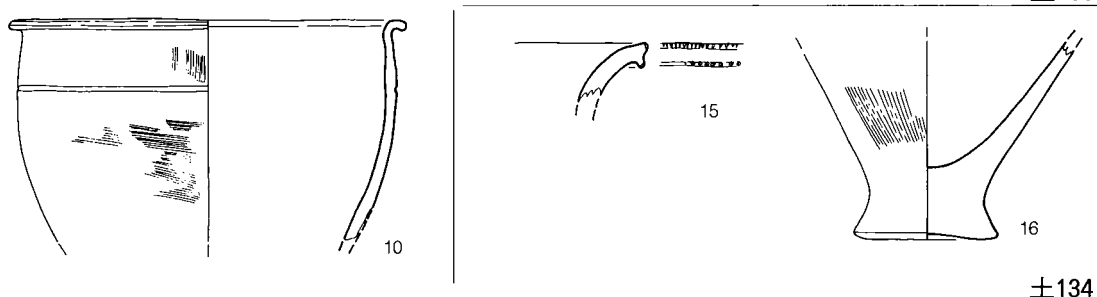
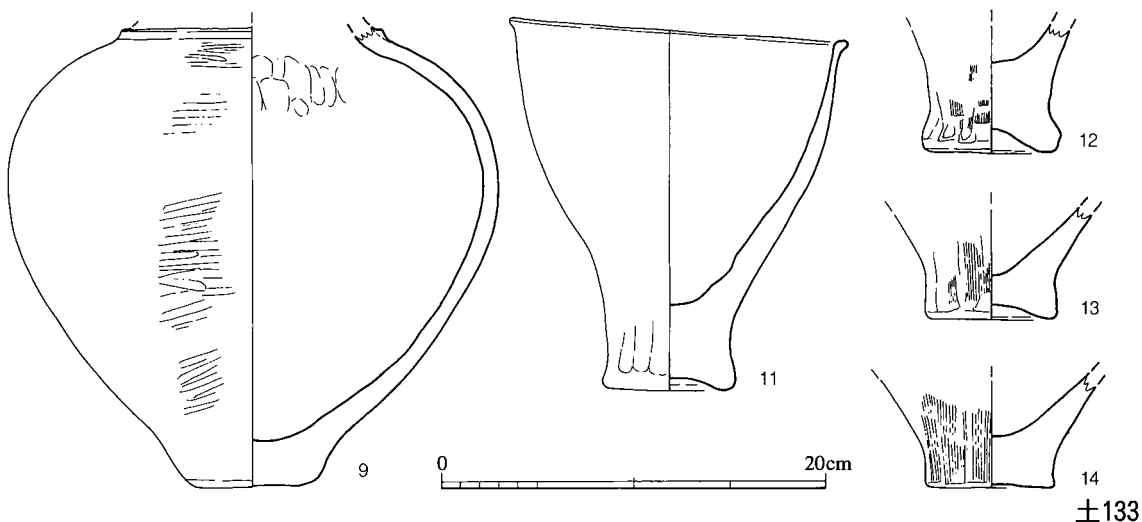
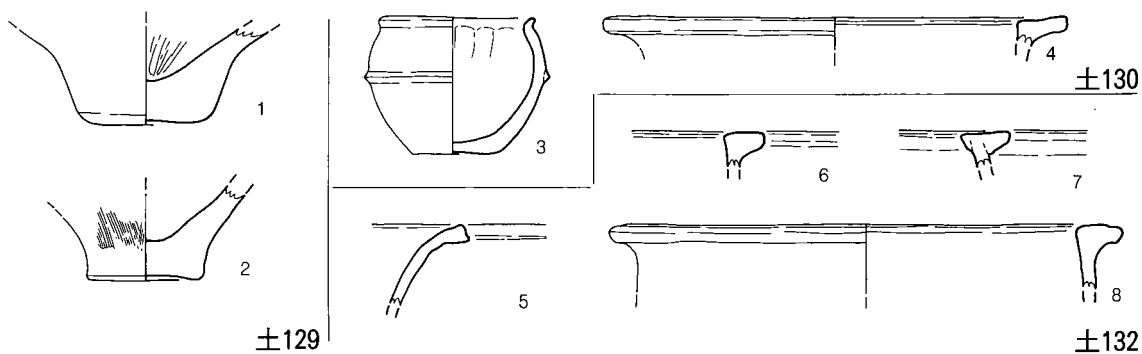
壺 (1) 1は壺の底部。底面は平坦で、端部は丸くおさめ稜をもたない。底面の器壁はかなり厚い。内面はヘラミガキ、外面、底面は風化が著しく調整不明。底径7.2cm。

甕 (2) 2は底部の器壁がやや厚い。底面はほぼ平坦で端部は鋭く稜を有し、底部外面は直立気味に立ち上がる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.2cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期初頭に比定できる。

130号土坑 (図版38)

調査区中央のやや西寄りに位置する土坑である。調査中に不注意により遺構図を作成し忘れてた



第136図 129・130・132～134号土坑出土土器実測図(1/4)

め、遺構図の掲載は行っていない。謹んで反省する次第である。

農業用水路に大きく破壊されるものの、およそ長軸200cm、短軸100cm程度の東西に長い楕円形で、中央に向かってすり鉢状に窪み、深さは50cm程度と記憶している。

出土土器(図版65、第136図)

壺(3・4) 3は小型の短頸壺。底部はほぼ平坦で胴部は球形となる。最大径がほぼ中位にあり、その部分に一条の三角突帯を巡らす。口縁部は短く外反する。口縁部は横ナデ、胴部内面の上半は縦長の指ナデ、下半はナデ、外面はナデを行う。口径8.2cm、胴部最大径8.8cm、底径4.4cm、器高7.2cm。4は壺または甕の口縁部である。上面は水平に伸び、内端は稜を有し外端は面取りを行う。全面風化が著しく調整不明。口径24.4cm。

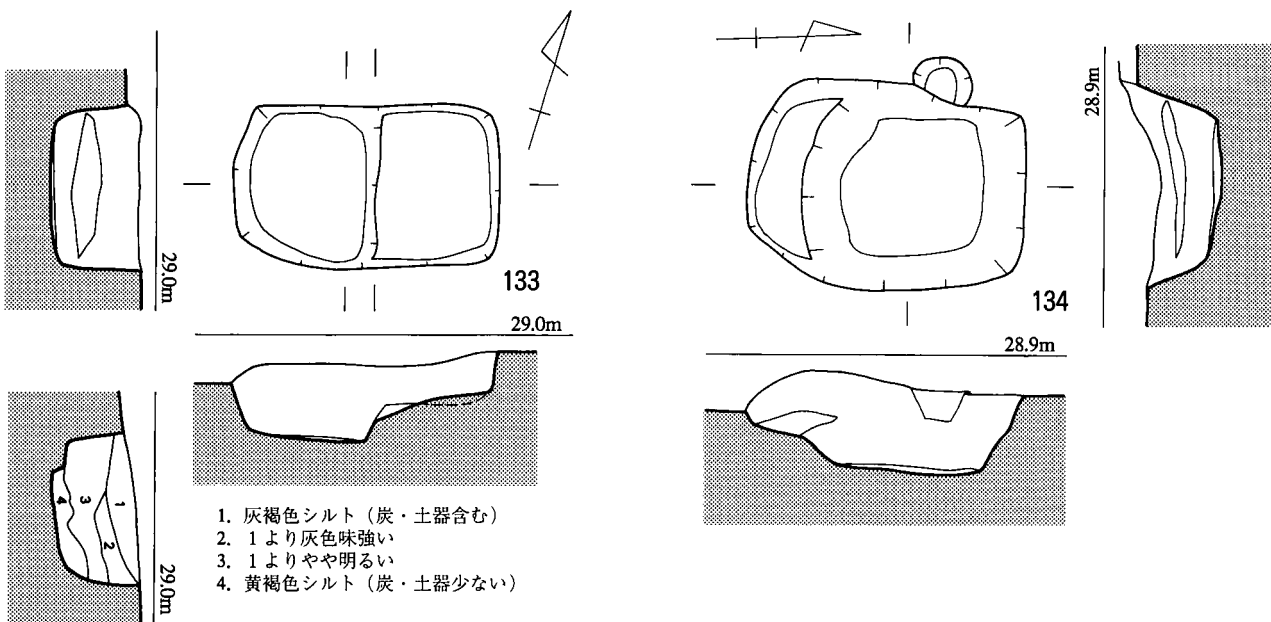
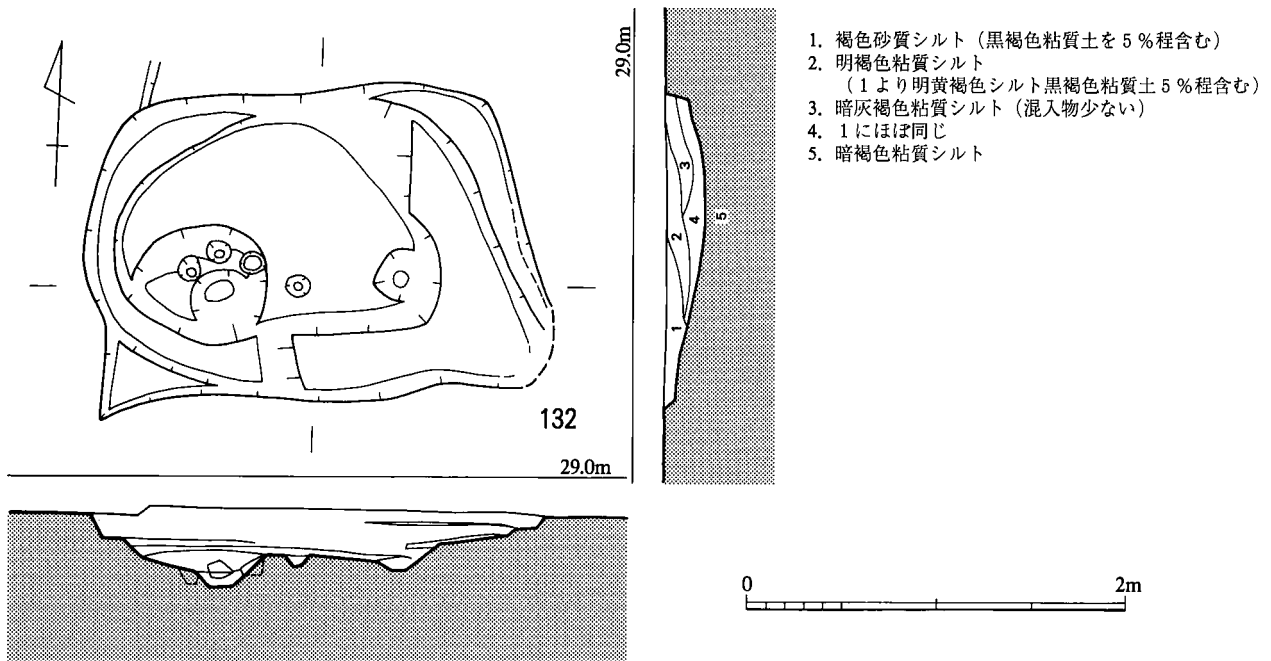
出土土器から当土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

132号土坑（図版39、第137図）

調査区中央に位置し、72号竪穴住居跡の下層で検出した不整形の土坑である。長軸235cm、短軸165cm、底面は中央に向かってすり鉢状に窪んでおり、さらに南西端には径60cm位の掘り込みがある。この部分で深さ45cm、土坑中央で深さ25cmを測る。

出土土器（第136図）

壺（5） 5は壺の口縁部。大きく外反し、端部はわずかに肥厚する。上端はわずかにつまみ上げ、外端は面取りする。風化が著しく調整不明。



第137図 132～134号土坑実測図（1/40）

甕（6～8） 6～8は短い逆L字状口縁の甕。6は上面が短く水平に伸び、三角口縁に近い形状となる。内端は不明瞭な稜を有す。全面風化が著しく調整不明。7は口縁部付近が強く内傾し、口縁部は水平に短く内外に伸びる。風化が著しく調整不明。8は胴部上半が直立し、口縁部は三角口縁に近い逆L字状口縁となる。上面はやや外傾し、内端は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。口径27.1cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期前半に比定できる。

133号土坑（図版39、第137図）

調査区中央北寄りに位置し、69号竪穴住居跡の下層で検出した土坑である。長軸140cm、短軸85cmを測り、長方形プランを呈す。深さは西側が最も深く40cmを測り、東側のテラス上面で25cmを測る。壁は垂直に近い立ち上がりとなる。

出土土器（図版65、第136図）

壺（9） 9は底部が厚く、底面が平坦で端部は丸くおさめる。外面の底部と胴部の境目は明瞭ではない。胴部は丸く、最大径が中位よりやや上にある。肩部は丸く張り、頸部に向かって強く内傾する。外面の頸肩境に一条の三角口縁を巡らす。肩部内面は指オサエ、外面は横ヘラミガキ、胴部内面はナデ、外面は横ヘラミガキ、底面はナデ。外面の一部に化粧土が認められる。胴部最大径25.8cm、底径7.0cm。

甕（10～14） 10・11は如意形口縁の甕。10は胴部上半が直立し、口縁部は短く直角に折り曲げ、上面は水平になる。端部は丸くおさめる。外面口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面の沈線以上は縦ハケ目、沈線以下は横ハケ目。口径21.0cm。11は小型の甕。胴部に対して底部は大きく、底面はやや上げ底となり裾は短くやや開き、端部は丸くおさめる。胴部上半は直立し、口縁部は短くわずかに外反する。底部外面に縦指ナデが認められるものの、それ以外は風化が著しく調整不明。口径17.1cm、底径7.0cm、器高19.1cm。

12～14は甕底部。12は高い底部で底面が大きく窪み、裾が開き、端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かず立ち上がるようである。内面ナデ、外面縦指ナデの後に縦ハケ目、底面ナデ。底径7.4cm。13は裾が開かず底部が直立し、底面中央はやや窪み端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面指ナデ後に縦ハケ目、底面ナデ。底径7.0cm。14は裾が開かず底部が直立する。底面は平坦で裾はシャープに仕上げられる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.8cm。

出土土器から当土坑は弥生時代中期初頭に比定できる。

134号土坑（図版39、第137図）

調査区中央に位置し、46・47・70号竪穴住居跡の下層で検出した土坑である。長軸150cm、短軸110cmを測り、不整長方形プランとなる。南側にテラス状の段があり、この部分の深さは10cm、中央付近で深さ45cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。

出土土器（第136図）

甕（15・16） 15は甕または壺の口縁部であろう。口縁部は外反し、端部は上下に拡張させた形となる。その上端、下端に小さな刻目を施す。外面には一部に化粧土が認められる。風化が進み調整は不明。16は甕の底部。底面はわずかに上げ底となり、裾は短く開く。端部はシャープに尖る。胴

部は直線的に開く。内面ナデ、外面縦ハケ目、底部外面は横ナデ、底面はナデ。底径7.6cm。

出土土器は点数が少なく、また破片資料であり時期比定に不安をおぼえるが、一応弥生時代中期初頭としておく。或いは前期末まで遡らせても良いかもしれない。

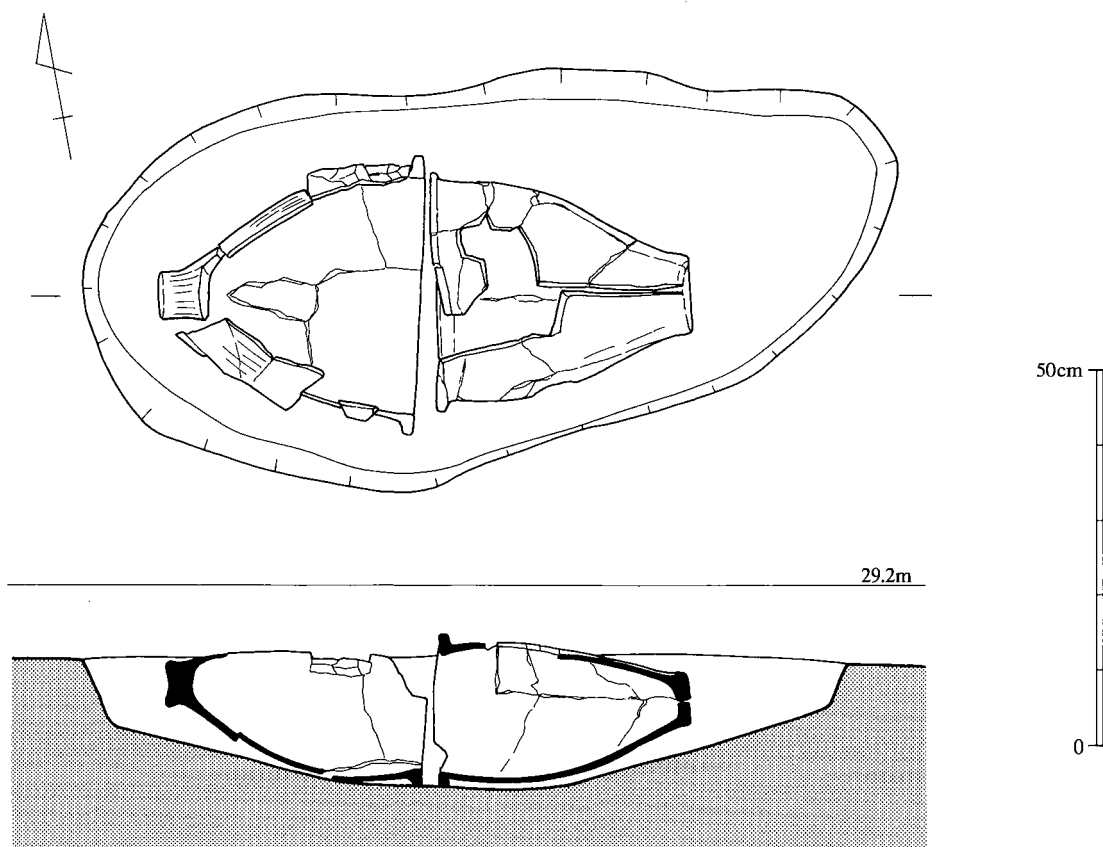
甕棺墓

1号甕棺墓（図版40、第138図）

調査区中央の遺構密集地区からやや東に離れた位置にある小児用甕棺墓で、遺構検出面で既に甕棺上部が露呈していた。掘り方は長軸110cm、短軸50cmの楕円形を呈し、底面までの深さは18cmを測る。甕棺は日常用甕の合せ口式で、掘り方底面に接してほぼ水平に設置する。目貼り粘土等はない。

出土土器（図版68、第139図）

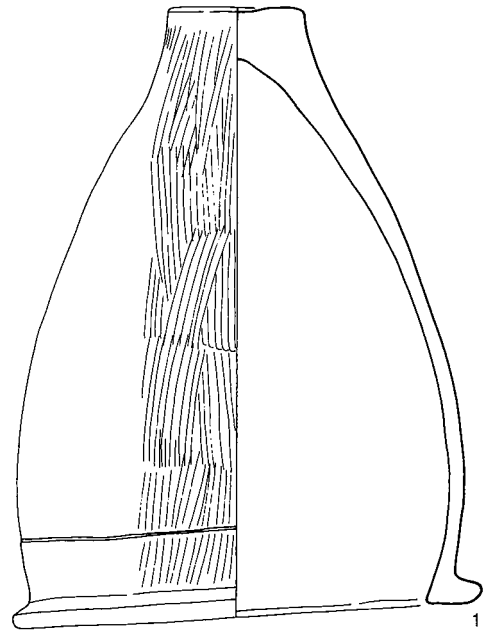
甕棺（1・2） 1・2はどちらも日常甕の甕棺転用品である。1は底部に厚みを残すものの、それほど厚くはない。底面は平坦で端部は比較的シャープに作られる。裾は全く開かず、底端部から胴部へと緩やかに移行し、外面の底部と胴部の境は明瞭ではない。胴部は上半が直立し、口縁部付近は内傾する。口縁部は外側へとやや伸び気味であり、三角形に近い逆L字状口縁となる。上面は外傾し、内面は丸味を帯びてやや突出気味に仕上げ、外面は丸くおさめる。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は粗い縦ハケ目、底面はナデを行う。口径24.8cm、底径7.2cm、器高32.8cm。



第138図 1号甕棺墓実測図（1/10）

2は底面がやや窪み、底端部で接地する。端部は比較的シャープに仕上げる。底部外面は直立し、柱状に高くなる。胴部は上半が直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は丸味を帯びた大きな三角形状を呈する。上面は外傾し、内端はやや丸味を帯びるもののしっかりとした稜を有す。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目、底面はナデ。口径29.0cm、底径6.1cm、器高34.0cm。

1は底部や口縁部の形状から弥生時代中期前半に比定できるものと思われる。しかし2は中期初頭に比定されるものであろう。したがってこの甕棺の時期は弥生時代中期前半でも初頭に近い時期としておきたい。



溝

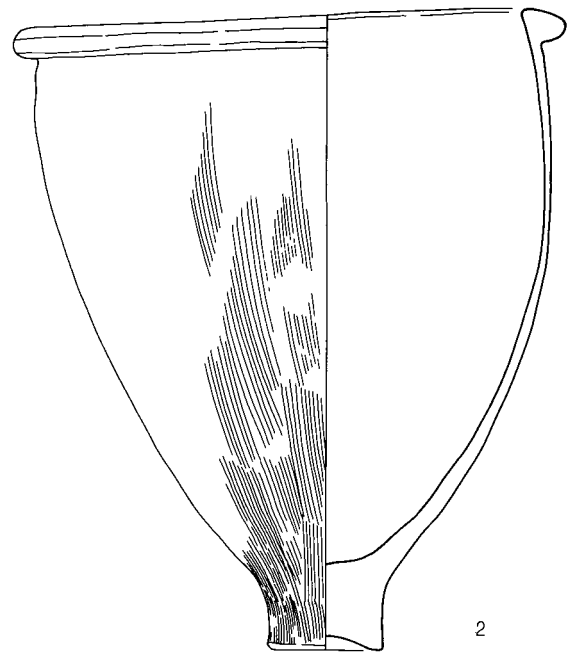
9号溝（第140図）

調査区東側に位置し、弧状に曲がる南北溝である。北端は調査区外へ続き、南端は7号溝に切られており、ここで途切れている。断面逆台形を呈し、幅は上面で28cm、底面で20cm、深さ10cm、検出した長さは3.9mを測る。

出土土器（第141図）

甕（1） 1は胴部上半が直立し、口縁部付近はわずかに内傾する。口縁部は小さな三角口縁で、上面はほぼ水平に伸びる。内面は丸くわずかに突出する。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は上半が斜ハケ目、下半が縦ハケ目。口径24.0cm。

出土土器は1点しかないが、この土器は弥生時代中期初頭のもので、当溝もこの時期として考えている。



第139図 1号甕棺実測図（1/4）

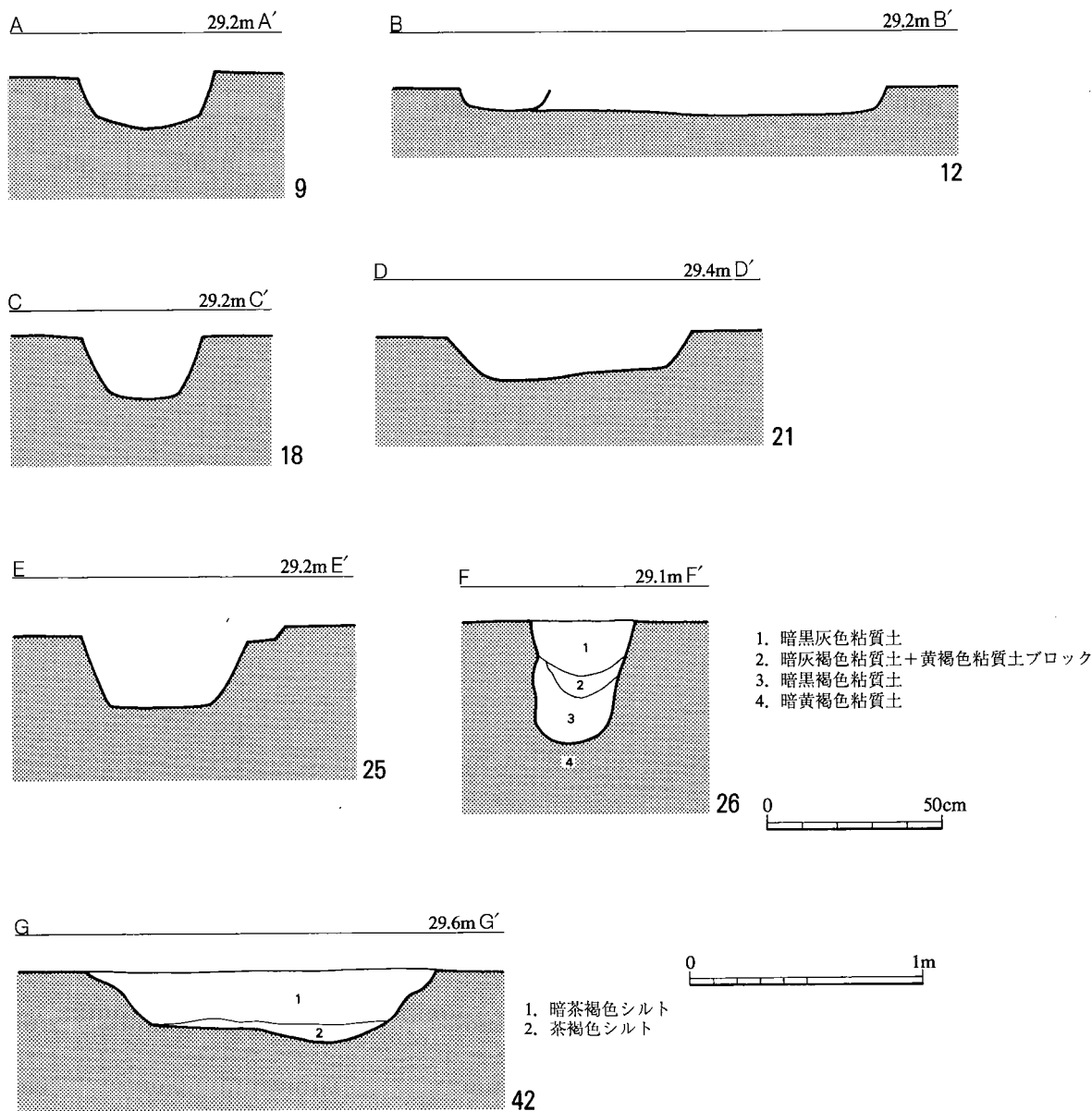
12号溝（第140図）

調査区東側に位置する溝で、北東から南西方向へと蛇行気味に伸びる溝である。北側は15号竪穴住居跡に切れ、南側は7号溝に切られる。また他に14号溝にも切られている。断面逆台形を呈し、幅は上面で90cm、底面で85cm、深さは10cm、検出した長さは10.5mを測る。覆土中から多くの遺物が出土している。

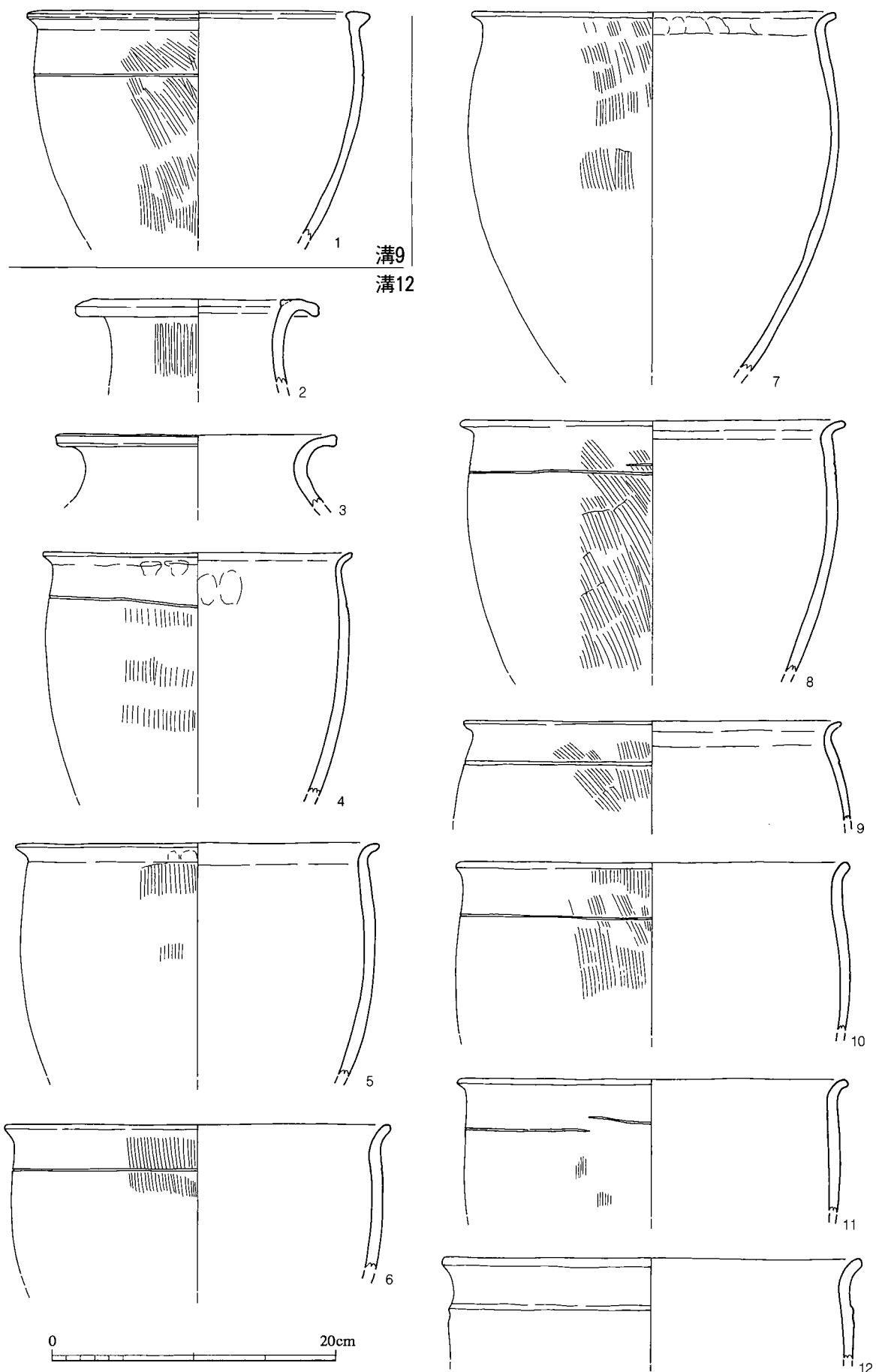
出土土器（図版66・67、第141・142図）

壺（2・3） 2は頸部が細く直立し、口縁部が強く外反し、上面は外傾する。外端は強くナデで凹面を形成する。また口縁内面に三角突帯を貼付する。口縁部は横ナデ、頸部内面はナデ、外面は縦ヘラミガキ。口径17.2cm、頸部径12.0cm。3は頸部が内傾し、口縁部は大きく外反する。口縁部外端は強いナデを加えて凹面を形成する。口縁部は横ナデ、頸部はナデ。口径19.5cm。

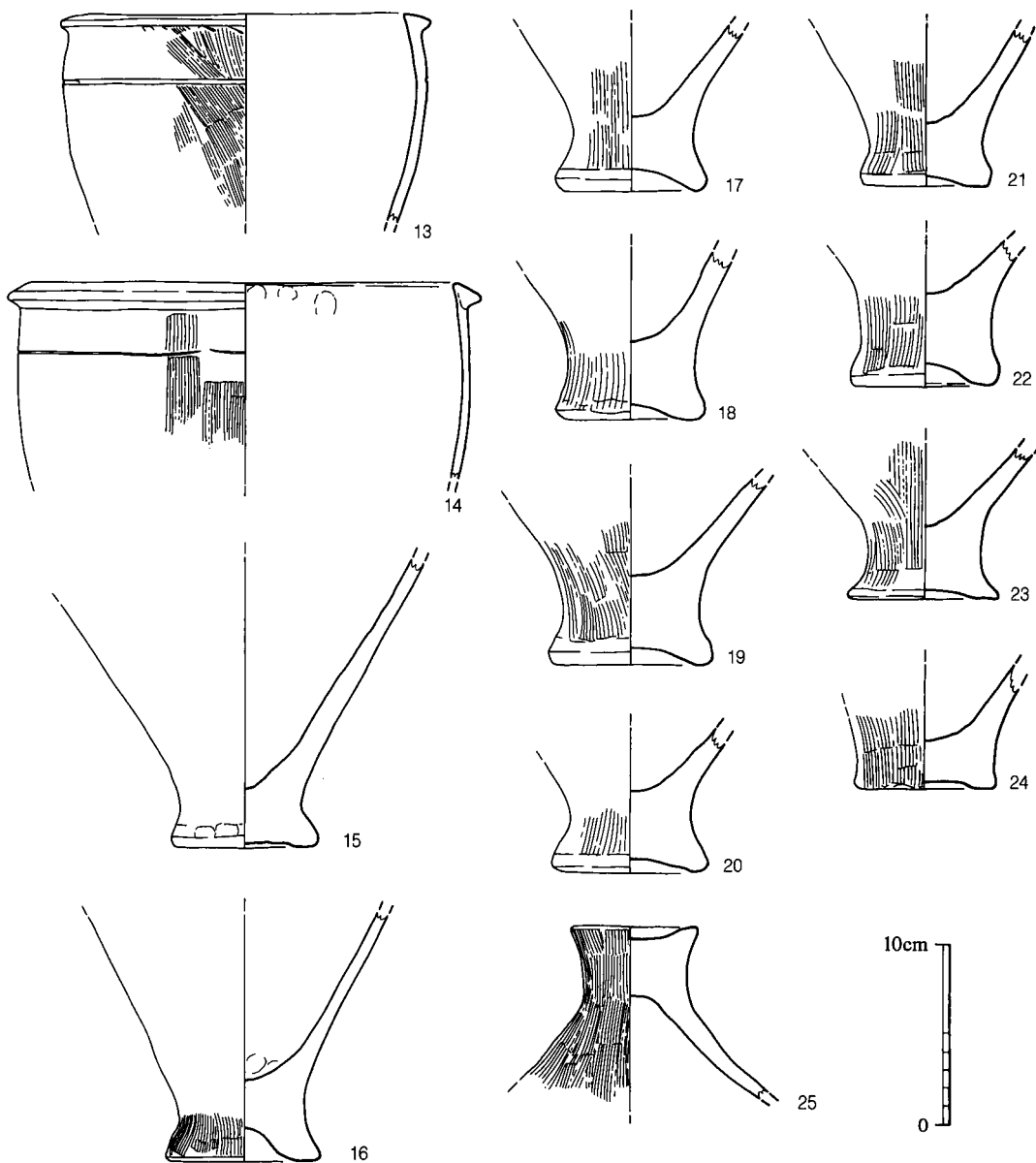
甕（4～24） 4～12は如意形口縁の甕。4は胴部上半が直立し、口縁部付近は内傾する。口縁部は短く緩く外反し、端部を丸くおさめる。口縁部付近の器壁は薄くなる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径21.6cm。5は口縁部付近が内傾し、胴部がやや丸味を帯びる。口縁部は短く強めに外反し、端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部内面は風化が著しく調整不明、外面は縦ハケ目だがほとんど器壁が剥離している。口径24.8cm。6は胴部上半が直立し、口縁部は緩く外反する。口縁部は丸くおさめる。外面の口縁



第140図 溝断面実測図（26：1/20、他は1/30）



第141图 9·12号溝出土土器実測図 (1/4)



第142図 12号溝出土土器実測図(1/4)

部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径27.2cm。7は口縁部付近が内傾し、胴部最大径が他のものよりもやや下にある。口縁部は短く強く外反し、胴部に比べて器壁が薄くなる。口縁部は横ナデで、内面には指圧痕が残る。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径25.3cm。8は胴部上半が直立し、口縁部付近が内傾する。口縁部は強く短く外反し、端部を丸くおさめる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす、起点と終点が一致していない。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は斜ハケ目。口径26.4cm。9は口縁部付近が強く内傾し、口縁部は短く強く外反する。胴部と比べて口縁部の器壁は薄く、端部は丸くおさめられる。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径26.4cm。10は胴部が直立し、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は短く緩く外反し、端部は丸くおさめる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.8cm。11は胴部上半が直立し、口縁部は短く外反する。口縁部端部は丸くおさめる。外面の口縁部下に

は一条の沈線を巡らすが、起点と終点とが一致しない。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は縦ハケ目がわずかに残る。口径26.9cm。12は胴部上半が直立し、口縁部は緩く外反して端部を丸くおさめる。外面の口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。風化が著しく調整は不明。口径29.1cm。

13・14は三角口縁の甕。13は口縁部付近が内傾し、胴部が丸味を帯びた器形となる。口縁部は形の整った三角口縁となる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径17.4cm。14は胴部上半が直立し、口縁部は形の整った三角口縁となる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径22.6cm。

15～24は甕の底部。15は底部が厚いもののあまり高くはならず、裾は短く大きく開く。底面はわずかに窪んでいる。胴部は直線的に開く。風化が著しく調整不明。底径7.9cm。16は底部が高く底面中央が深く窪み、裾が開き端部は比較的シャープに作られる。胴部はあまり開かず直線的に立ち上がる。胴部は内外面風化が著しく調整不明、底部外面は縦ハケ目、内底面は指オサエ、外底面はナデ。底径8.3cm。17は底面が大きく上げ底となり裾が開いて端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.7cm。18は底面が上げ底となり裾がやや開き、端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。19は底面が上げ底となり裾が開き、端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.2cm。20は底面がやや上げ底となり裾が開き、端部を丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.4cm。21は底面中央が窪み、裾が開き、端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.8cm。22は高い底部で底面中央がやや窪み、裾はあまり開かない。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.6cm。23は底面が窪み裾が大きく開き、端部はシャープにおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。24は底面がわずかに上げ底となり裾は開かず底部は短く直立する。端部は比較的シャープに仕上げられる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.4cm。

蓋(25) 25は蓋の天井部。上面は中央がやや窪み、端部はやや開き、シャープに仕上げられる。内面ナデ、外面縦ハケ目、上面ナデ。端部径7.0cm。

出土土器は全て弥生時代中期初頭として良いものである。比較的良好な一括資料である。

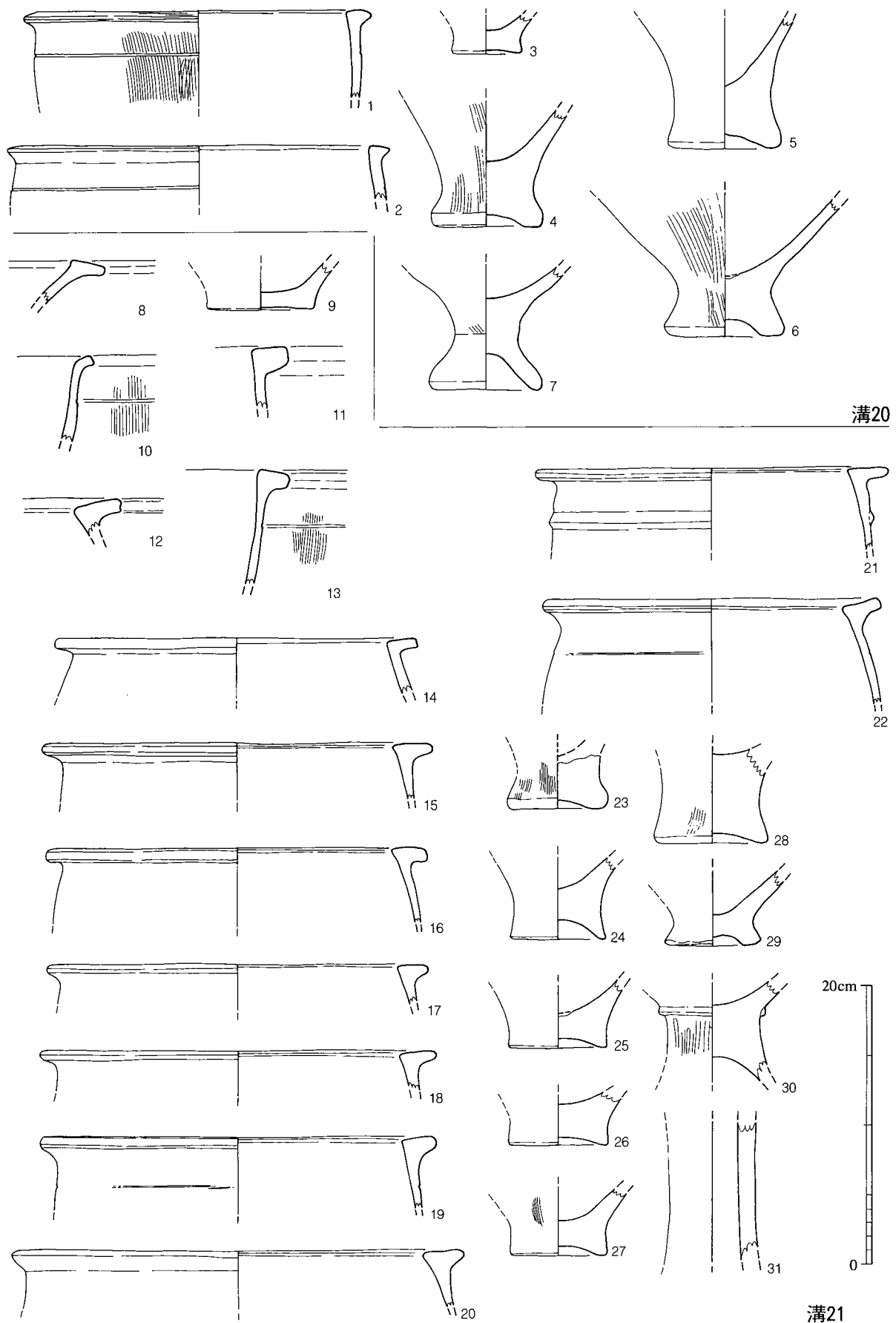
18号溝(第140図)

調査区東側に位置し、弧状に曲がる溝である。北半部と南半部では調査した時期が異なるため当初は同一の遺構と認識できず、後になって4号溝と18号溝が同一遺構と判明したものである。北側は調査区外へと続き、南側は7号土坑付近で途切れている。断面逆台形を呈し、幅は上面で25cm、底面で12cm、深さは15cm、検出した長さは31mを測る。

この溝は弥生時代の円形・楕円形住居跡を取り巻くように巡っていることから、集落の区画溝として機能していた可能性が高い。遺物はほとんど出土せず、また図示できるものはない。

20号溝

調査区中央の北端に位置する溝である。北側が調査区外へと続いており、検出した部分では不整形の土坑状をなす。長軸206cm、短軸146cm、深さは15cm程度である。遺物はややまとまって出土している。溝というよりも土坑とした方が良かったかもしれない。



第143图 20·21号溝出土土器实测图 (1/4)

出土土器（第143図）

甕（1～5） 1・2は三角口縁の甕。1は胴部上半が直立し、口縁部は形の整った三角形となる。上面は外傾する。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径24.6cm。2は口縁部付近がやや内傾し、口縁部は小さく形の整った三角口縁となる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。風化が著しく調整不明。口径27.0cm。

3～5は甕の底部。3は小型品であろう。底面はわずかに上げ底となり、裾はほとんど開かず端部はシャープに仕上げられる。底部の器壁はやや厚い。風化が著しく調整は不明。底径5.0cm。4は底面が窪み、裾が開き端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かず直線的に立ち上がる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.9cm。5は高い底部となる。底面はやや上げ底となり裾が長く緩やかに開く。端部は丸くおさめる。胴部はあまり開かない。風化が著しく調整は不明。底径8.0cm。

鉢（6） 6は胴部が大きく開くことから、恐らく鉢となろう。底部はやや高く、底面中央が深く窪み、裾は開き、端部は丸味を帯びる。胴部内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.6cm。

台付鉢（7） 7は底部が非常に高く、裾が大きく開くことから台付鉢とした。裾の端部は丸くおさめる。体部内面ナデ、外面はわずかにハケ目が残る。裾部内面ナデ、外面は風化が著しく調整不明。裾部径8.0cm。

出土土器から当溝は弥生時代中期初頭に比定できる。

21号溝（第140図）

調査区南東端に位置する溝である。北側は63号土坑付近で途切れ、南側は調査区外へと続く。断面逆台形を呈し、幅は上面で50cm、底面で40cm、深さは10cm、検出した長さは5.4mを測る。

出土遺物には図示した土器の他、27の軽石製品が出土している。

出土土器（第143図）

壺（8・9） 8は壺の口縁部。口縁部が大きく開き、口縁上面に粘土を貼付して内側が三角形に突出する。風化が著しく調整は不明。9は壺の底部。底部の器壁はあまり厚くならない。底面は平坦で端部は鋭い稜を有す。底径7.6cm。

甕（10～29） 10は如意形口縁の甕。胴部上半は直立し、口縁部は短く外反する。端部は面取りし、四角くおさめる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。

11～22は逆L字状口縁の甕。11は胴部上半がわずかに内傾し、口縁部は短い逆L字形となる。上面はわずかに内傾し、内端はしっかりとした稜を有す。外端は丸味を帯びる。風化が著しく調整は不明。12は胴部上半が強く内傾し、口縁部は強く外側に屈曲し、上面が内傾する。内端はしっかりとした稜を有し、外端は面取りして四角くおさめる。風化が著しく調整は不明。13は胴部上半が直立し、口縁部は短い逆L字形口縁となる。上面はやや外傾する。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。14は口縁部付近が強く内傾し、口縁部は強く外側に屈曲する。上面は内傾し、内端は鋭い稜を有し、外端は面取りして四角くおさめる。調整は全面ナデを行う。口径25.6cm。15は口縁部付近がやや内傾し、口縁部は内側にも短く突出しており未発達な鋤先状を呈す。上面はほぼ水平で、外端は丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。口径27.6cm。16は口縁部付近が内傾し、口縁部は内側にも短く突出しており未発達な鋤先状を呈す

る。風化が著しく調整は不明。口径27.0cm。17は口縁部付近が内傾し、口縁部は三角形に近い。上面は水平に短く伸び、内端は明瞭な稜を有す。風化が著しく調整は不明。口径27.0cm。18は口縁部付近が内傾し、口縁部は上面がやや内傾する。内端はわずかに突出気味に仕上げ、外端は丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。口径28.0cm。19は口縁部付近が内傾し、口縁部は器壁が厚く短い逆L字状をなす。上面は内傾し、内端は鋭く稜を有し外端は丸くおさめる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。風化が著しく調整は不明。口径28.0cm。20は口縁部付近が強く内傾し、口縁部の上面はほぼ水平に仕上げる。内端、外端とも強い横ナデを加え、やや尖り気味にする。風化が著しく調整は不明。口径32.0cm。21は口縁部付近が内傾し、口縁部は水平に伸びる。内端は鋭い稜を有し、外端は丸味を帯びる。外面の口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。風化が著しく調整は不明。口径25.0cm。22は胴部上半が内傾し、口縁部は短い逆L字状をなす。上面は内傾し、内端は鋭い稜を有し、外端は面取りして四角くおさめる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。風化が著しく調整は不明。口径24.0cm。

23～29は甕の底部。23は底面がやや窪み、裾が開いて端部は丸くおさめる。底部外面は縦ハケ目、底面はナデ。底径7.2cm。24は底面が大きな上げ底となり裾は長く緩く開く。端部は比較的シャープに仕上げる。風化が著しく調整は不明。底径6.8cm。25は底面が大きな上げ底となり端部はシャープに仕上げられる。底部外面は開かず直立する。風化が著しく調整は不明。底径6.8cm。26は底面がやや上げ底となり裾はほとんど開かず直立する。端部はシャープに仕上げられる。風化が著しく調整不明。底径7.1cm。27は底面がやや窪み、裾は開かず直立する。端部は比較的シャープに仕上げられる。胴部は大きく開くようである。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径6.9cm。28は高い底部。底面はやや窪み、裾が長く緩やかに開き、端部はシャープに仕上げられる。内底面ナデ、底部外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.1cm。29は底面が大きく窪み、裾が短く開いて底部は高台状になる。裾は内端で接地し、端部は比較的シャープに仕上げられる。風化が著しく調整不明。底径6.8cm。

高坏 (30・31) 30は高坏の坏脚接合部である。接合部外面には三角突帯を一条貼付する。脚柱部外面には縦ヘラミガキを行う。脚柱部径6.6cm。31は高坏の脚部片である。柱状をなし、ほとんど開かない。風化が著しく調整は不明。径6.2cm。

出土土器には弥生時代中期初頭の特徴を有すものもあるが、大半は中期前半のものである。従って当溝の時期も弥生時代中期前半としたい。

25号溝 (図版40、第140図)

調査区中央からやや西寄りに位置し、北北西から南南東へと直線的に伸びる溝である。北側は1号竪穴住居跡に切られて途切れ、南側は調査区外へと続いている。また途中68・92・98号土坑にも切られている。断面逆台形を呈し、幅は上面で40cm、底面で20cm、深さは20cm、検出した長さは27mを測る。

この溝の西側には弥生時代の円形・楕円形竪穴住居跡、土坑はほとんど存在せず、東側に集中することから、18号溝同様集落を区画した溝であった可能性もある。

出土遺物には図示した土器の他、24の土製紡錘車、108の打製石斧、164の石包丁が出土している。

出土土器・磁器（図版67、第144図）

甕（1～7） 1・2は如意形口縁の甕。1は胴部上半が直立し、口縁部付近がやや内傾する。口縁部は短く強く外反する。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径23.0cm。2は胴部上半が開き、内面に横ヘラミガキを行うことから鉢とした方が妥当かもしれない。口縁部は緩く外反し、胴部に比べて器壁が薄い。端部は面取りして四角くおさめる。外面の口縁部下に一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデを行うが、内面には横ハケ目が残る。胴部外面は風化が著しく調整不明。

3・4は三角口縁の甕。3は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面はほぼ水平になり、内端、外端ともにしっかりとした稜を有す。口縁部は横ナデ、胴部内面ナデ、外面細かい縦ハケ目。口径22.8cm。4は口縁部付近が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は外傾し、内端は短く突出する。風化が著しく調整不明。

5～7は甕の底部。5は底面が平坦で裾は端部のみ短く開く。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径5.3cm。6は底面が平坦で裾が大きく開き、端部は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。底径6.7cm。7は底面がやや上げ底となり裾が大きく開き、端部を丸くおさめる。胴部は内面ナデ、外面縦ハケ目、底部は外面指ナデ、端部は横ナデ、底面はナデ。底径7.4cm。

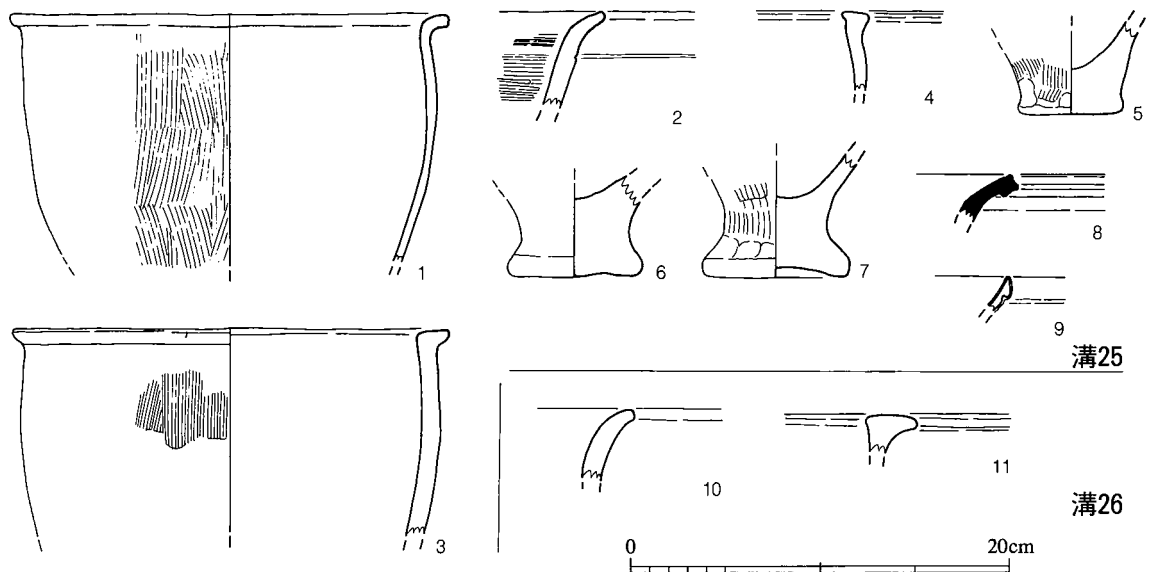
須恵器甕（8） 8は須恵器甕の口縁部。口縁部は大きく開き、端部は折り返して肥厚させる。全面横ナデ調整。混入品。

白磁碗（7） 7は白磁碗で、口縁部は玉縁状に仕上げる。混入品。

混入品を除き、当溝の出土土器は弥生時代中期初頭のものである。

26号溝（第140図）

調査区中央から南側にかけてクランク状に伸びる溝で、55・56号竪穴住居跡を切り、78号土坑、1号溝に切られる。断面は逆台形に近く、幅は上面で30cm、底面で20cm、深さは35cm、検出した長さは24.3mを測る。



第144図 25・26号溝出土土器実測図（1/4）

出土土器（第144図）

甕（10・11） 10は如意形口縁の甕。口縁部は緩やかに外反し、端部は面取りして四角くおさめる。風化が著しく調整は不明。11は短い逆L字状口縁の甕。上面は水平に伸び、内端にはしっかりとした稜を有し、外端は尖り気味に仕上げる。風化が著しく調整は不明。

出土土器は細片で時期の比定が困難である。中期初頭～前半としておきたい。

42号溝（第140図）

調査区西端に位置し、北から南西へと弧状に湾曲する溝である。北側は攪乱により破壊され、南西側は94号竪穴住居跡に切られる。断面は逆台形に近く、幅は上面で150cm、底面で100cm、深さは30cm、検出した長さは9.0mを測る。

出土土器（図版67・68、第145図）

壺（1～3） 1は大型の広口壺。肩部は大きく張り頸部は直立する。口縁部は大きく開く。頸肩境に二条の台形突帯を巡らす。また口縁部の内外面にもそれぞれ一条の三角突帯を巡らせる。



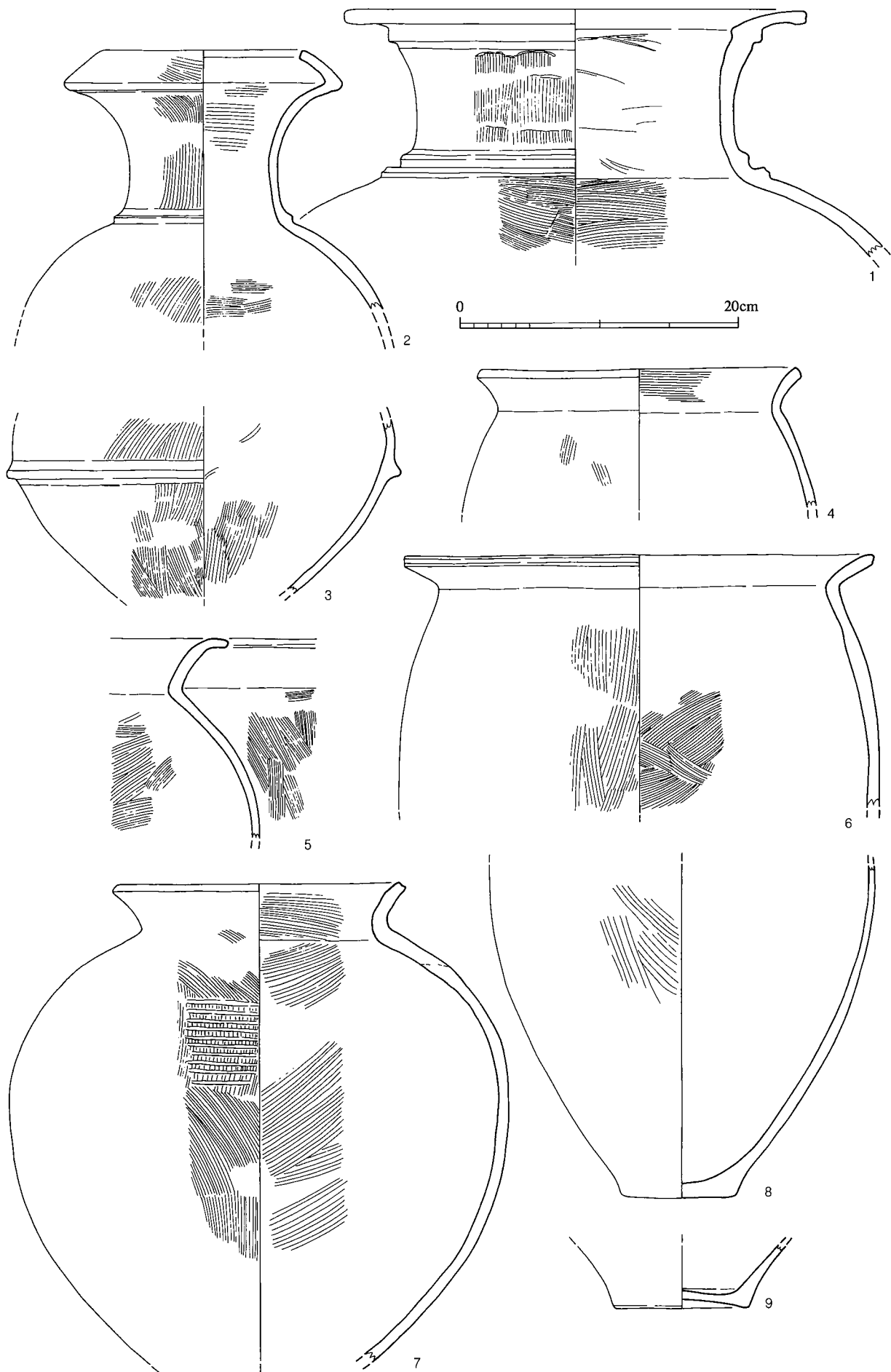
42号溝遺物出土状態

口縁部は横ナデ、頸部内面はヘラ状工具による横ナデ、外面は縦ハケ目、肩部は内外面とも横ハケ目。口径33.4cm、頸部最小径23.1cm。2と3は接合しないが同一個体。胴部は球形で最大径の位置に三角突帯を巡らす。頸部の付け根は強く締まり、頸部は大きく開く。口縁部は内湾しながら強く内傾し、端部は面取りする。頸肩境には一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデを行うが、外面には横ハケ目が観察される。頸部内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目。胴部は内外面ともハケ目を行う。口径14.4cm、口縁反転部径20.1cm、頸部最小径10.8cm、胴部最大径28.6cm。

甕（4～9） 4は肩が張らずなで肩の胴部となり、口縁部はくの字形に外反し、端部は面取りして四角くおさめる。口縁部は内面横ハケ目、外面横ナデ、胴部は内面横ナデ、外面縦ハケ目。口径23.6cm。5は球形の胴部にくの字形に強く外反する口縁部が付く。口縁端部はさらに外反し、わずかに外傾する。口縁部は横ナデ、胴部内面は斜ハケ目、外面は縦ハケ目。6は肩が張らず、口縁部はくの字形に強く外側に屈曲する。屈曲部内面にはしっかりとした稜線を有し、外端部は面取りする。口縁部は横ナデ、胴部内面は斜ハケ目、外面は縦ハケ目を行い、内面と外面のハケ目工具が異なる。口径34.2cm。7は胴部が球形に近く、最大径が中位にある。頸部は強く締まり、口縁部は短く外反する。端部は面取りして四角くおさめる。口縁部は内面横ハケ目、外面横ナデ、胴部は内面斜ハケ目、外面横タタキ後斜ハケ目。口径21.2cm、胴部最大径36.2cm。

8・9は甕の底部。8は胴部が長胴で肩が張らない器形となる。底部は薄く、端部に明瞭な稜線を持たない。底面は平坦である。内面はナデ、外面は粗い縦ハケ目、底面はナデ。底径8.3cm。9は底部が薄く、やや上げ底となる。底部から胴部へは外反しながら移行しており、外面での底部と胴部の境は不明瞭である。端部はしっかりとした稜線を有す。風化が著しく調整は不明。底径10.0cm。

出土土器は弥生時代後期中葉としてよいだろう。



第145图 42号沟出土土器实测图 (1/4)

ピット出土土器（図版69～71・78、第146～152図）

弥生土器

壺（1～14） 1～6は壺の口縁部。1は頸部が内傾し、口縁部は大きく短く開く。端部は丸くおさめる。外面の頸肩境には一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、頸部外面は縦ハケ目後にヘラミガキを行ったと思われるが、縦ハケ目のみが観察できる。肩部外面は横ヘラミガキ。頸部・肩部内面はナデ。口径16.2cm。2は肩部が丸く大きく張り、頸部は強く締まり、口縁部が短く外反する短頸壺。口縁部は丸くおさめる。外面の肩部に一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、肩部内面はナデ、外面は横ヘラミガキ。口径11.8cm。3は頸部が大きく開く素口縁の壺。端部は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。口径23.0cm。4はやはり頸部が大きく外反する素口縁の壺で、端部は面取りする。風化が著しく調整は不明。口径31.6cm。5は肥大した逆L字状口縁をもつ大型の壺。上面はほぼ水平に短く伸び、内端はわずかに突出し、外端は面取りして四角くおさめる。風化が進むものの、内面にわずかに横ヘラミガキが認められる。口径35.0cm。6もやはり逆L字状口縁の壺。上面はほぼ水平に伸び、内端はわずかに突出する。外端は強い横ナデで凹面を形成する。

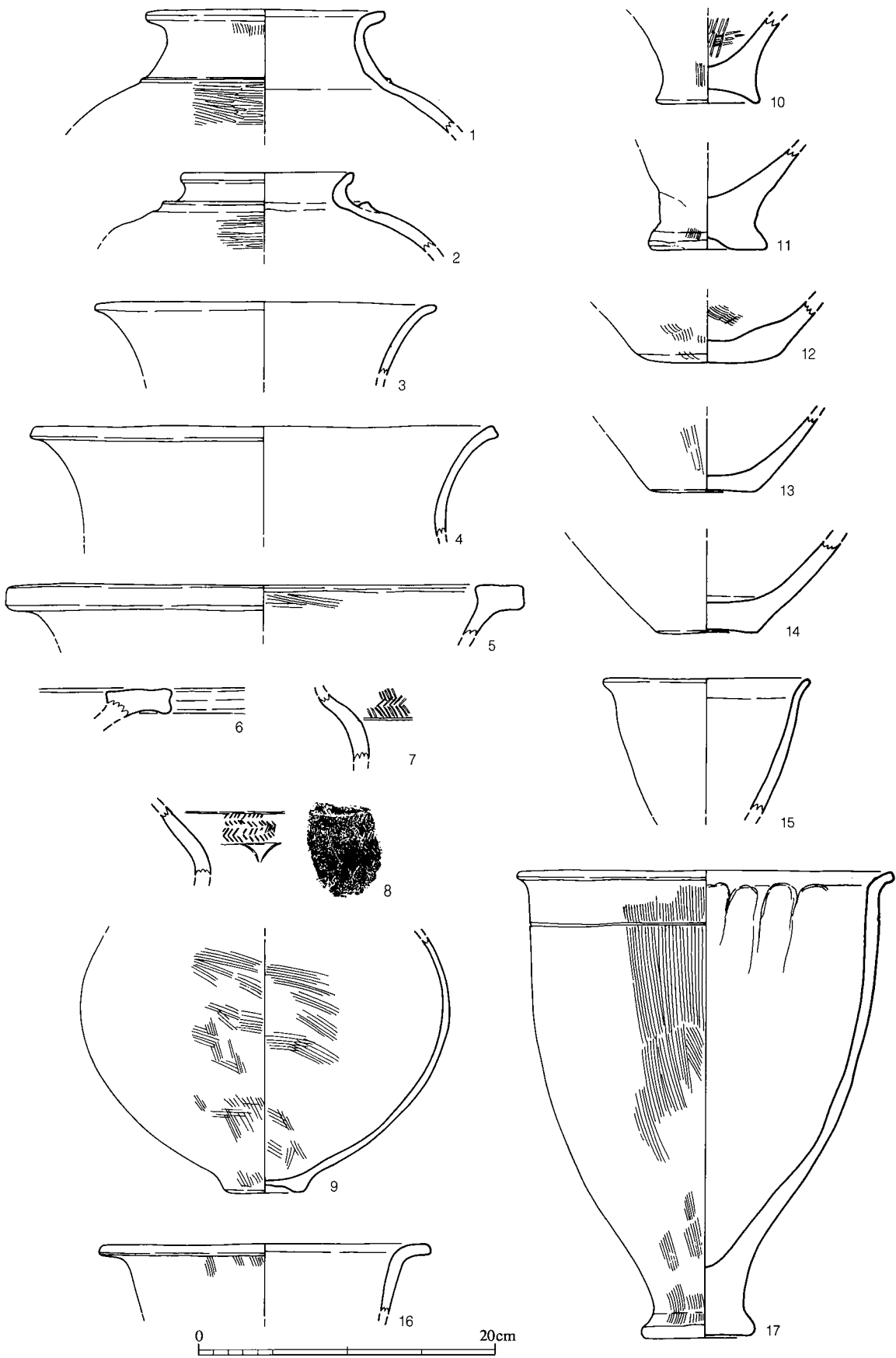
7・8は壺の肩部。7は肩部に無軸羽状文を施し、その下に沈線を巡らす。風化が著しく調整は不明。8は沈線、無軸羽状文、円弧文からなる文様帯を巡らす。風化が著しく調整は不明。

9は壺の下半部。底部は小さく、底面が窪んで高台状になる。胴部は球形で最大径が中位にある。調整は胴部内外面にハケ目の後雑なヘラミガキを行うが、風化が進みハケ目しか観察できない。底面はナデ。胴部最大径25.1cm、底径6.0cm。

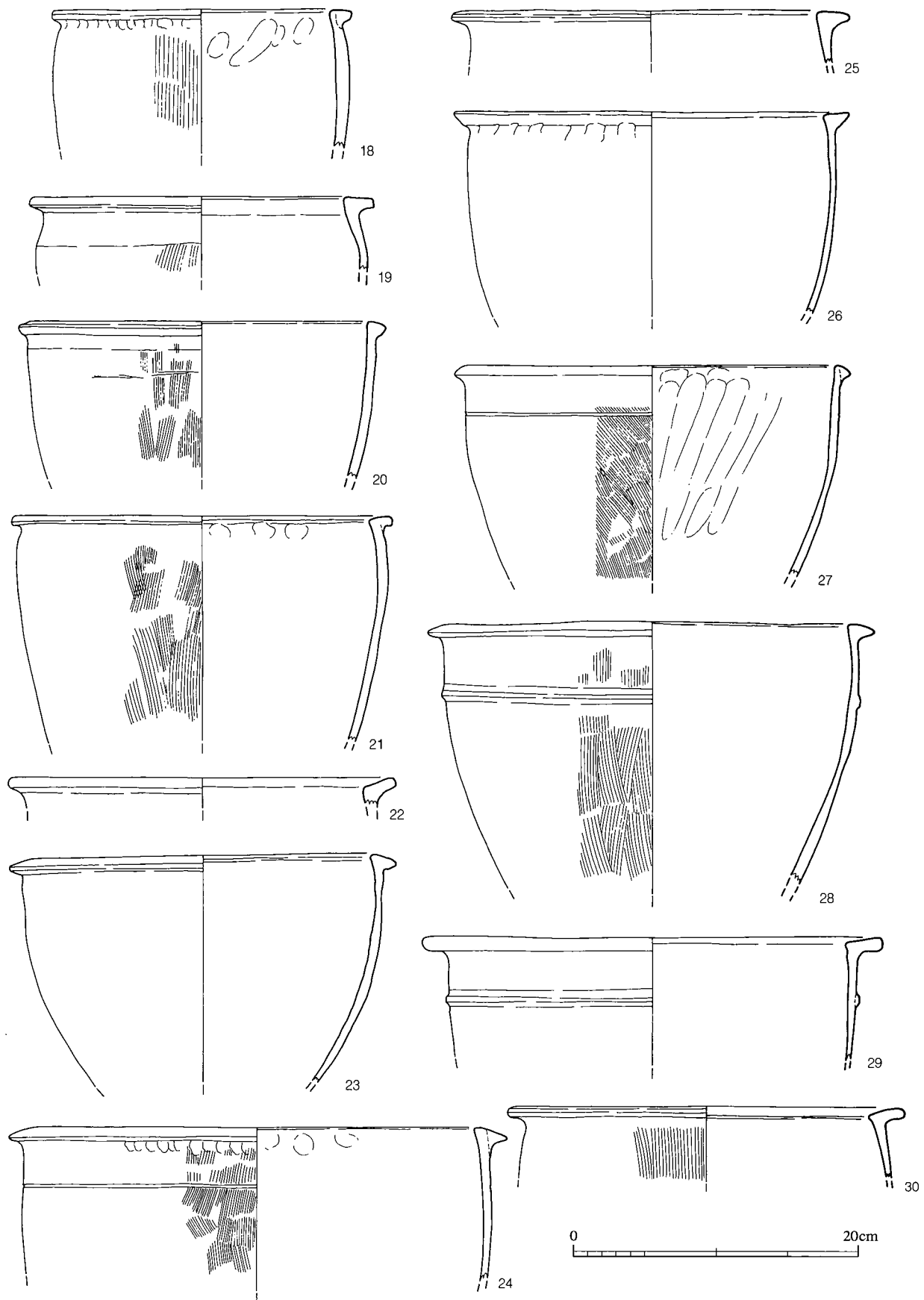
10～14は壺の底部。10は内面をヘラミガキ調整するため、一応壺として扱った。器形からすれば甕の方が妥当である。底面は大きく上げ底となり裾がやや開く。端部は割とシャープに仕上げられる。胴部はあまり開かない。内面ヘラミガキ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.1cm。11も胴部が開く事から壺として扱ったが、甕の可能性もある。底面は中央が深く窪み、裾が短く開く。端部は比較的シャープにおさめる。内面ナデ、外面は指オサエでわずかにハケ目が残る。底面はナデ。底径8.1cm。12は底部があまり厚くならず、底面は平坦で裾端部を丸くおさめる。内面ハケ目後ナデ、外面ハケ目後ナデ、底面ナデ。底径9.8cm。13は底面が平坦で端部はしっかりとした稜を有し、胴部は直線的に開く。内面ナデ、外面縦ヘラミガキ、底面ナデ。底径7.0cm。14は底面がわずかに上げ底となり端部はシャープな稜を有す。胴部は直線的に開く。内面ナデ、外面は風化が著しく調整不明、底面ナデ。底径7.0cm。

甕（15～45） 15～17は如意形口縁の甕。15は小型品である。口縁部上半はやや外傾し、口縁部は緩く外反する。端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部は内外面ともナデ調整。口径14.0cm。16は口縁部付近がやや外傾し、口縁部は強めに外反する。端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部外面は縦ハケ目、内面はナデ。口径22.4cm。17は完形品。底部は高く底面はほぼ水平で、裾は短く開き端部は丸くおさめる。胴部上半は直立し、口縁部は外反して端部を面取りする。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面の上半は縦指ナデ、下半はナデ、胴部外面は縦ハケ目。口径25.7cm、底径7.8cm、器高31.8cm。

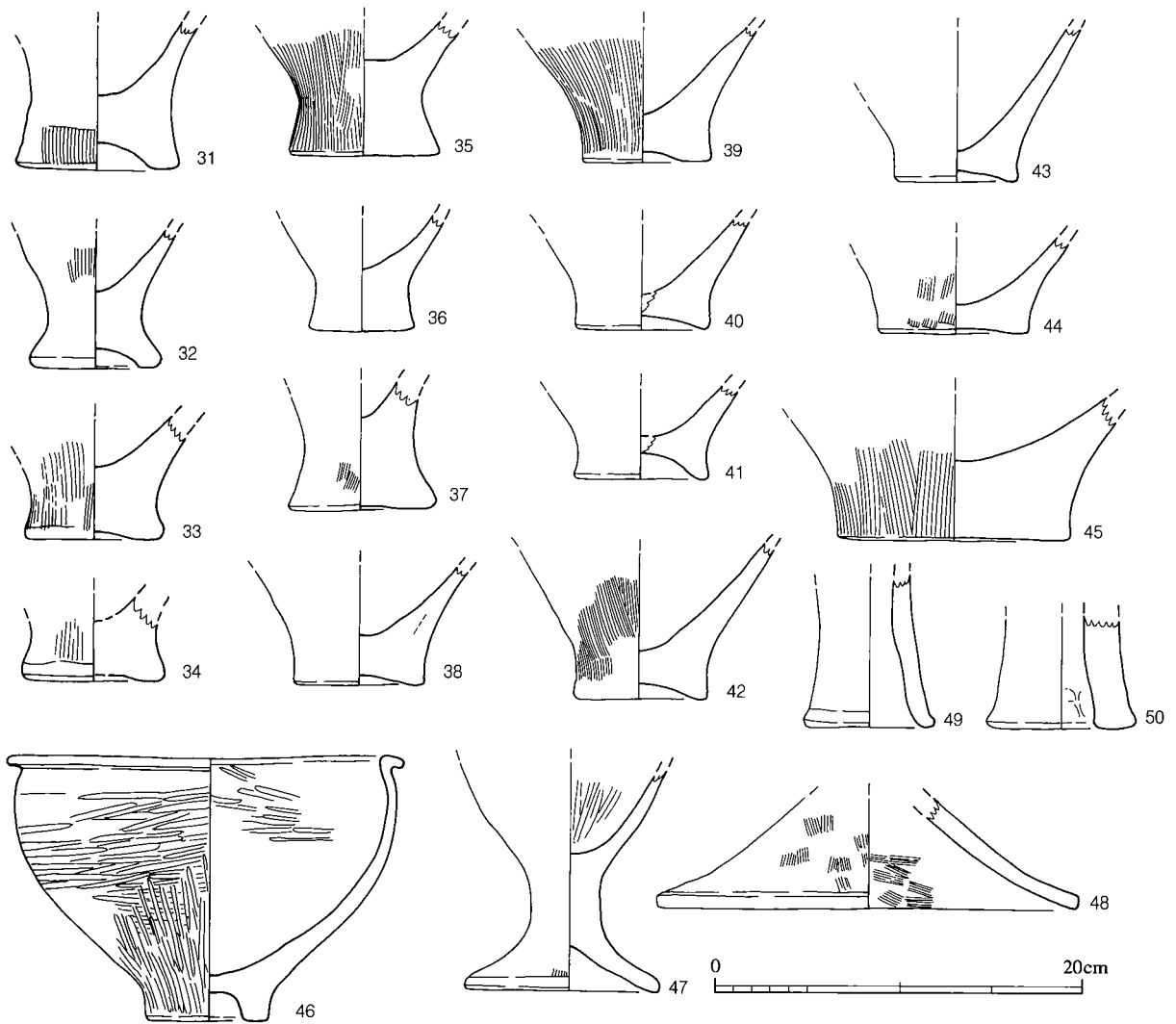
18～30は三角口縁または短い逆L字形口縁の甕。18は胴部上半が直立し、口縁部付近がやや内傾する。口縁部は三角口縁で上面が水平になる。外端は丸味を帯び、下部には指圧痕が認められる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径21.0cm。19は口縁部付近が内傾し、口縁



第146図 ピット出土土器実測図① (1/4)

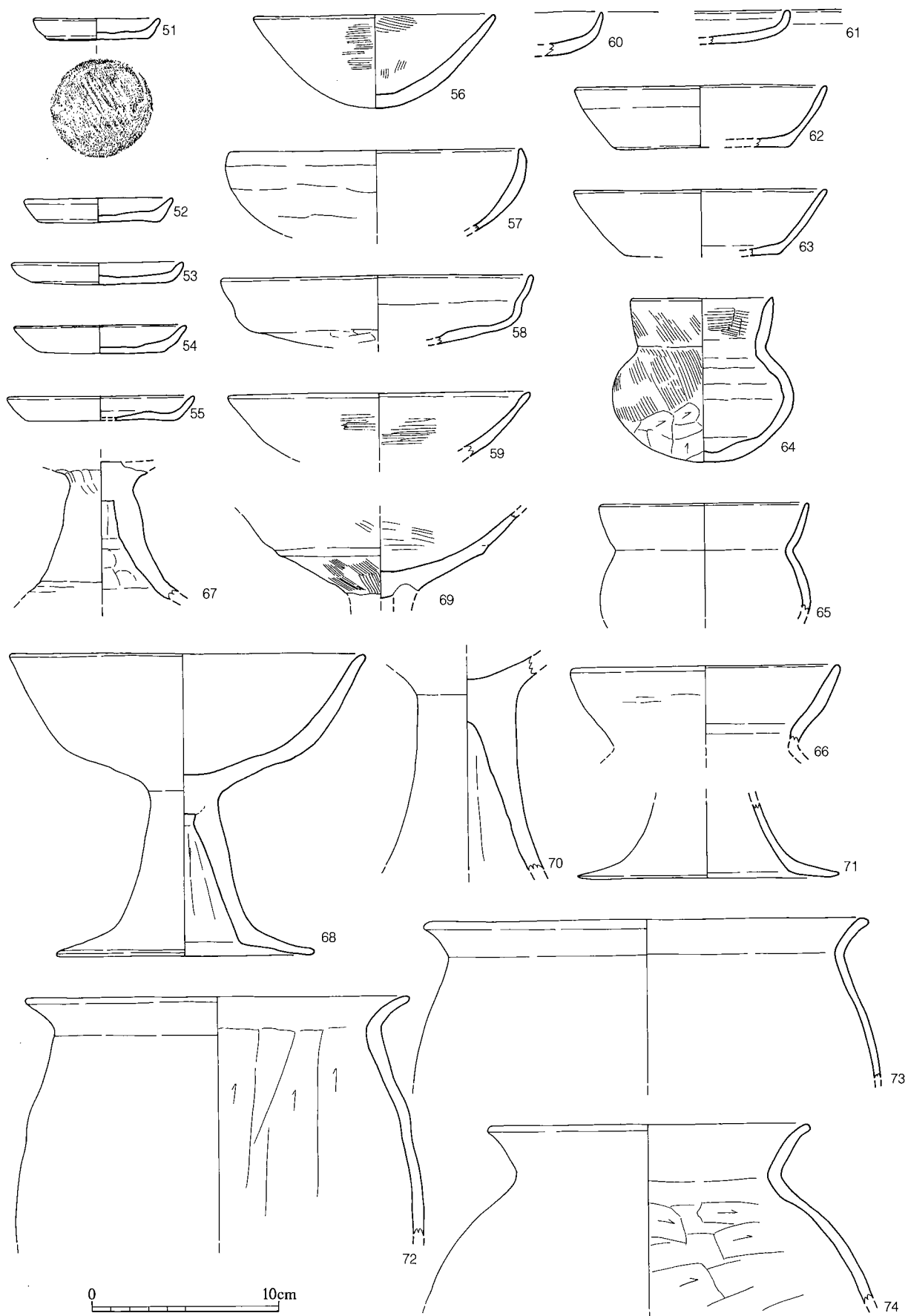


第147図 ピット出土土器実測図② (1/4)



第148図 ピット出土土器実測図③ (1/4)

部は短い逆L字状口縁となる。上面はほぼ水平に伸び、内端は稜を有し外端は面取りして四角くおさめる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径24.2cm。20は胴部上半が直立し、口縁部は形の整った三角口縁となる。外面の口縁部下には一条の沈線がかすかに認められる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径26.0cm。21は胴部上半までがやや外傾し、口縁部付近のみ内傾する。口縁部は三角口縁となり、上面はやや内傾し、内端はしっかりとした稜を有し、外端は丸くおさめる。口縁部は横ナデで内面には指圧痕が認められる。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径26.8cm。22は短い逆L字形口縁のもので、口縁部上面は内傾し、内端は明瞭な稜を有し、外端は面取りする。全面横ナデ調整。口径27.4cm。23は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面は外傾し、内端・外端ともに丸くおさめる。風化が著しく調整不明。口径27.2cm。24は胴部上半が直立し、口縁部は形の整った三角口縁となる。内端・外端ともシャープに仕上げられる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径35.0cm。25は口縁部付近がやや内傾し、口縁部は三角口縁に近い短い逆L字状口縁となる。内端・外端とも丸くおさめられる。風化が著しく調整は不明。口径28.0cm。26は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。上面はほぼ水平に伸び、内端は丸味を有し、外端はシャープに仕上げ



第149図 ピット出土土器実測図④ (1/3)

られる。外面の口縁部には粘土帯貼付の際の指圧痕認められる。口縁部は横ナデ、胴部は風化が著しく調整不明。口径28.0cm。27は胴部上半が直立し、口縁部は小さな三角口縁となる。外面の口縁部下には一条の沈線を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面は縦指ナデ、外面は単位の短い縦ハケ目。口径28.0cm。28は口縁部付近が直立し、口縁部は外側にやや長く伸びた三角口縁となる。上面は外傾し、内端は尖り気味に仕上げる。外面の口縁部下には一条の三角突帯を巡らす。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目。口径31.4cm。29は胴部上半が直立し、口縁部は逆L字状口縁となる。上面はやや内傾し、内端はわずかに突出し、外端は器壁が肥厚する。外面の口縁部下に一条の三角突帯を巡らす、突帯は台形に近い形状となる。胴部の器壁は薄い。風化が著しく調整は不明。口径32.5cm。30は口縁部付近が内傾し、口縁部は逆L字状となる。上面は丸味を帯びて内傾し、内端は短く突出し、外端は丸く仕上げられる。口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ目。口径28.0cm。

31~45は甕の底部。31は底面が大きく窪み、底部が高台状になる。裾はあまり開かない。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ、底径9.0cm。32は底面が大きく窪み、裾が大きく開き、端部は丸味を帯びる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.2cm。33はあまり高くはならない。底面はやや窪み、裾が少し開いて端部は比較的シャープにおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.6cm。34は底面の器壁は厚いものの、あまり高くはならない。底面はわずかに上げ底となり、裾が短く開く。端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.8cm。35は高い底部である。底面が平坦で裾が開き、端部はシャープにおさめる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.3cm。36もやはり高い底部。底面は平坦で裾が長く開き、端部はシャープに仕上げる。風化が著しく調整は不明。底径5.8cm。37は底面がほとんど窪まず柱状の高い底部となる。裾が開き端部は比較的シャープに仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.0cm。38は底部が厚いものの、高くはならない。底面はやや上げ底となり、端部はシャープにおさめる。裾は開かず直立する底部となる。風化が著しく調整は不明。底径7.1cm。39は底面中央がやや窪み、端部は比較的シャープに仕上げる。裾は開かず直立する。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.1cm。40は底面が上げ底となり端部はシャープに仕上げられる。底面の器壁は薄い。裾は開かず短く直立した底部となる。風化が著しく調整不明。底径7.4cm。41は底面が大きく上げ底となり高台状になる。端部は比較的シャープに仕上げる。裾はわずかに開く。風化が著しく調整は不明。底径7.4cm。42は底面が上げ底となり端部で接地する。端部はシャープに仕上げられる。裾は開かず直立する。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径7.3cm。43は底面が上げ底となり端部はシャープに仕上げられる。裾は開かず短く直立する。風化が著しく調整は不明。底径7.0cm。44は底面がわずかに窪み、端部はシャープに仕上げられる。底面の器壁はあまり厚くない。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径8.3cm。45は大型の甕底部。底面は平坦で端部はシャープな稜をなし、裾は開かず直立した底部となる。底面の器壁は厚いものの、高くはない。内面ナデ、外面縦ハケ目、底面ナデ。底径12.7cm。

鉢(46) 46は底面中央が深く窪み、高台状をなす。裾は開かず直立し、高い底部となる。胴部は半球形の深いもので、口縁部付近はやや内傾する。口縁部は短く外側に折り曲げられ、上面は外傾する。端部は内端、外端とも丸くおさめられる。口縁部は内外面横ナデ、胴部は内面上半が横ヘラミガキ、下半が風化のため調整不明、外面上半は横ヘラミガキ、下半は縦ヘラミガキを行う。口径



第150図 ピット出土土器実測図⑤ (1/3)

21.8cm、底径6.7cm、器高14.5cm。

高坏 (47) 47は坏部上半を欠失する高坏。裾は短く直線的に開き、端部は丸くおさめる。柱部は比較的長く、坏部はあまり開かず緩く内湾しながら上外方へと伸びる。坏部内面縦ヘラミガキ、外面は風化が著しく調整不明。裾部内面ナデ、外面にはわずかにハケ目が観察される。裾部径10.7cm、柱部径2.8cm。

蓋 (48) 48は甕の蓋。上半は直線的に開き、裾部付近はわずかに屈曲し、さらに開く。端部は面取りして四角くおさめる。内外面ともハケ目調整を行う。裾部径22.9cm。

器台 (49・50) 49は径があまり大きくなくスリムな器台。裾はあまり開かず、端部は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。裾部径6.2cm。50は器壁が非常に厚く、支脚と呼んだ方が妥当かもしれない。裾はやや開き、端部を面取りして広く接地する。裾部径7.2cm。

土師器

小皿 (51~55) 51は底部糸切りの小皿。底部に板状圧痕が明瞭に残る。口径6.7cm、底径5.5cm、器高1.2cm。52もやはり底部糸切り。口径7.9cm、底径6.9cm、器高1.3cm。53は風化が著しく底部調整不明。口径9.1cm、底径7.4cm、器高1.2cm。54は底部ヘラ切り。口径9.2cm、底径6.6cm、器高1.5cm、55は底部糸切り。口径10.0cm、底径8.0cm、器高1.3cm。

鉢 (56) 56は三角形の鉢。底部は丸く、体部は直線的に開く。口縁部は丸くやや器壁が薄くなる。内面ハケ目、外面横ヘラミガキを行う。口径12.8cm、器高5.0cm。

椀 (57) 57は口縁部がやや内傾する椀。口縁部は横ナデ、体部下半はヘラケズリを行う。口径15.6cm。58は体部上半が屈曲し、外反しながら立ち上がる。上半は横ナデ、体部下半の内面はナデ、外面はヘラケズリ。口径16.6cm。59は椀としたが、高坏の可能性もある。体部がやや内湾しながら大きく開く。口縁部は横ナデ、体部は内外面横ヘラケズリ。胎土が他と比べて非常に精良である。口径16.0cm。60・61はほぼ同形の椀。体部が浅く、口縁部から直立し、端部は丸くおさめる。全面横ナデ調整。61は60と比べて更に浅い。

坏 (62・63) 62は平坦な底部から体部が屈曲し、直線的に開く。体部は横ナデ、底部内面はナデ、外面はヘラケズリ。口径13.4cm、底径9.2cm、器高3.2cm。63は62よりも体部の開きが大きい。体部は横ナデ、底部内面はナデ、外面はヘラケズリの後にナデを行う。口径13.4cm、底径8.2cm、器高3.5cm。

壺 (64~66) 64・65は小型丸底壺である。64は胴部が扁球形で最大径が中位にある。頸部はよく締まり、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部内面は横ハケ目の後横ナデ、外面は斜ハケ目、胴部内面は横ナデで接合痕が明瞭に残る。外面は上半が斜ハケ目、下半から底部にかけてヘラケズリを行う。口径7.6cm、胴部最大径9.6cm、器高17.4cm。65は頸部があまり締まらず口縁部は内湾しながら立ち上がる。器表が風化しており調整は不明だが、一部化粧土が残る。口径11.2cm。66は中型壺の口縁部。わずかに内湾しながら開く。全面横ナデ調整を行う。口径14.4cm。

高坏 (67~71) 67は高坏の柱部。裾は接合部から緩やかに外反しながら開く。内面横指ナデ、外面ナデ。坏部との接合部には指圧痕が明瞭に認められる。68は完形品。坏部は下方で不明瞭に屈曲し、上半は直線的に開く。端部はわずかに外反している。脚部は接合部から直線的に開き、裾部は屈曲してさらに大きく開き、端部で接地する。裾の屈曲部は内面では稜を有すものの、外面には稜

は認められない。全体的に風化が著しく調整不明。口径20.0cm、裾部径13.7cm、器高16.2cm。69は坏下半部。屈曲部外面には明瞭な稜が認められる。内面はヘラ状工具による横ナデ、外面はハケ目調整を行う。70は脚柱部。わずかに外反しながら徐々に開く。風化が著しく調整不明。71は裾部が屈曲して大きく開き、端部はわずかに上方に跳ね上げる。風化が著しく調整不明。裾部径14.0cm。

甕 (72~80) 72は肩が張らず、口縁部は緩く外反して端部を丸くおさめる。口縁部横ナデ、胴部内面縦ヘラケズリ、外面は強い二次加熱を受け器表が剥離する。口径20.4cm。73は胴部上半がやや内傾し、口縁部は緩く外反する。風化が進んでおり調整は不明。口径23.6cm。74は頸部がよく締まり、口縁部が外反しながら開く。端部は面取りを行う。口縁部横ナデ、胴部内面横ヘラケズリ、外面は風化が著しく調整不明。口径17.2cm。75は小型の甕。胴部は肩が張らず、口縁部は器壁が厚く、外反しながら直立する。口縁部は横ナデ、胴部内面は横ヘラケズリ、外面は器表が剥離する。甕にしては胎土が精良。口径13.6cm。76は胴部が丸味を帯び、口縁部は強く外反しながら開く。端部は器壁が薄く、尖り気味に仕上げる。口縁部横ナデ、胴部内面ヘラケズリ、外面はハケ目のようにも見えるが風化が著しく不明。口径20.6cm。77は肩部が強く内傾し、口縁部は強く外反しており端部は外傾する。口縁部は横ナデ、胴部内面は斜ヘラケズリ、外面は縦ハケ目。口径22.0cm。78は頸部が強く内傾し、口縁部は強く外反する。口縁部は胴部に比べて器壁が厚くなる。口縁部横ナデ、胴部内面斜ヘラケズリ、外面は細かい縦ハケ目。口径24.2cm。79は肩部が直線的に内傾し、口縁部が緩く外反する。端部上面は面取りを行い部分的に平坦面を形成する。胴部に比べて口縁部の器壁は厚い。口縁部横ナデ、胴部内面縦ヘラケズリ、外面は風化が著しく調整不明。口径26.0cm。80は肩部が張らず、口縁部は大きく外反する。胴部に比べて口縁部の器壁が厚くなる。口縁部横ナデ、胴部内面横ヘラケズリ、外面縦ハケ目。口径28.8cm。

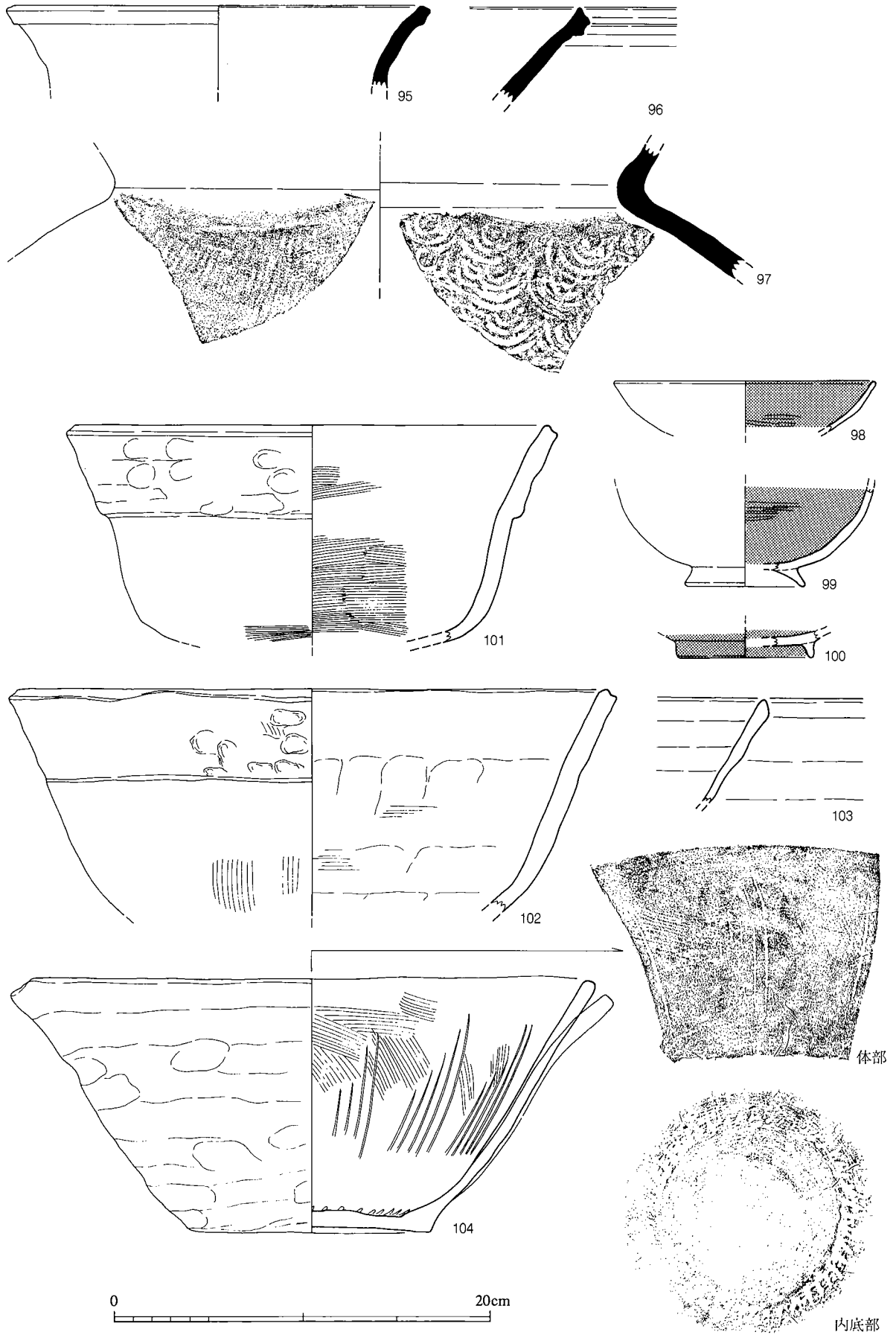
須恵器

壺 (81・82) 81・82はともに初期須恵器の部類に入る。81は壺の頸部片。低い三角突帯の間に緻密な櫛描波状文を巡らす。内面は横ナデ調整を行う。82は胴部片。縦方向のタタキの後に沈線を巡らす。内面はナデ調整を行う。

蓋 (83~87) 83は内側に短いカエリを有した坏蓋。天井部外面には「×」状のヘラ記号がある。口径15.4cm。84も内側に短いカエリを有す。天井部外面には「一」状のヘラ記号がある。口径16.4cm、器高2.9cm。85もやはり内側に短いカエリを有す。口径16.6cm、器高2.9cm。86は天井部が平坦で、低平なツマミが付く。87は口縁部が短く直角に屈折し、端部はシャープに仕上げる。口径18.0cm。

坏 (88~93) 88は高台の付かない坏。体部は直線的に開く。89は底部のやや内側に高く端部が外折した高台が付く。体部はわずかにS字状のカーブを描く。口径13.0cm、高台部径8.8cm、器高4.0cm。90もやはり底部のやや内側に高く端部が外折した高台が付く。体部はS字状のカーブを描く。口径13.2cm、高台部径8.0cm、器高5.1cm。91は体部が浅く、高台は直線的になる。口径14.2cm、高台部径7.4cm、器高4.2cm。92は体部が深く直線的に開く。高台はやや高く直線的に開き、端部は丸くおさめる。口径13.4cm、高台部径9.6cm、器高6.4cm。93は低い台形状の高台となる。高台部径11.8cm。

高坏 (94) 94は高坏の柱部。中位に二条の幅の広い沈線を巡らす。全面横ナデ調整を行い、外面にはシボリ痕を残す。最小径5.0cm。



第151図 ピット出土土器実測図⑥ (1/3)

甕 (95~97) 95は口縁部が外反し、端部を玉縁状に拡張させる。全面横ナデを行う。口径22.4cm。96は口縁部が直線的に開き、端部外面下に一条の三角突帯を巡らす。上端は尖る。全面横ナデ。97は甕の肩部。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕。頸部径28.0cm。

黒色土器

坏 (98) 98は内面黒色土器の坏。風化が著しいが、内面にはわずかに横ヘラミガキが観察される。口径14.0cm。

椀 (99・100) 99は内面黒色土器の椀。高台が直線的に開き、端部を丸くおさめる。体部は深く、全体的に丸味を帯びて立ち上がる。内面にわずかに横ヘラミガキが観察される。高台部径6.4cm。100は両面黒色土器の椀。高台は短くほとんど開かずに直立する。端部は丸くおさめる。内面はヘラミガキ、高台部は横ナデ。高台部径7.0cm。

土師質土器

鍋 (101・102) 101・102は土師質土鍋。101は底部が平底に近く、体部はやや外反気味に開く。体部中位の外面に明瞭な段を有し、段以上は器壁が厚くなる。口縁部は面取りし、四角くおさめる。口縁部は横ナデ、体部内面は細かい横ハケ目、外面は著しい二次加熱を受け器表が剥離するものの、上半には指圧痕が多く残る。底部付近は横ハケ目。口径26.0cm。102は体部が直線的に開き、やはり外面中位に沈線状の段を有す。口縁部は面取りして四角くおさめる。口縁部は横ナデ、体部内面はかすかに横ハケ目が観察される。体部外面は縦ハケ目で上半には指圧痕が認められる。外面には炭化物が多く付着する。口径16.0cm。

瓦質土器

こね鉢 (103) 103は瓦質こね鉢。体部は直線的に開き、口縁部は三角形に仕上げ上端が上方に尖る。全面横ナデ調整を行いロクロ目が明瞭に残る。

播鉢 (104) 104は瓦質播鉢。底面はやや上げ底となり、体部は直線的に開いて口縁端部は面取りし、四角くおさめる。口縁部の相対する二ヶ所に片口を配置する。内面には5本を一単位とする播目を入れる。口縁部は横ナデ、体部内面はハケ目の後に播目、内底面は横ナデで、播目を入れた際の工具痕が輪状に残る。外面はナデを行い整形時の指圧痕が残る。口径32.0cm、底径12.8cm、器高18.6cm。

陶器

壺 (105) 105は備前系陶器の壺肩部。肩部が大きく張り、頸部に向かって強く内傾する。調整は全面横ナデ。色調は茶色~茶灰色を呈す。肩部径28.4cm。

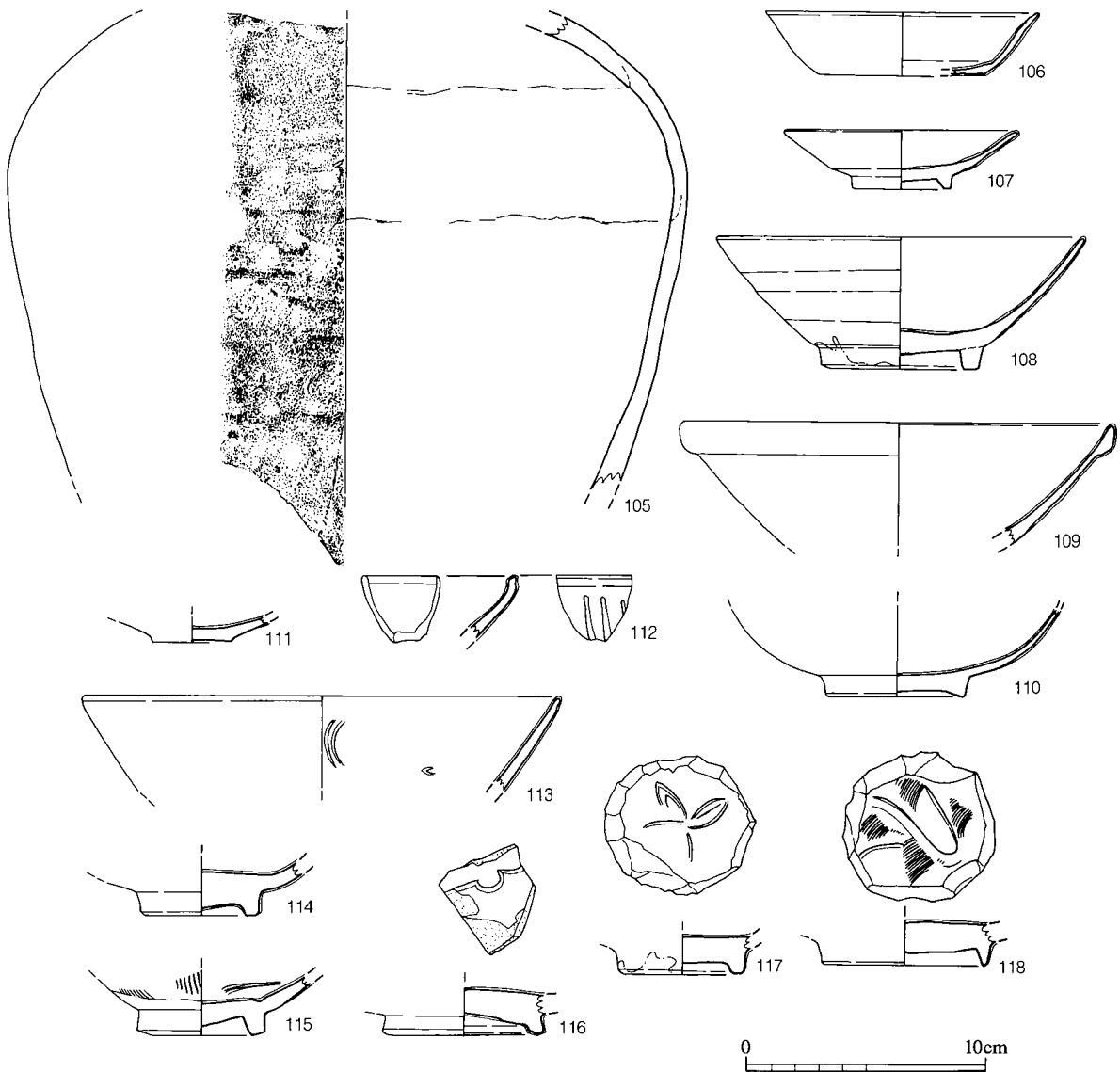
磁器

白磁

皿 (106・107) 106は底部が平底で体部が直線的に開き、口縁部が尖る。内面の体部と底部の境に沈線状の段を巡らす。口縁部内面のみ露胎とする。口径11.5cm、底径7.0cm、器高2.7cm。107は台

形状の低い高台が付く。体部は大きく開き、外面の中位に一見屈曲したように見える稜線を巡らす。口縁端部は丸くおさめる。底部外面は露胎、内面は見込みの釉を輪状に掻き取る。口径9.8cm、高台部径4.2cm、器高2.5cm。

椀 (108~110) 108は断面四角形のしっかりした高台を有し、体部はわずかに内湾しながら開く。内面は見込みの釉を輪状に掻き取る。外面は高台付近から内側が露胎となる。釉はやや黄色味を帯びる。口径15.4cm、高台部径6.6cm、器高5.6cm。109は体部が直線的に開き、口縁部は玉縁とする。外面の底部付近は露胎となる。釉色は乳白色を呈す。口径18.2cm。110は高台部内面の器壁が厚い。高台は低い三角形で端部は丸く仕上げる。体部は丸味を帯び大きく開く。内面は全面施釉、外面は体部下半から内側が露胎となる。内面には細かい貫入が多く入る。釉色は乳白色を呈す。高台部径5.9cm。



第152図 ピット出土陶磁器実測図 (1/3)

青磁

皿(111) 111は底面がわずかに上げ底となり、体部は大きく開く。内面は全面施釉、外面は底部付近が露胎となる。底径3.1cm。

椀(112~118) 112は口縁端部が上方に屈曲し、端部を丸くおさめる。外面には半肉彫りの縦平行線を施文する。釉色は緑灰色を呈し、全体に貫入が入る。113は体部上半が直線的に開く。内面にはヘラ描きの草花文様を入れる。全面施釉で貫入が入る。口径20.0cm。114は底部の器壁が非常に厚い。高台は低く外端部を削り取る。内面は全面施釉、外面は畳付のみ露胎となる。高台部径7.1cm。115は高台が高く内端で接地する。内面の底部と体部の境には沈線状の段を巡らす。内外面にヘラ描き、櫛描きの文様を施文する。釉は外面の高台部付近のみ露胎となる。高台部径5.4cm。116は底部の器壁が非常に厚く、高台は丸く短くつくられる。内面には草花状の文様をヘラによる半肉彫りで施文する。外面の高台内側のみが輪状に露胎となる。釉色は緑灰色に発色する。高台部径6.8cm。117は底部の器壁が非常に厚く、高台は短く丸味を帯びる。内面にヘラ描きの半肉彫りの草花文を施文する。高台部外面から内側にかけて露胎となり、釉色はオリーブ色に発色する。高台部径5.4cm。118は底部の器壁が非常に厚い。高台は器壁が薄く三角形に仕上げ、外端部を削り取る。内面にヘラ描き、櫛描きの草花文を施文する。釉は緑灰色に発色し、畳付から内側が露胎となる。高台部径7.0cm。

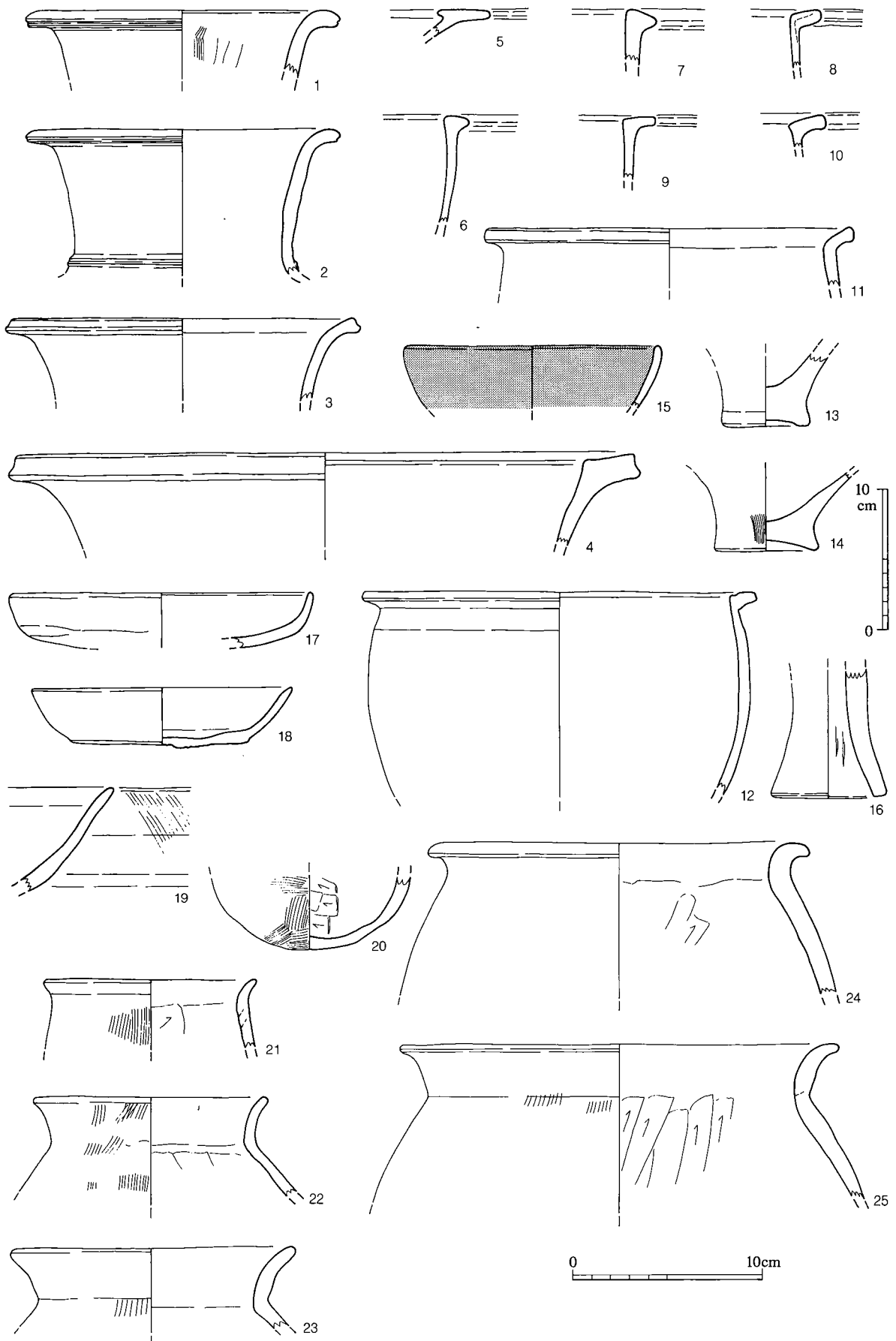
包含層その他出土土器・磁器(図版71、第153・154図)

弥生土器

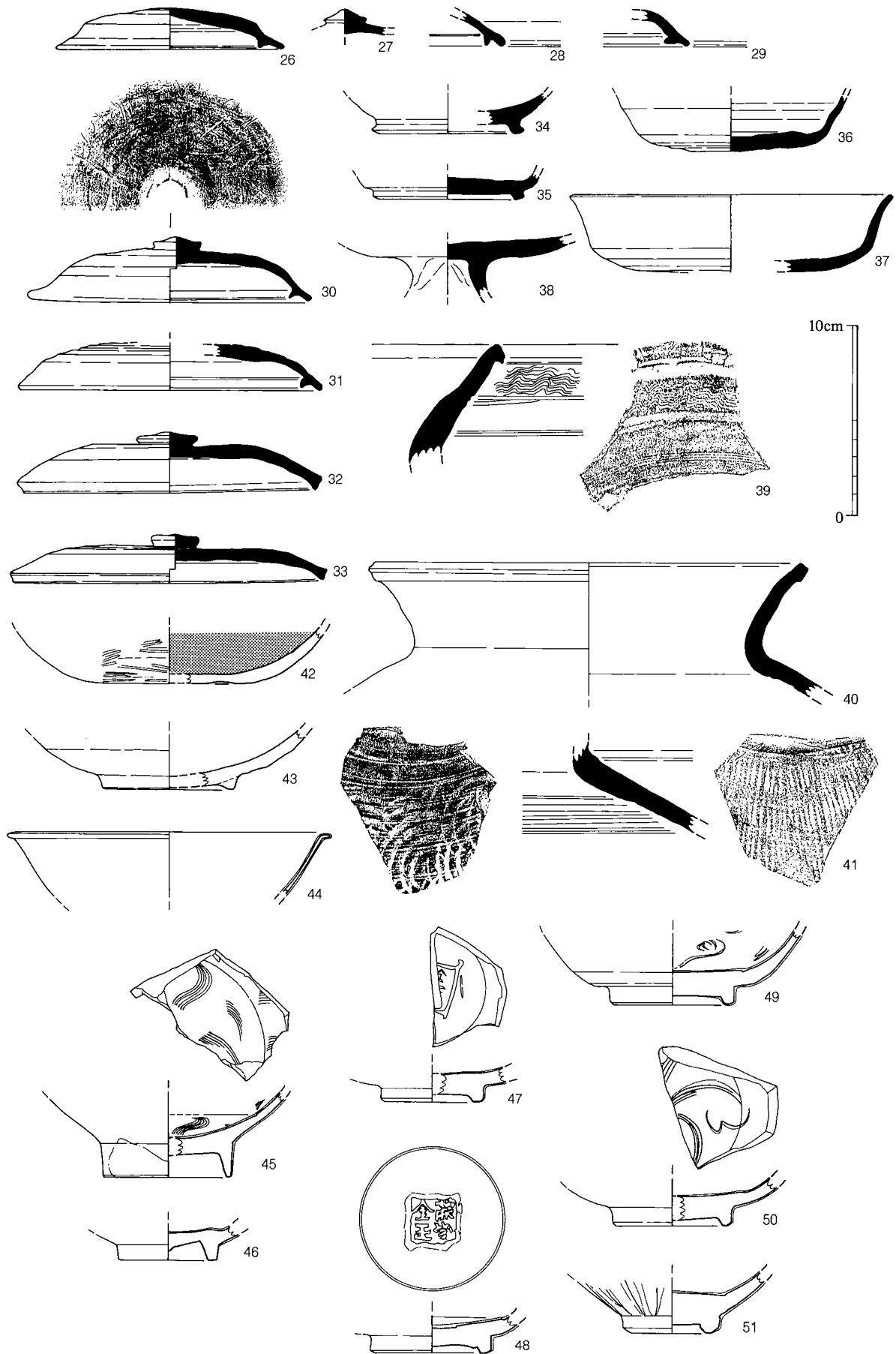
壺(1~5) 1は口縁部が大きく外反し、上面が外傾する。端部には一条の沈線を巡らす。口縁部横ナデ、頸部内面縦ハケ目で指圧痕が残る。外面は風化のため調整不明。口径22.0cm。2は頸部が長くあまり開かず立ち上がり、口縁部は短く強く外反し、上面は水平になる。端部には一条の沈線を巡らす。外面の頸肩境には一条のM字突帯を巡らす。口縁部と突帯付近は横ナデ、それ以外は全面ナデ調整を行う。口径22.0cm、頸部最小径15.4cm。3は頸部が外反しながら伸び、口縁部はさらに強く外反する。口縁端部は面取りし、わずかに上下に拡張させた形となる。風化が著しく調整不明。口径25.0cm。4は大型の壺。頸部が大きく開き、口縁部は粘土帯を貼付して肥厚させる。内端はやや突出し、外下端もわずかに突出する。風化が著しく調整不明。口径44.0cm。5は頸部が大きく開き、口縁部は水平に長く伸びる。内端は三角形に突出し、外端は丸くおさめる。全面横ナデ調整を行い、外面にはわずかに化粧土が認められる。

甕(6~14) 6・7は三角口縁の甕。6は胴部上半が直立し、口縁部は形の整った三角口縁で上面はほぼ水平になる。風化が著しく調整不明。7は口縁部付近が直立し、口縁部は形の整った三角口縁となり、上面は外傾する。風化が著しく調整不明。

8~12は逆L字状口縁の甕。8は小片で傾きに不安が残る。口縁部付近がわずかに内傾し、口縁部は上面が直線的に内傾する。内端は丸味を帯び、外端は面取りして四角くおさめる。風化が著しく調整不明。9は口縁部付近が直立し、口縁部は短く水平に伸びる。内端はしっかりとした稜を有し、外端は丸くおさめる。風化が著しく調整不明。10は口縁部内端がわずかに突出し、上面は内傾する。外端は丸味を帯びるものの面取り整形しており、平坦面を形成する。11は如意形口縁に近く、屈折する口縁部となる。胴部上半が内傾し、口縁部は強く外側に屈折する。外端は面取りする。風



第153図 包含層その他出土土器実測図 (1~16 : 1/4、17~25 : 1/3)



第154図 包含層その他出土土器・磁器実測図 (1/3)

化が著しく調整不明。口径26.0cm。12は胴部が丸味を帯び口縁部が内傾する。口縁部は上面がやや内傾し、内端はしっかりした稜を有し、外端は面取りする。風化が著しく調整不明。口径27.6cm。

13・14は甕の底部。13は底面がやや窪み、裾が短くわずかに開く。風化が著しく調整不明。底径6.2cm。14は底面が上げ底となり裾がやや開く。端部はシャープにおさめる。内面ナデ、外面細かい縦ハケ目、底面ナデ。底径7.3cm。

鉢 (15) 15は内外面丹塗りの鉢。全面ナデ調整を行う。口径18.0cm。

器台 (16) 16は裾部がやや開き、端部を面取りして四角くおさめ、内端で接地する。風化が進むものの、内面には縦方向の工具痕が認められる。裾部径8.2cm。

土師器

椀 (17) 17は体部が浅く、口縁部から直立する。風化が著しく調整不明。口径16.0cm。

皿 (18) 18は底部糸切りの皿。底面には板状圧痕が残る。体部は横ナデ。口径13.6cm、底径9.4cm、器高3.2cm。

高坏 (19) 19は高坏の坏部片。屈曲部は不明瞭で、体部上半は直線的に開き、端部は尖り気味にシャープに仕上げる。内面はナデ、外面はハケ目。

壺 (20) 20は小型壺の底部。内面横ヘラケズリ、外面ハケ目。

甕 (21~25) 21は胴部上半が直立し、口縁部がわずかに外反する。端部は尖り気味におさめる。口縁部横ナデ、胴部内面ヘラケズリ、外面縦ハケ目。口径11.2cm。22は頸部が締まり壺に近い形状となる。口縁部は外反するが、あまり開かない。口縁部は横ナデを行うが、外面に縦ハケ目が残る。胴部内面はヘラケズリ、外面は縦ハケ目。口径12.3cm。23は頸部が締まり、口縁部は外反しながら開く。口縁部の器壁は厚い。口縁部横ナデ、胴部内面ヘラケズリ、外面縦ハケ目。口径15.0cm。24は肩部が張らず緩やかに内湾しながら内傾し、口縁部が短く強く外反し、上面が外傾する。端部は尖り気味におさめる。口縁部は横ナデ、胴部内面は縦ヘラケズリ、外面は風化が著しく調整不明。口径20.0cm。25は肩部が張らず直線的に内傾し、口縁部は緩やかに外反する。口縁部横ナデ、胴部内面縦ヘラケズリ、外面にはわずかに縦ハケ目が残る。口径22.9cm。

須恵器

蓋 (26~33) 26は壺蓋。内面に短いカエリを有し、天井部外面にはツマミが付かない。口径12.0cm、器高2.1cm。27は三角形のツマミ部片。径2.4cm。28・29は内面に短いカエリが付くもので、外面には出ないものの未だ形骸化していない。30は内面に短くシャープなカエリを有するもので、外天井部にヘラ記号を有す。口径15.0cm、器高3.5cm、ツマミ部径2.5cm。31もやはり内面に短いカエリを有す。口径16.0cm。32は内面にカエリを持たず、口縁部は短く下方を向き、三角形に仕上げる天井部には低いツマミを有す。口径15.4cm、器高3.4cm。33は器高が低く低平な蓋。端部は短く下方を向き、三角形になる。天井部には低いツマミを有す。口径16.4cm、器高2.6cm。

坏 (34~37) 34は端部が外側に短く折れ曲がる低い高台部を有し、内端で接地する。高台部径8.0cm。35は低い台形状の高台部を有し、内端で接地する。高台部径8.0cm。36・37は無高台の坏。どちらも体部は外反しながら開く。36は底径8.6cm、37は口径17.0cm、底径10.0cm、器高4.0cm。

高坏 (38) 38は高坏の接合部片。全面ナデ調整を行い、脚部内面にはシボリ痕が認められる。

甕 (39~41) 39は甕の口縁部片。口縁部は直線的に開き、口縁下端部に三角突帯を巡らす。外面口縁部下には櫛描き波状文、沈線を巡らす。口縁部上面から内面は横ナデ。40は口縁部が直線的に開き、端部は肥厚して玉縁状に仕上げる。口縁部は横ナデ、胴部内面は同心円当て具痕、外面は格子目タタキ。口径23.0cm。41は肩部片。内面同心円当て具の後横ナデ、外面は平行タタキ。

黒色土器

椀 (42) 42は内面のみ黒色にする。外面にのみヘラミガキが認められる。内面は不明。また底面は風化が著しく、高台を有したのかどうかも不明。

瓦器

椀 (43) 43は低い三角形の高台が付く瓦器椀。風化が著しく調整不明。高台部径7.0cm。

白磁

椀 (44・45) 44は口縁部を短く水平に折り曲げた椀。口径17.0cm。45は高台部が高くシャープで、体部内面には櫛による文様を入れる。また内面の体部と底部の境に一条の沈線を巡らす。高台部外面から内側は露胎となる。高台部径6.8cm。

青磁

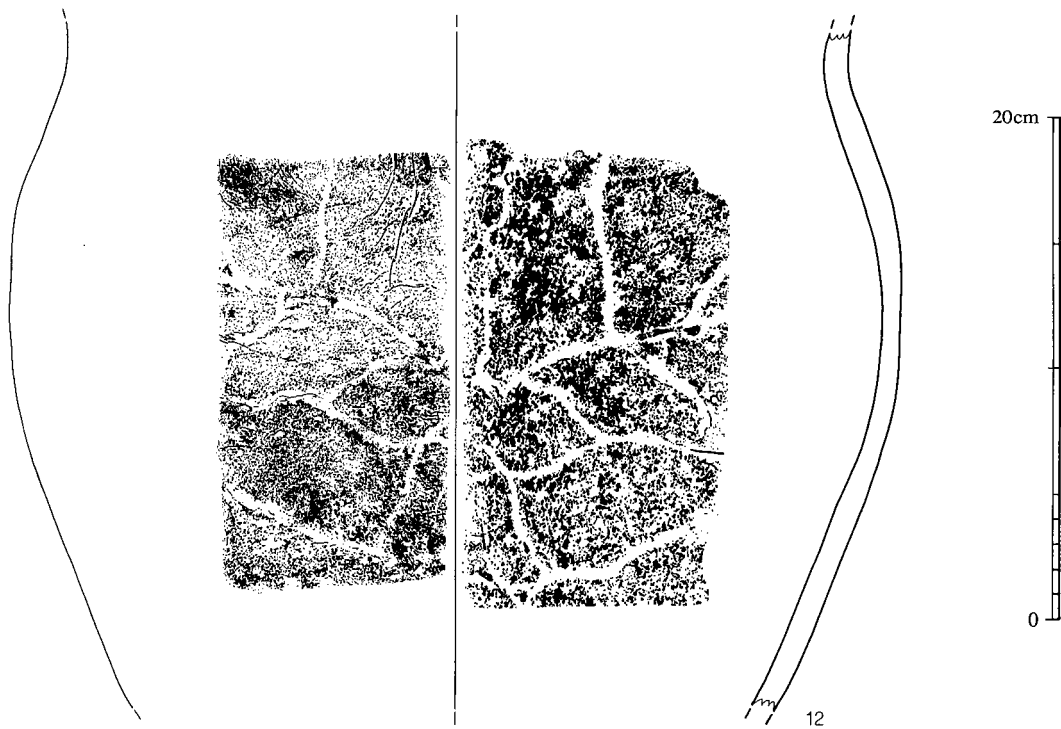
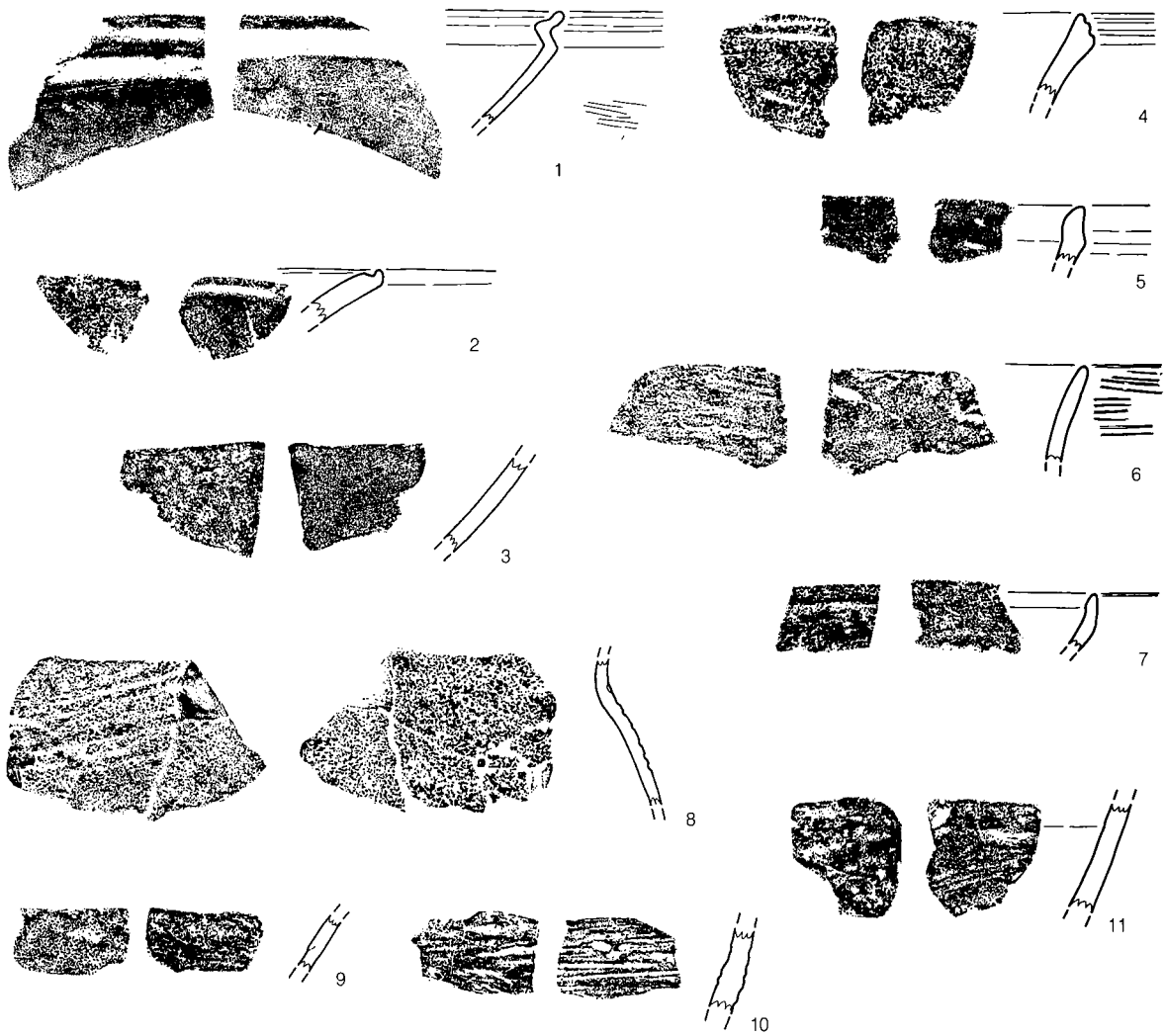
椀 (46~51) 46は高台部が比較的高く、整った台形状をなす。高台部から内側は露胎となる。高台部径5.2cm。47・48は内面に「金玉満堂」の吉祥句を刻印する。どちらも高台部は低い台形状をなし、外端部を削り取る。畳付から内側は露胎となる。47は高台部径5.4cm、48は高台部径6.5cm。49は底面の器壁が厚く、高台は低い台形状で外端部を削り取る。内面には半肉彫りの草花文を入れる。両面とも大きめの貫入が入る。高台部の内側のみが露胎となる。高台部径6.6cm。50は底部の器壁が厚く、高台は低い台形状を呈し、外端部を削り取る。内面には半肉彫りの草花文を入れる。底部の畳付から内側が露胎となる。底径6.4cm。51は底部の器壁が厚く、高台部は低い台形状となり外端部を削り取る。内面の体部と底部の境に沈線状の段を有し、外面には鎬蓮弁を配置する。底部の畳付より内側が露胎となる。高台部径5.2cm。

縄文土器 (図版72、第155図)

弥生時代以降の土器に混じって、縄文時代の土器や石器が散布する場所があった。このうち、縄文時代包含層と思われる黄褐色土が残る調査区東端にグリッドを設定し、掘削を行った。その結果、遺構はピットのみ、遺物は石皿1点、石斧1点と結果は芳しくはなかったものの、縄文時代の遺構・遺物を確認することができた。

これ以外に調査区西端でもやはり縄文時代遺物の出土をみたので何か所かに試掘トレンチを設定したが、やはり満足な結果は得ることができなかった。

浅鉢 (1~3) 1は縄文時代晩期初頭の精製浅鉢。肩部で内側に屈折し、すぐ上で弱い稜をもって外反する。口縁部外面は弱いながら稜を持ち、斜め上方に立ち上がる。口縁内面は袂り状の沈線



第155図 縄文土器実測図 (1/3)

を施し段を形成する。色調は明るい灰色。調査区北東端の遺構面出土。2は晩期後半頃の浅鉢。口縁部が大きく開き、端部内面に幅広の沈線を巡らす。風化が著しく調整は不明。調査区南東端に位置する48号土坑出土。3は後期末～晩期の精製浅鉢の胴部。調査区西端のピット出土。

深鉢（4～12） 4～6は深鉢の口縁部。4は縄文後期の有文深鉢。口縁端部を肥厚させ、外面に二条の沈線を巡らす。風化が著しく縄文の有無は不明。調査区西端の39号溝から出土。5は後期末～晩期初頭の肩部が屈曲し、頸部が外反する深鉢の口縁部。口頸境で屈曲し、口縁はやや外反気味におさめる。屈曲部外面はやや肥厚する。調査区西端出土。6は縄文晩期の粗製深鉢。緩く外反し、端部を丸くおさめる。内面はナデ、外面は二枚貝条痕調整。調査区西端の遺構面出土。7は晩期初頭の肩部が屈曲し、頸部が外反する深鉢。口頸境の屈曲が弱く、全体的に内湾する。口縁内面には段を形成する。調査区西端の遺構面出土。

8～12は胴部。8は後期の有文鉢。頸胴境に逆C字状の刺突文を施し、胴部上半に数条の沈線を巡らす。全体的に風化が著しい。調査区西側の3号掘立柱建物跡付近から出土。9は後期～晩期の鉢胴部片。調査区西端のトレンチ出土。10は晩期の粗製深鉢の胴部。内外面二枚貝条痕調整。調査区中央付近に位置する土坑105出土。11は後期～晩期の粗製深鉢胴部。内面には巻貝条痕が認められるが外面は風化が著しく不明。調査区西端のトレンチ出土。12は晩期の粗製深鉢胴部。肩部が弱く内傾し、口縁部はやや外反すると思われる。内外面風化が著しい。調査区西端のピット出土。

その他の遺物

土製品・石製品（図版73～78、第156～160図、第2・3表）

土錘（1～19） 1・2は中央が膨らみ端部の径が小さく樽のような形状となる土錘。3～17は管状の土錘。端部の径が小さくエンタシス状となる。7・8・12は樽型に近い形状となる。9～11・16は外面に整形時の指圧痕が明瞭に残り、また17はシボリ痕が認められる。18・19は大型の土錘。中央が丸く膨らみ端部の径が小さく、樽型に近い形状をなす。

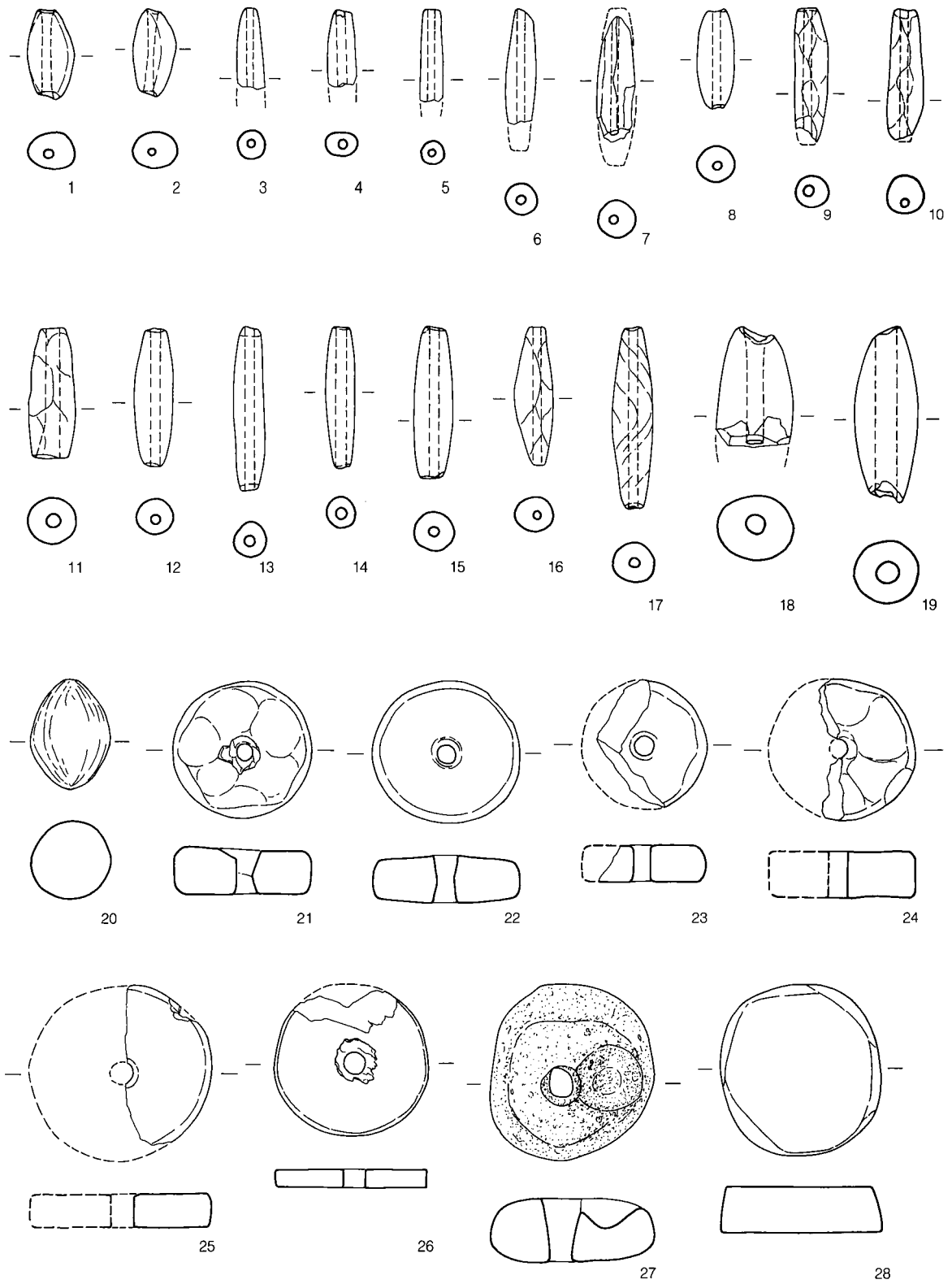
投弾状土製品（20） 20は中期後半の投弾状土製品に比べて中央の径が大きく、丸味を帯びた器形となる。長さ3.55cm、最大径2.5cm、胎土は非常に精良で、作りも丁寧である。

紡錘車（21～26） 21～25は土製紡錘車。21は表面に指圧痕を明瞭に残し、穿孔は両面穿孔を行う。表面には化粧土が認められる。ピット出土である。22は指圧痕を残さずナデ消しており、丁寧な作りとなる。孔は両面穿孔を行う。弥生時代中期初頭の69号土坑から出土した。23は風化が進み端部の稜線も曖昧なものとなる。弥生時代中期初頭の46号土坑出土。24は表面に指圧痕を残し、形状も正円形とならず、歪つな感を受ける。弥生時代中期初頭の25号溝出土。25はやや薄手で稜もシャープであり、丁寧な作りをしたものである。弥生時代中期前半の55号竪穴住居跡からの出土である。

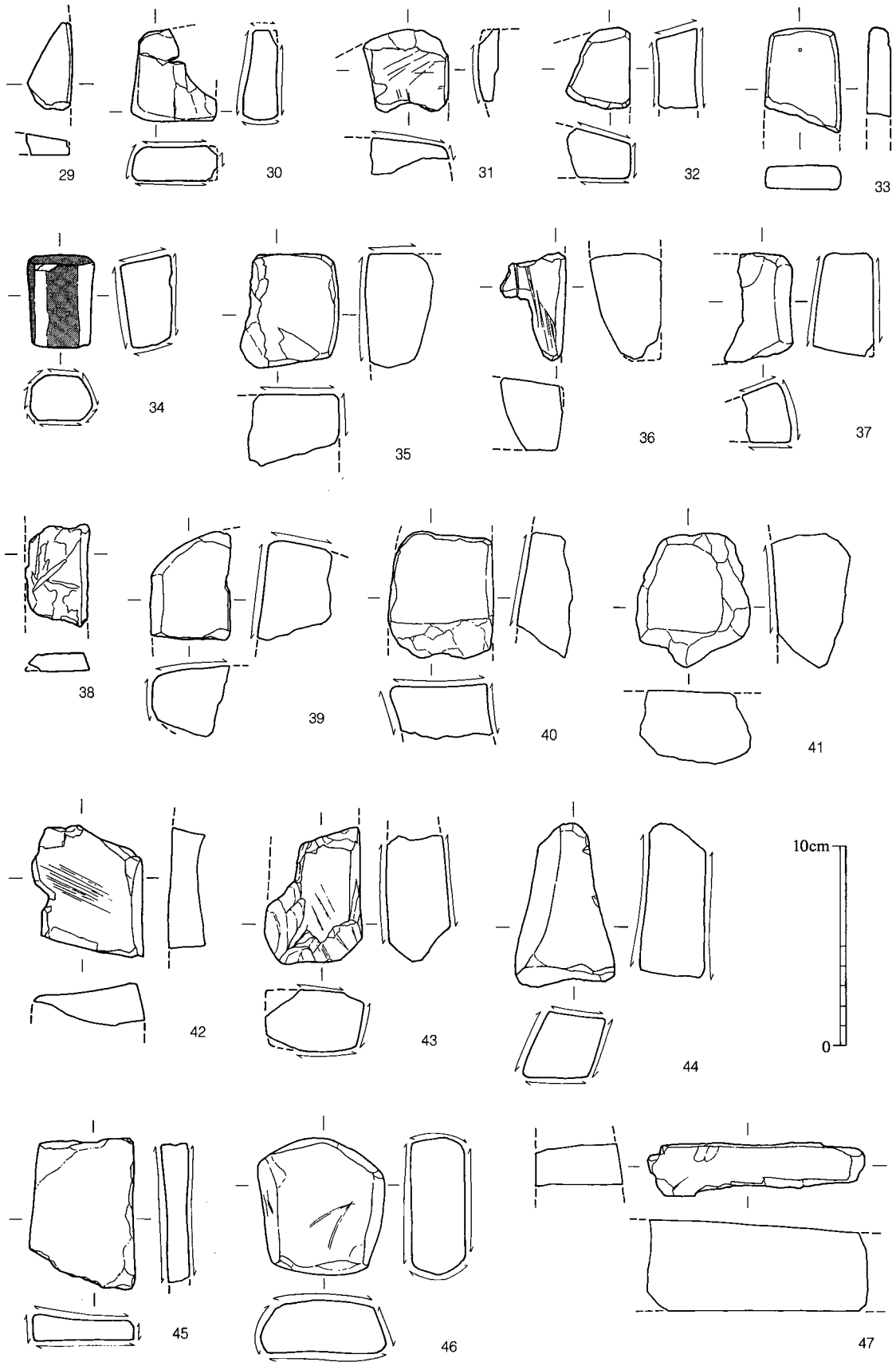
26は石製紡錘車。端部の稜も明瞭で、形状はきれいな正円形を呈し、丁寧な作りである。片岩製。

浮子（27） 27は軽石製の浮子。歪んだ円形を呈し、中央に円孔を穿孔し、その円孔に接して深い窪みを穿つ。端部は丸くはっきりとした稜をなさない。弥生時代中期前半に比定できる21号溝からの出土である。

円板状石製品（28） 28は外端に擦過時の稜線を明瞭に残し、やや不整な円形となる。紡錘車の未製品も考えたが厚みが強く、また凝灰岩製のため可能性は薄いと思われる。弥生時代中期初頭の21号土坑から出土した。

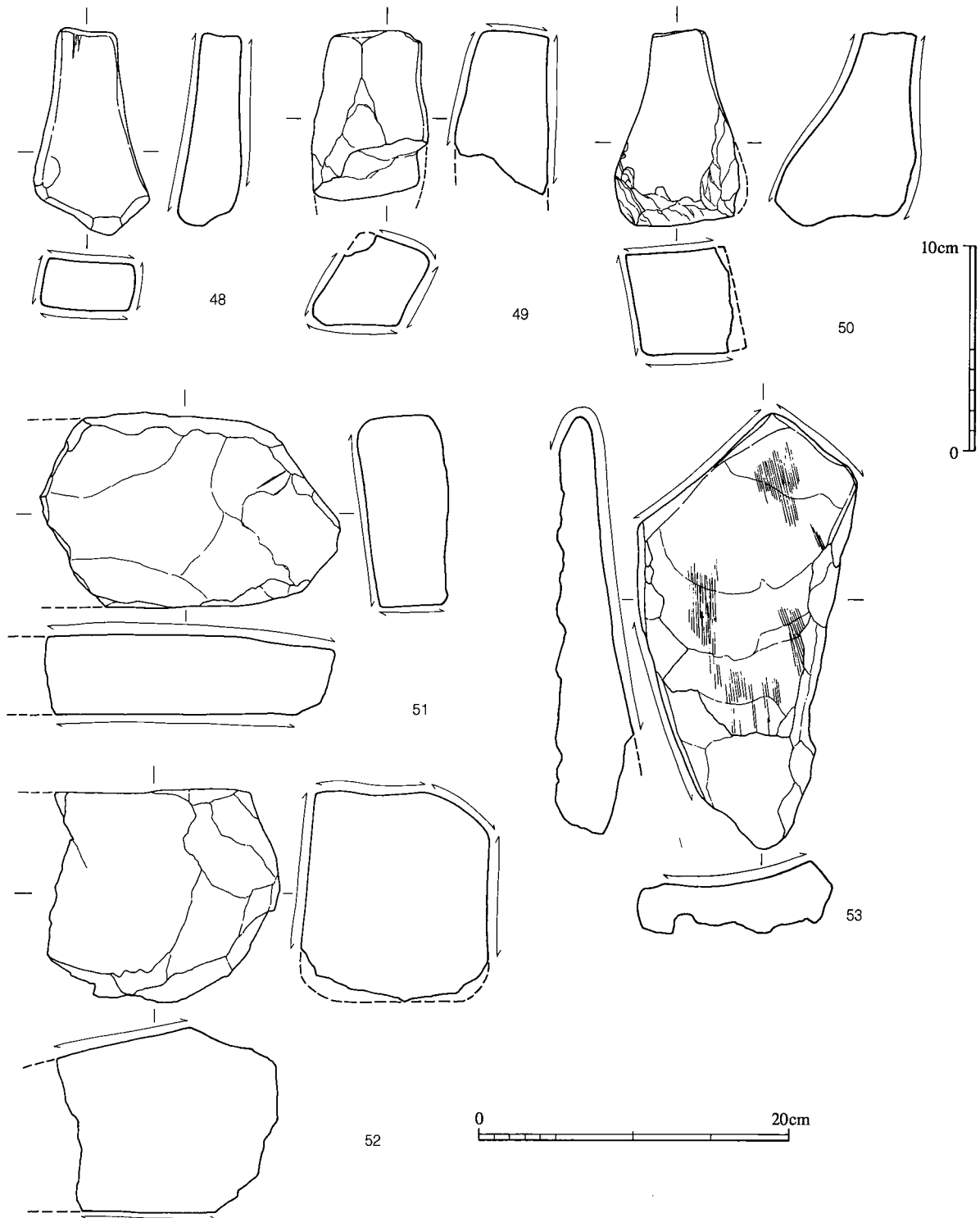


第156图 土製品・石製品実測図 (1/2)

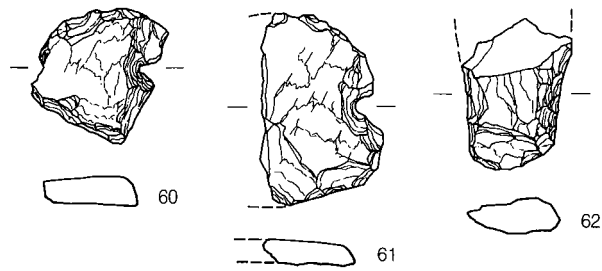
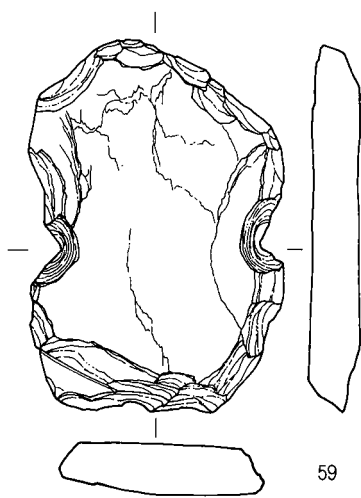
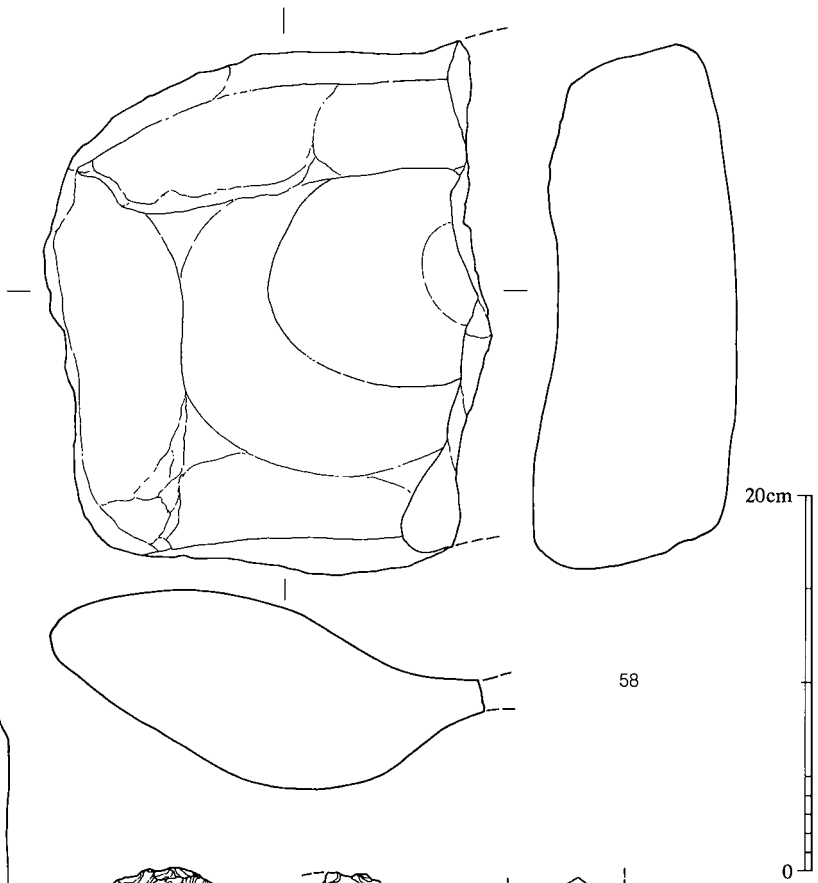
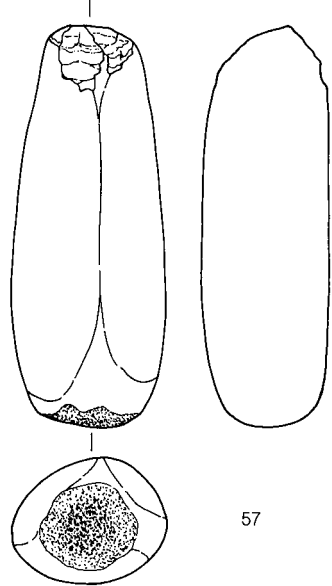
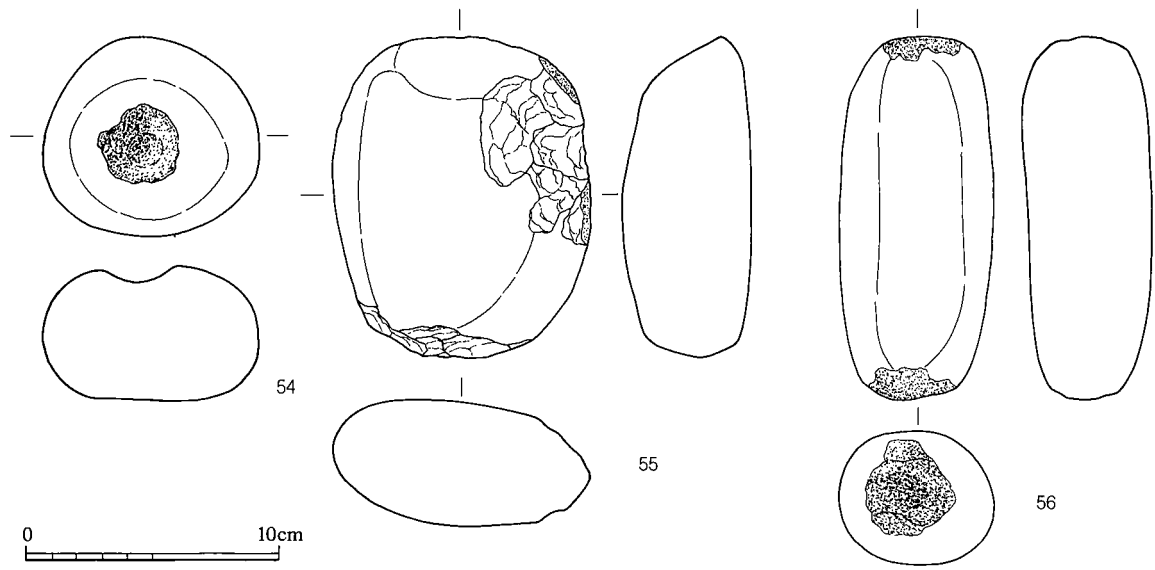


第157図 石製品実測図① (1/3)

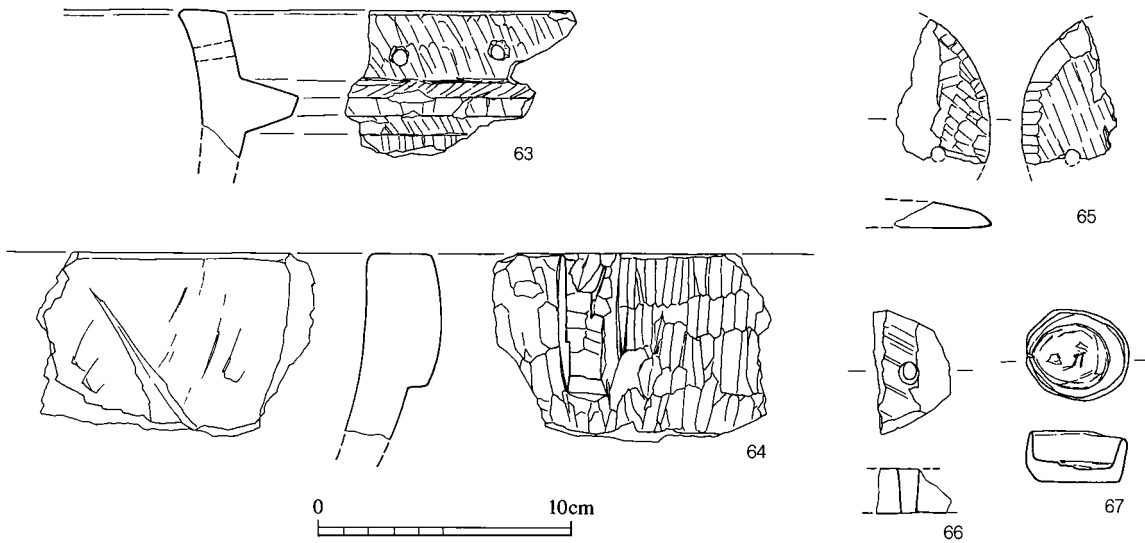
砥石 (29~53) 29は緑色片岩製。一応砥石としているが、砥面が非常に平滑であり砥石ではなく何らかの製品の一部分である可能性もある。30は砂岩砥石で表面に亀裂が入る。31は砥面が丸味を帯び擦痕が残る。33は砥面に径1mm位の小さな円形の窪みがある。砂岩製。34は肌理が細かい砂岩製で、表面に焼けて黒色化した面が3面あり、鑄型の転用品の可能性も考えている。35は珪質砂岩。



第158図 石製品実測図② (48~50 : 1/3、51~53 : 1/4)



第159図 石製品実測図③ (58 : 1/4、その他 : 1/3)



第160図 石製品実測図④ (1/3)

36は安山岩製で砥面に太い擦痕が明瞭に残る。37は砂岩製で非常に良く使用される。38は凝灰岩製で砥面に不整方向の太い擦痕が認められる。39は砂岩製で表面が熱を受け、黒色化する。41もまた砂岩製で熱を受ける。42は泥岩製で砥面に擦痕が残る。43は細粒砂岩製。44は砂岩製で非常に良く使い込まれている。45は細粒砂岩製。46は緑色片岩製で砥面が丸味を帯び、擦痕が残る。47は片岩製で節理に沿って大きく欠損する。48・49は砂岩製で4面使用。50は細粒砂岩製で非常に良く使用される。51～53は大型品で地面に固定して使用したものである。51は砂岩製で2面使用。52も砂岩製で本来はかなり大型だったものと思われる。表面が強く熱を受ける。5号竪穴住居跡の中央土坑から出土したもので、土坑の性格を考える上で重要である。52は砂質凝灰岩製で表面は非常に良く使い込まれているものの、裏面は全く使用しておらず、自然面のままである。

凹石 (54) 54は安山岩製。扁平な円盤の中央が、径3cm、深さ5mm程度窪んでいる。

敲石 (55～57) 55は扁平な円盤の二ヶ所に不整形剥離が認められ、また一部つぶれが認められる。安山岩製。弥生時代中期初頭の100号土坑の下層から出土した。56・57は円柱状の礫の両先端に敲打によるつぶれ、剥離が認められる。どちらも安山岩製。56は弥生時代中期前半の54号竪穴住居跡から出土した。57はピット出土。

石皿 (58) 58は花崗岩製の石皿。端部は丁寧に整形され、両面とも非常に良く使い込まれている。そのため中央が薄くなり、その所で真二つに折損したようである。近隣に花崗岩を産出する場所が無いことも興味深い。調査区東側の黄褐色土をグリッド調査した時に出土。

石錘 (59) 59～61は全て片岩製である。59は大型の石錘。全周に粗い打ち欠きを加え、両挟りは敲打ではなく回転穿孔を行う。60は全周に粗い打ち欠きを加える。図示した右側の挟りは明瞭だが、左側はほとんど剥離調整を行っていない。61は本来は円形に近い形状であったと推察される。

不明石製品 (60) 60は側縁に丁寧な剥離調整を加える。石剣の基部未製品かとも考えたが片岩製であることから可能性は薄い。石斧の基部であろうか。

石鍋 (63・64) 63は断面台形の鏝を巡らす滑石製石鍋。口縁部は内傾する。口縁部下の二ヶ所に

円孔を穿孔する。64は口縁部直下に長方形の把手をもつ石鍋。把手は恐らく二ヶ所に付けられるものと思われる。口縁部は直立する。

滑石製品（65～67） 65は石鍋転用品だが用途不明。側縁を弧状にし、また器壁を薄くして鋭く稜を立たせる。一ヶ所に円孔を穿孔する。66も石鍋転用品。円孔を一ヶ所穿孔する。67は小型の椀形製品で工具痕を多く残し、またやや歪んでいる。口径3.5～4.0cm、器高2.0cm。

石器（図版79～85、第161～168図、第3・4表）

打製石器

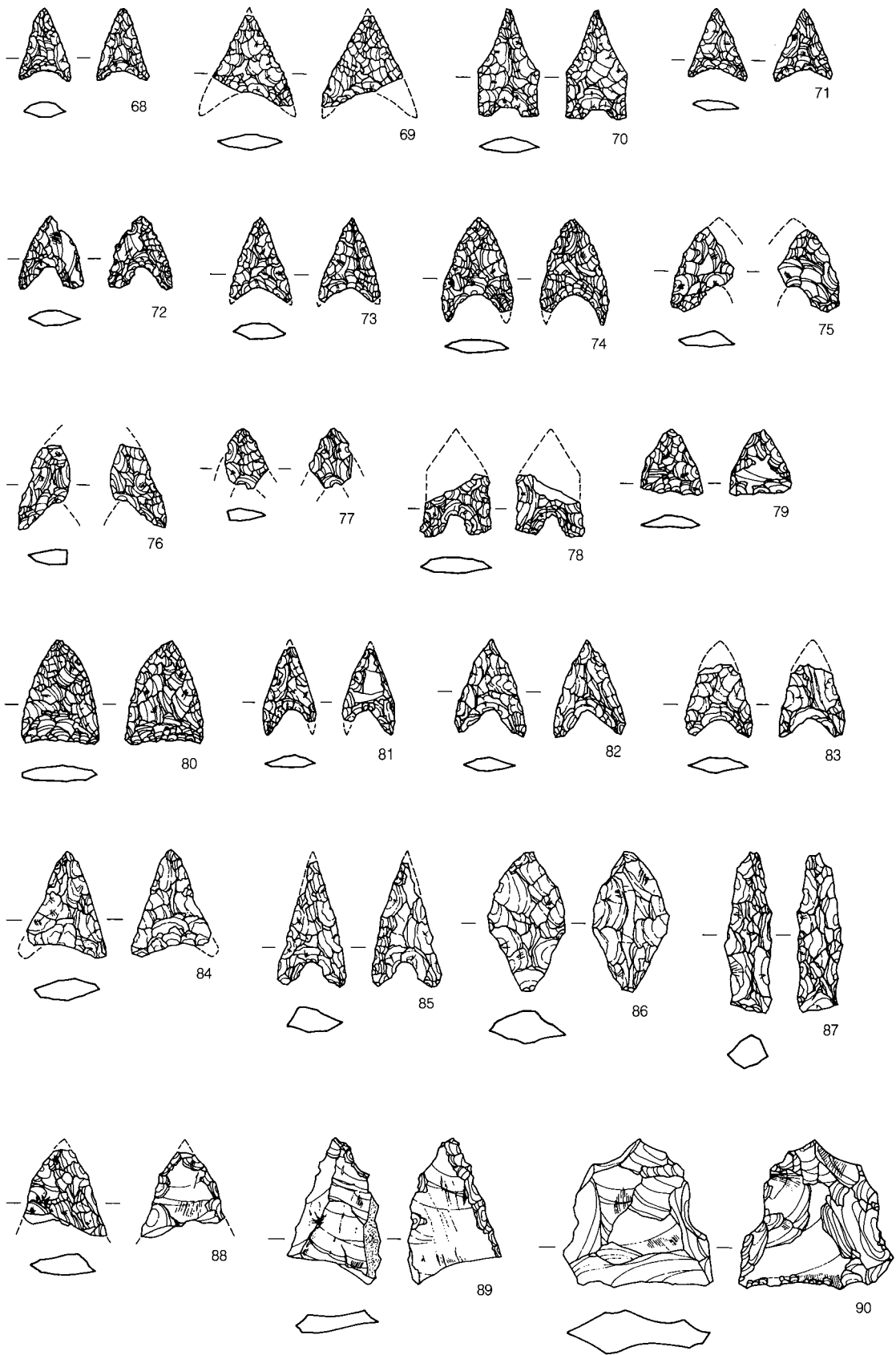
石鏃（68～90） 68～70は姫島産の灰白色黒曜石製。68は長三角形で基部に浅い抉りを入れる。69は正三角形で基部に丸い抉りをいれる。全面丁寧な剥離調整を行う。70は非常に丁寧な剥離調整を行う長五角形鏃。基部は浅い抉りを入れ、肩部はシャープに尖る。

71～80は漆黒色の黒曜石製でいずれも良質の黒曜石を使用する。71は基部の抉りが浅い長三角形の小型鏃。72は基部の抉りが深い剥片鏃。73は長三角形で基部の抉りがやや深いものである。比較的丁寧な剥離調整を行う。74は基部に丸い抉りを入れ、また肩部も丸味を帯びる長三角鏃。剥離は丁寧に行う。75は粗い剥離調整しか行っておらず、未製品の可能性が高い。76は恐らく長三角形の凹基式鏃となるであろうが欠損が大きく全体の形状は不明である。肩部に抉りを入れた格好となる。77は基部の抉りが深くなると思われる三角鏃。78は恐らく五角形鏃になるであろう。79は平基式の小型三角鏃。調整は粗い。表面の風化が進んでいる。80は平基式の長三角鏃で肩部が丸味を帯びる。

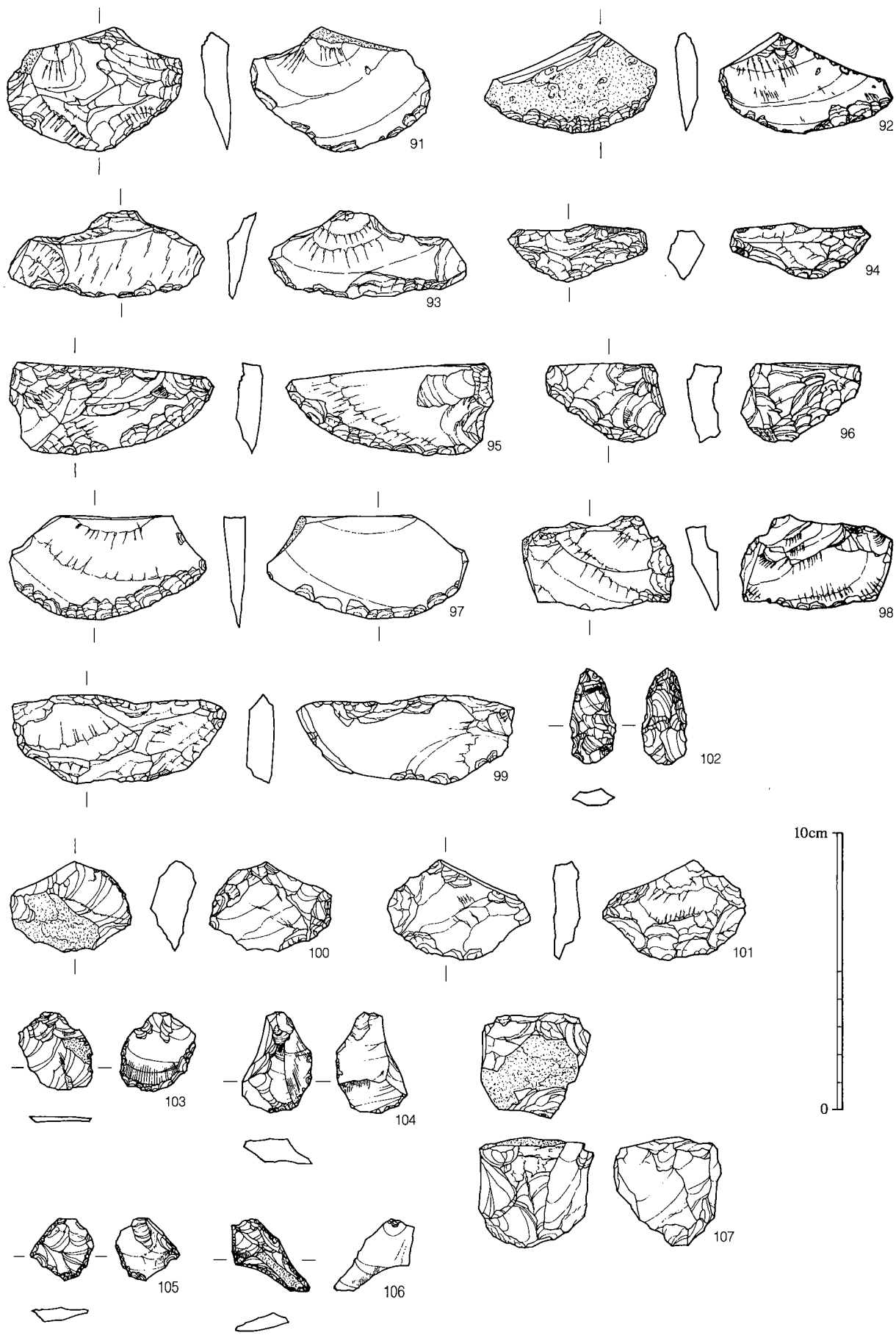
81～87はサヌカイト製。81は基部の抉りが深く、肩部に不明瞭な丸味を帯び五角形に近い長三角形となる。82は基部に深い抉りを入れる長三角形の小型鏃。表面の風化がやや進む。83は先端を欠失する。基部は丸い抉りを入れる。調整は粗い。84は基部に浅い抉りを入れる長三角形鏃で厚みのあるものである。左右が対称とならず、歪つな感を受ける。85は縦長の三角形鏃で、基部の抉りは深い。調整は粗く、また厚みもかなりある。86は一応凸基式の鏃と考えたが、先端が尖っておらず、また厚みのある器形となる。87は細長い四角錘状の平基式鏃。調整はあまり丁寧ではない。

88～90は石鏃未製品。88は主剥離面を大きく残しており形も不整形なので未製品としたが、製品であったかもしれない。不純物を多く含む質の悪い黒曜石製。89は三角形の縦長剥片の側縁に若干剥離を加えただけのもので、一部自然面をも残す。不純物が多く質の悪い黒曜石。90は全体に粗い剥離調整を加えており、三角形状を呈していたので石鏃未製品と判断した。一部に細かい剥離が認められ、別の用途に使用した可能性もある。

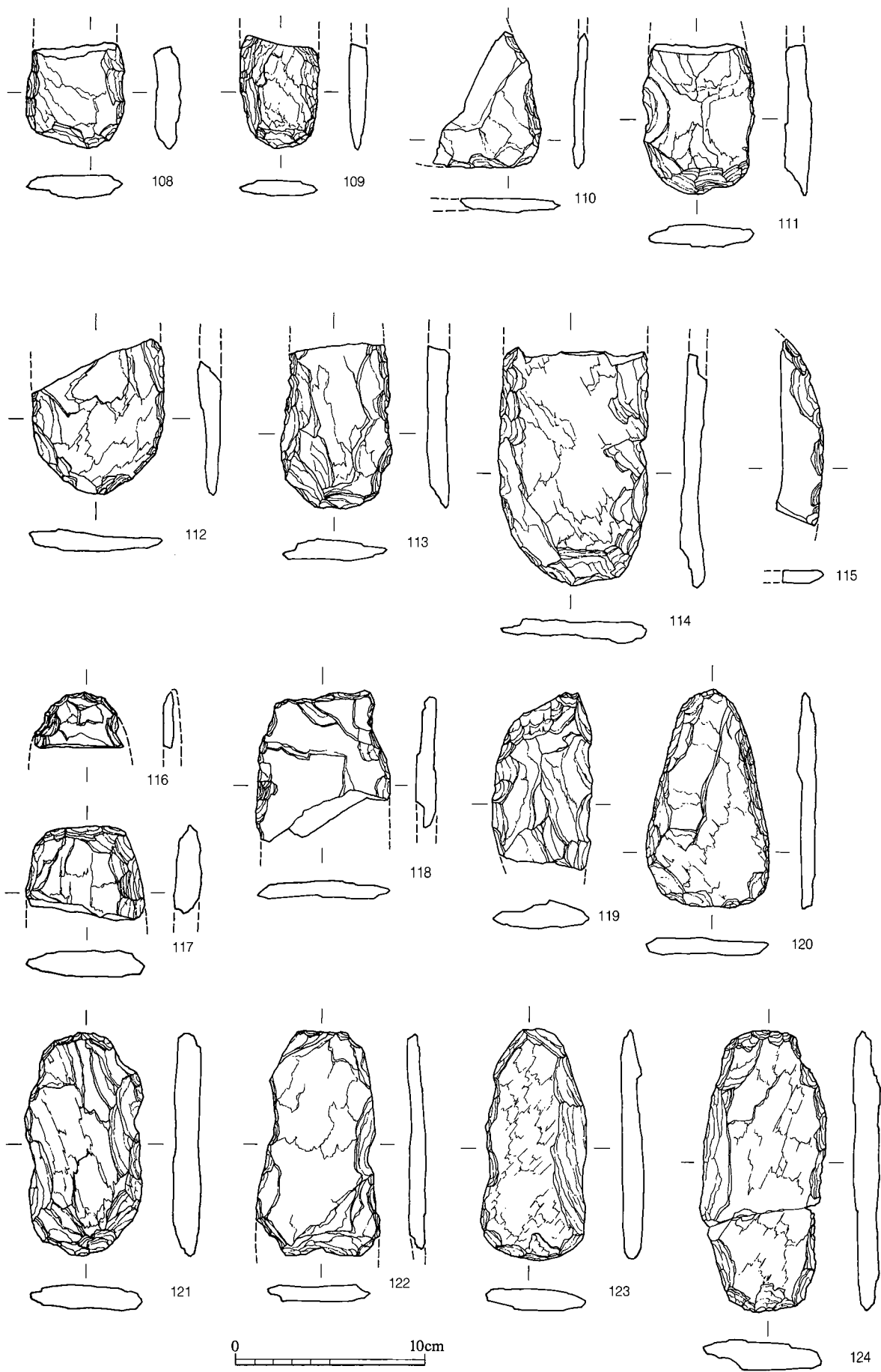
スクレイパー（91～101） 91～99はサヌカイトの横長剥片に調整を加えたスクレイパー。91は打点の瘤を除去し、側縁に細かい剥離調整を加える。一部に自然面を残す。弥生時代中期初頭の43号土坑出土。92は刃部に細かい剥離調整を行う。打点の瘤は除去する。また一部に刃潰しのような調整が認められる。93は刃部に簡単な剥離調整を加えただけのもの。弥生時代中期初頭の126号土坑出土。94は全面剥離調整をするものの、刃部は鋭くない。また基部には擦痕が認められる。95は横長剥片を簡単に整形し、刃部には両面から丁寧な剥離調整を行う。96は不整形の横長剥片の刃部に粗い剥離を加えたもの。97は薄い横長剥片の刃部にのみ丁寧な剥離調整を行う。96・97はともに弥生時代後期中葉の11号竪穴住居跡下層から出土。98は横長剥片の打瘤を除去し、縁辺に粗い調整を加えたもので、刃部へはあまり手を加えていない。弥生時代中期初頭の65号土坑から出土。99は雑



第161图 石器实测图① (2/3)



第162图 石器实测图② (1/2)



第163图 石器实测图③ (1/3)

な剥離調整を加えたもので、風化が著しく剥離が不明瞭である。

100・101は原産地を星野村付近に推定されている質の悪いメノウ製のスクレイパーである。100は側縁にいくらか剥離調整を行うものの、ほとんど剥片に手を加えておらず自然面を大きく残す。ピットから出土した。101は刃部に粗い剥離を加えたもので、打瘤は除去する。弥生時代中期初頭の43号土坑から出土した。

使用痕ある剥片（102～106） 102は全面に調整を加えた縦長の剥片で、一部の両側縁に階段状の剥離が認められる事から楔として使用した事を推察させる。黒曜石製。103は不整形の薄い剥片の縁辺に、片面からのみ剥離調整をくわえたもの。黒曜石製。104は不整形の縦長剥片の一部に微細剥離が見られるもの。黒曜石製。105は不整形の薄い剥片の側縁にのみ剥離調整を加えるもの。黒曜石製。106もやはり同様である。黒曜石製。

石核（107） 107は質の悪いメノウ製の石核。打面には平坦な自然面を選択し、剥片を割り取るものの、質が悪いためか形の良い剥片は得られなかったようである。弥生時代中期初頭の56号土坑から出土した。

打製石斧（108～124） いずれも扁平な片岩を選択し、側縁に剥離調整を加えたものである。ほとんどが短冊型であるが、中には112のように先端が尖り気味になるものや、114・121のように丸味を帯びるもの、110・120・123のように撥形になるものなどがある。

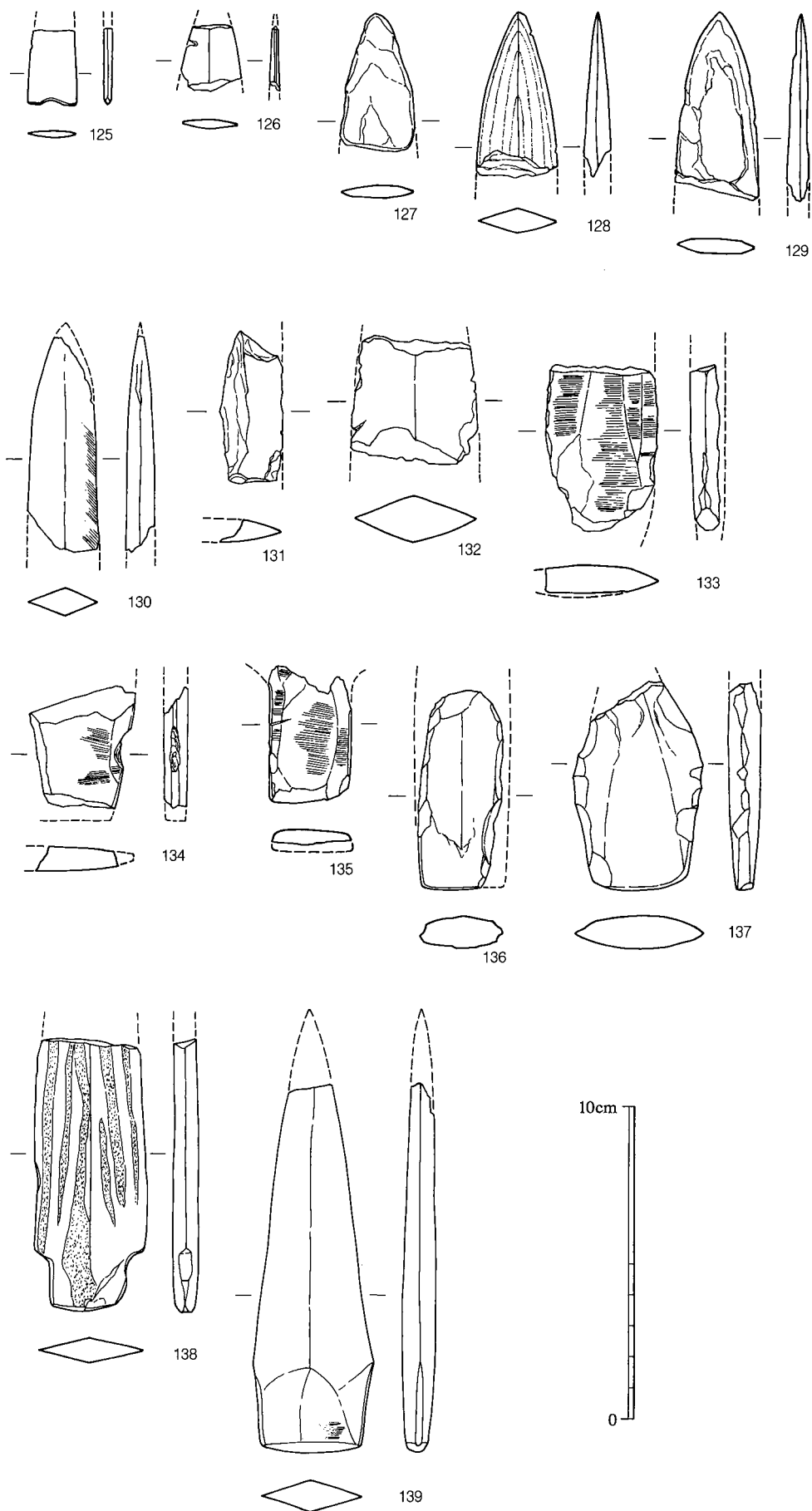
磨製石器

石鏃（125・126） 125は基部に浅い抉りを入れる。丁寧な作りで側縁は尖るが鏃は形成しない。弥生時代中期前半の74号土坑から出土。126は薄く丁寧な作りだが、両側縁の刃を潰すように研磨しており、石鏃として疑問を抱く点もある。鏃は中央を通る。弥生時代中期初頭頃に比定できる48号土坑から出土した。

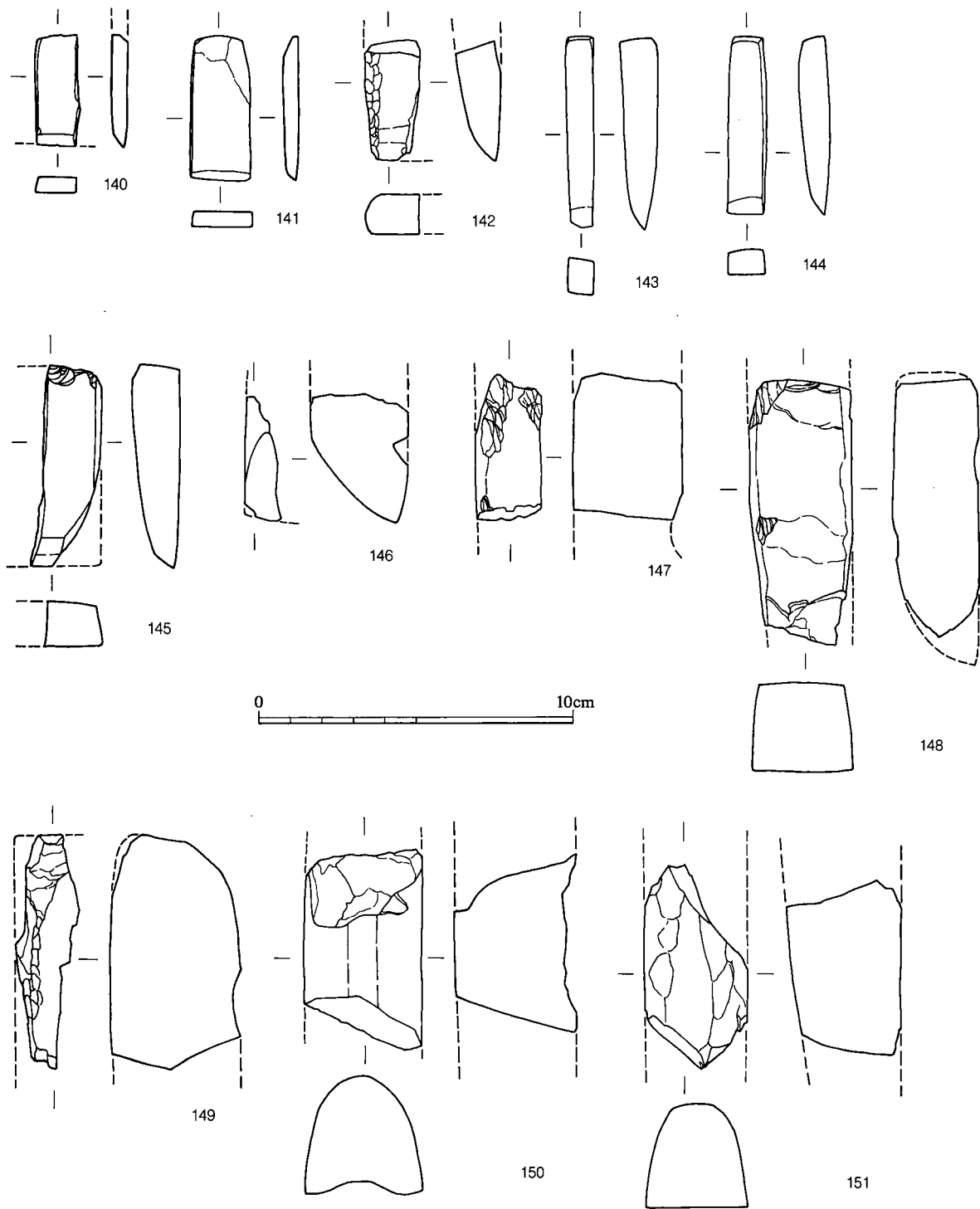
石剣（127～139） 127～130は切っ先部。127は風化が著しく進み、稜が丸味を帯びている。そのためあつてか、左右が非対称で鏃もない。ピット出土。128は左右対称で非常に丁寧な作りである。鏃も中央を通る。石目が縞状に観察される。129は先端は鋭く尖るものの風化が進む。鏃は形成されない。弥生時代中期前半の64号竪穴住居跡から出土。130は細身で身の厚いものである。左右対称で鏃も中央を通り、丁寧な作りである。一部に研磨時の擦痕が観察される。弥生時代中期前半の55号竪穴住居跡から出土した。

131・132は身部。131は刃部がシャープで丁寧な作りとなる。132は凝灰岩製の大型品。身は厚く、鏃は中央を通り左右対称に作られる。

133～139は基部。133は基部付近で左右非対称の作りであり、或いは再加工品か。全面に擦痕が観察される。輝緑凝灰岩製。134は抉りを入れるが、これは打ち欠きによるものである。一部に研磨の際の擦痕が認められる。弥生時代中期初頭の125号土坑出土。135は長い柄部を有す。あまり丁寧な研磨を行っておらず、そのため左右が非対称となる。全面に擦痕が残る。弥生時代中期前半の66号竪穴住居跡貼床下層出土。136の側縁は大半が欠損しているため形状は不明だが、身部の幅と柄部の幅とが同一となるようである。鏃は不明瞭ながら柄部まで続くようである。弥生時代中期前半の55号竪穴住居跡出土。137は柄部が短く縁辺に剥離痕を残しており、恐らく再加工したものであろう。弥生時代中期前半の102号土坑出土。138は明瞭な関を形成する。身は幅があまり変わらず



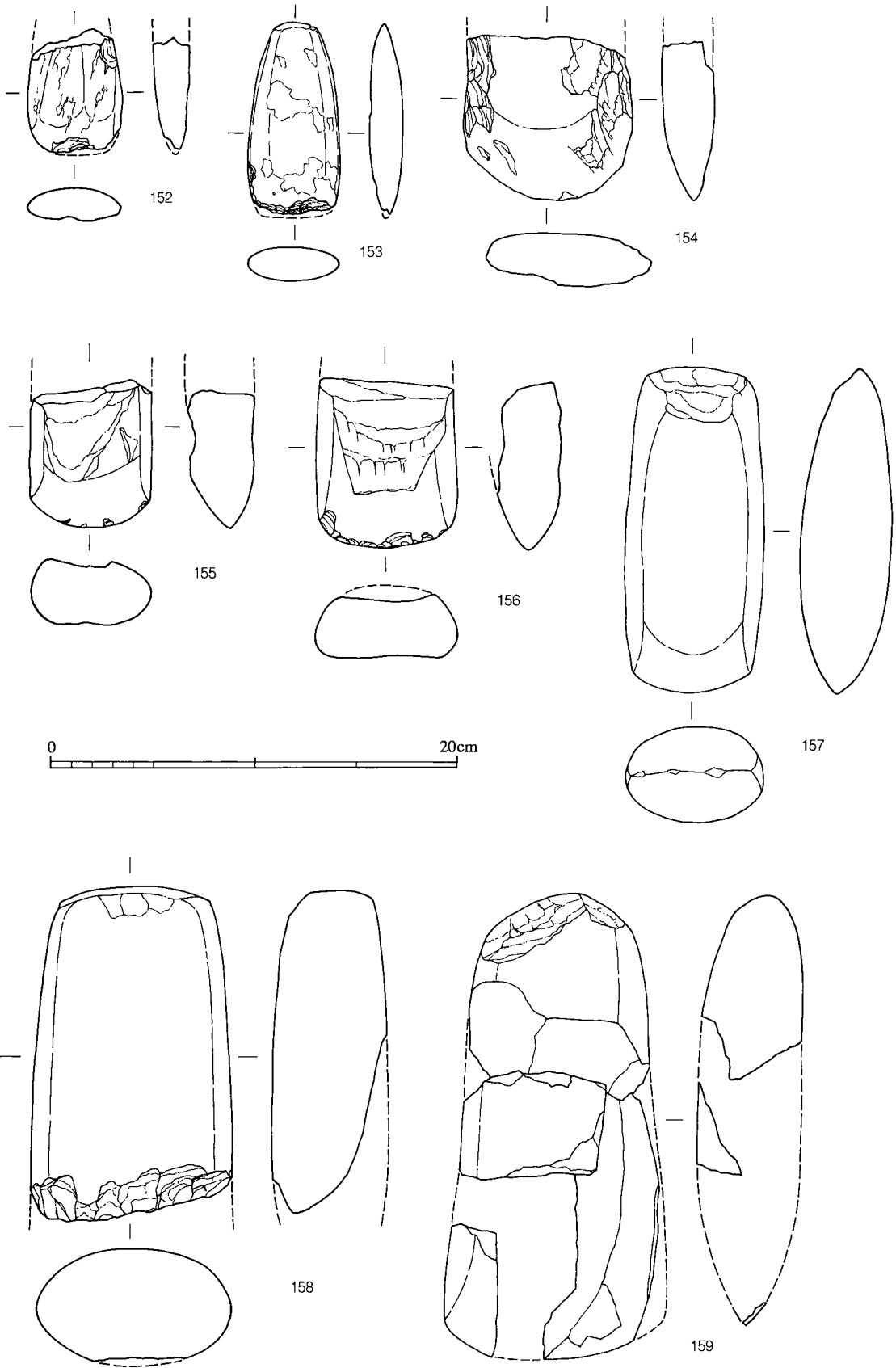
第164图 石器实测图④ (1/2)



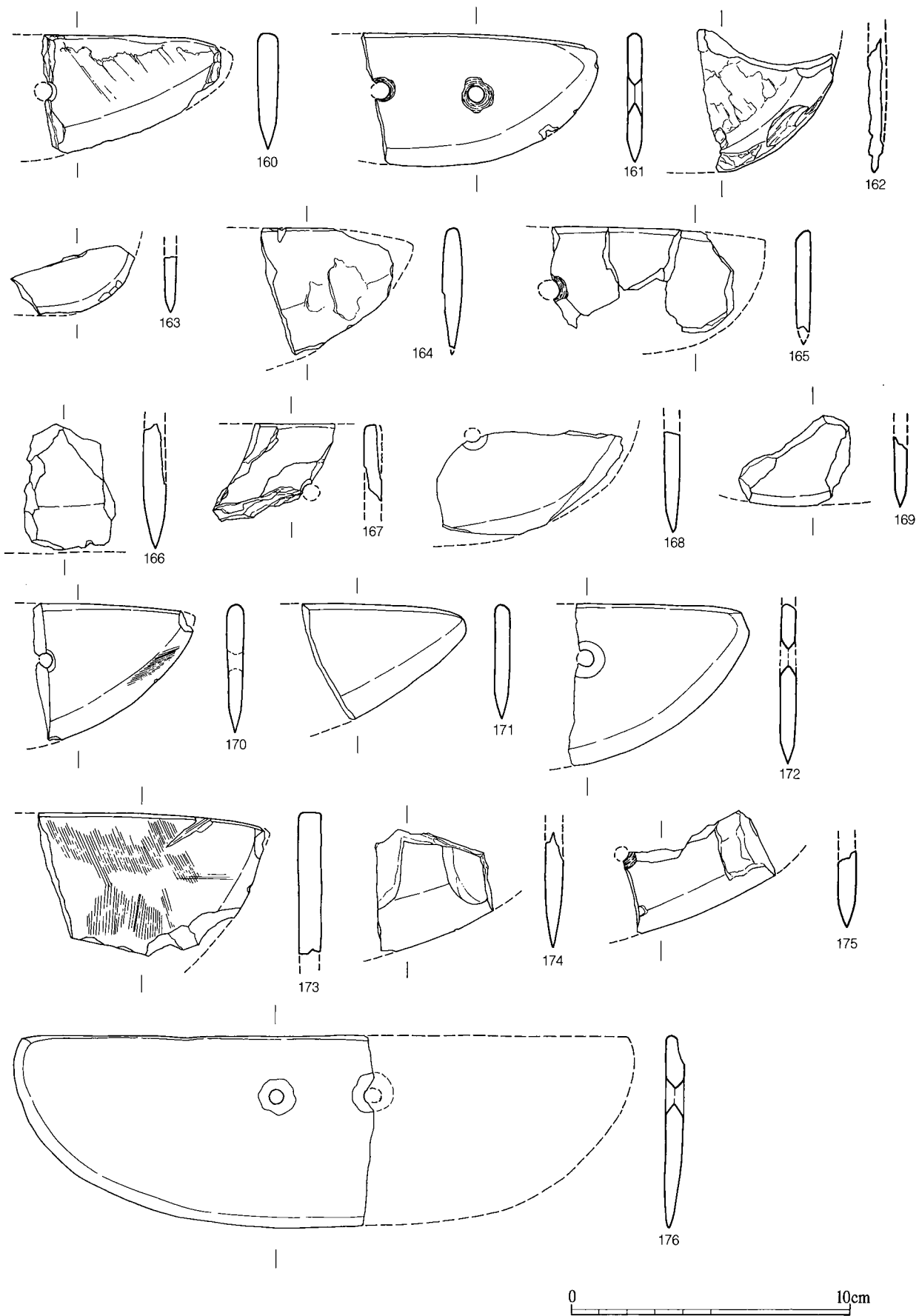
第165図 石器実測図⑤ (1/2)

に伸びており、長身になると思われる。風化が著しく表面には石目が縞状に観察される。刃部は鋭く、また鏃もたち左右対称の丁寧な作りである。139は泥岩製と思われる石剣。柄部は短く関は認められるものの扱いは入れない。比較的丁寧な作りだが稜線がやや乱れる。

扁平片刃石斧 (140・141) 140・141は小型の扁平片刃石斧。140は折損しており本来は果たして小型だったのか不明。141は刃部が丸味を有し、鋭く尖らない。また基部にも粗割り時の剥離面を残す。折損後の再加工品の可能性もある。



第166图 石器实测图⑥ (1/3)



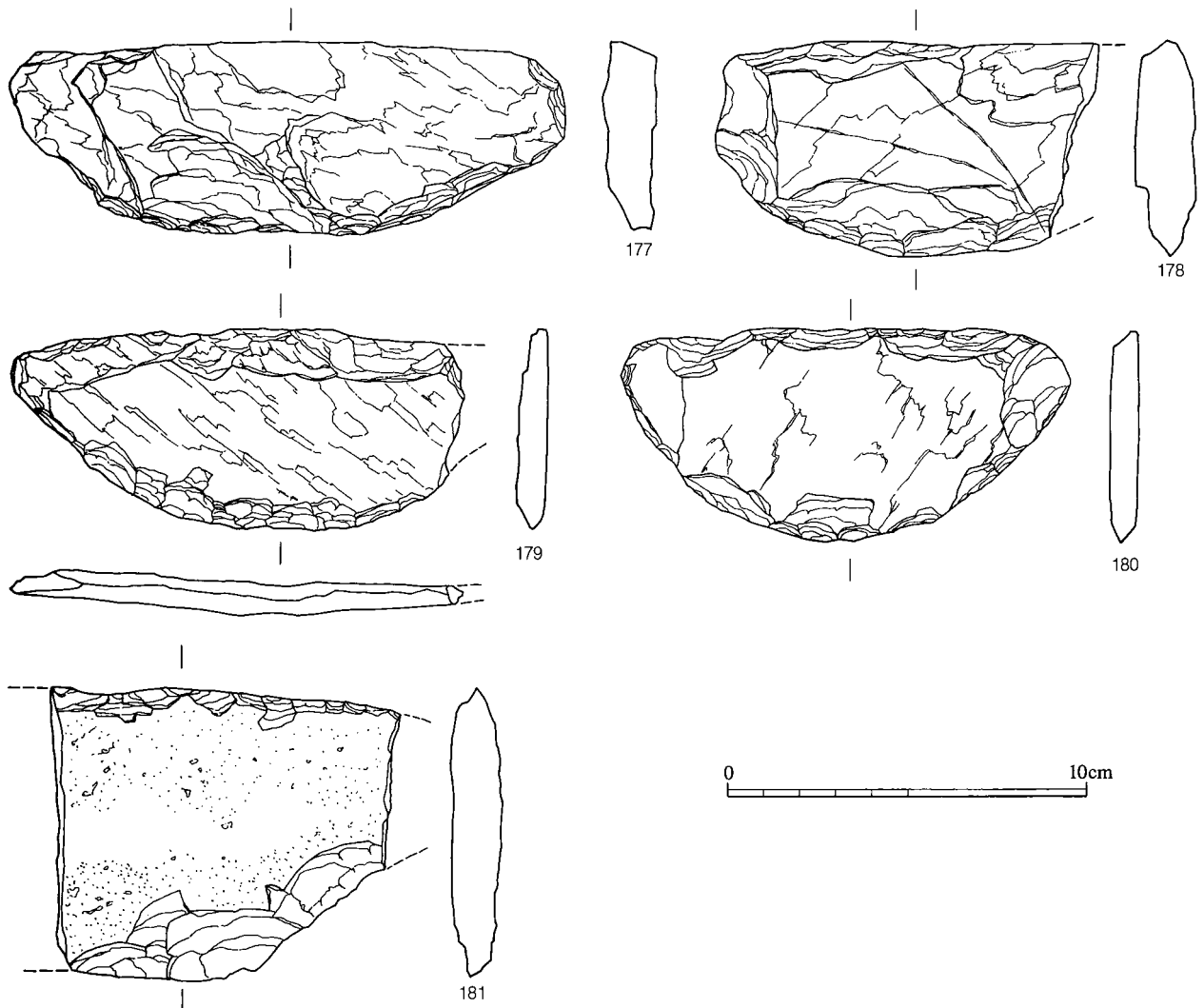
第167图 石器实测图⑦ (1/2)

柱状片刃石斧（142～145） 142～144は小型品である。142は側縁に敲打痕を残し、恐らく再加工品であろう。143・144はどちらも丁寧な作りのものである。145は折損しており或いは扁平片刃石斧かもしれない。また再加工品であり基部端に再研磨を行っている。

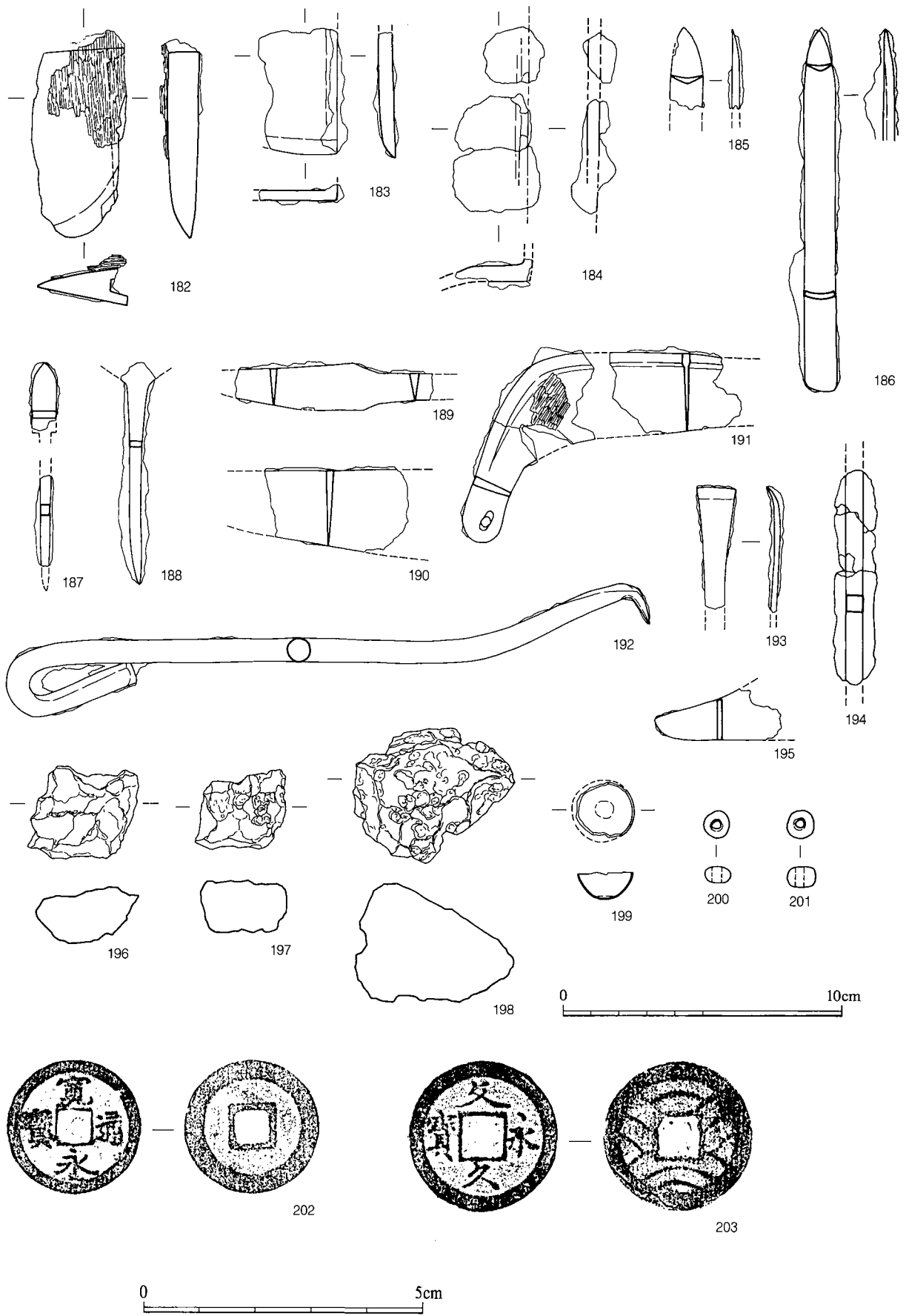
挟入片刃石斧（146～151） 146は刃部片。147は基部片。148はやや小型であり、或いは再加工品かと思われる。挟りは非常に浅いものである。149は基部の内側が丸味を有す。150は背面が丸く、断面蒲鋒形となる。また内面には軸に沿った方向の挟りが見られる。151も背面が丸味を帯び、断面蒲鋒形になる。

磨製石斧（152～159） 152・153は平面形が撥形になる縄文系の磨製石斧。152は稜線が不揃いで左右対称とならず、あまり丁寧な作りとはいえない。刃部の先端は使用により剥離する。片岩製。153は非常に丁寧に研磨する。刃部は使用により全体的に剥離する。

154～157は蛤刃石斧。154はやや大型だが身の厚さはそれほどでもない。刃部は鋭く研磨されるが、側縁には粗割り時の剥離をそのまま残す。155は風化がかなり進む。身部は不自然な平坦面を形成しており再加工したものと思われる。156も片面のみ粗い平坦面を有し、破損後に再研磨したものである。刃部は使用のために細かい剥離を有す。157は完形の蛤刃石斧。基部と刃部の幅はほぼ同一で柱状を呈すが、基部は厚さがかなり薄くなり、また粗割り時の剥離をも明瞭に残す。全体



第168図 石器実測図⑧（1/2）



第169図 金属器等実測図 (200~203 : 1/1、他は1/2)

的に丁寧な作りである。刃部には使用時の剥離が認められる。

158・159は特大型の石斧。158は刃部を欠損する。全面円滑に研磨され、丁寧な作りである。断面は楕円形を呈す。また刃部は折損後新たに剥離調整を加えて使用しており、先端には使用による刃つぶれが観察される。弥生時代中期初頭の34号土坑出土。159は4つの破片に分かれ、接合しないが明らかに同一個体である。復元すればやや刃部が開く撥形になると思われる。基部には粗割り整形時の剥離面を残し、やや不整形となる。刃部は鋭く作られる。また表面は非常に円滑に研磨されており、丁寧な作りである。弥生時代中期初頭の72号土坑出土。

石包丁(160~176) 全て外湾刃半月形の石包丁。160は横長の器形になると思われる。161は片岩製だが丁寧な作り。162は表面の剥離が著しい。また刃部は丸味を帯びているが、使用によるものであろうか。163は刃部が短い。164は逆に刃部が長く、断面の形状では中位が膨らんだ形となる。166は身が厚く、大型品であらうか。168は研ぎ直しによる不自然な稜線を形成する。170は背部が最も厚く、刃部に至るまで徐々に厚さを減じる。173は厚みがあり大型品であらう。176は特大型品で、復元すると横幅22cmを超える。

石包丁未製品(177~181) 177はかなりの厚さがあるものの、全体の形状と刃部に当たる部分にのみ剥離調整を加えている事から石包丁未製品と判断した。片岩製。178は形状から未製品としたが、全側縁に剥離調整を加えており、打製石斧の可能性もある。片岩製。179は形状から石包丁未製品と思われるものの、側面から見ると両端が反っており疑問を抱く点も残す。180は形状と剥離の角度から見て、石包丁未製品と判断しても良いだろう。181は形状は石包丁に似るものの、身の厚さと形の不整さ、また石材の悪さから判断すれば石包丁ではないかもしれない。表面には研磨痕が認められる。結晶片岩製。

金属製品等(図版86~88、第169図・第4表)

鉄斧(182~184) 182は112号土坑から出土した鑄造鉄斧再加工品。折損した鉄斧の刃部片の側面に新たに刃部を研ぎ出し、鉄斧として使用している。平面図の右側には袋部の窪みを残す。また基部には木質が遺存しており着柄の状況が窺える。共伴遺物は弥生時代中期前半のものである。

183もやはり鑄造鉄斧の再加工品。81号土坑出土。折損した袋部を利用して新たに刃部を研ぎ出している。平面図の右側には袋部の屈曲部が残る。共伴遺物はやはり弥生時代中期前半のものである。

184は鑄造鉄斧の破片だが、残存状況が悪く、また細片のため再利用したか否かは判らない。44号土坑出土。二個体あるが、同一個体であらう。不明瞭だが袋部の屈曲部が認められる。共伴した土器は弥生時代中期初頭のものである。

ヤリガンナ(185・186) 185はヤリガンナの先端部。11号竪穴住居跡出土。内面はわずかに湾曲し、外面は稜を有す。186は完形品。26号竪穴住居跡床面出土。先端部の裏面には稜を有すが、基部側は稜はなく湾曲するのみである。全長13.0cm。ともに弥生時代後期中葉。

鉄鎌(187・188) 187は接合しないが同一個体。188は恐らく鉄鎌の茎部であらう。断面は横長の長方形である。

刀子(189・190) 189は刀子としたが、柄部まで断面三角形で通例と異なっており、刀子かどうか不安が残る。関部は鈍角になる。ピットからの出土。190はやや大型となる刀子の身部と考えて

いる。身は薄く作られている。試掘時に出土した。

鎌 (191) 191は近代～現代の畑畝跡から出土した鎌。柄部には目釘孔があり、また一部に柄の木質が残る。

その他 (192～195) 192は鉄線を結束するもので、調査区を流れる水路から出土したものである。基部は折り返して環状にし、先端は結束し易いように曲げられており、また鋭く尖っている。断面は円形となる。193は先端が薄く刃部を形成し、また反っている。ノミのように使用したものであろうか。194は用途不明の棒状品。何かの基部になるものと考えられる。195は不整形の薄い鉄板。調査区東側の遺構面から出土した。

鉄滓 (196～198) 196はピット出土。197は試掘トレンチからの出土である。198は弥生時代中期初頭に比定できる76号土坑出土だが、混入品であろうか。

銅製品 (199) 199は半球形の椀形銅製品。器壁は非常に薄く1mmに満たない。11号堅穴住居跡から出土したが、混入品であろう。

ガラス小玉 (200・201) どちらも鮮やかな水色である。200は弥生時代後期中葉に比定される26号堅穴住居跡出土。径5mm、孔径2mm。201はピットからの出土である。

銅銭 (202・203) 202は寛永通宝。203は文久永宝。共に調査区内を流れる水路から出土した。

第2表 土製品・石製品・金属製品一覧表①

挿図番号	種類	出土場所	長さ (cm)	幅・径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	材質	登録番号	備考
第156図-1	管状土錘	86号土坑	2.9	1.2～1.5	0.3	3.2		19	
第156図-2	管状土錘	包含層	2.9	1.2～1.4	0.2	3.1		18	
第156図-3	管状土錘	30号土坑下層	2.7	0.9	0.2	2.1		3	
第156図-4	管状土錘	P - 977	2.5	0.8～1.0	0.3	1.5		13	
第156図-5	管状土錘	P - 562	3.0	0.8	0.2	1.6		4	
第156図-6	管状土錘	試掘トレンチ	3.8	1.0	0.2	2.9		11	
第156図-7	管状土錘	包含層	4.1	1.2	0.3	5.4		1	
第156図-8	管状土錘	30号土坑下層	3.3	1.2	0.2	3.4		15	
第156図-9	管状土錘	37号土坑	4.4	1.1	0.3	4.7		5	
第156図-10	管状土錘	包含層	4.3	1.2	0.3	4.8		6	
第156図-11	管状土錘	調査区西端遺構面	4.3	1.5	0.4	8.3		14	
第156図-12	管状土錘	P - 988	4.5	1.2	0.3	5.3		9	
第156図-13	管状土錘	P - 470	5.3	1.0～1.2	0.3	4.3		2	
第156図-14	管状土錘	P - 1013	4.6	0.9	0.3	3.3		7	
第156図-15	管状土錘	P - 535	4.9	1.3	0.3	7.7		12	
第156図-16	管状土錘	34号土坑	4.5	1.2	0.2	4.5		8	
第156図-17	管状土錘	調査区中央遺構面	5.9	1.3	0.3	8.0		10	
第156図-18	管状土錘	30号土坑下層	3.9	2.1～2.4	0.6	15.0		16	
第156図-19	管状土錘	廃土中	5.7	2.1	0.7	15.9		17	
第156図-20	土製投弾	P - 3762	3.6	2.5		14.6		20	
第156図-21	土製紡錘車	P - 630	厚さ1.6	4.4	0.5	37.2		80	表面に化粧土
第156図-22	土製紡錘車	69号土坑	厚さ1.5	4.7	0.6	36.7		81	
第156図-23	土製紡錘車	46号土坑	厚さ1.2	4.1?	0.7	16.6		83	
第156図-24	土製紡錘車	25号溝	厚さ1.5	4.6	0.7	26.1		82	
第156図-25	土製紡錘車	55号堅穴住居跡	厚さ1.1	5.9?	0.7?	19.4		84	
第156図-26	土製紡錘車	50号土坑	厚さ0.6	4.9	0.7	26.1	片岩	85	
第156図-27	浮子	21号溝	厚さ2.1	5.3～5.7	0.7～1.2	25.3	軽石	87	
第156図-28	円板状石製品	21号土坑	厚さ1.5	5.2		63.0	凝灰岩	86	
第157図-29	砥石	11号土坑	4.3	1.2	1.1	14.5	緑色片岩	146	
第157図-30	砥石	125号土坑	4.6	4.2	1.7	29.7	砂岩	151	
第157図-31	砥石	56号堅穴住居跡	4.2	4.2	1.9	26.6	安山岩	156	
第157図-32	砥石	53号土坑	4.1	3.2	2.0	35.3	砂岩	155	
第157図-33	砥石	調査区東端包含層	5.2	3.8	1.2	39.9	砂岩?	144	円孔
第157図-34	砥石	72号土坑	4.6	3.2	2.6	50.9	砂岩	149	被熱、鑄型再利用?
第157図-35	砥石	P - 2383	5.7	4.9	3.5	105.5	珪質砂岩	147	
第157図-36	砥石	55号堅穴住居跡	5.4	3.2	3.5	50.2	安山岩	152	
第157図-37	砥石	126号土坑	5.4	3.4	3.0	61.3	砂岩	154	
第157図-38	砥石	P - 527	5.1	3.2	0.9	17.5	凝灰岩?	145	
第157図-39	砥石	P - 3747	5.4	3.9	3.6	222.5	砂岩	148	
第157図-40	砥石	34号土坑	6.4	5.1	2.8	112.0	砂岩	160	
第157図-41	砥石	43号土坑	6.7	5.6	3.9	160.8	砂岩	158	
第157図-42	砥石	11号堅穴住居跡貼床下層	6.6	5.5	1.8	89.7	泥岩	157	
第157図-43	砥石	東側包含層	6.9	4.8	3.1	130.3	細粒砂岩	164	
第157図-44	砥石	27号堅穴住居跡	8.2	4.9	3.3	136.8	砂岩	161	
第157図-45	砥石	32号土坑	7.6	5.2	1.4	78.8	細粒砂岩	159	

第3表 土製品・石製品・金属製品一覧表②

挿図番号	種類	出土場所	長さ (cm)	幅・径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	材質	登録番号	備考
第157図-46	砥石	P-2378	6.9	6.3	2.73	222.0	緑色片岩	150	
第157図-47	砥石	35号土坑	10.8	2.0	4.5	189.2	片岩	165	
第158図-48	砥石	17号土坑	10.1	5.6	3.1	178.9	砂岩	153	
第158図-49	砥石	55号堅穴住居跡	8.4	5.6	4.4	216.2	砂岩	162	
第158図-50	砥石	P-903	9.5	6.0	6.7	383.6	細粒砂岩	163	
第158図-51	砥石	23号土坑	19.2	12.7	5.8	2.0kg	砂岩	192	
第158図-52	砥石	6号堅穴住居跡中央土坑	14.9	13.7	12.0	3.0kg	砂岩	193	被熱
第158図-53	砥石	P-1050	28.1	14.2	5.0	1.9kg	砂質凝灰岩	191	
第159図-54	凹石	51号土坑	8.5	8.0	5.3	534.9	安山岩	196	
第159図-55	敲石	100号土坑下層	12.8	10.1	5.1	908.1	安山岩	200	
第159図-56	敲石	54号堅穴住居跡	14.4	径5.3~6.1	718.5	安山岩	2093		
第159図-57	敲石	P-2467	15.9	6.1	5.0	736.8	安山岩	195	
第159図-58	石皿	調査区東端茶褐色土	28.2	23.7	10.8	9.6kg	花崗岩	194	
第159図-59	打製石錘	P-1039	14.8	10.1	2.1	450.1	片岩	197	
第159図-60	打製石錘	74号土坑	5.4	5.3	1.2	39.0	片岩	190	
第159図-61	打製石錘	調査区西端包含層	7.7	4.8	1.0	46.2	片岩	189	
第159図-62	不明石製品	調査区東端茶褐色土	6.0	4.3	1.4	39.1	片岩	188	打製石斧?
第160図-63	石鍋	6号掘立柱建物跡付近包含層					滑石	91	円孔2ヶ所
第160図-64	石鍋	6号掘立柱建物跡付近包含層					滑石	201	
第160図-65	石鍋転用品	6号掘立柱建物跡付近包含層				22.4	滑石	65	
第160図-66	石鍋転用品	21号土坑				35.0	滑石	88	
第160図-67	小型碗	P-709				27.5	滑石	90	
第161図-68	石鏃	包含層	1.8	1.3	0.4	0.5	姫島産黒曜石	35	
第161図-69	石鏃	調査区東端遺構面	2.2	2.0	0.4	1.0	姫島産黒曜石	34	
第161図-70	石鏃	灰褐色包含層	2.7	1.5	0.4	1.1	姫島産黒曜石	33	
第161図-71	石鏃	44号土坑	1.8	1.4	0.3	0.4	黒曜石	24	
第161図-72	石鏃	P-614	1.9	1.6	0.4	0.6	黒曜石	22	
第161図-73	石鏃	35号土坑	2.1	1.5	0.4	0.7	黒曜石	23	
第161図-74	石鏃	P-163	2.6	1.8	0.4	1.0	黒曜石	26	
第161図-75	石鏃	72号堅穴住居跡	1.7	1.6	0.3	0.7	黒曜石	25	
第161図-76	石鏃	52号土坑	2.1	1.3	0.4	0.7	黒曜石	27	
第161図-77	石鏃	黒褐色土	1.5	1.0	0.3	0.4	黒曜石	28	
第161図-78	石鏃	調査区東端遺構面	1.6	1.8	0.4	0.6	黒曜石	29	
第161図-79	石鏃	55号堅穴住居跡	1.7	1.6	0.3	0.7	黒曜石	25	
第161図-80	石鏃	80号土坑	2.6	2.0	0.5	1.8	黒曜石	21	
第161図-81	石鏃	11号堅穴住居跡貼床下層	2.2	1.3	0.3	0.6	サヌカイト	36	
第161図-82	石鏃	廃土中	2.5	1.8	0.4	0.9	サヌカイト	39	
第161図-83	石鏃	廃土中	1.8	1.7	0.4	1.1	サヌカイト	40	
第161図-84	石鏃	34号土坑	2.8	2.0	0.6	1.9	サヌカイト	38	
第161図-85	石鏃	66号堅穴住居跡	3.2	1.7	0.6	2.0	サヌカイト	37	
第161図-86	石鏃	94号堅穴住居跡	3.5	1.9	0.8	4.3	サヌカイト	42	
第161図-87	石鏃	P-259	4.1	1.2	0.8	3.8	サヌカイト	41	
第161図-88	石鏃未製品	東側包含層	2.1	2.1	0.6	1.7	黒曜石	31	
第161図-89	石鏃未製品	黒褐色土	3.7	2.3	0.5	3.4	黒曜石	32	
第161図-90	石鏃未製品	P-2311	3.7	3.8	1.0	11.9	黒曜石	55	
第162図-91	スクレイパー	43号土坑	6.3	4.6	1.0	25.3	サヌカイト	44	
第162図-92	スクレイパー	包含層	6.2	3.7	0.8	16.6	サヌカイト	43	
第162図-93	スクレイパー	126号土坑	7.1	3.2	0.8	14.4	サヌカイト	45	
第162図-94	スクレイパー	P-1047	5.0	2.0	1.3	12.6	サヌカイト	51	
第162図-95	スクレイパー	P-499	7.4	3.3	1.0	27.3	サヌカイト	47	
第162図-96	スクレイパー	11号堅穴住居跡貼床下層	4.3	2.8	1.2	17.2	サヌカイト	50	
第162図-97	スクレイパー	11号堅穴住居跡貼床下層	7.1	3.8	0.8	23.6	サヌカイト	46	
第162図-98	スクレイパー	65号土坑	5.5	3.4	1.1	23.2	サヌカイト	49	
第162図-99	スクレイパー	近現代溝	7.8	3.3	1.0	31.3	安山岩	48	
第162図-100	スクレイパー	P-550	4.3	3.3	1.6	18.7	メノウ	59	
第162図-101	スクレイパー	43号土坑	5.1	3.6	1.4	25.5	メノウ	60	
第162図-102	使用痕ある剥片	74号土坑	3.4	1.6	0.6	3.1	黒曜石	58	楔として使用
第162図-103	使用痕ある剥片	P-1039	2.8	2.7	0.6	3.0	黒曜石	52	
第162図-104	使用痕ある剥片	P-422	3.7	2.5	1.2	7.7	黒曜石	56	
第162図-105	使用痕ある剥片	125号土坑	2.3	2.3	0.5	2.1	黒曜石	54	
第162図-106	使用痕ある剥片	45号土坑	2.6	2.8	0.8	2.8	黒曜石	53	
第162図-107	石核	56号土坑	4.0	3.8	3.8	74.4	メノウ	61	
第163図-108	打製石斧	25号溝	5.7	5.1	1.4	55.9	片岩	182	
第163図-109	打製石斧	78号土坑	6.0	4.1	0.9	29.2	片岩	186	
第163図-110	打製石斧	包含層	7.3	5.6	0.8	33.2	片岩	180	
第163図-111	打製石斧	東端包含層	8.1	5.8	1.3	83.8	片岩	175	
第163図-112	打製石斧	P-901	8.2	6.8	1.2	76.1	片岩	179	
第163図-113	打製石斧	P-1038	8.8	5.8	1.2	73.7	片岩	178	
第163図-114	打製石斧	P-912	12.6	7.8	1.3	178.2	片岩	174	
第163図-115	打製石斧	調査区東端包含層	9.8	2.2	0.7	25.4	片岩	184	
第163図-116	打製石斧	調査区東端黄褐色土	2.9	4.7	0.5	10.5	片岩	187	
第163図-117	打製石斧	55号堅穴住居跡	5.0	6.2	1.4	64.0	片岩	183	
第163図-118	打製石斧	P-4005	8.1	7.0	1.1	62.5	片岩	185	
第163図-119	打製石斧	遺構面	9.4	5.3	1.5	88.2	片岩	169	
第163図-120	打製石斧	調査区東側遺構面	11.6	6.4	1.0	91.8	片岩	173	
第163図-121	打製石斧	P-698	11.8	6.2	1.5	141.7	片岩	177	
第163図-122	打製石斧	P-2059	11.9	6.4	1.0	106.3	片岩	181	
第163図-123	打製石斧	P-894	12.3	5.5	1.2	102.4	片岩	172	
第163図-124	打製石斧	遺構面	11.8	6.2	1.5	169.5	片岩	176	
第164図-125	磨製石鏃	74号土坑	2.4	1.6	0.3	1.6	頁岩	109	
第164図-126	磨製石鏃	48号土坑	2.1	1.9	0.3	1.3	輝緑凝灰岩	108	
第164図-127	磨製石剣	P-73	4.4	2.4	0.4	9.8	頁岩	203	
第164図-128	磨製石剣	27号堅穴住居跡	5.3	2.6	0.8	7.6	頁岩	104	

第4表 土製品・石製品・金属製品一覧表③

挿図番号	種類	出土場所	長さ (cm)	幅・径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	材質	登録番号	備考
第164図 - 129	磨製石剣	64号竪穴住居跡	6.0	62.6	0.7	9.8	頁岩	106	
第164図 - 130	磨製石剣	55号竪穴住居跡	6.9	2.2	0.9	11.2	凝灰岩	105	
第164図 - 131	磨製石剣	遺構面	4.9	2.0	0.7	7.6	頁岩	107	
第164図 - 132	磨製石剣	調査区東側遺構面	4.1	0.4	1.5	27.3	凝灰岩	103	
第164図 - 133	磨製石剣	調査区東側遺構面	5.3	3.5	0.9	25.6	輝緑凝灰岩	100	
第164図 - 134	磨製石剣	125号土坑	3.9	3.3	0.8	14.3	頁岩	98	
第164図 - 135	磨製石剣	66号竪穴住居跡貼床下層	4.4	2.6	0.5	7.4	頁岩	102	
第164図 - 136	磨製石剣	55号竪穴住居跡	6.4	2.7	1.0	23.6	頁岩	101	
第164図 - 137	磨製石剣	102号土坑	6.6	4.1	1.0	36.8	頁岩	99	
第164図 - 138	磨製石剣	廃土中	8.7	3.5	0.8	34.6	頁岩	97	
第164図 - 139	磨製石剣	68号竪穴住居跡床面	11.7	3.8	1.1	56.1	泥岩	96	
第165図 - 140	偏平片刃石斧	43号土坑	3.6	1.4	0.5	5.1	頁岩	115	
第165図 - 141	偏平片刃石斧	86号土坑	4.6	2.0	0.5	9.0	頁岩	112	
第165図 - 142	柱状片刃石斧	55号竪穴住居跡	3.9	1.8	1.4	13.4	頁岩	114	
第165図 - 143	柱状片刃石斧	55号竪穴住居跡	6.2	0.8	1.2	11.5	頁岩	111	
第165図 - 144	柱状片刃石斧	43号土坑	5.7	1.3	1.0	13.7	頁岩	110	
第165図 - 145	柱状片刃石斧	43号土坑	6.5	1.9	1.5	29.8	頁岩	113	
第165図 - 146	挟入片刃石斧	P - 778	4.0	1.1	3.1	10.4	頁岩	118	
第165図 - 147	挟入片刃石斧	56号土坑	4.7	2.1	3.5	65.7	頁岩	119	
第165図 - 148	挟入片刃石斧	廃土中	8.5	3.3	2.8	139.3	頁岩	120	
第165図 - 149	挟入片刃石斧	99号土坑	7.5	2.0	4.1	60.5	頁岩	117	
第165図 - 150	挟入片刃石斧	54号竪穴住居跡	6.5	3.7	3.8	131.8	凝灰岩	121	
第165図 - 151	挟入片刃石斧	117号土坑	6.5	3.3	3.6	101.2	頁岩	117	
第166図 - 152	磨製石斧	77号土坑	6.0	4.6	1.8	72.9	辺岩	125	
第166図 - 153	磨製石斧	P - 3710	9.4	4.5	1.6	101.5	蛇紋岩	124	
第166図 - 154	磨製石斧	P - 2020	8.0	8.1	2.6	244.8	緑色片岩	123	
第166図 - 155	磨製石斧	調査区東側遺構面	7.3	4.9	3.2	238.1	凝灰質砂岩	202	
第166図 - 156	磨製石斧	26号土坑	8.4	6.9	3.1	324.3	凝灰岩	122	
第166図 - 157	磨製石斧	廃土中	16.0	6.7	4.8	820.6	凝灰岩	198	
第166図 - 158	磨製石斧	34号土坑	16.3	9.9	5.5	1523.7	閃緑岩	199	
第166図 - 159	磨製石斧	72号土坑	22.5?	10.8?	5.2?	1023.5	閃緑岩	202	
第167図 - 160	磨製石包丁	6号竪穴住居跡	6.3	4.3	0.7	24.6	片岩	129	
第167図 - 161	磨製石包丁	34号土坑	8.4	4.8	0.5	31.6	片岩	136	
第167図 - 162	磨製石包丁	P - 3747	4.9	5.1	0.5	14.8	片岩	141	
第167図 - 163	磨製石包丁	48号土坑	4.3	2.0	0.5	5.5	緑色片岩	138	
第167図 - 164	磨製石包丁	25号溝	4.7	4.5	0.7	17.4	片岩	132	
第167図 - 165	磨製石包丁	30号土坑上層	6.4	3.8	0.5	25.8	片岩	143	
第167図 - 166	磨製石包丁	P - 60	3.2	4.5	0.8	16.0	片岩	139	
第167図 - 167	磨製石包丁	128号土坑	4.3	3.5	0.6	9.5	凝灰岩	137	
第167図 - 168	磨製石包丁	52号土坑	6.5	3.7	0.6	21.2	凝灰岩	131	
第167図 - 169	磨製石包丁	調査区東側遺構面	3.9	3.2	0.5	6.7	頁岩	128	
第167図 - 170	磨製石包丁	43号土坑	5.6	4.9	0.6	20.1	頁岩	135	
第167図 - 171	磨製石包丁	54号竪穴住居跡	5.8	4.1	0.5	16.9	頁岩	126	
第167図 - 172	磨製石包丁	P - 3717	6.4	5.8	0.6	30.9	頁岩	130	
第167図 - 173	磨製石包丁	P - 3738	8.0	5.2	0.8	50.3	凝灰岩	140	
第167図 - 174	磨製石包丁	11号土坑	4.1	4.4	0.7	14.1	頁岩	134	
第167図 - 175	磨製石包丁	55号竪穴住居跡	5.4	2.9	0.6	14.8	頁岩	133	
第167図 - 176	磨製石包丁	出土場所不明	12.6	6.9	0.7	92.8	頁岩	142	
第168図 - 177	石包丁未製品	43号土坑	15.2	5.4	1.5	148.5	片岩	167	
第168図 - 178	石包丁未製品	110号土坑	10.5	6.0	1.6	163.5	片岩	170	
第168図 - 179	石包丁未製品	P - 2589	12.4	5.7	1.0	84.8	片岩	168	
第168図 - 180	石包丁未製品	126号土坑	12.3	5.9	0.8	74.1	片岩	166	
第168図 - 181	石包丁未製品	128号土坑	9.6	8.2	1.4	151.2	結晶片岩	171	
第169図 - 182	鉄斧	112号土坑	7.4	3.3	1.5	74.3		71	再加工作品
第169図 - 183	鉄斧	81号土坑	4.6	2.8	0.4	25.4		72	再加工作品
第169図 - 184	鉄斧(小)	44号土坑	2.1	2.1				73	
第169図 - 184	鉄斧(大)	44号土坑	4.2	3.2	1.6	29.5		73	
第169図 - 185	ヤリガンナ	11号竪穴住居跡	2.9	1.2	0.2	1.4		75	
第169図 - 186	ヤリガンナ	26号竪穴住居跡床面	13.0	1.1	0.2	17.8		74	
第169図 - 187	鉄鎌(身)	35号竪穴住居跡上層	2.4	1.0	0.3			67	
第169図 - 187	鉄鎌(茎)	35号竪穴住居跡上層	3.3	0.4	0.4	5.6		67	
第169図 - 188	鉄鎌	P - 2143	7.9	1.2	0.2	9.7		64	
第169図 - 189	刀子	P - 363	7.0	1.7	0.9	15.7		70	
第169図 - 190	刀子	試掘トレンチ	5.2	3.1	0.3	15.0		69	
第169図 - 191	鉄鎌	調査区西側畑畝	9.9	2.9	0.3	25.2		62	
第169図 - 192	結束器具	水路	22.8		0.8	110.8		63	
第169図 - 193	不明鉄製品	P - 369	4.4	1.4	0.2	3.2		66	
第169図 - 194	不明鉄製品	P - 556	7.6	0.6	0.6	21.4		65	
第169図 - 195	不明鉄製品	調査区東側遺構面	4.6	1.8	0.2	4.2		68	
第169図 - 196	鉄滓	P - 135	3.9	3.3	2.0	25.6		78	
第169図 - 197	鉄滓	試掘トレンチ	3.3	2.8	1.8	23.9		79	
第169図 - 198	鉄滓	76号土坑	5.6	4.8	4.2	78.8		77	
第169図 - 199	不明銅製品	11号竪穴住居跡	2.0	2.0	1.0	2.9		76	
第169図 - 200	ガラス製小玉	26号竪穴住居跡	0.5	孔径0.2	0.3	0.1		95	
第169図 - 201	ガラス製小玉	調査区中央付近ビット	0.5	孔径0.2	0.4	0.1		94	
第169図 - 202	寛永通宝	水路	2.7	孔辺0.7				93	
第169図 - 203	文久永宝	水路	2.8	孔辺0.7				92	

報告書抄録

ふりがな	にえもんばたけいせき							
書名	仁右衛門畑遺跡Ⅱ							
副書名	福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査							
巻次	Ⅱ（弥生時代編）							
シリーズ名	一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	吉田東明							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にえもんばたけいせき 仁右衛門畑遺跡	福岡県浮羽郡吉井町 大字新治字仁右衛門畑 ・字灰高	40481	630095	33° 20' 41"	130° 45' 19"	1995.4.10 } 1996.3.10 } 1996.4.11 } 1996.6.3 1997.2.10 } 1997.3.25 } 1997.4.23 } 1997.5.28	8,115m ²	道路建設（一般 国道210号浮羽バ イパス建設）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
仁右衛門畑遺跡	集落 墓	弥生時代	竪穴住居跡 土坑 溝 甕棺墓 ピット	弥生土器 石器 鉄器				

福岡県行政資料

分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 12	登録番号 9

一般国道
210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第14集

仁右衛門畑遺跡Ⅱ

平成13年 3月30日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 福博総合印刷株式会社
福岡市博多区堅粕3丁目16番36号